

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター調査報告書第29集

小 籠 遺 跡 Ⅲ

－あけぼの道路建設工事に伴う発掘調査報告書－

1997.9

(財)高知県文化財団
埋蔵文化財センター

小 籠 遺 跡 III

1997.9

(財)高知県文化財団
埋蔵文化財センター

序

小籠遺跡の所在する南国市は、古代に国府が置かれ以後戦国時代に至るまで土佐の政治と文化の中心地として栄えた地域であり、県下で最も遺跡の多く分布するところでもあります。この度の調査は、高知県からの受託事業、国道195号線改良工事に伴う事前の調査として、平成6年度から開始し7年度に終了しました。

2ヵ年にわたる調査によって弥生時代から近世に至る多くの遺構や遺物が出土し、特に弥生時代後期から古墳時代初めの集落からは多くの搬入土器が見られ、古代の遺構からは良好な一括遺物が出土しております。これらのことから、小籠遺跡が長きにわたって南国市の西の玄関としての役割を果たして来たのではないかとする画期的な成果を納めることができました。まさに南国市の歴史に新たな1ページを加えるものです。近世につきましては、質・量ともに県下で最良の陶磁器類を得ることができ、該期の流通や産業発達を知るうえで今後の基準資料となるものと存じます。すでに弥生時代と古代を中心とする成果につきましては、『小籠遺跡Ⅰ』、『小籠遺跡Ⅱ』として平成6・7年度に報告致しているところであります。今回の報告書は、小籠遺跡の最終報告として近世を中心とした調査成果をまとめたものです。本書が斯学の向上と共に地域社会に広く活用されますようお願いして止みません。

また、私ども埋蔵文化財センターは、先人の営みを伝える掛け替えのない歴史資料であり国民の共有財産として位置付けられている遺跡の保護・調査研究に日夜奮闘致しているところであります。

今後ともなお一層のご援助・指導を頂きますよう併せてお願い申し上げます。

最後に、調査に携わって頂きました作業員の皆様はじめ共運工業有限会社、四国開発株式会社、高知県南国土木事務所の方々には絶大な協力を得ることができました。厚くお礼を申し上げます。

平成9年9月

（財）高知県文化財団 埋蔵文化財センター

所長 古谷 碩志

例 言

- 1 本書は、高知県文化財団埋蔵文化財センターが、平成6年度及び7年度に実施した国道195号道路改良（あけぼの道路）に伴う小籠遺跡Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ区及びⅡ区の近世土坑出土の一括資料についての発掘調査報告書である。
- 2 小籠遺跡は、高知県南国市岡豊町小籠469他に所在する。
- 3 調査面積はⅢ区（1,974㎡）、Ⅳ区（3,094㎡）、Ⅴ区（2,621㎡）、Ⅵ区（617㎡）、Ⅶ区（495㎡）であり、すでに報告しているⅠ・Ⅱ区（Ⅰ区：3,353㎡、Ⅱ区：3,119㎡）を合わせた総調査面積は15,273㎡である。
- 4 調査体制
 - (1) 調査員 出原恵三（高知県文化財団埋蔵文化財センター 調査第3班長）
泉 幸代（同 専門調査員）
浜田恵子（同 主任調査員）
藤方正治（同 調査員）
 - (2) 総務担当 吉岡利一（同 主幹）
- 5 本書の編集は出原が行い、執筆は以下のように各員が分担した。
 - 第Ⅰ章 これまでの経過と調査の方法 出原
 - 第Ⅱ章 調査の成果
 - 1（Ⅲ区本文）泉（同小結）出原
 - 2（Ⅳ区）出原
 - 3（Ⅴ区）浜田
 - 4・5（Ⅵ・Ⅶ区）出原
 - 第Ⅲ章 調査Ⅱ区出土遺物 藤方
 - 第Ⅳ章 考察
 - 1・2：出原 3：藤方 4：泉 5：浜田 6：行藤
- 6 小籠遺跡の歴史・地理的環境については、『小籠遺跡Ⅰ』に掲載したので本報告では割愛し、図面のみを載せた。
- 7 遺構の略号は、土坑：SK、溝：SD、掘立柱建物：SB、井戸：SE、柱穴等：P、性格不明土坑：SXとした。
- 8 遺物整理、報告書作成においては下記の方々の協力を得た。記して感謝の意を表したい。
大原喜子 山中美代子 浜田雅代 矢野雅 竹村延子 岩本須美子 東村知子 小野山美香
大黒泰子 宮地佐枝 尾崎富貴 松山真澄
- 9 本報告書を作成するにあたっては、須恵器について植野浩三（奈良大学助手）、近世陶磁器について丸山和雄（元高知女子大学教授）、大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館）、仲野泰裕（愛知県立陶磁資料館）をはじめ諸氏のご教示を頂いた。（敬称略）

本文目次

第1章	これまでの経過と調査の方法	
1	これまでの経過	
(1)	平成6年度の事業	1
(2)	平成7年度の事業	5
(3)	平成8年度の事業	5
2	調査の方法	5
第II章	調査成果	
1	III区の調査成果	
(1)	調査区の概要と基本層序	6
(2)	近世の遺構と遺物	6
(3)	小結	38
2	IV区の調査成果	
(1)	調査区の概要と基本層準	47
(2)	弥生時代の遺構と遺物	47
(3)	近世の遺構と遺物	51
(4)	小結	72
3	V区の調査成果	
(1)	調査区の概要と基本層準	74
(2)	遺構と遺物	74
(3)	小結	101
4	VI区の調査成果	
(1)	調査区の概要と基本層準	107
(2)	検出遺構	107
(3)	包含層出土の遺物	107
(4)	小結	108
5	VII区の調査成果	
(1)	調査区の概要と基本層準	113
(2)	検出遺構	113
(3)	包含層出土の遺物	113
(4)	小結	115
第III章	調査II区出土遺物（廃棄土坑及び包含層）	119
第IV章	考察	
1	弥生時代から中世における小籠遺跡の変遷	159
2	高知平野の古式土器Ⅰ・Ⅱ期について	165
3	小籠遺跡出土の近世陶磁器について	169
4	出土古銭について－中世末から近世を中心に－	184
5	小籠遺跡、近世村落の景観復原	192
6	文献調査から見た小籠遺跡－小籠村村落景観の復原－	200

挿入目次

- Fig. 1 : 小籠遺跡位置図
Fig. 2 : 周辺の遺跡分布図
Fig. 3 : 小籠遺跡調査区位置図
Fig. 4 : III区検出遺構全体図・セクション位置図
Fig. 5 : SB 1・2 平面図・エレベーション図
Fig. 6 : SB 3 平面図・エレベーション図
Fig. 7 : SK 1～5 平面図・エレベーション図・セクション図
Fig. 8 : SK 1・3・4 出土遺物実測図
Fig. 9 : SK 6～11 平面図・エレベーション図・セクション図
Fig. 10 : SK 8・9 出土遺物実測図
Fig. 11 : SK 12～19 平面図・エレベーション図
Fig. 12 : SK 20～24 平面図・エレベーション図・セクション図
Fig. 13 : SK 25～27 平面図・エレベーション図
Fig. 14 : SK 26 出土遺物実測図
Fig. 15 : SK 28～32 平面図・エレベーション図
Fig. 16 : SK 33～37 平面図・エレベーション図・セクション図
Fig. 17 : SK 32・34・36・37 出土遺物実測図
Fig. 18 : SK 38～40 平面図・エレベーション図・セクション図・SK 39 出土遺物実測図
Fig. 19 : SK 41～44 平面図・エレベーション図・SK 44 出土遺物実測図
Fig. 20 : SK 45～48 平面図・エレベーション図
Fig. 21 : SK 49～51 平面図・エレベーション図・セクション図・SK 51 遺物出土状況
Fig. 22 : SK 46・49・51 出土遺物実測図
Fig. 23 : SK 51 出土遺物実測図
Fig. 24 : SE 1～5 平面図・エレベーション図
Fig. 25 : SE 2～5 出土遺物実測図
Fig. 26 : SE 2～4 出土遺物実測図
Fig. 27 : SD 1～8 エレベーション図・セクション図
Fig. 28 : SD 1・4～8 出土遺物実測図
Fig. 29 : ピット・表面採集・包含層出土の遺物
Fig. 30 : IV区（北壁）基本層準
Fig. 31 : IV区検出遺構全体図・セクション位置図
Fig. 32 : SK 18 平面図・セクション図・出土遺物実測図
Fig. 33 : SX 1 平面図・エレベーション図・出土遺物実測図
Fig. 34 : SX 1 エレベーション図
Fig. 35 : SB 1 平面図・エレベーション図
Fig. 36 : SB 2・3 平面図・エレベーション図
Fig. 37 : SB 4～6 平面図・エレベーション図
Fig. 38 : SB 7 平面図・エレベーション図
Fig. 39 : SB 8・9 平面図・エレベーション図
Fig. 40 : SK 1 平面図・エレベーション・セクション図
Fig. 41 : SK 2 平面図・エレベーション図・出土遺物実測図
Fig. 42 : SK 3・4 平面図・エレベーション図・SK 4 出土遺物実測図
Fig. 43 : SK 5～7 平面図・エレベーション図・セクション図
Fig. 44 : SK 8～11 平面図・エレベーション図
Fig. 45 : SK 12～17 平面図・エレベーション図
Fig. 46 : SK 19・22・23 平面図・エレベーション図・セクション図・SK 22 出土遺物実測図
Fig. 47 : SK 24 平面図・エレベーション図
Fig. 48 : SK 25 平面図・エレベーション図
Fig. 49 : SE 1 平面図・エレベーション図・出土遺物実測図
Fig. 50 : SD 1～9・12～16 エレベーション・セクション図
Fig. 51 : 溝・ピット・包含層出土遺物
Fig. 52 : V区検出遺構全体図
Fig. 53 : SB 1・2 平面図・エレベーション図
Fig. 54 : SB 3・4 平面図・エレベーション図
Fig. 55 : SB 5 平面図・エレベーション図・セク

- シヨン図・SB 4・5 出土遺物実測図
- Fig. 56:SK 1～4 平面図・エレベーション図・セクション図・遺物出土状況
- Fig. 57:SK 1～4 出土遺物実測図
- Fig. 58:SK 5～8 平面図・エレベーション図・セクション図
- Fig. 59:SK 5・7 出土遺物実測図
- Fig. 60:SK 9～12 平面図・エレベーション図・出土遺物実測図
- Fig. 61:SK 13・14 平面図・エレベーション図・出土遺物実測図
- Fig. 62:SK 15・16 平面図・エレベーション図
- Fig. 63:SK 17～20 平面図・エレベーション図
- Fig. 64:SK 21～24 平面図・エレベーション図
- Fig. 65:SK 25・26 平面図・セクション図・SK 23～26 出土遺物実測図
- Fig. 66: SX 1～3 平面図・エレベーション図
- Fig. 67: SX 1・2 出土遺物実測図
- Fig. 68: SX 4 平面図・セクション図
- Fig. 69: SD 1～6 エレベーション図・セクション図
- Fig. 70: SD 1・畝 D 4 出土遺物実測図
- Fig. 71: 畝状遺構セクション図
- Fig. 72: P 1～7 平面図・エレベーション図・包含層出土遺物実測図
- Fig. 73: VI 区北壁セクション図
- Fig. 74: VI 区検出遺構全体図
- Fig. 75: SB 1 平面図・エレベーション図・包含層出土遺物実測図
- Fig. 76: VII 区検出遺構全体図・北壁・SD 1・2 セクション図
- Fig. 77: SD 1・2・IV・VI 層出土遺物実測図
- Fig. 78: VII 区包含層 (IV・V 層) 出土の須恵器実測図
- Fig. 79: 廃棄土坑出土遺物実測図 (碗その 1)
- Fig. 80: 廃棄土坑出土遺物実測図 (碗その 2)
- Fig. 81: 廃棄土坑出土遺物実測図 (碗その 3)
- Fig. 82: 廃棄土坑出土遺物実測図 (碗その 4)
- Fig. 83: 廃棄土坑出土遺物実測図 (碗その 5)
- Fig. 84: 廃棄土坑出土遺物実測図 (碗・小碗)
- Fig. 85: 廃棄土坑出土遺物実測図 (小皿・皿)
- Fig. 86: 廃棄土坑出土遺物実測図 (皿)
- Fig. 87: 廃棄土坑出土遺物実測図 (皿・蓋)
- Fig. 88: 廃棄土坑出土遺物実測図 (蓋)
- Fig. 89: 廃棄土坑出土遺物実測図 (鉢 A)
- Fig. 90: 廃棄土坑出土遺物実測図 (鉢 A・段重)
- Fig. 91: 廃棄土坑出土遺物実測図 (蕎麦猪口・餌鉢・神酒徳利・仏飯碗・花生・香炉・火入れ・灯明皿)
- Fig. 92: 廃棄土坑出土遺物実測図 (鉢 B・鍋)
- Fig. 93: 廃棄土坑出土遺物実測図 (瓶・土瓶)
- Fig. 94: 廃棄土坑出土遺物実測図 (甕)
- Fig. 95: 廃棄土坑出土遺物実測図 (甕・火器・植木鉢)
- Fig. 96: 廃棄土坑出土遺物実測図 (瓦・砥石)
- Fig. 97: 調査 II 区包含層出土遺物実測図
- Fig. 98: 土佐渦と遺跡 (弥生時代～古代) 分布
- Fig. 99: ST 12 出土遺物実測図
- Fig. 100: 碗類形態分類図
- Fig. 101: 小皿形態分類図
- Fig. 102: 皿類形態分類図
- Fig. 103: 蓋皿形態分類図
- Fig. 104: 鉢 A 形態分類図
- Fig. 105: 段重形態図
- Fig. 106: 蕎麦猪口形態図
- Fig. 107: 仏飯碗形態図
- Fig. 108: 香炉火入れ形態図
- Fig. 109: 灯明具形態図
- Fig. 110: 鉢 B 口縁部形態分類図
- Fig. 111: 鉢 B 底部形態分類図
- Fig. 112: 鍋類形態分類図
- Fig. 113: 甕・壺口縁部形態分類図
- Fig. 114: 焙烙口縁部形態分類図
- Fig. 115: III 区 SK 26, 包含層・V 区 SK 10, 包含層出土の古銭、拓影
- Fig. 116: I～V 区遺構分布変遷図
- Fig. 117: 岡豊地区及び長岡地区小字図
- Fig. 118: 藩政時代の小籠村 絵図

写真図版

- P L. 1 III・IV区調査前全景（西南から）・III区完掘状況全景（北東から）
P L. 2 III区SK 1 半截状況・同上完掘状況
P L. 3 III区SK 2 完掘状況・同SK 3 完掘状況
P L. 4 III区SK 4 完掘状況・同SK 6 半截状況
P L. 5 III区SK 6～9 検出状況・同上完掘状況
P L. 6 III区SK 8 半截状況・同上床面遺物出土状況
P L. 7 III区SK 9 礫出土状況・同SK10完掘状況
P L. 8 III区SK12・同SK13完掘状況
P L. 9 III区SK13ハンダ半截状況・同SK14半截状況
P L.10 III区SK14・15完掘状況・同SK26古銭出土状況
P L.11 III区SK31完掘状況・同SK32セクション
P L.12 III区SK33半截状況・同上完掘状況
P L.13 III区SK37半截状況・同上床面遺物出土状況
P L.14 III区SK41完掘状況・同SK44完掘状況
P L.15 III区SK36半截状況・同上床面遺物出土状況
P L.16 III区SD 1 セクション・同上
P L.17 III区SD 5 セクション・同上硯出土状況
P L.18 III区SK51遺物出土状況・同上
P L.19 III区SK51遺物出土状況・同上
P L.20 IV・V区調査前全景（南から）・IV区東半分完掘状況（南から）
P L.21 IV区西半分完掘状況（南から）・同北壁セクション
P L.22 IV区SB 3 完掘状況・同SB 7 完掘状況
P L.23 IV区SX 1 ・同上床面遺物出土状況
P L.24 IV区SK18遺物出土状況・同上
P L.25 IV区SK20遺物出土状況・同上
P L.26 IV区SK19・SD15, 同SK23（北から）
P L.27 IV区SD 5 セクション・同SD 6 セクション
P L.28 V区東壁セクション・同東壁及びSD 5 セクション
P L.29 V区SK 1 セクション・同SK 3 集石出土状況
P L.30 V区SK 7 遺物出土状況・同上
P L.31 V区SK 9 半截状況・同SK12完掘状況
P L.32 V区SK17完掘状況・同SK25半截状況
P L.33 V区SK26半截状況・同SK25・26完掘状況
P L.34 V区SX 5 半截状況・同畝状遺構D11セクション
P L.35 V－北区完掘状況全景（北から）・V－南区完掘状況全景（南から）
P L.36 V区SB 4－P 3 遺物出土状況・同SB 5－P11半截状況・同SK 2 遺物出土状況・同左・
同上・同SK 4 完掘状況

- P L.37 V区SK 4 検出状況・同SK13完掘状況・同SK24完掘状況・同SD 6 セクション・同畝状遺構遺物出土状況・同SX 1 遺物出土状況
- P L.38 VI区完掘状況全景（東から）・同SB 1 完掘状況
- P L.39 VI区西半分完掘状況全景（東南から）・VII区西半分完掘状況全景（東から）
- P L.40 VII区SD 1 完掘状況・同SD 2 完掘状況
- P L.41 VII区SD 1 セクション・同SD 2 セクション
- P L.42 II区（廃棄土坑）出土遺物 その1（外面）・同（内面）
- P L.43 II区（廃棄土坑）出土遺物 その2（外面）・同（内面）
- P L.44 II区（廃棄土坑）出土遺物 その3（外面）・同（内面）
- P L.45 II区（廃棄土坑）出土遺物 その4（外面）・同（内面）
- P L.46 II区（廃棄土坑）出土遺物 その5（外面）・同（内面）
- P L.47 II区（廃棄土坑）出土遺物 その6（外面）・同（内面）
- P L.48 II区（廃棄土坑）出土遺物 その7（外面）・同（内面）
- P L.49 II区（廃棄土坑）出土遺物 その8（外面）・同（内面）
- P L.50 II区（廃棄土坑）出土遺物 その9（外面）・同（内面）
- P L.51 II区（廃棄土坑）出土遺物 その10（外面）・同（内面）
- P L.52 II区（廃棄土坑）出土遺物 その11（外面）・同（内面）
- P L.53 II区（廃棄土坑）出土遺物 その12（外面）・同（内面）
- P L.54 II区（廃棄土坑）出土遺物 その13（外面）・同（内面）
- P L.55 II区（廃棄土坑）出土遺物 その14（外面）・同（内面）
- P L.56 III区 出土遺物 その1（外面）・同（内面）
- P L.57 III区 出土遺物 その2（外面）・同（内面）
- P L.58 III区 出土遺物 その3（外面）・同（内面）
- P L.59 III区 出土遺物 その4（外面）・同（内面）
- P L.60 III区 出土遺物 （硯）・同（砥石）
- P L.61 IV区 出土遺物 その1（外面）・同（内面）
- P L.62 V区 出土遺物 その1（外面）・同（内面）
- P L.63 V区 出土遺物 その2（外面）・同（内面）
- P L.64 III区 出土遺物 （金属製品）・V区出土遺物（金属製品、石製品）
- P L.65 VI区 出土遺物 （外面）・同（内面）
- P L.66 VII区 出土遺物 （外面）・同（内面）
- P L.67 II区 （廃棄土坑）出土遺物
- P L.68 II区 （廃棄土坑）・IV区 出土遺物
- P L.69 II区 （廃棄土坑）出土遺物
- P L.70 II区 （廃棄土坑）出土遺物
- P L.71 II区 （廃棄土坑）出土遺物
- P L.72 II区 （廃棄土坑）・III区出土遺物
- P L.73 III～VII区 出土遺物
- P L.74 III区 SK26（a～f）・包含層出土の古銭（表面）・同（裏面）

第1章 これまでの経過と調査の方法

1 これまでの経過

(1) 平成6年度の事業 (Fig. 3)

南国市岡豊町小籠に所在する小籠遺跡は、弥生時代から古墳時代の遺物散布地として知られていたところであるが、高知市内と県東部地域とを結ぶ幹線道路国道195号線改良工事（あけぼの道路）が計画され、当遺跡内を計画路線が通過することとなった。高知県教育委員会は南国土木事務所と協議を重ねた結果、工事対象地の全面について緊急発掘調査を行うことになり、調査は高知県埋蔵文化財センターの受託事業として実施することになった。

平成6年度調査は、平成6年7月27日から7年3月31日まで実施した。調査区については便宜上、現在の水田や畑の畦畔をそのまま利用して任意にⅠ～Ⅳ区を設定し、6年度の調査地点は、Ⅰ区（3,353㎡）、Ⅱ区の一部（1,161㎡）、Ⅲ区（1,974㎡）、およびⅣ区の一部（2,018㎡）であり、総調査面積は8,506㎡であった。Ⅰ区からは、弥生時代前期末の溝、後期の竪穴住居、中近世の溝、井戸、多量の近世墓を検出し、Ⅱ区からは弥生時代末から古墳時代初頭の竪穴住居4棟の他、数多くの近世土坑を、Ⅲ区からは、近世の掘立柱建物3棟と比較的小規模な井戸、土坑が数多く検出された。またⅣ区からは、弥生時代後期初頭の方形周溝状の遺構、近世の掘立柱建物9棟などを検出した。以上のように6年度の調査を通して、小籠遺跡が従来知られていたような弥生時代後期～古墳時代初めに属するものだけではなく、その成立が弥生時代前期末に遡り、中・近世にも営まれている遺跡であることが明らかとなったのである。そして平成6年度には、Ⅰ区についての報告書を刊行した。（財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター『小籠遺跡Ⅰ－あけぼの道路建設工事に伴う発掘調査報告書－』1995.3）

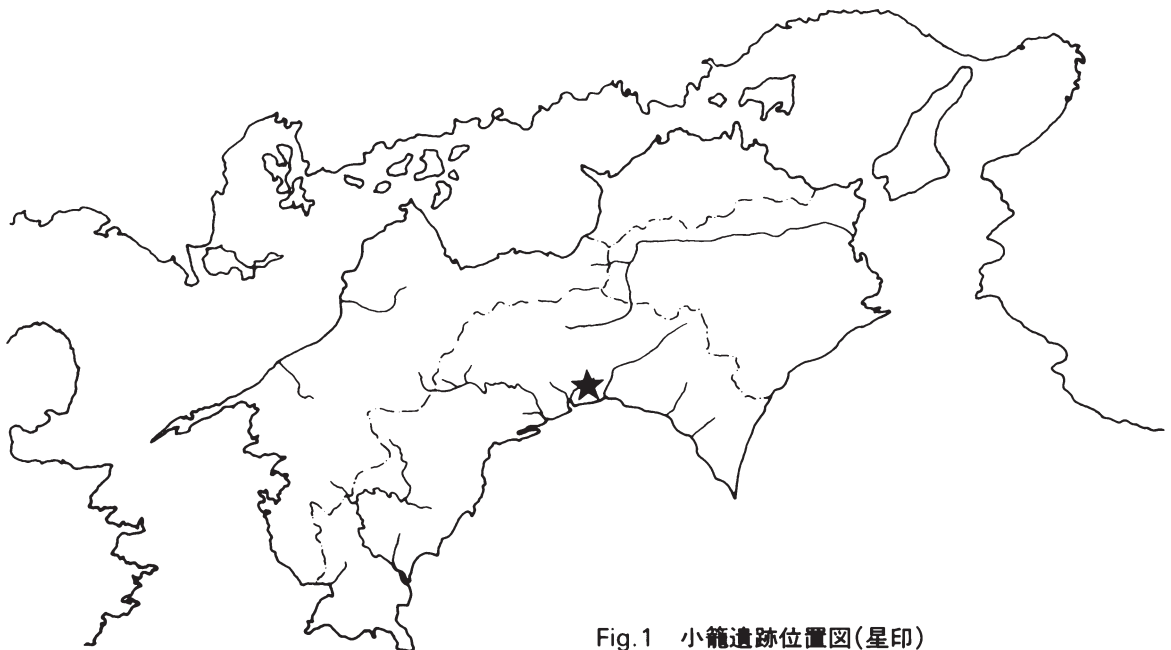


Fig. 1 小籠遺跡位置図(星印)



No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	田村遺跡群	11	東崎遺跡	21	小蓮遺跡	31	土佐国分寺跡	41	大塚遺跡
2	栄エ田遺跡	12	金地遺跡	22	船岩古墳群	32	土佐国衛跡	42	高柳土居城跡
3	奥谷南遺跡	13	ひびのき遺跡	23	狭間古墳	33	比江廃寺跡	43	高柳遺跡
4	大篠遺跡	14	ひびのきサウジ遺跡	24	蔵本2号墳	34	野中廃寺跡	44	土島田遺跡
5	国分寺遺跡群	15	久次遺跡	25	ロミノヲ谷古墳	35	須江上段遺跡	45	久保遺跡
6	三島遺跡	16	シタノジ遺跡	26	高松古墳	36	タンガン窯跡	46	末松遺跡
7	原遺跡	17	林田遺跡	27	新改古墳	37	長谷山窯跡群	47	五反地遺跡
8	原南遺跡	18	深淵遺跡	28	西ノ内2号墳	38	岡豊城跡	48	明神遺跡
9	稻荷前遺跡	19	高間原1号墳	29	伏原大塚古墳	39	西谷遺跡	49	浜道の西遺跡
10	楠目遺跡	20	蒲原山東1号墳	30	大谷古墳	40	田村城跡	50	小籠遺跡

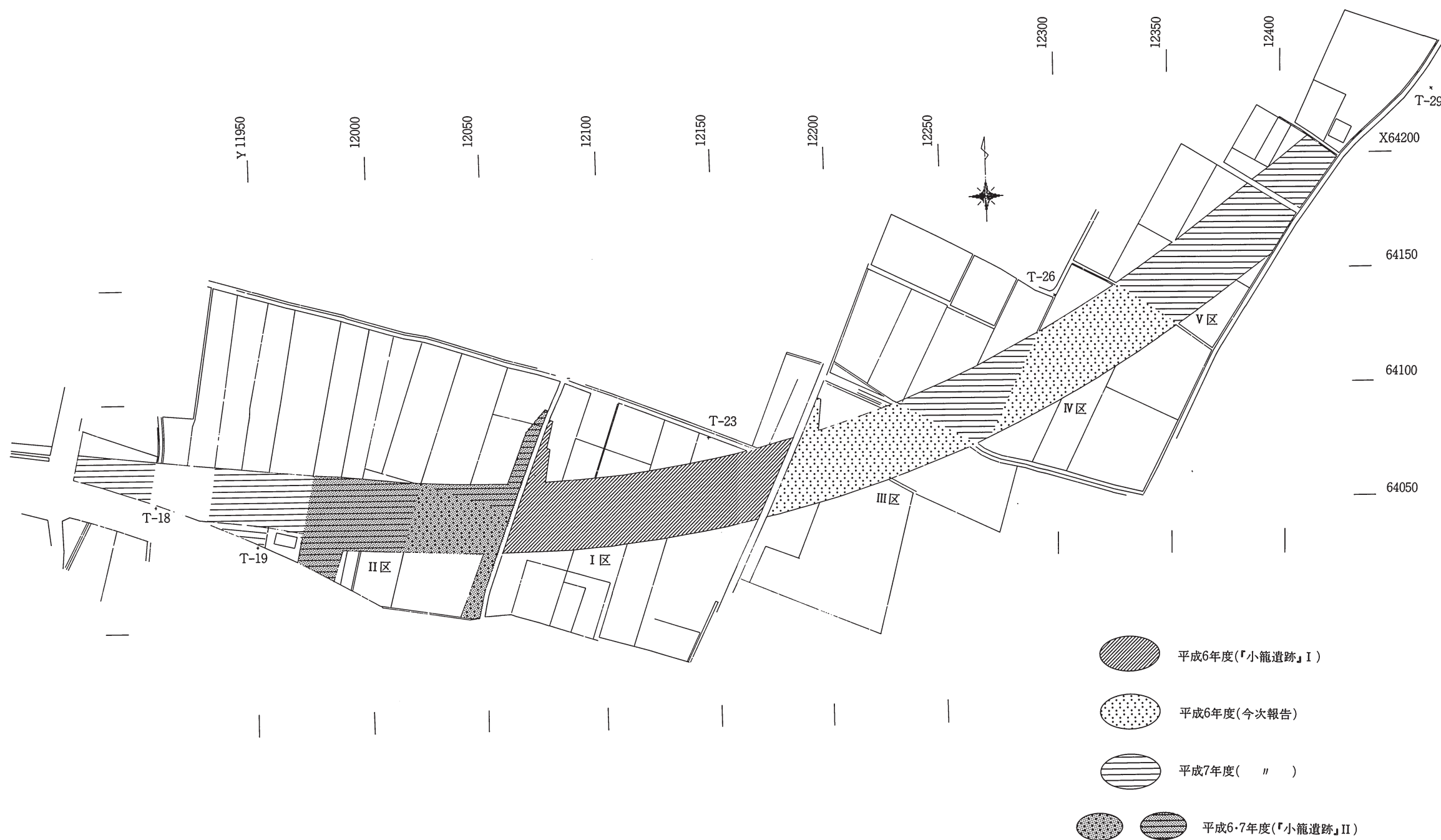


Fig.3 小籠遺跡調査区位置図

(2) 平成7年度の事業 (Fig. 3)

7年度は、現場作業を4月11日から10月31日まで実施し、それ以降平成8年3月31日まで整理作業とII区についての報告書作成作業にあたった。今次調査に際しては、IV区の北側にV区を、II区の西側にVI区とVII区を新たに設け、調査は工事の計画、用地の買収状況の制約からIV区の残り部分から着手し、V区→II区の残部(西半分)→VI区→VII区へと進み、小籠遺跡の発掘調査を終了した。IV・V区からは近世を中心とする遺構が、II区からは、弥生時代後期末～古墳時代初頭の竪穴住居15棟をはじめ古代の土坑、中世の掘立柱建物等を検出し、II区を中心として弥生後期から古墳時代初頭の大きな集落が展開していることが明らかとなった。VI区からは古代の掘立柱建物が、VII区からは弥生後期と古代の溝が検出され、包含層より少数ながら高知平野では初めての初期須恵器が出土した。平成8年3月にはII区についての報告書を刊行した。財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター『小籠遺跡II－あけぼの道路建設工事に伴う発掘調査報告書－』1996, 3)

(3) 平成8年度の事業

平成8年4月からIII・IV・V・VI・VII区の出土遺物及び図面等の整理、図版作成を行い、一部報告文書の執筆にあった。そして残りの業務を繰越事業として平成9年4～9月に実施した。

2 調査の方法

発掘調査の手順としては、耕作土を重機を用いて除去した跡、手作業で進めた。遺物包含層の遺物取り上げ、遺構の実測については公共座標に基づいて調査区全体に4m方眼をかけ、東西方向に1, 2, 3, …、南北方向にA, B, C, …のNoを付して出土地点の記録および実測を行った。平面実測および地層断面図については、20分の1を基本に適宜任意の縮尺を用いた。

第II章 調査成果

1 III区の調査成果

(1) 調査区の概要と基本層序 (Fig. 4)

III区は、I区の東にあり面積は1,974㎡を測るが用水路と畔道によって東西に分かれている。東側を東区、西側を西区とする。標高は両区共に6.8m前後を測る。III区は平成6年度に調査を実施し、西区北部と東区から近世を中心とする多くの遺構・遺物が出土した。特に赤土と砂を混ぜた練り土で塗り固めた円形土坑が注目される。

遺構検出面は、極めて浅く耕作土直下である。遺構は礫を含んだ茶色粘質土層に掘り込まれている。

(2) 近世の遺構と遺物

① 掘立柱建物

SB1 (Fig. 5)

西区の北東にある。梁間3間(6m)・桁行3間の東西棟で、棟方向はN-69°-Wである。柱間距離は梁間で1.8m前後、桁行で1.4~2.5m、柱穴は直径36~60cm前後、深さは40~60cmを測る。P2・5・8からは径20cm前後の柱根跡を検出することができた。またP8には拳大のくり石が数個入れられていた。埋土は総じて濃茶色粘質土で、遺物は全く認められなかった。

SB2 (Fig. 5)

SB1の南隣にあり、梁間2間(2m)・桁行3間(6.6m)の東西棟で、棟方向はN-67°-Wである。柱間距離は梁間で2m前後、桁行で1.2~3.2m前後、柱穴は直径20~60cm前後、深さは20~40cmを測る。埋土は総じて濃茶色粘質土で、遺物は全く認められなかった。

SB3 (Fig. 6)

東区にある。梁間2間(3.8m)・桁行4間(6.8m)の東西棟で、棟方向はN-69°-Wである。柱間距離は梁間で1.4~2.4m前後、桁行で1.4~2m、柱穴は直径30~55cm前後、深さは20~40cmを測る。埋土は総じて濃茶色粘質土で、遺物は全く認められなかった。

② 土坑

SK1 (Fig. 7・8)

西区の西端にあり、SD1を切っている。直径1.4mの円形プランを呈し、深さは48cmを測る。二段に掘り込まれており、検出面より14cmの深さで外縁に幅20cm前後の平場が巡る。床及び壁は全体的にハンダが塗られており、外縁の平場には円礫が列状に塗り込められている。埋土は灰茶色粘質土をベースにハンダの崩落土や円礫が混入している。遺物は検出面から土師質土器焙烙(1)・肥前産磁器染付碗(2)が、埋土中より土師質の小皿・磁器染付碗が出土している。18世紀後半の土坑である。



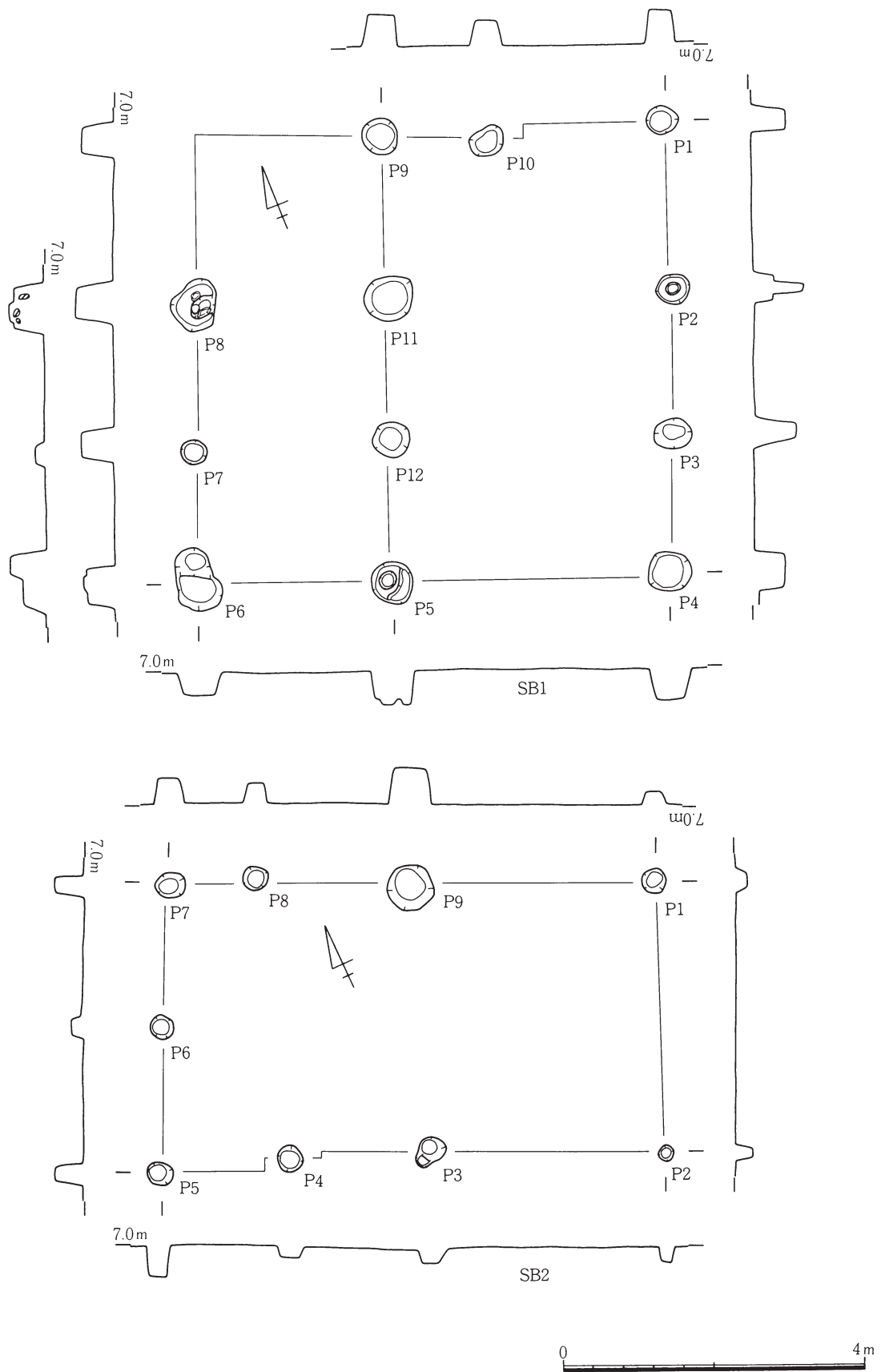


Fig.5 SB1・2平面図・エレベーション図

SK 2 (Fig. 7)

西区の西北部にある。半分以上が調査区外に出ており、大きさは明確でないが概ね一辺が1.2m前後を測る隅丸方形の土坑であろう。深さは18~19cmを測り、埋土は茶灰色粘質土単純一層である。遺物は全く認められなかったが、埋土から近世の土坑と考えられる。

SK 3 (Fig. 7・8)

西区西北端にあり、SK 4に切られている。半分が調査区外に出ているが、直径1.4m前後を測る円形の土坑である。深さは25~34cmを測り、床面は中心部に向かって深くなっている。埋土は茶灰色粘質土単純一層であり、埋土中より17世紀代に比定できる景德鎮産磁器染付皿の口縁部片(9)が出土している。

SK 4 (Fig. 7・8)

SK 3と重複しており、SD 1を切っている。約半分が調査区外に出ているが、直径2.2m前後を測る円形の土坑である。壁は垂直に立ち上がり、深さは42~66cmで、床面は中心に向かって深くなっている。壁は厚さ4~5cmのハンダで固められており、一部床面にも及んでいる。壁上端のハンダに沿うように拳大の河原石の石列が巡っている。埋土はI層：灰黒色粘質土、II層：茶色粘質土、III層：灰色シルト、IV層：黒褐色粘質土で、II層中には石列からの落石が多く見られる。遺物はI層からはほぼ完形の土師質土器小皿(6)、肥前系鉄釉陶器ひょう燭(7)、連珠三頭巴紋の軒丸瓦(8)、IV層から肥前系の陶器鉢(3)、その他の層より肥前産の磁器紅皿(4)、刷毛目の肥前系陶器壺(5)、その他平瓦片が数点出土している。

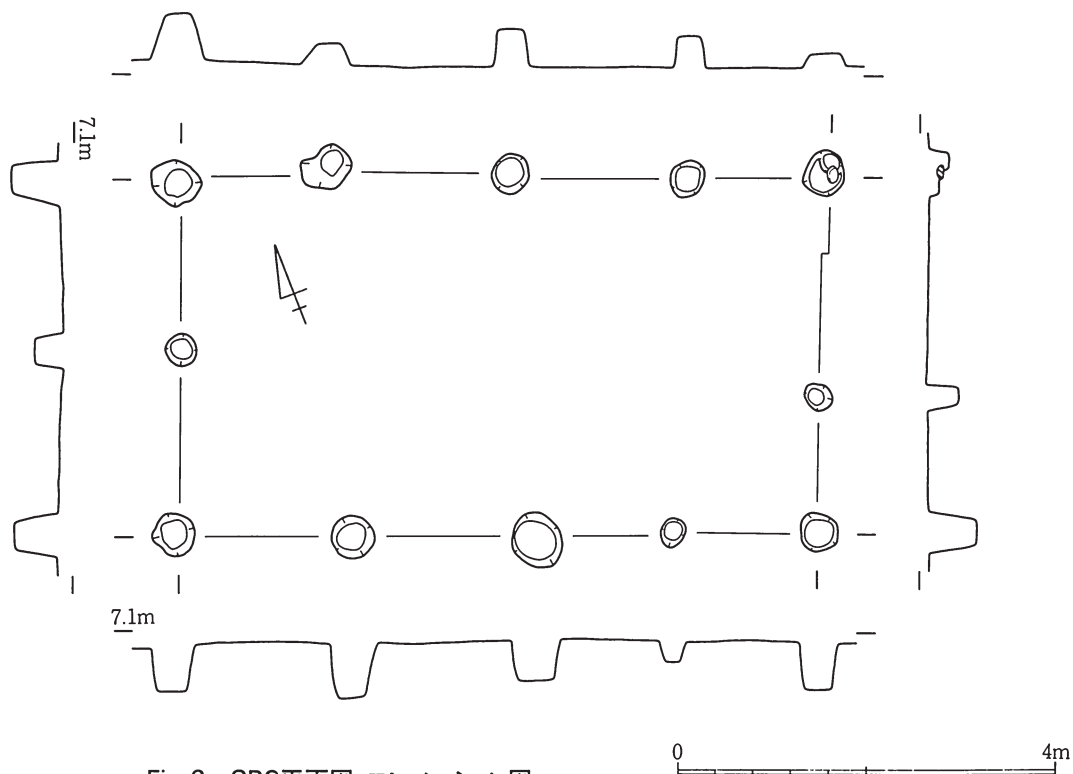


Fig.6 SB3平面図・エレベーション図

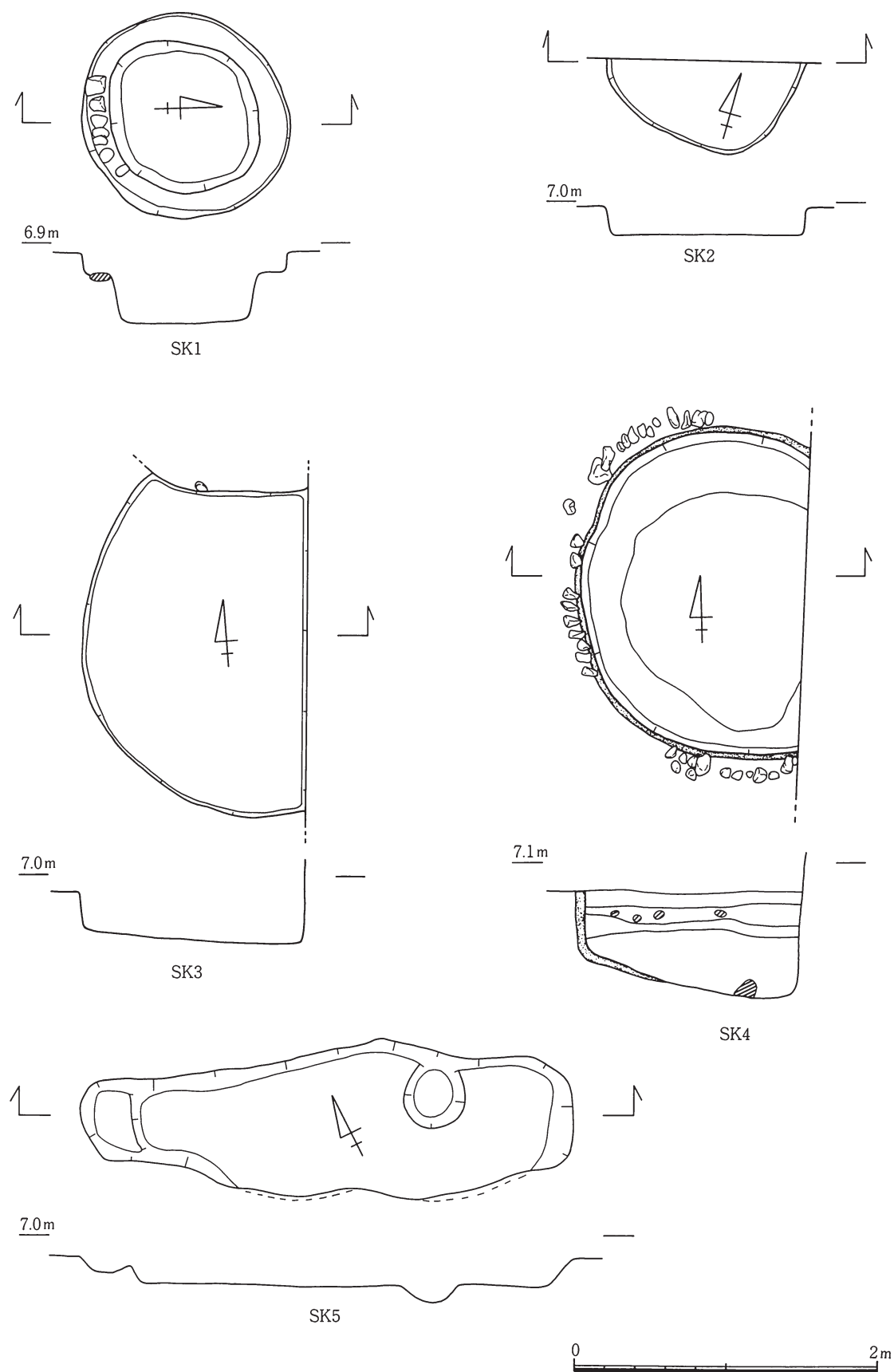


Fig.7 SK1～5平面図・エレベーション図・セクション図

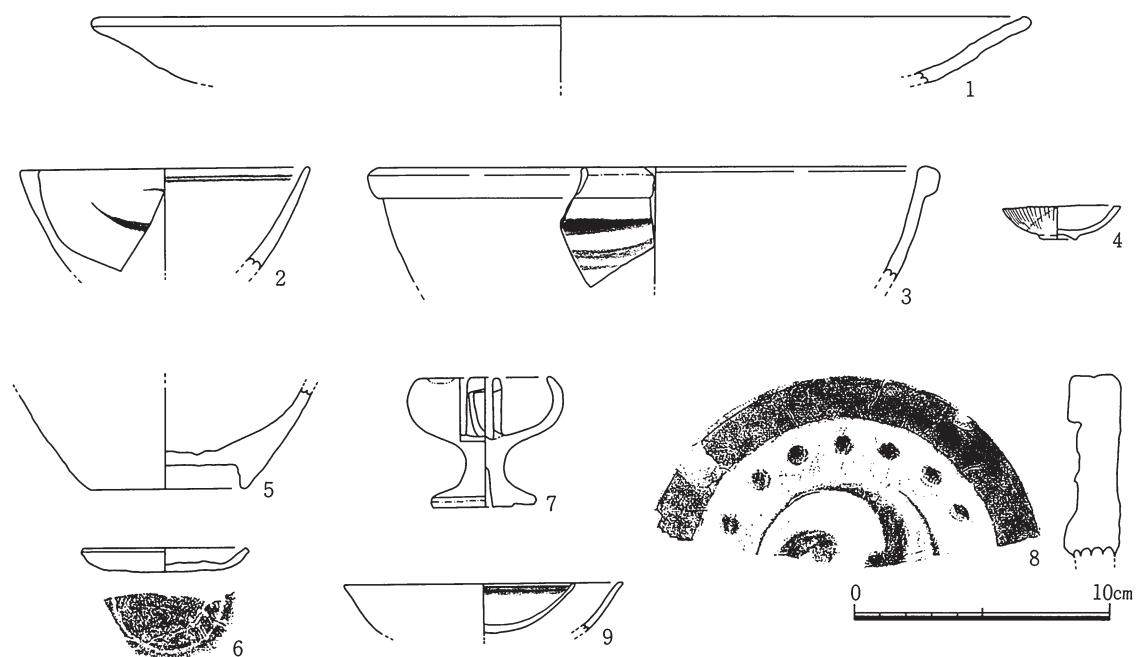


Fig.8 SK1・3・4出土遺物実測図 (SK1: 1・2、SK3: 9、SK4: 3~8)

SK 5 (Fig. 7)

西区中央部の南にあり、長軸3.3m、短軸0.96mの細長い土坑である。深さは16~20cmを測り、床面は水平をなすが、床面東寄りに深さ10cm程の落ち込みがある。埋土は暗灰色粘質土で、遺物は近世陶磁器の細片が数点出土しているが、図示できるものはない。

SK 6 (Fig. 9)

西区の中央部にあり、SK 7と接している。直径1.5mの円形プランを呈し、深さは52~55cmを測り、床面中央部が僅かに深くなっている。断面は逆台形状に立ち上がり、床及び壁面は厚さ5~7cmのハンダで固められている。埋土は暗灰色粘質土に地山の黄色シルトがブロック状に入っている。遺物は認められないが近世土坑である。

SK 7 (Fig. 9)

SK 6に南接し、SK 8に切られている。直径1.3mの円形プランを呈し、深さは34~38cmを測り、床面中央部が僅かに深くなっている。断面は逆台形状に立ち上がり、床及び壁面は厚さ4~6cmのハンダで固められている。埋土は暗灰色粘質土で、遺物は認められないが近世土坑である。

SK 8 (Fig. 9・10)

直径1.6m前後の円形プランを呈する。深さは34~42cmを測り、床面中央部が深くなっている。断面は逆台形状に立ち上がり、壁面はハンダで固められているが、南側半分は剥落している。床にはハンダが見られずシルトに近い細粒砂を薄く敷いている。埋土は灰茶色粘質土で、埋土中及び床面から遺物が出土している。床面より肥前産の磁器紅皿 (11)、土師質土器小皿 (12)、同皿 (14) が、埋土中より肥前産の磁器紅皿 (10)、土師質土器皿 (15)、頁岩製の硯 (17)、砥石 (18) が出土している。10は11の紅皿より新しく19世紀のもので、全体的に厚く、筋の彫りも深い。その他土師質土器、陶器の細片が数点出土している。

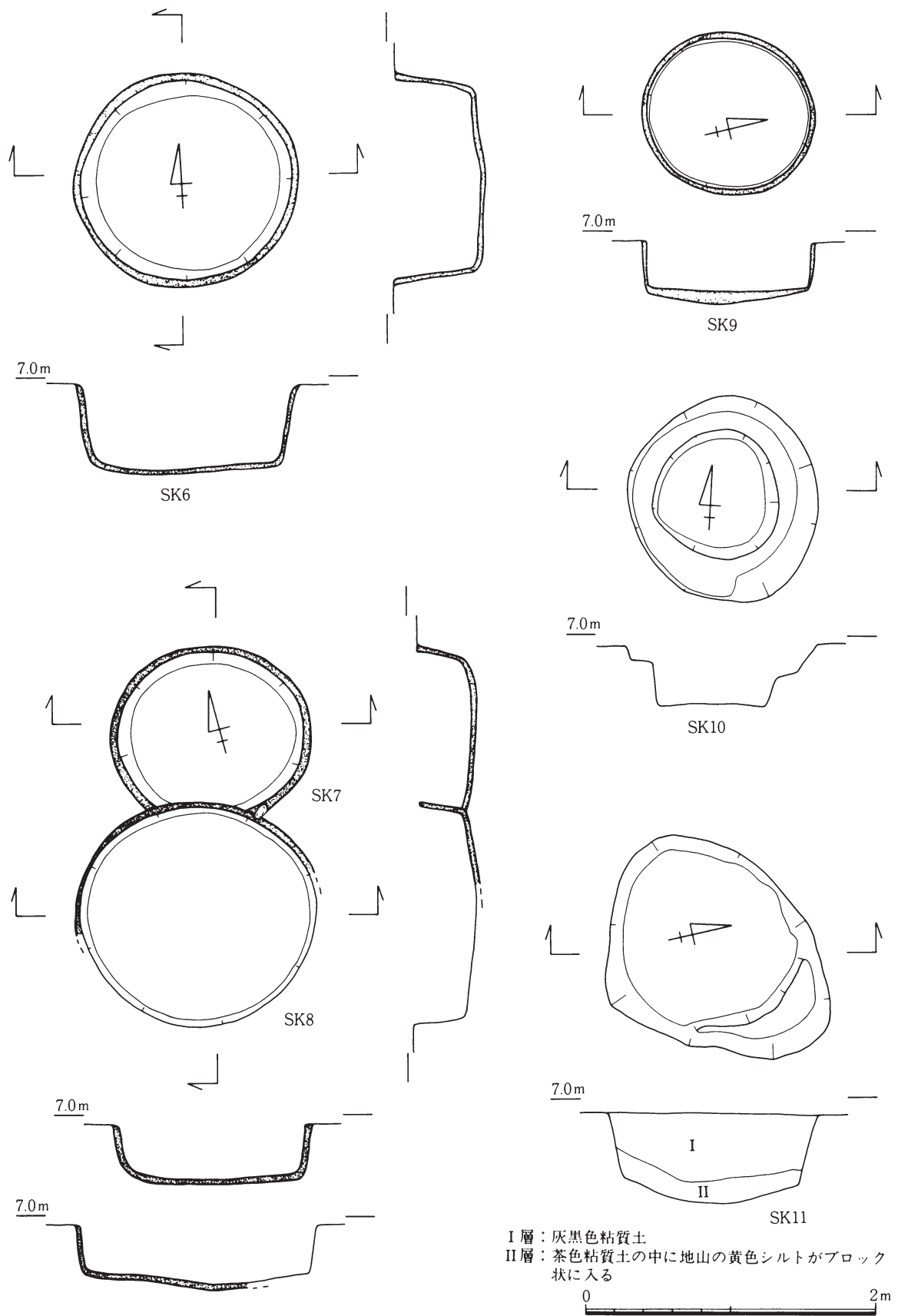


Fig.9 SK 6～11平面図・エレベーション図及びセクション図

SK 9 (Fig. 9・10)

SK 8の東隣にある。直径1.2m前後の円形プランを呈し、深さ32～42cmを測り、床面が僅かに深くなっている。埋土は灰茶色粘質土をベースとしているが、検出面より15cm下で、5～15cm大の円礫を敷き詰めたように投げ込んでおり、その下は床面まで砂を敷いている。壁は垂直に立ち上がり、壁及び床はハンダで固められており、床面中央部では厚さが10cmと最も厚くなっている。遺物は床面より土師質土器小皿1点(13)、床直上より砥石(20)、埋土中より断面楕円形の釘(16)、同方形の釘(19)、土師器と近世陶磁器の細片が数点出土している。SK 9は土坑廃棄に際して床及び床直上に小皿と砥石を置き、砂と円礫を用いて埋め戻しを行っている。

SK10 (Fig. 9)

西区の中央部にあり、長軸1.4m、短軸1.3mの楕円形のプランを呈する。深さは40cmを測るが壁は段状に掘られており、テラス部分には拳大の石列が一部に見られる。床面はほぼ水平であり、埋土は灰茶色粘質土である。埋土中より土師質土器細片が1点出土しているが、図示できるものはない。

SK11 (Fig. 9)

西区の南寄りにあり、長軸1.78m、短軸1.3mの不整楕円形のプランを呈する。断面舟底状をな

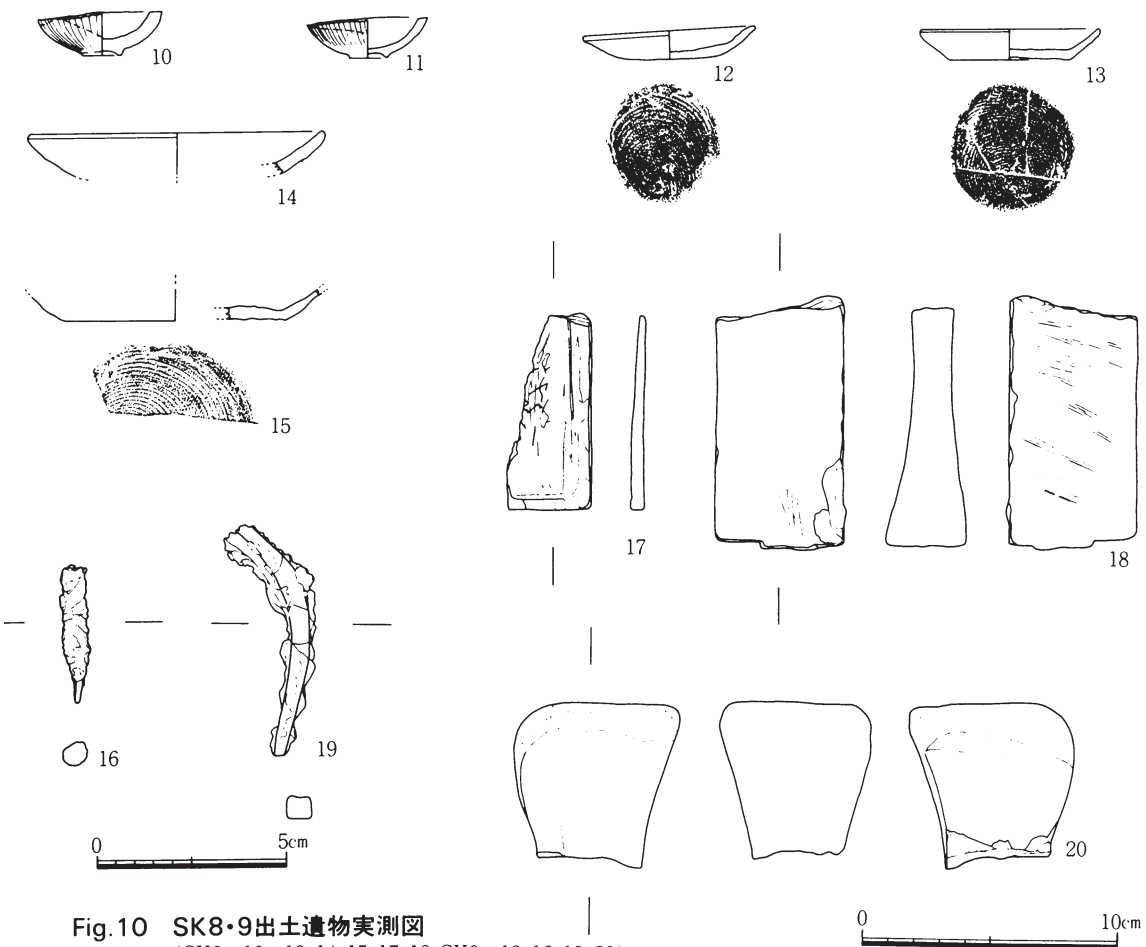


Fig.10 SK8・9出土遺物実測図
(SK8: 10・12・14・15・17・18, SK9: 13・16・19・20)

し、深さは50～60cmを測る。埋土はI層：灰黒色粘質土、II層：茶色粘質土の中に地山の黄色シルトがブロック状に入る。遺物はII層から土師質土器細片が1点出土している。

SK12 (Fig. 11)

西区の東寄りにあり、長軸2.15m、短軸1.25mの隅丸長方形プランを呈し、深さは20cmを測る。床面は水平で、断面は逆台形をなす。埋土は灰茶色粘質土で、遺物は認められない。形態から墓坑の可能性はある。

SK13 (Fig. 11)

西区の北寄りにある。直径1.2mの円形プランを呈し、深さ52～57cmを測る。壁は床より15cmほど直線的に立ち上がってから屈曲し、やや湾曲しながら立ち上がる。床は中央部を除いて、厚さ5cm程の海老茶色の粘土を環状に敷き、その上に厚さ10cm、底面30～40cm、断面台形状のハンダをドーナツ状に巡らしている。埋土は灰茶色粘質土で、埋土中より磁器染付皿1点と陶胎染付碗1点が出土している。

SK14 (Fig. 11)

西区の北寄りにあり、直径1.5mの円形プランを呈する。深さは41cm前後を測り、床面中央部が最も深くなっている。壁は垂直に立ち上がり、壁及び床面は厚さ5cm前後のハンダで固められている。埋土は灰茶色粘質土で、ハンダの崩落土を含む。遺物は認められない。

SK15 (Fig. 11)

西区の北端にあり、直径1.1m前後の円形プランを呈する。深さは36cmを測り、床面は水平で、断面は逆台形をなす。床及び壁は厚さ5～6cmのハンダで固めている。埋土は灰茶色粘質土で、壁崩落のハンダ塊と拳大の円礫が入っている。埋土中より堺産の播鉢細片が1点出土している。

SK16 (Fig. 11)

西区中央部にあり、長軸1.1m、短軸0.84mの長方形プランを呈し、深さは32cmを測る。床面はほぼ水平で、断面は逆台形状をなす。床及び壁は厚さ4～5cmのハンダで固められている。埋土は灰茶色粘質土の中に地山の黄色シルトがブロック状に入っている。遺物は認められない。

SK17 (Fig. 11)

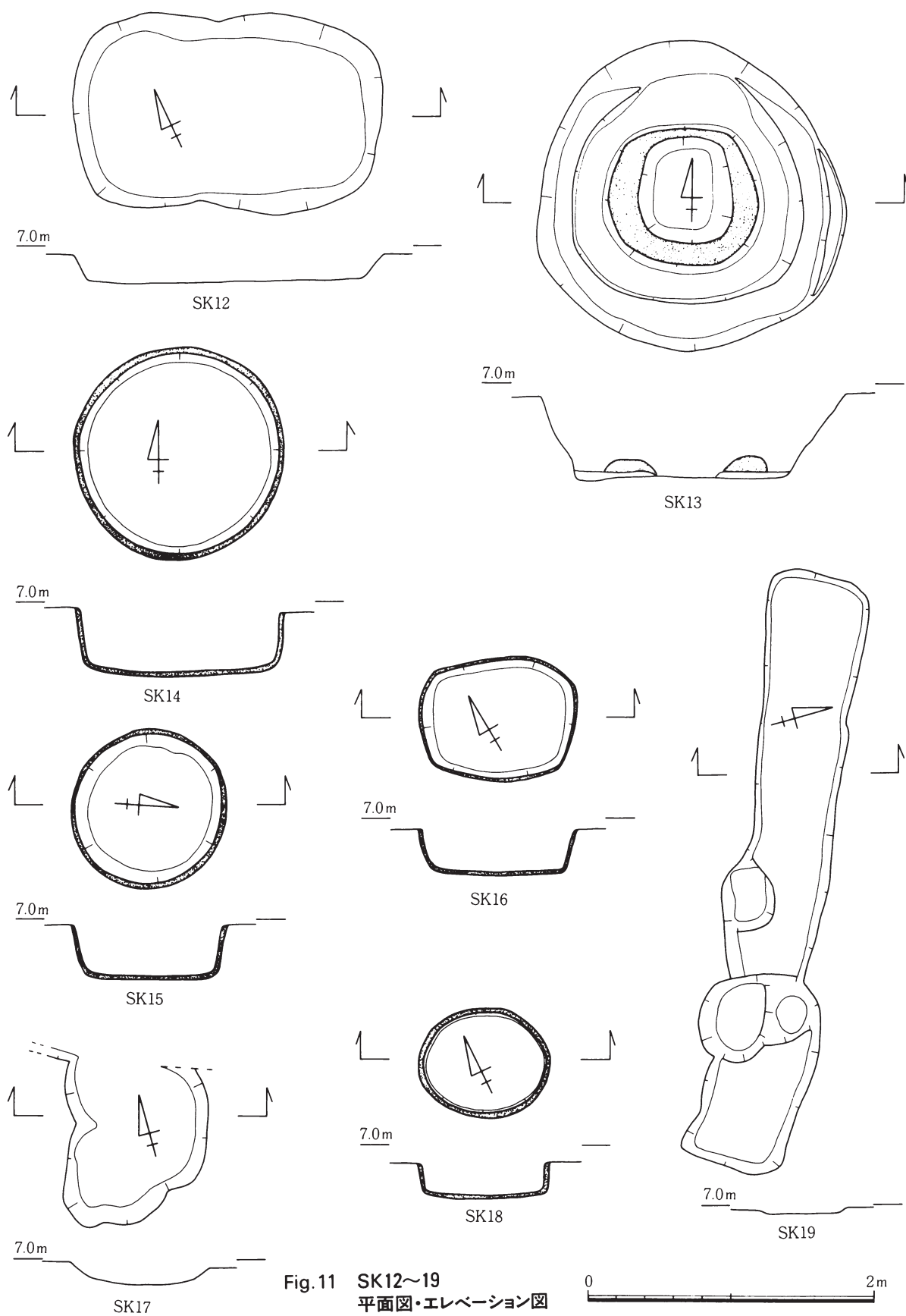
西区の北端にあり、SD2と切り合っているが、先後関係は不明である。長軸1.1m前後、短軸0.9mの不整形プランを呈する。深さは12～18cmで、床面は舟底状をなす。埋土は灰茶色粘質土で、遺物は認められない。

SK18 (Fig. 11)

西区の東部にあり、長軸1m、短軸0.8mの楕円形プランを呈し、深さは20cm前後を測る。壁は垂直に立ち上がり、床面は中央部が僅かに深くなっている。床及び壁は厚さ4～5cmのハンダで固められている。埋土は灰茶色粘質土の中に地山の黄色シルトがブロック状に入っている。遺物は認められない。

SK19 (Fig. 11)

SK14の東隣にあり、長軸5.6m、短軸0.58mを測る溝状の土坑である。深さは5～6cmを測る。埋土は灰茶色粘質土で、埋土中より土師質土器細片が2点出土している。



SK20 (Fig. 12)

西区中央部にあり、SK21と接している。長軸2.1m、短軸1.5mの隅丸長方形を呈し、深さは15cmを測る。壁は斜めに立ち上がるが、西壁は段状に掘られている。床面はほぼ水平をなすが、北寄りに小ピットが掘られている。埋土はI層：暗灰色粘質土に茶褐色粘質土がブロック状に入る、II層：暗灰色粘質土に黒ボクがブロック状に入る。遺物は認められないが、床面から円礫が多数出土している。形態から墓坑の可能性はある。

SK21 (Fig. 12)

西区の中央部にあり、SK22・30を切っている。長軸1.96m、短軸1.02mの長方形プランを呈し、深さは15～18cmで、床面中央部がやや低くなっている。断面は逆台形である。埋土はI層：灰茶色粘質土、II層：濃茶色粘質土で、I層から土師質土器小皿の細片が出土している。また、床面南端からは20cm大の円礫が出土している。形態から墓坑の可能性はある。

SK22 (Fig. 12)

西区の中央部にあり。長軸2.8m、短軸1.06mの不整形を呈し、深さは6～24cmで、床面は2段に掘られている。埋土は濃茶色粘質土で、遺物は認められない。形態から墓坑の可能性はある。

SK23 (Fig. 12)

西区の東寄りにあり、SK30と接し、SK24を切っている。長軸2.62m、短軸1.2mの隅丸長方形を呈し、深さは10cmを測り、床面はほぼ水平である。埋土は灰茶色粘質土で、遺物は認められない。形態から墓坑の可能性はある。

SK24 (Fig. 12)

西区の東寄りにあり。SK23に切られているが、長軸1.34m、短軸1mの隅丸長方形を呈し、深さは10cmである。床面は僅かに舟底状をなし、壁は斜めに立ち上がる。埋土は灰茶色粘質土で、遺物は認められない。形態から墓坑の可能性はある。

SK25 (Fig. 13)

SK24の東隣にある。長軸1.4m、短軸0.98mの隅丸長方形を呈し、深さは6～8cmである。床面はほぼ水平をなし、壁は斜めに立ち上がる。埋土は灰茶色粘質土で、遺物は認められない。形態から墓坑の可能性はある。

SK26 (Fig. 13・14・115)

西区の東にあり、長軸2.8m、短軸1.84mの不整形を呈し、深さは22～31cmを測る。埋土は灰茶色粘質土で、埋土中より多くの遺物が出土している。遺物は完形の土師質土器小皿が4点(21～24)、尾戸系陶器碗(25)、瀬戸・美濃産磁器染付小碗(27)、磁器瓶(26)、肥前系陶器鉢(28)、陶器香炉(29)、粘板岩製硯(30)、泥岩製砥石(31)、銅銭6枚(寛永通宝a・b・c・d・e・f)、鉄銭3枚が出土している。24の土師質土器は口縁部に煤痕の残る灯明皿と考えられ、25は18世紀のものである。その他土師質土器、陶器の細片が数点出土している。この土坑は鉄銭铸造後(1739年以降)に掘られた土坑である。

SK27 (Fig. 13)

西区の北部にあり、SE1を切っている。長軸3.4m、短軸2.9mの逆L字状の平面形態を呈する。

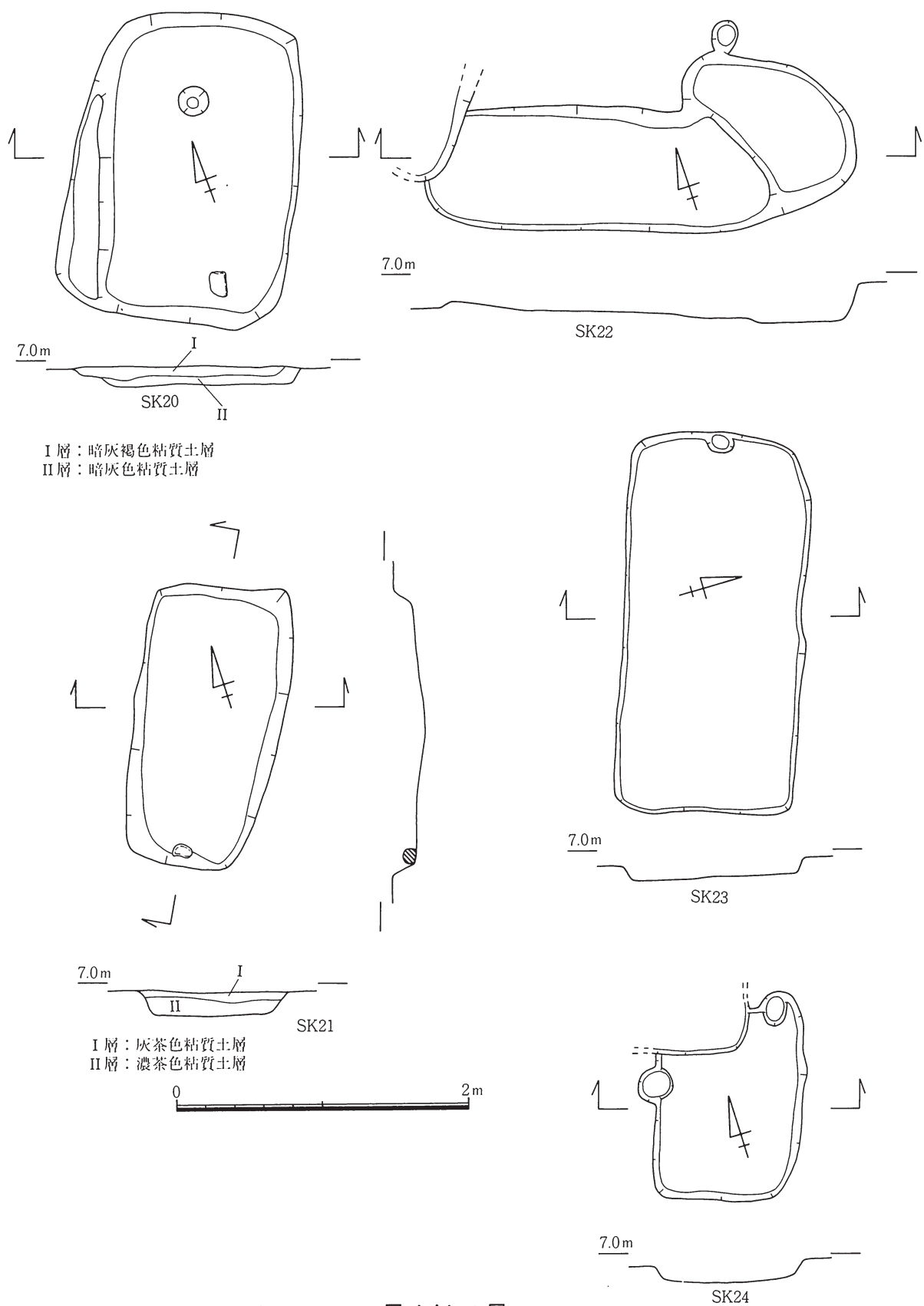


Fig.12 SK20～24平面図・エレベーション図・セクション図

深さは10cmを測り、床面は水平である。埋土は灰茶色粘質土で、埋土中より陶器口縁部と細片が2点出土している。

SK28 (Fig. 15)

西区の東寄りにある。幾つかの土坑と切り合っているが、長軸1.8m、短軸1.6mの隅丸方形を呈し、深さは10～22cmを測る。床面は舟底状をなし、埋土は灰茶色粘質土である。埋土中より鉄釉の甕片2点、肥前系磁器染付口縁部が1点出土している。

SK29 (Fig. 15)

西区の中央部にあり、SK30に大きく切られており、形態・規模は不明である。埋土は灰色粘質土で、埋土中より播鉢細片が1点出土している。

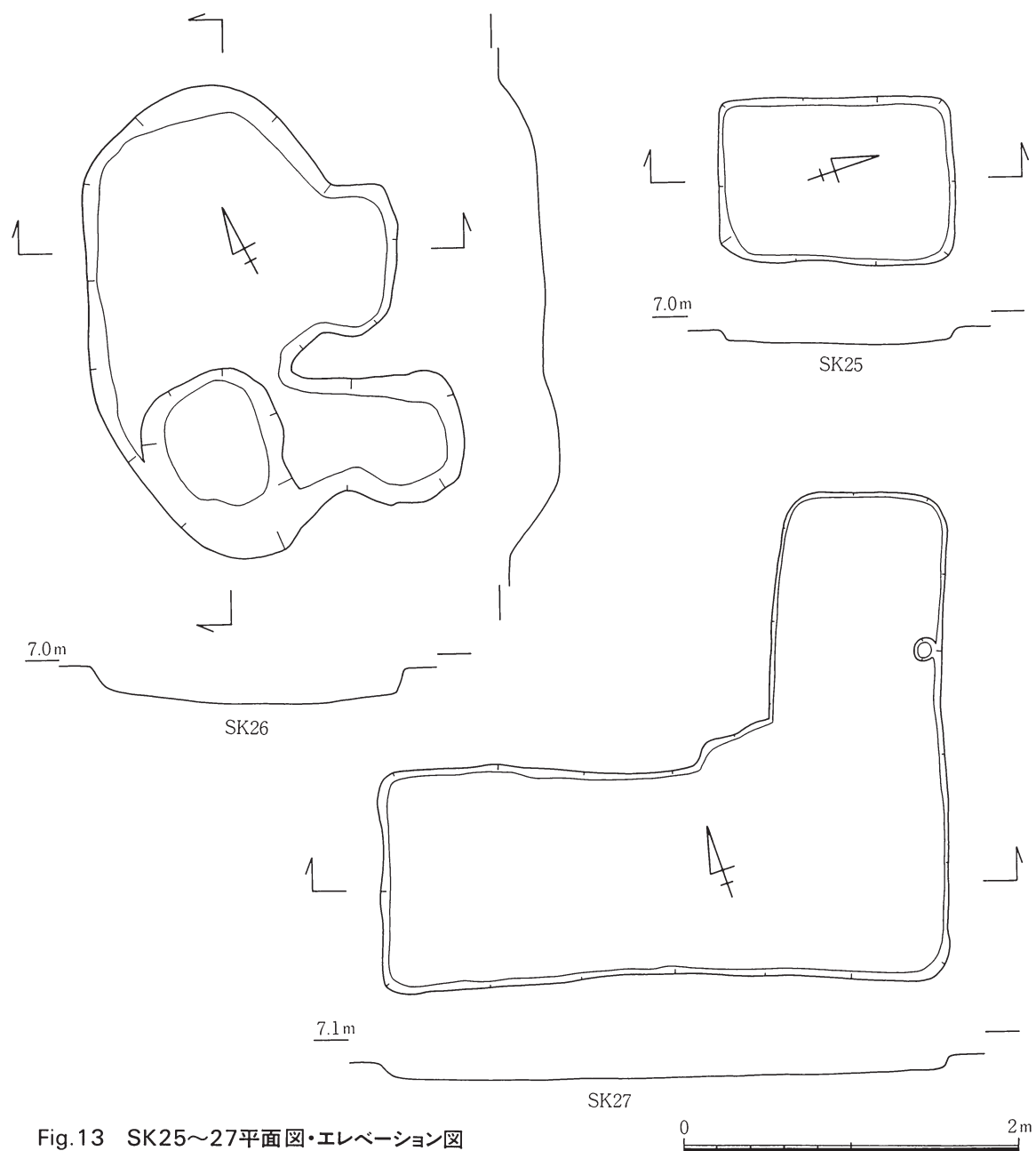


Fig. 13 SK25～27平面図・エレベーション図

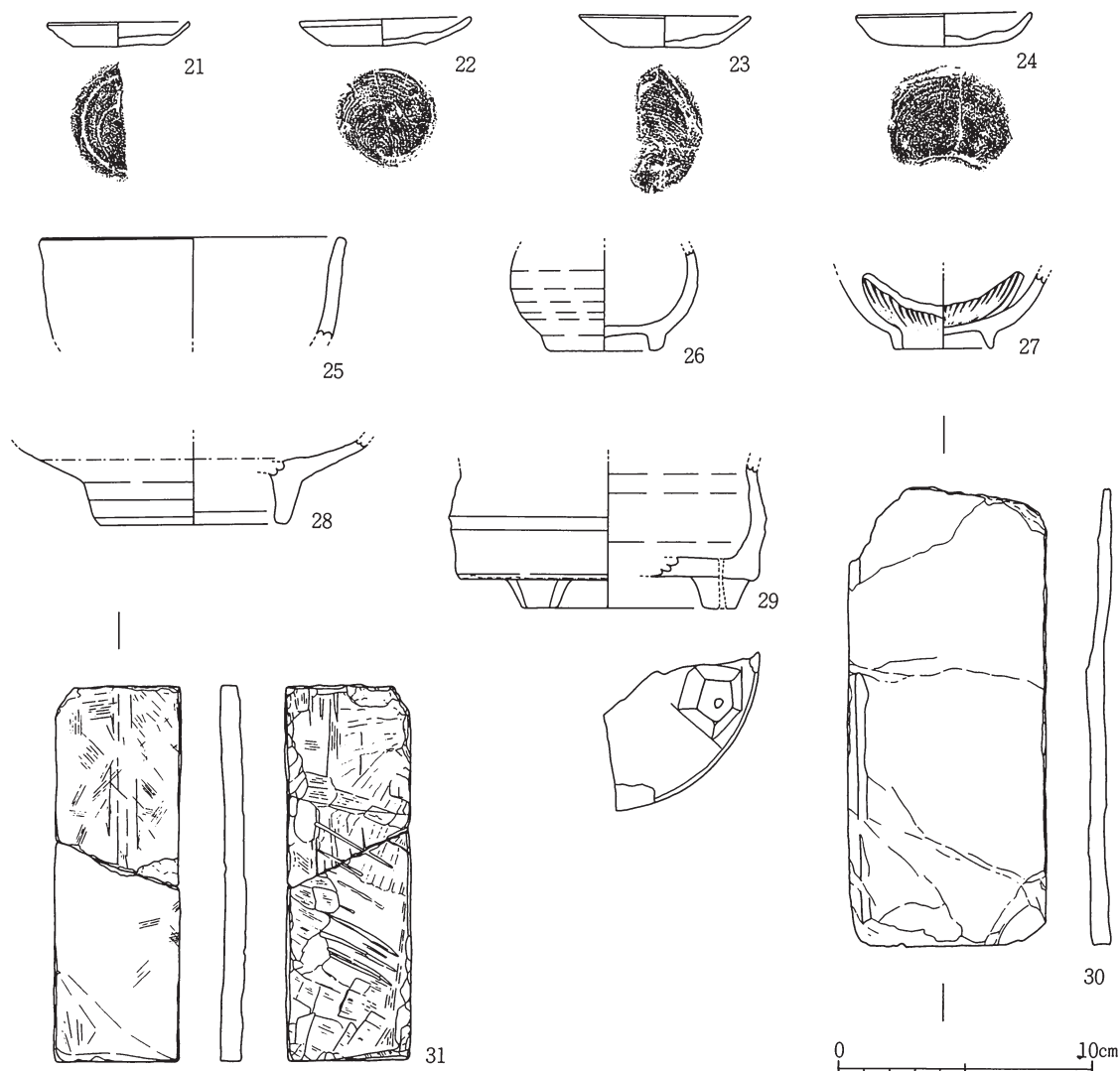


Fig. 14 SK26出土遺物実測図

SK30 (Fig. 15)

西区の中央部にあり、SK21とSK22に切られている。溝状の土坑で確認できたのは長軸4.6m、短軸1mで、深さは7～10cmを測る。埋土は暗灰色粘質土をベースに茶色粘質土がブロック状に入る。埋土中より土師質土器細片が1点出土している。

SK31 (Fig. 15)

東区の南西端にあり、一部が調査区外に出ている。長軸1.8m、短軸1.4mの楕円形を呈し、深さは18～20cmを測り、中央部が僅かに深くなっている。床面には桶の側板痕跡と考えられる細い環状溝の一部を認めることができることから、SK31は桶を据えていたものであろう。埋土は黒色粘質土で、遺物は認められない。

SK32 (Fig. 15・17)

東区東北部にあり、3分の1が調査区外に出ている。長軸1.9m前後を測る楕円形を呈し、深さ

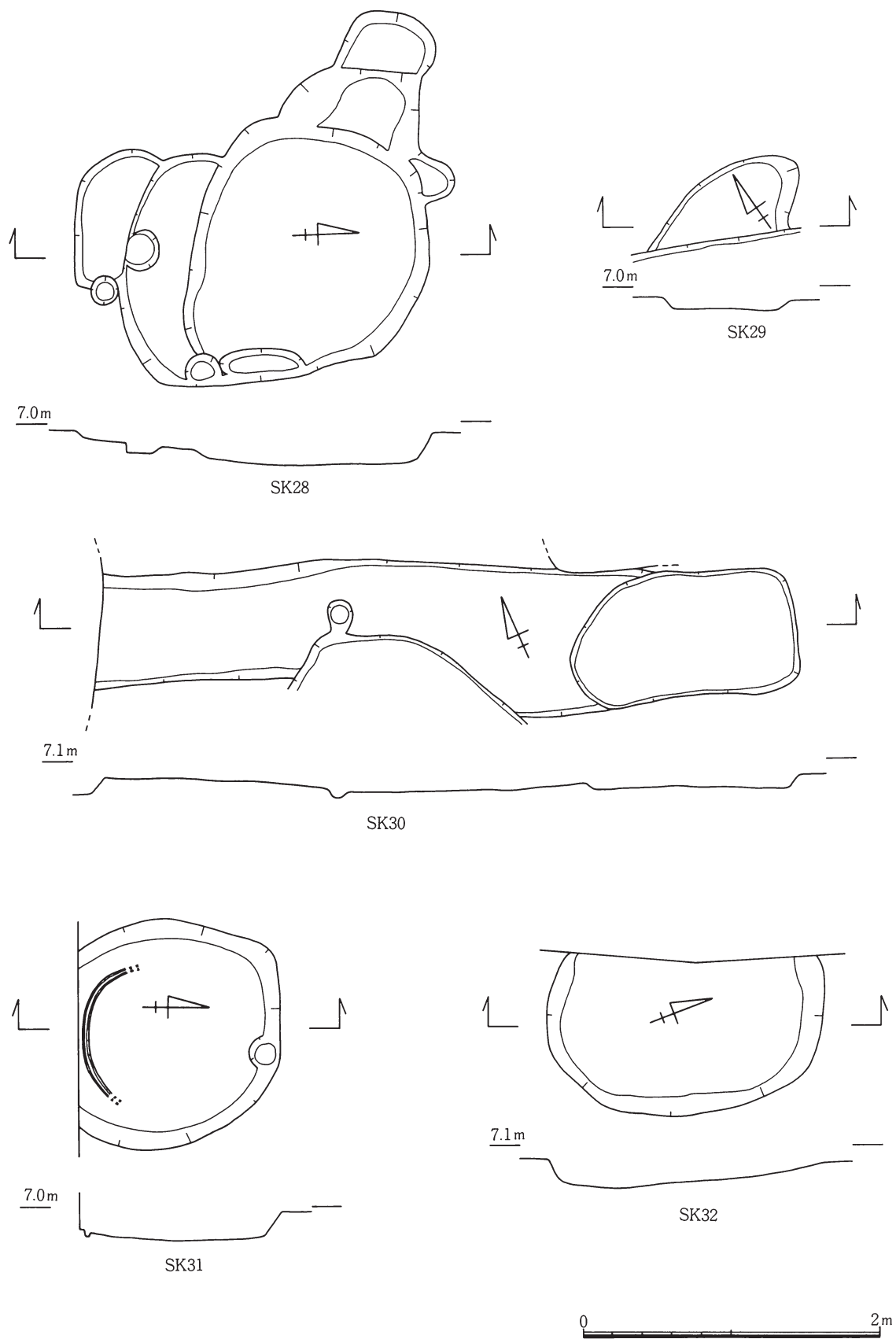


Fig.15 SK28～32平面図・エレベーション図

は6～22cmを測る。床面は北から南に向かって傾斜している。埋土は灰色粘質土で、埋土中より、肥前系磁器染付小碗(32)、瀬戸・美濃産陶胎染付碗1点、陶器細片1点、堺産播鉢1点が出土している。

SK33 (Fig. 16)

東区の西北端にあり、直径1m前後の円形を呈し、深さは20cmを測る。床は水平で、壁は垂直に立ち上がる。床と壁は厚さ3～4cmのハンダで固められている。埋土は暗灰色粘質土で、遺物は認められない。

SK34 (Fig. 16・17)

東区の西北部にあり、直径1.04mの円形を呈する。深さは26～30cmを測り、床面の中央部が深くなっている。壁は垂直に立ち上がり、床と壁は厚さ3～4cmのハンダで固められている。埋土は暗灰色粘質土でハンダの崩落土が入っている。埋土中より陶器香炉(33)と磁器細片が出土している。

SK35 (Fig. 16)

東区の西部にあり、長軸1.7m、短軸1mの不整形プランを呈し、深さは16～30cmを測る。壁は斜めに立ち上がり、床面は舟底状を呈する。埋土は暗灰色粘質土で、埋土中より瀬戸・美濃産の陶胎染付碗1点、肥前産磁器紅皿1点、陶磁器の細片、土師質土器の細片が数点出土しているが、図示できるものはない。

SK36 (Fig. 16・17)

SK34の東隣にあり、SK42を切っている。直径1.4mの円形を呈する。深さは38～56cmを測り、床面中央部が窪んでおり、床と壁は厚さ5cm前後のハンダで固められている。埋土はI層：灰茶色粘質土、II層：暗灰色粘質土、III層：ハンダ崩落土、IV層：円礫を多く含む暗茶色粘質土である。遺物は床面より煙管(40～42)、板状鉄片(43)、18世紀～幕末の肥前系磁器瓶(35)が出土している。40は吸口が1本の円筒でできており、42は2本の異なる円筒から成り立っている。41と42はラウが残り、煙管全部に緑青が巡る。また、I層からは19世紀の能茶山産磁器広東茶碗(37)、肥前系緑灰釉陶器碗(38)、尾戸産陶器碗、陶器甕片、磁器染付瓶、土師質土器小皿などが出土しており、その他の層より18世紀前半の肥前系磁器染付小碗(34)が出土している。18世紀後半～19世紀前半に属する。

SK37 (Fig. 16・17)

SK34の南隣にある。直径1.3m前後の円形を呈し、深さは54～61cmで、床面は舟底状をなす。壁は垂直に立ち上がり、外縁には石列が巡る。壁と床は厚さ5cm前後のハンダで固められている。埋土は灰褐色粘質土で、遺物は床面より完形の土師質土器小皿(39)が、埋土下層より能茶山産陶器火入れ(36)、磁器染付瓶片、土師質土器底部細片が出土している。36は19世紀のものである。

SK38 (Fig. 18)

東区の中央部にある。長軸3m、短軸1mの隅丸長方形を呈し、深さは6～12cmを測り、断面は舟底状をなす。床面にピットが多くあるがSK38に伴うものかどうかは不明である。埋土は灰褐色粘質土で、埋土中より磁器片、土師質土器小皿他の細片が数点出土している。

SK39 (Fig. 18)

東区の南部にある。土坑の南側は近代攪乱を受けているが、その他にもいくつかの土坑と切りあっている可能性がある。長軸3.7m、短軸1.1m、深さ40cm前後を測る不整形の土坑である。埋土

はI層：暗灰色粘質土、II層：暗灰色粘質土をベースに地山の黄色シルトがブロック状に入る、III層：灰色・茶色・黄色の粘質土がブロック状に入る。遺物は埋土中より土師質土器小皿（46）、17世紀末～18世紀前半の肥前系陶器片口（44）、18世紀の肥前産磁器染付小碗（45）が出土しており、床面からは土師質土器の底部片が出土している。18世紀代に属する。

SK40 (Fig. 18)

東区の東南隅にあり、SK50に切られている。直径1.8m前後の円形プランを呈する土坑である。深さは50cm前後を測り、床面はほぼ水平である。壁は斜めに立ち上がる。埋土は灰茶色粘質土で、遺物は認められない。

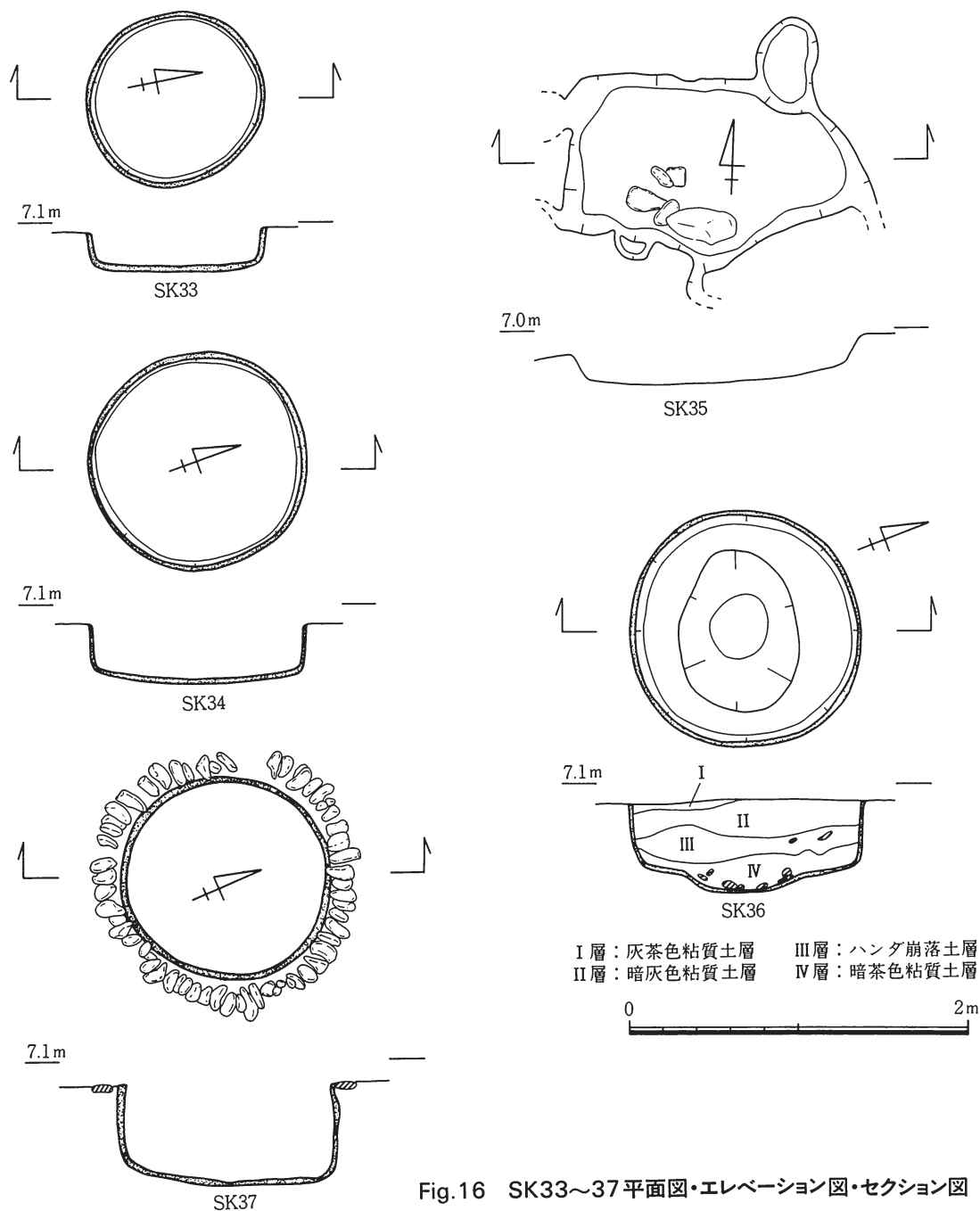


Fig.16 SK33～37平面図・エレベーション図・セクション図

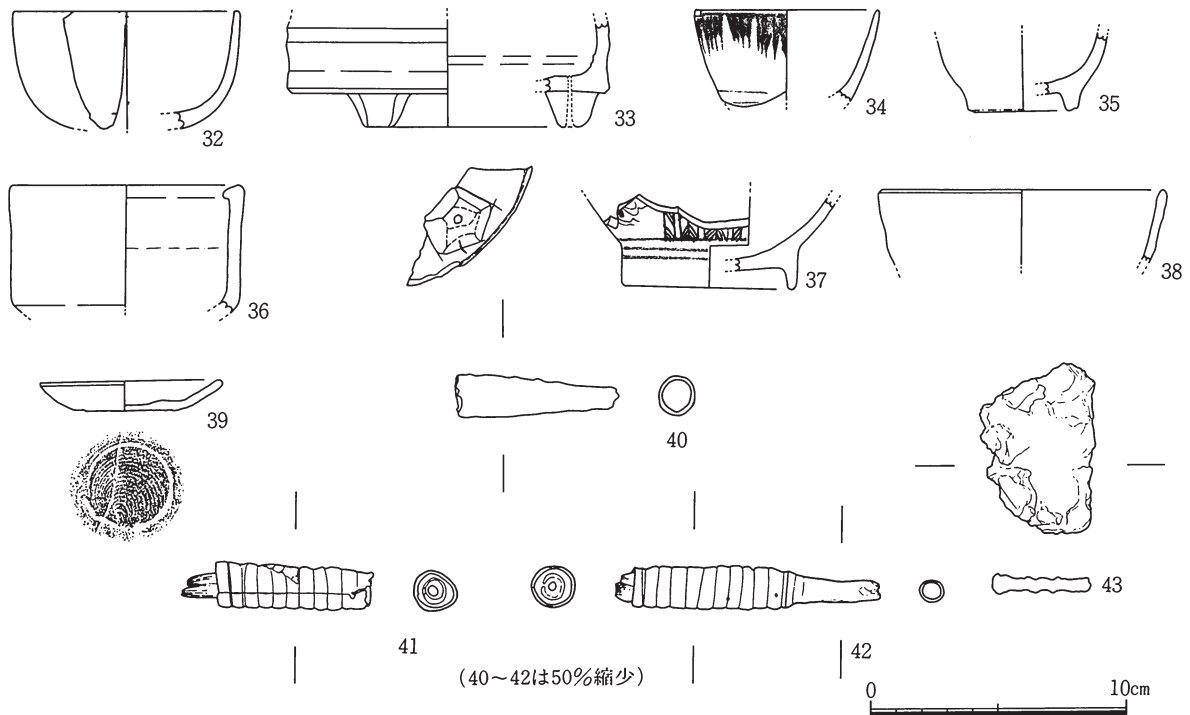


Fig.17 SK32・34・36・37出土遺物実測図
(SK32 : 32, SK34 : 33, SK36 : 34・35・37・38・40~43, SK37 : 36・39)

SK41 (Fig. 19)

東区の西南隅にある。長軸1.6m、短軸1.48mの楕円形を呈し、深さは32~34cmを測る。床面は水平であるが、東壁側は三日月状のテラスになっている。床面には幅3cm、深さ3cmの細い溝が環状に巡っているが、SK31で見たような桶の側板痕跡と考えられる。埋土は灰茶色粘質土で、遺物は認められない。

SK42 (Fig. 19)

東区の西北にあり、SK36に切られている。長軸5m、短軸1.4mの溝状の土坑で、深さは東西両端が15~20cmで、中央部は10cm前後である。埋土は灰茶色粘質土で、遺物は認められない。

SK43 (Fig. 19)

東区西部にあり、長軸1.5m、短軸1.4mの楕円形を呈し、深さは45cmを測る。床面は水平で、壁は斜めに立ち上がる。床と壁は厚さ5cm前後のハンダで固めている。埋土は灰茶色粘質土で、埋土中より白磁の細片が出土しているが、図示できるものはない。

SK44 (Fig. 19)

東区の南部にあり、長軸3.1m、短軸1.8mの隅丸長方形を呈し、深さは18~22cmを測る。埋土は黒色粘質土をベースに灰色粘質土がブロック状に入る。遺物は埋土中より肥前系磁器染付碗(47)と瀬戸・美濃産陶器菊皿(48)が出土しており、上部からは陶器碗口縁部2点と陶器碗細片1点が出土している。

SK45 (Fig. 20)

東区の中央部にある。長軸3.2m、短軸1.54mの隅丸長方形を呈し、深さは14~18cmを測り、床面は東側が僅かに低くなっている。壁には小ピットがあるがSK45との関係は不明である。埋土は暗灰色粘質土で、埋土中より近世磁器細片と関西系播鉢細片が出土しているが、図示できるものはない。

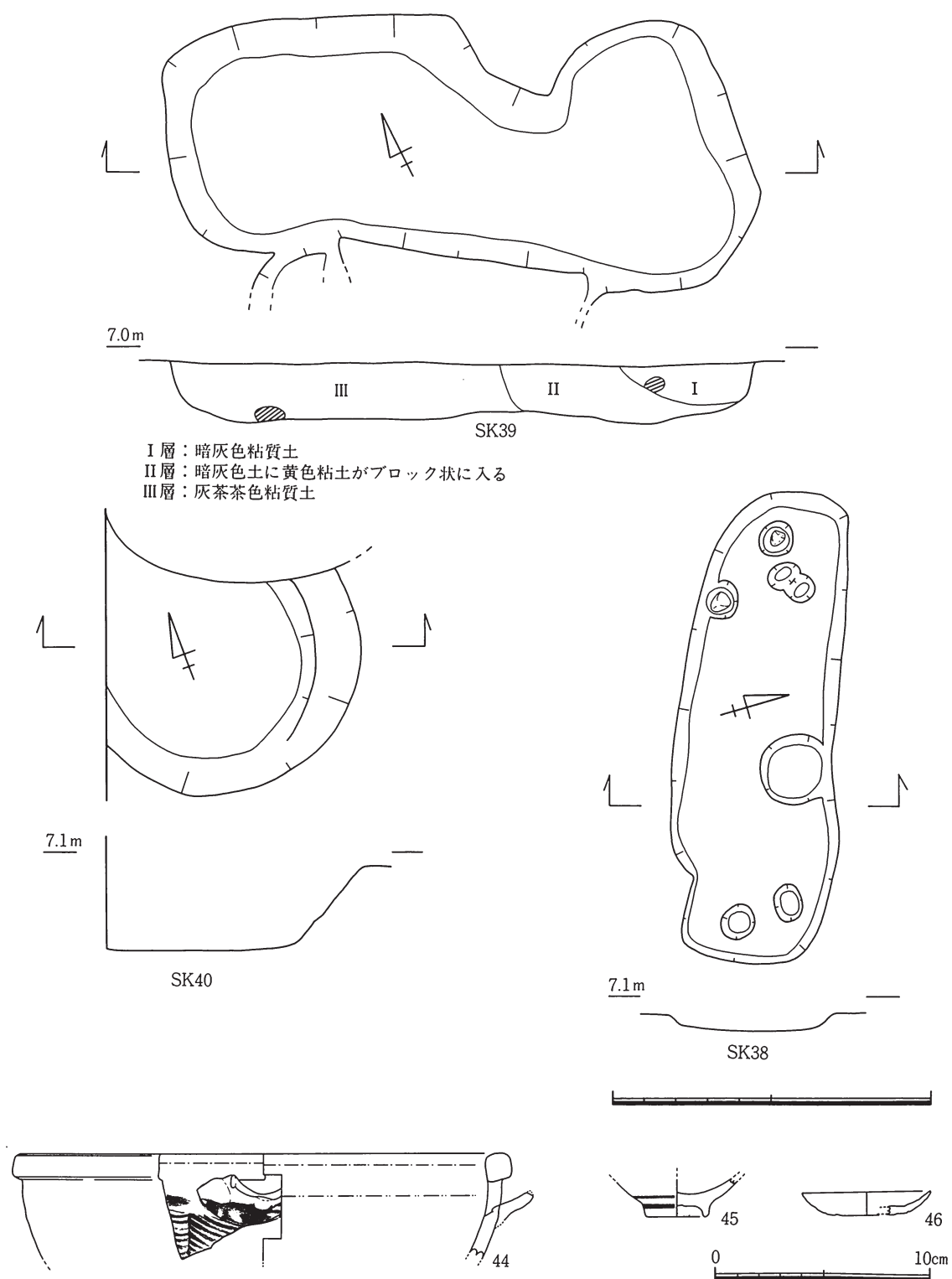


Fig.18 SK38～40平面図・エレベーション図・セクション図及びSK39出土遺物実測図

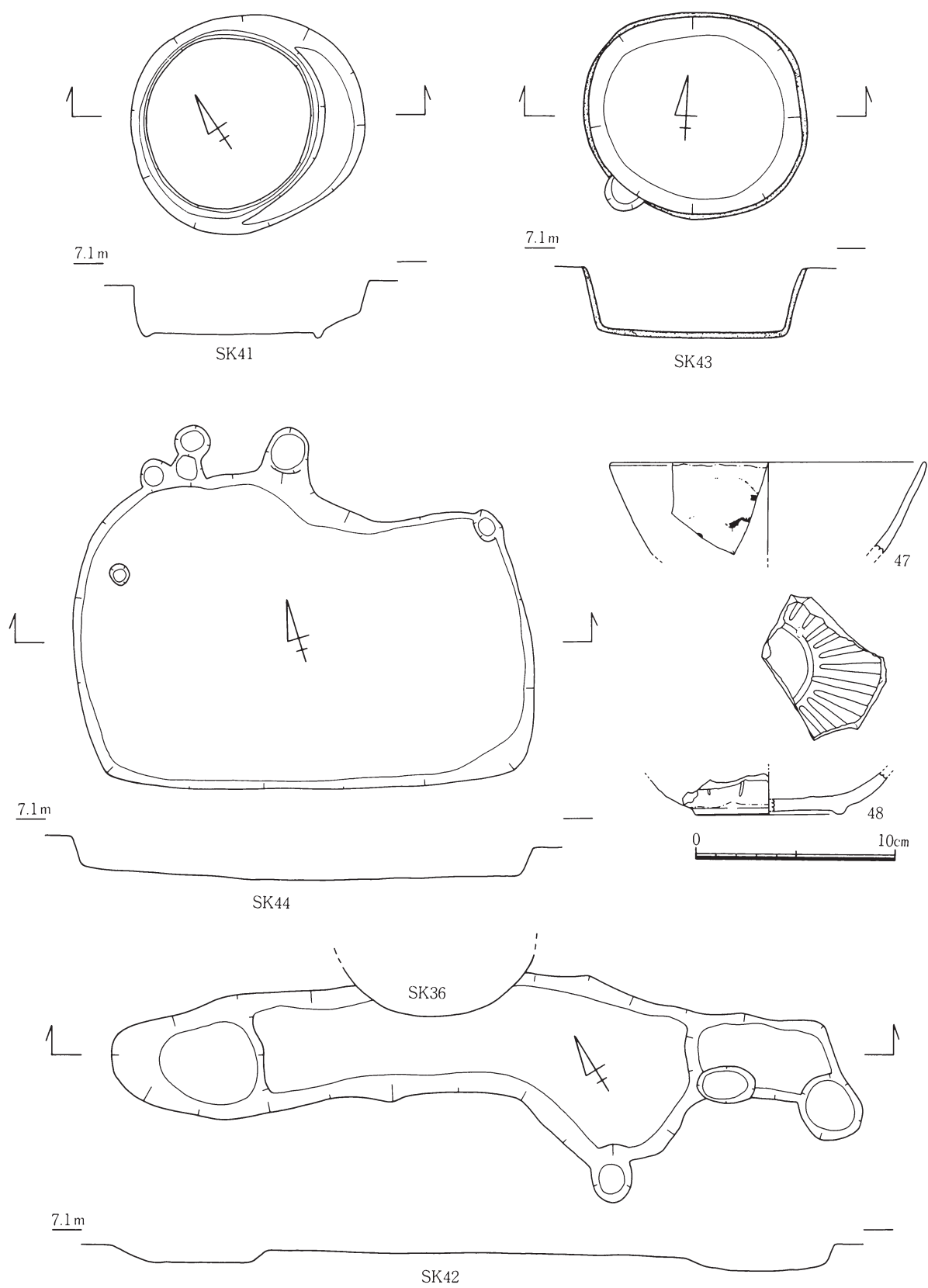


Fig.19 SK41～44平面図・
エレベーション図及びSK44出土遺物実測図

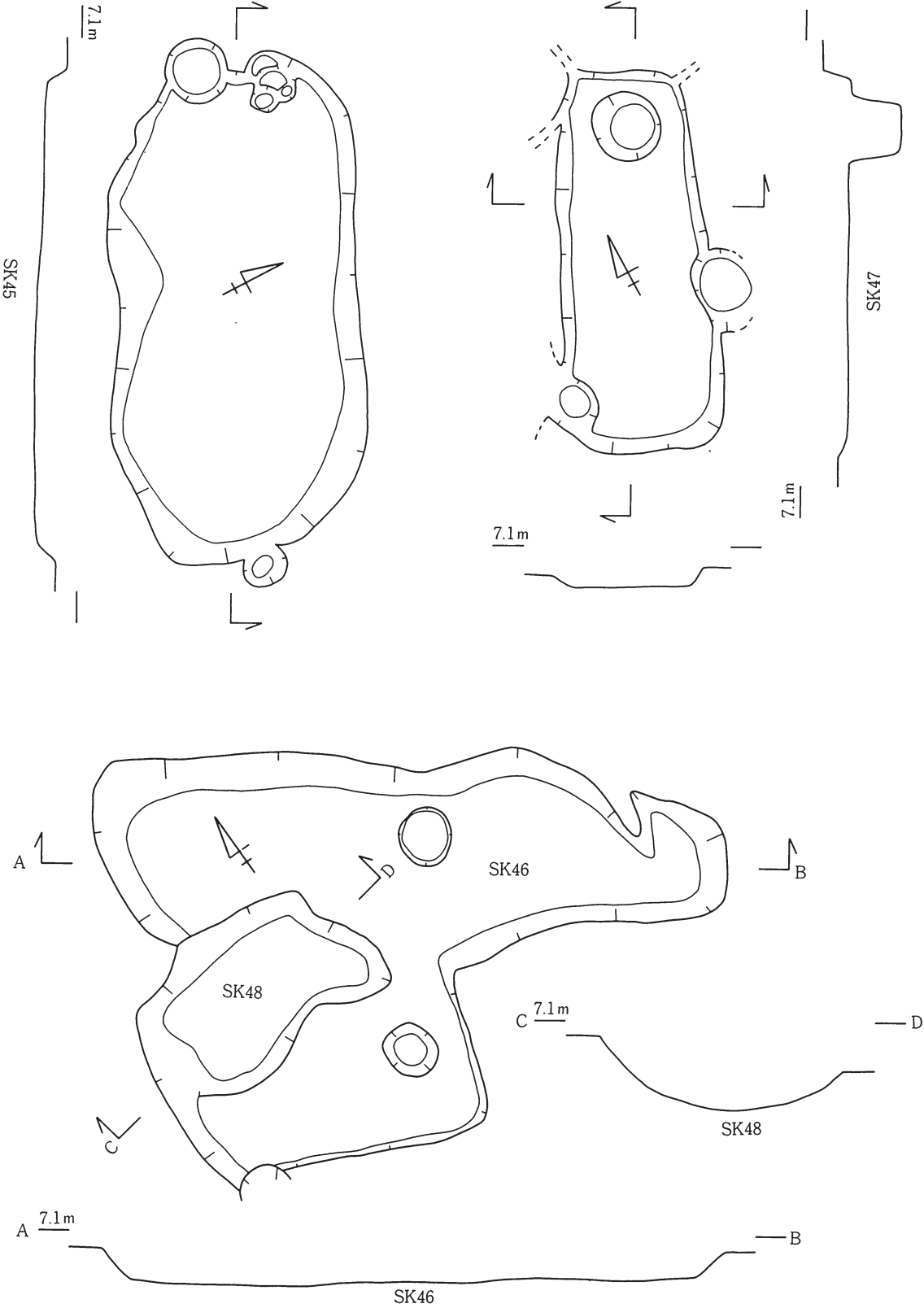


Fig.20 SK45～48平面図・エレベーション図

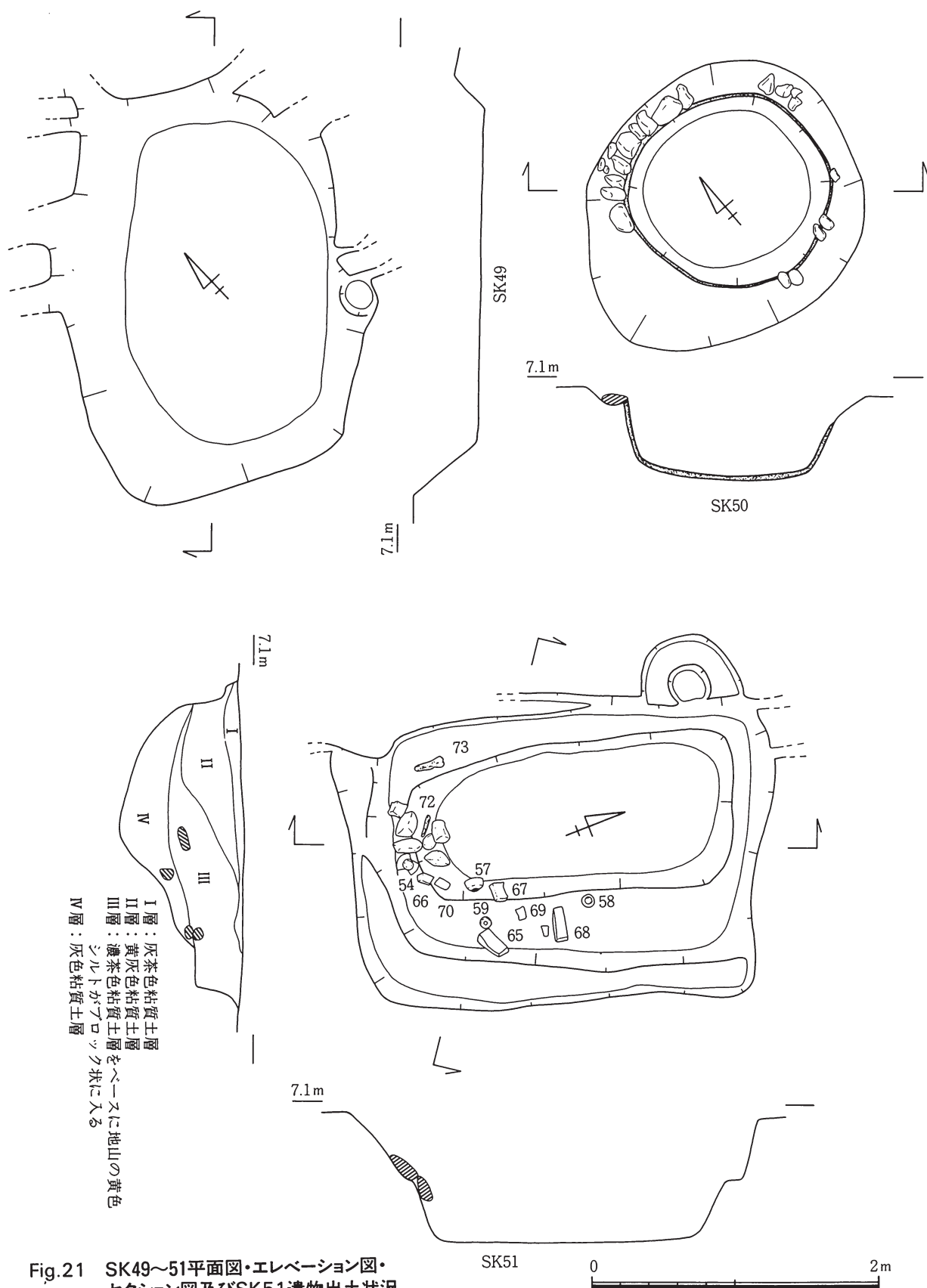


Fig.21 SK49～51平面図・エレベーション図・セクション図及びSK51遺物出土状況

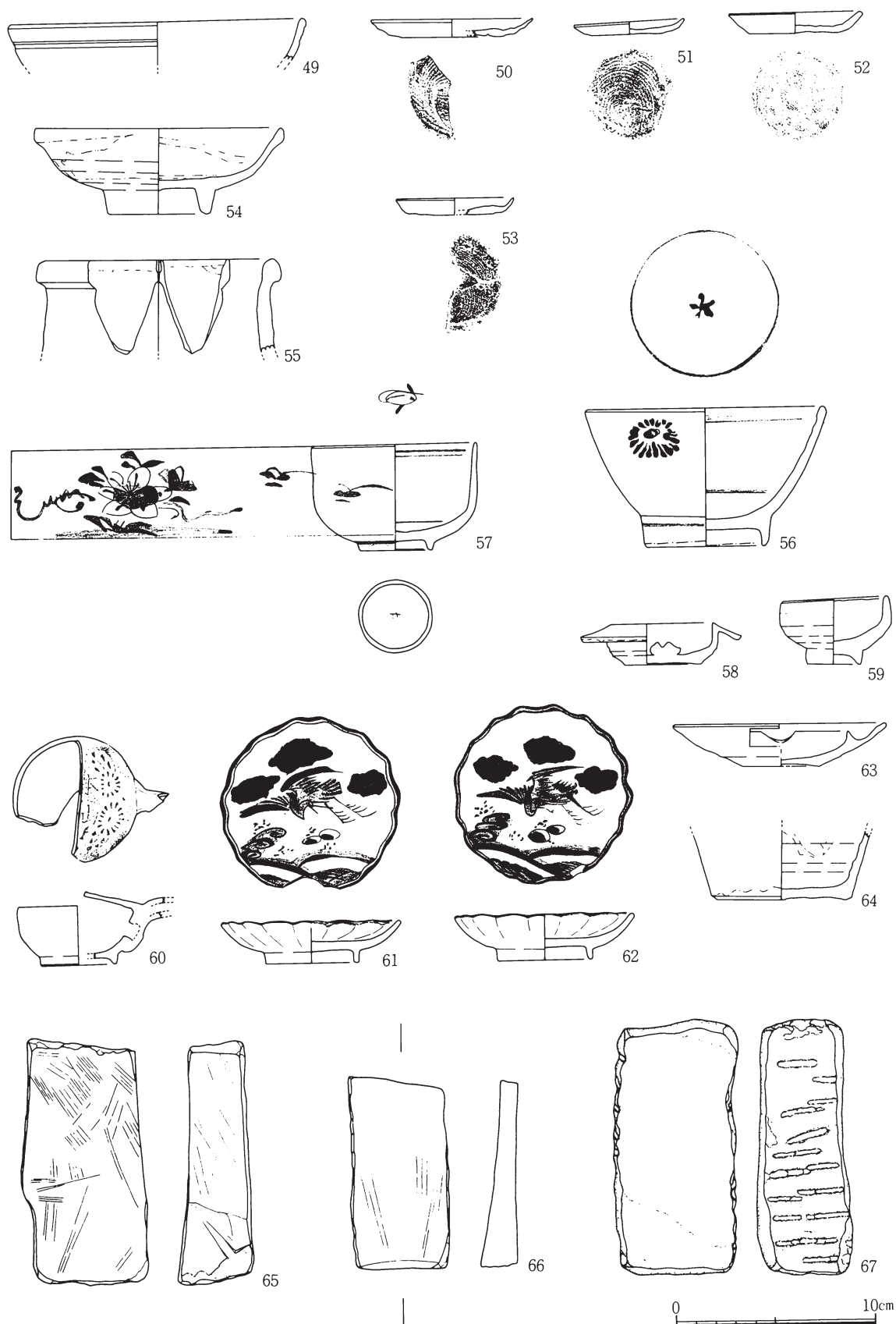


Fig.22 SK46・49・51・出土遺物実測図
(SK46 : 49, SK49 : 50・56, SK51 : 51~55・57~67)

SK46 (Fig. 20・22)

東区の中央部にあり、SK48に切られている。長軸4.1m、短軸1.35mの不整形を呈し、深さは18～24cmを測る。埋土は灰茶色粘質土で、埋土中より鉄釉陶器碗（49）、土師質土器焙烙・同小皿、磁器紅皿・同瓶、陶器陶胎染付片・同碗片などが出土している。

SK47 (Fig. 20)

東区の中央部にあり、長軸2.5m、短軸0.96mの隅丸長方形を呈する。深さは8～18cmを測り、床面は南から北に向かって低くなっている。埋土は灰茶色粘質土で、埋土中より土師質土器小皿・陶器細片、磁器染付片が数点出土しているが、図示できるものはない。

SK48 (Fig. 20)

SK46を切っている。長軸1.6m、短軸0.9mの不整形を呈し、深さは50cmを測る。断面は舟底状をなす。埋土は黒色粘質土で、遺物は認められない。

SK49 (Fig. 21・22)

東区の東北部にあり、SD 5・6を切っている。SE 4の掘り形とも切り合い関係にあるが、先後関係は不明である。長軸2.94m、短軸1mの隅丸方形を呈し、深さは47cmを測る。床面は水平で、断面は逆台形状を呈する。埋土は黒褐色粘質土で、埋土中より土師質土器小皿（50）、瀬戸・美濃

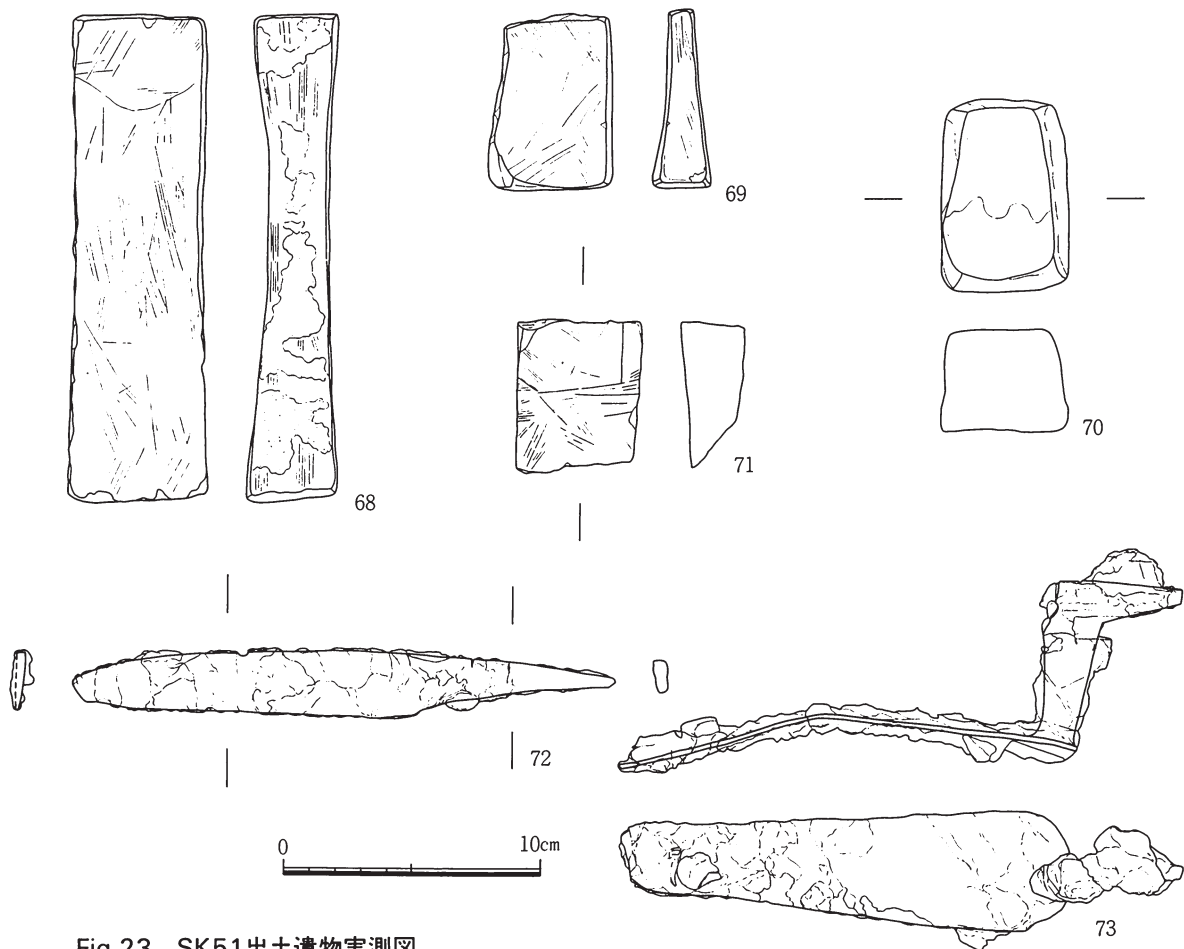


Fig. 23 SK51出土遺物実測図

産陶胎染付広東茶碗(56)が出土しており、その他関西系播鉢片や16世紀の景德鎮産白磁も出土している。56は18世紀末～19世紀のもので、50と同様ほぼ完形品である。

SK50 (Fig. 21)

東区の西南端にある。長軸2.1m、短軸1.8mの楕円形の浅い掘り形の中に直径1.3m、深さ50～64cmの土坑を設けている。床面中央部が最も深くなり、壁は斜めに立ち上がる。床と壁は厚さ4cmのハンダで固められ、外縁には石列が巡る。埋土は暗灰色粘質土で、上部には円礫が多く入っている。遺物は認められない。

SK51 (Fig. 21～23)

東区の中央部にあり、SD 8を切っている。長軸2.68m、短軸2.16mの隅丸長方形を呈し、東西及び北壁は階段状に掘られている。深さは90cmを測り、床は水平である。埋土は、I層：灰茶色粘質土、II層：黄灰色粘質土、III層：濃茶色粘質土をベースに地山の黄色シルトがブロック状に入る、IV層：灰色粘質土である。

遺物は東壁の下段のテラス直上と南壁斜面部より多く出土しており、砥石が多いのが特徴である。東壁下段のテラス直上の遺物は能茶山産鉄釉陶器蓋(58)、関西系灰釉陶器紅猪口(59)、砥石(65・68・69)、南壁斜面よりの遺物は能茶山産鉄釉陶器皿(54)、同磁器染付煎茶碗(57)、砥石(66・70)、包丁(72)、この他IV層から土師質土器小皿(51)、能茶山産磁器染付輪花小皿(61・62)、関西系鉄釉陶器瓶底部(64)、埋土中より土師質土器小皿(53)、関西系鉄釉甕口縁部(55)、同灰釉陶器水注(60)、同灯明皿(63)、砥石(67・71)、コテ状の鉄製品(73)が出土している。このうち、水注(60)はIV層出土の破片と接合関係にあり、鉄釉の甕片はSK 49の甕片と接合関係にある。54の能茶山産陶器は18世紀末～19世紀のもので、その他の能茶山産陶磁器と64の陶器は19世紀のものである。また、下層からは鉄釉陶器皿、17世紀後半の肥前産磁器染付碗、能茶山産磁器染付碗や土師質土器細片も出土している。

③ 井戸

SE 1 (Fig. 24～26)

西区の北にあり、SK 27の床面で検出した。直径1m前後の円形を呈し、深さは2.4mを測る素掘りの井戸である。埋土は砂礫混ざりの灰茶色粘質土で、遺物は認められない。

SE 2 (Fig. 24～26)

西区の中央部にある。直径0.8mの円形を呈し、深さ1.1mを測る。西・北側には幅20cmほどの浅い落ち込みがテラス状に巡っている。埋土は砂礫混ざりの灰茶色粘質土で、埋土中から肥前産磁器染付徳利(74)と瀬戸・美濃産磁器染付碗(76)、鉄釘(107)が出土している。74は18世紀～幕末のもので、76は19世紀のものである。その他土師質土器小皿片、磁器染付碗片、瓦片なども出土している。

SE 3 (Fig. 24～26)

西区の東部にある。直径1.1mの円形を呈し、東側には楕円形の浅い落ち込みがある。深さは1.7mまで確認できたが、崩落の危険があったためにこれ以上は掘り下げられなかった。埋土は砂礫混ざりの灰茶色粘質土である。遺物は能茶山産灰釉陶器火入れ(85)、肥前系陶器鉢(99)、産地不明の藁灰釉陶器鉢(102)、硯(105)、鉄製品(106)、堺産播鉢、肥前産紅皿、陶器片、土師質土器小皿他細片などが出土している。

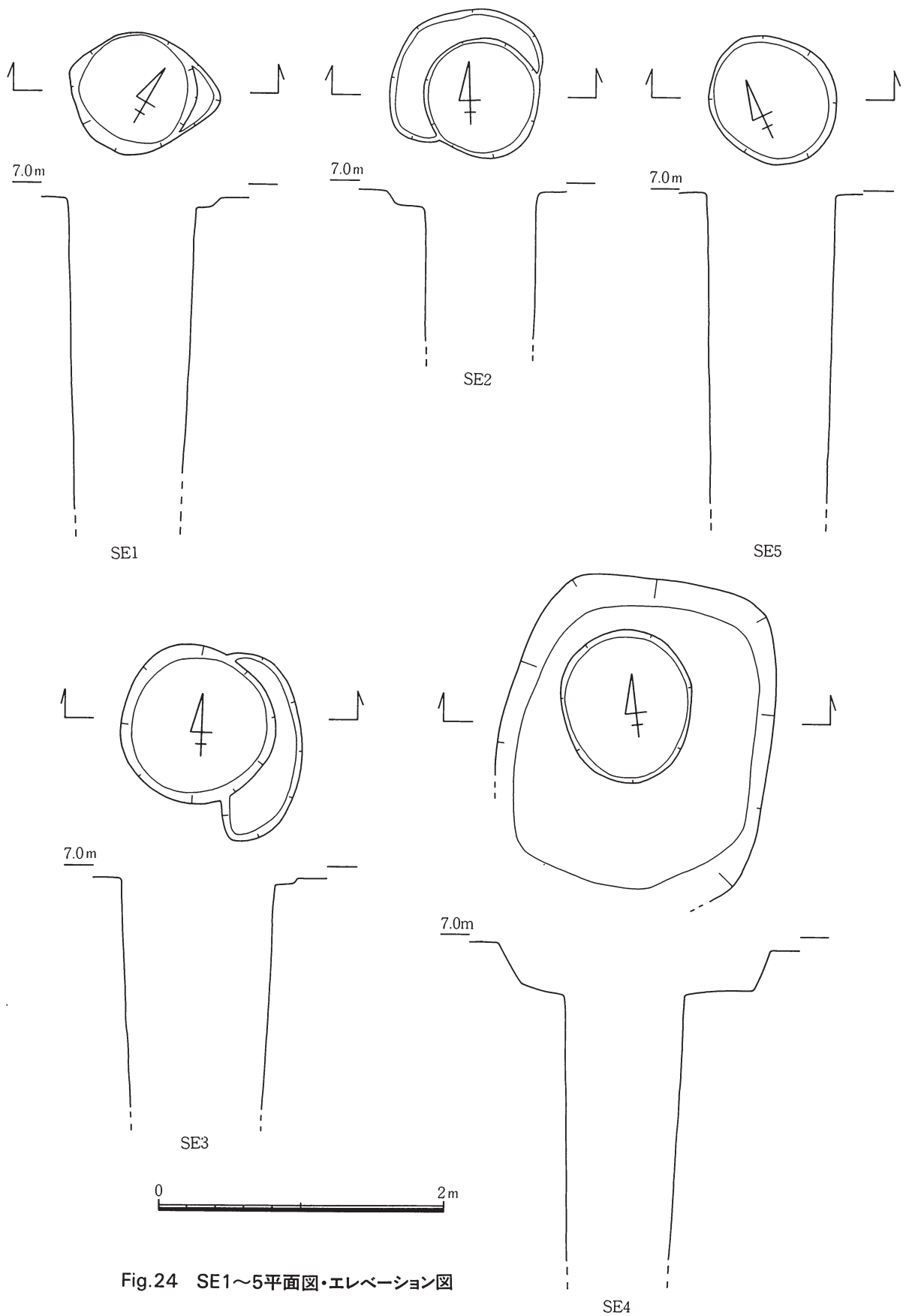


Fig. 24 SE1~5平面図・エレベーション図

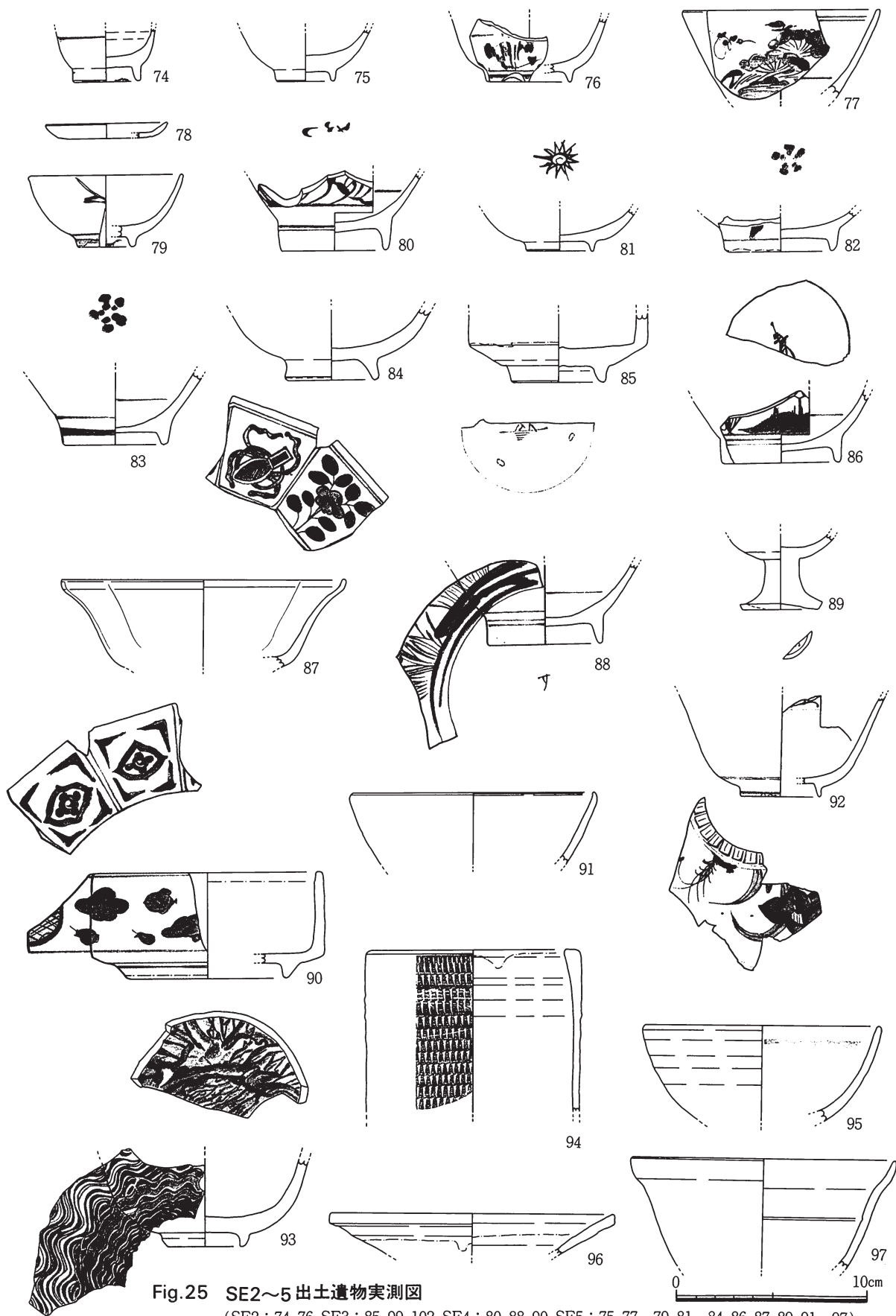


Fig.25 SE2~5 出土遺物実測図

(SE2 : 74・76、SE3 : 85・99・102、SE4 : 80・88・90、SE5 : 75・77~79・81~84・86・87・89・91~97)

SE 4 (Fig. 24～26)

東区の北部にある。長軸2.4m、短軸1.9m、深さ30cmの隅丸長方形の掘り形を呈し、その中に長軸1.1m、短軸0.9mの楕円形プランを持つ素掘りの井戸を掘っている。深さは掘り形床面より2mを測る。埋土は砂礫混ざりの灰茶色粘質土で、遺物は能茶山産磁器染付広東茶碗(80・88)、肥前系磁器染付段重(90)、堺産陶器播鉢(103)が出土している。88は19世紀のもので、90は19世紀～幕末のものである。その他、磁器染付広東茶碗、同碗、土師質土器細片なども出土している。19世紀代の井戸である。

SE 5 (Fig. 24～26)

東区北端にある。長軸1.1m、短軸0.9mの楕円形プランを呈する素掘りの井戸である。深さは2.3mまで確認したが、崩落の危険が生じたのでこれから下に掘り進めることはできなかった。埋土は砂礫混ざりの灰茶色粘質土で、埋土中より多量の遺物が出土している。能茶山産磁器染付広東茶碗(86)・同鉄釉陶器皿(100)、肥前産磁器染付碗(77)・同小碗(79)・同仏飯器(89)・同陶器碗(93)・同鉢(98・101)、肥前系磁器染付碗(81・92)・同小碗(75)・同角鉢(87)、瀬戸・美濃産陶胎染付碗(82・83)、瀬戸・美濃系灰釉皿(96)、尾戸系灰釉陶器碗(84・91・95)、堺産陶器播鉢(104)が出土している。93は18世紀前半のもの、84・87・89・98は18世紀代のもので、82・83・86・96・100・101は19世紀代のものである。その他産地不明の陶器火入れ(94)、緑灰釉陶器折縁鉢(97)、土師質土器小皿(78)、堺産陶器播鉢片、陶磁器細片、土師質土器細片などが多量に出土している。19世紀代の井戸である。

④ 溝

SD 1 (Fig. 27・28)

西区の西端を南北に走る溝で、確認延長50.4m、幅50～60cm、深さは北端で10cm、南端で20cmを測る。埋土はI層：灰黒色粘質土、II層：濃茶色粘質土である。遺物は土師質土器皿(110)、土鍋、関西系播鉢、肥前系染付瓶などの細片が出土している。

SD 2 (Fig. 27)

西区の北部にあり、確認延長9.3m、幅は30～60cm、深さは15～20cmを測る。埋土は灰黒色粘質土で、19世紀の能茶山産磁器細片が数点出土している。

SD 3 (Fig. 27)

SD 2の西隣にある。確認延長5.6m、幅80cm前後、深さ60cmを測る。埋土は灰黒色粘質土で、遺物は土師質土器小皿片、陶器碗片、磁器細片が出土しているが、図示できるものはない。

SD 4 (Fig. 27・28)

西区の北端にある。確認延長2m、幅40cm、深さ5cmを測る。埋土は茶褐色粘質土である。遺物は瀬戸・美濃産陶胎染付碗(116)、土師質土器細片が出土している。116は18世紀末～19世紀前半のものである。

SD 5 (Fig. 27・28)

東区の北を東西に走る溝で、西半分はSD 6と併行して走り、SK49に切られ、東部ではSD 7を切っている。確認延長25m、幅60～90cm、深さ15～25cmを測る。埋土は濃茶色粘質土である。遺物は土師質土器小皿(109・112)、肥前産磁器染付皿(114)、同陶胎染付碗(122)、同陶器鉢(124)、堺産陶器播鉢(130)、関西系陶器播鉢(129)、産地不明の陶器甕(128)が出土している。114と122は17世紀末～18世紀前半のもので、124は18世紀のものである。その他能茶山産陶器輪花小皿、鉄釉陶器片なども出土している。

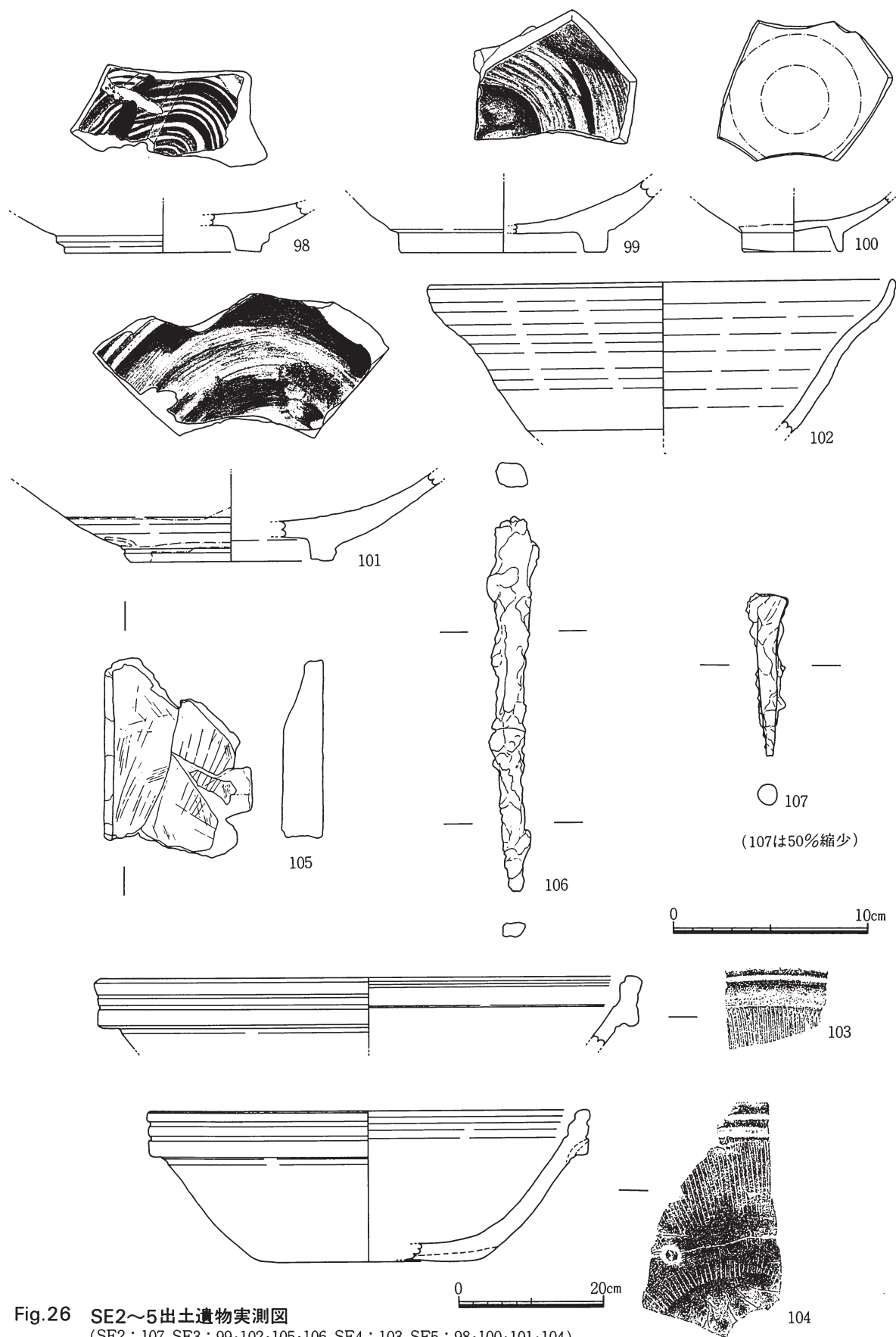


Fig.26 SE2~5出土遺物実測図
(SE2 : 107、SE3 : 99・102・105・106、SE4 : 103、SE5 : 98・100・101・104)

SD 6 (Fig. 27・28)

東区の北側でSD 5 と平行して走る。確認延長16m、幅30～90cm、深さ10～20cmを測る。埋土は濃茶色粘質土で、肥前産磁器染付小碗 (118)、尾戸産灰釉陶器碗 (119)、瀬戸・美濃産陶器鎧手碗 (126) が出土している。119は18世紀のもので、126は18世紀末～19世紀のものである。その他磁器の細片も数点出土している。

SD 7 (Fig. 27・28)

東区の北東にあり、SD 5 に切られている。SK 49の東壁から北に延びた後直角に屈曲し、SD 5 と並行して走る。確認延長14m、幅40～50cm、深さ10cmを測る。埋土は灰茶色砂質～粘質土で、信楽産灰釉陶器灯明皿 (113)、飴釉陶器瓶 (115)、陶器蓋 (117)、能茶山産磁器染付碗 (120)、同広東茶碗 (121)、尾戸産灰釉陶器碗 (123) が出土している。123は18世紀のもので、113は18世紀～幕末、120と121は19世紀のものである。

SD 8 (Fig. 27・28)

東区の北部で直角に曲がり、南北に走る溝で、SD 5・6を切り、SK 51に切られている。確認延長21m、幅40～60cm、深さ14cmを測り、埋土は灰褐色粘質土である。遺物は肥前産磁器紅皿 (108)、緑釉陶器小皿 (111)、瓦質土器火鉢 (125)、ラウが残る青銅製煙管 (127) が出土している。108は19世紀の菊花形紅皿で、完形品である。

⑤ ピット (Fig. 29)

ピットは大小200個以上検出できたが、遺物が出土したのはP 1 からP 7 のみである。P 1 から土師質土器小皿 (132)、P 2・3・7からは土師質土器細片、P 6からは尾戸産陶器碗 (131)、P 4・5からは近世磁器細片、P 7からは青銅製小柄 (134) が出土している。

⑥ 包含層出土の遺物 (Fig. 29)

土師質土器小皿 (133)、肥前産磁器紅皿 (135)、肥前産磁器染付筒形碗 (137)、瀬戸・美濃

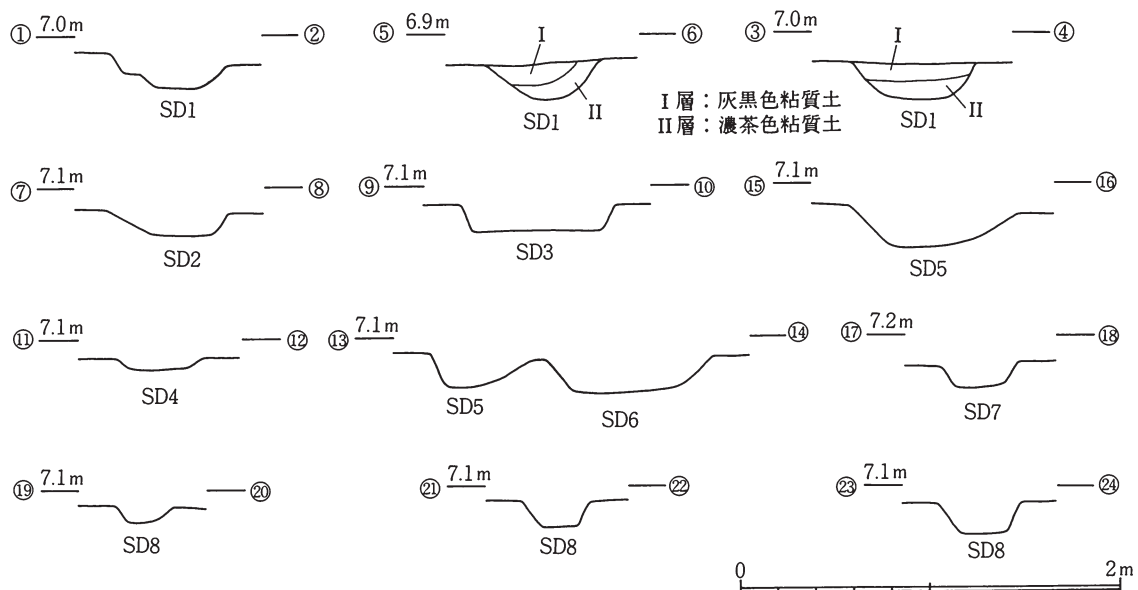


Fig. 27 SD1～8エレベーション図・セクション図

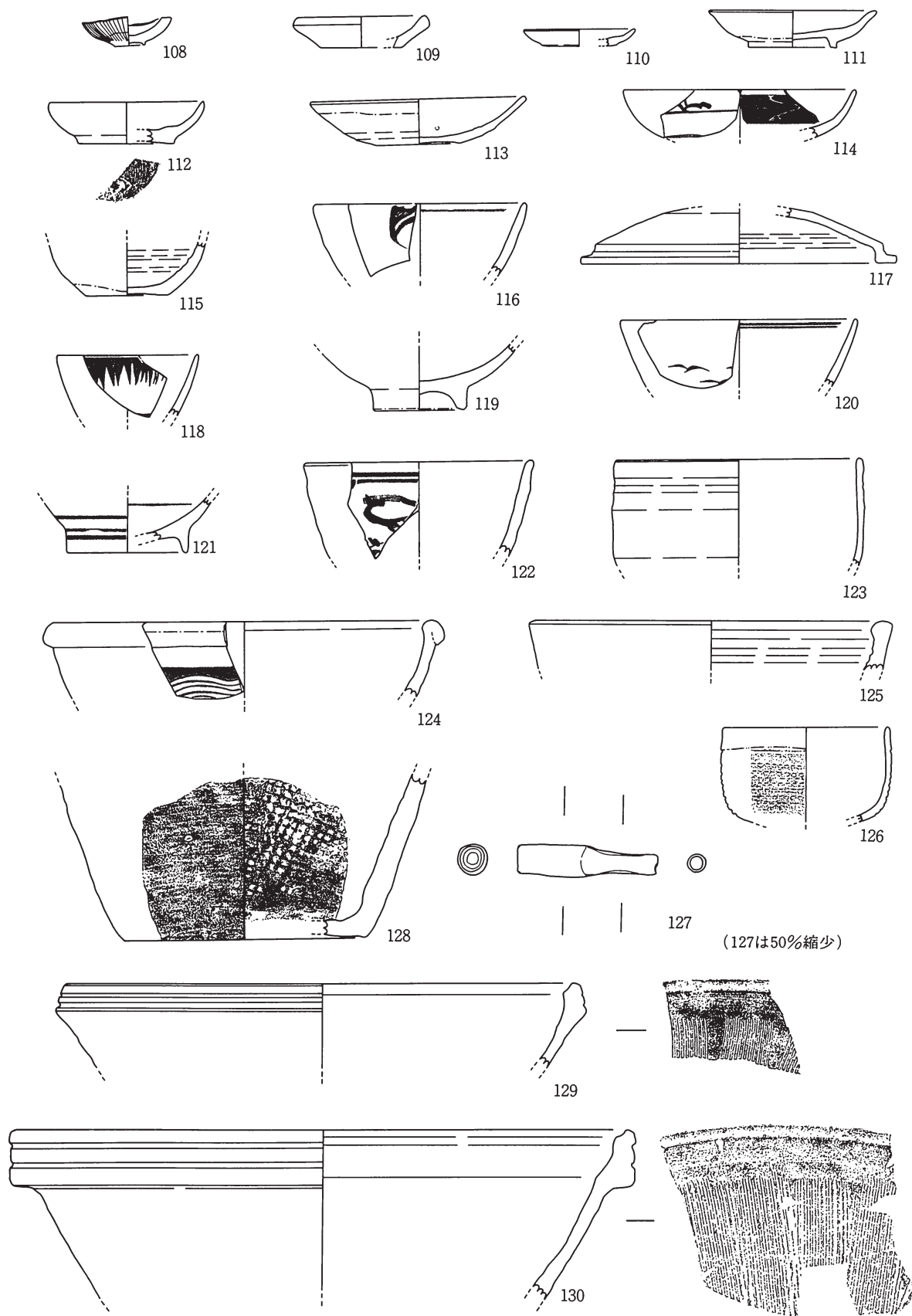


Fig.28 SD1・4～8出土遺物実測図

(SD1 : 110, SD4 : 116, SD5 : 109・112・114・122・124・128～130, SD6 : 118・119・126, SD7 : 113・115・117・120・121・123, SD8 : 108・111・125・127)

産の陶器摺り絵皿（138）、肥前系陶器碗（136）、砂岩製砥石（139）、粘板岩製硯（140）が出土している。135は19世紀の菊花形紅皿で、136は18世紀の灰釉陶器である。138は18世紀前半のもので、137は18世紀後半～19世紀前半の蕎麦猪口と考えられる。

（３）小結

掘立柱建物は３棟を復元することができたが、何れも柱穴掘り形の大きさや深さ、柱間に統一性がなく整然としたものではない。遺物の出土が全く認められなかった為に時期比定が難しいが、他の遺構や包含層遺物から見て大凡18世紀末葉～19世紀中葉の建物として把握することが可能で、棟方向や位置関係からして同時に存在したものと考えられる。この他SB 3の周辺には柱穴が数多く存在しており、同時期の建物があと２～３棟建つ可能性がある。

土坑は51基検出したが、その平面形態から大きく４つに分けることができる。A類：円形又は楕円形のプランを有するもの（SK 1・3・4・6～10・13～16・18・31～34・36・37・40・41・43・50）。B類：隅丸方形のプランを有するもの（SK 2・12・20・21・23～25・44・47・49・51）。C類：細長い溝状のプランを有するもの（SK 5・19・30・38・42）。D類：不整形のプランを有するもの（11・17・22・26～29・35・39・45・46・48）である。これらのなかでは、A類が最も多く23基を数え半数近くを占めており、当調査区の特徴となっている。さらにこのA類土坑は素掘りのものA-1類（SK 3・10・31・32・40・41）と床と壁をハンダで固めたハンダ土坑と呼んでいるものA-2類（SK 1・4・6～9・13～16・18・33～37・43・50）に分けることができる。A

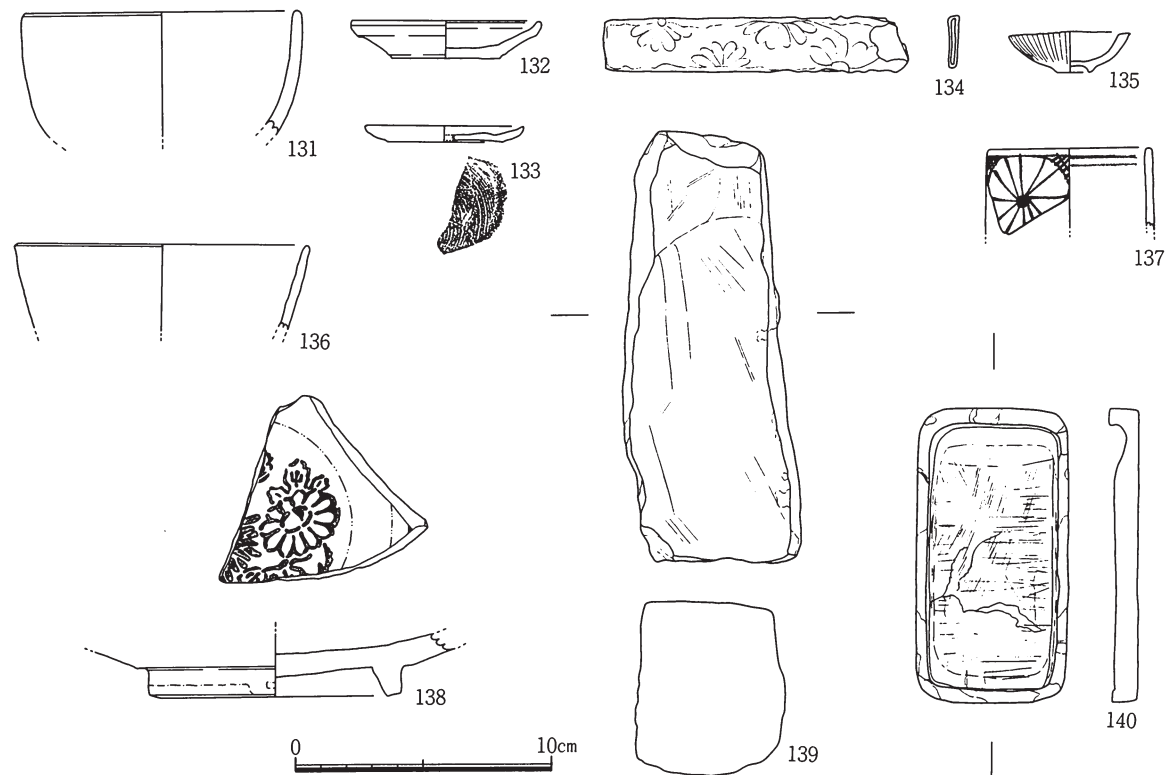


Fig.29 ピット及び表面採集・包含層出土の遺物
(P1: 132、P6: 131、P7: 134、表採: 140、包含層: 133・135～139) (134は50%縮小)

－1類が6基、A－2類が17基である。

A－1類土坑は、SK31とSK41の床面に桶の側板痕跡が認められ、桶が置かれていた土坑であることを想定したが、他の4基の土坑についても形態等から同様のことが考えられる。すなわち保水性を有する施設として位置付けることができよう。

A－2類のハンダ土坑は、II区においても数多く集中して認められており、当遺跡の近世遺構の特徴として位置付けることができる。すでに見たようにそのほとんど全ては直径1m前後の円形で、方形又は逆台形の断面形態を持ち、一部を除いて床面中央部が少し深く作られている。これらの中でSK 1・4・37は、検出面直下でハンダを外から取り囲むように石列が巡らされているが、補強のためのものであろう。他のハンダ土坑も同様の石列が巡っていたと思われるが、削平により破壊されたものと考えられる。石列の確認できたSK 1・4・37は深さが50～60cmあるのに対して、石列が残っていないものは総じてこれよりも浅い。このことから削平を受けている可能性が強い。またSK13は壁や床全面をハンダで固めることはしないが、床に粘土を敷き断面蒲鉾状のハンダをドーナツ状に巡らしている。SK13は径2mを測り、他ものと比べて断面形態が異なることや規模が大きいことも特徴である。またこれらハンダ土坑からの遺物出土状態には少数例ではあるが、興味深いものがある。SK 8の床面からは土師質土器小皿と伊万里の紅猪口の完形品が出土しており、SK 9の床からも完形の土師質土器小皿と砥石が出土し、しかも砂と礫とで丁寧に埋め戻している。これらの遺物は土坑の廃棄に際して意識的に置かれたものであり、廃棄に際して意識的な行為がなされていることを示している。これらのハンダ土坑が何に使われたのか、現状においては不明であるがA－1類と同様に保水性を有する施設として機能していたことは間違いあるまい。

次にA－1類とA－2類との関係であるが、2ヶ所において切り合い関係（SK 3と4及びSK40と50）が認められ、ともにA－1類をA－2類が切っている。この先後関係は出土遺物からも窺われる。すなわちA－1類のSK 3・32からは17～18世紀代の遺物が出ているのに対して、A－2類土坑からは18世紀末～19世紀代の遺物が出ている。また平成7年度に実施したII区の調査結果とも一致している。A類土坑は、素掘りで桶を据えたものからハンダで固めたものへの変化を辿ることが可能でその画期を18世紀末から19世紀初頭に求めることができよう。

なお、A－1類としたハンダ土坑は、松野尾章行による『皆山集』第6集記載の「繁打」、すなわち「はんだ井戸輪その外はんだの諸器寛政十一年己未江州より来たりて揉貫井戸師より浦戸町角屋六平に傳法して作り始め今に至る」に該当させることができよう。このことは上述のように出土遺物の時期とも矛盾しない。ただ今回検出した土坑は井戸ではなく「はんだの諸器」とすべきであり、使用目的・機能については、すでに見たように保水性を有する施設であるということ以外には具体的に言及することができないが、掘立柱建物の近くに集まっていることから見て何らかの産業用の土坑として位置付けることができるのではないだろうか。

B類土坑は、出土遺物がほとんど見られないことから時期比定が難しいが、平面形態から見てその多くが墓坑であると考えられる。SK 20・21・23～25などのあり方は、平成6年度に調査したI区の墓坑群に似ている。

Ⅲ 区 出 土 遺 物 観 察 表

遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種/ 器形	法 量(cm)				成形技法/ 調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎 土	特 徴	産 地	年 代	備 考
						口径	器高	胴径	底径							
1	8	56	SK1	土師質	焙烙	48.8				(内)横ナデ (外)ナデ		石英・長石の粗粒砂を多く含む。	無耳。浅め。			外面煤ける
2	"	"	"	磁器	碗	11.4					(外)呉須は淡い発色	白色・透明感を持つ	口縁部内に細い圈線2本あり。	肥前		
3	"	"	SK4	陶器	鉢	11.6					化粧土を帯状に施す・透明度のある褐色釉	灰色堅緻・剥離面は荒い	口縁部台形状を呈し、外側に肥厚。	肥前系		
4	"	"	"	白磁	紅皿 菊花形	3.7	3.2		1.5		内面全部と外面一部に施釉	白色精緻	外面76筋。高台脇付近の筋はナデ消されている。	肥前		完形品
5	"	"	"	陶器	壺				6.1	内面は丁寧な横ナデ	鉛釉?	にぶい橙色。剥離面は荒く、気泡が見られる。	外底まで施釉	肥前系		
6	"	"	"	土師質	小皿	6.4	1.1		4.8	ロクロ成形		淡茶色。砂粒はほとんど含まない。	底部回転糸切り			ほぼ完形品
7	"	72	"	陶器	乗 台付タ ンコロ 形	4.9	5.1		4.0	ロクロは成形時に右回転。杯部中心より径1.4cm、高さ2cmの円柱が立ち上がり側面を抉る。	外底以外鉄釉	灰色堅緻・剥離面はやや荒い	中央に灯芯を支える立ち上がりを持つ杯部の台付き。台末完通の穿孔が見られる。外底糸切り痕明瞭。	肥前系		ほぼ完形品の灯火具
遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種/ 器形	法 量(cm)				成形技法/ 調整 内面/外面	紋 様	胎 土	特 徴	産 地	年 代	備 考
8	8	56	SK4	瓦	燈瓦 (軒丸瓦)	瓦当 径 15.5	文様 径 12.0	内区 径 8.2		指頭匠痕顕著・側面は横ナデ	頭から尾へ左巻きの三巴紋と珠紋を組み合わせたもの、連珠三頭巴紋		巴頭部は丸珠を帯びており、尾部は他の尾と接していない。尾の断面は半円。			
遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種/ 器形	法 量(cm)				成形技法/ 調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎 土	特 徴	産 地	年 代	備 考
9	8	56	SK3	磁器	皿	11.0					鮮やかな呉須	白色精緻	口縁部内面2重圈線	景德鎮	17世紀	青花皿
10	10	"	SK8	白磁	紅皿 菊花形	4.9	1.7		1.5	型押し成形	内面全体と外面の一部に施釉	白色精緻・剥離面は荒い	高台脇から深くしつかりした筋を施す。59筋。	肥前	19世紀	完形品
11	"	"	"	"	"	4.7	1.6		1.5	型押し成形	内面全体と外面の一部に施釉	白色精緻	底部付近筋をナデ消す。筋53本。	肥前	19世紀	完形品
12	"	"	"	土師質	小皿	6.1	1.0		3.5	ロクロは形成時に右回転・横ナデ		橙色	外底糸切り痕明瞭			ほぼ完形品
13	"	"	SK9	"	"	6.9	1.1		4.8	内底、体部内外面横ナデ+ナデ		淡茶色。細粒砂含む。	外底糸切り痕明瞭。灯明皿の可能性あり。			口縁部の2箇所煤け痕
14	"	"	SK8	"	皿	11.4				横ナデ		黄橙色。細粒砂				
15	"	"	"	"	"				8.8	横ナデ		黄茶色。細粒砂を少量含む。	外底糸切り痕明瞭			
遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種/ 器形	法 量(cm)			重量 (g)	特 徴				産 地	年 代	備 考
16	10	64	SK9	金属製品	釘	3.7	0.6	0.6	1.5	断面は楕円形。						
17	"	60	SK8	石製品	硯	7.7	0.6	0.6	245	作業面の摩耗が激しい。						頁石
18	"	"	"	"	砥石	10.0	3.1	5.0	1,872	裏表2面を使用。端面(小口)に段部が存在。						花崗岩?
19	"	64	SK9	金属製品	釘	6.2	1.4		6.7	断面はやや方形。						
20	"	60	"	石製品	砥石	6.6	6.3	5.8	336	4面使用						石英粗粒面岩
遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種/ 器形	法 量(cm)				成形技法/ 調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎 土	特 徴	産 地	年 代	備 考
21	14	56	SK26	土師質	小皿	5.6	0.9		3.6	横ナデ		橙色。砂粒を含まない。	外底糸切り			
22	"	"	"	"	"	6.7	1.1		3.4	ロクロ右回転・横ナデ		橙色。砂粒を殆ど含まない。	外底糸切り			ほぼ完形品

Ⅲ 区出土遺物観察表

遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種／ 器形	法 量 (cm)				成形技法／ 調整 内面／外面	釉薬・絵付 内面／外面	胎 土	特 徴	産 地	年 代	備 考
						口径	器高	胴径	底径							
23	14	56	SK26	土師質	小皿	6.7	1.8		4.2	横ナデ		黄橙色。細粒砂を含む。	外底糸切り			完形品
24	"	"	"	"	小皿 灯明皿	6.9	1.3		4.8	横ナデ		淡橙色。粒砂を含まない。	外底糸切り			口縁部に煤け 顕著。ほぼ完 形
25	"	"	"	陶器	碗	11.6					(内外)灰釉	浅黄色精緻・気泡が見られる・ 剥離面はやや荒い	細やかな貫入が見られる。口縁部僅かに外反。	尾戸	18世紀	呉器手？
26	"	"	"	白磁	瓶				4.6	(内)横ナデ	(内)露胎	白色・剥離面は滑らか・やや裂孔が存在	外面下地に調整痕顕著。			
27	"	"	"	磁器 染付	小碗				4.0		(内外)木賊紋・高台脇内外が釉溜り	白色精緻・透明感があり・剥離面は滑らか	高台は細長く直角に削り出す。淡青色の呉須で多条線描き。	瀬戸・美濃		
28	"	56	"	陶器	鉢				7.4	外面体部削り。ロクロ左回り。	柿釉・内面三島手風の施釉	赤褐色精緻・剥離面はやや荒い・裂孔が存在	高台は1.7cmと高く台形状。見込みは蛇の目状釉剥ぎ	肥前系		
29	"	"	"	"	香炉 有三足				11.0	(内)横ナデ 外底糸切り後部分的にナデ。	体部外面に薄い透明度の釉	橙色・剥離面はやや滑らか	外底は五角形に削り取った低脚を貼付。脚部から見込みにかけて径2mmの穿孔あり。			
遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種／ 器形	法 量 (cm)			重量 (g)	特 徴		産 地	年 代	備 考		
						全長	全幅	全厚								
30	14	60	SK26	石製品	硯	18.2	7.8	0.8	195.8	大半が剥離。存在部は使用による摩耗が顕著。					粘板岩	
31	"	"	"	"	砥石	14.9	7.0	0.9	137.0	一面のみ使用					泥岩	
遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種／ 器形	法 量 (cm)				成形技法／ 調整 内面／外面	釉薬・絵付 内面／外面	胎 土	特 徴	産 地	年 代	備 考
						口径	器高	胴径	底径							
32	17	56	SK32	磁器 染付	小碗	8.8				(内)横ナデ	呉須はあせた青・(外)雁の紋様	灰白色精緻・剥離面は滑らか	口縁部外面1条、内面2条、見込みに1条の圏線。	肥前系		
33	"	"	SK34	陶器	香炉 有三足				11.0	(内)横ナデ 外底糸切り後部分的にナデ。	体部外面に薄い透明度の釉	橙色・剥離面はやや滑らか	外底は五角形に削り取った低脚を貼付。脚部から見込みにかけて径2mmの穿孔あり。			
34	"	"	SK36	磁器 染付	小碗	7.2					(外)雨降り紋	白色・剥離面はやや滑らか・気泡が見られる	淡い濁りのある呉須。	肥前系	18世紀前半	
35	"	"	"	磁器	瓶				4.3	(内)横ナデ	(内)露胎	灰白色(黒色粒子あり)・精緻・剥離面は滑らか	畳付釉剥ぎ後砂付着。	肥前系	18世紀～幕末	
36	"	"	SK37	陶器	火入れ	9.0					外面と内面上部に緑灰釉	灰色・剥離面はやや荒い・円裂孔が存在し、裂孔の規模は大きい	口縁部内側に肥厚、寄口形。口縁部に貫入あり。	能茶山	19世紀	
37	"	"	SK36	磁器 染付	碗 広東形				6.9		呉須は淡青色(外)綾杉紋色	白色・やや透明感を持つ・剥離面はやや荒い・裂孔あり	見込みに1条の圏線、中央部に文様。高台及び高台脇に3条の圏線。	能茶山	19世紀	
38	"	"	"	陶器	小碗	11.0					緑灰釉・透明度あり	黄灰色・精緻・裂孔あり・剥離面はやや荒い	やや大きな貫入あり。	肥前系		
39	"	"	SK37	土師質	小皿	7.0	1.2		3.2	横ナデ		にぶい橙色。砂粒をほとんど含まない。	外底糸切り顕著。見込みにドーナツ状の盛り上がりあり。			煤付着・完形
遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種／ 器形	法 量 (cm)			重量 (g)	特 徴		産 地	年 代	備 考		
						全長	全幅	全厚								
40	17	64	SK36	金属 製品	煙管	4.3	1.2	1.0	2.8	全面に緑青が巡る。					青銅製	
41	"	"	"	"	"	5.0	1.2	1.1	6.7	全面に緑青が巡る。外面沈線。ラウが残る。					青銅製	
42	"	"	"	"	"	7.0	1.1	1.2	7.1	全面に緑青が巡る。外面沈線。ラウが残る。					青銅製	
43	"	"	"	"		6.7	4.5	0.6	36.6	板状の鉄製品？						

Ⅲ 区 出 土 遺 物 観 察 表

遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種/ 器形	法 量 (cm)				成形技法/ 調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎 土	特 徴	産 地	年 代	備 考
						口径	器高	胴径	底径							
44	18	56	SK39	陶器	片口	22.4					柿釉・灰釉体 部内外面と片 口下半に長石 釉を三島手風 (刷毛目)に施 釉	暗灰色・砂粒を 含む・裂孔が存 在	口縁部方形。外側 に粘土を貼付して 片口を作り出す。	肥前系	17世紀 末～ 18世紀 前半	
45	"	"	"	磁器 染付	小碗				2.8			白色系・裂孔が 存在・剝離面は やや荒い	外面高台及び高台 脇に2本の圈線。 畳付釉剥ぎ後砂付 着。	肥前	18世紀	
46	"	"	"	土師質	小皿	6.0	1.1		4.0	横ナデ		黄褐色。細粒砂 を少量含む。	糸切り			
47	19	57	SK44	磁器 染付	碗	15.8					(外)草花紋・ 淡濁の呉須に よる文様	白色精緻・やや 透明感あり	口縁部の摩耗が激 しく釉が剝落。	肥前系		
48	"	"	"	陶器	菊皿				7.6	(外)横ナデ	高台以外全面 灰釉	乳白色・粗く石 英粒を含む・裂 孔多く存在	内面菊花を丸ノミ で仕上げる。下地 に布目圧痕あり。 外面に縦沈線あり。 貫入が見られる。	瀬戸・ 美濃		
49	22	"	SK46	"	碗	14.8					鉄釉	淡茶色堅緻・円 孔が存在	外面2条の沈線			
50	"	"	SK49	土師質	小皿	8.0	0.9		5.0	横ナデ		橙色。細粒砂を 含まない。	糸切り			
51	"	"	SK51	"	"	5.5	0.8		4.0	横ナデ		橙色。砂粒を含 まない。	糸切り			完形
52	"	"	"	"	"	6.7	1.0		4.5	横ナデ		淡茶色。赤色風 化粒砂を含む。	糸切り			完形
53	"	"	"	"	"	5.9	0.9		4.8	横ナデ		淡茶色。砂粒を ほとんど含まな い。	糸切り			
54	"	"	"	陶器	皿	12.3	4.3		5.2	露胎部幅の 狭いコテで 丁寧に削る (左→右)。	体部内面鉄釉・ 見込みは長石 釉を蛇の目釉 剥ぎ・外面体 部中位まで施 釉・下半露胎	暗灰色・精緻・ アルミナ砂使用	見込みに釉剥ぎを 施し、アルミナ砂 を塗布する。高台 は高く、畳付を内 外から斜めに削る。 わずかに宛幅を残 す。口縁部肥厚。	能茶山	18世紀 末～ 19世紀	ほぼ完形
55	"	"	"	"	甕	11.4					(内・外)鉄釉	灰黄色・長石や 褐色粒子含む・ 裂孔が多く存在	玉縁口縁を呈す。 口縁部にアルミナ 砂使用	関西系		
56	"	72	SK49	陶胎 染付	碗 広東形	9.6	2.3		6.0	(内)口縁 部に横ナデ による2条の 凹線	(内)スタンプ 紋・五弁花 (外)一對の菊 紋	灰白色・剝離面 は荒い・裂孔が 多く存在	口縁部内面見込み 外縁に一条ずつ淡 い呉須による圈線。 高台外面にも同様 の圈線1条。畳付 丸くおさめる。	瀬戸・ 美濃	18世紀 末～ 19世紀	ほぼ完形
57	"	"	SK51	磁器 染付	碗 腰張形	8.2	5.4		3.6	(内)見込みつ ばみ紋様 (外)花紋		白色精緻	内面口縁部に2条、 見込みに1条の圈 線。外底に「サ」 の銘あり。	能茶山	19世紀	完形 煎茶碗
58	"	57	"	陶器	蓋	5.1	2.1	つま み径 1.5	3.8	(外)鉄釉・露 胎部は海老茶 色に発色		灰黒色精緻・長 石と橙色の粒子 を含む	口縁部下垂。落ち 込んだ中央部に径 1.5cm大のやや扁 平なつまみあり。 糸切り。	能茶山	19世紀	ほぼ完形
59	"	57・ 73	"	"	紅猪口 浅丸形	5.2	3.3		2.7	体部屈曲部 下はヨコ方 向に削り (左→右)	内面と外面上 部灰釉	灰色・白色の長 石粒が多い・裂 孔が存在し、剝 離面は荒い	高台は断面逆三角 形で太く、しっか りしている。	関西系		内面に紅付着 完形
60	"	"	"	"	水注		3.7		3.8	灰釉・天井部 外面花文と本 山の陽刻あり		灰白色堅緻・裂 孔が存在	やや細かな貫入が 見られる。	関西系		ほぼ完形
61	"	57	"	磁器 染付	小皿	9.0	2.1		4.7	型打ち成形	(内)きじと松	白色・粗い・透 明感を持つ	細い貫入あり。畳 付釉剥ぎ。砂付着。	能茶山	19世紀	輪花皿
62	"	"	"	"	"	9.0	2.3		4.8	型打ち成形	(内)きじと松	白色・剝離面は やや荒い・円孔 が存在	細い貫入あり。畳 付釉剥ぎ。	能茶山	19世紀	輪花皿
63	"	"	"	陶器	受付 灯明皿	10.6	2.2		3.9		(内)全体に半 透明の灰釉 (外)露胎	白色・透明感あ り	内面の堤はやや内 傾して立ち上がり、 一ヶ所に幅1.8cm でU字状に挟りあ り。底部は細くや や上底気味。	関西系		外面煤付着
64	"	"	"	"	瓶				6.5		外底と内面の 一部以外鉄釉	暗灰色精緻・裂 孔が存在	外底脇を斜めに削 り、外底も右→左 に削る。僅かに宛 幅を残す。	関西系	19世紀	

Ⅲ 区出土遺物観察表

遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種／ 器形	法 量(cm)			重量 (g)	特 徴	産 地	年 代	備 考			
						全長	全幅	全厚								
65	22		SK51	石製品	砥石	12.3	6.2	3.7	415	4面使用			砂岩			
66	〃		〃	〃	〃	9.6	4.8	1.9	110	2面使用			花崗岩・大きな裂孔が多く存在			
67	〃		〃	〃	砥石？	12.9	4.8	4.4	645	両側面にノミ痕あり。砥石として2面使用された可能性あり。						
68	23		〃	〃	砥石	19.1	5.0	3.6	605	2面使用			花崗岩・大きな裂孔が多く存在			
69	〃		〃	〃	〃	6.9	4.8	1.9	95	2面使用			花崗岩・大きな裂孔が多く存在			
70	〃		〃	〃	〃	7.6	6.0	4.0	245	風化が激しい			石英粗面岩			
71	〃		〃	〃	〃	6.0	4.8	2.5	106	3面使用			花崗岩・大きな裂孔が多く存在			
72	〃	64	〃	金属製品	包丁	21.1	2.4	0.6	55.7	茎部に柄の木目が残る。						
73	〃	〃	〃	金属製品	コテ状の鉄器	21.2	4.7		160							
遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種／ 器形	法 量(cm)				成形技法／ 調整 内面／外面	釉薬・絵付 内面／外面	胎 土	特 徴	産 地	年 代	備 考
						口径	器高	胴径	底径							
74	25	57	SE2	磁器染付	徳利				3.6		コバルト釉による染付・内面と疊付露胎	灰白色精緻・やや透明感を持つ・剥離面は滑らか	高台外面圏線、疊付けは露胎部の一部が褐色で砂付着。	肥前	18世紀～幕末	
75	〃	〃	SE5	白磁	小碗				3.0			白色精緻・やや透明感を持つ・剥離面やや滑らか	疊付露胎土は部分的似褐色を帯びる。	肥前系		
76	〃	〃	SE2	磁器染付	碗				4.5		釉気泡多い・紋様不明瞭・高台脇に釉溜り	白色・やや透明感を持つ・剥離面は滑らか	高台を鋭く削り出す。高台に2条の圏線。	瀬戸・美濃	19世紀	
77	〃	〃	SE5	〃	〃	10.4					(外)松葉紋？	灰白色・やや透明感を持つ・剥離面はやや荒い	焼成不良が釉はガラス状を呈さず呉須も黒い。口縁部内面2条・見込み1条の圏線	肥前		
78	〃	〃	〃	土師質	小皿	6.4	0.8		4.8	横ナデ		橙色。精選された胎土。	糸切り			
79	〃	〃	〃	磁器染付	小碗丸形	8.2	3.8		3.0		(外)紋様不明淡呉須	白色・やや透明感を持つ・剥離面はやや荒い	高台脇、高台外面に圏線。	肥前		
80	〃	〃	SE4	〃	碗広東形				5.6		外面・見込み紋様不明	白色・やや透明感を持つ・剥離面はやや荒い	高台外面・見込みに圏線。	能茶山		
81	〃	〃	SE5	〃	碗				3.6		見込み中央部に火炎紋	白色・剥離面は滑らか	外底僅かに宛幅を残す。	肥前系	18世紀末～19世紀初	
82	〃	〃	〃	陶胎染付	碗広東形				5.8		見込み類五弁花(外)紋様不明	乳白色・剥離面は荒く、裂孔が存在	高台外面に細く薄い圏線。	瀬戸・美濃	19世紀	
83	〃	58	〃	〃	〃				5.6		見込み類五弁花・呉須はあせた藍色	乳白色・剥離面は荒く、裂孔が存在	見込み外縁に1条、高台付け根に1条、高台外面に1条の圏線。	瀬戸・美濃	19世紀	
84	〃	〃	〃	陶器	碗				4.8		灰釉	黄白色・剥離面はやや荒い・円裂孔が存在	高台はハの字状に張り出す。細かな貫入あり。	尾戸	18世紀	
85	〃	〃	SE3	〃	火入れ筒形				4.9	形打ち成形	(内)露胎(外)腰折れ部より上部灰釉	赤褐色・精緻・剥離面はやや荒く・円、裂孔が存在	外面露胎部削り痕明瞭(左→右)。貫入が見られる。	能茶山		
86	〃	〃	SE5	磁器染付	碗広東形				6.2		見込みに「寿」の文字 外面紋様不明	白色・剥離面はやや荒い	見込み外縁に1条の圏線あり。	能茶山	19世紀	
87	〃	〃	〃	〃	角鉢	15.0					(内)花・宝紋(外)区画紋様	白色・透明感を持つ・剥離面はやや滑らか	口縁部で内側に屈曲し、内湾気味になる。内・外面区画を設け、呉須の深い紋様あり。	肥前系	18世紀	

Ⅲ 区 出 土 遺 物 観 察 表

遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種／ 器形	法 量(cm)				成形技法／ 調整 内面／外面	釉薬・絵付 内面／外面	胎 土	特 徴	産 地	年 代	備 考
						口径	器高	胴径	底径							
88	25	58	SE4	磁器 染付	碗 広東形				6.1		(内)岩・紋 (外)草花紋	白色・やや透明 感を持つ・剝離 面はやや荒い・ 円、裂孔が存在	見込み外縁に1条 の界線、高台付け 根に2条の圈線。 内底に足付ハマの 跡。外底に「サ」 の銘あり。	能茶山	19世紀	
89	〃	〃	SE5	〃	仏飯器				4.0		(外)淡い呉須 による圈線・ 脚露胎	白色・やや透明 感あり・円孔が 存在	内面釉に気泡が多 い。僅かに上げ底状 で、段状に削り出す。	肥前	18世紀	
90	〃	〃	SE4	〃	段重	12.2	5.6		8.4		口縁部と畳付 け露胎(外)褥 紋他	白色・やや透明 感を持つ・剝離 面はやや滑らか・ 円裂孔が存在	断面三角形の高台。 高台脇2本の圈線。 呉須は明るい発色。	肥前系	19世紀 ～幕末	
91	〃	〃	SE5	陶器	碗	12.7					灰釉	灰白色・剝離面 はやや滑らか・ 円裂孔が存在	口縁部端部を内湾 して納める。外面 に細い沈線が4条 走る。貫入あり。	尾戸系		
92	〃	〃	〃	磁器 染付	〃				4.2		(外)あやめが 中心紋様	白色・剝離面は 滑らか	内外面上部に2本の 圈線。やや淡い呉 須。見込みは二本の 圈線内に紋様あり。	肥前系		
93	〃	〃	〃	陶器	〃				4.0		(内)打ち刷毛 目 (外)櫛刷毛目	褐灰色・剝離面 はやや滑らか・ 円、裂孔が存在	外面の櫛刷毛目は 高台付近が小さく、 上部はやや大きい 刷毛目で、境目が 重なる。	肥前	18世紀 前半	三島唐津
94	〃	〃	〃	〃	火入れ 半筒形	11.0				内面横ナデ	口縁部以外露 胎(外)黒泥後 湿布し、全面 に飛皷	橙色・精緻だが 砂粒含む・剝離 面はやや荒い・ 裂孔が存在	口縁部が肥厚。			
95	〃	〃	〃	陶器	碗	12.4				ロクロは成 形時に左回 転、調整時 に右回転。	灰釉	灰黄色・赤色粒・ 剝離面はやや荒 い・裂孔が存在	細かな貫入が見ら れる。	尾戸系		
96	〃	〃	SE5	〃	皿	14.8				口縁部が僅 かに屈曲し、 強い横ナデに より内・外面 僅かに凹状。	灰釉	乳白色・剝離面 はやや荒い・円、 裂孔が存在	貫入あり	瀬戸・ 美濃系	19世紀	
97	〃	〃	〃	〃	折縁 鉢	13.8					灰釉	灰白色・剝離面 はやや荒い・裂 孔が存在	内面中位に鈍い沈 線。貫入あり			
98	26	〃	〃	〃	鉢				10.0		内面白色土化 粧がけ後櫛刷 毛目	灰褐色・赤色粒・ 剝離面は荒い・ 円、裂孔が存在	太くどっしりした 高台を有し、外側 は段状をなす。	肥前	18世紀	
99	〃	〃	SE3	〃	〃				10.6		(内)白色土を 刷毛塗り・灰釉 (外)鉄釉	褐灰色・長石粒 多い・剝離面は やや荒い・円・ 裂孔が存在	太くどっしりとし た高台。	肥前系		
100	〃	〃	SE5	〃	皿				5.2		体部内、外面鉄 釉・見込み蛇の 目釉剥ぎし、白 色釉を塗布。	橙灰褐色・長石 粒を含む・剝離 面はやや荒い	高い高台	能茶山	19世紀	
101	〃	〃	〃	〃	鉢				10.6		外面は部分的 に灰釉・内面 は白色の刷毛 塗り。	灰褐色・剝離面 は荒い・円、裂 孔が存在	外面左→右の削り 痕を明瞭に留める。 底部内面に足付ハ マ跡が見られる。	肥前	19世紀	
102	〃	〃	SE3	〃	〃	24.0					裏灰釉で灰白 色に発色	黄白色・剝離面 はやや荒い・円 裂孔が存在	外面体部中位に段 あり。上半部にロ クロ目顕著。			
103	〃	〃	SE4	〃	槽鉢	36.0				横ナデ	露胎	にぶい赤褐色・ 剝離面はやや荒 い・円、裂孔が 存在	口縁部を拡張し、 内・外面2条の凹 線。外面の口縁下 部に沈線1条あり。	堺		
104	〃	〃	SE5	〃	〃	30.4	10.6		15.6			明赤褐色・石英、 花崗岩粒を多く 含む・剝離面は やや荒い・円孔 が存在	口縁部を拡張し、 内・外面2条の凹線。 内面使用痕による 摩耗が顕著。体部 外面左右に弱い削 りナデ。	堺		
遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種／ 器形	法 量(cm)			重 量 (g)	特 徴				産 地	年 代	備 考
						全長	全幅	全厚								
105	26	60	SE3	石製品	硯	9.2	7.7	2.1	217	長方形。よく使用されている。						石英粗面岩
106	〃	64	〃	金属 製品	釘	19.5			65.6	さびがひどく、断定できない。						
107	〃	〃	SE2	〃	〃	5.7	0.7		5.9	上部断面方形、体部は円形。						

Ⅲ 区出土遺物観察表

遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種/ 器形	法 量(cm)				成形技法/ 調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎 土	特 徴	産 地	年 代	備 考
						口径	器高	胴径	底径							
108	28	58	SD8	白磁	紅皿 菊花形	4.5	1.5		1.5	型押し成形	長石釉を内面 と外面上部に 施釉	白色・剝離面は やや滑らか	条線70本	肥前系	19世紀	
109	"	"	SD5	土師質	小皿	6.4	1.6		4.1	内・外面横 ナデ		灰白色・チャート、 長石の粗粒 砂を含む・剝離 面は荒い・裂孔 が存在				
110	"	"	SD1	"	"	5.6	0.9		3.7	内・外面横 ナデ		橙色・石英、赤 色風化礫を少量 含む・剝離面は やや荒い・円、 裂孔が存在				
111	"	"	SD8	陶器	"	8.5	1.9		4.5		高台と脇付近 以外全面緑釉	灰色・剝離面は やや荒い・円孔 が存在	高台は断面長方形、 全体に丁寧なつくり。 右→左のヘラ 削り。			
112	"	59	SD5	土師質	"	7.8	2.1		4.8	横ナデ		外面橙色・内面 にぶい橙色・石 英、長石粒を含む	糸切り			
113	"	"	SD7	陶器	灯明皿	10.8	2.3		4.2	外底、外面 体部下半丁 寧なヘラ削り(左→右)。 外面上半は ナデ。	灰釉	灰黄色・剝離面 はやや荒い・円 孔が存在	上げ底状の底部。 細い貫入あり。	信楽	18世紀 ～幕末	2次的な火を 受けている。
114	"	"	SD5	磁器 染付	皿	11.6					(内)墨弾きによる 流水紋 (外)唐草紋	白色・剝離面は やや荒い	貫入あり	肥前	17世紀 末～ 18世紀 前半	
115	"	"	SD7	陶器	瓶				4.1		鉛釉・外底露 胎	灰褐色・剝離面 はやや荒い・円、 裂孔が存在	体部内面丸ノミに よる沈線のはしる。 細かな貫入あり。			
116	"	"	SD4	陶胎 染付	碗	10.6					(外)木の葉紋?	乳白色・剝離面 は荒い・円孔が 多く存在	口縁部内面1条の 薄い堺線。大きい 貫入あり。	瀬戸・ 美濃	18世紀 末～ 19世紀 前半	
117	"	"	SD7	陶器	蓋	笠部 径 15.9					緑灰釉・口縁 部下面のみ露 胎	灰白色・剝離面 はやや荒い	天井部付近で僅かに 屈曲し、直線的 に下降。口縁部は 段状をなし、下面 は幅広い水平な面 をなす。			
118	"	"	SD6	磁器 染付	小碗	7.2					(外)雨降り紋	白色・やや透明 感を持つ・剝離 面は概ね滑らか	外面中位に1条の 圈線を認める。	肥前		
119	"	"	"	陶器	碗				4.8		灰釉	白色・透明感を持 つ・剝離面は荒 い・裂孔が存在	外底僅かに兜幅を 認める。貫入あり。	尾戸	18世紀	
120	"	"	SD7	磁器 染付	"	12.0					(外)雁	白色・剝離面は やや滑らか・円 孔が存在	内面口縁部に2条 の圈線。貫入あり。	能茶山	19世紀	
121	"	"	"	"	碗 広東形				6.2		畳付け以外前 面施釉	白色・透明感を持 つ・剝離面は やや滑らか・円 孔が存在	(外)高台に2条、 下体部に1条・見 込み外円に1条の 圈線。	能茶山	19世紀	
122	"	"	SD5	陶胎 染付	碗	11.5					(外)文様不明	灰白色・剝離面 はやや荒い・円 孔が存在	外面口縁部に2条 の圈線。貫入が見 られる。	肥前	17世紀 末～ 18世紀 前半	
123	"	"	SD7	陶器	"	12.4					灰釉	灰白色・剝離面 はやや荒い・円、 裂孔が存在	外面上半横ナデよ り弱い凹線のはし る。細い貫入あり。	尾戸	18世紀	
124	"	"	SD5	"	鉢	19.4					白色土の化粧が けけ櫛がきか 刷毛目・灰釉	灰褐色・花崗岩、 赤色風化礫など を含む。剝離面 は概ね荒い・円、 裂孔が存在	口縁部外面玉縁状 に肥厚。	肥前	18世紀	
125	"	"	SD8	瓦質 土器	火鉢	18.4				(内)条痕状の荒い横 ナデ (外)丁寧なナデ		褐灰色・石英粒、 長石細流細粒砂 を含む・剝離面 は荒い・円、裂 孔が存在				外面煤ける
126	"	"	SD6	陶器	鐵手 碗	4.3				口縁部と内面は鉄 釉 (外)体部は灰釉	(外)鐵手	黄白色・剝離面 はやや荒い・円、 裂孔が存在		瀬戸・ 美濃	18世紀 末～ 19世紀	

Ⅲ 区 出 土 遺 物 観 察 表

遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種／ 器形	法 量(cm)			重量 (g)	特 徴	産 地	年 代	備 考			
						全長	全幅	全厚								
127	28	64	SD8	金属 製品	煙管	4.8	1.1	0.8	4.79	吸い口の一部でラウが挿入されている。			青銅製			
遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種／ 器形	法 量(cm)				成形技法／ 調整 内面／外面	釉薬・絵付 内面／外面	胎 土	特 徴	産 地	年 代	備 考
						口径	器高	胴径	底径							
128	28	59	SD5	陶器	甕				12.1	外面横ハケ調整	(外)鉄釉	灰赤色・砂粒が多い・剥離面はやや荒い・円、裂孔が存在	外面叩き目内面格子目状の圧痕あり。			
129	"	"	"	"	播鉢	25.8						灰色・石英、長石などの粗粒砂を多く含む・剥離面はやや荒い・裂孔が存在	口縁部外面2条の凹線。内面には綾が生じる。口縁部内・外面と胴部外面は横ナデ。内面胴体は12本を単位とする条線。	関西系		
130	"	"	"	"	"	31.2						橙色・石英、長石などの粗粒砂を多く含む・剥離面はやや荒い・裂孔が存在	口縁部外面2条、内面1条の凹線。口縁部内・外面と胴部外面は横ナデ。内面胴部は11～12本を単位とする条線。	堺		
131	29	"	P6	"	碗 器形	10.6					灰釉	乳白色・剥離面はやや荒い・裂孔が存在	やや規模の大きい貫入が見られる。	尾戸	18世紀	
132	"	"	P1	土師質	小皿	7.4	1.5		4.2	(内・外)横ナデ		黄橙色・精選された胎土・石英、雲母、赤色風化礫などを少量含む・剥離面は裂孔が存在	外面稜線あり。口縁上部内湾気味に立ち上がる。			
133	"	"	包含層	"	"	6.2	0.7		4.6	口縁部横ナデ		橙色・精選された胎土・石英、雲母、赤色風化礫などを少量含む	糸切り			
遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種／ 器形	法 量(cm)			重量 (g)	特 徴	産 地	年 代	備 考			
						全長	全幅	全厚								
134	29	64	P7	金属 製品	小柄	8.0	1.5	0.3	8.5	菊花の彫刻			青銅製			
遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種／ 器形	法 量(cm)				成形技法／ 調整 内面／外面	釉薬・絵付 内面／外面	胎 土	特 徴	産 地	年 代	備 考
						口径	器高	胴径	底径							
135	29	59	包含層	白磁	紅皿 菊花形	4.8	1.6		1.4		内面と外面口縁部に施釉	白色・剥離面はやや荒い・裂孔が存在	気泡が随所に見られる。	肥前	19世紀	
136	"	"	"	陶器	碗	11.4					灰釉	灰黄褐色・剥離面は概ね滑らか・裂孔が存在	口縁部の一部に細い貫入あり。	肥前系	18世紀	
137	"	"	"	磁器 染付	碗 筒形	6.4					(外)菊花散らし紋	白色・やや透明感を持つ・剥離面は概ね滑らか	口縁部内面2本の圈線。	肥前	18世紀後半～19世紀前半	蕎麦猪口？
138	"	"	"	陶器	皿				9.8	外底左→右の削り	灰釉(内)摺り絵による菊花紋	灰白色・剥離面は荒い・円、裂孔が存在	見込み蛇の目状釉剥ぎ後、褐色土を塗布。貫入あり。	瀬戸・美濃	18世紀前半	
遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種／ 器形	法 量(cm)			重量 (g)	特 徴	産 地	年 代	備 考			
						全長	全幅	全厚								
139	29	60	包含層	石製品	砥石	16.9	6.5	6.8	1026	1面使用			砂岩			
140	"	"	表採	"	硯	11.6	6.0	1.2	157.5	小形。使用面に対して逆の短軸に並行する条線が多くはしる。			粘板岩			

2 IV区の調査成果

(1) 調査区の概要と基本層準 (Fig. 30・31)

IV区は、調査区全体の中のほぼ中央部にあり、面積は3,157㎡を測るが、用水路と畦道によって東西に分かれている。東側を東区、西側を西区とする。標高は両区共に7.6m前後を測る。東区は平成6年度、西区は平成7年度に調査を実施した。IV区からは弥生時代の遺構2基、近世の掘立柱建物・土坑・溝などを検出したが、掘立柱建物すべて東区に集中しており、溝の多くは西区に偏在している。基本層準は以下の通りである。

I層：耕作土（現水田土壌）

II層：茶黄色粘質土で最大層厚10cmを測るが、東に向かって層厚を減じており、調査区西端より18mの地点で消滅している。

III層：灰茶色粘質土でII層の下に部分的に堆積している。最大層厚5cmを測る。

IV層：黒褐色粘質土でII層及びIII層の下に堆積している。最大層厚15cmを測る。

V層：茶褐色粘質土でIV層の下に堆積しており、上面においてはかなり起伏が見られる。地山層を形成しており、各時代の遺構検出面となっている。

(2) 弥生時代の遺構と遺物

① 土 坑

SK18 (Fig. 32)

西区の北東端にある。長軸3m、深さ20cmを測る楕円形の土坑で、全体の3分の1程が調査区外に出ている。埋土はI層：黒褐色粘質土、II層：灰茶色粘質土で、南端の一部が現代のピットに切られ攪乱を受けている。床面はわずかに起伏が見られる舟底状を呈し、壁は緩く立ち上がる。遺物はII層上面より、弥生時代後期前半の鉢(1)と壺(2)が出土している。弥生時代後期前半の土坑墓である可能性がある。

SX 1 (Fig. 33・34)

東区の西南端にある。一辺5.2m、幅1.2m、深さ10cm前後を測る溝状の遺構が、北と東を逆L字状に巡り、西側にも確認延長3.5m、幅60～120cm、深さ10cmの溝状遺構が位置している。南側は調査区外へ出ているために明らかになし得ないが、同様に巡っている可能性がある。埋土は黒褐色粘質土の単純一層で、東側床面には小ピット状の凹が見られる。床面はほぼ水平な面をなしているが、壁の立ち上がりはしっかりしているところと極緩やかな傾斜をなすところがある。遺物は西側溝の北部床面直上より、弥生時代後期前半の細頸壺(3)が出土している。図示したように一つの地点から細片の状態で出土したが、底部を除くほぼ全体を復元することができた。底部穿孔の供献用の壺の可能性がある。したがってSX 1は、遺構の形状、遺物から方形周溝墓の可能性が強い。マウンドや主体部は削平を受けたものであろう。

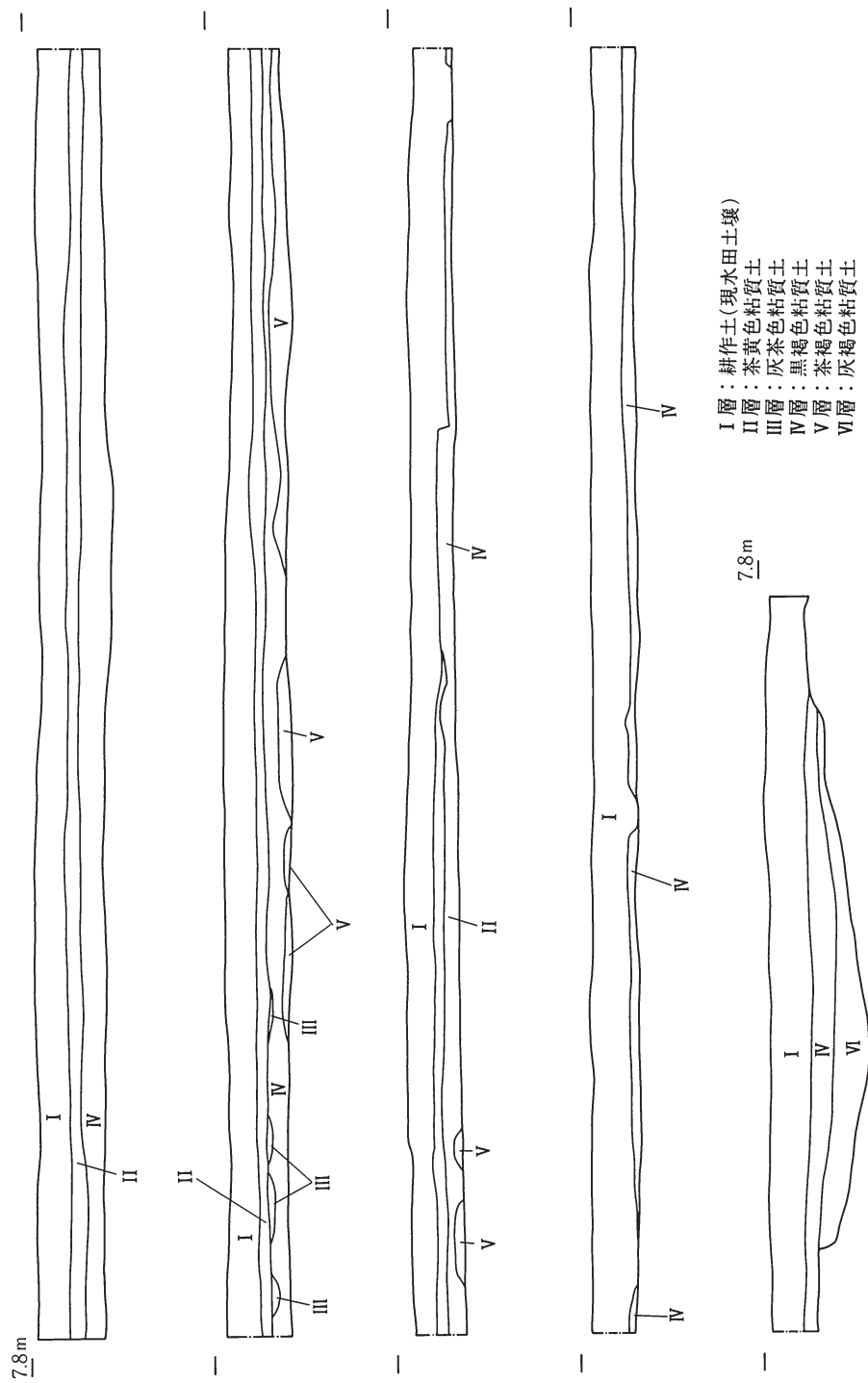
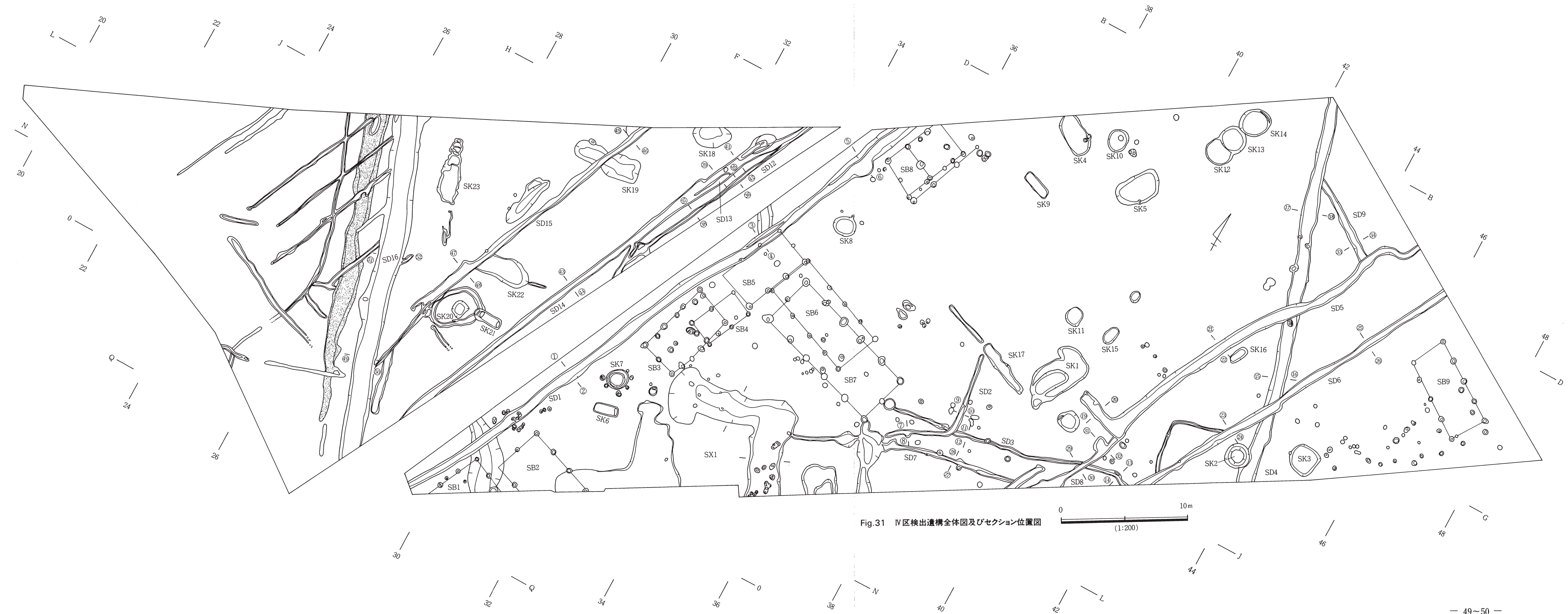


Fig.30 IV区北壁基本層準



(3) 近世の遺構と遺物

① 掘立柱建物

SB 1 (Fig. 35)

東区の西南端にある。大部分が調査区外に出ており、棟方向や規模については明らかになし得ない。柱間距離は1.6～2.0mを測り、柱穴径は30～40cm、深さは20～40cmである。

SB 2 (Fig. 36)

東区の南西端にあり、棟方向がSB 1 と平行する梁間 2 間 (4 m) ・桁行 3 間 (6 m) 以上の東西棟で、棟方向はN-69°-Wである。柱間距離は1.8～2 m前後、柱穴は直径30～50cm前後、深さは30～60cmを測る。埋土は総じて濃茶色粘質土で、土師器細片が出土している。

SB 3 (Fig. 36)

東区の西端にあり、梁間 2 間 (3.2m) ・桁行 3 間 (6 m) の南北棟で、棟方向はN-17°-Eである。SB 4 と切り合っているが先後関係は不明である。柱間距離は梁間で1.8m前後、桁行で1.8～3.0m前後、柱穴は直径30～60cm前後、深さは20～40cmを測る。埋土は総じて濃茶色粘質土で遺物は全く認められなかった。

SB 4 (Fig. 37)

東区の西端にあり、梁間 1 間 (2.2m) ・桁行 2 間 (3.8m) の南北棟で、棟方向はN-25°-Eである。柱間距離は梁間で2.2m前後、桁行で1.6～2.2m、柱穴の直径は30～40cm、深さは20～40

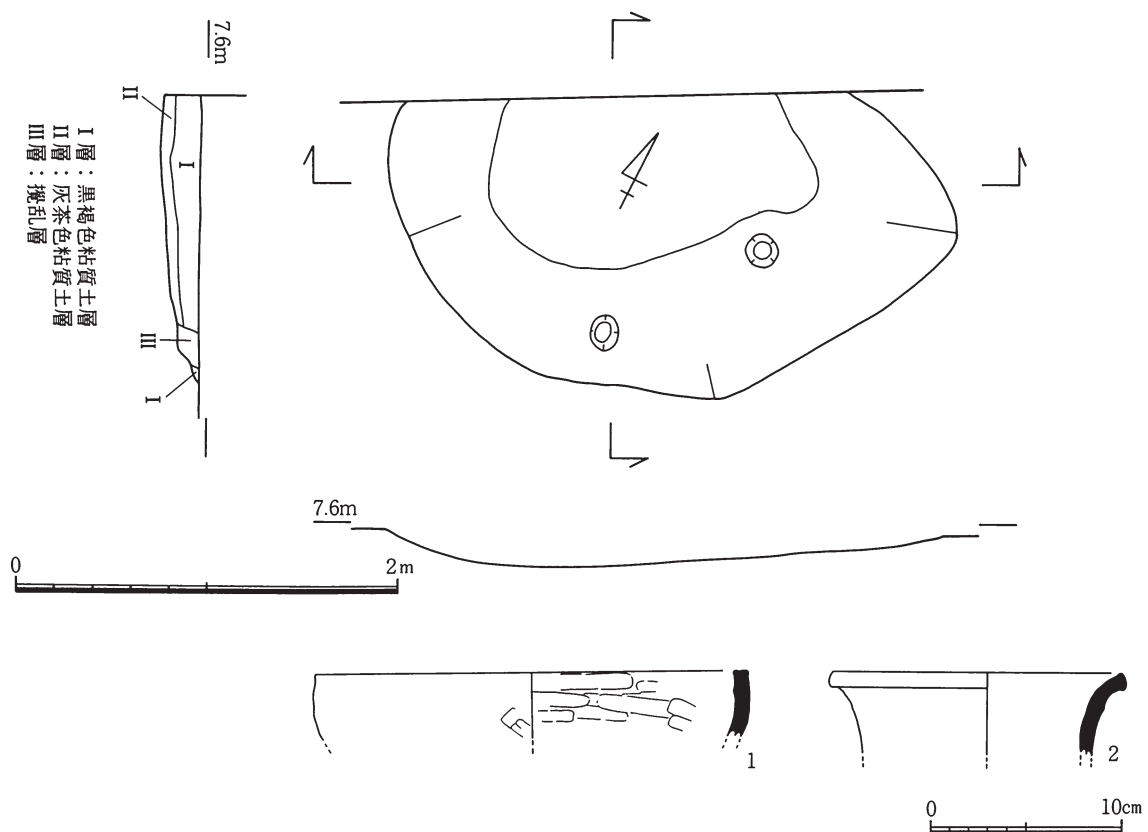


Fig.32 SK18平面図・エレベーション図・セクション図及び出土遺物実測図

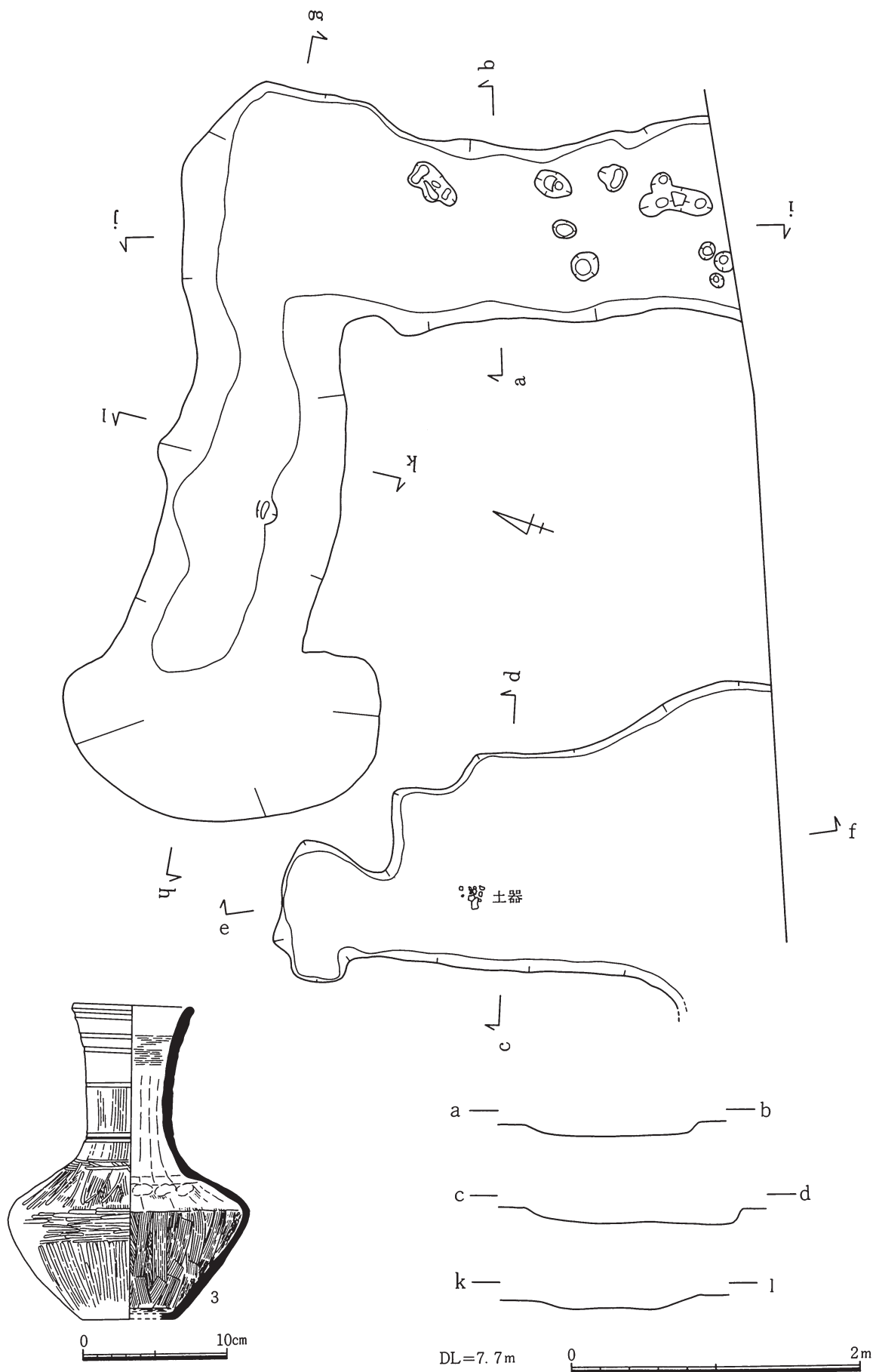


Fig33 SX1平面図・エレベーション図及び出土遺物実測図

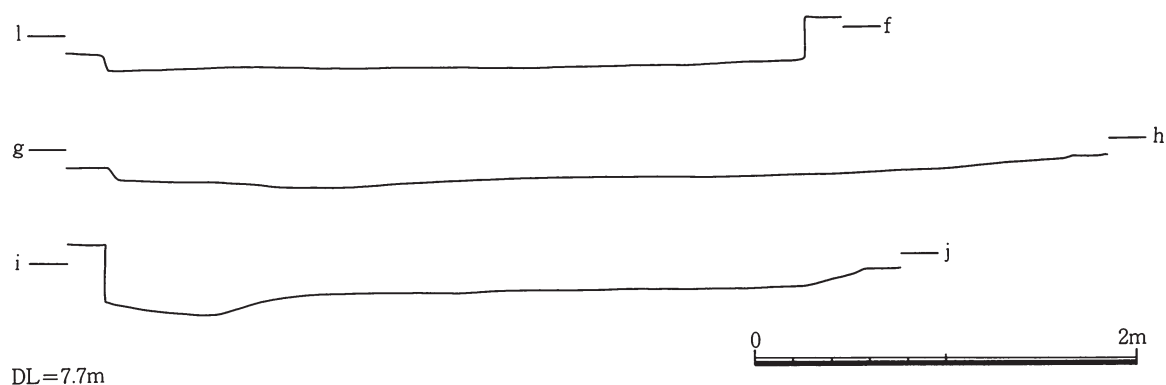


Fig.34 SX1エレベーション図

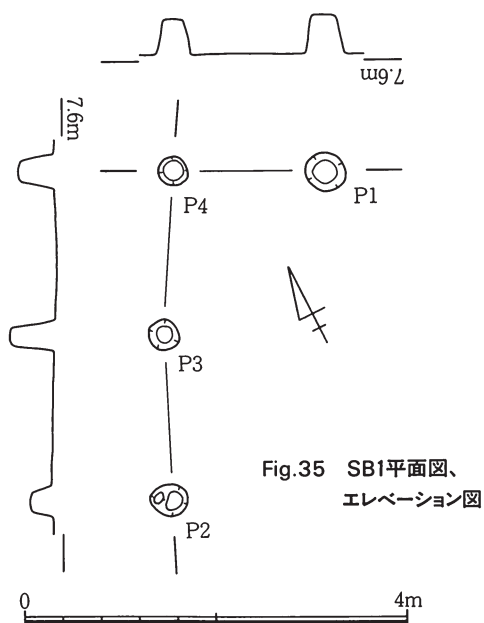
cmを測る。埋土は総じて濃茶色粘質土で、遺物は全く認められなかった。

SB 5 (Fig. 37)

東区の西端にあり、梁間1間(3.2m)・桁行3間(5.6m)の南北棟で、棟方向はN-25°-Eである。南端でSB 4に接し、東側ではSB 6と一部重複しており、西はSD 1に切られている。SB 4、SB 6との先後関係は不明である。柱間距離は梁間で3.2m、桁行で1.8m、柱穴の直径は30~60cm、深さは30~40cmを測る。P 4からは直径15cmの柱根跡を検出することができた。埋土は総じて濃茶色粘質土で、遺物は全く認められなかった。

SB 6 (Fig. 37)

梁間1間(3.8m)・桁行4間(8.2m)の東西棟で、棟方向はN-69°-Wである。SB 7と大きく重複しているが先後関係は不明である。柱間距離は梁間で3.8m、桁行は南北共に西端の柱間が2.6mと広く、他の柱間は1.8m前後である。柱穴の直径は総じて40cm前後を測り、深さは35~60cmである。SB 6は他に比べて柱根跡の残りがよく、15~20cmの柱根跡を6個の柱穴において検出することができた。埋土は総じて濃茶色粘質土で、遺物は全く認められなかった。



SB 7 (Fig. 38)

梁間2間(4.2m)・桁行5間(10.8m)の東西棟で、掘立柱建物の中で最大の規模を有している。棟方向はN-72°-Wである。柱間距離は梁間で2~2.2m、桁行で2m前後、柱穴の直径は20~40cmを測るが、平面形が楕円形や不整形を呈するものが多く見られる。柱の抜き取りを示すものであろうか。柱穴の深さは40~60cmで、P 4・6・7・8・11・13において径20~25cmの柱根跡を検出することができた。また梁間の間柱(P 2・9)は、他の側柱に比べて小さかったことが窺えるが、SB 7の構造を考える上で注意しなければ

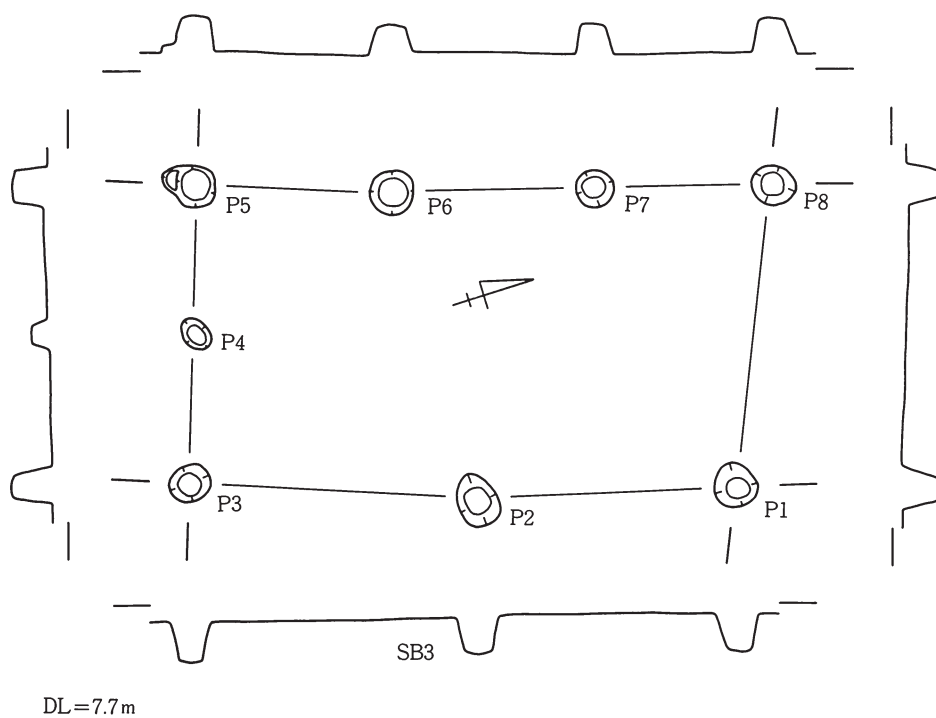
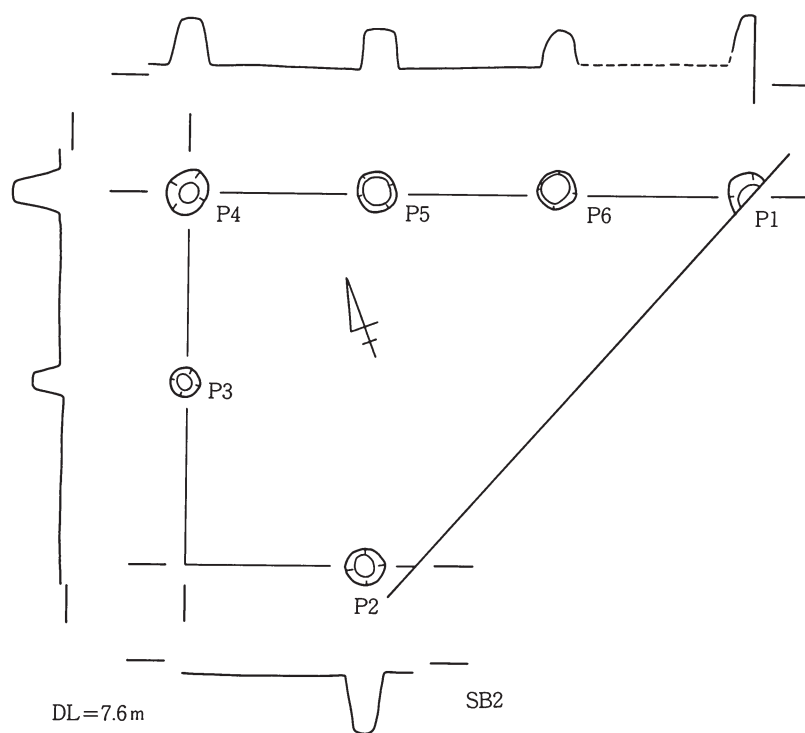


Fig.36 SB2.3平面図・エレベーション図



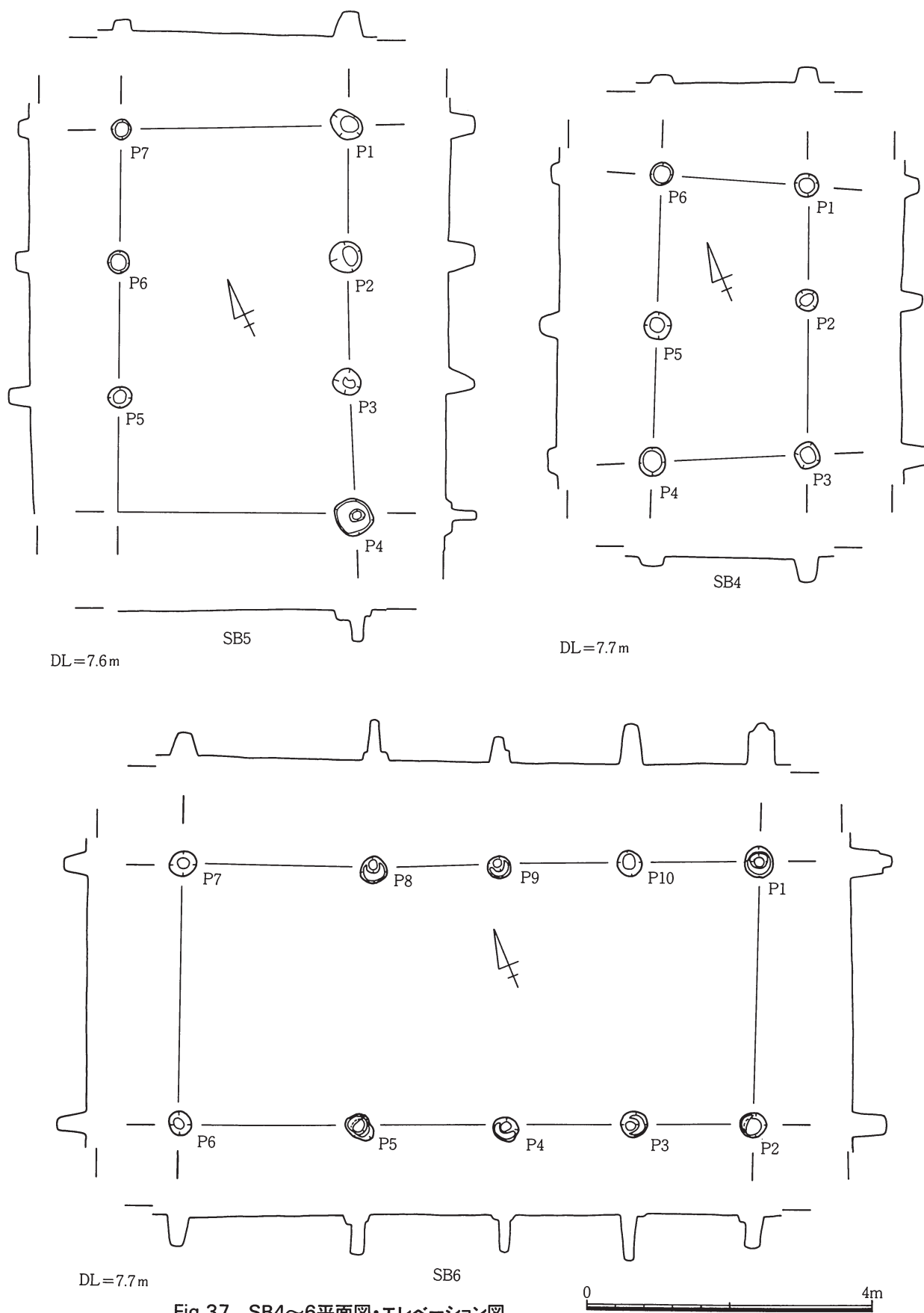


Fig.37 SB4～6平面図・エレベーション図

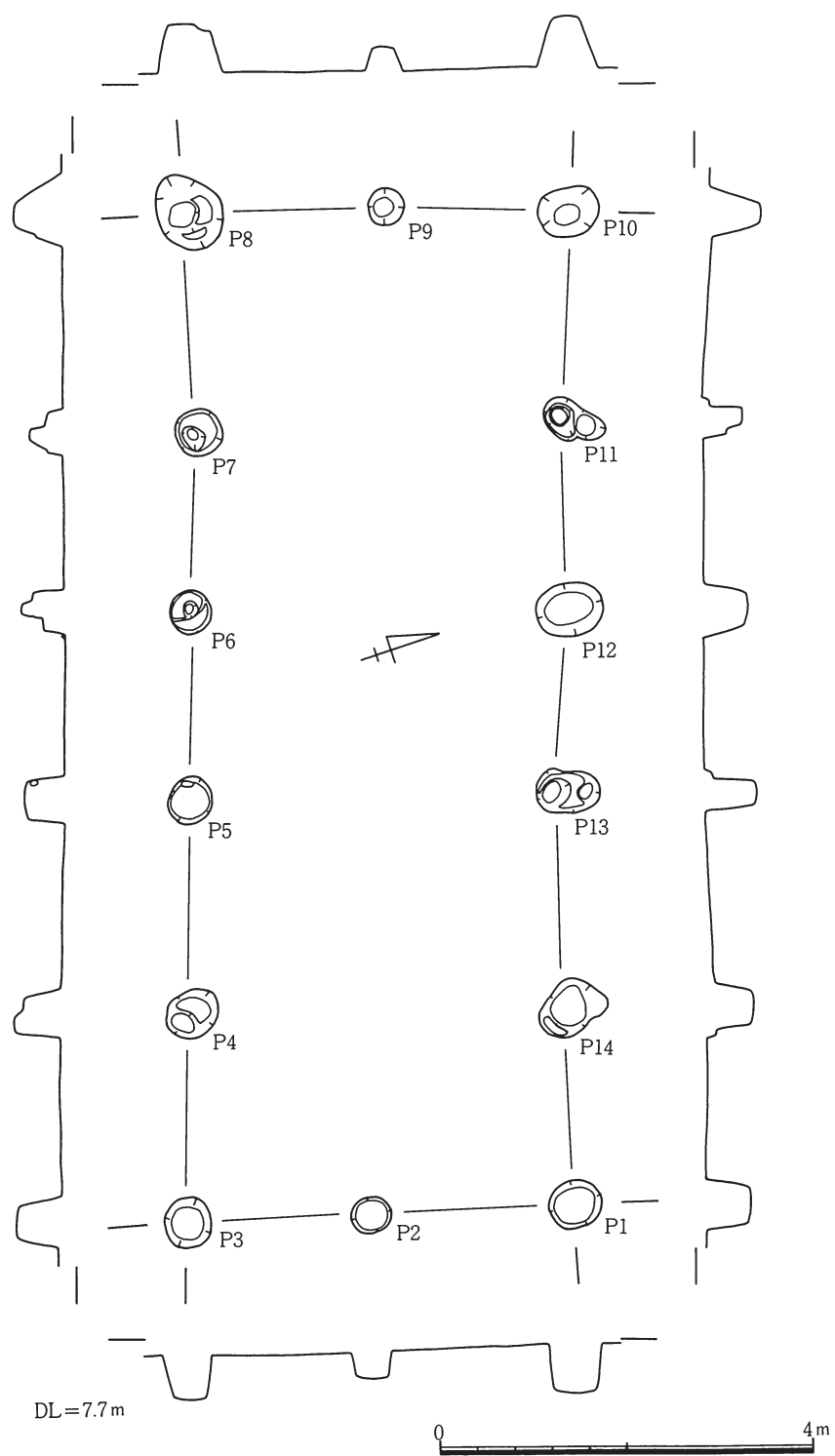


Fig.38 SB7平面図・エレベーション図

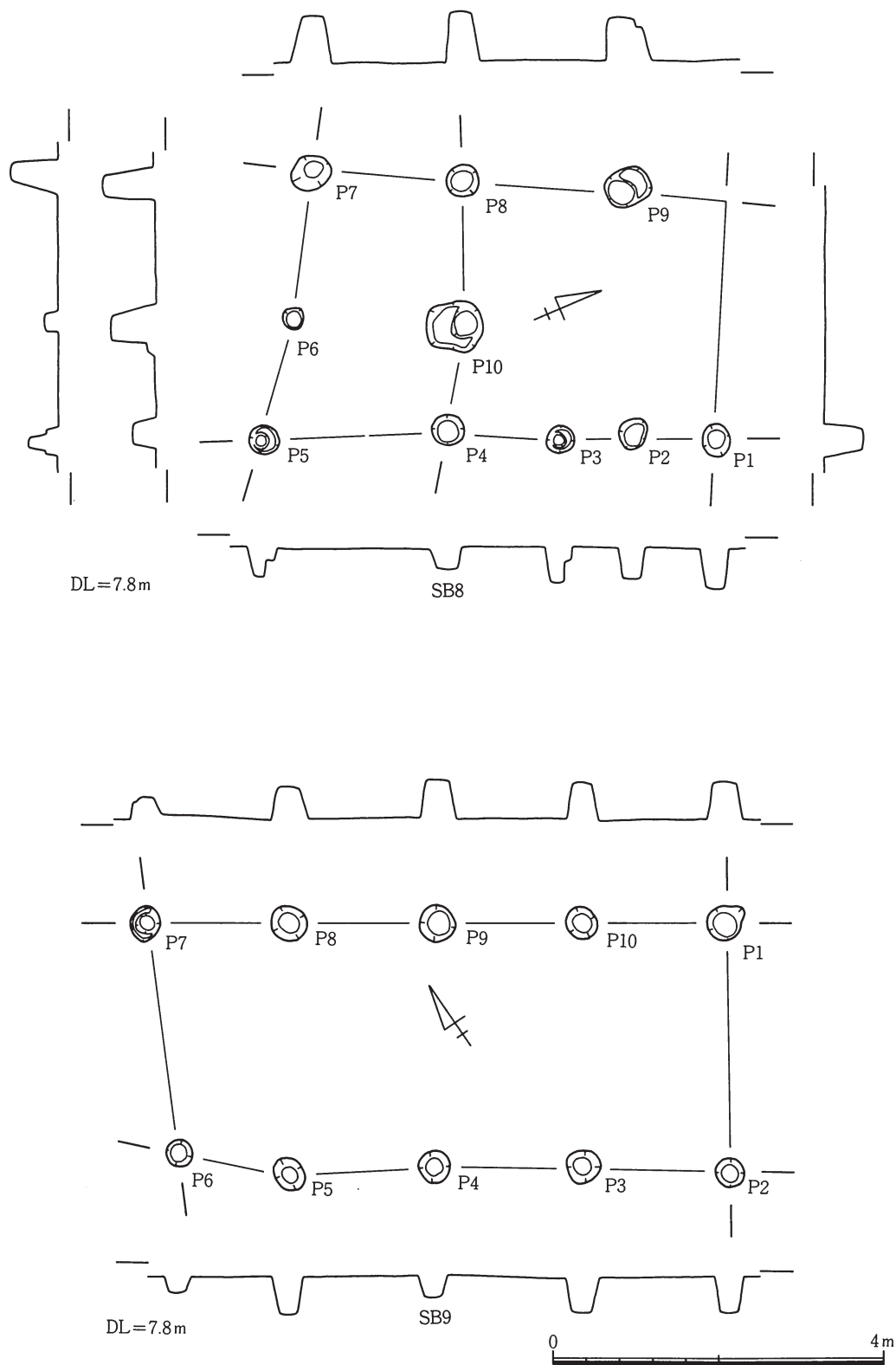


Fig.39 SB8.9平面図・エレベーション図

ばならない事項である。埋土は総じて濃茶色粘質土で、遺物は全く認められなかった。

SB 8 (Fig. 39)

東区の西北にあり、梁間 2 間 (3.4m) ・桁行 4 ～ 3 間 (5 ～ 5.6m) の南北棟で、棟方向は N - 22° - E である。平面形が整然としないが掘立柱建物として捉えた。柱穴間距離は 1 ～ 2 m とかなりばらつきがある。柱穴掘り形も直径 15 ～ 40cm とさまざまである。深さは 25 ～ 40cm で、P 3 ・ 5 からは径 20cm の柱根跡を検出することができた。P 10 は間仕切り柱と考えられる。埋土は総じて濃茶色粘質土で、遺物は全く認められなかった。

SB 9 (Fig. 39)

東区の東北端にあり、梁間 1 間 (3 m) ・桁行 4 間 (6.6 ～ 7 m) の南北棟で、棟方向は N - 55° - W である。柱間距離は梁間が 2.8 ～ 3 m、桁行が 1.4 ～ 1.8m、柱穴の直径は 30 ～ 40cm、深さは 20 ～ 50cm を測る。埋土は総じて濃茶色粘質土で、遺物は全く認められなかった。

② 土坑

SK 1 (Fig. 40)

東区の中央部にあり、長軸 5 m、短軸 2.6m の不整形の土坑である。遺構は段状に掘られており、南半分の中央部が深く、周辺はテラス状をなしている。深さは中央部で 40cm、テラス部で 20cm を測る。埋土は I 層：濃茶色粘質土、II 層：I 層に黄色粘土の小ブロックが含まれている。遺物は全く認められなかった。

SK 2 (Fig. 41)

東区の東部にあり、直径 2 m の円形プランを有する土坑で SD 4 を切っている。断面は台形を呈し、深さ 60cm、壁は直線的に立ち上がっている。床面は縁辺を幅 25cm、深さ 5 cm の溝が環状に回っている。埋土は濃茶色粘質土で、埋土中より京焼風陶器皿 (4) と尾戸陶器碗 (5 ・ 6) が出土している。

SK 3 (Fig. 42)

SK 2 の東にあり、一辺 2.2m 前後を測る隅丸方形のプランを有する土坑である。西壁は小ピットに切られている。深さは 30cm、床面は水平な面をなしている。埋土は濃茶色粘質土で、遺物は全く認められなかった。

SK 4 (Fig. 42)

東区の西北にあり、一部が調査区外に出ている。長軸 3.3m、短軸 1.8m の隅丸方形のプランを有する土坑である。深さは 15cm を測り、床面は水平な面をなす。北壁に 30 × 50cm、深さ 50cm のピットがあり、その南隣にも同規模のピットがあるが、SK 4 との関係については不明である。埋土は濃茶色粘質土で、埋土中より灰釉陶器の皿 (7) が 1 点出土している。

SK 5 (Fig. 43)

SK 4 の東にあり、長軸 3.6m、短軸 2.4m の不整楕円形を呈する土坑である。深さは 10cm 前後を測り、床面はほぼ水平な面をなしている。埋土は濃茶色粘質土で、床面より近世磁器の細片が 2 点出土している。

SK 6 (Fig. 43)

東区の西南部にある。長軸 1.9m、短軸 0.8m の長方形プランを呈する土坑で、深さは 40cm を測る。

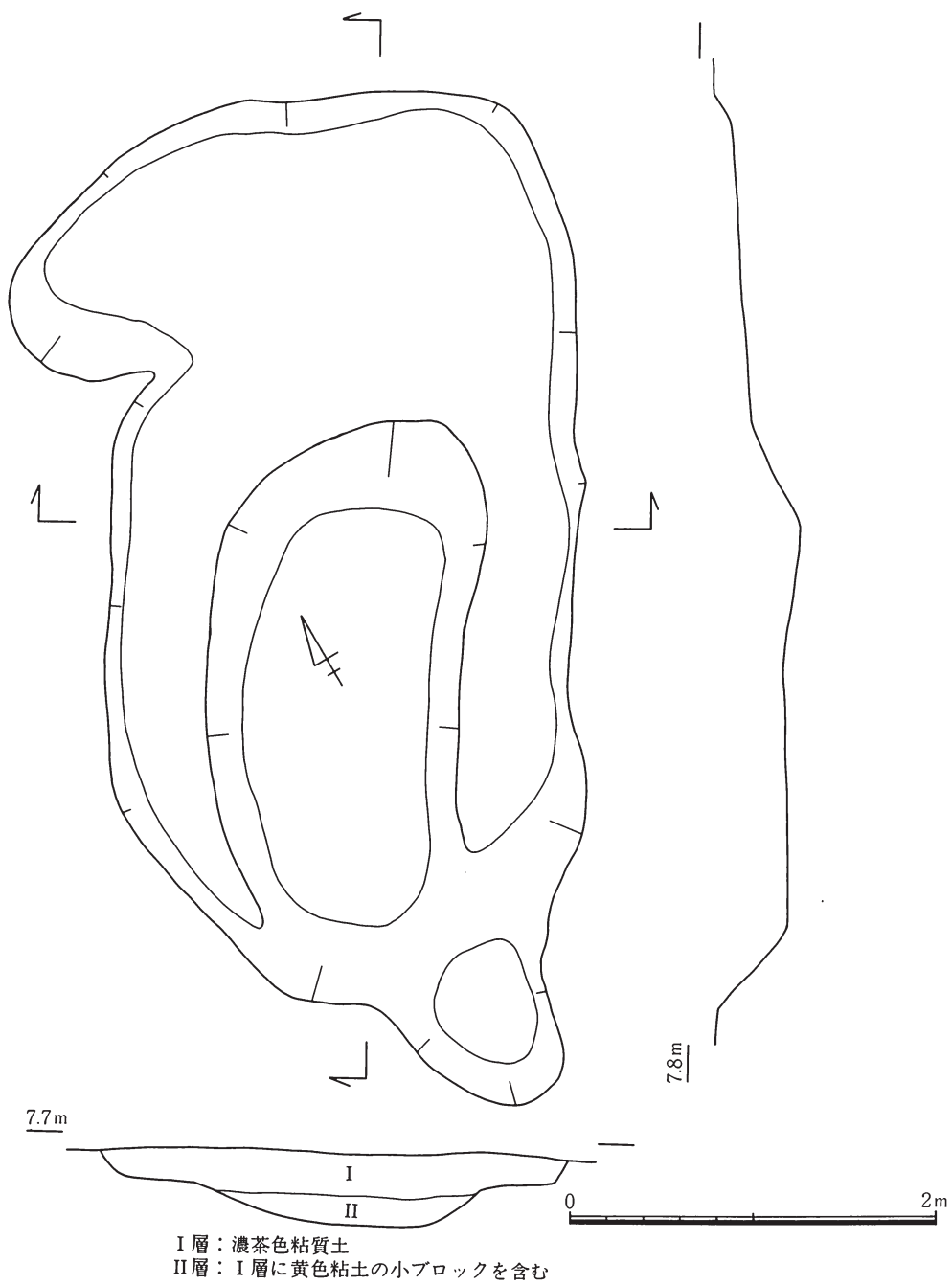


Fig.40 SK1平面図・エレベーション図及びセクション図

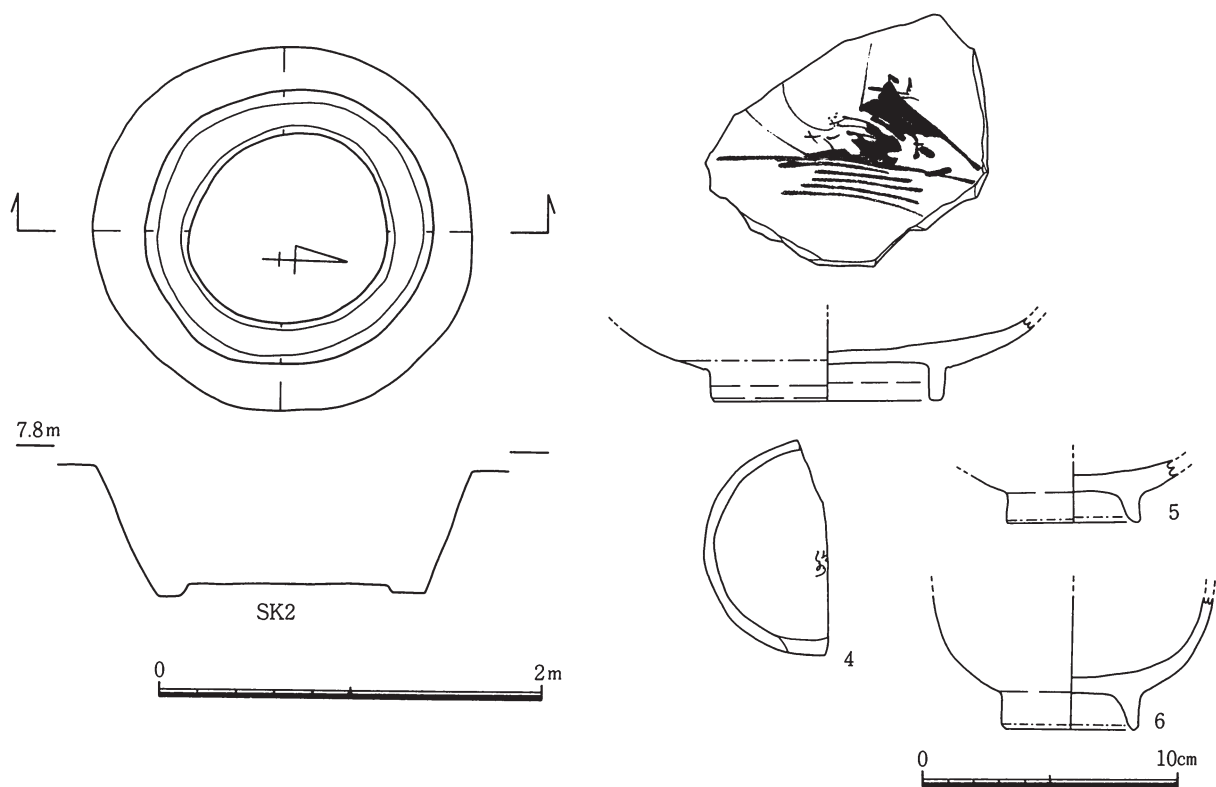


Fig.41 SK2平面図・エレベーション図及び出土遺物実測図

壁は垂直に立ち上がり床面は水平な面をなすが、床東端は5cm前後の浅い落ち込みが認められる。木棺墓と考えられる。埋土は濃茶色粘質土で、遺物は全く認められなかった。

SK 7 (Fig. 43)

SK 6の北隣にある。直径1.8m前後を測るやや不整な円形プランを呈し、深さは30cm前後を測る。床面は水平であるが、幅10cm、深さ数cmの小溝が環状に回っている。SK 2との関連が考えられる。埋土は、I層：暗灰色粘質土、II層：茶褐色粘質土、III層：暗灰色粘質土に茶褐色粘質土が混ざっており、遺物は全く認められない。

SK 8 (Fig. 44)

東区の西部にあり、長軸1.8m、短軸1.6mの楕円形のプランを呈し、深さは40cmを測る。断面台形で壁は直線的に立ち上がり、床面はほぼ水平な面をなす。埋土は灰褐色粘質土に黄色シルトの小ブロックが混ざったもので、遺物は認められない。

SK 9 (Fig. 44)

東区の西北にあり、長軸2.4m、短軸0.8mの長方形のプランを呈する土坑で、深さは5cm前後を測る。床面は水平な面をなし、埋土は濃茶色粘質土で、遺物は認められない。木棺墓と考えられる。

SK10 (Fig. 44)

東区の北部にあり、長軸1.8m、短軸1.56mの楕円形のプランを呈する土坑で、深さは30cmを測る。断面は台形で壁は直線的に立ち上がる。床面は舟底状をなすが、北寄りに直径40cm、深さ20cmのピットがある。埋土は濃茶色シルト～粘質土で、遺物は認められない。

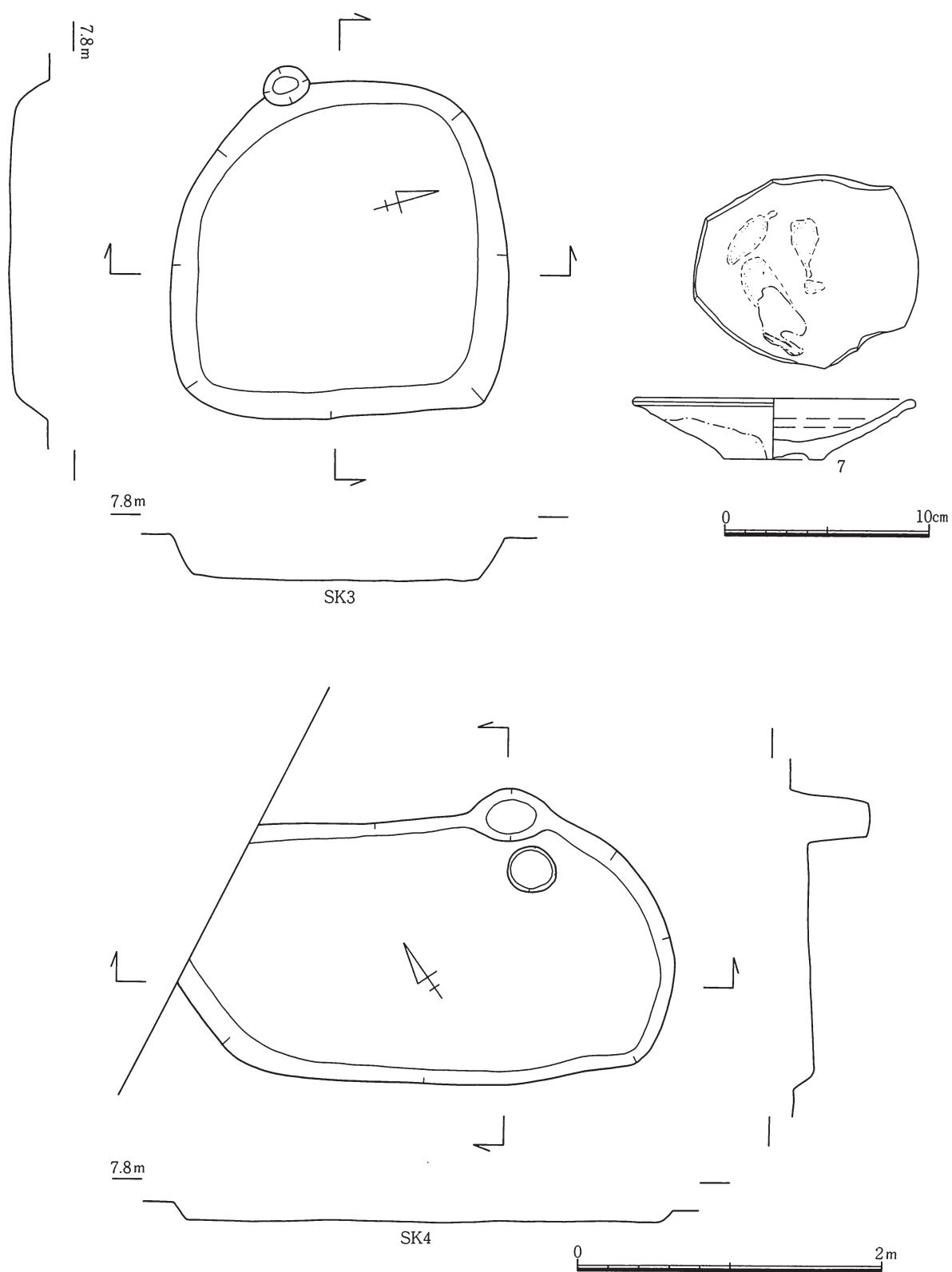


Fig.42 SK3.4平面図・エレベーション図及びSK4出土遺物実測図

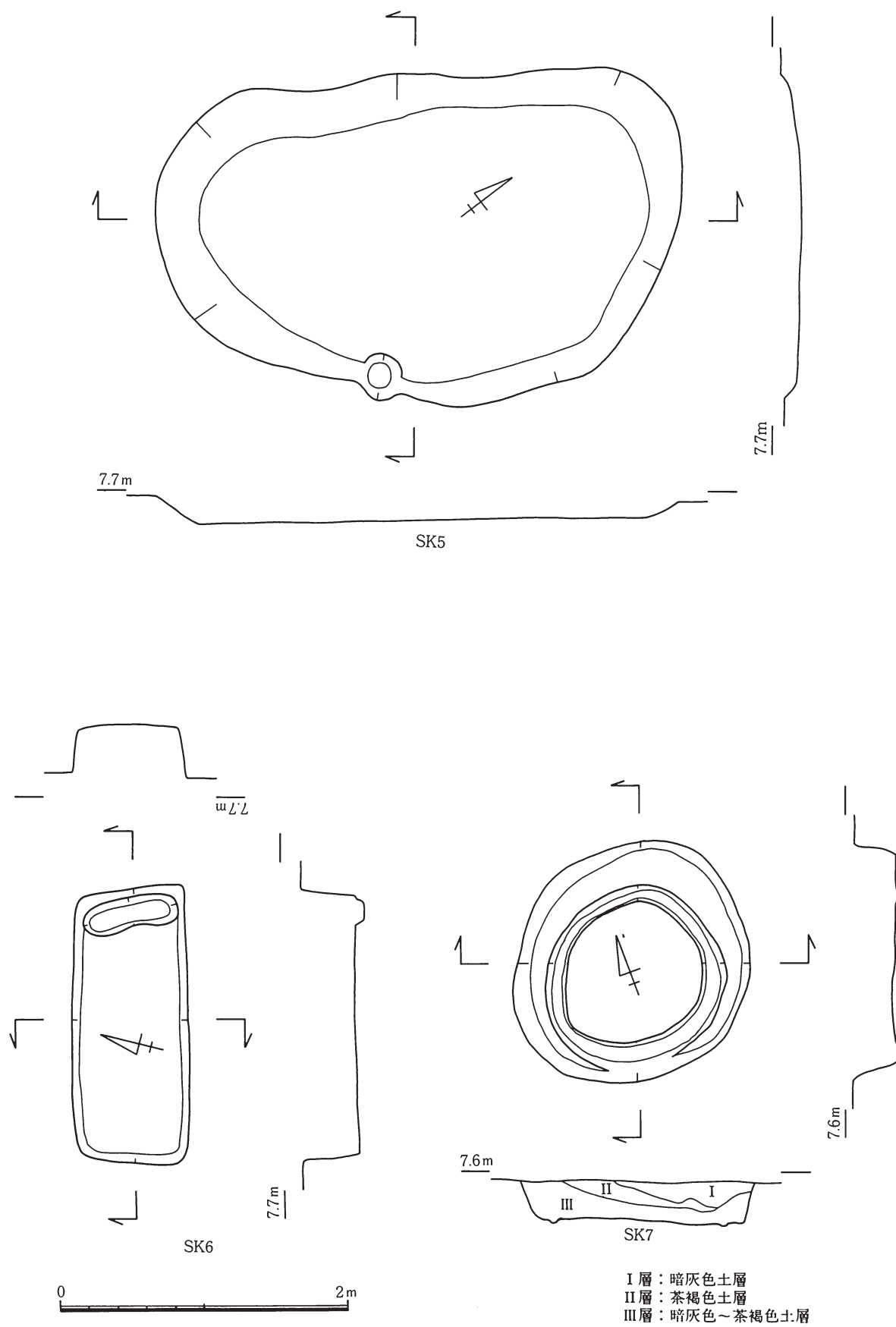


Fig.43 SK5～7平面図・エレベーション図及びセクション図

SK11 (Fig. 44)

東区の中央部にあり、長軸1.3m、短軸1.26mの隅丸方形のプランを呈する土坑で、深さは10～20cmを測り、南側が最も深くなっている。床面は僅かに舟底状を有する。埋土は濃茶色粘質土で、遺物は全く認められなかった。

SK12・13・14 (Fig. 45)

東区の北部にあり、3基の土坑が重複して南北に並んでいる。それぞれ径1.1mの略円形のプランを呈する。SK14はSK13を切っているが、SK13とSK12との先後関係は不明である。深さはSK12が40cm、SK13・14は60cmを測る。床面は水平で壁は直線的に立ち上がっているがSK14の北壁にはテラス状の段が造られている。埋土は濃茶色粘質土で、遺物は全く認められなかった。

SK15 (Fig. 45)

東区の中央部にあり、長軸1.56m、短軸0.9mの楕円形を呈する土坑で、深さは10cmを測る。床面は水平な面をなす。埋土は濃茶色粘質土で、遺物は全く認められなかった。

SK16 (Fig. 45)

SK15の東にあり、長軸1.5m、短軸0.7mの隅丸長方形のプランを呈する土坑で、深さは20cmを測る。床面は僅かに舟底状を有する。埋土は濃茶色粘質土で、遺物は全く認められなかった。

SK17 (Fig. 45)

東区の中央部にあり、長軸4.7m、短軸60～80cmの溝状の土坑であり、深さは10cm前後を測る。床面は水平で、床及び北壁に小ピットが3個掘られている。埋土は暗灰色粘質土で、遺物は全く認められなかった。

SK19 (Fig. 46)

西区の北部にある。長軸5.4m、短軸1.5～2mの土坑で、SD15に切られている。深さは中央部で最も深く28cmを測り壁に向かって緩やかに立ち上がっている。埋土はI層：黒色粘質土、II層：黄茶色粘質土で、遺物は認められなかった。SK19は、埋土から見ると弥生時代の遺構の可能性もある。

SK20 (Fig. 46)

西区の東南部にあり長軸1.2m、短軸1mの隅丸方形のプランを呈し、深さ50cmを測る。床面は水平で断面は台形状をなす。埋土は灰茶色粘質土に黄色粘土がブロック状に入っている。床面直上北寄りから瀬戸美濃系の鉄釉碗(8)がうつ伏せの状態出土している。また歯や古銭3枚も出土している。鉄釉碗は17世紀代のものであるが、鉄銭が出土していることから18世紀の墓としなければならない。

SK21 (Fig. 46)

SK22の東隣にあり、長軸2.3m、短軸0.8～0.9mの長方形プランを呈する土坑で、深さ30cm前後を測る。西側の壁はテラス状の段をなし、床面の東西両端は楕円形の窪みとなっている。埋土はI層：暗茶色粘質土、II層：濃茶色粘質土、III層：黒褐色粘質土に黄色粘土がブロック状に入る、IV層：淡茶色粘質土である。遺物は全く認められなかった。木棺墓であろう。

SK22 (Fig. 47)

西区の東部にあり、SD15に切られている。残存長軸3.7m、短軸2mの不整楕円形の土坑である。深さは40cmを測り、舟底状の断面を呈する。埋土は黒褐色粘質土で、遺物は全く認められない。

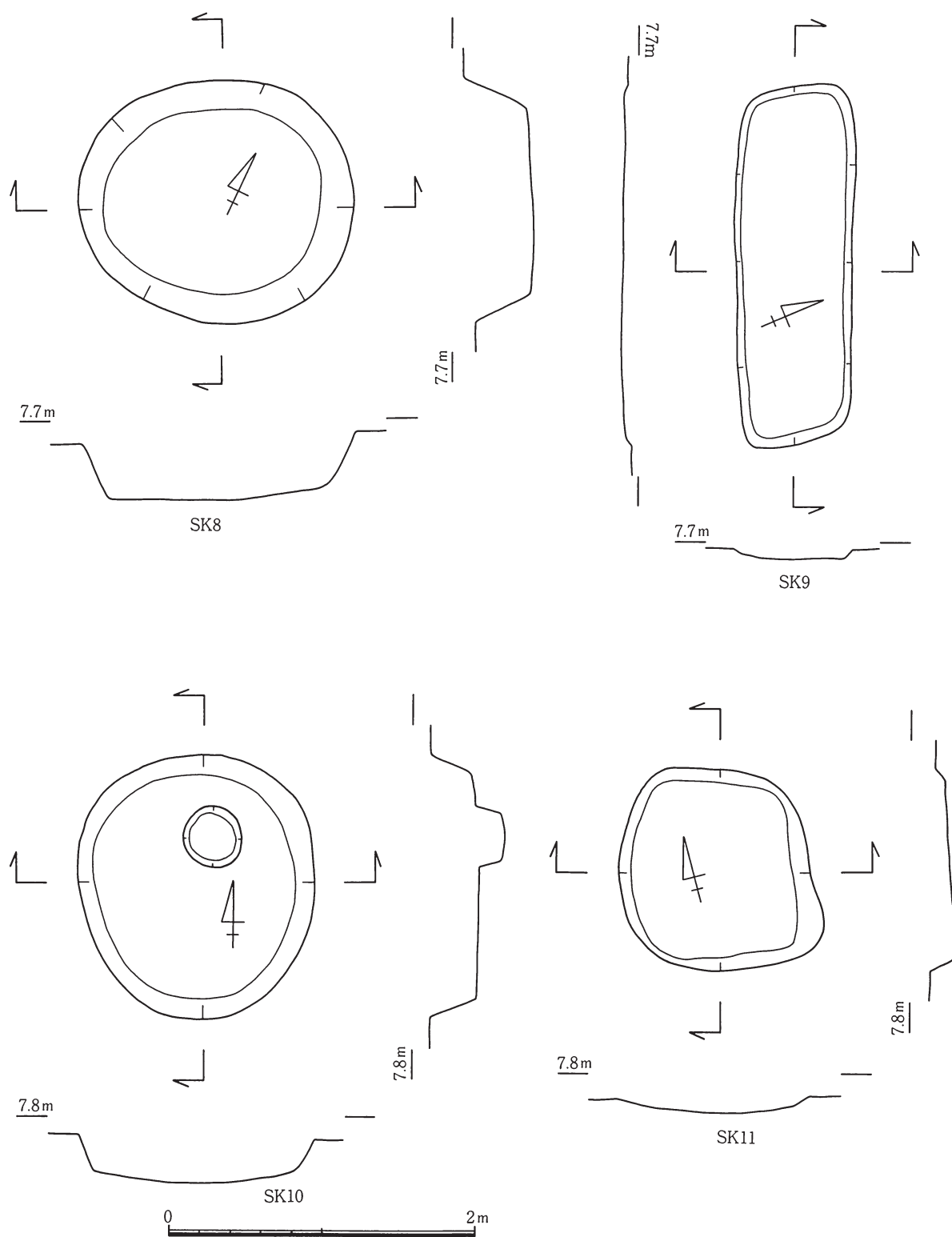


Fig.44 SK8~11平面図・エレベーション図

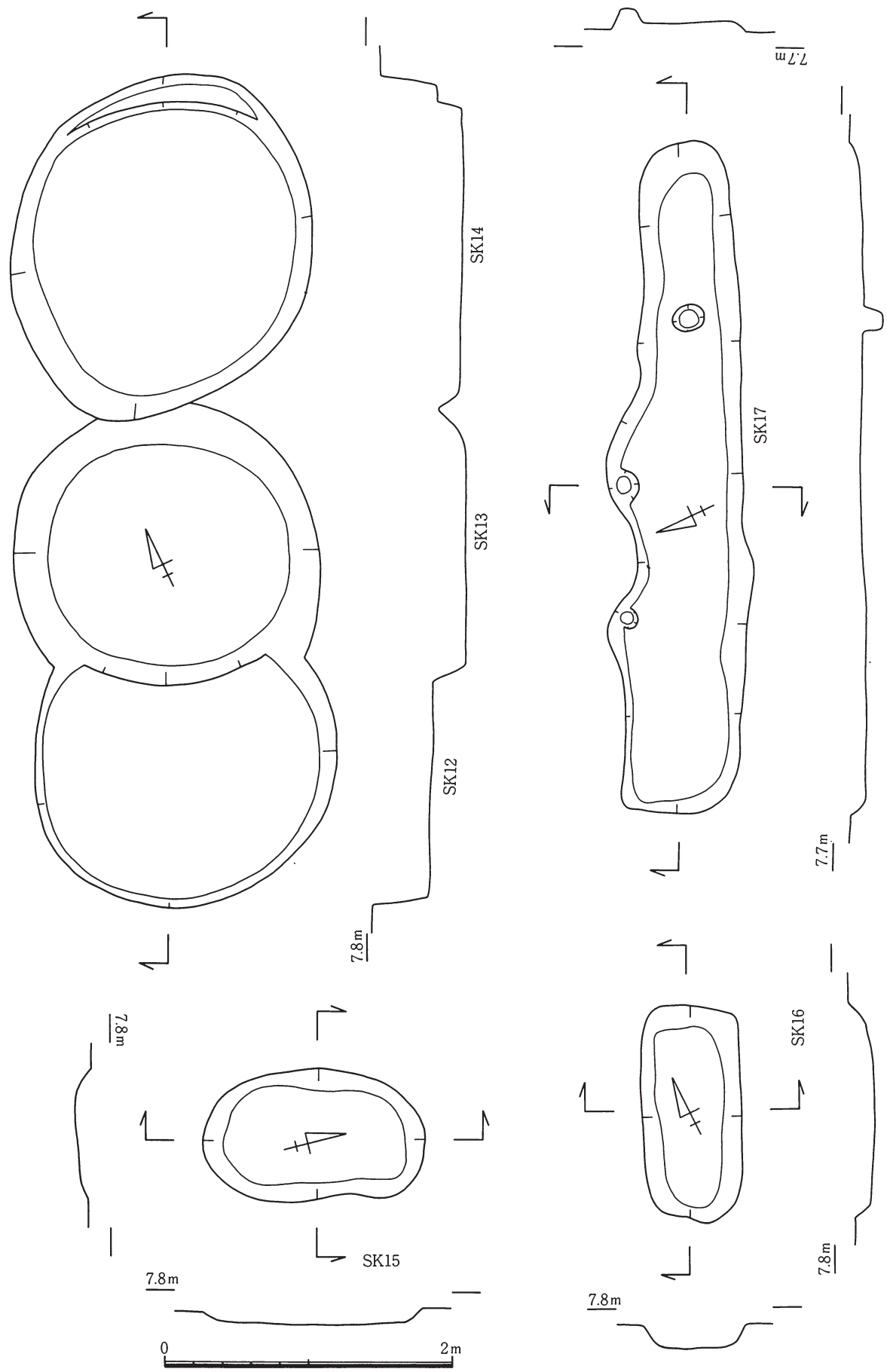
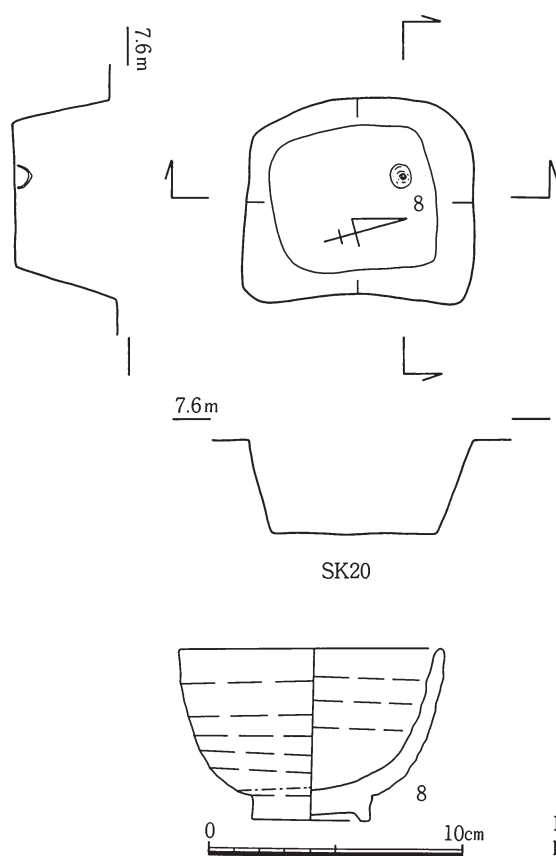
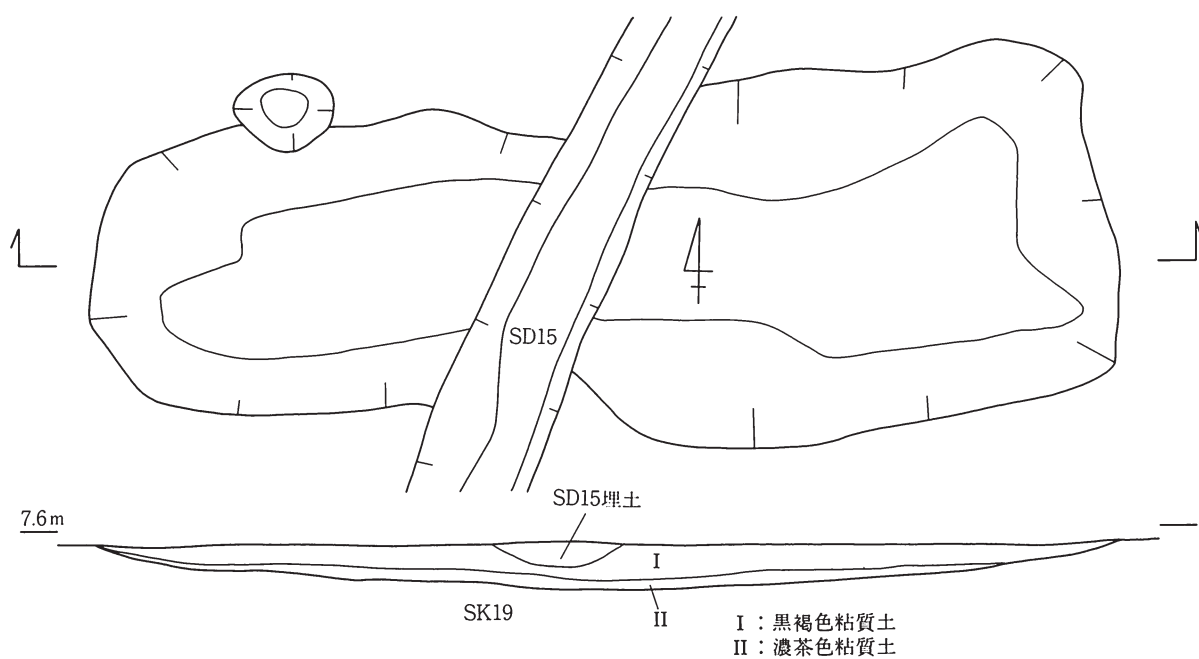


Fig.45 SK12～17平面図・エレベーション図



I 層 : 暗茶色粘質土層
II 層 : 濃茶色粘質土層
III 層 : 黒褐色粘質土層
IV 層 : 薄暗茶色粘質土層

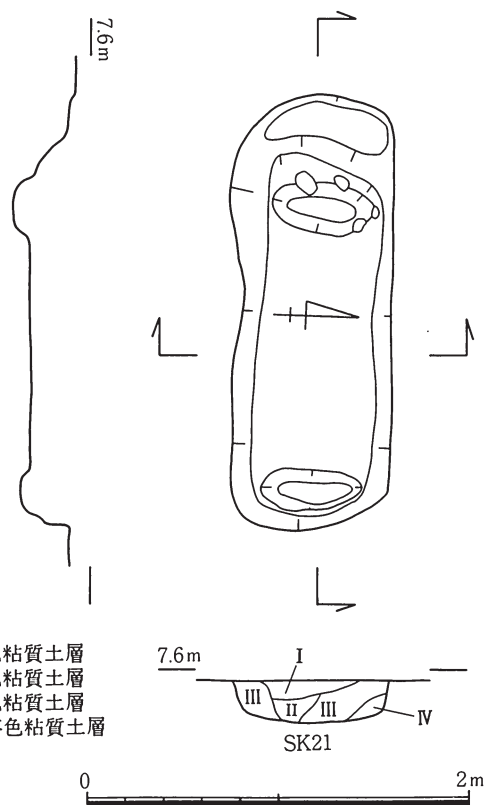


Fig.46 SK19・20・21平面図・エレベーション図
セクション図及びSK20出土遺物実測図

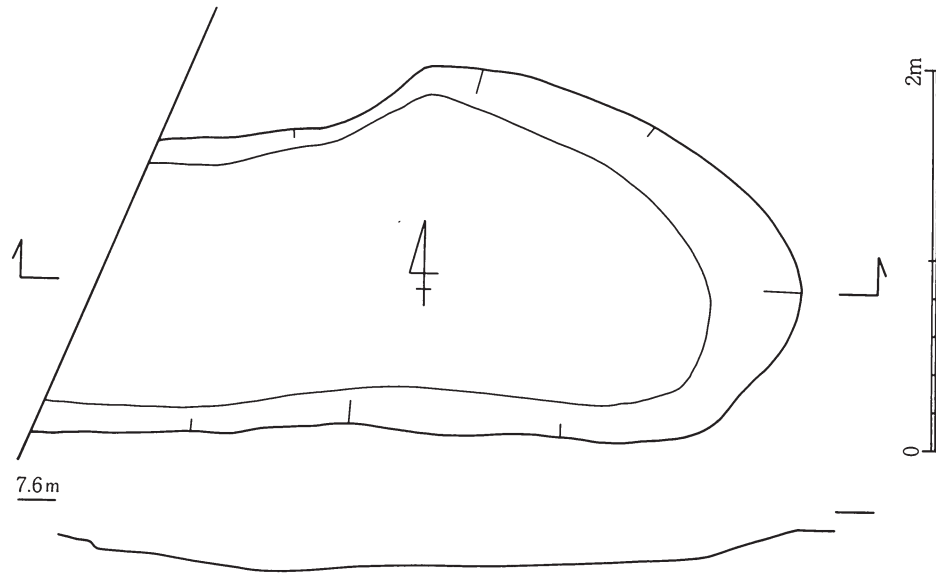


Fig.47 SK22平面・エレベーション図

SK23 (Fig. 48)

西区の中央部にある。長軸8.6m、短軸1.7mを測る南北に長く延びる不整形な土坑である。深さは中央部付近で10cmを測る。床面には凹凸が顕著に見られ、5～20cmぐらいの小円礫が踏みつけられたように散在している。埋土は濃茶色粘質土で、礫群中より須恵器の細片が1点出土している。池状の遺構であろうか。

③ 井戸**SE 1 (Fig. 49)**

東区の中央部にあり、長軸1.8m、短軸1.6mの不整楕円形を呈するプランをなし、深さは1.8mを測る。円筒状の掘の井戸である。埋土は濃茶色粘質土単純一層で、埋土中より尾戸産の碗底部(9)が出土している。床面には人頭大からそれ以上のチャート・砂岩の角礫が4個置かれていた。

④ 溝

西区を中心に数多くの溝及び溝状遺構が検出されたが、ここでは主要なものに限って説明することにする。

SD 1 (Fig. 50)

東区の西壁に沿って直線的に走る確認延長48m、幅0.8～1.4m、深さ20cm前後を測る溝である。断面は舟底状～台形状を呈する。埋土は灰褐色粘質土で、埋土中から土師器小皿、近世陶磁器の細片が数点出土している。

SD 2 (Fig. 50)

東区の中央部にあり、逆L字状に屈曲する細い溝で、SD 3を切っている。延長12m、幅30～60cm、深さ10～15cmを測る。埋土は濃茶色粘質土で、弥生土器細片が10数点出土している。

SD 3 (Fig. 50)

東区中央部の南にあり、東西に走る溝である。延長20m、幅40cm前後、深さ15cm前後を測る。埋土は濃茶色粘質土で、弥生土器・土師器の細片が数点出土している。



Fig.48 SK23平面図・エレベーション図

SD 4 (Fig. 50)

東区の東部にあり、南北に走る溝でSD 5に切られている。確認延長27m、幅1～1.2m、深さ15cm前後を測る。断面は舟底～台形状をなし、埋土は濃茶色～黒褐色シルト質粘質土である。遺物は認められなかった。

SD 5 (Fig. 50)

東区の東部にあり、調査区北東から南西方向に走る溝で、南端で逆L字状に屈曲し止まっている。確認延長34m、幅1～1.2m、深さは20～30cmを測り、断面は概ね舟底状を呈する。埋土は暗灰色～濃茶色粘質土で、遺物は認められなかった。

SD 6 (Fig. 50・51)

SD 5の東側を平行して走る細い溝で、SD 4を切っている。確認延長26m、幅0.6～1m、深さ10～20cmを測り、南ほど深さを増している。埋土は暗灰色～濃茶色粘質土で、埋土中より17世紀前半の肥前産溝縁皿(12)と17世紀後半に属する肥前白磁小碗(13)が出土している。

SD 7 (Fig. 50)

SD 3の南を東西に走る細長い溝である。延長9m、幅40cm前後、深さ10cmを測る。埋土は濃茶色粘質土で、遺物は認められない。

SD 8 (Fig. 50)

SD 5の南端から南に延びる溝で、確認延長6m、幅40～80cmを測り南端で幅を広げている。埋土は濃茶色粘質土で、遺物は認められない。

SD 9 (Fig. 50)

東区の北部にあり、SD 5と交わっているが、先後関係は不明である。延長37m、幅1m、深さ15cm前後を測り、断面は

台形状をなす。埋土は濃茶色粘質土で、遺物は認められない。

SD12 (Fig. 50・51)

西区の東端を北東から南西に向けて走る細い溝でSD13を切っている。確認延長20m、幅40cm、深さ20cm前後を測る。埋土は黒色粘質土である。床面より尾戸焼碗底部(10)、肥前系紅皿・弥生土器細片が出土している。

SD13 (Fig. 50・51)

西区の東北端にあり、SD14を切っている。確認延長6m、幅70cm、深さ20cmを測る。埋土はI層：灰茶色粘質土がブロック状に入った黒褐色粘質土、II層：暗灰褐色粘質土である。遺物は床面より近世染付碗(15)、検出面より備前・堺系播鉢(17)、埋土中より染付猪口の細片が出土している。

SD14 (Fig. 50)

西区の東壁に沿って直線的に走る溝である。確認延長37m、幅0.6～1m、深さ20cm前後を測る。断面は台形状をなし、埋土はI層：濃灰色粘質土、II層：暗灰褐色粘質土である。尾戸焼の細片が埋土中より出土している。

SD15 (Fig. 50・51)

SD14の西を平行して走る溝で、SK19・24を切っている。確認延長35m、幅0.8～1m、深さ20cm前後を測り、断面は不整台形を呈する。埋土は灰褐色粘質土で、埋土中より肥前系溝縁皿(14)が出土している。

SD16 (Fig. 50・51)

西区中央部を西北から東南に走る溝で、確認延長34m、幅2.2～2.5m、深さ30cmを測り、断面は舟底状を呈する。埋土はI層：黒褐色粘質土、II層：暗茶色粘質土である。埋土中より肥前系溝縁皿(11)近世染付、白磁、備前、須恵器の細片が出土している。

この他西区の西半分には、北東から南西に走る数条の細い溝状遺構が存在する。1.6m前後の等間隔を保って併行していることから、畑の畝を形成する溝状遺構と考えられる。

⑤ 道跡 (Fig. 31)

西区中央部でSD16と平行して延びる道跡ではないかと考えられる遺構を認めた。検出時は溝かと思ったが、黒褐色シルト～粘質土の埋土をめくると踏み固められた路面が現われ図示したように帯状に伸びており、道跡と判断した。確認延長は24m、最大幅は1.6mを測るが南に向かうにし

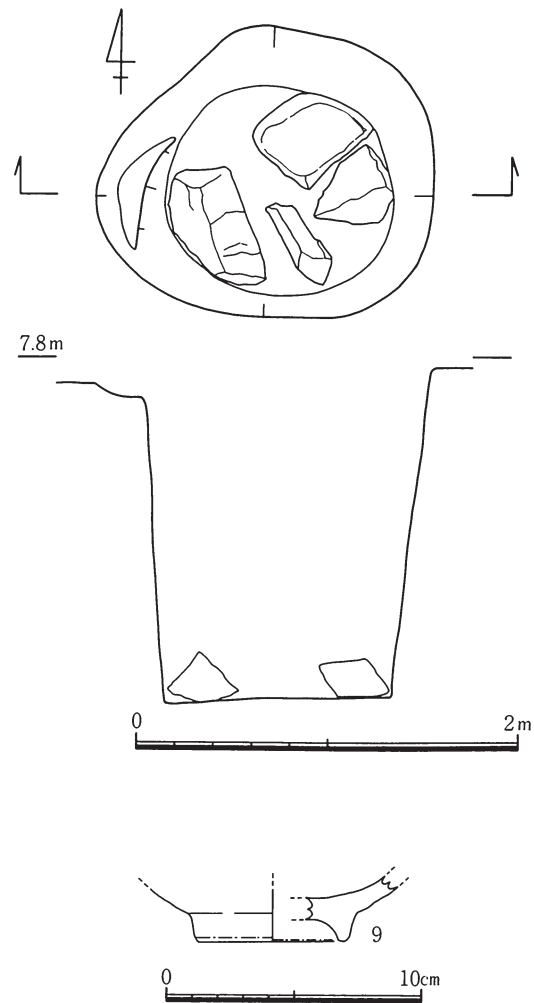


Fig.49

SE1平面図・エレベーション図及び出土遺物実測図

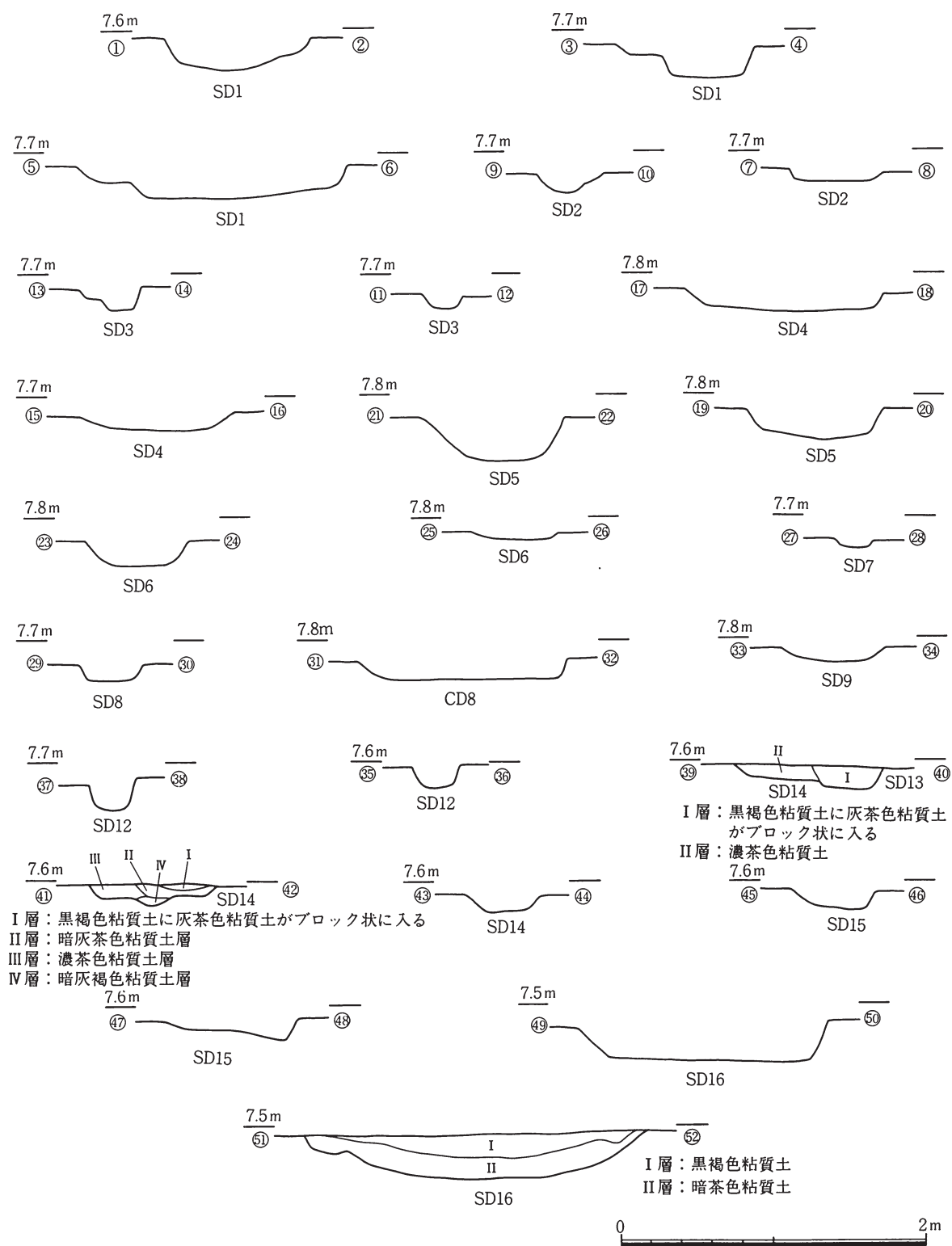


Fig.50 SD1～9・12～16エレベーション及びセクション図

たがって幅を減じている。断面はU字形をなし、深さは最大10cmであるが、ほとんど5cm未満を測るに過ぎない。部分的には北端に見られるような島状の高まりも見られる。遺物が全く出土していないために時期比定はできないがSD16と併行して存在した道と考えられる。

⑥ ピット (Fig. 51)

P 1

SD 4 の床面で検出したピットであるが、SD 4 との関係は不明である。径40cm、深さ25cmを測り、埋土中から一端に穿孔のある金具 (18) が出土している。

P 2

東区の東端にあり、径40cm、深さ40cmを測る。埋土中より砥石 (19) が出土している。

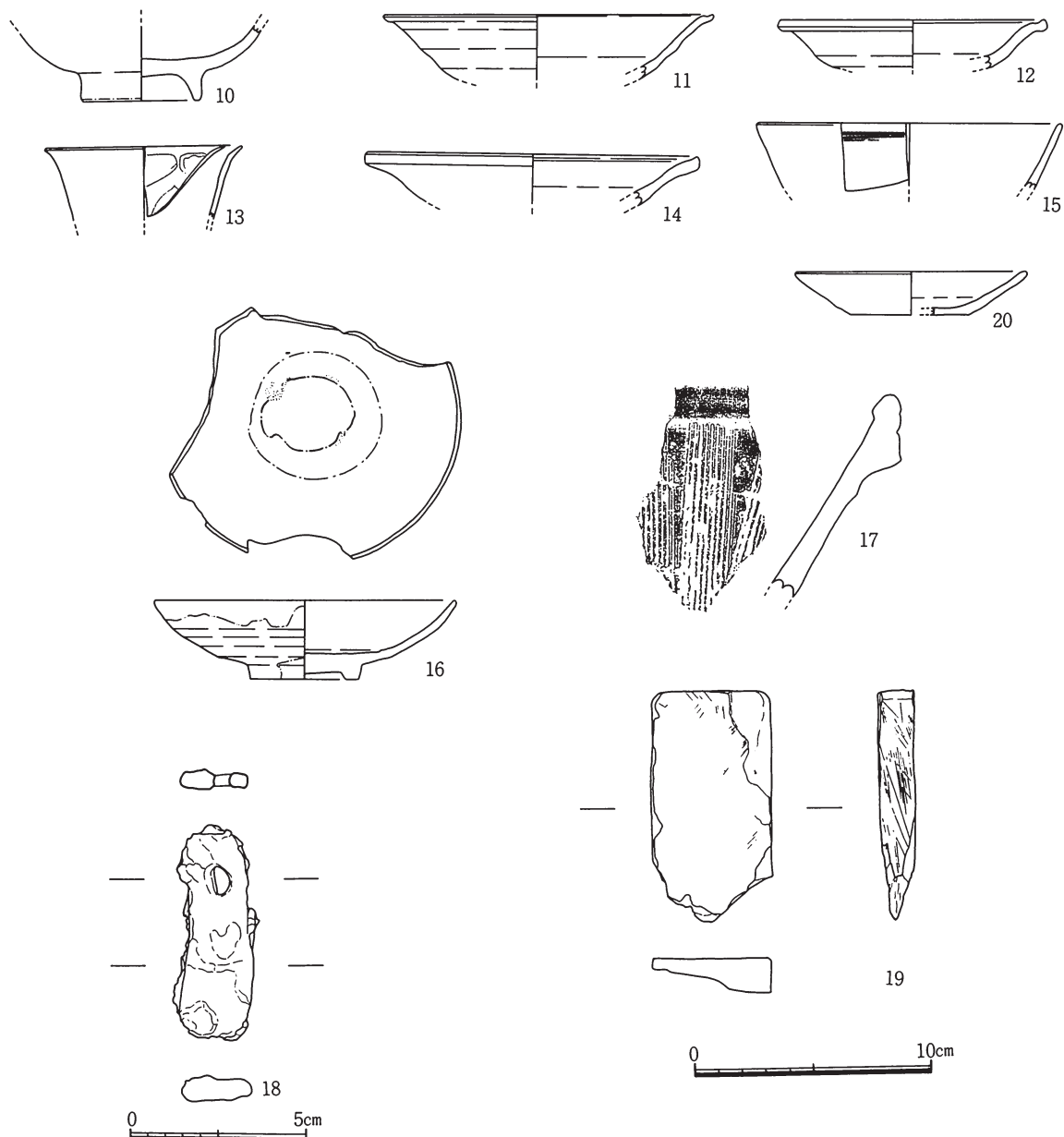


Fig. 51 溝、ピット及び包含層出土遺物

SD1(20)、SD6(12・13)、SD12(10)、SD13(15・17)、SD15(14)、SD16(11)、P1(18)、P2(19)、包含層(16)

(4) 小結

IV区からは弥生時代の墓坑と考えられる遺構2基と近世を中心とする掘立柱建物9棟、土坑24基、井戸1基道路状遺構及び数多くの溝状遺構を検出した。SX1はすでに述べたようにプランは必ずしも整然としないが遺物の有りようなどから見て方形周溝墓である可能性が高い。高知県における方形周溝墓の確認例はこれまで2例に留まっており、2例とも弥生時代終末～古墳時代初頭に属するものであった。後期初頭に属する今次検出例は県下最古の例となり、本県における弥生時代墓制を考える上で重要な資料を得ることができた。またSK18も後期前半の土坑墓と考えられるところから、このIV区は西方150mに展開しているところの弥生後期の集落址（Ⅰ・Ⅱ区）に対応した墓域となる可能性がある。確認例が2基と言うのはあまりに僅少であるが、調査区外に広がっている可能性は十分に考えられることである。本県の弥生墓制については、未解明な部分が多く、たとえ可能性の段階であっても集落と墓域とを空間として把握し得たことは大きな成果である。

弥生後期から近世までの間は、SK23出土の須恵器細片を除けば遺物・遺構は全く認められない。掘立柱建物は東区のみ存在しており、切り合い関係が見られることから少なくとも2時期が考えられるが、遺物が全く出ていないために時期比定が困難である。しかし埋土に差異は認められないことや棟方向がほぼ平行ないしは直行していることから連続して建て替えが行われたものと考えられる。このことは建物の規模や棟方向からも窺える。すなわち東西棟で長屋風のSB6と7は他の南北棟とは異なった機能を想定することが可能で、ほぼ同じ場所で建て替えが行われている。従ってその規模の拡大または縮小がなされているのである。これらの建物群が短期間に存在したとして、その時期比定の唯一の拠り所は、18世紀に属するSD1にSB5が切られていることである。

土坑は20数基確認されており、この内遺物の出土しているものは僅かであるが、17世紀～18世紀に属するものである。土坑の性格を比定できるものは、明らかに近世墓であるSK6・9・20・21とⅢ区で多く検出した産業用の円形土坑SK2・7である。前者は長方形プランを有するSK6・9・21と正方形に近いプランを持つSK20からなる。後者はハンダが認められない古いタイプに属するもので床面には溝を巡らしている。SK2からは17世紀末から18世紀初頭の遺物が出土しており、遺物からも古相に属するものであることが窺える。この他多くの土坑については性格・時期比定については明らかにし得ない。

溝は大小16条検出することができたが、その方向から2つのグループに分けることができる。1つは北東方向から南西方向に延びる溝(SD1・5・6・12・13・15)で、他のグループは北西から南東方向に延びる溝(SD4・16)である。SD4とSD5・6との関係で見れば前者が後者を切っている。従って後者が前者に先行する溝として位置付けることができる。このことは出土遺物の時期からも矛盾するものではない。ちなみに前者は現在の水田畦畔や用水路の方向と一致している。

以上IV区の検出遺構について概観したが、Ⅲ区とはかなり様相が異なっている。Ⅲ区に比べて整然とした掘立柱建物が多く存在するにも関わらず、遺物の出土量が極端に少ないことが指摘できる。これは建物に付随する土坑などが少ないことと関連しており、これらの建物群の性格を反映した現象として捉えることができよう。またⅢ区で顕著であったハンダ土坑の集中が全く見られない。IV区の建物群・土坑群は時間的にもⅢ区に先行するが、産業・生活関連の集落址として捉える

ことのできるIII区とは性格も異なるものとして理解しなければならない。次に遺構の変遷についてまとめれば、IV区には先ず17世紀代に溝SD 4・16・掘立柱建物群・道・墓が存在し、次いで18世紀のある段階でこれまでと全く異なる方向の溝SD 1・5・6・12・13・15が掘削されて水田となった。従ってIV区については18世紀に画期を求めることができよう。

IV区出土遺物観察表

遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種/ 器形	法 量(cm)				成形技法/ 調整 内 面/外 面	胎 土	特 徴	備 考			
						口径	器高	胴径	底径							
1	32	61	SK18	弥生 土器	鉢	22.5				(内外)ナデ	チャートの粗粒砂を 多く含む。	口縁端部は平らな面を成し、 外側にやや肥厚する。				
2	〃	61	〃	弥生 土器	壺	14.0				(内外)ナデ	長石及びチャートの 粗粒さを多く含む。	口縁端部は上下にやや肥厚す る。				
3	33	68	SX1	弥生 土器	長頸壺	8.0	22.0	16.5	6.5	(内)胴部上位に指頭圧痕・ハ ケナデ。下位は縦ハケ、底 部付近に強い横ナデ。 (外)頸部は縦方向のハケ、胴 部上位はハケトヘラミガキ、 屈曲部横方向のヘラミガキを 基調とし一部に擦痕、底部付 近に横ナデに擦痕。	チャートの小礫、粗 粒砂を含む。	頸部に6～8条の浅く幅広の沈 線。粘土幅約3cm。底部付近 に強い横撫での段部在り。				
遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種/ 器形	法 量(cm)				成形技法/ 調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎 土	特 徴	産 地	年 代	備 考
4	41	61	SK2	陶器	皿				8.8	ロクロは調 整時右回転	(内)灰釉・山 水紋 (外)緑灰釉・ 露胎	黄灰色・透明感 を持つ・剝離面 は滑らか・円裂 孔が存在	高台内中央に「清 水」銘。高台内の 削りは高台脇より やや深い。内外面 に細かな貫入が施 される。	肥前?	17後半 ～ 18前半	
5	〃	61	SK2	陶器	碗				5.2		(内)灰釉 (外)灰釉	黄白色・剝離面 は荒い・円孔が 存在	内外面に細かな貫 入が見られる。	尾戸	18世紀	呉器手
6	〃	61	SK2	陶器	碗				5.0		(内)灰釉 (外)灰釉	黄白色・赤色粒 子・剝離面は荒 い・円孔が存在	内外面に細かな貫 入が見られる。	尾戸	18世紀	呉器手
7	42	61	SK4	陶器	皿	13.9	3.0		4.9	ロクロは調 整時右回転	(内)灰釉 (外)灰釉	黄白色・赤色粒 子・剝離面は荒 い・円裂孔存在	釉薬は発色不良で 白濁する。砂目痕 が見られる。			
8	46	73	SK20	陶器	碗 丸形	10.2	6.8		4.6		(内)鉄釉 (外)鉄釉・露 胎	灰色・剝離面は 荒い・円、裂孔が 存在	高台内の削りは浅 い。	瀬戸・ 奥濃	17世紀	
9	49	61	SE1	陶器	碗				5.8		(内)灰釉・鉄絵 (外)灰釉・露胎	黄白色・赤色粒 子・剝離面は荒 い・円、裂孔存在	内外面に細かな貫 入が見られる。	尾戸	17世紀 末	呉器手
10	51	61	SD12	陶器	碗				5.1		(内)灰釉 (外)灰釉	黄白色・赤色粒 子・剝離面は荒 い・円、裂孔存在	内外面に細かな貫 入が見られる。	尾戸	18世紀	呉器手
11	〃	61	SD16	陶器	皿 折縁形	15.0					(内)灰釉 (外)灰釉	灰白色・黒色粒 子・剝離面はや や荒い・円孔が 存在	内外面に貫入が見 られる。		17世紀	折縁皿
12	〃	61	SD6	陶器	皿 折縁形	11.2					(内)緑灰釉 (外)緑灰釉	暗灰褐色・剝離 面は荒い・円、裂 孔が存在	内外面に細かな貫 入が見られる。	肥前	17世紀 前半	溝縁皿
13	〃	61	SD6	磁器	碗	8.4				型打成形		白色・透明感 を持つ・剝離面 は滑らか・円、裂 孔が存在		肥前	17世紀 後半	
14	〃	61	SD15	陶器	皿 折縁形	14.0					(内)緑灰釉・ (外)緑灰釉・ 露胎	暗灰褐色・剝離 面は荒い・円、裂 孔が存在	内外面に細かな貫 入が見られる。	肥前	17世紀	溝縁皿
15	〃	61	SD13	磁器	碗 染付	12.8						白色・透明感 を持つ・剝離面 は滑らか・円孔が 存在	内外面に貫入が見 られる。			
16	〃	61	包含層	陶器	皿 丸形	12.6	3.4		4.6	(外)ロクロ 目・削り痕 ロクロは調 整時左回転	(内)銅緑釉 (外)灰釉・露 胎	白色・剝離面は 荒い・円孔が存 在	見込は蛇ノ目釉剥 ぎを施す。	内野山	17後半 ～ 18前半	
17	〃	61	SD13	陶器	摺鉢					(外)ロクロ 目		褐色・チャート 粒・石英粒・剝離 面は荒い・円、裂 孔が存在	9条1単位の摺目 を施す。	備前・ 堺系		
遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種/ 器形	法 量(cm)				重量 (g)	特 徴		産 地	年 代	備 考	
						全長	全幅	全厚								
18	51	61	P1	鉄製品		6.2	2.3	0.7	12.8	長径9mm×短径4mmの不整楕円形を呈する穿孔部分が存在する。						
19	〃	61	P2	砥石	仕上げ砥		5.1		91.3	砥面1面、側面2面、端面1面が残存。側面と端面には長軸方向の粗い調整痕が見られる。					泥岩製	
遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種/ 器形	法 量(cm)				成形技法/ 調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎 土	特 徴	産 地	年 代	備 考
						口径	器高	胴径	底径							
20	51		SD1	土師質	小皿	9.7	1.9		5.0	回転糸切り 痕、(内外) 横ナデ		石英粒・長石粒 を少量含む。				

3 V区の調査成果

(1) 調査区の概要と基本層準

V区は全調査区の北東端に位置する。調査面積は2621㎡、標高は海拔約8.4m前後を測る。V区は中央を東西方向に横切る道路によって南北に分けられているため、便宜上、道路より北側を北区、南側を南区とした。調査は北区・南区ともに平成8年度に行われた。基本層準はI層：耕作土、II層：褐色黄混粘質土（旧耕作土）、III層：黒褐色粘質土（黒ボク）、IV層：茶褐色粘質土（地山層）である。層準は南に接する調査IV区とほぼ同様であるが、北区においてはII層・III層は後世の削平を強く受け消滅しており、耕作土直下がIV層遺構検出面となっている。南区においてはII層・III層が認められるものの非常に薄く、IVからIII層にかけての最大層厚10～20cmであった。各遺構はIII層を切って存在しているが、遺構埋土（多くは黒褐色土）の関係上III層上面での遺構検出は困難であり、実際の遺構検出面はIV層上面となっている。

検出遺構は近世後期の堀立柱建物跡・土坑・溝・ピット等である。堀立柱建物跡は5棟、土坑は26基を検出しているが、これらの遺構は部分的に切り合いながら存在し、その殆どが北区に集中する傾向をもつ。一方、南区ではほぼ南北に軸方向をもつ畝状遺構群が広域に広がっており、北区とは対照的な遺構検出状況を示している。

(2) 遺構と遺物

① 堀立柱建物

SB1 (Fig. 53)

北区の中央北西寄りに位置する建物跡である。南東端のP3がSB4の柱穴と重複しており、又、北東端ではSK1によって切られている。棟軸はN-27°-Eであり、南北棟となる。規模は梁間1間(2m)・桁行3間(5.4m)、桁行の柱間寸法は1.6～1.9cmを測る。柱穴の平面形態は円形又は楕円形を呈し、検出規模はP1・5～7で径36～44cm、P2～4で径50～58cm、深さはP2・5・7が28～32cm、P1・3・4・6が37～46cmを測る。埋土はP1～6が黒褐色黄混粘質土、P7が濃褐色黄混粘質土である。なお、北東端部分はSK1による削平を受けており、柱穴を検出することができなかった。

出土遺物はないが、SK1（18世紀前半）との切り合い関係により、SB1は遺構廃絶時期を18世紀前半頃又はそれ以前に求めることができる。

SB2 (Fig. 53)

北区の中央東寄りに位置し、SB3・SB4と切り合って存在する建物跡である。又、H23グリットではSX2によって切られている。棟軸はN-28°-Eであり、南北棟となる。規模は梁間1間(3.7m)・桁行3間(5.8m)、桁行の柱間寸法は1.8～2mを測る。柱穴の平面形態は円形又は楕円形を呈し、検出規模は径44～64cmを測る。深さはP5が46cmを測るが、P2は13cm、その他のピットは26～34cmと全体に浅い。埋土はP1・2・5～7が黒褐色黄混粘質土、P3が濃褐色粘質土、P4が灰褐色粘質土である。P3とP4の間はSX2による削平を受けており、柱穴は検出されなかった。

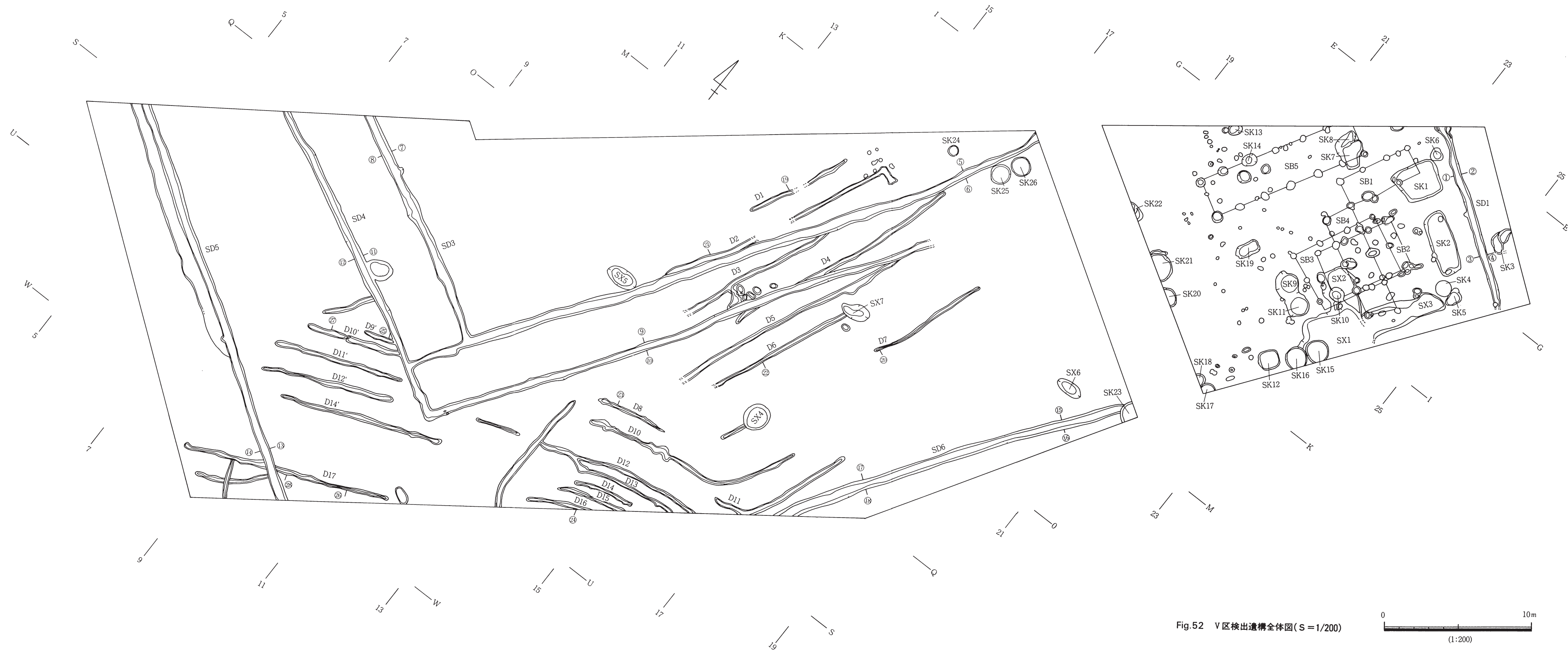
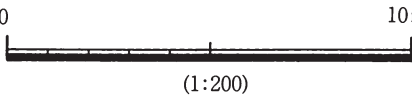


Fig.52 V区検出遺構全体図(S=1/200)



出土遺物はないが、SB 2 からSX 2・SB 4へと続く切り合い関係により、廃絶時期をSB 4（18世紀後半～末）以前に求めることができる。SB 3との前後関係は不明である。

SB 3 (Fig. 54)

北区の中央東寄りに位置し、SB 2・SB 4と切り合って存在する建物跡である。又、H23グリットではSX 2によって切られている。棟軸はN-28°-Eであり、南北棟となる。規模は梁間 2 間 (4.7m)・桁行 3 間 (6.4m)、桁行の柱間寸法は2.1~2.2cmを測る。柱穴の平面形態は円形又は楕円形を呈し、検出規模は径40~50cmを測る。検出面よりの深さはP 6 が56cmを測るが、その他のピットは17~30cmとやや浅い。埋土はP 1・7・9が黒褐色黄混粘質土、P 2が暗褐色粘質土、P 3~6が灰褐色粘質土である。なお、P 2とP 3の間はSX 2による削平を受けており、柱穴は検出されなかった。

出土遺物はないが、SB 3 からSX 2・SB 4へと続く切り合い関係により、廃絶時期をSB 4（18世紀後半～末）以前に求めることができる。SB 2との前後関係は不明である。

SB 4 (Fig. 54・55)

北区の中央東寄りに位置する建物跡である。SB 2・3と切り合って存在し、且つSX 2を切っている。棟軸はN-64°-Eで、ほぼ東西棟となる。規模は梁間 1 間 (2.1m)・桁行 4 間 (8.2m)、桁行の柱間寸法は1.7~2.3cmを測る。柱穴の平面形態は円形又は楕円形を呈し、検出規模はP 6・

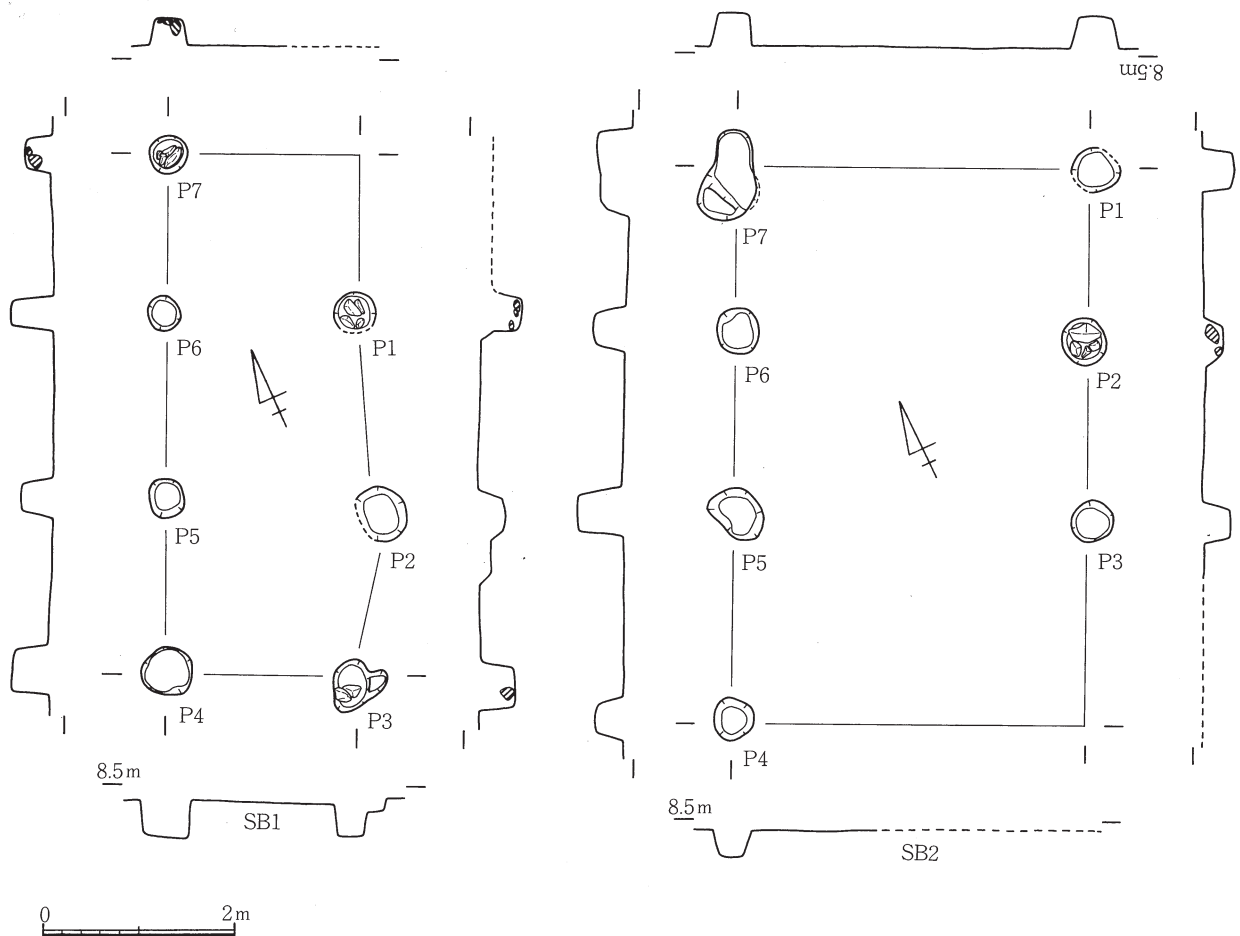


Fig. 53 SB1・2平面図・エレベーション図

8・9で径60～100cm、P1～5・7・10で径40～56cmと、大小のばらつきをもつ。深さはP2・5が32～38cm、P1・3・4・6～10が40～56cmを測る。埋土は概ね黒褐色粘質土であるが、P1は礫を多量に含む暗褐色粘質土、P9はI層：灰褐色黄混粘質土、II層：暗褐色粘質土である。

出土遺物としては、P3より京焼き風の陶器碗底部破片1点(2)が壁面へばりつきの状態で出土しており、他にP6埋土中より灰釉の陶器碗口縁部破片1点(3)、P9埋土中より灰釉の陶器細片が出土している。これらの出土遺物により、SB4は18世紀後半から末にかけての時期に遺構が廃絶されたものと捉えられる。

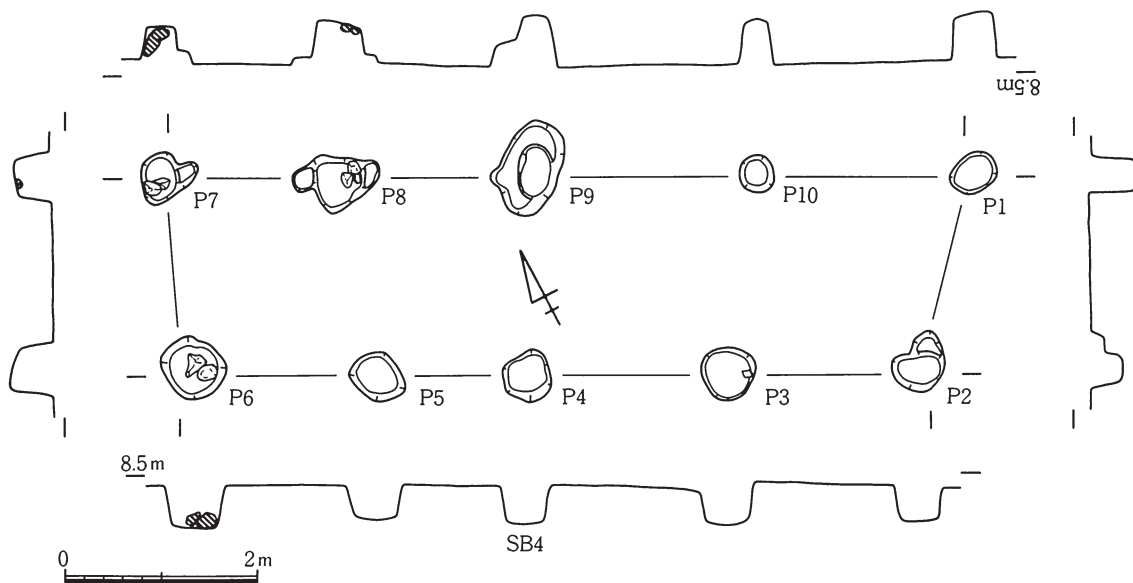
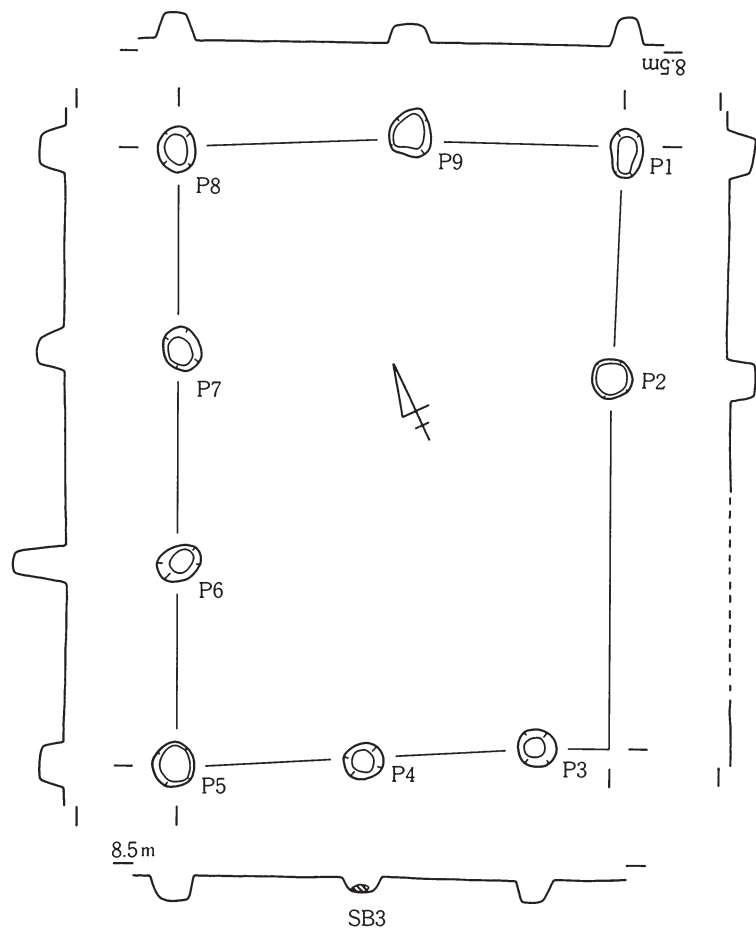


Fig.54 SB3・4平面図・エレベーション図

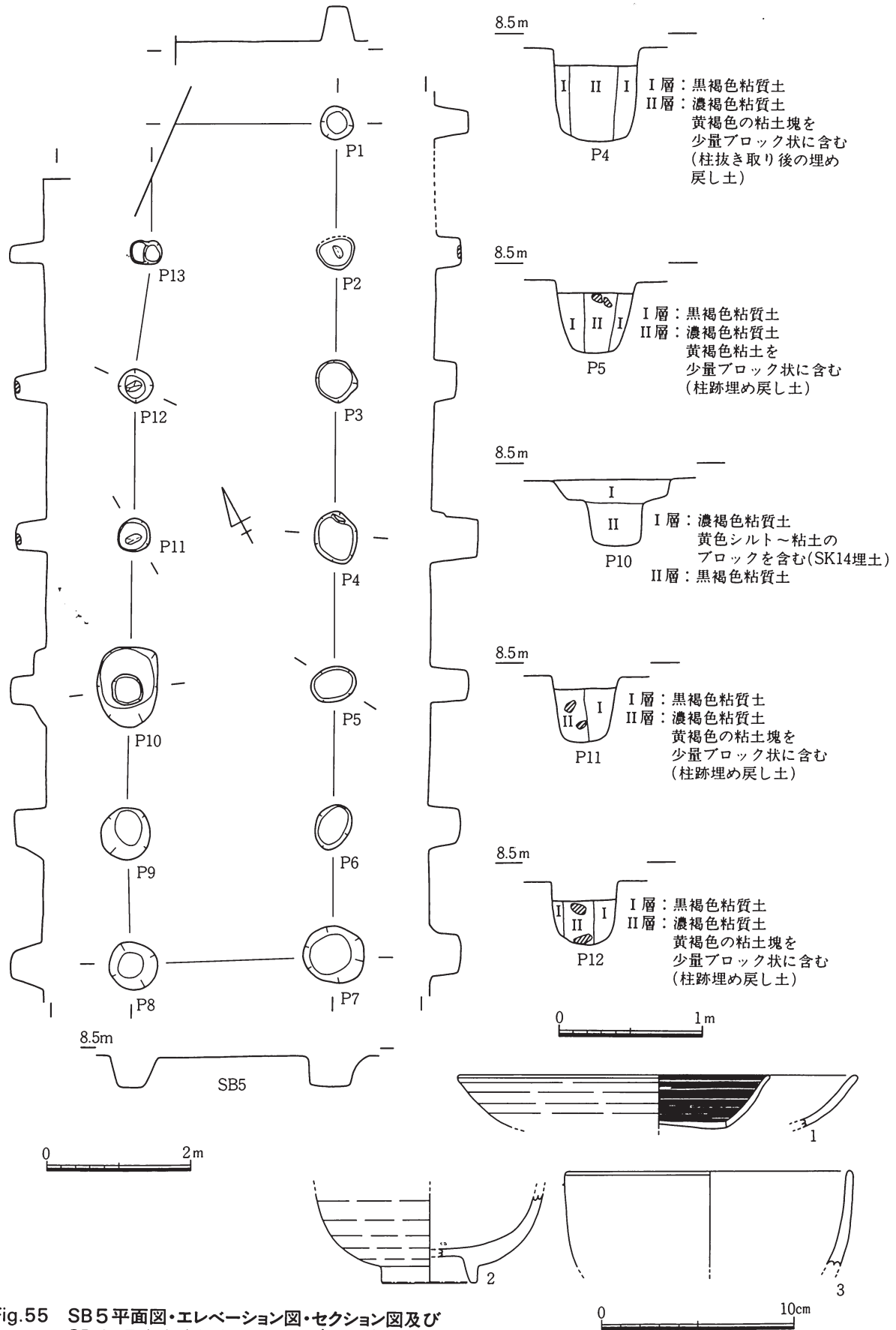


Fig.55 SB5平面図・エレベーション図・セクション図及び
SB4・5出土遺物実測図SB4(2・3),SB5(1)

SB 5 (Fig. 55)

北区の西寄りに位置する建物跡である。北側のP 2の上面をSK 7 (19世紀初頭～前半頃)によって僅かに切られており、又、P 9の上面をSK14 (18世紀末～19世紀前半頃)によって切られている。棟軸はN-30°-Eであり、南北棟となる。規模は梁間1間(2.8m)・桁行5間(9.8m)、桁行の柱間寸法は1.9~2.1を測る。柱穴の平面形態は円形又は楕円形を呈し、検出規模はP 1~3・10~13で径44~58cm、P 4~9で径64~84cmと、大小のばらつきをもつ。深さはP 2・3が32~34cm、P 1・4~13が43~64cmを測る。埋土は概ね黒褐色粘質土であるが、P 4・5・11・12では柱根痕が確認された。

出土遺物としては、P 6埋土中より陶器皿口縁部破片1点(1)、P10より瓦片1点が出土している。1は白化粧土刷毛塗りの端反り形中皿で、18世紀末から19世紀前半のものである。

SK 7・SK14との切り合い関係、及びP 6出土の遺物より、SB 5は遺構廃絶時期を19世紀初頭から前半に求めることができる。

② 土坑

SK 1 (Fig. 56・57)

北区の北寄りに位置する土坑である。平面形態は不整長方形を呈し、検出規模は長軸3m、短軸2.62m、深さ38cmを測る。埋土はIII層で、I層：黄灰色粘質土、II層：褐色粘質土、III層：暗褐色粘質土である。

出土遺物は、近世磁器口縁部3点、陶器及びかわらけの細片数点である。このうち床面出土の遺物は陶胎染付碗の口縁部1点のみであり、他は全てI層埋土中よりの出土である。図示できたものはほぼ完形で出土した磁器染付仏飯器(10)であり、肥前産18世紀前半のものである。

SK 1は埋土出土の肥前産磁器により、18世紀前半頃に位置付けられる。

SK 2 (Fig. 56・57)

北区の北寄りに位置し、SD 1の南に近接する土坑である。平面形態は隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-59°-Wである。検出規模は長軸4.62m、短軸1.76m、深さ16~18cmを測る。埋土は灰黄色粘質土であり、床面からは円礫が多数出土している。

出土遺物は、近世陶磁器口縁部3点、底部3点、細片2点、土師質土器6点であり、このうち床面出土の遺物は京焼き風陶器の筒丸形碗口縁部(8)・陶器播鉢底部(13)・陶器辣蕪形瓶胴部(12)・陶器辣蕪形瓶底部(16)・かわらけの口縁部及び底部6点である。他に、埋土下層より陶器碗(6)・磁器染付丸形碗(5)・磁器染付碗口縁部が、埋土上層より陶器呉器形碗(9)・陶器碗(15)・及び陶磁器細片数点が出土している。図示できたもののうち5は丸文を施文したくらわんか手の丸碗であり波佐見窯18世紀後半のもの、9は肥前産の灰釉碗、15は瀬戸美濃産の鎧手碗である。この他、床面出土の12と16は同一個体であり、また埋土上層中にもこれらと同一個体と考えられる陶器破片が含まれている。これらの出土状況より、SK 2は遺構廃絶後床面から上層にかけて一気に埋め戻しが為されたものと考えられる。

SK 2は下層出土の肥前産磁器により18世紀後半頃に位置付けられる。

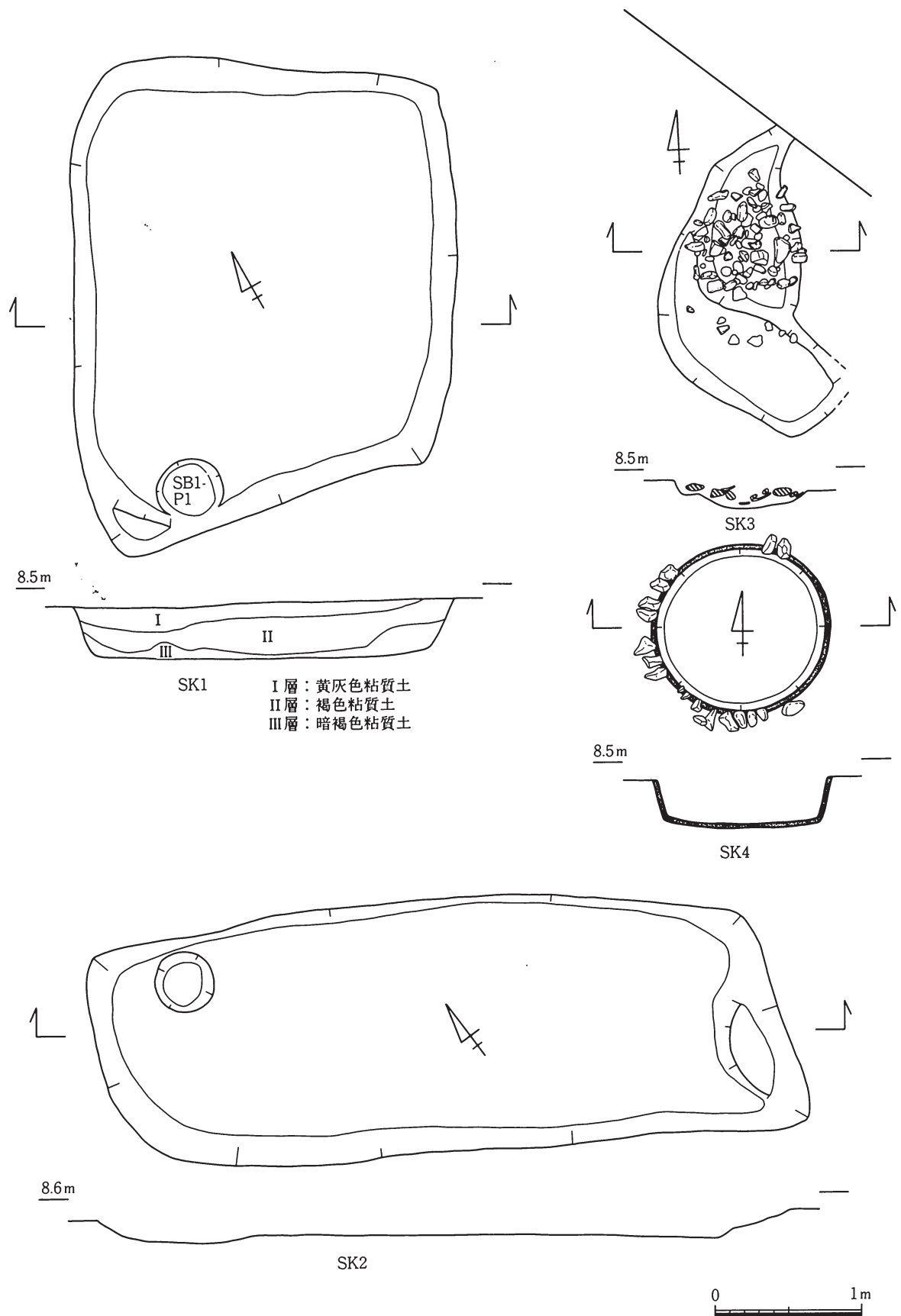


Fig.56 SK1～4平面図・エレベーション図・セクション図及び遺物出土状況

SK 3 (Fig. 56・57)

北区の北端に位置し、SD 1 の北に近接する浅い掘り込み状の土坑である。北端が調査区外に出ているため全体の形状は不明であるが、平面形態は不整円形を呈し、検出規模は東西径1.4m、南北の確認径2.02m、深さ10～20cmを測る。床面形態は北西部に不整形のやや深い箇所が存在し、一様ではない。埋土は黒褐色茶混粘質土であり、埋土中に円礫が多量に含まれる。円礫が特に集中する箇所は北西側の落込み部分で、床面より4～6cm程浮いた地点で径約80cmの集石を形成しており、遺物は主にこの集石内から出土している。

出土遺物は近世陶磁器口縁部2点、底部2点、細片2点、及び瓦片であり、このうち床面からの出土は陶器碗口縁部(7)、陶器皿底部(14・11)、陶器甕胴部である。図示できたものは4・7・11・14である。このうち埋土上層出土の4は肥前系の磁器染付端反形碗であり19世紀前半のものである。床面出土の14は内野山窯産の緑釉蛇の目釉剥ぎ小皿であり17世紀末～18世紀前半のもの、同じく床面出土の11は肥前産の中皿の底部で白化粧土による刷毛目釉描きを施したもの、7は肥前系の筒丸形碗で口縁の一部に白化粧土を斜め浸け掛けしたものであり、いずれも18世紀前半のものである。

以上の床面出土陶器によりSK 3は18世紀前半頃に位置付けられる。

SK 4 (Fig. 56・57)

北区の北西寄りに位置し、SX 1 の北に近接するハンダ土坑である。平面形態は円形を呈し、検出規模は径1.14m、深さ32cmを測る。断面形態は逆台形で、壁は急に立ち上がる。底部及び側壁は厚さ約3cmのハンダで固められ、上面外周に巡る拳大の円礫が部分的に残る。埋土は灰黄色粘質土であり、埋土中には円礫が多量に含まれる。

出土遺物としては、床面よりかわらけの口縁部1点・銅製の煙管吸口(17)1点が出土している。他に埋土中より、能茶山産の磁器広東形碗と同じく能茶山産の磁器輪花小皿の口縁部、磁器細片、瓦片3点、が出土している。

以上の出土遺物よりSK 4は19世紀第2四半期から幕末頃に位置付けられる。

SK 5 (Fig. 58・59)

北区の北西部分に位置し、SK 4 の東側に接する土坑である。平面形態は不整楕円形を呈し、検出規模は長軸1.28m、短軸0.8m、深さ10～16cmを測る。

出土遺物はなく、時期・性格ともに不明である。

SK 6 (Fig. 58)

北区の北西寄りに位置し、SK 1 の北、SD 1 の南に近接する土坑である。平面形態は不整円形を呈し、検出規模は径0.98m、深さ28cmを測る。断面形態は舟底形で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土はI層：黄褐色粘質土、II層：灰褐色粘質土である。

出土遺物はない。

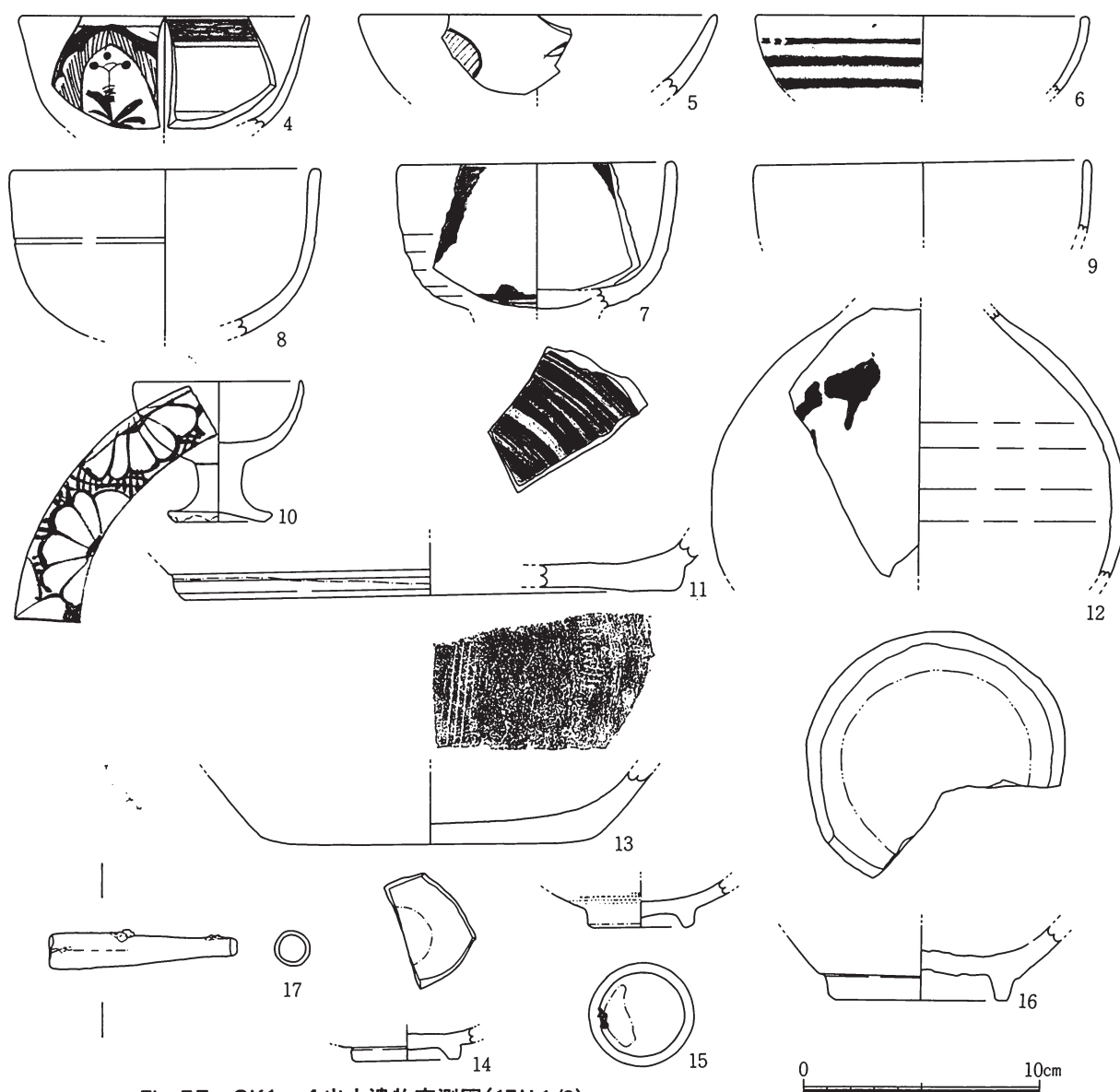


Fig.57 SK1～4 出土遺物実測図(17は1/2)

SK1(9・10)、SK2(5・6・8・12・13・15・16)、SK3(4・7・11・14)、SK4(17)

SK 7 (Fig. 58・59)

北区の西端部に位置し、SB 5 の北端部分と切り合って存在する土坑である。検出面ではSK 7 の南端部がSB 5 のピット P 2 をわずかに切っており、時期的にSK 7 が後続する。西側上面はSK 8 によって切られており全体の規模を掴むことが困難であるが、平面形態は不整楕円形を呈し、検出規模は長軸2.22m、短軸約1.5m、深さ30cmを測る。壁はほぼ平らな床面から緩やかに立ち上がる。埋土はⅠ層：褐色黄混粘質土、Ⅱ層：濃褐色黄混粘質土、Ⅲ層：明褐色粘質土である。このうちⅠ層はSK 8 埋土であり、Ⅱ層・Ⅲ層がSK 7 埋土に該当する。

出土遺物は、Ⅱ層埋土を中心としてSK 7 の東半分・北側壁に沿って鉄滓・瓦片・近世陶磁器類が集中して出土している。これらの遺物は北壁際に折り重なるようにして出土しており、一括して廃棄された状況を呈している。Ⅱ層埋土中の出土遺物は近世陶磁器口縁部5点、底部6点、細片7点、土師質及び瓦質土器14点である。図示できるものは18～21・23～28である。18は肥前産の猪口で1780年～1840年に流行したもの、19は肥前系の染付端反形碗、20も肥前系の染付碗である。23は

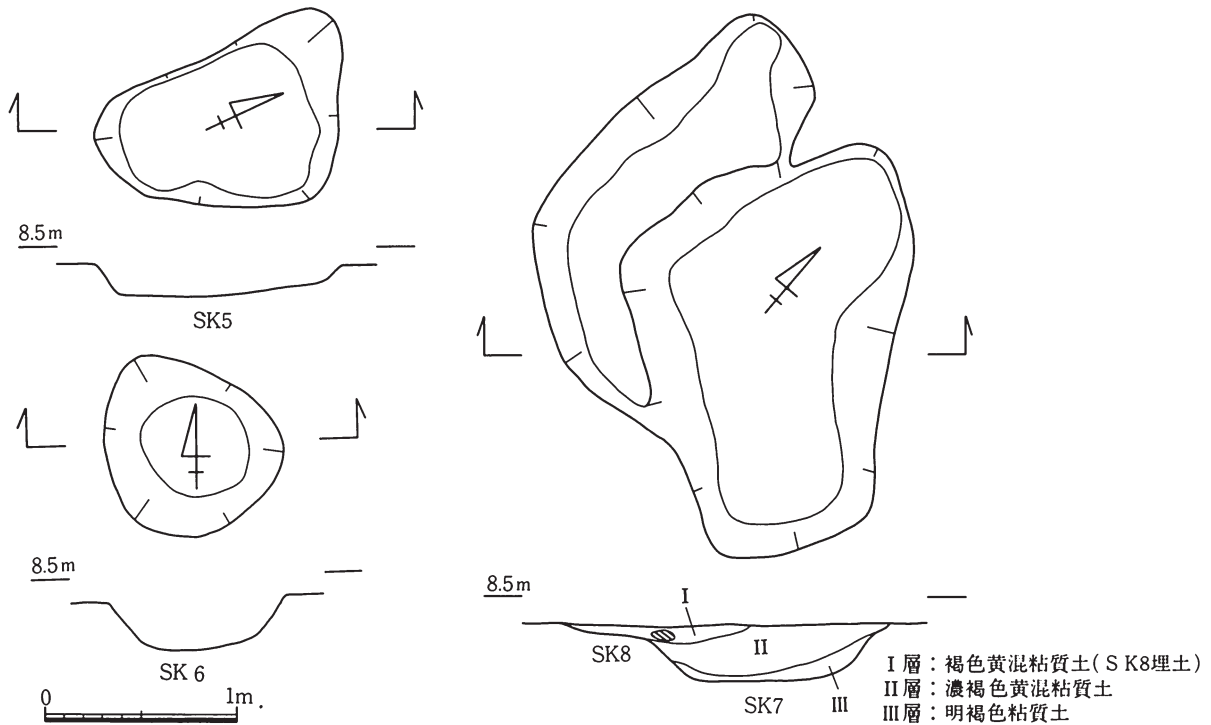


Fig.58 SK5～8平面図・エレベーション図及びセクション図

瀬戸美濃産の染付小杯で19世紀代のもの、21は関西系の陶器小皿で見込蛇の目釉剥ぎのものである。24は堺産の播鉢、28・27は土師質の焙烙、25は土師質の火鉢である。他に瓦片は軒平瓦1点(26)・平瓦破片20数点である。鉄滓は3cm～1cm大の円礫と小礫を多量に含んだもので、1.1cmを量る。この他に、SK7の西側では北壁に沿い人頭大～拳大の円礫が集中して出土しており、他の遺物群と同様に一括廃棄された状況を呈している。

SK7は遺物出土状況及び瓦片の出土より、周辺の瓦葺建物に伴う遺物が廃棄されたものと考えられる。SK7は、II層出土の肥前産磁器・瀬戸美濃産磁器・関西系陶器により、遺構廃絶時期を19世紀初頭から前葉頃に求めることができる。

SK8 (Fig. 58)

北区の西端部に位置し、SK7西側上面を切って存在する浅い掘り込み状の土坑である。平面形態は不整楕円形を呈し、検出規模は長軸2.2m、短軸約1.1m、深さ10～18cmを測る。断面形態は浅い皿状を呈し、埋土は褐色黄混粘質土である。出土遺物はない。

SK9 (Fig. 60)

北区の中央南寄りに位置し、SK11の西に隣接するハンダ土坑である。側壁部は消失しており、ハンダによって固められた床面がSK27の床面より検出されたのみである。残存する床面は径1.28mの円形を呈し、円形の床の周囲には側壁を取り除く際にできたと考えられる浅い溝状の落込みが巡っている。検出面よりの深さは42～52cmを測る。埋土は灰褐色粘質土である。床から検出面にかけてSK9埋土の灰褐色粘質土層が円形の輪郭を残しながら堆積し、その周囲には側壁の裏込め土と考えられる礫混じりの褐色粘土がSK9埋土を取り囲む様に存在している。これらの埋土堆積状況から、SK9は遺構廃絶後上面まで一気に埋め戻したものと考えられる。出土遺物としては、灰

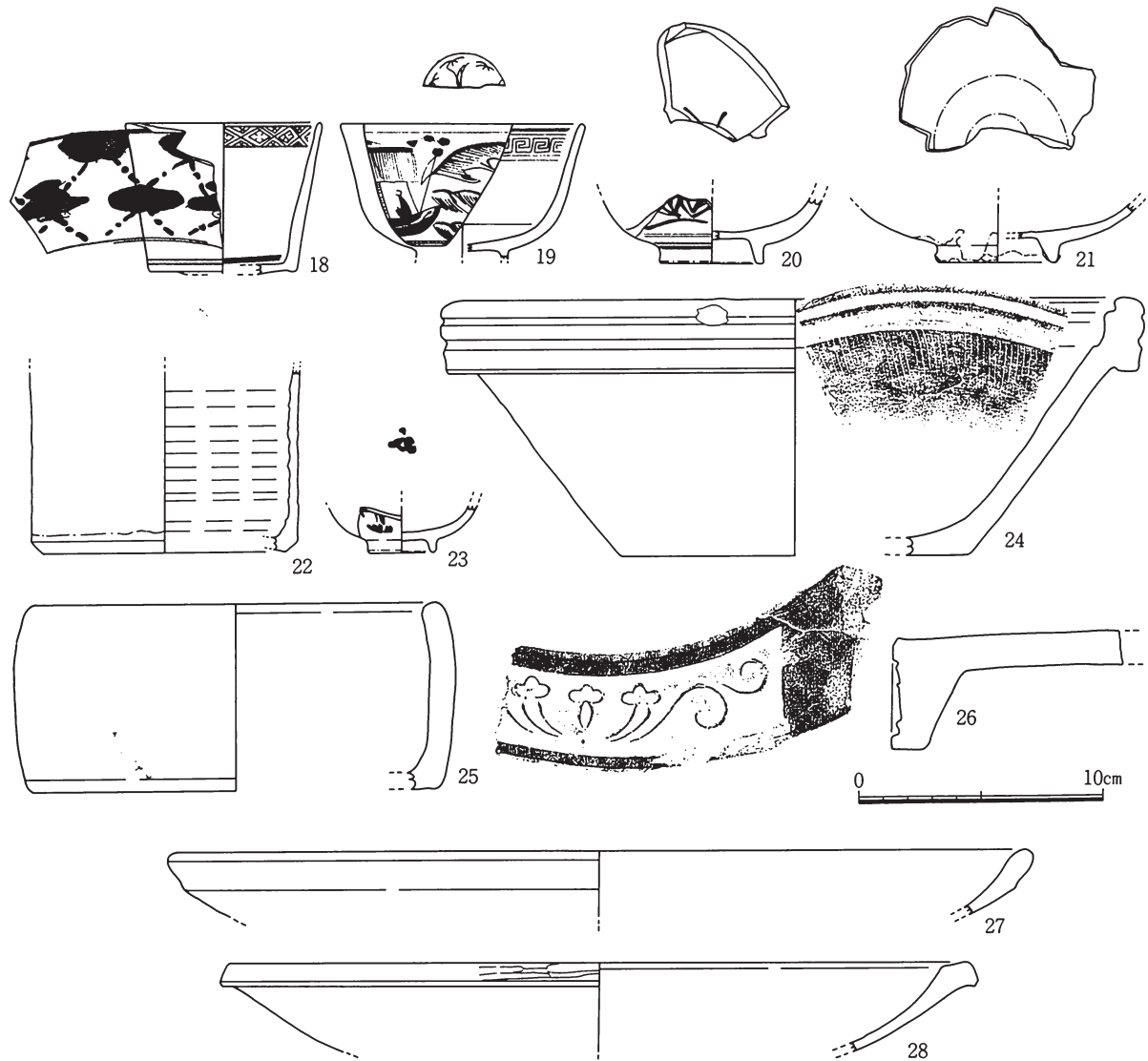


Fig.59 SK 5・7出土遺物実測図(27・28は1/4)
SK 5 (22), SK 7 (18~21・23~28)

褐色粘質土層上層より磁器小皿 1 点 (33)、磁器細片 1 点が出土している。33は磁器染付蛇の目釉剥ぎ小皿で、肥前波佐見窯18世紀後半のものである。

SK10 (Fig. 60)

北区の中央東寄りに位置し、SX 2・SB 3を切って存在する土坑である。平面形態は円形で、検出規模は径1.04m、深さ68cmを測る。埋土は褐灰色粘質土で小礫を多く含む。遺物は埋土中より、磁器底部 2 点、陶器口縁部 1 点、陶器底部 2 点、磁器細片 1 点、雁首銭 1 点が出土している。図示できたものは29~32である。30は肥前系の磁器染付瓶の底部であり、18世紀後半から19世紀初頭のものである。32は肥前系の灰釉碗、31は尾戸産の灰釉碗、29の陶器の灰釉碗は外面鎧手による装飾を施したものであり瀬戸美濃産の可能性をもつ。

SK10は出土した肥前系磁器により18世紀後半から19世紀初頭に位置付けられる。

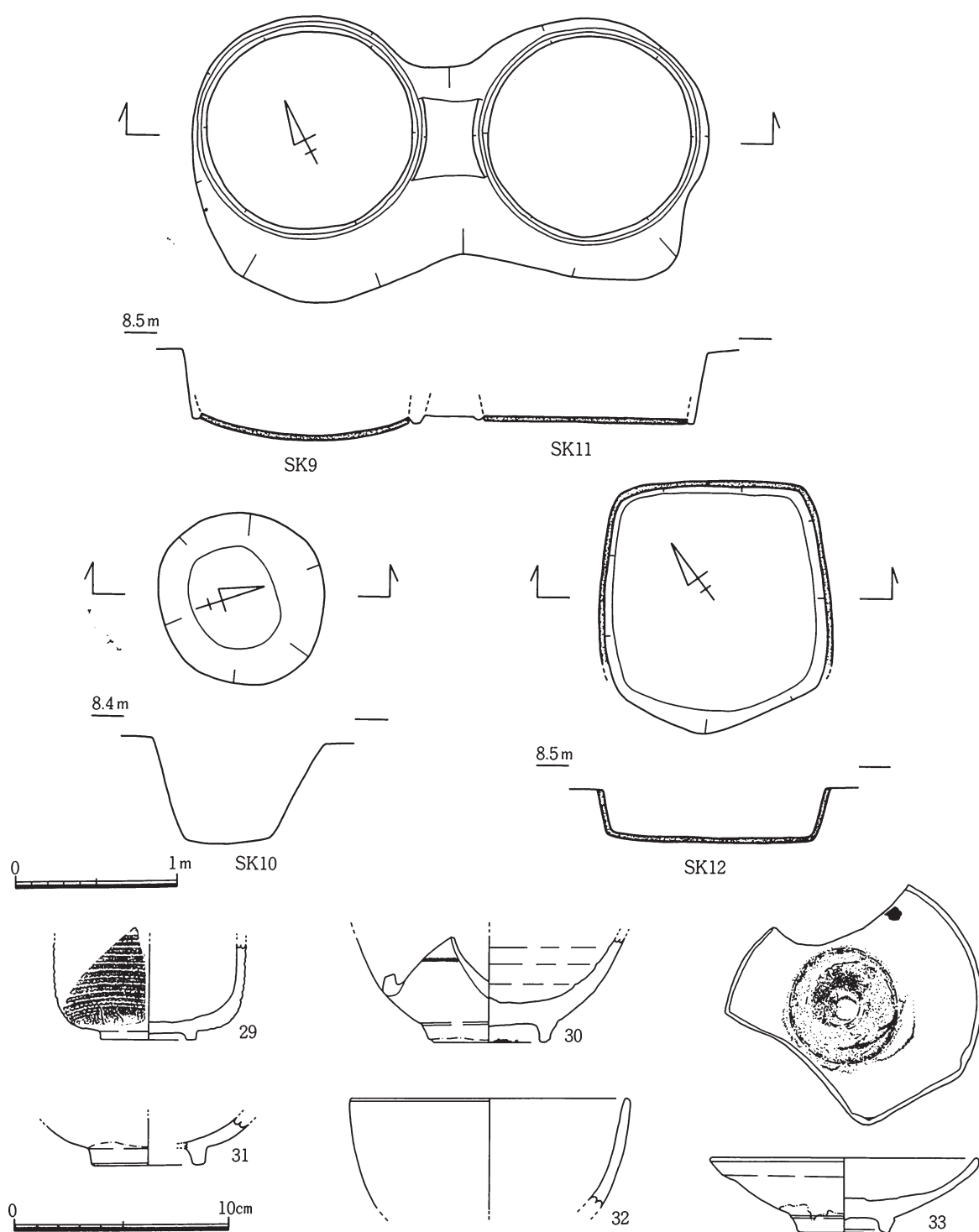


Fig. 60 SK 9～12平面図・エレベーション図及び出土遺物実測図
SK 9 (33), SK10(29～32)

SK11 (Fig. 60)

北区の中央南寄りに位置し、SK 9 の東に隣接するハンダ土坑である。側壁部は消失しており、ハンダによって固められた床面が検出されたのみである。残存する床面の平面形態は円形を呈し、径1.24mを測る。又、円形の床の周囲にはSK 9 と同様の浅い溝状の落込みが巡る。検出面よりの深さは42～52cmである。埋土は灰褐色粘質土であり、堆積状況及び裏込め土の存在等がSK 9 と共通している。

出土遺物はないが、SK 9 との位置関係及び形態・埋土その他の共通性により両土坑は同時期に存在していた可能性が高い。

SK12 (Fig. 60)

北区の北東部に位置し、SK16の北に近接して存在するハンダ土坑である。平面形態は隅丸方形で、検出規模は長径1.58m、短径1.36m、深さ30cmを測る。床面及び側壁は黄色のハンダで固めている。埋土は灰褐色黄混粘質土で拳大の円礫を多く含み、ハンダ崩壊土もブロック状に入る。

遺物は埋土中より陶器の灰釉小皿口縁部1点、灰釉甕胴部細片1点が出土しているが、何れも細片であり図示できるものはない。

SK13 (Fig. 61)

北区の西端に位置し、SB 1 の西に近接する土坑である。西側の一部が調査区外に出ているため全体の形態は不明であるが、平面形態は不整円形を呈し、検出規模は長軸1.18m、深さ32cmを測る。床面に径0.88mの円形のハンダによる床が残存する。埋土は黒褐色黄混粘質土である。

出土遺物としては埋土中より、関西系陶器の灰釉小皿口縁部、同じく灰釉小杯底部と灰釉瓶口縁部が、他に在地産陶器の灰釉土瓶蓋、碗底部（34）、磁器染付の蓋2点、かわらけの口縁部6点と底部4点（36）（35）、銅製のキセル雁首2点（40）（42）、寛永通宝1点、砂岩製の石臼（39）と頁岩製砥石（38）が各1点出土している。この内、染付蓋はSK13の南に接するピットP 6 出土の染付蓋細片と接合関係をもつものである。図示できたもののうち、34は灰釉の呉器形碗で尾戸窯産18世紀後半頃のものである。36・35はかわらけの小皿であるが、このうち35は口縁部下に径3mmの2個の焼成後穿孔が約1.5cmの間隔を空けて並ぶように穿たれている。2個の穿孔の周辺胎土は中央斜め上方に向かって摩耗が見え、穿孔部に紐状の原体を結び使用されていたものと考えられる。破片のため反対側にも穿孔が設けられるものか確認できず、かわらけの用途は不明である。40・42は銅製の煙管の雁首である。42は肩を持たず、脂返しが湾曲しないタイプのものであり、ラウが挿入された状態で出土している。表面の剥離が激しく観察が困難であるが、鑢着部分が側面に僅かに認められる。40も脂返しが湾曲しないタイプのもので、42に比べ脂返しが太く短い。火皿を欠いており、器表の剥離が激しく鑢着痕の観察は不可能であった。40・42は古泉弘氏による編年のV段階（18世紀後半）に該当させることができる。

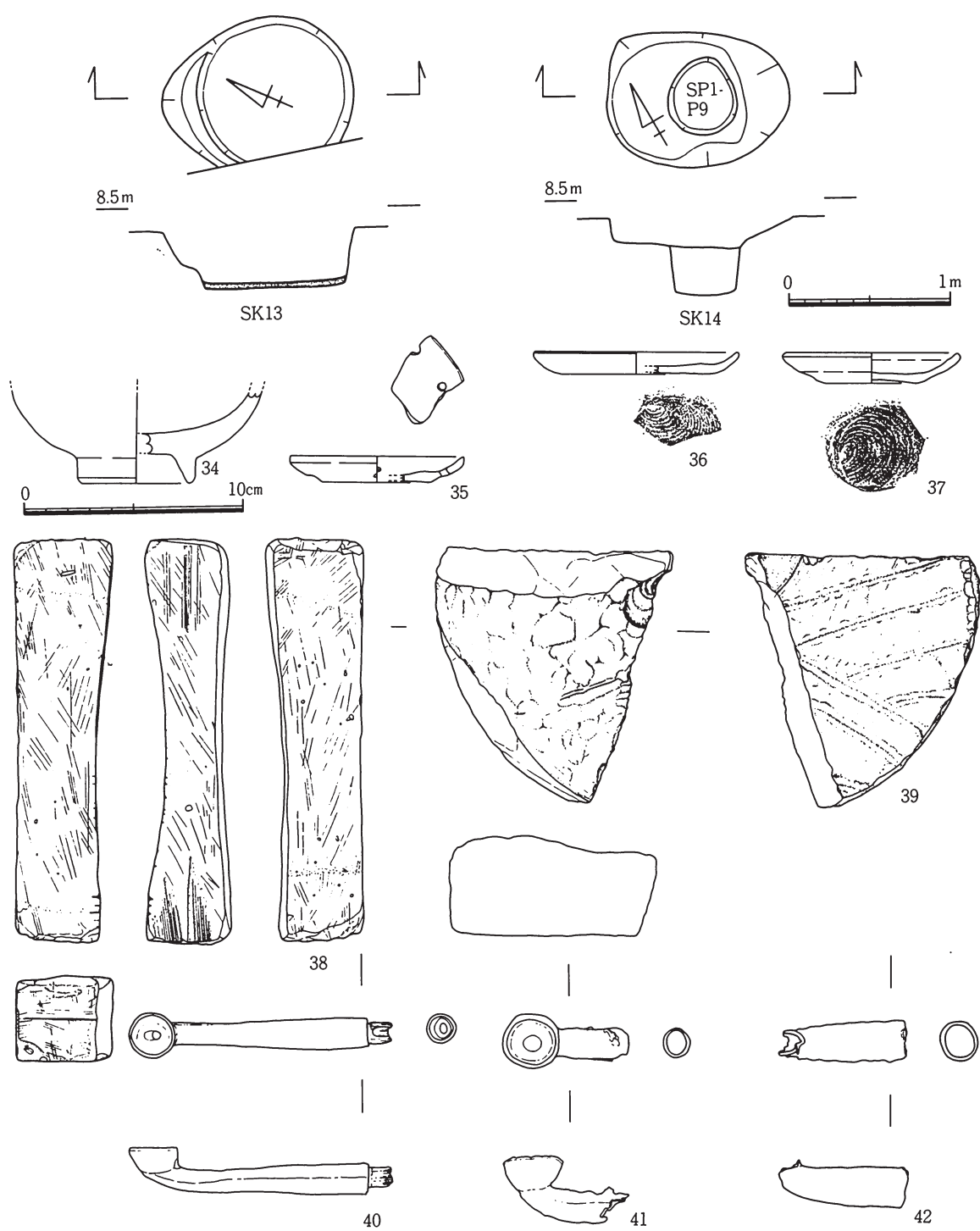


Fig. 61 SK13・14平面図・エレベーション図及び出土遺物実測図(39は1/4, 40～42は1/2)
SK13(34～36・38～42), SK14(37)

SK14 (Fig. 61)

北区の西端に位置する土坑で、SB 5 のピット (P10) の上面を切っている。平面形態は楕円形を呈し、検出規模は長軸1.12m、短軸0.84m、深さ32cmを測る。埋土は濃褐色粘質土で黄色シルトがブロック状に入る。

埋土中よりの出土遺物は肥前系の磁器染付小碗口縁部 1 点、ほぼ完形にまで復元出来たかわらけ 1 点 (37) と細片 2 点、陶器瓶の胴部細片 1 点である。

SK14は埋土出土の肥前系磁器により18世紀末から19世紀前半頃に位置付けられる。

SK15 (Fig. 62)

北区の西端に位置し、SK16の北東に隣接するハンダ土坑である。側壁部はSX 1 によって崩されており、ハンダによって固められた床面がSX 1 の床面より検出されたのみである。残存する床面の平面形態は円形を呈し、径1.20mを測る。SX 1 検出面からSK15床面までの深さは44cmである。円形の床の周囲には幅 6 cm~12cm、深さ 2 ~ 8 cmの溝状の落込みが巡る。周辺のSX 1 床面には破壊された側壁を予想させる多量の円礫とハンダ崩落土が確認されていることから、これらはSK15の側壁を構成する補強用の円礫とハンダを取り除く際にできた窪みと考えられる。埋土はSX 1 の攪乱を激しく受けているため、SX 1 と同一の灰褐色黄混土である。

出土遺物はなく時期の詳細は不明であるが、切り合い関係から19世紀前半頃にはSX 1 によって破壊されたものと考えられる。

SK16 (Fig. 62)

北区の西端に位置し、SK15の南西に隣接するハンダ土坑である。SK15と同様に側壁部はSX 1 によって崩されており、ハンダで固めた床面がSX 1 の床面より検出されたのみである。残存する床面の平面形態は円形を呈し、径1.16mを測る。SX 1 検出面からSK15床面までの深さは42cmである。又、SK15の場合と同様に床の周囲を巡る幅 4 cm~12cm、深さ 2 ~ 8 cmの溝状の落込みが確認されており、取り除かれた側壁の存在が予想できる。埋土はSX 1 の攪乱を激しく受けており、SX

1 と同一の灰褐色黄混土である。

出土遺物はなく時期の詳細は不明であるが、SK 15 との位置関係及び破壊の状況が共通していることからSK 15 と同時期に存在し、19世紀前半頃には遺構廃棄されSX 1 によって破壊されたものと考えられる。

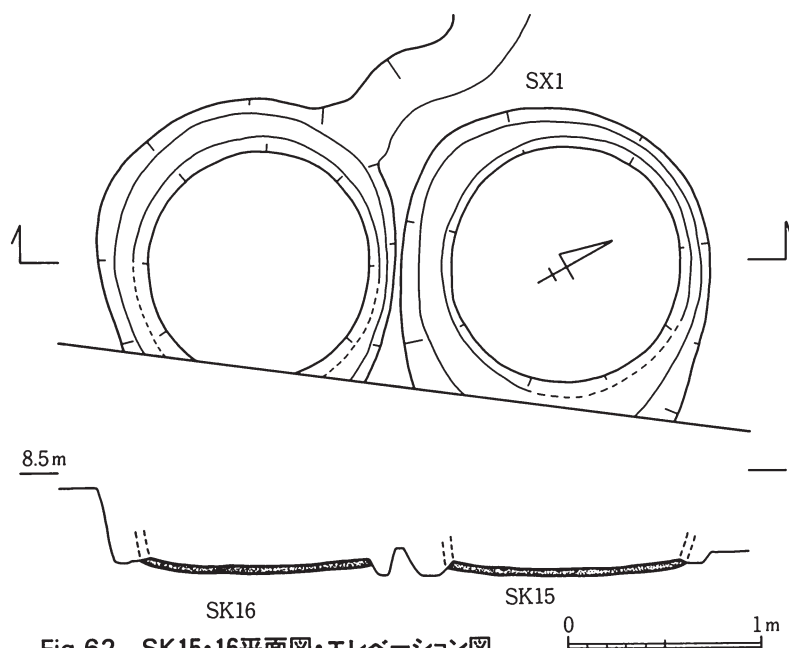


Fig.62 SK15・16平面図・エレベーション図

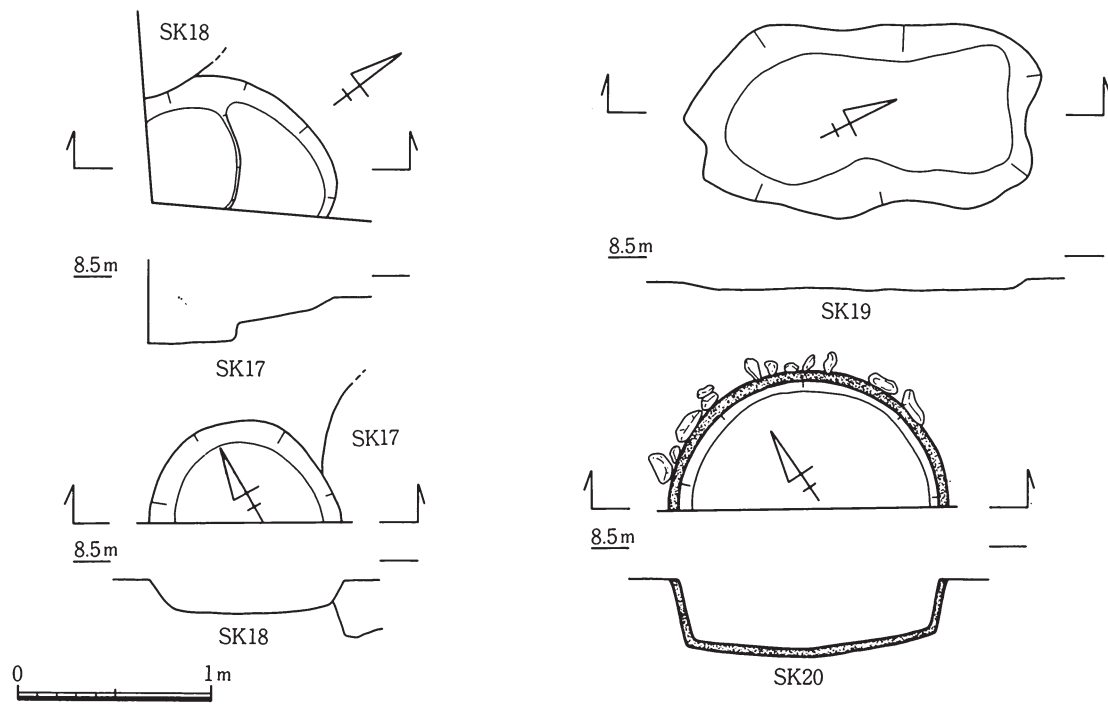


Fig.63 SK17～20平面図・エレベーション図

SK17 (Fig. 63)

北区の北東端に位置し、西に接するSK18と切り合っている土坑である。検出面ではSK18がSK17上面を僅かに切っており、SK17が先行する。南側と東側の一部が調査区外に出ているため全体の規模は不明であるが、平面形態は楕円形を呈するものと予想され、南北確認長0.96m、東西確認長0.74mを測る。床面は北東側にテラス状の段を有し、最も深い部分で深さ24cm、テラス部で14cmを測る。埋土は黒褐色粘質土で、北西側テラス床面から北壁にかけて灰色粘土が認められる。出土遺物はない。

SK18 (Fig. 63)

北区の北東端に位置し、東に接するSK17を切っている土坑である。南側の半分以上が調査区外に出ているため全体の規模を掴むことが困難であるが、平面形態は楕円形を呈するものと予想され、南北確認長0.74m、東西確認長0.92mを測る。断面形態は浅い皿状を呈し、深さ18cmを測る。埋土は灰黄褐色粘質土である。出土遺物はない。

SK19 (Fig. 63)

北区のほぼ中央南寄りに位置する。平面形態は不整楕円形を呈し、長軸1.76m、短軸1.00mを測る。断面形態は浅い皿状を呈し、深さ5cmを測る。埋土は暗灰黄色粘質土である。出土遺物はない。

SK20 (Fig. 63)

北区の南端に位置し、SK21の東に近接するハンダ土坑である。南側半分が調査区外に出ているため全体の規模を掴むことが困難であるが、平面形態は径1.36mの円形を呈するものと予想される。床面は中央部に向かって深くなり、深さ28～36cmを測る。側壁及び床面はハンダで固め、側壁上面は拳大の円礫によって補強している。埋土は灰褐色黄混粘質土である。出土遺物はない。

SK21 (Fig. 64)

北区の南端に位置し、SK20の西に並んで近接する土坑である。南側半分が調査区外に出ているため全体の規模は不明であるが、平面形態は径2.12mの円形を呈するものと予想される。床面は中央へ向かうに従い深くなり、深さ34～42cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は黒褐色黄混粘質土で、埋土中に拳大の円礫を多量に含む。出土遺物はない。

SK22 (Fig. 64)

北区の南端に位置し、SK21の西に近接する土坑である。南側の半分以上が調査区外に出ているため全体の形状・規模は不明であるが、南北確認長0.54m、東西確認長1.44mを測る。床は東側部分にテラス状の高まりを有し、西側で深さ26cm東側で深さ6cmを測る。出土遺物はない。

SK23 (Fig. 64・65)

南区の北東端に位置するハンダ土坑で、南側でSD 6を切っている。北側と東側の半分以上が調査区外に出ており全体の規模は不明であるが平面形態が円形を呈するものと考えられる。南北の確認長は1.02m、東西確認長は1.20m、深さ27～36cmを測る。断面形態は逆台形で、壁は急に立ち上がる。底部及び側壁は厚さ約3～4cmのハンダで固められる。出土遺物は瀬戸美濃産の陶器灰釉小皿(47)と尾戸窯の陶器灰釉碗胴部細片である。

SK24 (Fig. 64・65)

南区の北西に位置する小型のハンダ土坑である。平面形態は円形を呈し、検出規模は径0.76m、深さ22cmを測る。断面形態は逆台形で、壁は急に立ち上がる。底部及び側壁は厚さ約3cmのハンダで固められ、側壁上面を巡る拳大の円礫が部分的に認められる。埋土は灰褐色黄混粘質土であり、埋土中には円礫が多量に含まれる。

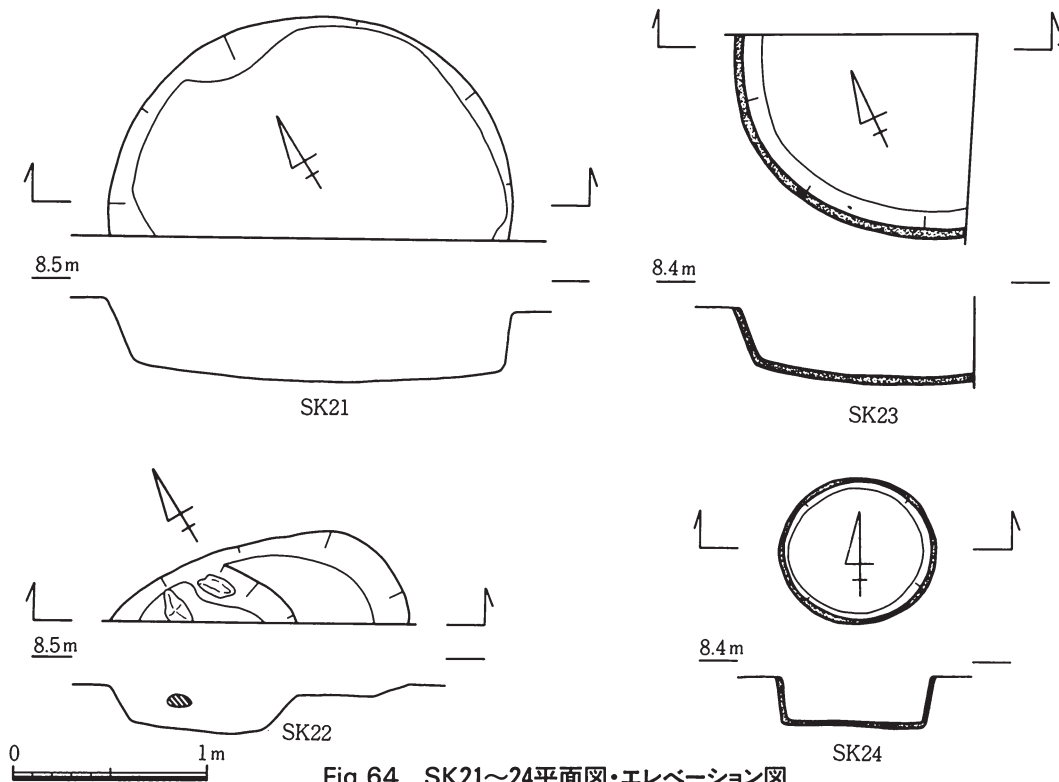


Fig. 64 SK21～24平面図・エレベーション図

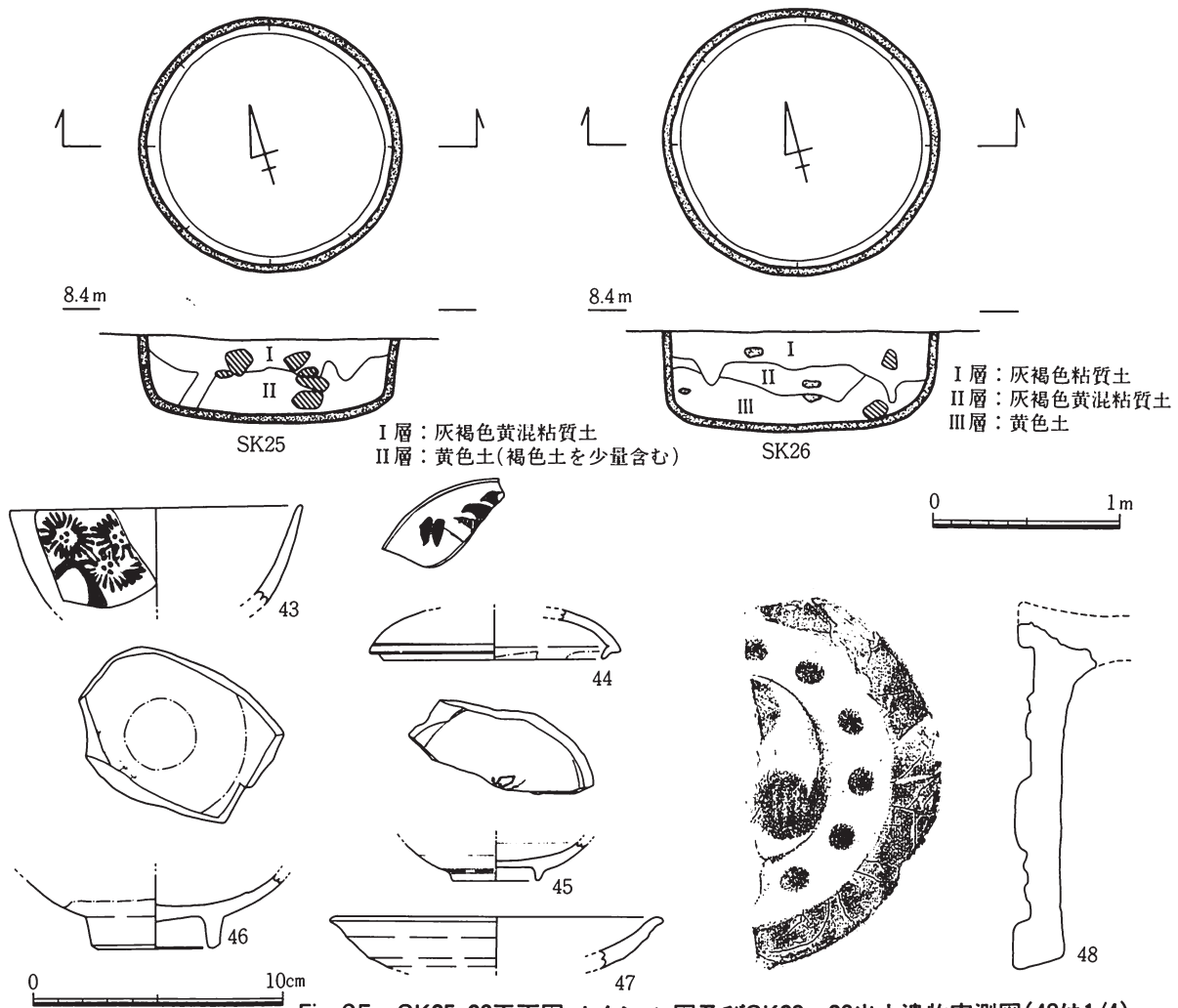


Fig. 65 SK25・26平面図・セクション図及びSK23～26出土遺物実測図(48は1/4)
SK23(47), SK24(44), SK25(43・45・48), SK26(46)

出土遺物としては埋土中より、陶胎染付蓋口縁部1点(44)、平瓦破片1点、鉄滓150gが出土している。44は肥前系陶胎染付の蓋物蓋であり、18世紀後半のものである。鉄滓はSK7・SK13出土のものと形状が非常に類似しており、これらの遺構との関連が予測される。

SK25 (Fig. 65)

南区の北西に位置し、SK26の北に隣接するハンダ土坑である。平面形態は円形で、検出規模は径1.3m、深さ40cmを測る。床は中央がやや深く鍋底状を呈し、側壁は急に立ち上がる。底部及び側壁は厚さ約4cmのハンダで固められる。埋土はI層：灰褐色黄混粘質土、II層：黄色土(褐色土を少量含む)であり、II層はハンダ崩落土である。埋土中には円礫が多量に含まれる。

出土遺物は埋土中より近世陶磁器口縁部3点、底部4点、細片6点、瓦片1点が出土している。図示できたものは43・45・48である。45は肥前系の磁器染付半球形小碗(湯呑碗)であり、18世紀末から19世紀前半のもの、43は瀬戸美濃産の陶胎染付広東形碗で19世紀代のものである。48は軒丸瓦破片で、右巻きの巴文に12～13個の珠文を配したタイプのものである。その他図示できなかったものの中には能茶山産磁器(1820～幕末頃)の口縁部と底部破片、関西系の甕胴部細片、在地産の鉄釉蛇の目釉剥ぎ小皿底部、鉄釉瓶底部、灰釉瓶胴部破片等が含まれている。

以上の出土陶磁器により、SK25は遺構廃絶時期を19世紀前葉から幕末頃の間を求めることができる。

③ 性格不明土坑

SX 1 (Fig. 66・67)

北区のほぼ中央に位置し、西側の一部が調査区外に出ている浅い落込み状の性格不明土坑である。南側部分においてSK15・16の上面を切っており、又、北側でSX 3を、西側でSX 2を切っている。平面形態は不整形を呈し、床はほぼ平らで、側壁は緩やかに立ち上がる。検出規模は南北確認径6.2m、東西確認径3.8m、深さ16～25cmを測る。埋土は灰褐色黄混粘質土であり、南側部周辺の床面にはSK15・16の側壁崩落土と考えられる黄色土と拳大の円礫が多量に認められる。

出土遺物は近世陶磁器口縁部22点、底部4点、細片7点、土師質土器7点である。図示できたものは埋土出土の49～54・56～57である。49は磁器染付の広東形碗蓋で肥前系18世紀末から19世紀前葉のもの、50は白磁の菊花形紅皿で肥前産18世紀末から幕末のものである。52は関西系陶器の灯明皿で灰釉を施し脂溝がアーチ状を呈するもの、53も関西系陶器で灰釉の筒形香炉である。56・54はともに陶器の播鉢であるが、54が堺産、56は在地産のものである。57は土師質の焙烙で無耳・浅型のもの、51は土師質のかわらけ小皿である。この他図示できなかったものには、1920年から幕末頃の能茶山窯産の磁器輪花小皿・陶器小皿、18末世紀から19世紀前葉の肥前産の猪口・紅皿、も含まれている。このうち床面出土は陶器瓶細片1点、土師質土器細片1点のみであり、他は全て埋土中よりの出土である。

以上の出土遺物より、SX 1は19世紀前葉から幕末頃に位置付けられる。

SX 2 (Fig. 66・67)

北区のほぼ中央に位置する浅い落込み状の性格不明土坑である。東側の一部をSX 1に、上面をSB 4のP 3・P 4、SK10によって切られている。又、SB 2・3のピットを切っている。平面形態は不整形を呈し、床はほぼ平らで、側壁は緩やかに立ち上がる。検出規模は南北確認径2.6m、東西確認径3.6m、深さ11～13cmを測る。埋土は褐灰色粘質土である。

出土遺物としては、埋土中より砂岩製砥石が出土している。SX 2の時期の詳細は不明であるが、切り合い関係からSB 4（18世紀後半～末）・SK10（18世紀後半～19世紀初頭）・SX 1（19世紀前葉～幕末）に先行する遺構として位置付けられ、遅くとも18世紀末より以前の遺構として捉えることができる。

SX 3 (Fig. 66)

北区のほぼ中央に位置する浅い落込み状の性格不明土坑である。南側の一部をSX 1に切られており、上面をSB 4のP 1・P 2によって切られている。平面形態は南北に細長い不整形を呈し、床はほぼ平らで、側壁は緩やかに立ち上がる。検出規模は南北確認径5.6m、東西確認径2.0m、深さ8～12cmを測る。

出土遺物はないが、SB 4・SX 1に切られていることから、遅くとも18世紀末より以前の遺構として位置付けることができる。SX 2との前後関係は不明である。

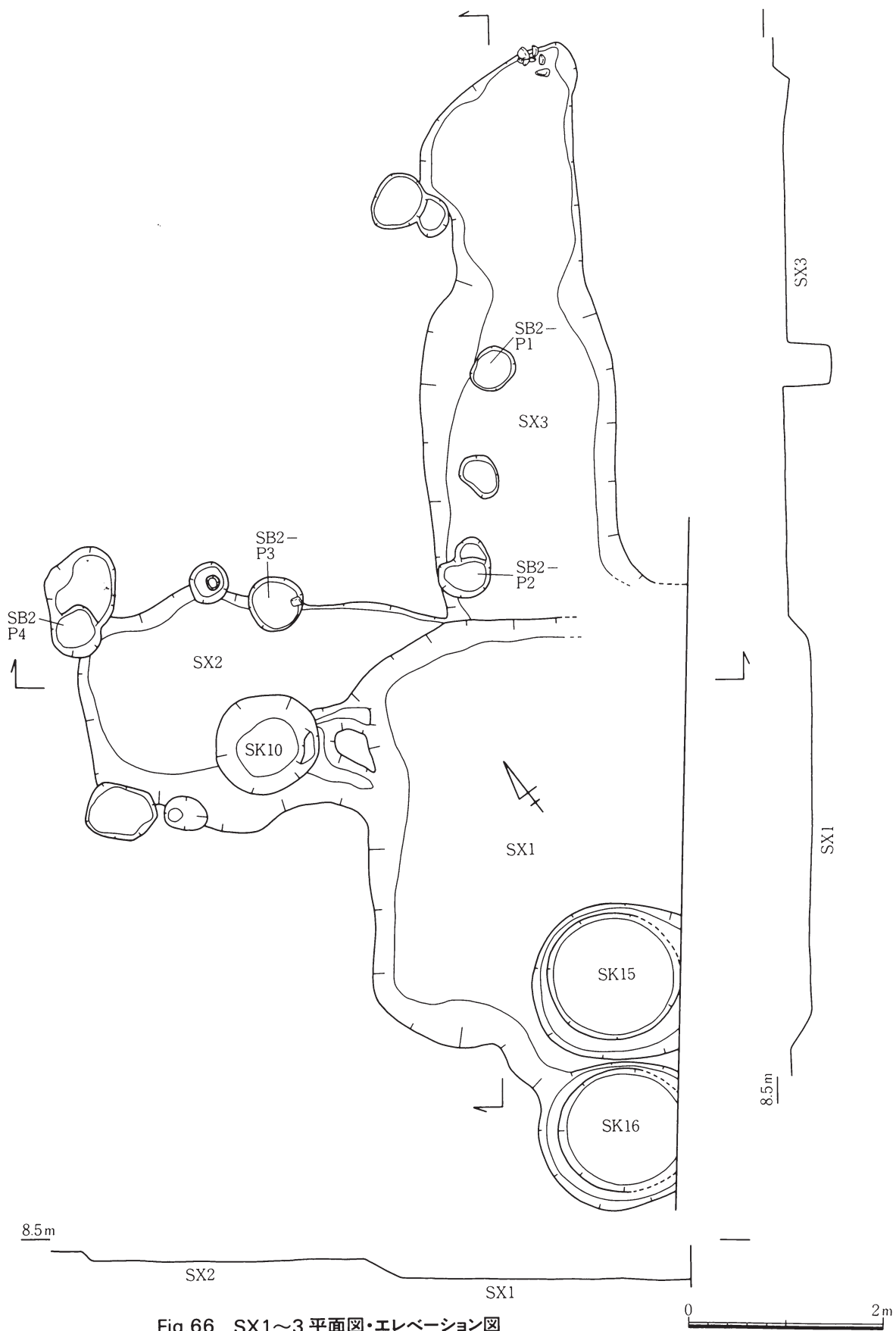


Fig.66 SX1～3 平面図・エレベーション図

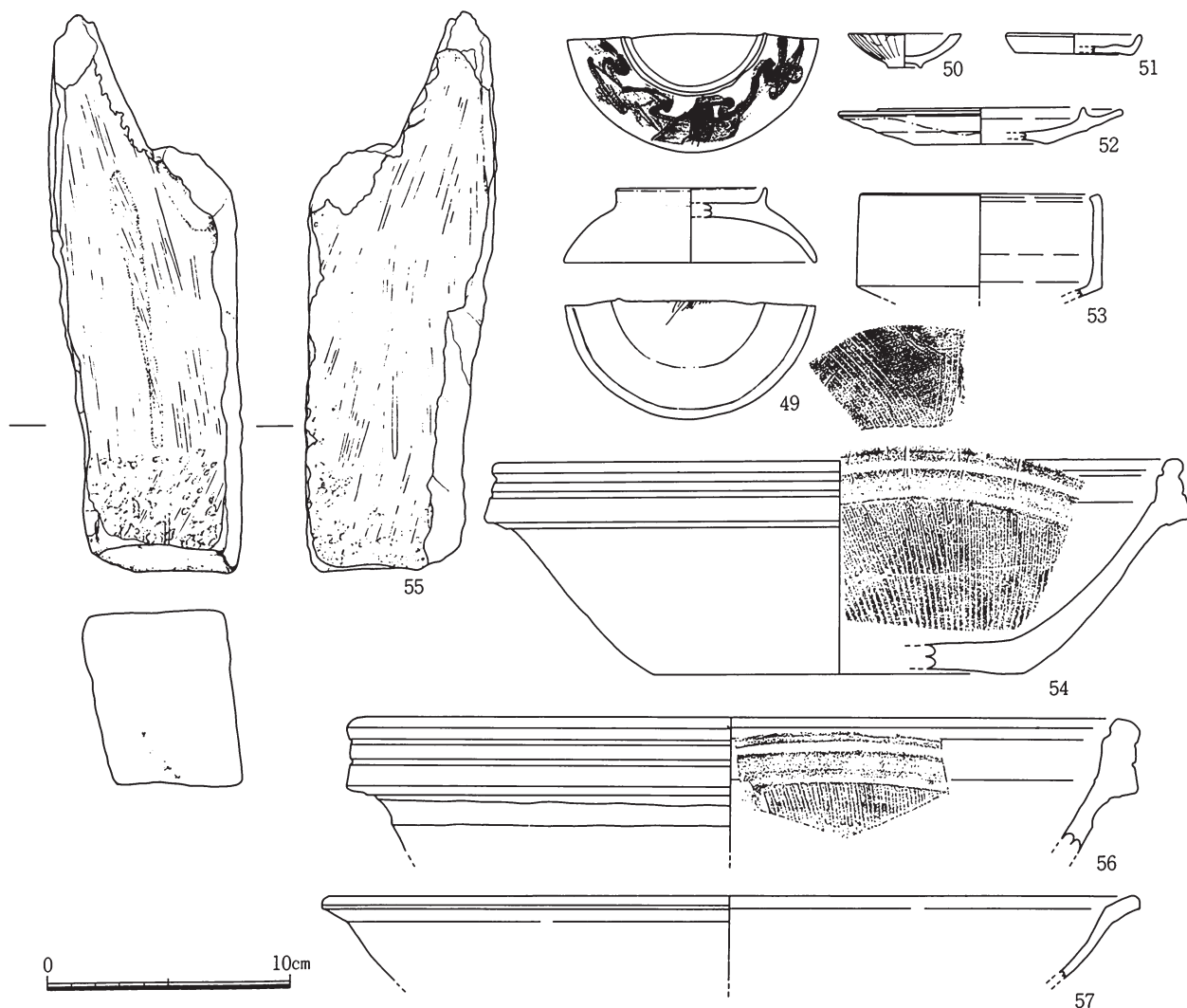


Fig.67 SX1・2出土遺物実測図(56・57は1/4)
SX1(49~54・56・57)SX2(55)

SX 4 (Fig. 68)

南区の中央東寄りに位置する性格不明土坑である。平面形態は楕円形を呈し、側壁は緩やかに立ち上がる。検出規模は長軸2.4m、短軸1.9m、深さは南側の礫層部分が浅く36~44cm、北側の落込み部分が60~68cmを測る。埋土はⅠ層：黒褐色粘質土（黒ボク）、Ⅱ層：暗褐色粘質土、Ⅲ層：褐色黄混粘質土、Ⅳ層：濃褐色粘質土、Ⅴ層：暗褐色砂礫土、Ⅵ層：明褐色砂礫土である。SX 4は全体が黒褐色から濃褐色の粘質土層部分（Ⅰ~Ⅳ層）と、拳大から人頭大の円礫を多量に含む砂礫層部分（Ⅴ~Ⅵ層）に大きく分かれ、これらの埋土がⅠ層の黒褐色粘質土層を巻き込むような状態で堆積している。

SX 4と同様の埋土堆積状況をもつものは他に南区のSX 5~8があり、ともに出土遺物は認められない。SX 4~8は時期・性格とも不明であり、人為的遺構でない可能性も考え得る。

④ 溝

SD 1 (Fig. 69・70)

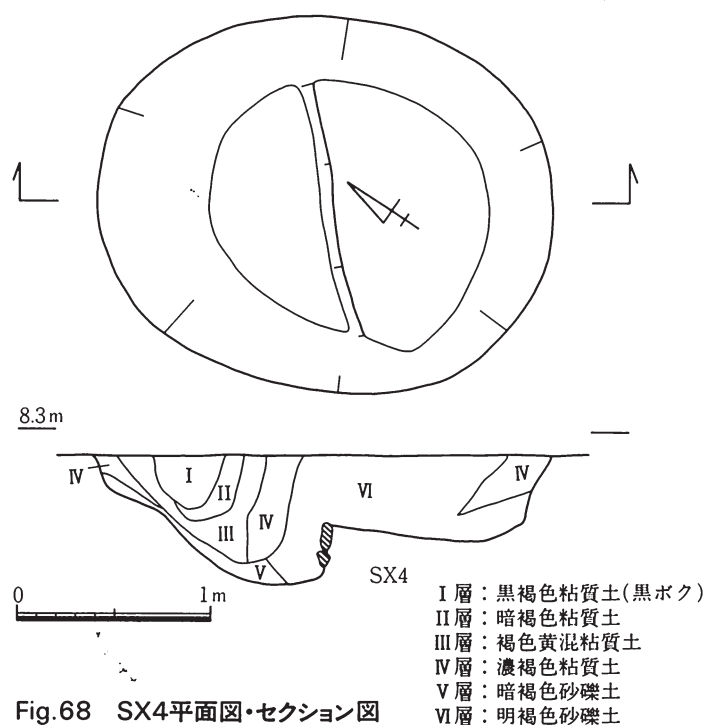


Fig. 68 SX4平面図・セクション図

60は陶器の端反形蛇の目釉剥ぎ小皿であり、何れも19世紀のものである。その他図示できなかったものには肥前産の白磁菊花形紅皿等も含まれている。

SD 1は埋土出土の遺物より、18世紀末から19世紀初頭頃にはすでに溝としての機能が停止し上層まで没したものと考えられる。

SD 2 (Fig. 69)

南区の南西端から中央へ向かってほぼ南北方向に延びる溝であり、近世の溝状遺構群を切って存在する。主軸方向はN-34°-Eであり、南端部で溝東西方向のSD 3・SD 4とほぼ垂直に連結している。確認延長は49m、検出規模は幅60cm、深さ10~14cmを測る。埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物はない。

SD 3 (Fig. 69)

南区の西端から中央へ向かってほぼ東西方向に延びる溝である。主軸方向はN-62°-W、東端ではSD 2と連結し、西端で調査区外に出ている。確認延長は17.6mであり、検出規模は幅76cm、深さ10cmを測る。埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物はない。

SD 4 (Fig. 69)

南区の中央部をほぼ南北から東西方向に延びる溝であり、近世の畝状遺構を切って存在する。南端部で直角に折れ西に軸方向を変えており、北端では消失し、西端で調査区外に出ている。軸方向は南北軸がN-34°-E、東西軸がN-63°-Wである。SD 2・SD 3とは軸方向を同じくし、約4mの間隔で近接しながら平行に延びる。又、各々とは垂直に連結し合っている。確認延長は63mであり、検出規模は南北軸で幅64cm、東西軸で幅74cm、深さは各々16cm・26cmを測る。埋土は灰褐色

北区の北に位置する溝である。主軸方向はN-56°-Wでありほぼ東西方向となる。確認延長は14mであり、東西端で調査区外に出ている。検出規模は幅60cm、深さ6~12cmを測る。埋土は濃褐色粘質土であり、F-24グリットでは床面に多量の円礫が認められる。

出土遺物は埋土中より、近世陶磁器口縁部4点、底部3点、細片13点、土師質土器細片7点が出土しているが、何れも上層よりの出土である。図示できたものは58~61である。59は肥前産の磁器半筒形小碗で、18世紀末から19世紀初頭のものである。58は陶器鉢、

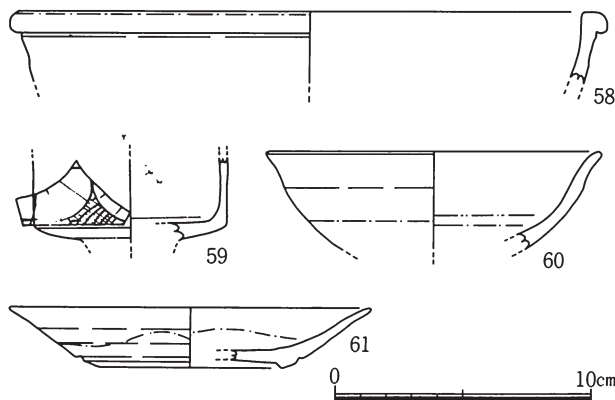
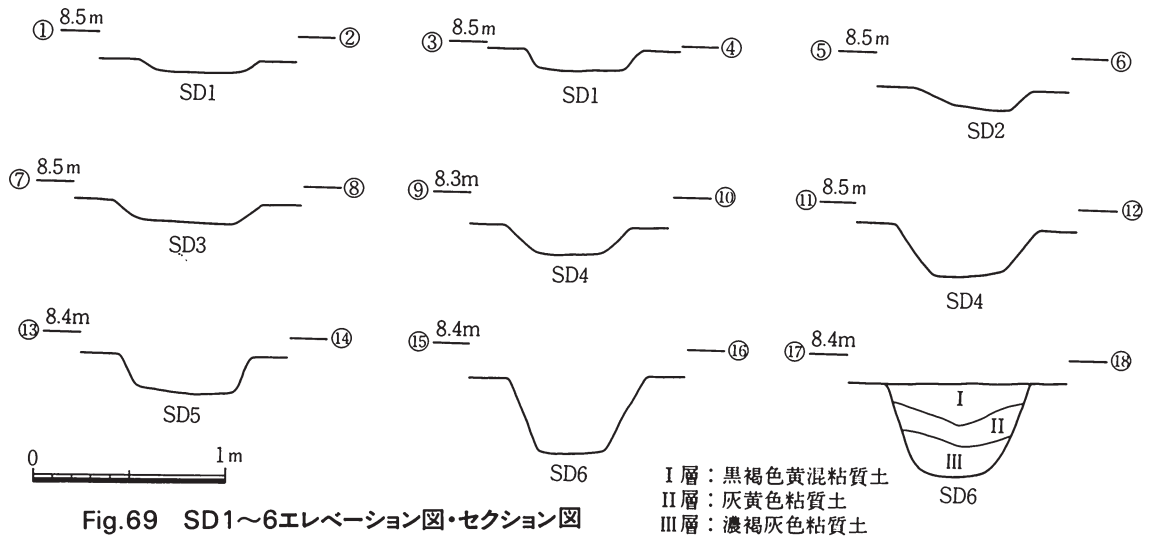


Fig. 70 SD1・畝D4出土遺物実測図
SD1(58~60), 畝D4(61)

確認延長は30.4mであり、検出規模は幅68cm、深さ20cmを測る。埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物はない。

SD 6 (Fig. 69)

南区の東端に位置し南北方向に延びる溝で、南端で調査区外に出ており、北端ではSK23（18世紀後半）によって切られている。主軸方向はN-35°-Eである。確認延長は26.4mであり、検出幅は北で70cm、南では幅を増し88cmを測る。検出面からの深さは42~70cmである。埋土はI層：黒褐色黄混粘質土、II層：灰黄色粘質土、III層：濃褐灰色粘質土である。

出土遺物としては下層より近世陶器1点、土師器1点、棒状の鉄製品1点が出土しているが、陶器・土師器ともに細片である。SD6はSK23との切り合い関係により18世紀後半頃には遺構廃絶されたものと考えられる。

⑤ 畝状遺構 (Fig. 70・71)

南区の中央から南東部にかけて軸方向・埋土・規模等に共通性をもつ溝状の遺構群が広域に認められる。これらは溝状の形態をなすものの、暗褐色粘質土を埋土とし、床面の砂の堆積・還元層等の水路としての活動痕跡を残すものがないため、ここでは他の溝とは性格の異なるものとして区別

して取り上げる。畝状遺構群は主軸方向により大きく南北軸・東西軸の2グループに分かれるため、南北軸をA群、東西軸をB群とする。各々の畝状遺構の中には途中で途切れる短い溝状の単位も認められるが、同延長上にあるものは1条の畝単位として扱い便宜上西からD1～D17と名称付けた。

畝状遺構A群（D1～D7）

南区の中央に位置する南北方向の畝状遺構群であり、主軸方向をN-23°-Eにもつ畝が7条検出されている。遺構の残存状況は良くなく、上面が強い削平を受けている。又、中央部は近世の溝SD2・SD4によって切られている。各畝D1～D6は各々の間隔を1.5～1.8mに保ちながら並行して延びている。一方D6～D7間のみは2.9m間隔となっており、両者間にさらに1条が存在していたことも予想される。D1～D7の検出規模は幅36～48cm、深さ9～18cm、確認長は最も長いD4・D5で約18mである。埋土は全て暗褐色粘質土であった。

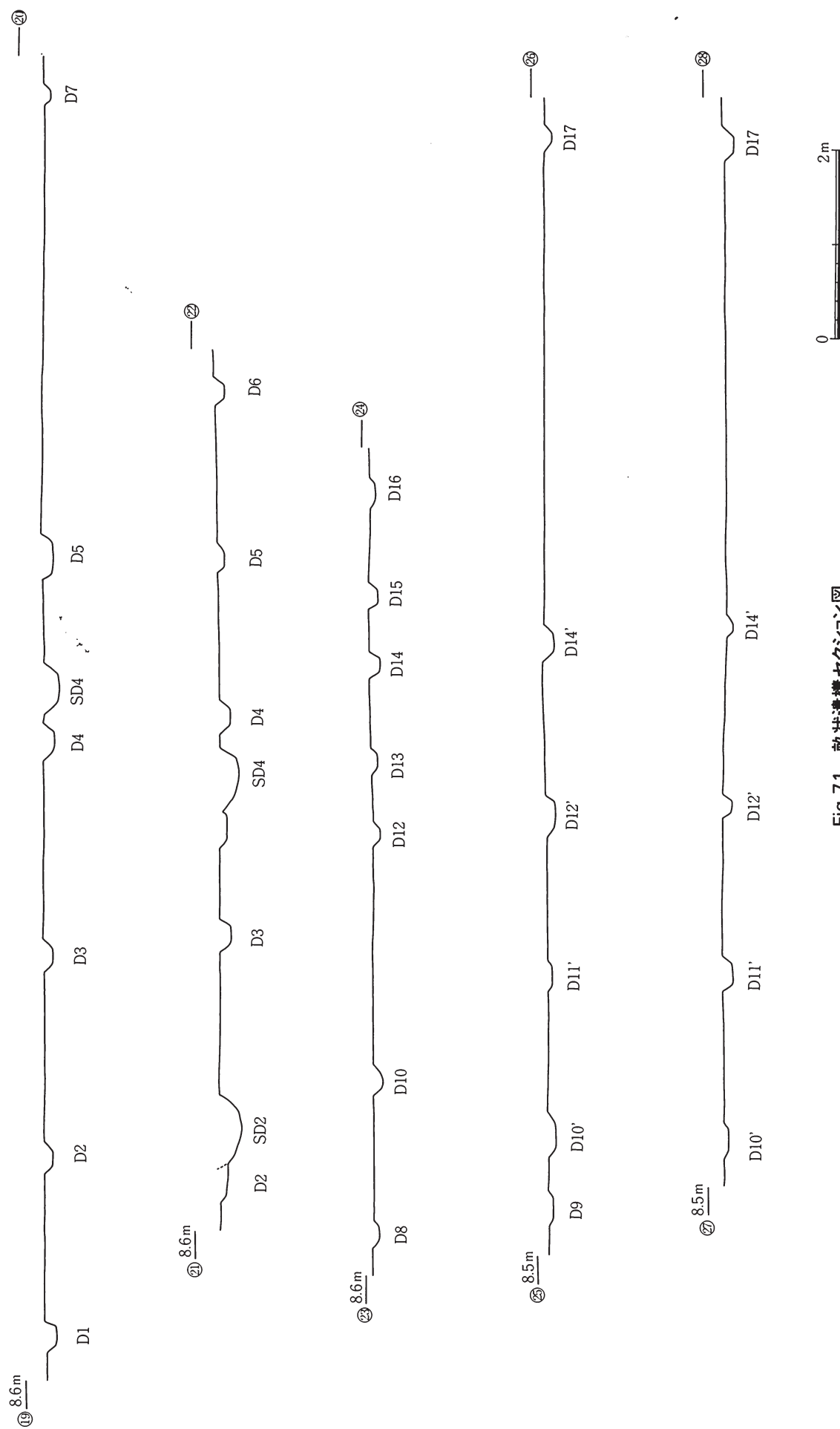
出土遺物としてはD4床より1～2cm浮いて白磁皿（61）が、D5床面より須恵器の杯口縁部1点・甕胴部細片1点が出土している。61は輸入白磁皿の底部から口縁部にかけての破片であり、内外面体部下半が露胎したもので時期は17世紀代のものである。

畝状遺構B群（D8～D17）

A群の南側に広がる東西方向の畝状遺構群である。主軸方向はN-64°-Eであり、D8～D17が検出されている。遺構残存状況はA群と同様で、上面が削平を受ける。又、D9・10がSD4に、D17がSD5によって切られている。又、B群は中央部で遺構が消失しており、東西2グループにさらに分かれる。削平のため途中から消失している短いものも含めると東西で14条の畝の単位を確認出来るが、そのうち東西のD10とD10'・D11とD11'・D12とD12'・D14とD14'を同一延長上のものとして各々対応させることができる。検出規模は幅24～48cm、深さ4.5～9cm、確認延長はD17で15.3mである。埋土はA群と同様の暗褐色粘質土である。

出土遺物はないが、切り合い関係によりSD4・SD5に先行する遺構として位置付けることができる。又、D10・D11が西端で軸方向を変えA群と同軸を示していること、埋土・規模・単位間隔の共通性などからB群とA群はほぼ同時期に活動していた可能性が高い。

又、遺構の性格としては、他の溝とは異なる暗褐色の埋土、及び、浅い溝状の落込みが一定の間隔・同軸性をもって並行し広がるという形態的特徴により、畑の畝等が想定される。



③ ピット (Fig. 72)

ピットは98個検出したが、このうち出土遺物の得られたP 1～P 7までを図示した。これらのピットは多くが北区に集中しているが、位置関係や深さ・埋土等から掘立柱建物の柱穴に該当しないものであり、各々が不規則に分布している。

P 1

北区の中央北寄りに位置し、SB 1 のP 2 と切り合って存在する。平面形態は長径96cm、短径70cmの規模をもつ楕円形を呈し、深さ18cmを測る。埋土は褐色粘質土である。埋土中より、土師質の焙烙破片 1 点が出土している。

P 2

北区の中央東寄りに位置し、P 3 に切られて存在する。平面形態は長軸確認径40cm・短径40cmの楕円形を呈し、深さ22cmを測る。埋土は黒褐色黄混粘質土である。埋土中より、磁器染付細片 1 点・砥石 1 点が出土している。

P 3

北区の中央東寄りに位置し、P 2・SB 2 のP 1 を切って存在する。平面形態は長径62cm、短径52cmの規模をもつ楕円形を呈し、深さ40cmを測る。埋土は黒褐色黄混粘質土である。埋土中より、かわらけ底部 1 点が出土している。

P 4

北区の南西部に位置し、SB 5・SK14に近接して存在する。平面形態は長径34cm、短径30cmの規模をもつ楕円形を呈し、深さ16cmを測る。埋土は灰黒色粘質土である。埋土中より、かわらけ底部 1 点が出土している。

P 5

北区の南西部に位置し、SB 5・SK13・14に近接して存在する。平面形態は径34cmの円形を呈し、深さ24cmを測る。埋土は黒褐色黄混粘質土である。埋土中より、磁器染付口縁部 1 点が出土している。

P 6

北区の南西部に位置し、SK13に近接して存在する。平面形態は径40cmの円形を呈し、深さ20cmを測る。埋土は黒褐色黄混粘質土である。埋土中より、磁器染付蓋 1 点、瓦片 3 点が出土している。染付蓋はSK13出土の蓋と接合関係を持つ。

P 7

南区の北寄りに位置し、SX 7・畝状遺構A群に近接して存在する。平面形態は長径60cm、短径46cmの規模をもつ楕円形を呈し、深さ24cmを測る。埋土は灰褐色黄混粘質土である。埋土中より、陶器口縁部 1 点が出土している。

⑦ 遺構外出土の遺物 (Fig. 72)

包含層より出土した遺物を、遺構外出土遺物として図示する。

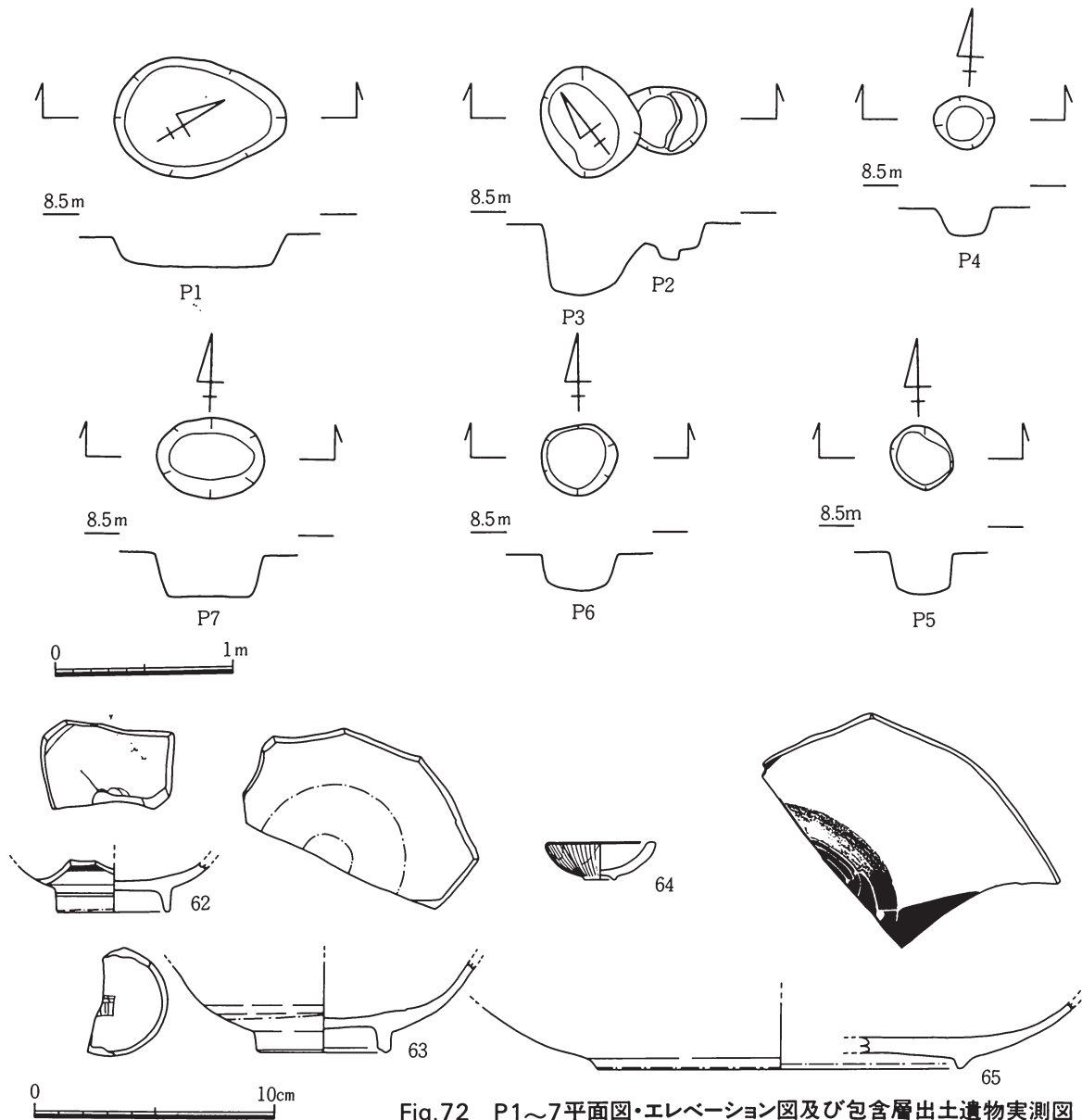


Fig.72 P1～7平面図・エレベーション図及び包含層出土遺物実測図

(3) 小結

① 遺構の時代区分

各々の遺構は遺構出土遺物を基本として遺構廃絶年代の推定を行った。本調査区においては各遺構とも床面出土遺物が検出された例は非常に少なく、年代推定の多くは埋土中出土遺物によってい。年代判定に用いた資料は製作年代を限定できる遺物、具体的には肥前系陶磁器・瀬戸美濃系陶磁器・在地の能茶山窯磁器と尾戸窯陶器・煙管等である。又、遺物が得られなかった遺構については、切り合い関係により大まかな年代軸を掴んでいる。時期比定が可能であった遺構は次の通りである。I期(17世紀代)：畝状遺構A・B群。II期(18世紀前半)：SB1・SB2又は3・SK1・SK3。III期(18世紀後半)：SB3又は2・SB4・SK2・SK9・SK10・SK11・SK13・(SK23)・SK24・SX2・SX3。IV期(18世紀末～幕末)：SB5・SK4・SK7・SK8・SK14・SK15・SK16・(SK23)・SK25・SK26・SD1・SX1

以上の他に年代推定が不可能であった遺構が多く存在しているが、軸方向・位置関係・埋土等の

共通性により殆どがⅡ～Ⅳ期の間に該当する可能性が高い。

④ 遺構の変遷

以上の年代軸を踏まえながら特筆すべき遺構について以下説明を加えておきたい。

○17世紀代の遺構

南区に広がる畝状遺構を挙げることができる。出土遺物が非常に少なく時期決定資料は下層出土の17世紀の輸入白磁皿1点のみであるが、18世紀以降出現する他の遺構群と軸方向が異なる点、SD 3～5によって切られている点等から、17世紀後半以前の遺構として位置付けた。

○18世紀～幕末の遺構

溝は6条検出された。最も規模の大きい南北方向の溝SD 6は他の溝群と軸方向が僅かにずれ、規模・埋土共に異なる。SK 23によって切られていることから、SD 6は18世紀後半から末頃にはすでに埋没していた可能性が高い。一方SD 1～5は何れも共通した軸方向・規模をもつ。埋土は北区のSD 1（廃絶年代18世紀末～19世紀初頭）がやや異なるが、南区のSD 2～5は共通している。これらの溝は南北軸は真北より東に34°～35°、東西軸は北に27°～34°のずれをみせており、他の遺構群もこの軸方向に沿って構築されている。遺構群のうち最も早く現れるSB 1・SK 1が18世紀前半以前のものであることから溝の構築年代も18世紀前半又はそれ以前に求められるものと考えられる。17世紀の畝状遺構を切っていること、文献上に記された野中兼山による長岡台地での灌漑用水設営事業の完成が17世紀中頃であることとも照合させると、東西方向の溝SD 1～SD 6は遺構廃絶時期に多少のずれはあるものの、17世紀中頃～末の間に設営され、以後150年余りにわたってこの地域の遺構の軸方向を決定付けたものと思われる。

堀立柱建物は5棟確認することができた。これらは年代判定資料と遺構間の切り合い関係により、SB 1（18世紀前半以前）→SB 2・3（18世紀前半～後半）→SB 4（18世紀後半）→SB 5（18世紀末～19世紀前半）という流れを掴むことができる。各建物は南北軸・東西軸ともにSD 1～6とほぼ共通した軸方向をもち、出現時期の早いSB 1・2・3は掘り方の浅い柱穴を含み小規模であるが、続くSB 4・5になると柱穴の掘り方も深くしっかりしたものに変化し建物の規模も大型化する。この年代と規模との関係から照合すると、前後関係が不明のSB 2と3ではやや規模の小さいSB 2の方が先行する可能性が高いと言える。なお、廃絶時期に以上の年代順を設定したが、SB 1と2、4と5は廃絶時期にずれをもちながらも同時期に存在していた可能性を僅かに残している。この建物の同時性を考慮に入れず廃絶順に区分すると、これらの堀立柱建物は20～25年の間隔をもって立て替えが行われたと考えられる。

以上の溝・建物を基本としてその周辺に土坑・ピット等が散在する。ハンダ土坑は2個が組となったものも多い。これらは多くが建物周辺に集中し建物群との何らかの関係が伺われるが、これらのハンダ土坑の用途及び性質の解明については今後課題を残している。

これら堀立柱建物をはじめとする遺構群の用途がハンダ土坑と関連した作業施設であるのか、居住空間として利用されたものかは出土遺物等からは判然としない。しかし、SK 7・24・26、SX 1、P 6より多くの陶磁器と共に瓦片が出土していることから、当時近辺には瓦葺建物が存在していたことが予想される。

V 区出土遺物観察表

遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種／ 器形	法 量(cm)				成形技法／ 調整 内面／外面	釉薬・絵付 内面／外面	胎 土	特 徴	産 地	年 代	備 考
						口径	器高	胴径	底径							
1		62	SB5	陶器	中皿 端反り 形	20.7				ロクロ成形・ 外面ロクロ 目顕著	白化粧土刷毛 目・透明釉	鈍い黄褐色・剝 離面はやや荒い・ 微細な裂孔が多く 存在	細かな貫入が入る。	肥前系	19世紀	
2		62	SB4	陶器	碗 具器形				4.8	ロクロ成形・ 外面ロクロ 目顕著	灰釉	灰黄色・剝離面 は荒い・裂孔が 僅かに存在	粗い貫入が入る。	尾戸	18世紀	
3		62	SB4	陶器	碗	14.6				ロクロ成形	灰釉	灰黄色・剝離面 はやや荒い・ 裂孔が僅かに 存在	貫入が入る。			
4		62	SK3	磁器 染付	碗 端反り 形	12.0				ロクロ成形	(内)帯線に連 弧状の文様 (外)区画内に 花卉文	白色・やや透明 感をもつ・剝離 面はやや荒い・ 円孔が存在		肥前系	1820～ 幕末	
5		62	SK2	磁器 染付	碗 丸形	15.0				ロクロ成形	(外)丸文	白色・やや透明 感をもつ・剝離 面はやや荒い	くらわんか手。	波佐見 系	18世紀 後半	
6		62	SK2	陶器	碗	12.8				ロクロ成形・ 外面ロクロ 目顕著	白化粧土・灰 釉	浅黄色・剝離面 は非常に荒い・ 規模の大きな裂 孔多量	粗い貫入が入る。	瀬戸美 濃系か		
7		62	SK3	陶器	碗 丸形	11.5				ロクロ成形・ 外面体部下 半削り痕顕 著	白化粧土を斜 め掛け掛け・ 透明釉	黒褐色・剝離面 は荒い・円・ 裂孔が多く存在		肥前系	18世紀 前半	
8		62	SK2	陶器	碗 筒丸形	12.6				ロクロ成形	灰釉	灰黄色・剝離面 はやや荒い・ 微細な円孔が 存在	体部外面に1条沈 線。釉は貫入が入 る。	尾戸か		
9		62	SK1	陶器	碗 具器形	14.0				ロクロ成形	灰釉	灰黄色・剝離面 は荒い	釉は貫入が入る。	肥前	17世紀 後半～ 18世紀 前半	
10		62・ 73	SK1	磁器 染付	仏飯器	7.0	6.0		3.7	ロクロ成形	(外)菊散らし 文	白色・やや透明 感をもつ・剝離 面はやや荒い	台底は半球状の凹 みをもつ。	肥前系	1700～ 1730	
11		62	SK3	陶器	大皿				20.5	ロクロ成形	白化粧土刷毛 目・透明釉	黒褐色・剝離面 はやや荒い・円 裂孔が僅かに存在	細かな貫入が入る。	肥前	18世紀 前半	
12		62	SK2	陶器	瓶 辣韭形			17.5		ロクロ成形	飴釉流し掛け・ 白濁した淡黄 色の釉	鈍い赤褐色・剝 離面は荒い・微 細な円孔が存在		能茶山		16と同一個体
13		62	SK2	陶器	播鉢				14.0	ロクロ成形	見込みに櫛目	赤褐色・剝離面 は荒い・規模の 大きな裂孔多数・ 石英、長石の粗 粒を多く含む		堺		内面は摩耗し、 刷毛単位を観 察不可能。
14		62	SK3	陶器	小皿				4.4	ロクロ成形	緑釉(銅緑釉)	灰白色・剝離面 はやや荒い	見込み蛇の目釉剥 ぎ	内野山	17世紀 末～ 18世紀 前半	
15		62	SK2	陶器	碗				4.5	ロクロ成形	(内)緑釉 (外)黄釉	灰黄色・剝離面 は非常に荒い・ 円裂孔多量	鎧手	瀬戸・ 美濃		疊付に砂が付 着。
16		62	SK2	陶器	瓶				7.2	ロクロ成形	(内)露胎・底 部灰釉 (外)白濁淡黄 色の釉	鈍い赤褐色・剝 離面は荒い・微 細な円孔が存在		能茶山 か		12と同一個体
遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種／ 器形	法 量(cm)			重量 (g)	特 徴						
						全長	全幅	全厚								
17		64	SK4	銅製品	煙管 吸口	5.3	1.0	1.0	5.8	ラウ装着部から吸口部分に向かい湾曲しながら窄まる。						
遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種／ 器形	法 量(cm)				成形技法／ 調整 内面／外面	釉薬・絵付 内面／外面	胎 土	特 徴	産 地	年 代	備 考
						口径	器高	胴径	底径							
18		62・ 73	SK7	磁器 染付	猪口 桶形	8.0	6.1		6.0	ロクロ成形	(内)四方禪 (外)竹・雀文	白色・やや透明 感をもつ・剝離 面はやや荒い・ 円孔が存在		肥前	1780～ 1840	

Ⅴ区出土遺物観察表

遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種/ 器形	法 量(cm)				成形技法/ 調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎 土	特 徴	産 地	年 代	備 考
						口径	器高	胴径	底径							
19		62	SK7	磁器 染付	碗 端反り 形	9.9				ロクロ成形	(内)環状松竹 梅文・雷文 (外)波・船・ 人物文	白色・やや透明 感をもつ・剝離 面はやや荒い		肥前系		
20		62	SK7	磁器 染付	碗				4.2	ロクロ成形	不明	白色・やや透明 感をもつ・剝離 面はやや荒い・ 円孔が僅かに存在		肥前系		
21		62	SK7	陶器	小皿				4.8	ロクロ成形	白濁した透明 釉	褐灰色・剝離面 はやや荒い・微 細な裂孔が僅かに存在	見込み蛇の目釉剥 ぎ。畳付け周辺に 砂付着。	関西系		
22		62	SK5	陶器	徳利				9.8	ロクロ成形 内外面ロクロ 目顕著	(内)柿釉・底 部露胎 (外)柿釉	灰白色・剝離面 はやや荒い		在地産		
23		62	SK7	磁器 染付	小杯				2.6	ロクロ成形	(内)宝文か (外)草花文	透明感をもつ白 色・剝離面は滑 らか・円孔が存在		瀬戸・ 美濃		
24		62	SK7	陶器	播鉢	17.0	10.5		14.0	ロクロ成形		赤褐色・剝離面 は非常に荒い・ 規模の大きな裂 孔多量・石英・ 石炭・石他の粗粒を多く含む	口縁外帯3段。櫛 目は10条を1単位 とする。	堺		内面は摩耗が 激しく櫛目は 下半で消失。
25		62	SK7	土師質	火鉢	16.0	7.7		16.4	ロクロ成形		黒色～浅黄褐色・ 剝離面は非常に 荒い・円孔多量	内外面に炭素を吸 着させる。	在地		
26		62	SK7	瓦	軒平瓦						中心文様は 茎付の花文・ 左右に唐草 文					
27		63	SK7	土師質	焙烙 無耳 浅め	46.0				ロクロ成形		浅黄褐色・剝離 面は非常に荒い・ 規模の大きな裂 孔多量・石英・ 砂岩、赤色風化 礫の粗粒を多く 含む	内外面強い横ナデ。 口縁は丸く収める。	在地		外面煤が著しく 付着。内面 は薄い煤の付 着。
28		63	SK7	土師質	焙烙 無耳 浅め	40.0				ロクロ成形		黒色～浅黄褐色・ 剝離面は非常に 荒い・円孔多量	口縁部は厚く、体 部の器壁は薄い。 外面に砂を付着さ せる。	在地		外面口縁端部 まで煤が強く 付着。
29		63	SK10	陶器	碗				2.4	ロクロ成形	(内)飴釉 (外)灰釉・飴 釉	灰白色・剝離面 は荒い・裂孔多 量	鋸手	瀬戸・ 美濃		
30		63	SK10	磁器 染付	瓶				5.1	ロクロ成形 内面ロクロ 目顕著	(外)文様不明 (内)露胎	白色・やや透明 感をもつ・剝離 面はやや荒い	畳付けに砂付着	肥前系	18世紀 後半～ 19世紀 初頭	
31		63	SK10	陶器	碗				5.2	ロクロ成形	灰釉	灰白色、露胎部 は褐色・剝離面 はやや荒い・円 孔が存在	細かな貫入が入る。	尾戸		
32		63	SK10	陶器	碗 具器形	12.8				ロクロ成形	灰釉	灰黄色・剝離面 は荒い・円孔が 存在	釉は貫入が入る。	肥前系	17世紀	
33		63	SK9	磁器 染付	小皿 丸形	12.4	3.5		4.2	ロクロ成形	文様不明	白色・やや透明 感をもつ・剝離 面はやや荒い	見込み蛇の目釉剥 ぎ。釉剥ぎ部に砂 付着。	波佐見	18世紀	
34		63	SK13	陶器	碗 具器形				5.0	ロクロ成形	灰釉	浅黄色・剝離面 は荒い・微細な 円孔が存在	釉は貫入が入る。	肥前系	17世紀 後半～ 18世紀 前半	
35		63	SK13	土師質	かわら け	8.0	1.2		5.0	ロクロ成形		橙色・砂粒を殆 ど含まない				焼成後穿孔2 個
36		63	SK13	土師質	かわら け	9.2	1.0		6.0	ロクロ成形		橙色・砂粒を殆 ど含まない	底部回転糸切り			
37		63	SK14	土師質	かわら け	7.9	1.4		4.2	ロクロ成形		橙色・砂粒を殆 ど含まない	底部回転糸切り			口縁部内面に 煤付着。

V区出土遺物観察表

遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種／ 器形	法 量(cm)			重量 (g)	特 徴	産 地	年 代	備 考			
						全長	全幅	全厚								
38		64	SK13	石器	砥石箱形	18.6	4.1	3.9	522.5	3面使用。主研面は弓なりに摩耗する。側面、エッジ部分に切り込み状の使用痕。			石英粗面岩製			
39		64	SK13	石器	石臼上臼	復元径30.0	15.6	6.2	1950	擦り面の主溝間角度は45°であり、8分割。粉挽き臼の上臼。			砂岩製。心棒穴部分欠損。			
40		64	SK13	銅製品	煙管雁首	7.4	1.0	1.0	6.6	脂返しは細く、湾曲しない。側面に鑲が認められる。		18世紀後半	ラウが残る。			
41		64	SK13	銅製品	煙管雁首	3.9	0.9	1.0	4.2	脂返しは短く、湾曲しない。側面に鑲着が認められる。		18世紀後半	ラウとの接合部は破損。			
42		64	SK13	銅製品	煙管雁首	3.9	1.3	1.05	4.6	脂返しは短く、湾曲しない。器表の剝離が激しく鑲着部分の観察不可能。		18世紀後半	火皿部分を欠損する。			
遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種／ 器形	法 量(cm)				成形技法／ 調整内面／外面	釉薬・絵付 内面／外面	胎 土	特 徴	産 地	年 代	備 考
						口径	器高	胴径	底径							
43		63	SK25	陶胎染付	碗 広東形	11.6				ロクロ成形	(外)菊文	灰黄色・剝離面は非常に荒い・円孔を多く含む	陶胎染付。釉は貫入が入る。	瀬戸・美濃	18世紀後半～19世紀前半	
44		63	SK24	陶胎染付	蓋	笠部径10.0				ロクロ成形	(外)植物文	灰白色・剝離面はやや荒い・黒色微砂を多く含む	透明釉はやや白濁し細かな貫入が入る。	肥前系	18世紀後半	
45		63	SK25	磁器染付	碗 丸形				3.4	ロクロ成形	(内)見込み文様不明	白色・やや透明感をもつ・剝離面は概ね滑らか・円孔が存在		肥前系	1780～19世紀初頭	
46		63	SK26	陶器	小皿		3.0		5.2	ロクロ成形	飴釉・白化粧土・外面体部下 半と高台露胎	鈍い橙色・剝離面は荒い・長石、石英の微砂を多く含む	見込み蛇の目釉剥ぎの後、白化粧土を刷毛塗り。	能茶山	1820～幕末	
47		63	SK23	陶器	小皿	13.2				ロクロ成形 外面ロクロ目顕著	灰釉	灰黄色・剝離面は非常に荒い・円裂孔を多く含む		瀬戸・美濃系	18世紀	
48		63	SK25	瓦	軒丸瓦	瓦当径15.0	周縁部幅1.9				連珠三つ巴紋		巴文は右巻き。尾は断面三角形。珠文推定数は12～13個。			
49		63	SX1	磁器染付	蓋	10.2	3.1		6.0	ロクロ成形	(内)水面に岩 (外)波に千鳥	白色・やや透明感をもつ・剝離面はやや荒い・円孔が僅かに存在		肥前系	1780～1840	
50		63	SX1	白磁	紅皿 菊花形	4.6	1.4		1.4	形押し成形	白濁した透明釉・外面及び高台露胎	白色・やや透明感をもつ・剝離面はやや荒い・裂孔が僅かに存在	推定花卉数40～42枚。	肥前	18世紀末～幕末	
51		63	SX1	土師質	かわらけ	5.4	0.8		4.8	ロクロ成形		橙色・砂礫を殆ど含まない	底部回転糸切り。			口縁部外面に煤が強く付着、燈芯痕が残る。
52		63	SX1	陶器	灯明受皿	11.5	1.5		5.4	ロクロ成形	灰釉・(外)体部下 半露胎	灰白色・剝離面はやや荒い	脂溝アーチ状。釉は貫入が入る。	関西系		
53		63	SX1	陶器	香炉筒形	9.6				ロクロ成形	灰釉・底部露胎	灰白色・剝離面はやや荒い	釉は貫入が入る。	関西系		
54		63	SX1	陶器	播鉢	47.0	8.8		15.0	ロクロ成形		赤褐色・剝離面は非常に荒い・規模の大きな裂孔多量・石英長石他の粗粒を多く含む	口縁外帯3段。1単位10条の播り目。播り目幅は2～3mm。	堺		
遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種／ 器形	法 量(cm)			重量 (g)	特 徴	産 地	年 代	備 考			
						全長	全幅	全厚								
55		64	SX2	石器	砥石	22.9	7.5	7.2	2000	大型。硬質の荒砥。主研面、裏面ともに摩耗する。			砂岩製。上半は欠損。			
遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種／ 器形	法 量(cm)				成形技法／ 調整内面／外面	釉薬・絵付 内面／外面	胎 土	特 徴	産 地	年 代	備 考
						口径	器高	胴径	底径							
56		63	SX1	陶器	播鉢	31.8				ロクロ成形		赤褐色～黒褐色・長石礫、石英微砂を多量に含む・裂孔僅か	口縁外帯3段。1単位8条の播り目。播り目幅は2～3mm。	堺		
57		63	SX1	土師質	焙烙無耳浅め	43.8				ロクロ成形		灰黄色・剝離面は非常に荒い・円裂孔多量	内面に稜をもち外反する。体部の器壁は薄い。	在地		外面に煤が強く付着。

V 区出土遺物観察表

遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種/ 器形	法 量(cm)				成形技法/ 調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎 土	特 徴	産 地	年 代	備 考
						口径	器高	胴径	底径							
58		63	SD1	陶器	甕	22.4				ロクロ成形	白濁釉	赤褐色・剝離面は荒い・円裂孔を多く含む	口唇部無釉。蓋物の可能性あり。	在地		
59		63	SD1	磁器 染付	碗 筒形					ロクロ成形	(外)菊散らし文	白色・やや透明感をもつ・剝離面はやや荒い		肥前系	1780～ 1810	
60		63	SD1	陶器	小皿 端反り 形	12.7				ロクロ成形	白化粧土・透明釉	橙色・剝離面は荒い・微細な円孔を含む	見込み、白化粧土を刷毛塗りの後透明釉を施釉。後、蛇の目釉剥ぎ。	能茶山		
61		63	SD3	白磁	小皿 端反り 形	14.0	2.4		7.0	ロクロ成形	白磁釉	白色・剝離面はやや荒い・僅かに裂孔を含む		中国製	17世紀	疊付に砂付着。
62		63	サブトレ	磁器 染付	碗 丸形				4.6	ロクロ成形	文様不明	白色・やや透明感をもつ・剝離面は荒い・裂孔が僅かに存在	高台内銘あり。角内「茶」。釉はやや白濁し、細かな貫入が入る。	能茶山	1820～ 幕末	
63		63	包含層	陶器	小皿 端反り 形				5.3	ロクロ成形	鉄釉・白化粧土・外面体部下露胎	黒褐色・剝離面は荒い	見込み蛇の目釉剥ぎの後、白化粧土刷毛塗り。	能茶山	1820～ 幕末	
64		63	サブトレ	白磁	紅皿 菊花形	4.6	1.5		1.4	形押し成形	やや青灰色を帯びた透明釉・(外)露胎	白色・やや透明感をもつ・剝離面はやや荒い		肥前	18世紀 末～ 幕末	
65		63	サブトレ	磁器 染付	大皿				15.2	ロクロ成形	文様不明	白色・やや透明感をもつ・剝離面はやや荒い・円裂孔が僅かに存在		肥前	19世紀 初頭～ 幕末	

4 VI区の調査成果

(1) 調査区の概要と基本層準 (Fig. 73・74)

VI区は、95年度に報告したII区の西隣に位置する調査区で、面積は617cm²を測る。II区とは1条の畦畔を隔てるのみであるが、II区に比べて現地表面で20cm、遺構検出面では10cm～1m程低くなっている（II区の遺構検出面が標高6.0～5.5mであったのに対して、VI区は5.4～4.8mである）。そして、西に向かって次第に標高を減じている。検出遺構は、古代の掘立柱建物1棟、溝、ピットである。II区からは多くの弥生後期から古墳時代の竪穴住居を検出したが、VI区においては全く認められなかった。小籠遺跡の当該期の集落の西限がこの辺りにあることを示している。

基本層準は以下の通りである。

I層：耕作土（現水田土壌）。

II層：灰茶色粘質土層。

III層：濃茶色粘質土層で、床土を形成している。

IV層：黒褐色粘質土層、いわゆる黒ボク層で、層厚20～40cmを測る。弥生時代後期から古代の遺物包含層である。

V層：茶色粘土層。無遺物層で、遺構検出面となっている。

II区の層準と比べてIV層が相当厚く堆積しているところに特徴がある。またV層は調査区北壁近くのみ認められ、南側はII区の遺構検出面と同じ礫の混入の多い粘質土の層準が形成されている。

(2) 検出遺構

③ 掘立柱建物

SB1 (Fig. 74)

調査区の東南隅に位置する。梁間2間(3.3m)・桁行3間(4.4m)の総柱建物で、棟方向はN-85°-Eである。ただ東端3本の柱穴が小さいことから、東庇付きの2×2間の総柱建物となる可能性も考えられる。小規模な3本の柱穴を除くと、長軸60～70cmの楕円形ないしは隅丸方形の掘り形を有し、柱間距離は1.4～1.6mを測り、P6・12からは径22～25cmの柱痕跡を検出することができた。埋土は黒褐色粘質土で遺物は認められなかったが、包含層遺物および付近の状況から見て古代に属する倉庫として位置付けることができる。

② 溝

SD1 (Fig. 74)

調査区西半分南端で検出した。確認延長22mである。断面は逆台形を呈し深さ25～32cmを測り、床は西に向かって低くなっている。遺物は出ていないが、この溝はII区で検出した13世紀のSD69につながるものである。

(3) 包含層出土の遺物 (Fig. 75)

IV層中より、弥生後期・古代を中心とする遺物が出土している。1・2は弥生後期の壺、3は二重口縁壺で東阿波型土器である。4は庄内式土器で河内からの搬入品、5～7は弥生後期末～古墳

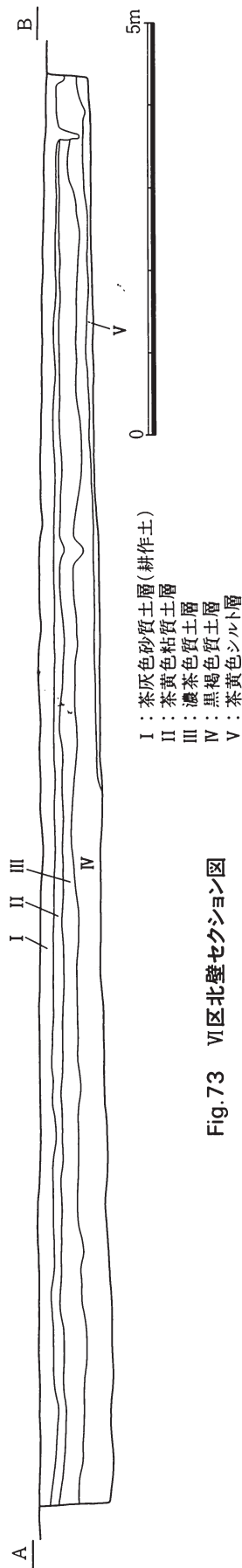


Fig. 73 VI区北壁セクション図

時代初頭の在地の甕である。9・13は古代の土師器杯で、II区で行なった古代土師器分類の坏A I a類に、14は同じくB I b類に、15は同じく甕III類に属する。10は緑釉の杯、12は青磁碗である。

(3) 小結

隣接するII区からは、弥生後期～古墳時代の竪穴住居18棟が検出されたことから、VI区においても同時期の諸遺構が検出されるものと思っていたが、予想に反して当該期の遺構は全く認められず、主な遺構としては、古代の掘立柱建物1棟のみであった。従ってすでに述べたように小籠遺跡の弥生・古墳時代の集落の遺構分布の西限は、II区とVI区との境あたりにあることが明らかとなった。

しかし古代の遺構については、II区で検出した諸遺構との関連のなかに位置付けることができるものである。II区からは9世紀から10世紀初頭に属する土坑16基を検出している。そしてこれらの土坑は、9世紀代に属する西群と9世紀末～10世紀初頭にを中心とする東群とに分かれることが明らかとなっている。VI区のSB 1が何れの時期に属するかの決めてはないが、これらの遺構群の営まれた時間幅のなかで機能した掘立柱建物として位置付けることは可能である。従ってVI区の調査によって小籠遺跡の古代の遺構は、これまでの土坑に掘立柱倉庫が加わったことになる。このことは後述するように当遺跡の性格を考えるうえで重要な位置を占めることになる。

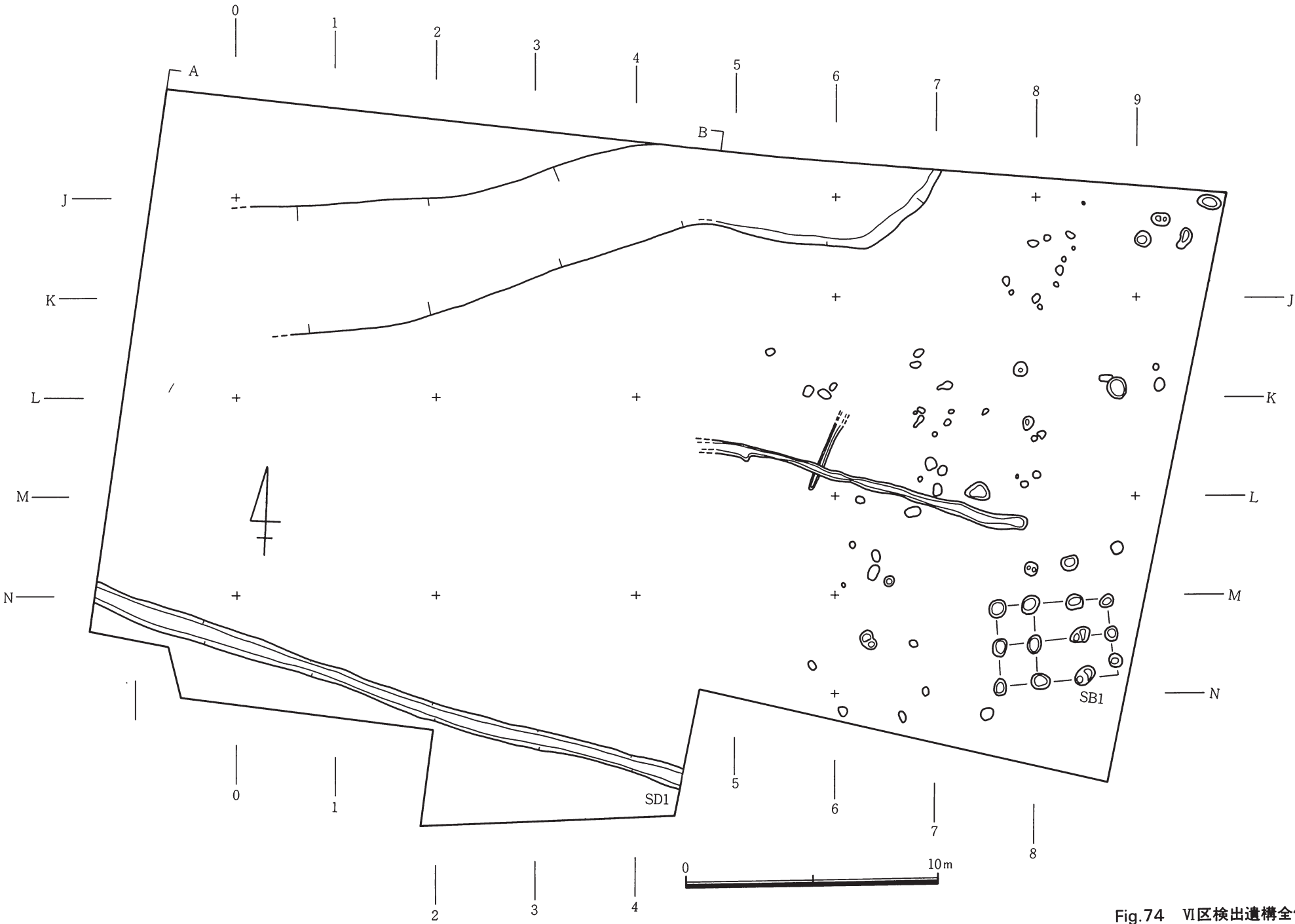


Fig.74 VI区検出遺構全体図

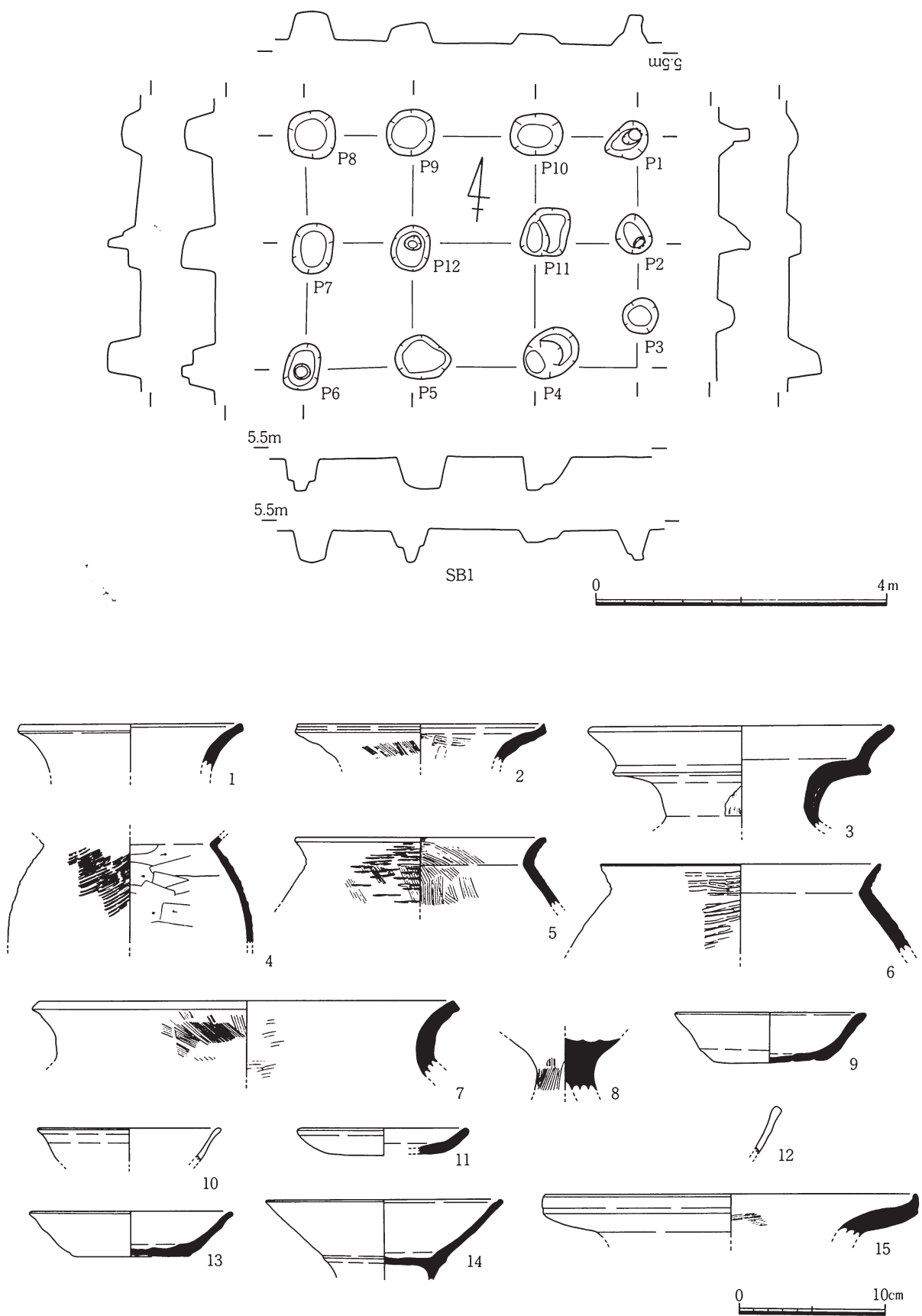


Fig.75 SB1平面図・エレベーション図及び包含層出土遺物実測図

Ⅶ区出土遺物観察表

遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種／ 器形	法 量(cm)				成形技法／ 調整 内面／外面	胎 土	特 徴	年 代	備 考		
						口径	器高	胴径	底径							
1	75	65	包含層	弥生 土器	壺	15.3				(内外)ナデ	チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。	口縁端部は平らな面を成し、上方に僅かに肥厚する。				
2	"	"	"	"	"	16.6				口縁部外面タテハケ調整、内面横ハケ調整、端部内外面横ナデ調整。	長石及びチャートの粗粒さを多く含む。橙色。	口縁端部は上に摘み上げる。				
3	"	"	"	古式 土師器	"	20.1				内外面丁寧な横ナデ調整、頸部剝離部分にタテハケ調整が見られる。	角閃石、結晶片岩の細・粗粒砂を含む。茶褐色。	二重口縁部		東阿波型土器		
4	"	"	"	古式 土師器	甕					胴部外面右上がりの細叩き、内部頸部からヘラ削り。	角閃石を含む。茶褐色。	頸部はく字状に鋭く屈曲する。		庄内式土器		
5	"	"	"	弥生 土器	"	16.8				叩き目を口縁部外面まで残す。	チャート・赤色風化礫を含む。黄褐色。	頸部はく字状に外反、口縁部端部は丸くおさめる。		外面煤ける		
6	"	"	"	弥生 土器	"	19.0				叩き目を口縁部外面まで残す。	チャート・石英の細粗粒砂を含む。橙色。	頸部はく字状に外反、口縁部端部は尖り気味。				
7	"	"	"	弥生 土器	"	28.0				口縁部外面タテハケ調整、口唇部面取り。	チャート・赤色風化礫を含む。黄褐色。	胴部が強く張り出す。				
8	"	"	"	弥生 土器	高杯					外面タテハケ調整＋ナデ調整。	チャートの粗・細粒砂を多く含む。					
9	"	"	"	土師器	杯	12.8	3.5		7.4	回転台成形	精選された胎土。橙色。	外底に幅1～1.5cm粘土紐の単位を明瞭に留める。				
10	"	"	"	緑釉 陶器	杯	12.4				内外面横ナデ調整	精選された胎土。					
11	"	"	"	土師器	皿	11.0	1.8			内外面横ナデ調整。厚いつくり。	精選された胎土。					
遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種／ 器形	法 量(cm)				成形技法／ 調整 内面／外面	釉薬・絵付 内面／外面	胎 土	特 徴	産 地	年 代	備 考
						口径	器高	胴径	底径							
12	75	75	包含層	青磁	碗							灰色でやや粗い胎土透明度のある青色、貫入あり。				
遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種／ 器形	法 量(cm)				成形技法／ 調整 内面／外面	胎 土		特 徴	年 代	備 考	
						口径	器高	胴径	底径							
13	75	65	包含層	土師器	杯	13.4	3.1		7.4	回転台成形	精選された胎土。橙色。					
14	"	"	"	土師器	杯	16.0				回転台成形	チャートその他の粗粒砂を含む。		貼付高台を有し、高台の付根付近が隆替状をなす。		外面下半に黒斑	
15	"	"	"	土師器	甕	25.3				口縁部外面横ナデ、内面横ハケ調整＋横ナデ	チャート、赤色粗粒砂・章礫を多く含む。		口縁部端部摘み上げ。			

5 VII区の調査成果

(1) 調査区の概要と基本層準 (Fig. 76)

VII区は、小籠遺跡調査区の西端に位置し、面積495m²を測る調査区である。VI区に比べて標高はさらに低くなっている。VII区は現地表面の標高が4.7m前後、遺構検出面で4.0m前後である。VI区の遺構検出面と比較した場合1.4～1.8m低い。遺構は南北に伸びる溝2条を検出したのみである。遺物は包含層出土であるが初期須恵器が注目されよう。基本層準は以下の通りである。

I層：耕作土（現水田土壌）

II層：灰色粘土層で層厚10～20cmを測る。

III層：暗灰色粘土～砂質土層で層厚10～15cmを測る。

IV層：黒灰色粘土～砂質土層で層厚5～15cmを測り、古代・中世の遺物を含んでいる。

V層：暗灰色砂質土層でSD 1埋土の窪みに堆積している。

VI層：黒色泥土層で層厚5～15cmを測り、東部では薄い堆積である。II・VI区のIV層に対応する層準である。弥生後期から古代の遺物包含層を形成している。

VII層：黒褐色泥土層SD 1・2の埋土を形成している。

VIII層：黄色シルト層で層厚10cm前後を測り、火山灰（音地）層である。無遺物層である。遺構検出面となっている。

IX層：灰褐色砂層で層厚4cmを測り西端部にのみ認められる。無遺物層である。

X層：灰褐色粘土層で層厚10cmを測る。無遺物層である。

XI層：砂礫層で層厚20cm以上である。無遺物層である。

地形はVII区の西方に向かってさらに傾斜しており、低湿地帯へと続いている。

(2) 検出遺構

① 溝 (Fig. 76・77)

SD 1

僅かに弧を描きながら南北に走る溝である。確認延長22m、幅1.5m、深さ30～40cmを測り、断面はU字形をなしている。埋土は基本層準で見たV～VII層が堆積している。埋土中より弥生後期土器壺（1）、甕（2・5～7）、鉢（3）、古代の土師器杯（8）が出土している。8はII区で行なった古代土師器分類の坏A I a類に属する。9世紀後半の溝と考えられる。

SD 2

調査区の中央部を南北に直線的に走る溝である。確認延長26m、幅1.0m、深さ30～40cmを測り、断面はU字形をなしている。埋土は基本層準のVI層が堆積している。遺物は埋土中より弥生後期の甕（4）、須恵器皿（11）が出土している。8世紀後半～9世紀前半代の溝と考えられる。

(3) 包含層出土の遺物 (Fig. 77・78)

IV・VI層からは、須恵器甕（16～27）、緑釉皿（10）、白磁碗（9・15）、肥前系皿（13～15）が出土している。

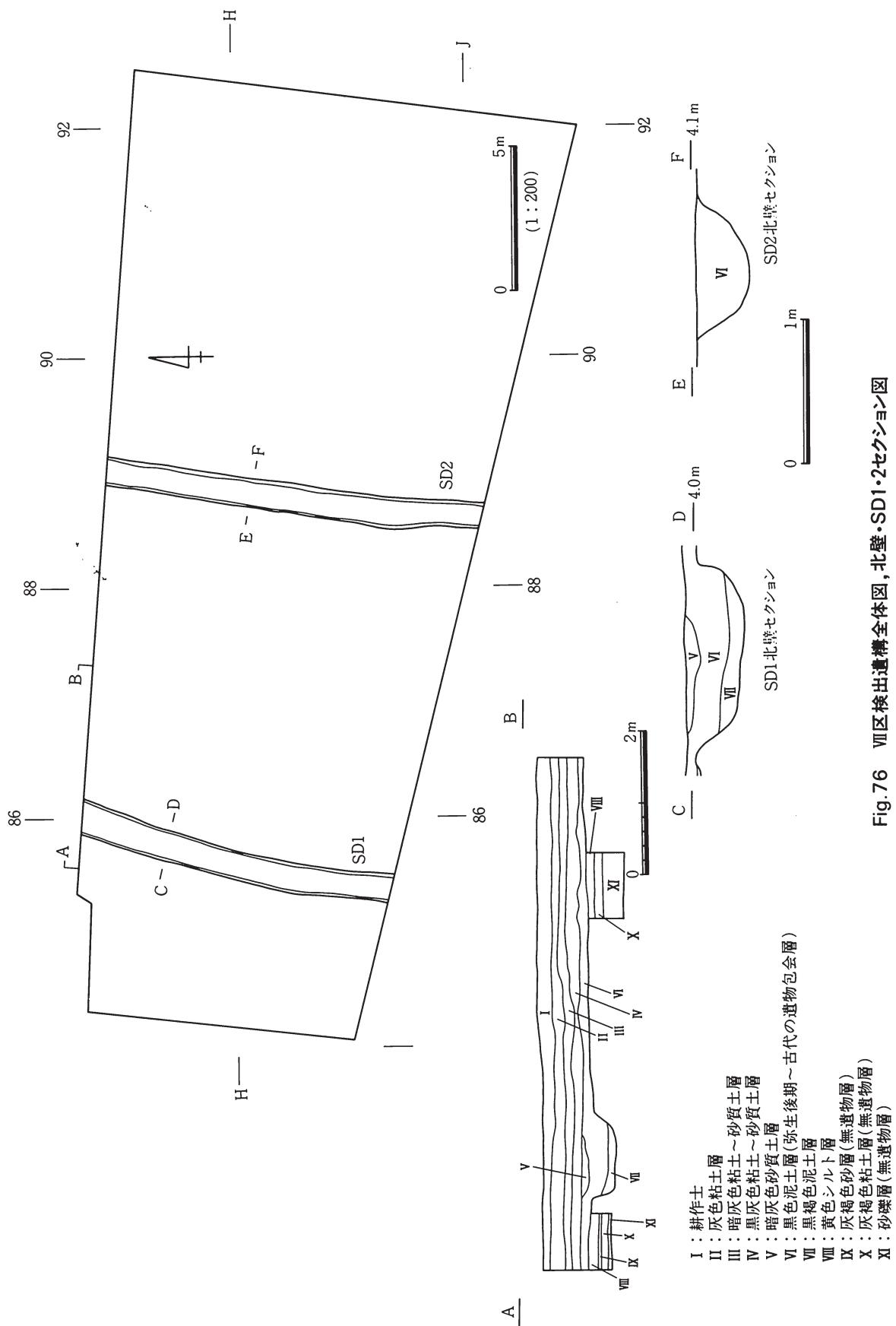


Fig.76 VII区検出遺構全体図,北壁・SD1・2セクション図

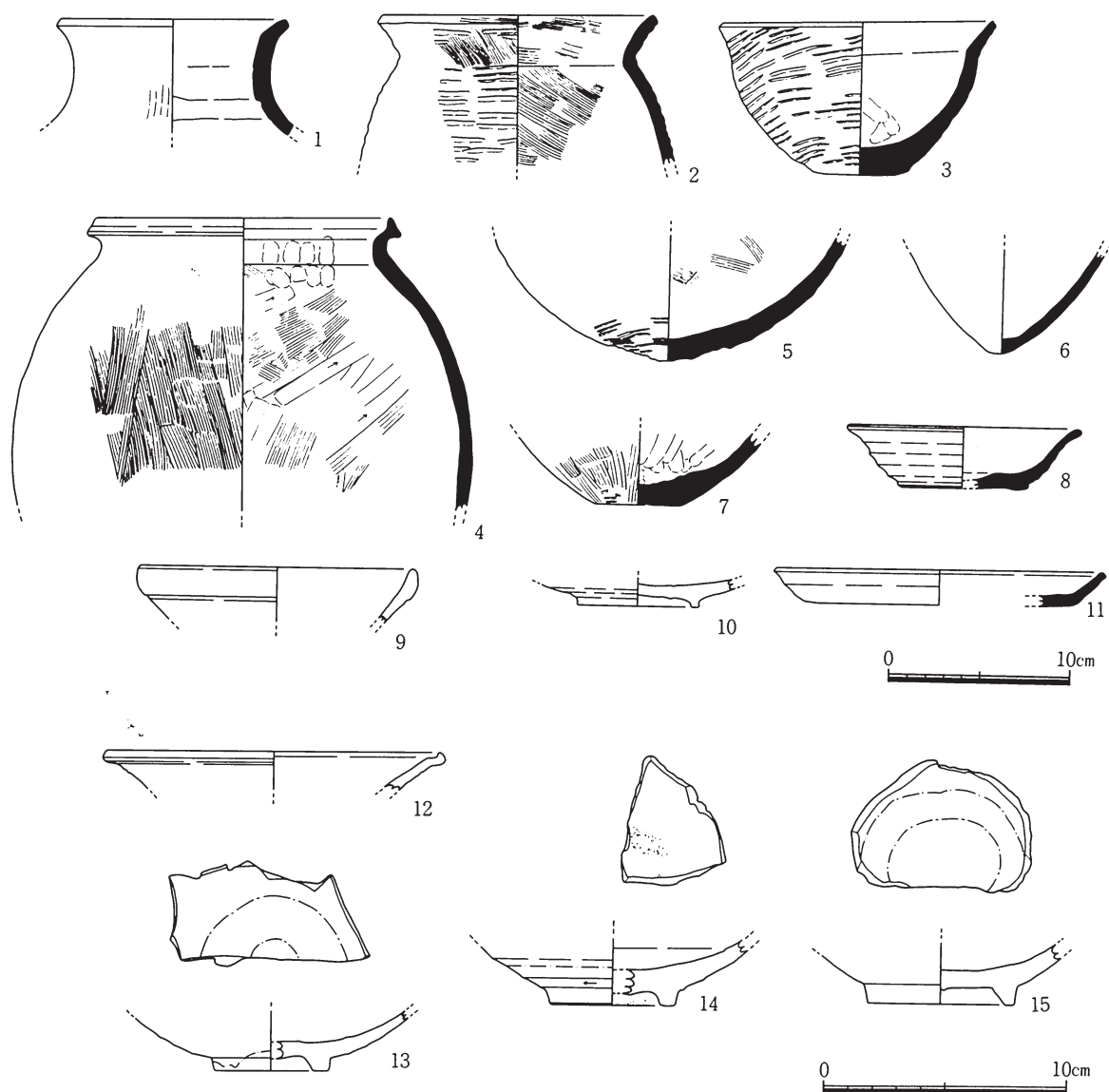


Fig.77 SD1(1～3、5～8)、SD2(4・11)及びⅣ・Ⅵ層(9・10・12～15)出土遺物実測図

(4) 小結

Ⅶ区は西方に広がる低湿地に接する調査区で、検出遺構も溝2条のみであるが、出土遺物は注目すべきものがある。すなわちFig.78に示した初期須恵器である。口縁部が確認できたものは2例(16・17)であるが、ともに口縁部外面に突帯を有し口唇は強い横ナデにより凹状をなしている。16の突帯は鋭く尖った三角形をしており、17の突帯は先端部をナデで断面台形状を呈している。また後者は断面セピアに発色している。胴部の細片は数多く出土しており、器壁は総じて薄い作りで外面は細目の平行叩きが施され、内面はナデ調整、またはハケ状原体によるナデ調整で仕上げられている。胴部断面もセピアに発色するものとそうでないものがある。それぞれの口縁部に対応するものと考えられる。これらの須恵器は陶邑のTK216に比定できるものであり、高知平野出土の須恵器としては最古のものである。後述するように少量とは言え今次資料は、小籠遺跡の性格・歴史的 position付けを考えるうえで重要な意味を持つものである。

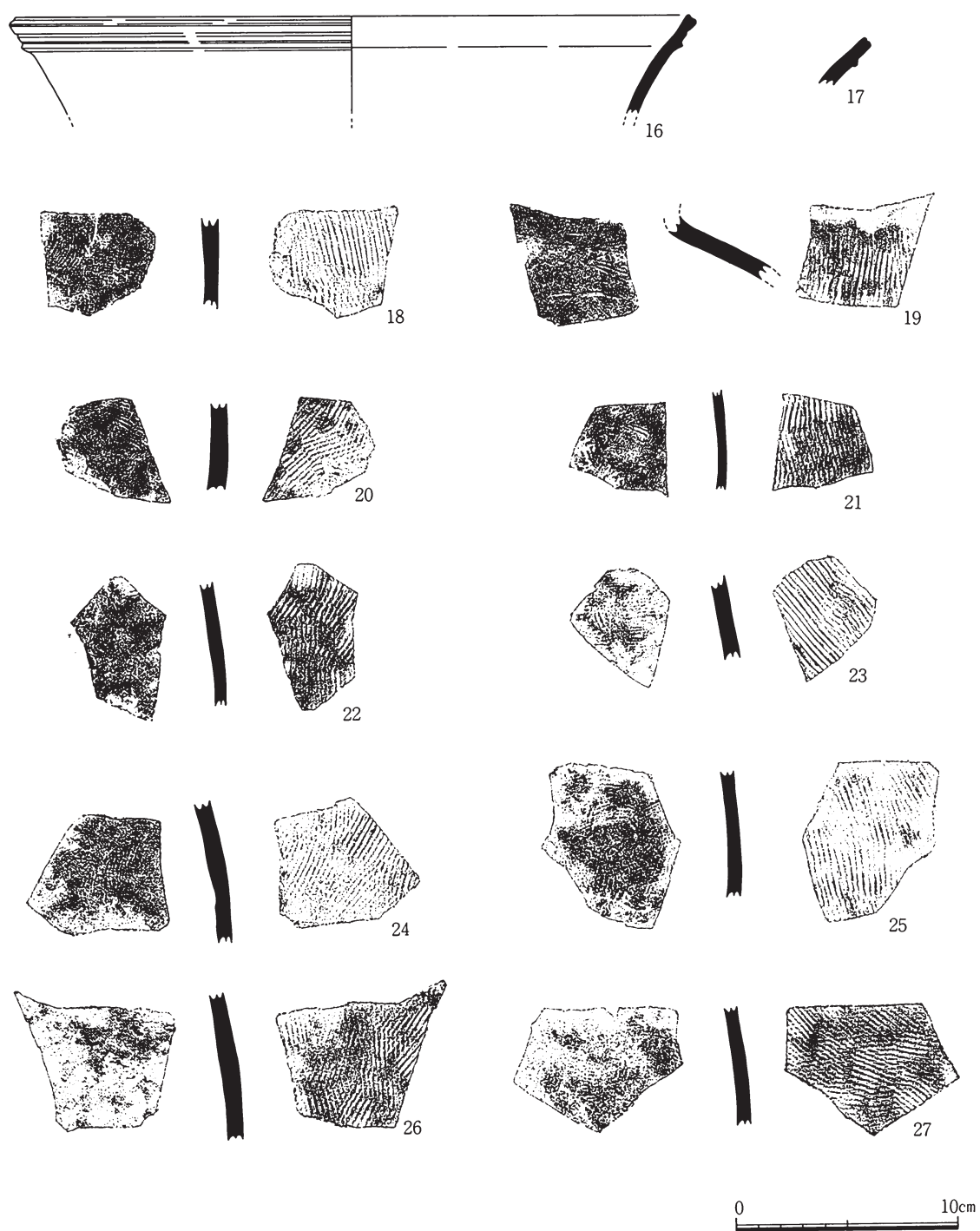


Fig.78 VII区包含層(V・VI層)出土の須恵器実測図

Ⅶ区出土遺物観察表

遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種／ 器形	法 量(cm)				成形技法／ 調整 内面／外面	胎 土	特 徴	年 代	備 考		
						口径	器高	胴径	底径							
1	77	66・73	SD1	弥生土器	壺	12.2				外面縦ハケ調整＋ヨコナデ。	チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。	内面に粘土帯の接合部が明瞭に観察できる				
2	〃	〃	〃	〃	甕	14.6				叩き成形、口縁部外面タテハケ調整。口縁部内面横率公、胴部内面右下がりハケ調整。	長石及びチャートの粗粒さを多く含む。橙色。	口縁端面取り				
3	〃	66・73	〃	〃	鉢	14.1	8.4		5.1	叩き成形、口縁部外面ヨコナデ。	チャートの粗粒砂、赤色風化礫を多く含む。橙色。					
4	〃	66・73	SD2	〃	甕	16.0		25.0		口縁部内外面ヨコナデ 胴部外面タテハケ調整、内面右上がりのヘラ削り＋ハケ調整	チャートの粗粒砂を多く含む。灰白色	口縁部上下に拡張				
5	〃	66	SD1	〃	〃					叩き成形、内面ハケ調整。	チャート・赤色風化礫を含む。橙色。	丸底、外底にも叩き				
6	〃	66	〃	〃	〃					調整不明。	チャート・石英の細粗粒砂を含む。橙色。	尖底風の底部				
7	〃	66	〃	〃	〃				5.0	外面叩き＋縦ハケ調整、内面指ナデ調整。	チャートの粗粒砂を多く含む。灰白色。	平底				
8	〃	66	〃	土師器	杯	12.5	3.4			回転台成形。	精選された胎土。橙色。	底部の円盤接合部が断面に明瞭に出ている。外底に弱い削りあり。				
遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種／ 器形	法 量(cm)				成形技法／ 調整 内面／外面	釉薬・絵付 内面／外面	胎 土	特 徴	産 地	年 代	備 考
9	77	66・73	包含層	白磁	碗	15.0						白色堅致	玉縁状口縁を呈する。			Ⅳ類
10	〃	66	〃	緑釉陶器	皿				高台径 6.4			灰色堅致				
遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種／ 器形	法 量(cm)				成形技法／ 調整 内面／外面	胎 土	特 徴	年 代	備 考		
11	77	66	包含層	土師器	皿	11.0	1.8			内外面横ナデ調整。厚いつくり。	精選された胎土。					
遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種／ 器形	法 量(cm)				成形技法／ 調整 内面／外面	釉薬・絵付 内面／外面	胎 土	特 徴	産 地	年 代	備 考
12	77	66	包含層	陶器	皿	13.5			8.8		(内)灰釉 (外)灰釉	灰白色堅致	口縁部端部摘み上げ	肥前？		
13	〃	66	〃	〃	〃				4.9		(内)銅緑釉	白色でやや粗い	内底は釉を蛇の目状にかきとる。高台台形。	肥前	17後半 ～ 18前半	内野山
14	〃	66	〃	〃	〃				5.0		(内)灰釉 (外)灰釉	灰褐色	外面口縁部から3分の2まで施釉、以下露胎。轆轤左廻り。内底に砂目止。	唐津系	17世紀	
15	〃	66	包含層	白磁	碗				高台径 5.8			灰色堅致	内底は釉を蛇の目状にかきとる。高台断面台形。			
遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種／ 器形	法 量(cm)				成形技法／ 調整 内面／外面	胎 土	特 徴	年 代	備 考		
16	78	66	包含層	白磁	甕	31.0				ヨコナデ	胎土中にやや粗い砂粒を含む。暗灰色。	口縁部外面断面三角の小突帯を貼付、突帯の上に2条の細い沈線。		外面下半に黒斑		
17	〃	66	〃	〃	甕					ヨコナデ	胎土中にやや粗い砂粒を含む。断面セビア。暗灰色。	口縁部外面断面台形の小突帯を貼付。				
18	〃	66	〃	〃	胴部細片					外面細目の平行叩き、内面青海波紋をナデ消す。	胎土中にやや粗い砂粒を含む。暗灰色。					
19	〃	66	〃	〃	〃					外面細目の平行叩き、内面青海波紋をナデ消す。	胎土中にやや粗い砂粒を含む。暗灰色。					
20	〃	66	〃	〃	〃					外面細目の平行叩き、内面青海波紋をナデ消す。	胎土中にやや粗い砂粒を含む。断面セビア。暗灰色。					

Ⅶ区出土遺物観察表

遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種/ 器形	法 量(cm)				成形技法/ 調整 内面/外面	胎 土	特 徴	年 代	備 考
						口径	器高	胴径	底径					
21	78	66	包含層	白磁	胴部 細片					外面細目の平行叩き、 内面青海波紋をナデ 消す。	胎土中にやや粗い砂 粒を含む。暗灰色。			
22	"	66	"	"	"					外面細目の平行叩き、 内面青海波紋をナデ 消す。	胎土中にやや粗い砂 粒を含む。暗灰色。			
23	"	66	"	"	"					外面細目の平行叩き、 内面青海波紋をナデ 消す。	胎土中にやや粗い砂 粒を含む。暗灰色。			
24	"	66	"	須恵器	"					外面細目の平行叩き、 内面青海波紋をナデ 消す。	胎土中にやや粗い砂 粒を含む。暗灰色。			
25	"	66	"	"	"					" 他のものに比 べて叩き目がやや粗 い。	胎土中にやや粗い砂 粒を含む。暗灰色。			
26	"	66	"	"	"					" 他のものに比 べて叩き目がやや粗 い。	胎土中にやや粗い砂 粒を含む。暗灰色。			
27	"	66	"	"	"					" 他のものに比 べて叩き目がやや粗 い。	胎土中にやや粗い砂 粒を含む。暗灰色。			

第Ⅲ章 調査Ⅱ区出土遺物(廃棄土坑及び包含層)

ここでは整理期間の都合上前回の報告書では扱えなかったⅡ区北部検出の土坑から出土した近世陶磁器を中心とした資料を掲載する。この土坑は調査時点では攪乱と考えられていたものであるが、出土する遺物の多くは近世後期から近代初頭のものであり、この中には在地陶磁器窯能茶山の製品が多く含まれていた。時期的に上記の期間に限定されるものであり、廃棄的性格が強い。出土遺物の中にはⅡ区の南側に存在した幾つかの遺構（SE，SX）から出土した遺物と接合関係に在るものが存在することから、同時期の廃棄的性格を持つ土坑が遺跡域に幾らか存在したものと考えられる。出土点数も相当数であることから、廃棄に及んだ要因もこれからの課題となろう。出土遺物の多くは残存状態が良好であり、器種の中で比較的量が豊富であった碗・皿・蓋・供膳具としての鉢や甕・壺については、形態的にいくらかの纏まりが見られることから以下のように分類基準を定めておく。また、この分類に該当する遺物番号を別表に示す。尚、種類としては磁器・陶器・土師質土器が存在している。

○ 碗

碗には容量が小さなものとやや大きなものが存在しており、前者を小碗、後者を碗として扱う。それぞれについて以下のように分類した。

a. 端反り形の碗

a-1 端反りの碗で口縁部の外反が弱いもの

a-2 端反りの碗で口縁部の外反がやや強いもの

b. 丸形の碗

b-1 腰張形を呈するもの

b-2 体部から口縁部に掛けて内湾して立ち上がるもの

b-3 口縁部分の立ち上がりがやや長いもの

c. 広東形の碗

広東茶碗の形態を有するもの

d. 腰折形の碗

腰部にやや鈍い屈曲部を有するもの

e. 筒型の碗

腰部が張り、体部は直線的に上方に立ち上がるもの

f. 平形の碗

高台脇から直線的に斜め上方に立ち上がるもの

○ 皿

皿には径の小さなものとやや大きなものが存在しており、前者を小皿、後者を皿として扱う。各々について以下のように分類する。

a. 端反り形…口縁部が外反するもの

b. 丸形…口縁部が内湾するもの

c. 輪花…口縁部が輪花を成すもの

d. 菊皿

e. 折縁形…口縁部で外側へ屈曲するもの

○ 蓋

蓋には小型の所謂蓋物の蓋（蓋皿）、急須・土瓶の蓋・鍋の蓋、壺の蓋等が存在しており、これらについて以下の分類を行う。

a. 口縁部が外反するもの

b. 口縁部が内湾するもの

c. かえりを有するもの

d. 落し蓋

e. 鐏状の受け部を有するもの

○ 鉢A

鉢には供膳具と考えられるもの、調理具と考えられるもの、その他日用雑器に属するものが存在しているが、ここでは比較的出土量のあつ

た供膳具のものを以下のように分類する。

a. 端反り形

a-1 平面形態で口縁部は概ね八角形を呈するもの（角形）

a-2 口縁部が輪花を呈するもの

a-3 平面形態で口縁部は円形を呈するもの（丸形）

b. 丸形…口縁部が内湾するもの

c. 腰張形…浅めの鉢で底部が広く平らなもの

d. 筒形…腰部で屈曲し直線的に上方へ立ち上がるもの

e. 折縁形…口縁部で外側へ屈曲するもの

○ 甕・壺

口縁部形態の比較的良好なものは甕と考えられるが、この中で口縁端部の肥厚の仕方で以下のように分類する。

a. 口縁部が内外面に肥厚するもの

b. 口縁部が内面に肥厚するもの

c. 口縁部が外面に肥厚するもの

小籠遺跡Ⅱ区廃棄土坑出土遺物

器 種	分 類	番 号	器 種	分 類	番 号
碗	a-1	Ⅱ-1～Ⅱ-11	皿	c	Ⅱ-173
	a-2	Ⅱ-12～Ⅱ-36		d	Ⅱ-159～161
	b-1	Ⅱ-37～Ⅱ-42		e	Ⅱ-174
	b-2	Ⅱ-43～Ⅱ-54・77	蓋	a	Ⅱ-184～194・221
	b-3	Ⅱ-68～Ⅱ-73・74		b	Ⅱ-195～210
	c	Ⅱ-78～Ⅱ-109		c	Ⅱ-211・213～218
	d	Ⅱ-110		d	Ⅱ-219・220
	e	Ⅱ-111～Ⅱ-118		e	Ⅱ-222～224
小碗	f	Ⅱ-119	鉢A	a-1	Ⅱ-225～231
	a	Ⅱ-126・127		a-2	Ⅱ-232・233
	b	Ⅱ-128～132		a-3	Ⅱ-234・236
	c	Ⅱ-133		b	Ⅱ-238・239
	d	Ⅱ-134～136		c	Ⅱ-240
小皿	b	Ⅱ-142～147	壺・甕	d	Ⅱ-241
	c	Ⅱ-148～150		e	Ⅱ-237
	d	Ⅱ-155～158		a	Ⅱ-309・310・312・313
皿	a	Ⅱ-162～165・168・169		b	Ⅱ-314
	b	Ⅱ-166・167・171・172		c	Ⅱ-308・311

これ以外の器種としては段重、藁麦猪口、餌鉢、神酒德利、仏飯碗、仏花器、香炉、火入れ、花生、台付灯明皿、受付灯明皿、灯明皿、鉢B（調理用？）、行平鍋、德利、瓶、土瓶、火消し壺、焜炉、植木鉢、七輪、火鉢が存在している。

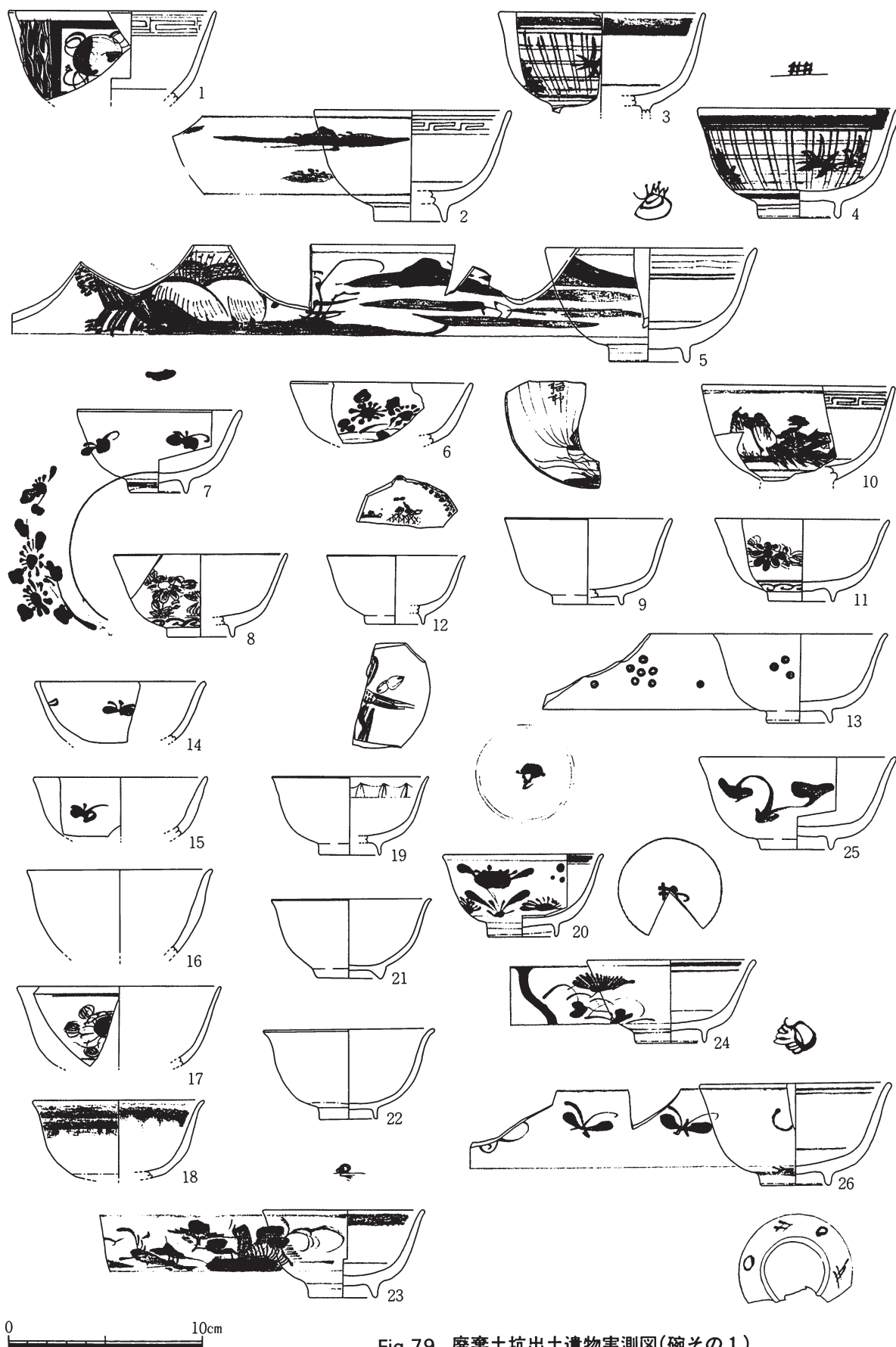


Fig.79 廃棄土坑出土遺物実測図(碗その1)

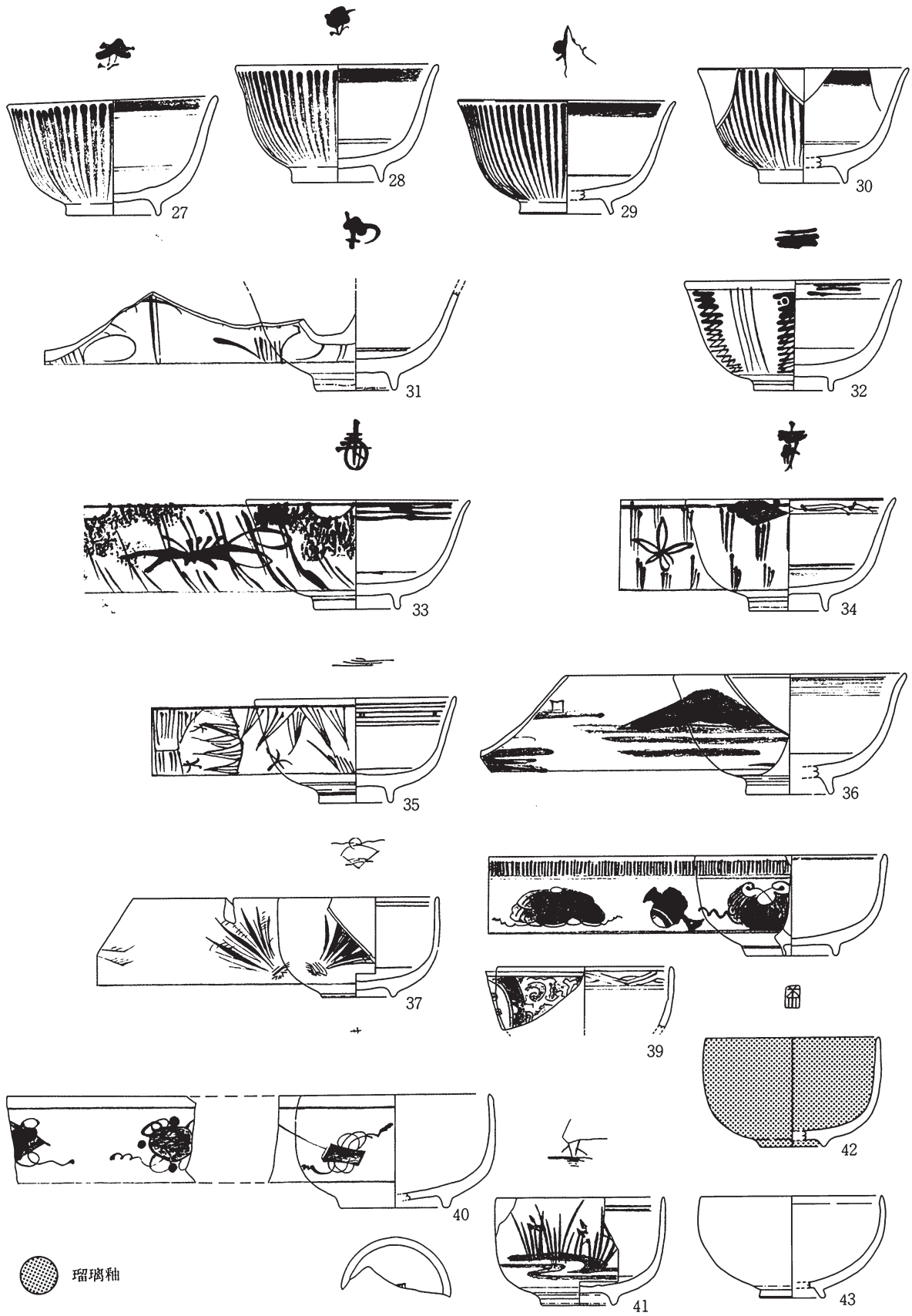


Fig.80 廃棄土坑出土遺物実測図(碗その2)

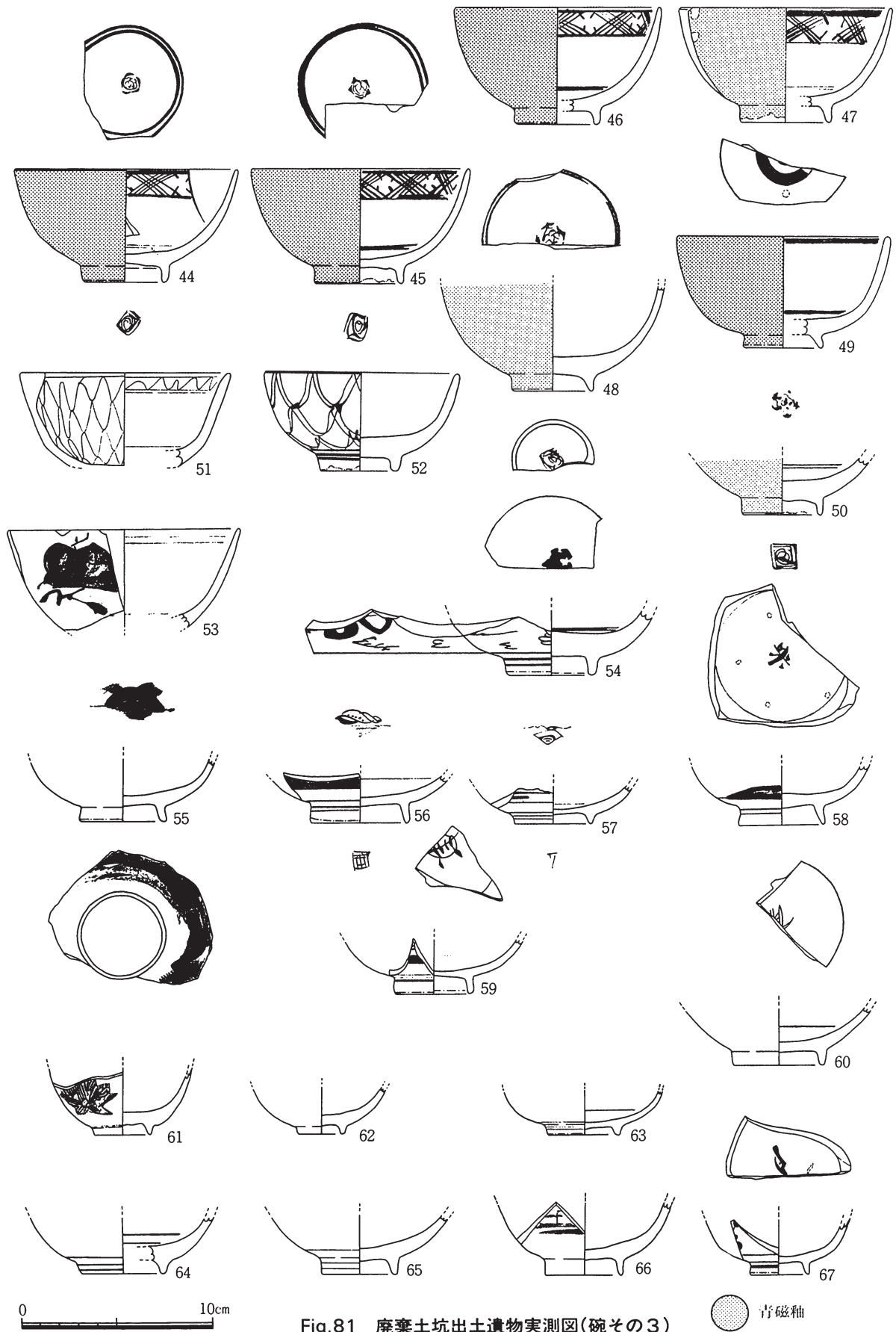


Fig.81 廃棄土坑出土遺物実測図(碗その3)

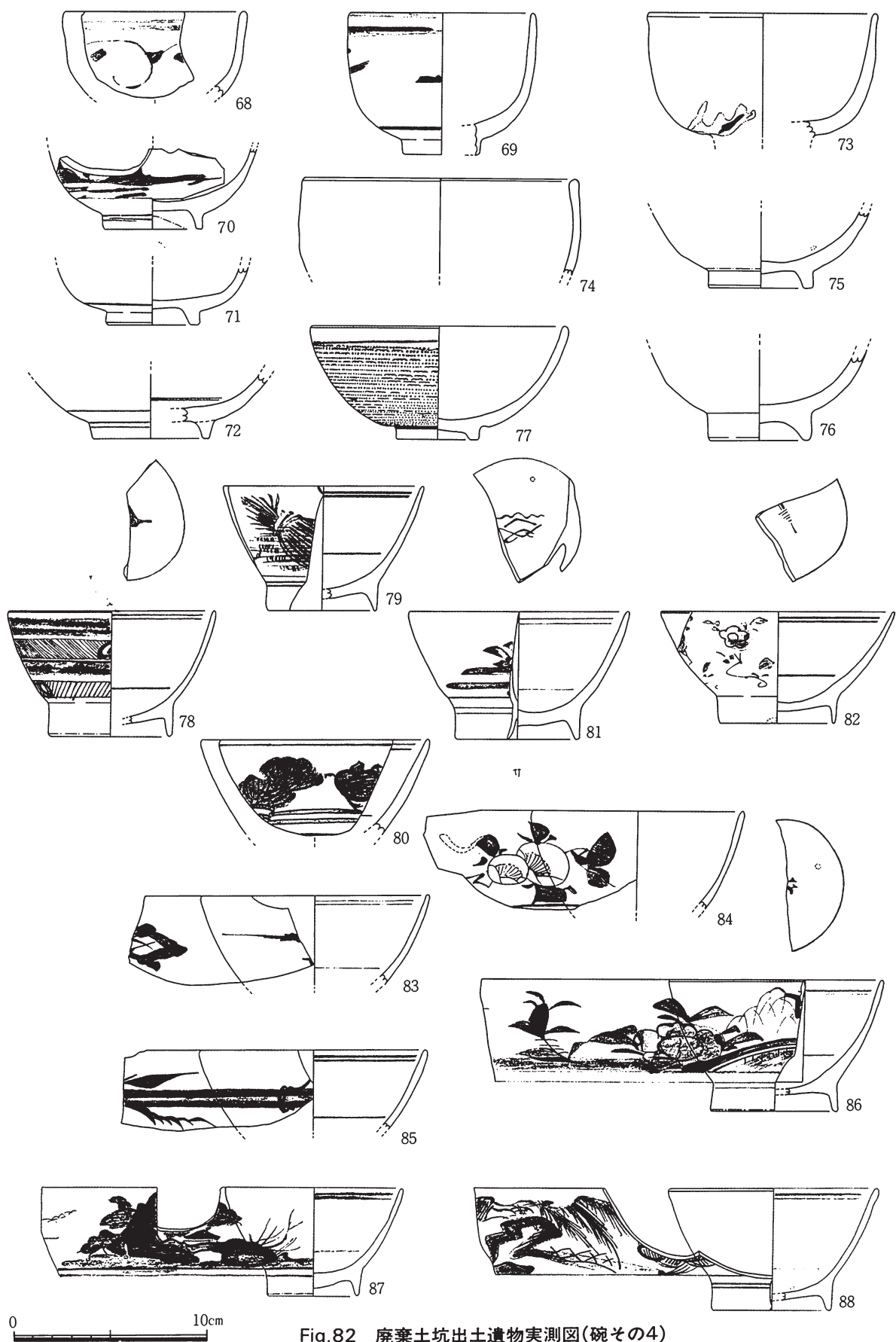


Fig.82 廃棄土坑出土遺物実測図(碗その4)

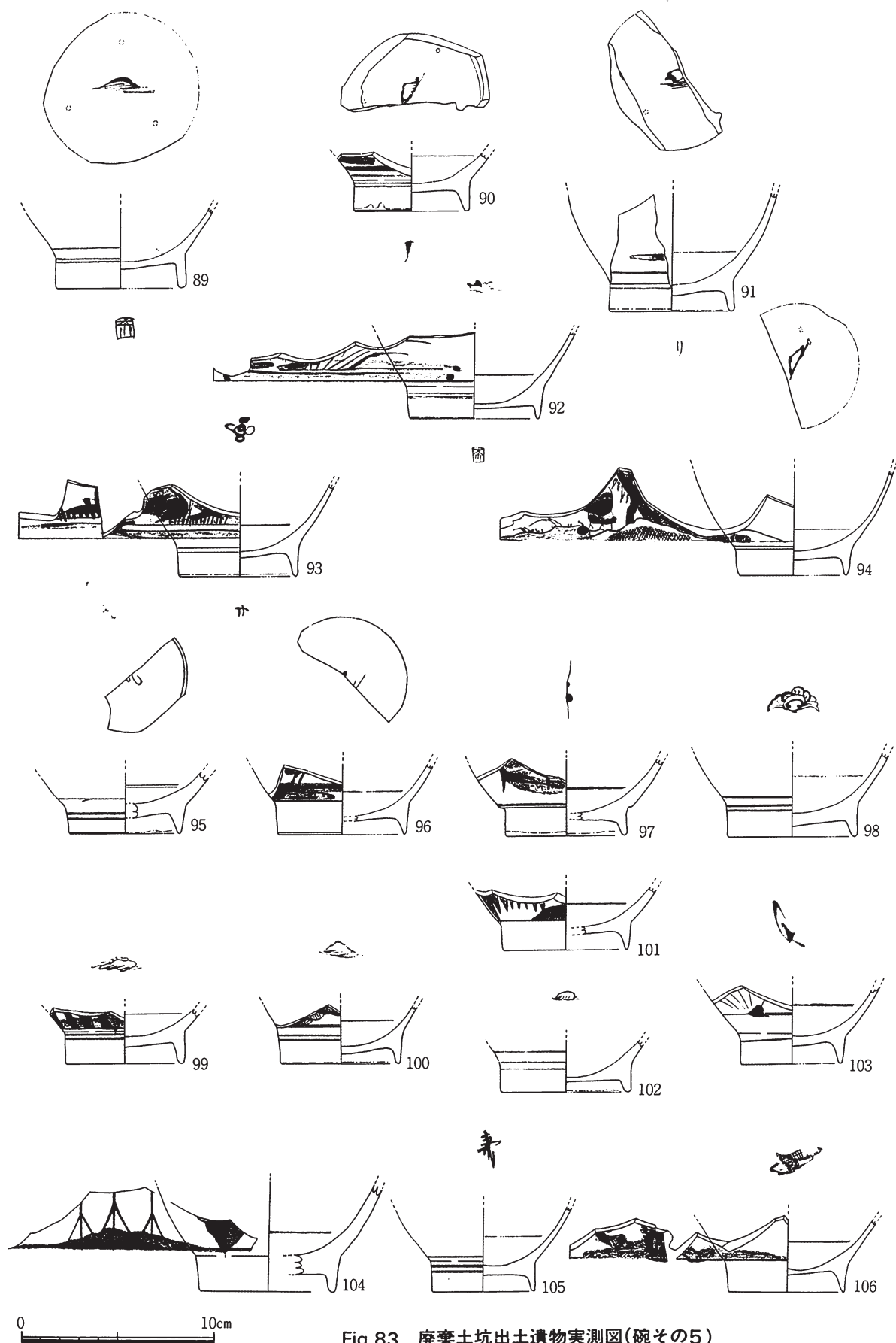


Fig.83 廃棄土坑出土遺物実測図(碗その5)

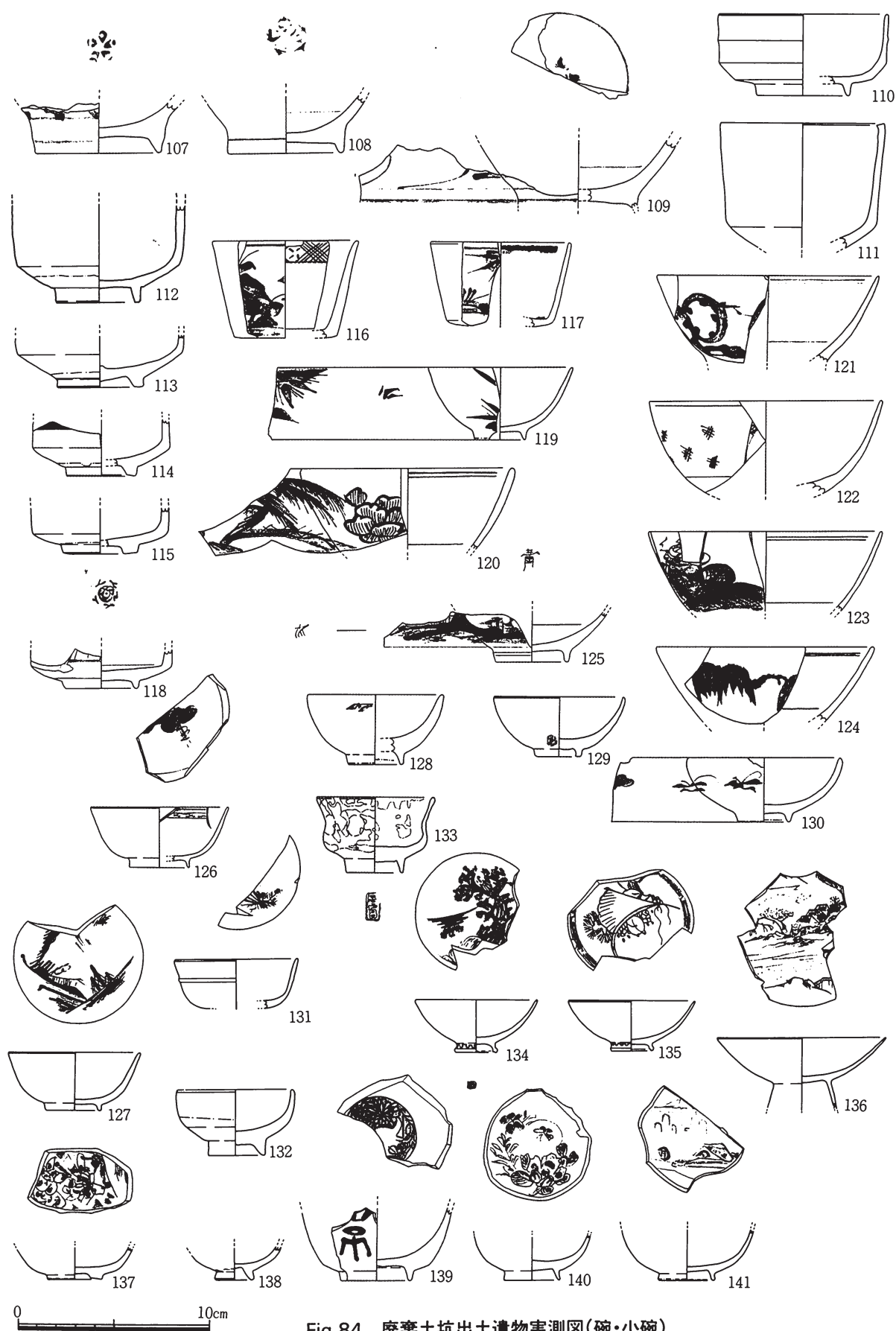


Fig.84 廃棄土坑出土遺物実測図(碗・小碗)

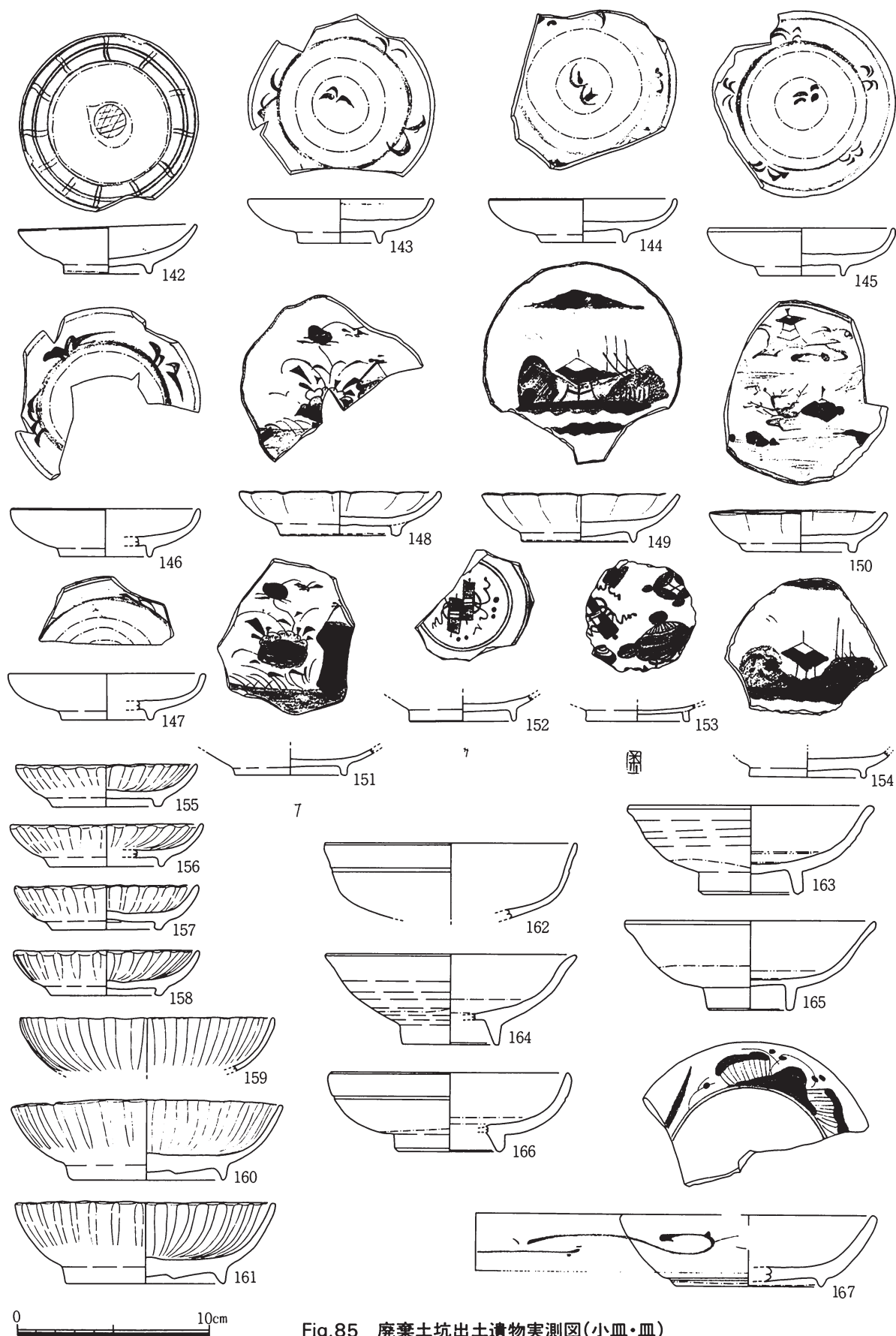


Fig.85 廃棄土坑出土遺物実測図(小皿・皿)

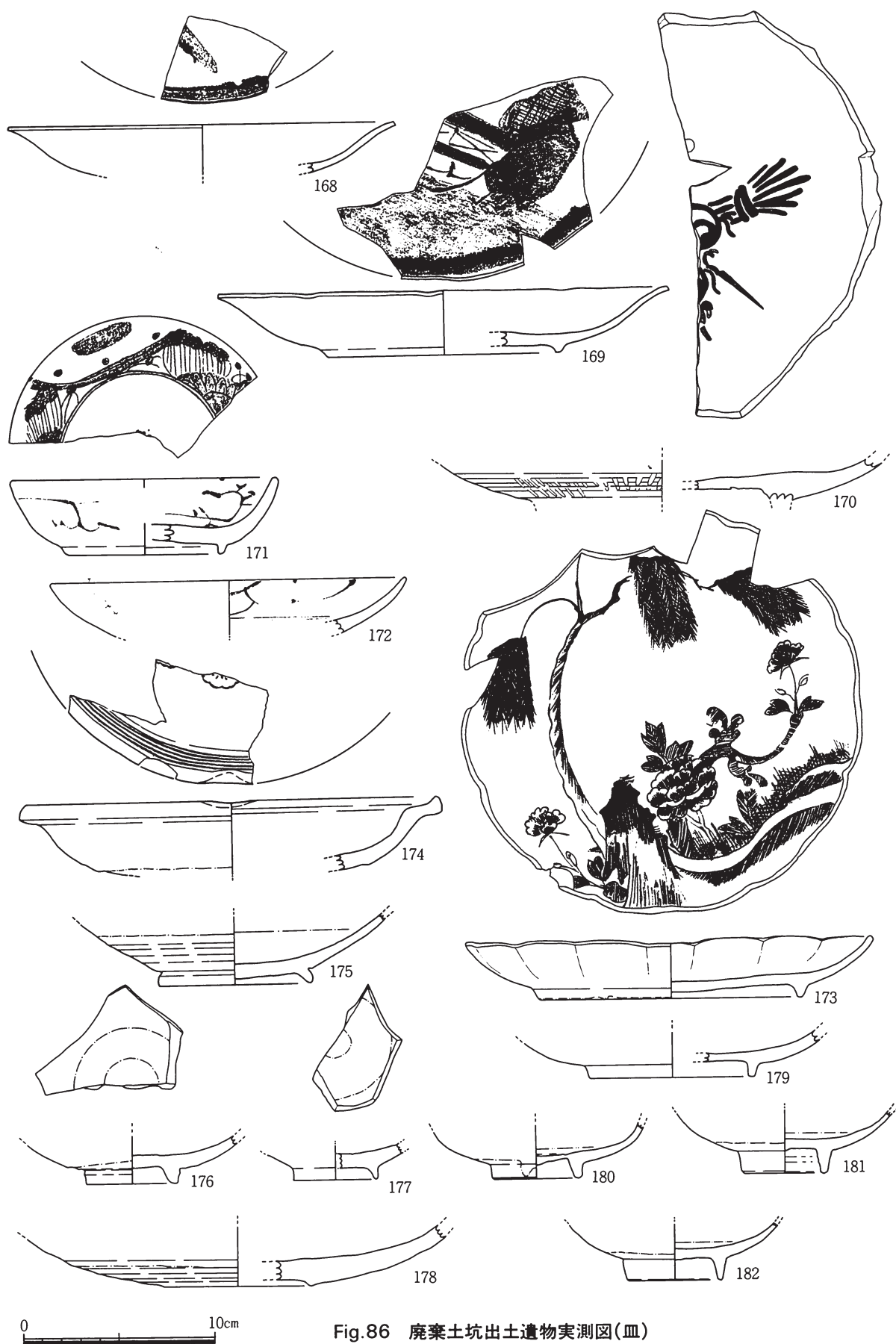


Fig.86 鹿棄土坑出土遺物実測図(皿)

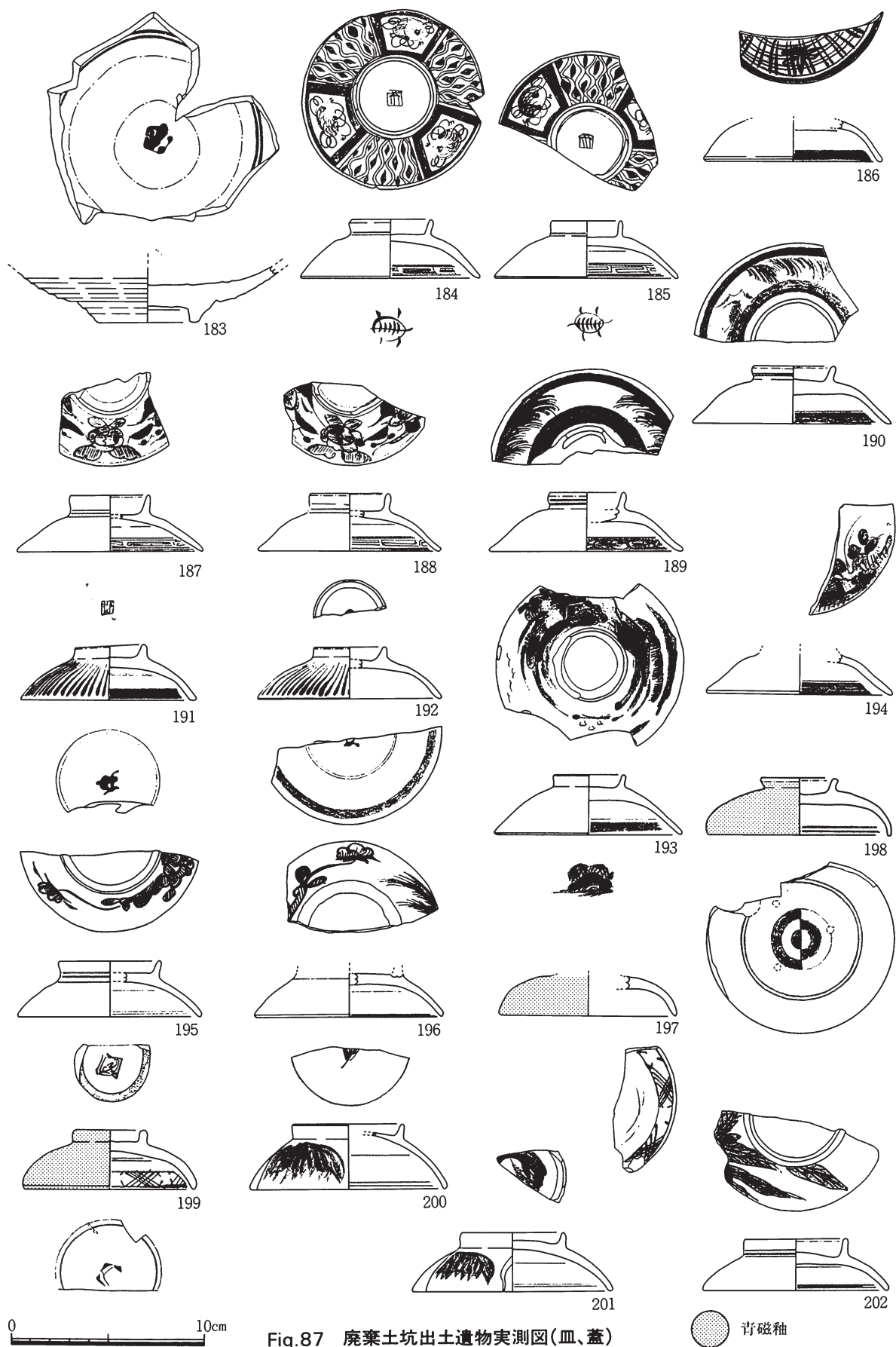
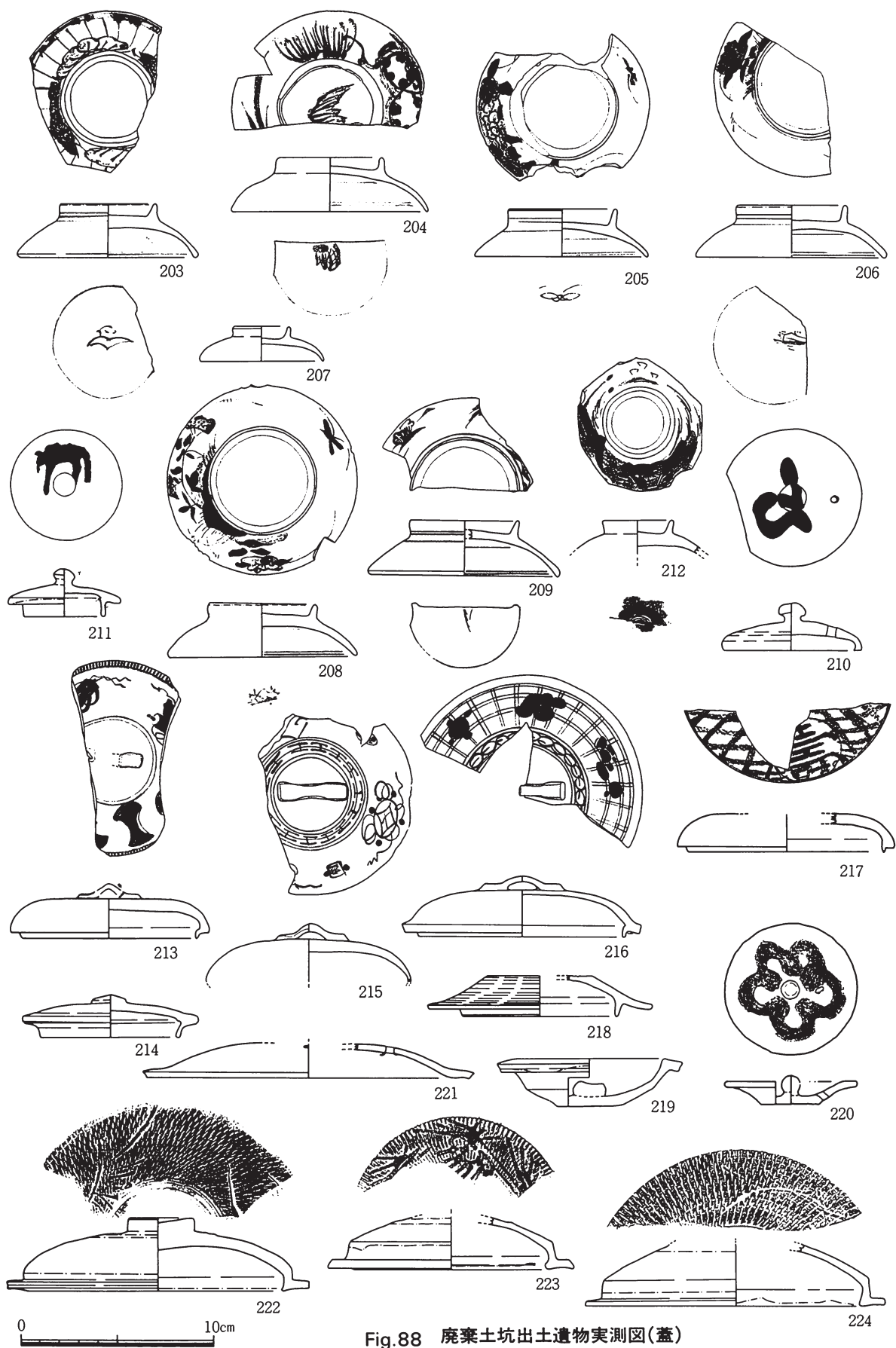


Fig.87 廃棄土坑出土遺物実測図(皿、蓋)



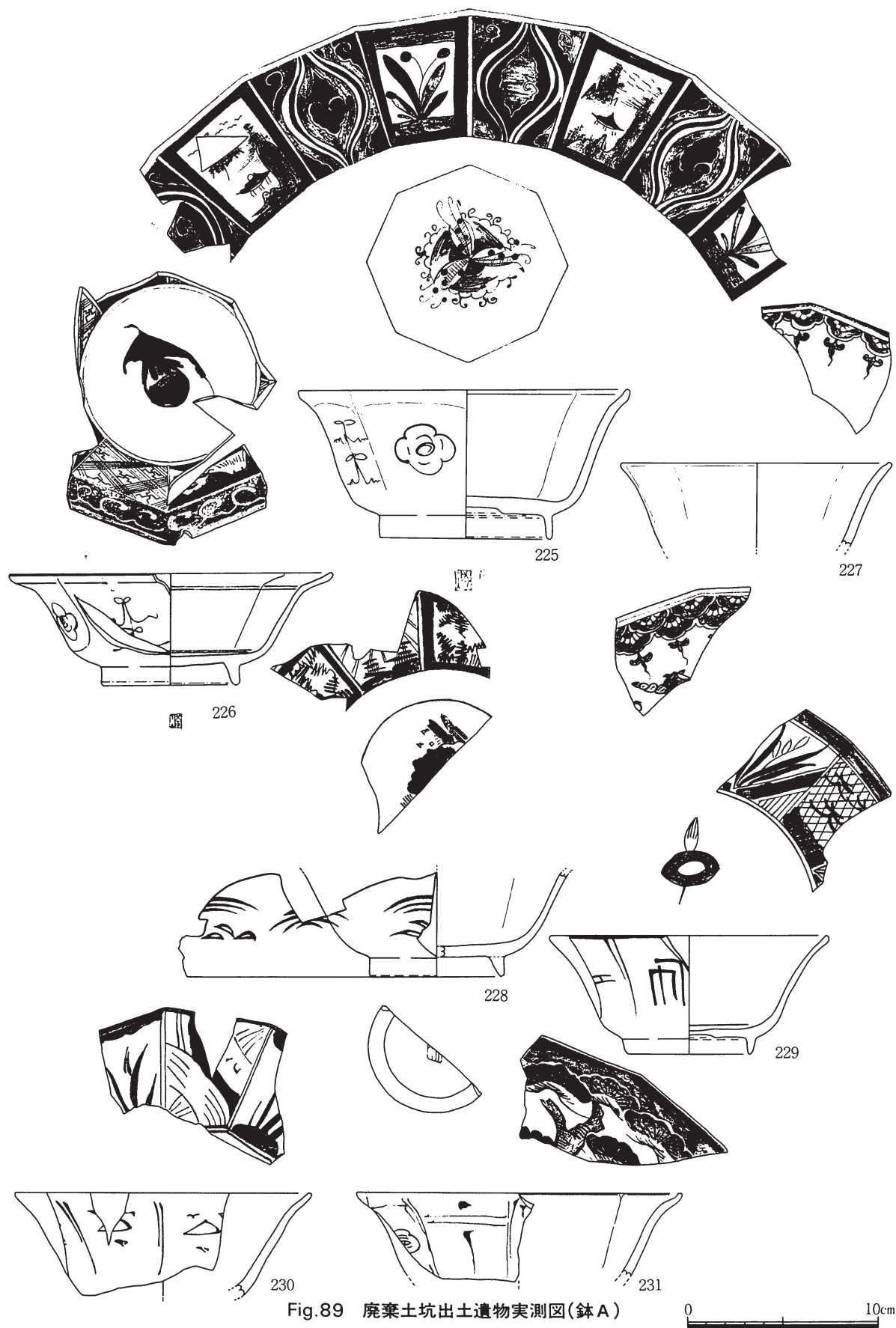


Fig.89 廃棄土坑出土遺物実測図(鉢A)

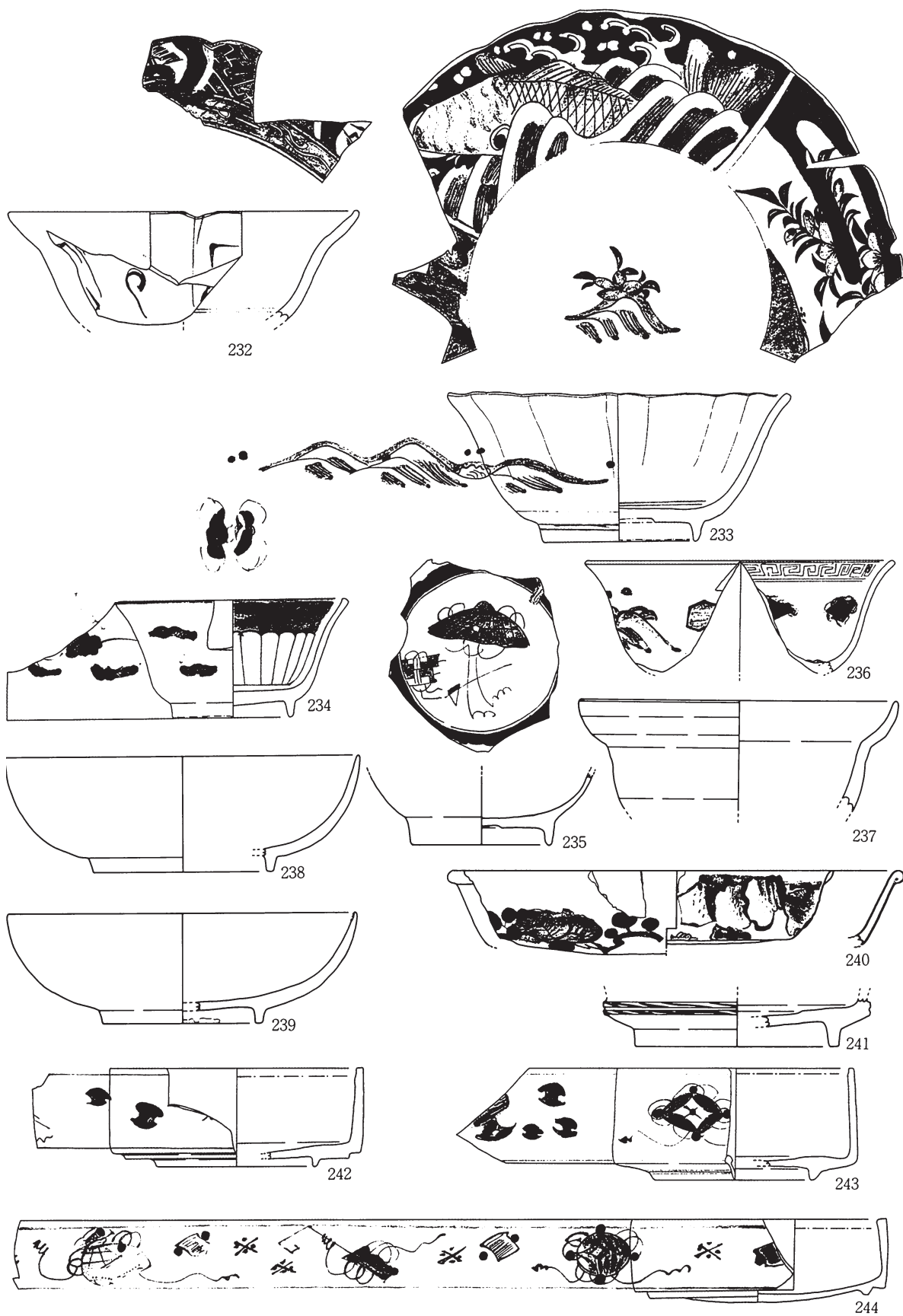
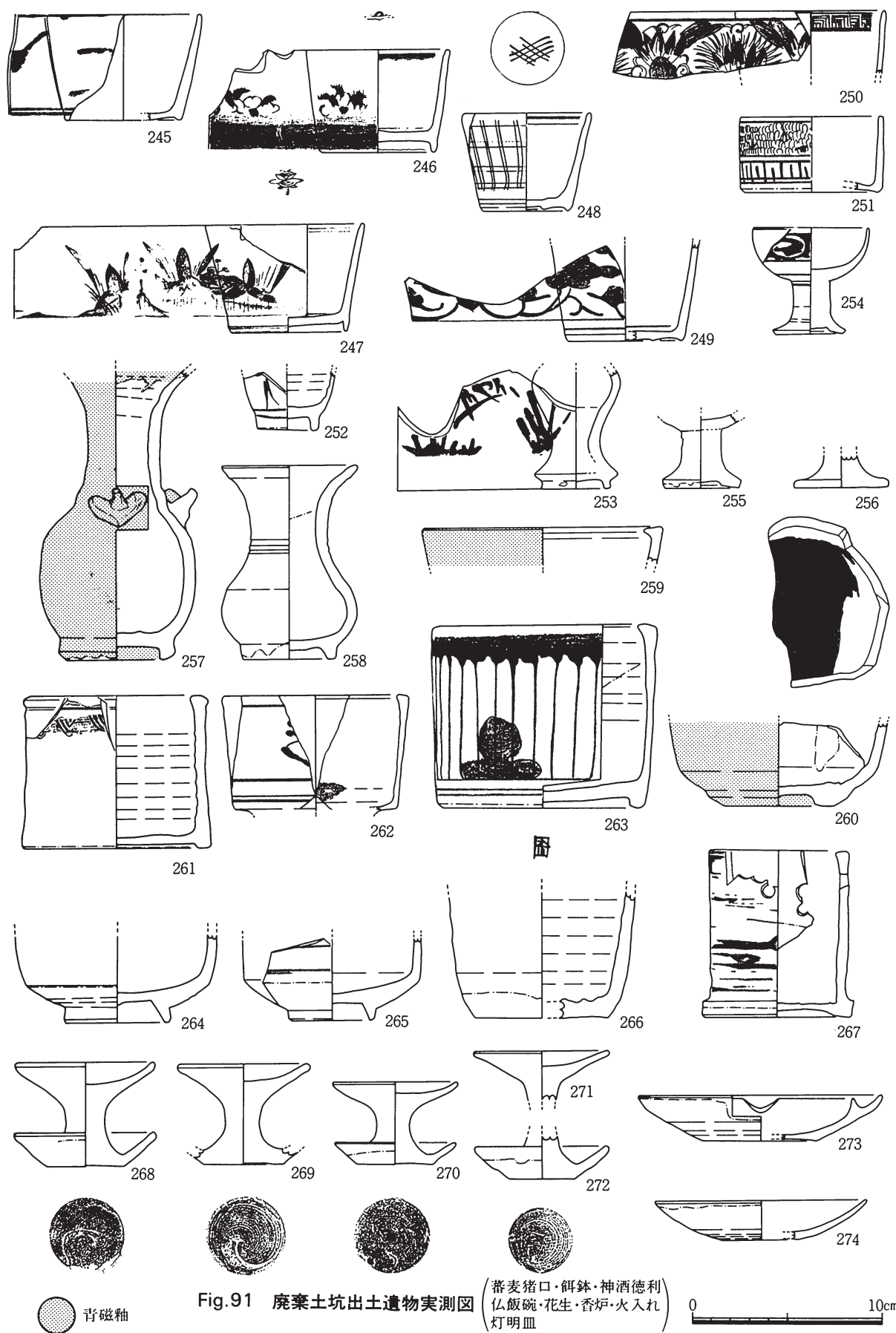


Fig.90 廃棄土坑出土遺物実測図(鉢A・段重)



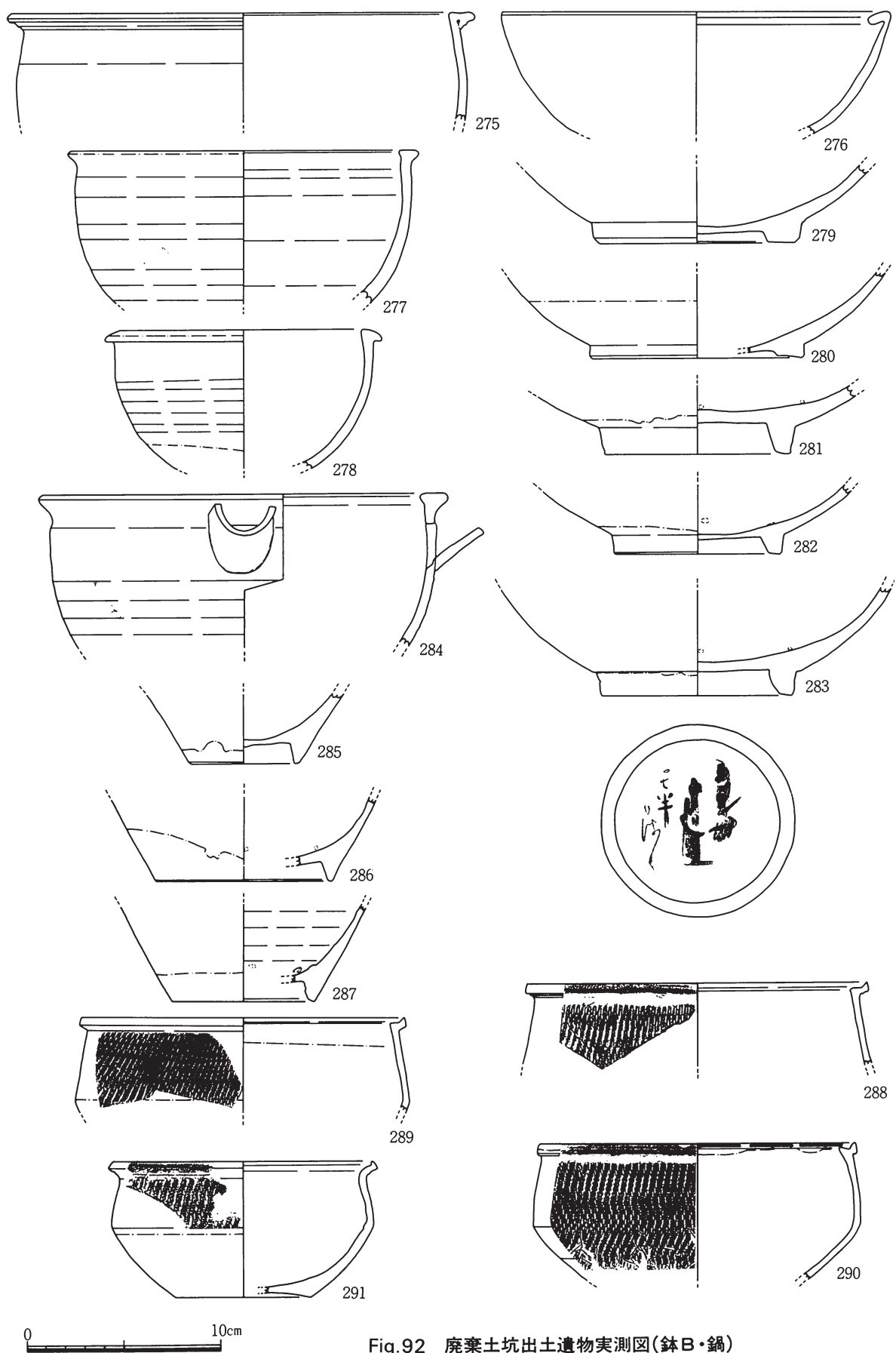
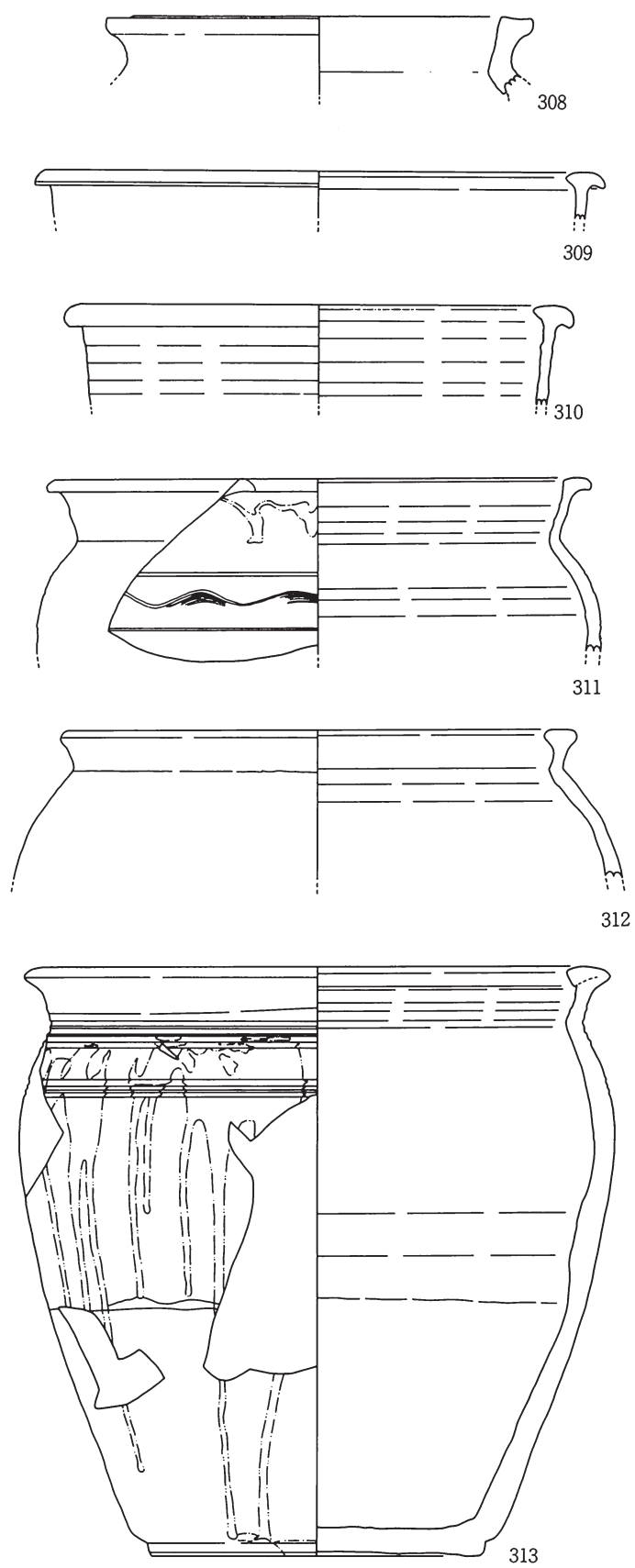


Fig.92 廃棄土坑出土遺物実測図(鉢B・鍋)

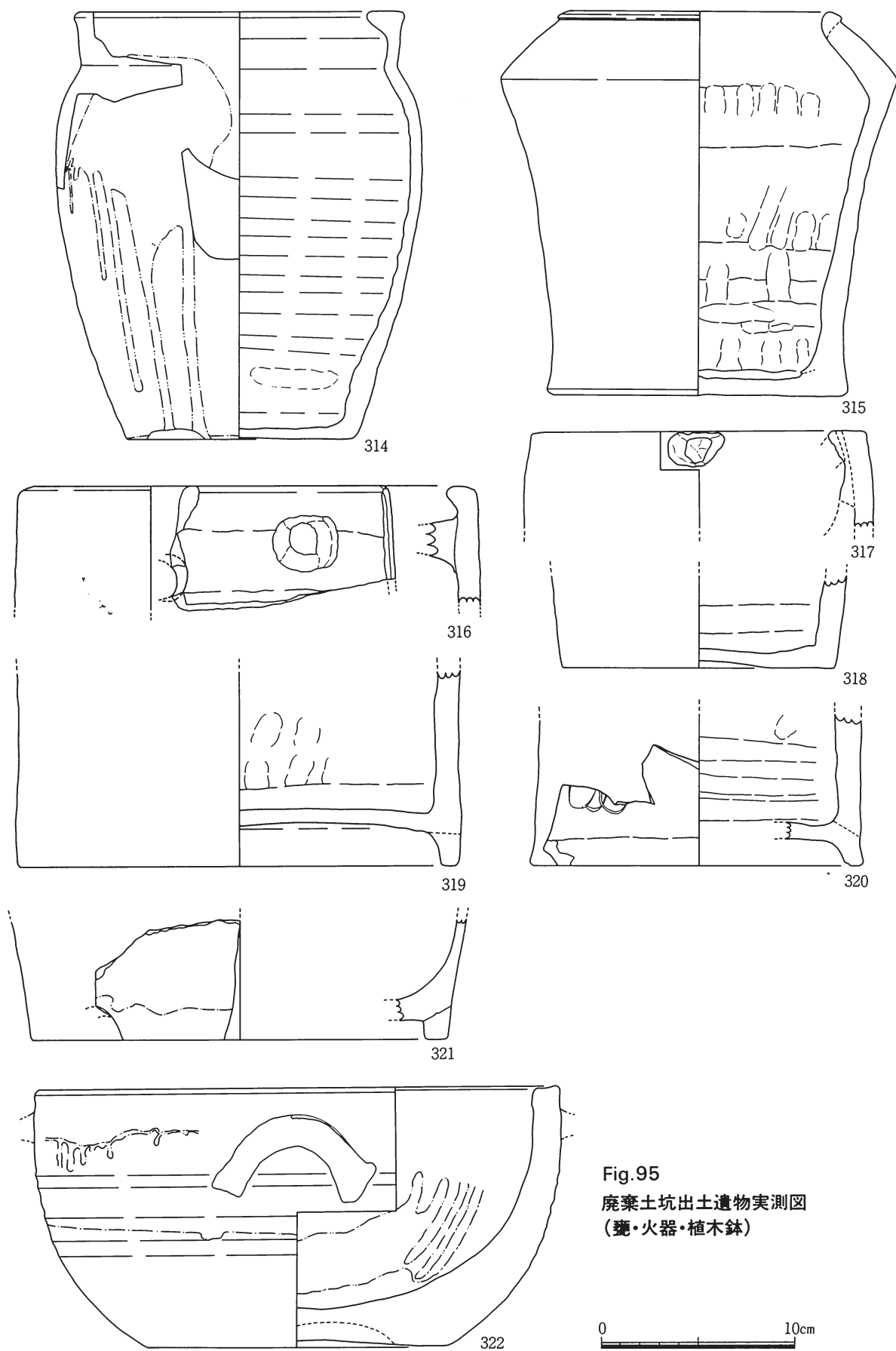


Fig.93 廃棄土坑出土遺物実測図(瓶・土瓶)



0 10cm

Fig.94 廃棄土坑出土遺物実測図(甕)



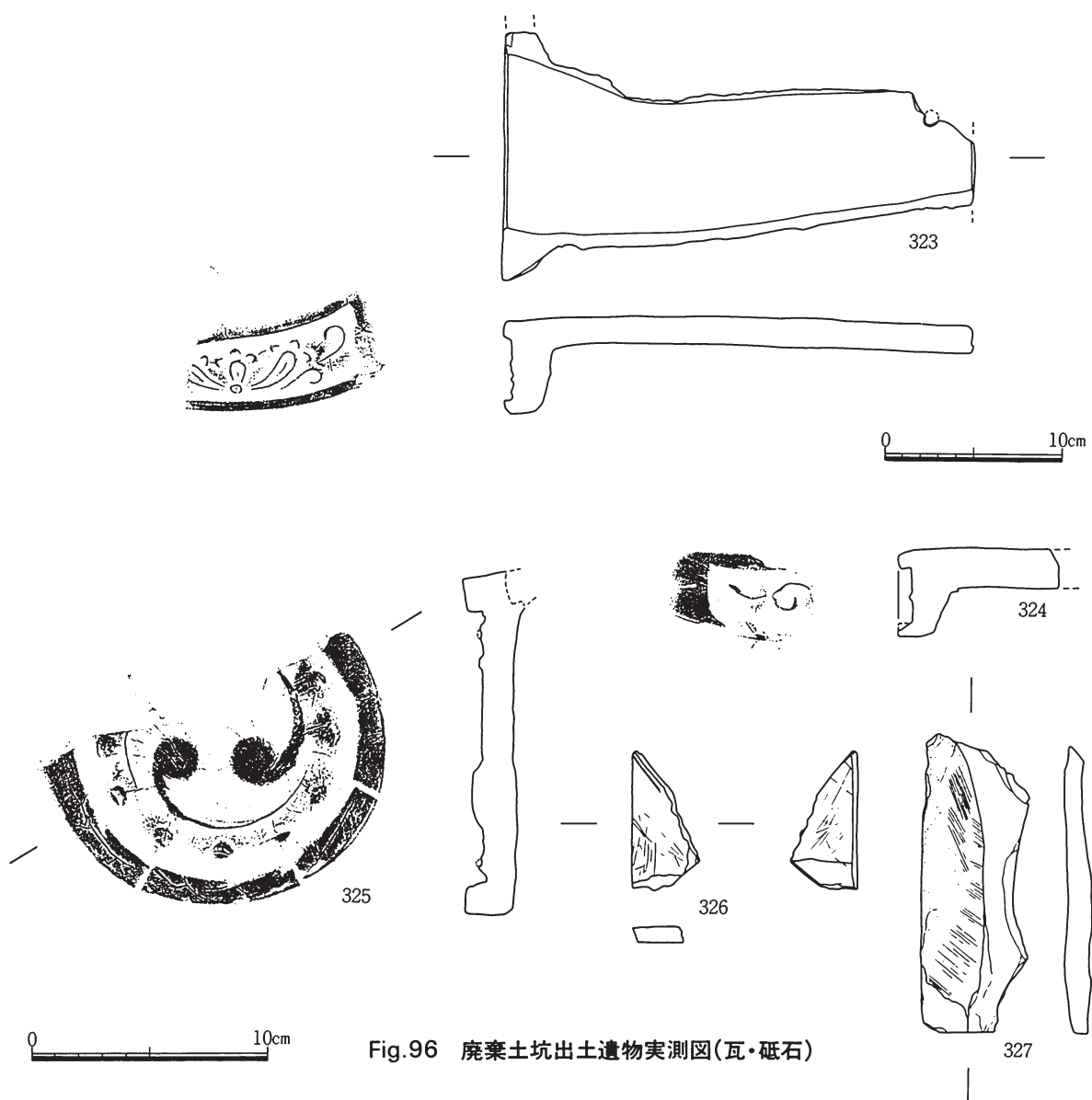


Fig.96 廃棄土坑出土遺物実測図(瓦・砥石)

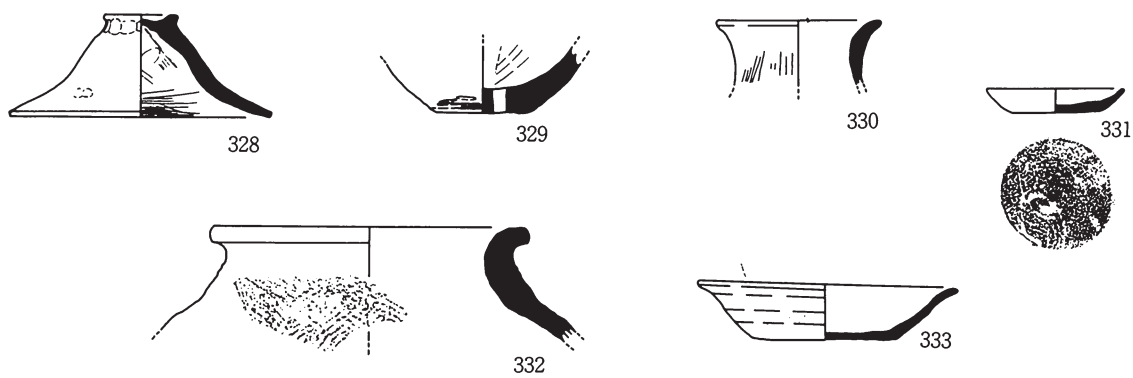


Fig.97 調査Ⅱ区包含層出土遺物実測図

II区(廃棄土坑・包含層) 出土遺物観察表

遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種/ 器形	法 量(cm)				成形技法/ 調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎 土	特 徴	産 地	年 代	備 考
						口径	器高	胴径	底径							
1	79	42	廃棄 土坑	磁器 染付	碗 端反り 形	10.6					(内)雷紋 (外)玩具紋 (宝紋)	白色・透明感 を持つ・剝離面 はやや荒い・円、 裂孔が存在		能茶山	19世紀	193とセット を成す。
2	79	42	"	磁器 染付	碗 端反り 形	10.0	5.8		3.6		(内)雷紋帯	白色・やや透明 感を持つ・剝離 面はやや荒い・ 円、孔が存在	畳付けの内側に砂 粒が付着する。	能茶山	19世紀	
3	79	42	"	磁器 染付	碗 端反り 形	10.4					(内)帯線 (外)二重格子・ 楓	白色・透明感 を持つ・剝離面 は滑らか・円、裂 孔が存在		能茶山 ?		
4	79	42	"	磁器 染付	碗 端反り 形	10.2	5.7		4.0		(内)格子紋・ 帯線 (外)二重格子・ 楓	白色・透明感 を持つ・剝離面 は滑らか・円、裂 孔が存在	破断面に粒子が付 着する。	能茶山 ?		
5	79	42・ 69	"	磁器 染付	碗 端反り 形	10.6	5.9		4.0		(内)火焰宝珠 紋 (外)山水紋	白色・やや透明 感を持つ・剝離 面はやや荒い・ 円、裂孔が存在	畳付けに細砂粒が 付着する。	能茶山	19世紀	
6	79	42	"	磁器 染付	碗 端反り 形	9.2					(外)草紋	白色・透明感 を持つ・剝離面 はやや荒い・円、 裂孔が存在	透明釉は白濁し班 になる。	瀬戸・ 美濃	19世紀	
7	79	42・ 69	"	磁器 染付	碗 端反り 形	8.4	4.3		3.0		(外)草花紋・ 蝶	白色・粒子は良 好にガラス化・ やや透明感を持 つ・剝離面はや や荒い	釉薬はやや白濁す る。やや大きめの 貫入が見られる。	能茶山	19世紀	
8	79	42	"	磁器 染付	碗 端反り 形	8.8	4.3		3.4		(外)草花紋・ 渦紋?	白色・透明感 を持つ・剝離面 はやや荒い・円裂 孔が存在	各位の圈線は赤絵 で施され、口唇部 は赤絵により口銹 風を成す。		近代?	227と同一紋 様意匠。
9	79	42	"	磁器	碗 端反り 形	8.4	4.5		3.5		(内)宝船・ 「福神」の文 字	白色・透明感 を持つ・剝離面 はやや荒い・円、 裂孔が存在	口唇部は口銹風に 赤絵を施し仕上げ る。		近代?	
10	79	42	"	磁器 染付	碗 端反り 形	9.8				外面に細か なロクロ目 が残る。	(内)雷紋 (外)桜開山水 紋	白色・透明感 を持つ・剝離面 はやや荒い・円孔 が存在		能茶山	19世紀	端反り形?
11	79	42	"	磁器 上絵付	碗 端反り 形	8.9	4.3		3.3		(外)草花紋・ 渦繫紋・圈線 他は赤絵によ る。	白色・透明感 を持つ・剝離面 は滑らか・円、裂 孔が存在			近代?	218と同一紋 様意匠。
12	79	42	"	磁器 上絵付	小碗 端反り 形	7.0	3.6		3.0			白色・やや透明 感を持つ・剝離 面はやや荒い・ 円、裂孔が存在			近代?	
13	79	42・ 69	"	磁器 白磁	碗 端反り 形	8.8	4.6		3.2		(外)陰刻によ る梅花紋	白色・透明感 を持つ・剝離面 は滑らか・円孔が 存在		瀬戸・ 美濃	19世紀	煎茶碗
14	79	42	"	磁器 染付	碗 端反り 形	8.6					(外)蝶紋	白色・透明感 を持つ・剝離面 はやや荒い・円、 裂孔が存在	貫入が見られる。	瀬戸・ 美濃	19世紀	222と同じ紋 様意匠。
15	79	42	"	磁器 染付	碗 端反り 形	8.8					(外)蝶紋	白色・透明感 を持つ・剝離面 はやや荒い・円、 裂孔が存在	細かな貫入が見ら れる。透明釉の一 部が白濁する。	瀬戸・ 美濃?		226と同一紋 様意匠。
16	79	42	"	陶器	碗 端反り 形	9.4					(内)灰釉 (外)灰釉	灰白～白色・透 明感を持つ・剝 離面はやや荒い・ 円、裂孔が存在	貫入が見られる。	信楽		
17	79	42	"	磁器 上絵付	碗 端反り 形	10.4					(外)花紋	白～灰白色・透 明感を持つ・剝 離面はやや荒い・ 円孔が存在	透明釉は緑灰色を 帯びる。			
18	79	42	"	陶器	碗 端反り 形	8.8				(外)ロクロ 目・削り	(内)灰釉・緑 釉掛け (外)灰釉・緑 釉掛け・露胎	白～黄白色・透 明感を持つ・剝 離面はやや荒い・ 円、裂孔が存在	細かな貫入が見ら れる。			
19	79	42	"	磁器 上絵付	碗 端反り 形	8.0	4.1		3.0		(内)綱干・亀	白色・透明感 を持つ・剝離面 はやや荒い・円、 裂孔が存在			近代?	

Ⅱ 区（廃棄土坑・包含層）出土遺物観察表

遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種／ 器形	法 量 (cm)				成形技法／ 調整 内面／外面	釉薬・絵付 内面／外面	胎 土	特 徴	産 地	年 代	備 考
						口径	器高	胴径	底径							
20	79	42・ 69	廃棄 土坑	磁器 染付	碗 端反り 形	8.2	4.3		3.6		(内)草花紋・ 帯線 (外)草花紋	白色・やや透明 感を持つ・剝離 面はやや荒い・ 円、裂孔が存在 (裂孔の規模は やや大きい)	やや規模の大きな 貫入が見られる。	能茶山	19世紀	煎茶碗
21	79	42	〃	磁器 白磁	小碗 端反り 形	8.2	4.2		3.4			白色・透明感 を持つ・滑らか	畳付けに砂粒が付 着する。口唇部の 釉薬を試とる。	瀬戸・ 美濃？	19世紀	
22	79	42・ 69	〃	陶器	碗 端反り 形	8.8	4.7		3.0	ロクロは調 整時左回転。	(内)灰釉 (外)灰釉・露 胎	白色・剝離面は 滑らか・規模の 小さい円、裂孔 が存在	細かな貫入が見ら れる。	信楽		
23	79	42・ 69	〃	磁器 染付	碗 端反り 形	8.2	4.6		3.4		(内)山水紋？ 濃みによる 帯 線 (外)魚紋	白色・透明感 を持つ・剝離面 はやや荒い・円、 裂孔が存在	紋様が端部で滲む。	能茶山		
24	79	42・ 69	〃	磁器 染付	碗 端反り 形	8.6	4.3		3.5		(内)濃みによる 帯線 (外)草花紋・ 捻り紋	白色・やや透明 感を持つ・剝離 面はやや荒い・ 円孔が存在		能茶山	19世紀	
25	79	42・ 69	〃	磁器 染付	碗 端反り 形	10.0	4.8		3.6		(外)草花紋	白色・やや透明 感を持つ・剝離 面はやや荒い・ 円孔が存在		瀬戸・ 美濃	19世紀	
26	79	42・ 69	〃	磁器 染付	碗 端反り 形	8.8	5.3		3.4		(内)貝紋 (外)蝶紋・丸 紋・井桁	白色・透明感 を持つ・剝離面 は滑らか・円、 裂孔が存在		能茶山 ？		
27	80	43・ 69	〃	磁器 染付	碗 端反り 形	10.5	5.8		4.8		(内)草花紋・ 帯線 (外)木賊紋	白色・やや透明 感を持つ・剝離 面はやや荒い・ 円、裂孔が存在		瀬戸・ 美濃	19世紀	
28	80	43	〃	磁器 染付	碗 端反り 形	10.3	5.9		4.4		(内)草花紋・ 濃みによる 帯 線 (外)木賊紋	白色・透明感 を持つ・剝離面 は滑らか・円、 裂孔が存在		瀬戸・ 美濃	19世紀	
29	80	43	〃	磁器 染付	碗 端反り 形	11.0	5.8		4.6		(内)草花紋・ 濃みによる 帯 線 (外)木賊紋	白色・透明感 を持つ・剝離面 は滑らか・円、 裂孔が存在	畳付けには一部砂 粒が付着する。細 かい貫入が見られ る。	瀬戸・ 美濃	19世紀	
30	80	43	〃	磁器 染付	碗 端反り 形	10.6	5.9		4.4		(内)草花紋 (外)木賊紋	白色・透明感 を持つ・剝離面 は滑らか・円孔が 存在		美濃	19世紀	
31	80	43	〃	磁器 染付	碗		5.1		4.0		(内)草花紋 (外)草花紋・ 笹紋	白色・やや透明 感を持つ・剝離 面はやや荒い・ 円、裂孔が存在	畳付けに細砂が一 部付着する。	能茶山	19世紀	小龍Ⅱ—889・ 端反り形？
32	80	43・ 70	〃	磁器 染付	碗 端反り 形	10.8	5.7		4.0		(内)水紋 (外)網目紋？	白色・透明感 を持つ・剝離面 はやや荒い・円孔 が存在	コバルトによる染 付		近代	
33	80	43・ 70	〃	磁器 染付	碗 端反り 形	11.3	5.5		4.2		(内)寿紋 (外)竹紋	白色・やや透明 感を持つ・剝離 面はやや荒い・ 円、裂孔が存在	コバルト釉による 染付		近代	
34	80	43・ 70	〃	磁器 染付	碗 端反り 形	10.6	5.8		4.0		(内)「寿」紋 (外)楓紋？	白色・透明感 を持つ・剝離面 はやや荒く・円孔 が存在	コバルト釉による 染付		近代	
35	80	43・ 70	〃	磁器 染付	碗 端反り 形	10.2	5.3		3.6		(内)水紋横線 (外)松葉紋？	白色・やや透明 感を持つ・剝離 面はやや荒い・ 円、裂孔が存在	畳付けには細砂粒 が付着する。	能茶山	19世紀	
36	80	43	〃	磁器 染付	碗 端反り 形	11.6	6.2		4.2		(内)口縁部に 8条の横線 (外)山水紋	白色・やや透明 感を持つ・剝離 面はやや荒い・ 円、裂孔が存在	部分的に貫入が見 られる。足付ハマ 跡が存在する。	能茶山	19世紀	
37	80	43・ 70	〃	磁器 染付	碗 丸形	8.0	5.1		3.5		(内)宝紋 (内)稲束紋	白色・やや透明 感を持つ・剝離 面はやや荒い・ 円、裂孔が存在	高台内に「サ」銘 有り。	能茶山	19世紀	
38	80	43・ 70	〃	磁器 染付	碗 丸形	9.6	5.1		4.5		(外)宝紋・鎚 紋	白色・透明感 を持つ・剝離面 は滑らか・円孔が 存在	高台内銘有り、角 内「茶」。細かな 貫入が見られる。	能茶山	19世紀	

II区(廃棄土坑・包含層) 出土遺物観察表

遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種/ 器形	法 量(cm)				成形技法/ 調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎 土	特 徴	産 地	年 代	備 考
						口径	器高	胴径	底径							
39	80	43	廃棄 土坑	磁器 上絵付	碗 丸形	8.7					(内)呉須による絵垣 (内)呉須による圈線・唐草 (紋様輪郭は赤絵)	白色・透明感を持つ・剝離面はやや荒い・円、裂孔が存在	色絵の輪郭は型紙による?		近代?	
40	80	43・70	"	磁器 染付	碗 丸形	9.6	5.8		6.4		(外)宝紋	白色・透明感を持つ・剝離面はやや荒い・円孔が存在	高台内に角内「茶」銘を施す。疊付けに砂粒が付着する。	能茶山	19世紀	
41	80	43・70	"	磁器 染付	碗 丸形	8.4	5.5		3.6		(内)帆掛け船 (外)菖蒲紋	白色・やや透明感を持つ・剝離面はやや荒い・円、裂孔が存在	高台内に「サ」銘。細かな貫入が見られる。見込底部に砂付着。	能茶山	19世紀	煎茶碗
42	80	43	"	磁器	碗 丸形	8.8	5.6		3.2		(内外)瑠璃釉	白色・透明感を持つ・剝離面はやや荒い・円、裂孔が存在		肥前系		
43	80	43	"	陶器	碗 丸形	9.1	5.2		3.2	ロクロは調整時に左回転。	(内)灰釉・露胎 (外)灰釉・露胎	白色・透明感を持つ・剝離面はやや荒い・円、裂孔が存在	極く細かな貫入が見られる。	信楽		
44	81	44	"	磁器 青磁染付	碗 丸形	11.6	5.9		4.0		(内)五弁花・四方禪 (外)青磁釉	白色・やや透明感を持つ・剝離面はやや荒い・円、裂孔が存在	高台内に退化した渦福	広瀬向	18世紀後半	
45	81	44	"	磁器 青磁染付	碗 丸形	11.3	6.1		4.4		(内)五弁花・四方禪 (外)青磁釉	白色・やや透明感を持つ・剝離面はやや荒い・円孔が多く存在	高台内に渦福。貫入が見られる。疊付けに砂粒が付着する。	広瀬向	18世紀後半	
46	81	44	"	磁器 青磁染付	碗 丸形	10.6	6.2		4.2		(内)四方釉 (外)青磁釉	灰白色・透明感を持つ・剝離面はやや荒い・円、裂孔が存在	高台内に渦福が施される。疊付けには砂粒が付着する。貫入が見られる。	広瀬向	18世紀後半	
47	81	44	"	磁器 青磁染付	碗 丸形	11.0	6.0		4.6	ロクロは調整時左回転。	(内)四方禪 (外)青磁釉	灰～灰白色・透明感を持つ・剝離面はやや荒い・円、裂孔が存在	高台基部には接合が認められる。	広瀬向	18世紀後半	
48	81	44	"	磁器 青磁染付	碗 丸形				4.2		(内)四方禪 (外)青磁釉	灰白色・透明感を持つ・剝離面はやや荒い・円、裂孔が存在	高台内に渦福が施される。疊付けには砂粒が付着する。底部内面に褐色斑が見られる。	広瀬向	18世紀後半	
49	81	44	"	磁器 青磁染付	碗 丸形	11.0	5.9		4.0		(内)太極図 (外)青磁釉	灰白色・透明感を持つ・剝離面はやや荒い・円、裂孔が存在	疊付けは砂粒が付着する。底部内面には足付ハマ跡が見られる。	広瀬向	18世紀後半	
50	81	44	"	磁器 青磁染付	碗				4.0		(内)コンニャク印判による五弁花 (外)青磁釉	灰～灰白色・透明感を持つ・剝離面はやや荒い・円、裂孔が存在	疊付けに砂粒が付着する。高台内に渦福を施す。	広瀬向	18世紀後半	
51	81	44	"	磁器 染付	碗 丸形	10.8					(内)波線 (外)網目紋	白色・透明感を持つ・剝離面はやや荒い・円孔が主に、裂孔が稀に存在	波線は振幅が一定せず雑な仕上がりを示す。	肥前	18世紀	
52	81	44・52	"	磁器 染付	碗 丸形	10.0	5.2		3.9		(外)二重網目紋	白色・透明感を持つ・剝離面はやや荒い	疊付けに砂粒が付着する。	肥前	18世紀	
53	81	44	"	磁器 染付	碗 丸形	12.0					(外)桃紋	灰白色・透明感を持つ・剝離面はやや荒い・円、裂孔が存在		肥前系		
54	81	44	"	磁器 染付	碗 丸形				4.4		(内)コンニャク印判による五弁花 (外)雲	灰白色・透明感を持つ・剝離面はやや荒い・円、裂孔が存在	透明釉は白濁する。	肥前	18世紀	
55	81	44	"	磁器 染付	碗 丸形or 端反り形				4.4		(外)楼閣山水紋	白色・やや透明感を持つ・剝離面はやや荒い・円、裂孔が存在	貫入が見られる。底部内面に褐色粒が付着する。	能茶山	19世紀	
56	81	44	"	磁器 染付	碗 丸形?				4.9		(内)貝紋	白色・やや透明感を持つ・剝離面はやや荒い・円、裂孔が存在	高台内に角内「茶」銘を施す。内面にサヤ剝落粒子による褐色斑が多い。	能茶山	19世紀	

Ⅱ 区（廃棄土坑・包含層）出土遺物観察表

遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種/ 器形	法 量(cm)				成形技法/ 調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎 土	特 徴	産 地	年 代	備 考
						口径	器高	胴径	底径							
57	81	44	廃棄 土坑	磁器 染付	碗 丸形				4.0		(内)宝紋	白色・やや透明 感を持つ・剝離 面はやや荒い・ 円、裂孔が存在	部分的に貫入が見 られる。	能茶山	19世紀	
58	81	44	"	磁器 染付	碗 丸形or 端反り 形				4.4		(内)十字花	白色・透明感 を持つ・剝離面 はやや荒い・円、 裂孔が存在	底部内面に足付ハ マ跡が見られる。	能茶山	19世紀	
59	81	44	"	磁器 染付	碗 丸形or 端反り 形				3.8		(内)亀紋	白色・やや透明 感を持つ・剝離 面はやや荒い・ 円、裂孔が存在	高台内に角内「茶」 銘を施す。	能茶山	19世紀	
60	81	44	"	磁器	碗 丸形				4.8		(内)染付 (外)褐釉	白色・透明感 を持つ・剝離面 はやや荒い・円、 裂孔が存在	底部内面に足付ハ マ跡が見られる。	肥前系		
61	81	44	"	磁器 染付	碗 丸形				2.8		(外)楓?	白色・透明感 を持つ・剝離面 はやや荒い・円、 裂孔が存在		能茶山	19世紀	
62	81	44	"	磁器	碗				2.2			白色・透明感 を持つ・剝離面 はやや荒い・円孔 が多く存在		肥前系		
63	81	44	"	磁器 染付	碗 丸形				3.6			白色・やや透明 感を持つ・剝離 面はやや荒い・ 円、裂孔が存在	畳付けに砂粒が付 着する。透明釉は 白濁する。	能茶山	19世紀	煎茶碗
64	81	44	"	磁器 染付	碗				4.2			灰白色・透明感 を持つ・剝離面 はやや荒い・円、 裂孔が存在	畳付けには砂粒が 付着する。底部内 面には褐色斑が存 在する。	波佐見 ?		
65	81	44	"	磁器 染付	碗 丸形?				3.9		(外)斜格子紋?	白色・透明感 を持つ・剝離面 はやや荒い・円、 裂孔が存在	底部内面に足付ハ マ跡が見られる。	能茶山	19世紀	
66	81	44	"	磁器 染付	碗 丸形?				4.0		(外)山水紋	白色・透明感 を持つ・剝離面 はやや荒い・円、 裂孔が存在	畳付けに砂粒が付 着する。見込みに 4ヶ所足付ハマ跡 が存在する。	肥前系		
67	81	44	"	磁器 染付	碗 丸形?				3.2		(内)鳥紋 (外)草花紋	灰白色・透明感 を持つ・剝離面 はやや荒い・円、 裂孔が存在	透明釉は白濁する。 一部に貫入が見ら れる。	能茶山	19世紀	
68	82	44	"	陶器 陶胎 染付	碗 丸形	9.2					(外)唐草紋	灰～暗灰色・透 明感を持つ・剝 離面はやや荒い 円、裂孔が存在	細かな貫入が見ら れる。釉薬収縮に よる露胎部分が存 在する。	肥前	18世紀	
69	82	44	"	陶器 陶胎 染付	碗 丸形	9.4	7.4		3.6	(内)ロクロ 目・撫で (外)ロクロ 目	(外)鉄絵	暗灰色・粒子の 一部はガラス化 が進む・剝離面 は荒い・円孔が 存在	細かな貫入が見ら れる。	肥前	18世紀	
70	82	45	"	陶器 陶胎 染付	碗 丸形				5.2		(外)山水紋	灰色・透明感 を持つ・剝離面 は荒い・円、裂孔 が多く存在	やや細かな貫入が 見られる。	肥前	18世紀	
71	82	45	"	陶器 陶胎 染付	碗 丸形?				4.8		(外)鉄絵・山 水紋	暗灰色・粒子単 位が残る・剝離 面は荒い・円、 裂孔が存在	細かな貫入が見ら れる。畳付けには 砂粒が付着する。	肥前	18世紀	
72	82	45	"	陶器 陶胎 染付	碗 丸形				6.1			灰白～灰褐色・ 透明感を持つ・ 剝離面は荒い・ 円、裂孔が存在	細かい貫入が認め られる。透明釉は 白濁する。	肥前	18世紀	
73	82	45	"	陶器	碗 丸形	11.6					(内外)灰釉	灰色・やや透明 感を持つ・剝離 面はやや荒い・ 円孔が存在	細かな貫入が見ら れる。体部下位に 釉薬の収縮による 露胎部分が存在す る。	尾戸系	18世紀?	
74	82	45	"	陶器	碗 丸形	13.8					(内)灰釉 (外)灰釉	灰～黄灰色・透 明感を持つ・剝 離面は荒い・円、 裂孔が存在	細かな貫入が見ら れる。	尾戸系	18世紀 ?	呉器手 ?

II区(廃棄土坑・包含層) 出土遺物観察表

遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種/ 器形	法 量(cm)				成形技法/ 調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎 土	特 徴	産 地	年 代	備 考
						口径	器高	胴径	底径							
75	82	45	廃棄 土坑	陶器	碗 丸形				5.2	ロクロは調 整時に左回 転。	(内)灰釉 (外)灰釉・露 胎	灰白色・粒子の ガラス化は良く 透明感を持つ・ 剥離面はやや荒 い・円、裂孔が 存在	細かな貫入が見 られる。底部内面 に足付ハマ跡が 存在する。	尾戸系?		
76	82	45	"	陶器	碗 丸形				5.1		(内外)灰釉	白色・赤色粒・ 剥離面はやや荒 い・円、裂孔が 存在	細かな貫入が見 られる。	尾戸	18世紀	呉器手
77	82	45	"	陶器	碗 丸形	13.0	5.9		4.2		(内)緑釉 (外)緑釉・暗 緑釉	白色・やや透明 感を持つ・剥離 面は荒く・裂孔 が存在	体部外面に小さ な方形の刻み。貫 入が見られる。	瀬戸	18世紀 後半	鍛手
78	82	45	"	磁器 染付	碗 広東形	10.6	6.6		6.1		(外)斜線紋・ 濃みによる帯 線	白色・やや透明 感を持つ・剥離 面はやや荒い・ 円孔が存在	貫入が見られる。 底部内面に褐色 斑が見られる。	能茶山	19世紀	
79	82	45	"	磁器 染付	碗 広東形	10.2	6.5		5.6		(外)稲束?	白色・透明感 を持つ・剥離面 はやや荒い・円 孔が存在	底部内面にサヤ 剥落粒子による 褐色斑が見られ る。透明釉は青 味を帯び、刷毛 塗りによる横位 の縞が入る。	能茶山	19世紀	
80	82	45	"	磁器 染付	碗 広東形	11.7					(外)流水紋・ 亀・水草	白色・透明感 を持つ・剥離面 はやや荒い・円 、裂孔が存在		肥前系		
81	82	45	"	磁器 染付	碗 広東形	11.2	6.7		6.2		(内)宝紋 (外)山水紋	白色・やや透明 感を持つ・剥離 面はやや荒い・ 円、裂孔が存在	貫入が見られる。 高台内に「サ」 銘を施す。	能茶山	19世紀	
82	82	45	"	磁器 染付	碗 広東形	12.0	5.8		5.8		(外)草花紋	白色・透明感 を持つ・剥離面 は概ね滑らか・ 円孔が存在	畳付けに細砂粒 が付着する。	肥前系		
83	82	45	"	磁器 染付	碗 平形	11.6					(外)十字花	乳白～白色・や や透明感を持つ ・剥離面はやや 荒い・円、裂孔 が存在	細かな貫入が見 られる。外面に弱 いロクロ目が認 められる。	能茶山	19世紀	
84	82	45	"	磁器 染付	碗 平形or 広東形	10.8					(外)草花紋	白色・やや透明 感を持つ・剥離 面はやや荒い・ 円、裂孔が存在	透明釉はやや青 味を帯びて発色 する。口縁部下 に他製品の熔着 痕跡在り。	能茶山	19世紀	
85	82	45	"	磁器 染付	碗 広東形	11.6					(外)竹紋	白～灰白色・透 明感を持つ・剥 離面はやや荒い ・円、裂孔が存 在	外面に貫入が見 られる。	能茶山	19世紀	
86	82	45・ 70	"	磁器 染付	碗 広東形	11.0	6.9		6.5		(外)草花紋	白色・やや透明 感を持つ・剥離 面はやや荒い・ 円、裂孔が存在	高台内に「サ」 銘を施す?貫入 が見られる。底 部内面に足付ハ マ跡が見られる。	能茶山	19世紀	
87	82	45	"	磁器 染付	碗 広東形	9.0	5.7		4.6		(外)飛鳥・山 水紋	白色・やや透明 感を持つ・剥離 面はやや荒い・ 円、裂孔が存在		能茶山	19世紀	
88	82	45・ 88	"	磁器 染付	碗 広東形	10.6	6.4		6.0		(外)松紋・岩	白色・やや透明 感を持つ・剥離 面はやや荒い・ 円孔が存在	貫入が見られる。 底部内面に足付 ハマ跡が見られ る。	能茶山	19世紀	
89	83	45	"	磁器 染付	碗 広東形				6.4		(内)山水紋?	白色・やや透明 感を持つ・剥離 面はやや荒い・ 円、裂孔が存在	細かな貫入が見 られる。底部内 面に足付ハマ跡 が見られる。高 台内に角内「茶 」銘を施す。	能茶山	19世紀	
90	83	45	"	磁器 染付	碗 広東形				5.8		(内)岩・波	白色・やや透明 感を持つ・剥離 面はやや荒い・ 円、裂孔が存在	見込みに足付ハ マ跡が見られる。 高台内「サ」銘 を施す。	能茶山	19世紀	
91	83	45	"	磁器 染付	碗 広東形				6.2		(内)山水紋?	白色・やや透明 感を持つ・剥離 面はやや荒い・ 円、裂孔が存在	見込みに足付ハ マ跡が見られる。 高台内「サ」銘 を施す。	能茶山	19世紀	

Ⅱ 区（廃棄土坑・包含層）出土遺物観察表

遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種／ 器形	法 量 (cm)				成形技法／ 調整 内面／外面	釉薬・絵付 内面／外面	胎 土	特 徴	産 地	年 代	備 考
						口径	器高	胴径	底径							
92	83	45	廃棄 土坑	磁器 染付	碗 広東形				6.6		(内)山水紋 (外)草花紋	白色・やや透 明感を持つ・ 剥離面はやや 荒い・円、裂 孔が存在	高台内に角内「茶」 銘を施す。透明釉 は白濁する。	能茶山	19世紀	
93	83	46	"	磁器 染付	碗 広東形				6.0		(内)筆描きに よる五弁花 (外)山水紋	白色・透明感 を持つ・剥離 面はやや荒い・円、 裂孔が存在	高台内に「サ」銘 を施す。内面にサ ヤ剥落粒子による 褐色斑が多い。	能茶山	19世紀	
94	83	46 ・ 71	"	磁器 染付	碗 広東形				5.6		(内)岩・波 (外)山・木・ 人物	灰白色・透明 感を持つ・剥 離面は滑らか・円、 裂孔が存在	疊付けに細砂が付 着する。サヤ剥落 粒子が付着する。	肥前系?		
95	83	46	"	磁器 染付	碗 広東形				5.7			灰白色・透明 感を持つ・剥 離面は概ね滑らか・円孔が存在	疊付けの内側に砂 粒が付着する。透 明釉はやや青味を 帯びる。	肥前系		
96	83	46	"	磁器 染付	碗 広東形				6.5			白色・やや透 明感を持つ・剥 離面はやや荒い・円、裂孔が存在		能茶山	19世紀	
97	83	46	"	磁器 染付	碗 広東形				6.1		(内)五弁花 (外)山水紋	灰色・透明感 は無い・剥離 面はやや荒い・円、 裂孔が存在	細かな貫入が見 られる。	肥前系		
98	83	46	"	磁器 染付	碗 広東形				6.5		(内)草花紋	灰白色・透明 感を持つ・剥 離面はやや荒い・円、 裂孔が存在	底部内面に褐色 斑が見られる。	能茶山	19世紀	
99	83	46	"	磁器 染付	碗 広東形				6.1			灰白色・透明 感を持つ・剥 離面はやや荒い・円、 裂孔が存在	内外に貫入が見 られる。	能茶山	19世紀	
100	83	46	"	磁器 染付	碗 広東形				6.0		(内)岩・波 (外)草花紋	白色・やや透 明感を持つ・剥 離面はやや荒い・円、裂孔が存在	細かな貫入が見 られる。底部内 面にサヤ剥落流 による褐色斑 が見られる。	能茶山	19世紀	
101	83	46	"	磁器 染付	碗 広東形				6.4		(外)笹紋?	灰白色・透明 感を持つ・剥 離面は概ね滑 らか・円、裂孔 が存在		肥前系		
102	83	46	"	磁器 染付	碗 広東形				6.4		(内)岩・波	白色・透明感 を持つ・剥離 面はやや荒い・円、 裂孔が存在	疊付けの内側に 砂粒が付着する。 底部内面に褐色 斑が見られる。	能茶山	19世紀	
103	83	46	"	磁器 染付	碗 広東形				5.2		(外)山or岩・ 日足	灰白色・透明 感を持つ・剥 離面は荒い・円、裂 孔が存在		肥前系		
104	83	46	"	磁器 染付	碗 広東形				7.0		(外)網干	灰白～灰色・透 明感を持つ・剥 離面は概ね滑 らか・円、裂孔 が存在	高台の底位にロ クロ撫で、高台 内に同心円状の 撫で痕。	波佐見	18世紀 末～ 19世紀 前半	
105	83	46	"	磁器 染付	碗 広東形				5.4		(内)「寿」紋	白色・透明感 を持つ・剥離 面はやや荒い・円、 裂孔が存在	疊付けに砂粒が 付着する。	能茶山	19世紀	
106	83	46	"	磁器 染付	碗 広東形				6.0		(外)雪の輪草 花紋	灰白色・透明 感を持つ・剥 離面は概ね滑 らか・円、裂孔 が存在	疊付けに細砂粒 が付着する。底 部内面に褐色 斑が存在。透 明釉は青味を 帯びる。	肥前	1780年 ～ 19世紀 前半	
107	84	46	"	陶器 染付	碗 広東形				6.3	ロクロは成 形時に左回 転。	(内)五弁花	白～乳白色・剥 離面は荒い・円、 裂孔が存在	やや規模の大き い貫入が見られ る。	瀬戸・ 美濃	19世紀	太白焼
108	84	46	"	陶器 染付	碗 広東形				5.8		(内)五弁花	白～乳白色・剥 離面は荒い・円、 裂孔が存在	規模の大きい貫 入が見られる。紋 様は滲む。	瀬戸・ 美濃	19世紀	太白焼
109	84	46	"	陶器 染付	碗 広東形					ロクロは成 形時に左回 転。	(内)五弁花 (外)草花紋?	白～乳白色・剥 離面は荒い・円、 裂孔が存在		瀬戸・ 美濃	19世紀	太白焼
110	84	46	"	磁器 白磁	碗 腰折形	8.8	4.3		4.8			白色・透明感 を持つ・剥離 面はやや荒い・円孔 が存在	見込みに褐色の 斑点が見られる。	能茶山	19世紀	

II区(廃棄土坑・包含層)出土遺物観察表

遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種/ 器形	法 量(cm)				成形技法/ 調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎 土	特 徴	産 地	年 代	備 考
						口径	器高	胴径	底径							
111	84	46	廃棄 土坑	陶器	碗 腰折形	8.6				(内)弱いロ クロ目 (外)低位に 削り	(内外)灰釉	橙色・剥離面は 荒い・円孔が存在	細かな貫入が見ら れる。			
112	84	46	"	陶器	碗 腰折形			9.0	4.2	見込みに足 付ハマ痕。 ロクロは調 整時左回転。	(内)灰釉 (外)灰釉・露 胎	黄白色・赤色粒・ 剥離面やや荒い・ 円、裂孔が存在	細かな貫入が見ら れる。	尾戸	18世紀?	
113	84	46	"	陶器	碗 腰折形				4.4	ロクロの回 転は調整時 に左回転。	(内)灰釉 (外)灰釉・露 胎	淡灰褐色・やや 透明感を持つ・ 剥離面はやや荒 い・円、裂孔が 存在	底部内面に剥落粒 子が付着する。	肥前?		
114	84	46	"	陶器	碗 腰折形				3.6	ロクロは調 整時に右回 転?外面に 削り痕。	(内)灰釉 (外)灰釉・鉄 絵・露胎	灰~灰白色・粒 子のガラス化は 良く透明感を持 つ・剥離面はや や荒い・円、裂 孔が存在	細かな貫入が見ら れる。底部に2条 の条痕が見られる。			265の胎土に 似る。
115	84	46	"	陶器	碗 腰折形				3.9	ロクロは調 整時に左回 転。	(内)灰釉 (外)灰釉・露 胎	黄灰色・粒子は ガラス化は良く 透明感を持つ・ 剥離面は滑らか 円、裂孔が存在	貫入が見られる。 高台は蛇ノ目高台 を呈する。			
116	84	46	"	磁器 染付	碗 筒型	7.4					(内)四方禪 (外)草花紋	灰白~白色・透 明感を持つ・剥 離面はやや荒い・ 円孔が存在	透明釉は白濁し紋 様の一部は不明瞭 となる。	肥前系		
117	84	46	"	磁器 染付	碗 筒型	7.0					(外)笹紋	白色・透明感 を持つ・剥離面 はやや荒い・円孔 が存在	口縁部内面の二重 圈線は端部が込み 帯線状を成す。器 壁に横位の調整痕 が残る。	能茶山	19世紀	
118	84	46	"	磁器 染付	碗 筒型				3.8		(内)筆描き による五弁花	白~乳白色・や や透明感を持つ・ 剥離面はやや荒 い・円、裂孔が 存在	透明釉は白濁し具 須による紋様は不 明瞭。	能茶山	19世紀	
119	84	46	"	磁器 染付	小碗 平形	7.4	3.8		2.6		(外)笹紋・雀?	白色・透明感 を持つ・剥離面 は概ね滑らか・円、 裂孔が存在	量付けの内側に砂 粒が付着する。	肥前系		
120	84	46	"	磁器 染付	碗 平形	11.0					(外)松梅紋	灰白色・やや透 明感を持つ・剥 離面はやや荒い・ 円孔が存在	細かな貫入が認め られる。	能茶山	19世紀	
121	84	46	"	磁器 染付	碗 平形	11.6					(外)雪の輪草 花紋	灰白色・透明感 を持つ・剥離面 はやや荒い・円 裂孔が存在	透明釉はやや青味 を持つ。	波佐見	18世紀 中~ 後半	くらわんか手
122	84	46	"	磁器 染付	碗 平形	12.0					(外)格子紋	白色・透明感 を持つ・剥離面 は概ね滑らか・円、 裂孔が存在		能茶山	19世紀	
123	84	46	"	磁器 染付	碗 平形	12.2					(外)宝紋	乳白~白色・や や透明感を持つ・ 剥離面はやや荒 い・円孔が存在	細かな貫入が認め られる。	能茶山	19世紀	
124	84	47	"	磁器 染付	碗 平形?	11.4					(外)笹紋	灰白色・透明感 を持つ・剥離面 はやや荒い・円、 裂孔が存在	透明釉はやや青味 を持つ。	肥前系		
125	84	47	"	磁器 染付	碗 平形?				3.8		(内)文字紋 (外)山水紋	灰白色・透明感 を持つ・剥離面 は概ね滑らか・円、 裂孔が存在	底部内面にサヤの 剥落粒子が見られ る。	肥前系		
126	84	47	"	磁器 染付	小碗 端反り 形	7.1	3.2		3.2		(内)交叉紋?	白色・透明感 を持つ・剥離面 はやや荒い・円、 裂孔が存在		能茶山?	近代?	
127	84	47	"	磁器 上絵付	小碗 端反り 形	6.6	3.1		2.8		(内)コバルト による松紋	白色・透明感 を持つ・剥離面 はやや荒い・円、 裂孔が存在	量付けの内側に砂 粒が付着する。		近代?	
128	84	47	"	磁器 染付	小碗 丸形	7.0	3.7		2.8		(外)飛鳥	灰白色・透明感 を持つ・剥離面 は概ね滑らか・円孔 が存在	量付けの内側に砂 粒が付着する。透 明釉は白濁する。 器壁は厚い。	肥前系		

Ⅱ 区（廃棄土坑・包含層） 出土遺物観察表

遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種/ 器形	法 量(cm)				成形技法/ 調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎 土	特 徴	産 地	年 代	備 考
						口径	器高	胴径	底径							
129	84	47	廃棄 土坑	磁器	小碗 丸形	6.7	3.2		2.2			白色・透明感を持つ・剝離面はやや荒い・円、裂孔が存在	底部に粘土塊が付着する。畳付けには細砂が付着する。	能茶山	19世紀	
130	84	47	"	磁器 染付	小碗 丸形	7.9	3.4		2.7		(外)蝶紋・草花紋	白色・透明感を持つ・剝離面はやや荒い・円、裂孔が存在		能茶山	19世紀	
131	84	47	"	磁器 上絵付	小碗	6.4					(内)コバルトによる風景紋	白色・透明感を持つ・剝離面はやや荒い・円、裂孔が存在	体部上位に断面三角形の突帯状の盛り上がりが存在する。		近代?	
132	84	47	"	陶器	小碗	5.9	3.5		2.9	体部下位は削り、撫で。ロクロは調整時左回転。	(内)灰釉 (外)灰釉・露胎	灰色・黒色斑・やや透明感を持つ・剝離面はやや荒い・円、裂孔が存在	胎土中に石英粒が多く存在する。			
133	84	47	"	陶器	小碗 腰折形	6.0	4.0		2.9	ロクロは調整時に左回転。	(内外)鉄釉掛け(ピア掛け)	灰～灰白色・やや透明感を持つ・剝離面はやや荒い・円孔が存在	高台内に角内に「志戸呂」の刻印有り。体部外面に指頭によるものか凹凸が著しい。	志戸呂		
134	84	47	"	磁器	小碗 平形	6.4	2.8		2.2		(内)コバルトによる山水紋 (外)高台に呉須による櫛歯紋	白色・透明感を持つ・剝離面は概ね滑らか・円、裂孔が存在	高台内に銘が施される。	能茶山?	近代?	
135	84	47	"	磁器	小碗 平形	6.6	2.6		2.2		(内)コバルトによる宝紋・雷紋 (外)高台に呉須による櫛歯紋	白色・透明感を持つ・剝離面はやや荒い・円、裂孔が存在	器壁は薄く造られる。		近代?	
136	84	47	"	磁器 上絵付	杯	8.8					(内)コバルト・金箔?等による山水紋	白色・透明感を持つ・剝離面は滑らか・円孔が存在	器壁は薄く造られている。		近代?	
137	84	47	"	磁器 上絵付	小碗				2.8		(内)草花紋	白色・やや透明感を持つ・剝離面はやや荒い・円、裂孔が存在	高台は蛇ノ目高台を成す。		近代?	
138	84	47	"	陶器	碗				1.8	(外)削り痕。ロクロの回転は調整時に左回転。	(内)灰釉 (外)灰釉・露胎	黄白色・剝離面は荒い・円孔が存在	細かい貫入が見られる。	尾戸系		
139	84	47	"	磁器 染付	小碗				3.6		(内)陽刻による草花・丸紋 (外)篆字体	白色・やや透明感を持つ・剝離面はやや荒い・円、裂孔が存在	貫入が見られる。	能茶山	19世紀	
140	84	47	"	磁器 上絵付	小碗				2.8		(内)草花紋	白色・透明感を持つ・剝離面は滑らか・円、裂孔が存在			近代?	
141	84	47	"	磁器 上絵付	小碗				2.8		(内)帆掛け船?	白色・透明感を持つ・剝離面はやや荒い・円、裂孔が存在	畳付けに砂粒が付着する。	能茶山?	近代?	
142	85	47	"	磁器 染付	小皿	9.1	2.5		4.5		(内)二重格子	白色・やや透明感を持つ・剝離面はやや荒く・円孔が存在	見込みは蛇ノ目釉剥ぎを施し、アルミナ砂を塗布する。細かい貫入が認められる。	能茶山	19世紀	灯明皿として使用?
143	85	47	"	磁器 染付	小皿	9.5	2.3		4.4		(内)草紋	白色・やや透明感を持つ・剝離面は荒い・円、裂孔が多く存在	見込みは蛇ノ目釉剥ぎを施し、アルミナ砂を塗布する。	能茶山	19世紀	
144	85	47	"	磁器 染付	小皿	9.6	2.3		4.4		(内)草紋?	白色・透明感を持つ・剝離面はやや荒い・円、裂孔が存在	見込蛇ノ目釉剥ぎを施し、重ね焼きによる高台痕が残る。畳付けに細砂粒が付着。	能茶山	19世紀	
145	85	47	"	磁器 染付	小皿	9.6	2.5		4.5	ロクロは調整時に左回転。	(内)草紋?	白色・やや透明感を持つ・剝離面はやや荒い・円、裂孔が存在	見込みに釉剥ぎを施し、アルミナ砂を塗布する。	能茶山	19世紀	

II区(廃棄土坑・包含層) 出土遺物観察表

遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種/ 器形	法 量(cm)				成形技法/ 調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎 土	特 徴	産 地	年 代	備 考
						口径	器高	胴径	底径							
146	85	47	廃棄 土坑	磁器 染付	小皿	9.6	2.5		4.8	体部外面に 鏝による撫 で調整。	(内)草紋	白色・透明感 を持つ・剝離 面はやや荒い・円、 裂孔が存在	見込みは蛇ノ目釉 剥ぎを施す。底部 に砂粒がが付着す る。	能茶山	19世紀	
147	85	47	〃	磁器 染付	小皿	9.8	2.4		4.8		(内)草紋	白色・透明感 を持つ・剝離 面はやや荒い・円、 裂孔が存在	見込に蛇ノ目釉剥 ぎを施す。	能茶山 ?	19世紀	
148	85	47	〃	磁器 染付	皿	10.4	2.3		6.2	形打ち成形	(内)草花紋	白色・透明感 を持つ・剝離 面はやや荒い・円、 裂孔が存在	高台内に「サ」銘。 細かな貫入が見ら れる。口唇部に口 鏝風に貝須を施す。 口縁部は輪花を成 す。	能茶山	19世紀	
149	85	47	〃	磁器 染付	皿	10.0	2.5		5.7	形打ち成形	(内)東屋・山 水紋	白色・透明感 を持つ・剝離 面はやや荒い・円、 裂孔が存在	貫入が見られる。 口鏝を施す。口縁 部は輪花を成す。	能茶山	19世紀	
150	85	47	〃	磁器 染付	皿	9.1	2.2		5.7	形打ち成形	(内)楼閣山水 紋	白色・やや透 明感を持つ・剝離 面はやや荒い・円、 裂孔が多く 存在	高台内に「サ」銘。 口唇部に貝須を施 す。口縁部は輪花 を成す。透明釉は 発色不良。	能茶山	19世紀	
151	85	47	〃	磁器 染付	小皿				5.8		(内)草花紋	乳白～白色・や や透明感を持つ・ 剝離面はやや荒い・円、裂孔が 存在	高台内に「サ」銘 を施す。細かな貫 入が認められる。 付輪高台	能茶山	19世紀	
152	85	47	〃	磁器 染付	皿				5.4		(内)巻き物モ チーフの宝紋	白色・やや透 明感を持つ・ 剝離面はやや荒い・円、裂孔が 存在	透明釉は白濁する。 高台内に「サ」銘 を施す。	能茶山	19世紀	
153	85	47	〃	磁器 染付	小皿				5.2		(内)宝紋	乳白～白色・透 明感を持つ・剝 離面はやや荒い・円、裂孔が存在	透明釉は白濁する。 高台内に角内「茶」 銘を施す。	能茶山	19世紀	
154	85	47	〃	磁器 染付	小皿				5.8		(内)楼閣山水 紋	白色・やや透 明感を持つ・ 剝離面はやや荒い・円、裂孔が 存在	透明釉は白濁し、 紋様は不明瞭。底 部内面には貫入が 認められる。	能茶山	19世紀	
155	85	48	〃	磁器	菊皿	9.3	2.2		5.6	型打ち成形		白色・やや透 明感を持つ・剝離 面はやや荒い・円、裂孔が稀に 存在	内面の稜部は明瞭	能茶山	19世紀	
156	85	48	〃	磁器	小皿 菊皿	9.8	2.2		5.9	型打ち成形		灰白色・やや透 明感を持つ・剝離 面はやや荒い・円、裂孔が存在		肥前系		
157	85	48	〃	磁器	菊皿	9.4	2.3		5.8	型打ち成形		白色・透明感 を持つ・剝離面 はやや荒い・裂孔 が存在	口唇部は概ね丸く 納める。	能茶山	19世紀	
158	85	48	〃	磁器	菊皿	9.4	2.4		5.8	型打ち成形		灰白色・やや透 明感を持つ・剝離 面はやや荒い・円、裂孔が多く 存在	稜は概ね明瞭。	肥前系		
159	85	48	〃	磁器	菊皿	13.2				型打ち成形		白～灰白色・透 明感を持つ・剝離 面はやや荒い・円、裂孔が存在	口鏝を施す。	能茶山	19世紀	
160	85	48	〃	磁器 染付	菊皿	13.8	4.2		7.9	型打ち成形。 ロクロは調 整時に左回 転		白色・やや透 明感を持つ・剝離 面はやや荒く・円、裂孔が存在	蛇の目凹型高台。 高台内に細砂粒が 付着する。貫入が 見られる。口鏝を 施す。	能茶山	19世紀	
161	85	48	〃	磁器	菊皿	13.1	4.2		8.2	型打ち成形		白色・胎土は良 くガラス化し透 明感を持つ・剝離 面は荒い・円孔が存在	底部は蛇の目凹型 高台。口唇部は口 鏝を施す。	能茶山	19世紀	
162	85	48	〃	陶器	皿	12.8				ロクロの回 転は調整時 に左回転?	(内)鉄釉 (外)鉄釉・露 胎	灰～灰褐色・や や透明感を持つ・ 剝離面はやや荒い・円孔が存在	口縁部下に一条の 沈線が施される。 見込みに蛇ノ目釉 剥ぎを施す。	能茶山 ?	19世紀?	

Ⅱ 区（廃棄土坑・包含層）出土遺物観察表

遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種/ 器形	法 量(cm)				成形技法/ 調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎 土	特 徴	産 地	年 代	備 考
						口径	器高	胴径	底径							
163	85	48	廃棄 土坑	陶器	皿	12.4	4.7		4.9	(内)撫で (外)口縁部 撫で、体部 下位で削り。 ロクロは調 整時左回転。	(内)鉄釉 (外)鉄釉	灰～赤褐色・白 色粒子・剥離 面はやや荒い・ 円、裂孔が存在	見込みは蛇ノ目釉 剥ぎを施し、アル ミナ砂を塗布する。			
164	85	48	"	陶器	皿 端反り 形	12.8	4.7		5.0	ロクロは調 整時左回転。	(内)鉄釉 (外)鉄釉・露 胎	灰～橙色・粒子 は良くガラス化 する・剥離面は 荒い・円、裂孔 が存在	見込みは蛇ノ目釉 剥ぎを施し、ここ にアルミナ砂を塗 布する。外面に 調整に伴うと考 えられる細い溝 が残る。	能茶山 ?		
165	85	48	"	陶器	皿 端反り 形	12.8	4.7		4.1	ロクロは調 整時に左回 転。	(内)鉄釉 (外)鉄釉・露 胎	暗灰色・透明感 を持つ・剥離面 は荒い・円、裂 孔が存在	見込みは蛇ノ目釉 剥ぎを施し、ここ にアルミナ砂を塗 布する。釉剥ぎ部 分に重ね焼ぎによ る高台跡が見られ る。	能茶山	19世紀	
166	85	48	"	陶器	皿 丸形	12.2	4.1		5.3	ロクロは調 整時に左回 転。	(内)鉄(胎)釉 (外)灰(胎)釉・ 露胎	黄灰～灰色・や や透明感を持つ・ 剥離面はやや荒 い・円、裂孔が 存在	見込みは蛇ノ目釉 剥ぎを施す。外面 の口縁下に一条の 沈線が施される。			
167	85	48	"	磁器 染付	皿	12.9	3.8		7.5		(内)草花紋 (外)唐草紋	白色・透明感 を持つ・剥離面 はやや荒い・円、 裂孔が存在	高台部の内面に砂 粒が融着する。	波佐見	18世紀 中頃	くらわんか手
168	86	48	"	磁器 染付	皿 端反り 形	22.0						白～灰白色・透 明感を持つ・剥 離面はやや荒い・ 円、裂孔が存在	体部外面に弱いロ クロ目が見られる。 口縁部は輪花を成 す。	能茶山	19世紀	
169	86	48	"	磁器 染付	皿 中皿	23.2	3.4		12.2	ロクロは調 整時に右回 転。	(内)舟・山水 紋	灰白色・透明感 を持つ・剥離面 はやや荒い・円、 裂孔が存在し、 裂孔の規模は大 きい	畳付けに砂粒が付 着する。	肥前系		
170	86	48	"	陶器 鉄絵	中皿					底部外面に 削り痕が残る。 ロクロは調整時 右回転。	(内)宝珠紋・ 宝紋 (内外)灰釉	黄白色・剥離面 はやや荒く・裂 孔が多く存在	高台接合部分に溝 が見られる。	尾戸系 ?	18世紀	
171	86	49	"	磁器 染付	皿	12.8	4.2		7.4		(内)五弁花・ 草花紋 (外)唐草紋	灰白色・透明感 を持つ・剥離面 はやや荒い・円、 裂孔が存在	畳付けは砂粒が付 着する。	波佐見	18世紀 中頃	くらわんか手
172	86	49	"	磁器 染付	中皿	18.4				外面に弱い 削り痕。	(内)雲or風	灰白色・透明感 を持つ・剥離面 はやや荒い・円、 裂孔が存在		肥前		
173	86	49	"	磁器 染付	中皿	21.3	3.2		13.8	形打ち成形	(内)岩・松・ 牡丹	白～灰白色・透 明感を持つ・剥 離面は概ね滑ら か・円、裂孔が 存在	底部外面に3ヶ所 ハリ支え跡が認め られる。	能茶山	19世紀	
174	86	49	"	陶器	皿 折縁皿	21.4				ロクロは調 整時に右回 転	(内)緑釉・草 花紋・6条の 沈線 (外)緑釉	白色・石英粒・ 剥離面は荒い・ 円、裂孔が存在	細かい貫入が見ら れる。	瀬戸		
175	86	49	"	陶器	皿				7.9	ロクロは調 整時に右回 転	(内)灰釉 (外)灰釉・露 胎	灰～灰白色・石 英粒多・剥離面 は荒い・円、裂 孔が存在	見込みは蛇ノ目釉 剥ぎを施す。内面 に重ね焼による高 台痕跡あり。	瀬戸・ 美濃	18世紀 中頃	鉢?
176	86	49	"	磁器 白磁	皿				4.8			白色・透明感 を持つ・剥離面 はやや荒い・円孔 が存在	見込みに蛇ノ目釉 剥ぎを施す。ここ に重ね焼による上 位製品の剥落痕が 見られる。	肥前?		
177	86	49	"	磁器	皿				4.4		(内)透明釉 (外)青磁釉	灰白色・透明感 を持つ・剥離面 はやや荒い・円、 裂孔が存在	畳付けに砂粒が付 着する。見込みは 蛇ノ目釉剥ぎを施 し耐火砂粒を敷き 詰めて焼成するが、 砂粒は付着し残留 する。	肥前	18世紀	

II区(廃棄土坑・包含層)出土遺物観察表

遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種/ 器形	法 量(cm)				成形技法/ 調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎 土	特 徴	産 地	年 代	備 考
						口径	器高	胴径	底径							
178	86	49	廃棄 土坑	陶器	皿				7.6	(外)削り痕。 ロクロの回 転は調整時 に右回転。	(内)灰釉 (外)灰釉・露 胎	灰～白色・やや 透明感を持つ。 剥離面は荒い・ 円、裂孔が存在	細かな貫入が見ら れる。底部内面に 足付ハマ跡が見ら れる。	瀬戸・ 美濃		
179	86	49	"	陶器	皿				8.6		(内外)灰釉	黄白色・やや透 明感を持つ。 剥離面は荒い・ 円、裂孔が存在	細かな貫入が見ら れる。高台外面に は砂粒が付着する。	尾戸系		
180	86	49	"	陶器	碗 丸形?				4.5	ロクロは調 整時に左回 転。	(内)鉄釉 (外)鉄釉・露 胎	暗灰色・透明感 を持つ。剥離面 は荒い・円、裂 孔が存在	見込みは蛇ノ目釉 剥ぎを施し、ここ にアルミナ砂を塗 布する。足付ハマ 跡が釉剥ぎ部分に 存在	能茶山	19世紀	
181	86	49	"	陶器	皿				4.2	ロクロは調 整時に左回 転。底部外 面に弱い削 り痕。	(内)鉄釉 (外)鉄釉・露 胎	橙色・石英粒・ 透明感を持つ。 剥離面は荒い・ 円、裂孔が存在	見込みは蛇ノ目釉 剥ぎを施し、ここ にアルミナ砂を塗 布する。釉剥ぎ部 分に重ね焼による 高台跡が見られる。	能茶山	19世紀	
182	86	49	"	陶器	皿				5.0	ロクロは調 整時に左回 転。	(内)鉄釉 (外)鉄釉・露 胎	灰～黄灰色・石 英粒・白色粒・ やや透明感を持 つ。剥離面は荒 い・円、裂孔が 存在	見込みは蛇ノ目釉 剥ぎを施す。釉剥 ぎ部分を重ね焼に よる高台跡が見ら れる。	能茶山	19世紀	
183	87	49	"	磁器 染付	皿				4.9	外面は削り 痕顕著。	(内)五弁花	灰白色・透明感 を持つ。剥離面 はやや荒い・円、 裂孔が存在し裂 孔の規模は大き い	見込みに蛇ノ目釉 剥ぎを施す。	波佐見	18世紀 後半	
184	87	50	"	磁器 染付	蓋 端反り 形	9.2	3.1		摘み 径 4.1		(内)雷紋・亀 (外)宝紋・網 目紋	乳白色・やや透 明感を持つ。剥 離面は荒い・裂 孔が存在	高台内に角内「茶」 銘在り。	能茶山	19世紀	
185	87	50	"	磁器 染付	蓋 端反り 形	9.4	3.0		摘み 径 3.0		(内)雷紋・亀 (外)玩具紋 (宝紋)	白色・透明感 を持つ。剥離面 はやや荒い・円、 裂孔が存在	摘み内に角内「茶」 を施す。	能茶山	19世紀	192とセット を成す。
186	87	50	"	磁器 染付	蓋 端反り 形	9.0					(内)口縁部に 帯線 (外)二重格子・ 蝙蝠?	白色・透明感 を持つ。剥離面 はやや荒い・円、 裂孔が存在		能茶山	19世紀	
187	87	50	"	磁器 染付	蓋 端反り 形	9.6	2.9		摘み 径 4.0		(内)雷紋 (外)草花紋	白色・透明感 を持つ。剥離面 はやや荒い・円、 裂孔が存在	雷紋は渦巻状を成 さない。	能茶山	19世紀	端反り碗の蓋
188	87	50	"	磁器 染付	蓋 端反り 形	9.2	3.0		摘み 径 4.0		(内)雷紋 (外)草花紋	白色・透明感 を持つ。剥離面 はやや荒い・円、 裂孔が存在	雷紋は渦巻状を成 さない。	能茶山	19世紀	端反り碗の蓋
189	87	50	"	磁器 染付	蓋 端反り 形	9.8	3.1		摘み 径 3.8		(内)渦紋 (外)濃みによ る帯線・薄紋?	白色・胎土は良 くガラス化し透 明感を持つ。剥 離面はやや荒い・ 円、裂孔が存在		能茶山	19世紀	
190	87	50	"	磁器 染付	蓋 端反り 形	10.2	3.0		摘み 径 4.1		(内)渦紋 (外)濃みによ る帯線・薄紋?	白色・やや透 明感を持つ。剥 離面はやや荒い・ 円、裂孔が存在	体部内面に砂が付 着。	能茶山	19世紀	
191	87	50	"	磁器 染付	蓋 端反り 形	8.8	2.9		摘み 径 3.6		(内)草花紋 (外)木賊紋	白色・透明感 を持つ。剥離面 は滑らか・円孔が 存在	高台内に銘が見ら れる。	瀬戸・ 美濃	19世紀	
192	87	50	"	磁器 染付	蓋 端反り 形	9.5	2.7		摘み 径 3.6		(内)草花紋 (外)木賊紋	白色・透明感 を持つ。剥離面 は滑らか・円、裂 孔が存在		美濃	19世紀	
193	87	50	"	磁器 染付	蓋 端反り 形	9.6	3.1		摘み 径 3.6		(内)山水紋 (外)山水紋	白色・透明感 を持つ。剥離面 はやや荒い・円、 裂孔が少在	細かい貫入が見ら れる。	能茶山	19世紀	
194	87	50	"	磁器 染付	蓋 端反り 形	9.6					(内)濃みによ る帯線と墨弾 きによる如意 頭 (外)草花紋	灰白～白色・ 透明感を持つ。 剥離面は滑ら か・円、裂孔が 存在		能茶山 ?		

Ⅱ 区（廃棄土坑・包含層）出土遺物観察表

遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種/ 器形	法 量(cm)				成形技法/ 調整 内面／外面	釉薬・絵付 内面／外面	胎 土	特 徴	産 地	年 代	備 考
						口径	器高	胴径	底径							
195	87	50	廃棄 土坑	磁器 染付	蓋 丸形	9.2	2.9		摘み 径 5.2		(外)梅紋	灰白～白色・透 明感を持つ・剝 離面はやや荒い・ 円、裂孔が存在	摘み端部には砂粒 が付着する。	能茶山	19世紀	194・195と同 じ紋様意匠。
196	87	50	"	磁器 染付	蓋 丸形	9.5					(外)松紋・梅 紋	灰白色・透明感 を持つ・剝離面 はやや荒い・円、 裂孔が存在		肥前系		190・195と同 じ紋様意匠。
197	87	50	"	磁器 青磁 染付	蓋 丸形	9.0					(内)四方禪 (外)青磁釉	灰～灰白色・透 明感を持つ・剝 離面はやや荒い・ 円、裂孔が存在	内面には剝落粒子 が付着する。	広瀬向	18世紀 後半	
198	87	50	"	磁器 青磁 染付	蓋 丸形	9.4	3.0		摘み 径 3.8		(内)太極図 (外)青磁釉	白色・透明感 を持つ・剝離面 はやや荒い・円、 裂孔が存在	内面に三足ハマ痕。 摘み端部に細砂が 付着する。	広瀬向	18世紀 後半	
199	87	50	"	磁器 青磁 染付	蓋 丸形	8.7	3.1		3.7		(内)五弁花・ 四方禪 (外)青磁釉	白色・やや透明 感を持つ・剝離 面はやや荒い・ 円、裂孔が存在	畳付けと見込中央 に細砂が付着する。 高台内に退化した 渦福。	広瀬向	18世紀 後半	
200	87	50	"	磁器 染付	蓋 丸形	10.0	3.4		摘み 径 5.6		(外)鳥紋	白～灰白色・透 明感を持つ・剝 離面はやや荒い・ 円、裂孔が存在	透明感はやや青味を 帯びる。	肥前	1780年 ～1810 年代	広東茶碗の蓋
201	87	50	"	磁器 染付	蓋 丸形	10.0	3.1		摘み 径 5.2		(外)鳥紋	灰白色・透明感 を持つ・剝離面 はやや荒い・円、 裂孔が存在	透明釉はやや青味を 帯びる。	肥前	1780年 ～1810 年代	広東茶碗の蓋
202	87	50	"	磁器 染付	蓋 丸形	9.4	2.7		摘み 径 5.2		(外)草紋	白色・透明感 を持つ・剝離面 はやや荒い・円、 裂孔が存在		能茶山	19世紀	灯明皿として の使用？
203	88	50	"	磁器 染付	蓋 丸形	9.0	2.8		4.8		(内)鳥紋 (外)松or日足	白色・やや透明 感を持つ・剝離 面はやや荒い・ 円、裂孔が存在	口縁部で肥厚し端 部は丸く修める。	能茶山	19世紀	
204	88	50	"	磁器 染付	蓋 丸形	10.1	2.8		5.3	内面に刷毛 状工具による 調整痕。	(外)雪の輪草 花紋・笹紋	白色・やや透明 感を持つ・剝離 面はやや荒い・ 円、裂孔が存在	見込み中央に土の 塊が付着する。	肥前系		広東茶碗の蓋
205	88	50	"	磁器 染付	蓋 丸形	8.8	2.5		摘み 径 5.4		(内)蝶紋 (外)草花紋・ 蝶紋	灰白色・透明感 を持つ・剝離面 はやや荒い・円 孔が存在	摘み径が口径に対 して広い。	能茶山	19世紀	
206	88	50	"	磁器 染付	蓋 丸形	9.6	2.7		摘み 径 5.6		(内)波・岩 (外)草花紋	白色・透明感 を持つ・剝離面 はやや荒い・円、 裂孔が存在	細かな貫入が見ら れる。	能茶山	19世紀	
207	88	50	"	磁器 白磁	蓋 丸形	6.3	1.8		摘み 径 2.9			白色・やや透明 感を持つ・剝離 面は滑らか・ 円、裂孔が存在		能茶山	19世紀	
208	88	50	"	磁器 染付	蓋 丸形	9.6	2.8		摘み 径 5.5		(内)岩・波 (外)草花紋・ 蝶紋	白色・やや透明 感を持つ・剝離 面はやや荒い・ 円孔が存在	大きな貫入が認め られる。	能茶山	19世紀	灯明皿として 使用？
209	88	50	"	磁器 染付	蓋 丸形	9.6	2.9		摘み 径 5.4		(外)松紋・梅 紋	白色・透明感 を持つ・剝離面 はやや荒い・円、 裂孔が存在	貫入が見られる、 内面に褐色斑が存 在。口縁部がやや 肥厚する。	能茶山	19世紀	190・194と同 じ紋様意匠。
210	88	51	"	陶器	蓋	7.1	2.4		摘み 径 1.3	ロクロは調 整時に右回 転。(外)削り 後無で又は 磨き？	(内)露胎 (外)白釉によ るイチチン掛 け	淡黄色・赤色粒・ 剝離面はやや荒 い	笠部中央に宝珠状 の摘みが付く。ま た、直径4mmの円 孔が1孔穿たれる。	尾戸系		土瓶の蓋
211	88	51	"	陶器	蓋	5.8	2.5	かえり 部径 4.0	摘み 径 1.0	ロクロは成 形時左・調 整時右回転	(外)灰釉・緑 釉掛け (内)露胎	淡褐色・やや透 明感を持つ・剝 離面はやや荒い	貫入が見られる。	尾戸系	18世紀	急須の蓋
212	88	51	"	磁器 染付	蓋				摘み 径 3.6		(外)桜闇山水 紋	白色・やや透明 感を持つ・剝離 面はやや荒い・ 円、裂孔が存在	細かな貫入が見ら れる。	能茶山	19世紀	
213	88	51	"	磁器 染付	蓋	10.2		かえり 部径 8.9			(外)錆紋・宝 紋	白色・やや透明 感を持つ・剝離 面はやや荒い・ 円、裂孔が存在	細かな貫入が見ら れる。受け部は釉 剥ぎを施す。	能茶山	19世紀	壺の蓋？

II区(廃棄土坑・包含層) 出土遺物観察表

遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種/ 器形	法 量(cm)				成形技法/ 調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎 土	特 徴	産 地	年 代	備 考
						口径	器高	胴径	底径							
214	88	51	廃棄 土坑	陶器	蓋	9.1	2.2	かえり 部 径 7.0	摘み 径 1.7	ロクロは成 形時に右回 転。	(内)露胎 (外)灰釉	橙色・白色粒・ 粒子単位が残る・ 剥離面は荒い・ 円、裂孔が存在	細かな貫入が見ら れる。摘み部分は 扁平な粘土円盤貼 付による。			
215	88	51	"	磁器 染付	蓋					ロクロは成 形時右回転	(外)宝紋	白色・透明感を 持つ・剥離面は やや荒い・円、 裂孔が存在	笠部の外面に褐色 斑が多く見られる。	能茶山	19世紀	壺の蓋
216	88	51	"	磁器 染付	蓋	12.2		かえり 部 径 10.6			(外)二重格子 紋・宝紋・渦 繁	白色・やや透明 感を持つ・剥離 面はやや荒い・ 円、裂孔が存在	細かな貫入が見ら れる。	能茶山	19世紀	
217	88	51	"	磁器 染付	蓋	11.2		かえり 部 径 10.0			(外)濃みによ る斜格子状の 網目紋・丸紋 内に「寿」を 施す。	白～灰白色・透 明感を持つ・剥 離面はやや荒い・ 円、裂孔が存在	細かい幅の調整痕 見られる。短いか えりが付く。	能茶山	19世紀	
218	88	51	"	陶器	蓋	10.8	2.1		4.8	(内)弱いロ クロ目 (外)体部 に細かい単 位のロクロ 目・底部に 糸切り痕	(内)露胎 (外)灰釉	赤灰色・やや透 明感を持つ・剥 離面はやや荒い・ 円、裂孔が存在				灯明皿の可能 性あり
219	88	51	"	軟質 陶器	蓋 落し蓋	9.6	2.5	摘み 径 1.6		ロクロは成 形時に右回 転。	透明釉	橙色・石英粒剥 離面はやや荒い				
220	88	51	"	陶器	蓋 落し蓋	6.8	1.5	摘み 径 1.1	3.0	ロクロは成 形時に右回 転	(外)五弁花状 に白釉を施す。 (内)露胎	黄灰色・赤色粒・ やや透明感を持 つ・剥離面はや や荒い	笠部に径3mmの円 孔が穿たれる。			急須の蓋
221	88	51	"	陶器	蓋	16.5				形打ち成形? (内外)布目		白～灰白色・粒 子はガラス化し、 やや透明感を持 つ・剥離面は荒 い・円、裂孔が 存在	素焼きの段階のも の。天井部に直径 4mmの円孔を施す。			
222	88	51	"	陶器	蓋	12.8	3.9	摘み 径 3.4		笠部に飛鉋を 施す。ロクロ は調整時左回 転。	(内)鉄釉 (外)鉄泥・イッ チン掛け	黄色・赤色粒・ 剥離面はやや荒 い・円、裂孔が 存在	笠部の中央に粘土 円盤による摘みが 付く。	能茶山	19世紀	
223	88	51	"	陶器	蓋	12.6				(内)撫で (外)鉄泥後 飛鉋、削り。	(内)鉄釉(外) 鉄泥・白土に よるイッチン 掛け	黄褐色・赤色粒・ 剥離面はやや荒 い・円、裂孔が 存在	受部は鐔状に外側 へ肥厚する。	能茶山 ?	19世紀?	
224	88	51	"	陶器	蓋	15.5					(内)褐釉 (外)鉄泥・白 土によるイッ チン掛け	黄白～灰色・剥 離面はやや荒い 円、裂孔が存在	笠部内面に単位の 細かいロクロ目が 残る。笠部外面に は鉄泥の後、飛鉋 を施し、蛇の目状 の削りを施す。			
225	89	52・ 71	"	磁器 染付	鉢 角形	16.6	7.7		8.8	形打ち成形	(内)唐草紋・ 楼閣山水紋・ 草花紋 (外)宝紋	白色・透明感を 持つ・剥離面は やや荒い・円孔 が存在	蛇ノ目凹型高台を 持つ。細かな貫入 が見られる。高台 内に角内「茶山」 銘を施す。	能茶山	19世紀	
226	89	52・ 71	"	磁器 染付	鉢 角形	16.6	5.9		6.8		(内)四方禪・ 風景・雲気 (外)環珞紋・ 宝紋	白色・やや透明 感を持つ・剥離 面はやや荒い・ 円、裂孔が存在	高台内に角内「茶 山」銘在り。	能茶山	19世紀	
227	89	52	"	磁器 染付	鉢 角形	13.8				形打ち成形	(外)宝紋	白色・透明感を 持つ・剥離面は やや荒い・円、 裂孔が存在		肥前系		
228	89	52・ 71	"	磁器 染付	鉢 角形				6.7	形打ち成形?	(内)山水紋・ 窓枠を設けて 岩・樹木他 (外)草紋?	白色・透明感を 持つ・剥離面は やや荒い・円、 裂孔が存在	高台内に角内「茶 」銘を施す。貫入 が見られる。	能茶山	19世紀	
229	89	52・ 71	"	磁器 染付	鉢 角形	14.2	6.2		6.4	口縁部形打 ち成形	(内)草花紋・ 格子目に蝙蝠 紋 (外)源氏香	白色・透明感を 持つ・剥離面は やや荒い・円、 裂孔が存在	高台は蛇ノ目凹型 高台を呈する。	能茶山	19世紀	
230	89	52	"	磁器 染付	鉢 角形	15.1				形打ち成形	(内)区画内に 草紋他 (外)山・鳥・ 波?	灰白～白色・透 明感を持つ・剥 離面は滑らか・ 円、裂孔が存在		能茶山	19世紀	
231	89	52	"	磁器 染付	鉢 角形	16.8				形打ち成形	(内)松紋 (外)環珞紋・ 退化した窓枠・ 宝紋	白色・やや透明 感を持つ・剥離 面はやや荒い・ 円、裂孔が存在	細かな貫入が認め られる。	能茶山	19世紀	

Ⅱ 区（廃棄土坑・包含層）出土遺物観察表

遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種・ 器形	法 量(cm)				成形技法/ 調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎 土	特 徴	産 地	年 代	備 考
						口径	器高	胴径	底径							
232	90	52	廃棄 土坑	磁器 染付	鉢 縁折形	17.6				形打ち成形	(内)墨引きに よる雲紋・紗 綾形紋・窓枠 内山水紋 (外)退化した 腰珙紋・窓枠	灰白～白色・透 明感を持つ・剝 離面はやや荒い・ 円、裂孔が存在	口縁下に段部を持 ち縁折上を成す。 口縁部は輪花を成 す。	能茶山	19世紀	
233	90	52 ・ 71	〃	磁器 染付	鉢	17.2	7.7		7.7		(内)草花紋流 水紋・鯉 (外)流水紋	白色・やや透明 感を持つ・剝離 面は概ね滑らか・ 円孔が存在	口縁部は輪花を施 す。	能茶山	19世紀	
234	90	52 ・ 71	〃	磁器 染付	鉢 端反り 形	11.0	6.1		6.0	(内)花卉状 に形押しで 仕上げられ る。	(内)蝶紋？ (外)唐草紋？	白色・やや透明 感を持つ・剝離 面はやや荒く・ 円、裂孔が存在	畳付けに細砂粒が 付着する。	能茶山	19世紀	
235	90	52	〃	磁器 染付	鉢 丸形				7.0		(内)笠・巻物 モチーフの宝 紋	白色・透明感を持 つ・剝離面は 概ね滑らか・円、 裂孔が存在	蛇ノ目凹型高台を 呈す。底部内面に サヤ剝落粒子が付 着。	能茶山	19世紀	
236	90	52	〃	磁器 染付	鉢 端反り 形	15.6					(内)口縁部に 雷紋帯・松紋 (外)竹紋	白色・やや透明 感を持つ・剝離 面は概ね滑らか・ 円、裂孔が存在	透明釉が収縮し部 分的に露胎する。	能茶山	19世紀	
237	90	53	〃	陶器	鉢	16.2					(内外)灰釉・ 緑釉掛け分け	黄白～灰褐色・ 透明感を持つ・ 剝離面は荒い・ 円孔が存在	細かな貫入が認め られる。	尾戸系		
238	90	53	〃	陶器	鉢 丸形	18.0	6.0		9.2	(外)削り痕。 ロクロの回 転は調整時 に左回転。	(内外)灰釉	灰～灰白色・や や透明感を持つ・ 剝離面は荒い・ 円、裂孔が存在	細かな貫入が見ら れる。			
239	90	53	〃	陶器	鉢 丸形	17.6	5.7		8.0		(内外)灰釉	黄白色・剝離面 はやや荒い・円、 裂孔が存在	細かな貫入が見ら れる。畳付けの内 側に砂が付着する。	尾戸系		
240	90	53	〃	磁器 染付	鉢 腰張形	22.8					(内)岩・草花 紋 (外)梅紋	白～灰白色・透 明感を持つ・剝 離面はやや荒い・ 円孔が存在	貫入が見られる。 補修痕？が見られ る。口縁部は粘土 を外側に折り返す ことにより、玉縁 を成す。	能茶山	19世紀	
241	90	53	〃	陶器	鉢 筒形？				10.4		(内)灰釉 (外)灰釉	灰色・やや透明 感を持つ・剝離 面はやや荒い・ 円、裂孔が存在	細かな貫入が見ら れる。腰部に2条 の隆帯を持ち、こ こには斜位の刻み 目が施される。	尾戸系	18世紀 ？	
242	90	53 ・ 71	〃	磁器 染付	段重	12.2	5.1		8.0		(外)宝紋	白色・透明感を持 つ・剝離面は やや荒い・円、 裂孔が存在	腰部に挟れを持つ。 口縁部内面に釉剝 ぎを施す。	能茶山	19世紀	
243	90	53 ・ 71	〃	磁器 染付	段重	11.6	5.8		8.0		(外)宝紋	白色・やや透明 感を持つ・剝離 面はやや荒い・ 円、裂孔が多く 存在	口縁部・畳付けは 釉剝ぎを施す。	能茶山	19世紀	
244	90	53 ・ 72	〃	磁器 染付	段重	12.2	4.3	かり 高 0.4	12.8		(外)十字花・ 宝紋	白色・やや透明 感を持つ・剝離 面はやや荒く・ 円孔が存在	底部は丸味を持って 緩やかに膨らむ。	能茶山	19世紀	
245	91	53	〃	磁器 染付	蕎麦 猪口	7.8			5.9			白～黄灰色・や や透明感を持つ・ 剝離面はやや荒 い・円、裂孔が 存在	底部は蛇ノ目凹型 高台を呈す。口唇 部に口縁を施す。 透明釉は白濁する。	能茶山	19世紀	
246	91	53 ・ 72	〃	磁器 染付	蕎麦 猪口	7.2	5.5		5.8		(内)山水紋・ 濃みによる帯 線 (外)草花紋・ 濃みによる帯 線	白色・透明感をも つ・剝離面は 滑らか・円孔が 存在	底部は腰輪高台を 成す。	能茶山	19世紀	
247	91	53 ・ 72	〃	磁器 染付	蕎麦 猪口	8.0	5.7		5.9		(内)蜂紋 (外)草花紋	白色～乳白色・ 赤色粒・剝離面 はやや荒い・円、 裂孔が多く存在	細かな貫入が見ら れる。透明釉は発 色不良。高台は輪 高台を成す。	能茶山	19世紀	
248	91	53 ・ 72	〃	磁器 染付	蕎麦 猪口	6.6	5.2		4.4		(内)二重斜格 子紋 (外)二重斜格 子紋	白色・やや透明 感を持つ・剝離 面はやや荒い・ 円孔が存在	底部は蛇ノ目凹型 高台。	能茶山	19世紀	
249	91	53 ・ 72	〃	磁器 染付	蕎麦 猪口				5.8		(外)草花紋	灰色～白色・透 明感を持つ・剝 離面は概ね滑ら か・円、裂孔が 存在	底部は蛇ノ目凹型 高台を呈す。	肥前？		

II区(廃棄土坑・包含層) 出土遺物観察表

遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種/ 器形	法 量(cm)				成形技法/ 調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎 土	特 徴	産 地	年 代	備 考
						口径	器高	胴径	底径							
250	91	53	廃棄 土坑	磁器 染付	碗 筒形	7.8					(内)雷紋 (外)草花紋	白色・やや透明 感を持つ・剝離 面はやや荒い・ 円、裂孔が存在		肥前系		餌鉢?
251	91	53 ・ 72	"	磁器 染付	碗 筒形	7.4	4.0		7.0		(外)退化した 櫛高台?	白色・やや透明 感を持つ・剝離 面はやや荒い・ 円孔が存在	底部と口唇部は釉 剥ぎを施す。底部 端に砂粒が付着す る。	能茶山	19世紀	餌鉢?
252	91	53 ・ 72	"	磁器 染付	神酒 徳利 瓶子形				3.3	ロクロは成 形時に右回 転。		白～灰白色・透 明感を持つ・剝 離面は概ね滑ら か・円、裂孔が 存在	畳付けに砂粒が付 着する。内面の低 位にはロクロ目が見 られる。底部内 面には褐色斑が存 在する。高台は腰 輪高台を成す。	肥前系		
253	91	53 ・ 72	"	磁器 染付	神酒 徳利 瓶子形			4.6	3.6	ロクロは成 形時に右回 転。	(内)露胎 (外)竹紋	灰白色・透明感 を持つ・剝離面 は概ね滑らか・ 円、裂孔が存在	内面低位に絞り目 が残る。底部は輪 高台を成す。	肥前		
254	91	53 ・ 72	"	磁器 染付	仏飯碗	6.0	5.7		3.5		(外)蛸唐草	白色・やや透明 感を持つ・剝離 面はやや荒い・ 円孔が存在		肥前	18世紀 末～ 19世紀	
255	91	53 ・ 72	"	磁器 染付	仏飯碗				3.9	ロクロは調 整時に左回 転。		灰白色・透明感 を持つ・剝離面 は概ね滑らか・ 円、裂孔が存在	坏部と脚部を釉薬 で接合?底部は蛇 ノ目高台を成す。	肥前系		
256	91	53	"	陶器	仏飯碗					回転糸切り 痕。ロクロ は成形時に 右回転。	(外)灰釉・露 胎	灰白～灰色・粒 子のガラス化は 良く、透明感 を持つ・剝離面 はやや荒い・円、 裂孔が存在	細かな貫入が認め られる。	尾戸系		
257	91	67	"	磁器 青磁	仏花器			8.2	5.0	ロクロの回 転は成形時 に右。	(内)青磁釉・ 露胎 (外)青磁釉	灰白書・透明感 を持つ・剝離面 はやや荒い・円 孔が希に存在	胴部上位に双耳が 付く。	肥前	17世紀 ～ 18世紀	
258	91	67	"	陶器	仏花器	7.1	10.3	7.1	4.8	ロクロは調 整時左回転。 頸部に絞り 目が残る。	(内)鉄釉・露 胎 (外)鉄釉	灰白色・やや透 明感を持つ・剝 離面はやや荒い・ 円、裂孔が存在	頸部に二条に訂正 の沈線。			花生か?
259	91	53	"	磁器 青磁	香炉	12.0				(外)青磁釉		口縁部は内側に 肥厚する		肥前	17世紀 後半～ 18世紀	
260	91	53	"	磁器 青磁	香炉? 筒形				5.8		(内)露胎 (外)青磁釉	灰～灰白色・透 明感を持つ・剝 離面はやや荒い・ 円孔が存在	高台は蛇ノ目高台 を成す。底部内面 には白土が厚く施 され、ここには匏 状工具痕跡が認め られる。	肥前	17世紀?	
261	91	53 ・ 67	"	陶器	火入れ 円筒形	9.6	8.1		9.8	(内)ロクロ 目 (外)削り	(内)露胎 (外)灰釉・緑 釉・線刻によ る連弁紋	黄白色・石英粒、 赤色粒・透明感 を持つ・剝離面 は荒い・円、裂 孔が存在	高台は腰輪高台を 呈する。口唇部 には使用に伴う剥 落痕が見られる。	瀬戸・ 美濃	19世紀	
262	91	67	"	磁器 染付	火入れ 筒形	8.6					(内)露胎 (外)花紋?	灰白色・透明感 を持つ・剝離面 はやや荒い・円、 裂孔が存在	内面の低位には砂 粒が帯状に付着す る。器壁に砂粒が 見られ小さな凸面 を成す。	能茶山	19世紀	
263	91	67	"	磁器 染付	火入れ 円筒形	9.8	9.8	11.6	10.2	ロクロは成 形時に右回 転。	(外)鑄紋?葉 紋	白色・やや透明 感を持つ・剝離 面はやや荒く・ 円孔が存在	底部内面に重ね焼 痕。高台は腰輪高 台を呈す。	能茶山	19世紀	
264	91	54	"	陶器	火入れ 腰折形			10.6	5.6	ロクロは成 形時に右回 転、調整時 に左回転。	(内)露胎 (外)緑釉・う のふ釉	灰白色・やや透 明感を持つ・剝 離面はやや荒い・ 円、裂孔が存在				
265	91	54	"	陶器 陶胎 染付	火入れ 腰折形			9.4	4.2	ロクロは成 形・調整時 共右回転。	(外)透明釉	灰色・透明感 を持たない・剝 離面はやや荒い・ 円、裂孔が存在	部分的に貫入が認め られる。	肥前	18世紀	
266	91	54	"	陶器	火入れ				7.0	(内)ロクロ 目 (外)削り痕	(内)露胎 (外)緑釉・露 胎	黄灰色・剝離面 は荒い・円、裂 孔が存在	細かな貫入が見ら れる。内面に煤が 付着する。			

Ⅱ 区（廃棄土坑・包含層）出土遺物観察表

遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種/ 器形	法 量(cm)				成形技法/ 調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎 土	特 徴	産 地	年 代	備 考
						口径	器高	胴径	底径							
267	91	54	廃棄 土坑	陶器	筆立 筒形	7.0	8.9		7.6	(内)笥状工 具により滑 らかに仕上 がられる。 (外)ロクロ 目	(外)刷毛によ る白土掛け	暗灰色・剝離面 は荒い・円孔が 存在	細かい貫入が見ら れる。体部上位に 直径6mmの円孔が 数箇所穿たれる。			
268	91	67	"	陶器	台付 灯明皿	7.0	5.5	台 部 径 7.4	4.0	ロクロは成 形時に左回 転。糸切り。	(内外)緑釉	灰色・やや透明 感を持つ・剝離 面はやや荒い・ 裂孔が存在	糸切りは合せ切り による。口縁部は 口錆を施す。			
269	91	67	"	陶器	台付 灯明皿	6.7	5.3		4.2	ロクロは成 形時に左回 転。	鉄釉	灰色・やや透明 感を持つ・剝離 面はやや荒い・ 円、裂孔が稀に 存在	糸切りは合せ切り による。			
270	91	67	"	陶器	台付 灯明皿	6.5	4.3	台 部 径 6.4	4.0	ロクロは成 形時に右回 転。	鉄釉	暗灰色・やや透 明感を持つ・剝 離面はやや荒い・ 裂孔が存在	底部外面に煤が付 着する。	能茶山	19世紀	
271	91	54	"	陶器	台付 灯明皿	6.8					(内外)褐釉	灰色・透明感 を持つ・剝離面 はやや荒い・円、 裂孔が存在	皿部の内面で鉛釉 が斑に掛かる。	尾戸系?		
272	91	54	"	陶器	台付 灯明皿			台 部 径 6.6	3.4	回転糸切り 痕。ロクロ は成形時に 右回転。	(内)鉄釉 (外)露胎	灰～暗灰色・透 明感を持つ・剝 離面はやや荒い・ 円孔が存在				
273	91	54	"	陶器	受付 灯明皿	12.6	2.4		6.0	ロクロは調 整時に右回 転。	(内)灰釉 (外)露胎	黄白～黄灰色・ 粒子の一部はガ ラス化が進む・ 剝離面は荒い・ 円、裂孔が存在	細かな貫入が見ら れる。口縁の一部 に煤が付着する。			
274	91	54	"	陶器	灯明皿	11.0	2.1		3.8	ロクロは調 整時に左回 転。内面に 刷毛目。	(内)灰釉・露 胎	灰～灰白色・粒 子のガラス化は 良く透明感を持 つ・剝離面はや や荒い・円、裂 孔が存在	底部内面に足付ハ マ跡?細かな貫入 が見られる。			266の胎土に 似る。
275	92	54	"	陶器	鉢	24.0					(内外)鉄釉	灰～灰褐色・部 分的に透明感 を持つ・剝離面 は荒い・円、裂 孔が存在	口縁端部は外側に 肥厚し、水平な面 を成す。			
276	92	54	"	陶器	鉢	19.4					(内外)灰釉・ うのふ釉	灰色・剝離面は やや荒い・円孔 が存在・精緻	口縁部は内側に屈 曲する。			
277	92	54	"	陶器	鉢	18.0				ロクロは成 形時に右回 転。	(内外)鉄釉 口唇部は露胎 する。	赤灰褐色・石英 粒・部分的に透 明感を持つ・剝 離面は荒い・円、 裂孔が存在	口縁端部は内外に 肥厚し、水平な面 を成す。	能茶山 ?		
278	92	54	"	陶器	鉢	14.2				ロクロは成 形時、調整 時共に左回 転。	(内)鉄釉 (外)鉄釉・露 胎	黄灰褐色・赤色 粒・剝離面はや や荒い・円、裂 孔が存在	口縁部は外側に肥 厚し、外傾する面 を成す。	能茶山 ?		
279	92	54	"	陶器	鉢				10.0	(内)弱いロ クロ目	(内)鉄釉 (外)露胎	灰褐色・粒子単 位が残り、やや 透明感を持つ・ 剝離面は荒い・ 円、裂孔が存在	高台は蛇ノ目高台 を呈する。			小龍Ⅱ784
280	92	54	"	陶器	鉢				10.8	ロクロは調 整時に右回 転。	(内)鉄釉 (外)鉄釉・露 胎	灰白色・透明感 を持つ・剝離面 はやや荒い・円、 裂孔が存在	胎土は精緻で成形 も丁寧。高台は蛇 ノ目高台を呈する。			
281	92	54	"	陶器	鉢				9.6	(外)底部で 削り。ロク ロの回転は 調整時に左 回転。	(内)鉄釉 (外)鉄(鉛)釉	灰～灰褐色・透 明感を持つ・剝 離面はやや荒い・ 円、裂孔が存在	内面に足付ハマ跡 が見られる。			
282	92	54	"	陶器	鉢				8.3	(外)弱い削 り。ロクロ は調整時に 左回転。	(内)鉄釉 (外)鉄釉・露 胎	暗灰～灰色・白 色粒子・透明感 を持つ・剝離面 は荒い・円、裂 孔が存在	底部内面には足付 ハマ跡が見られる。 細かな貫入が見ら れる。	能茶山 ?	19世紀	
283	92	54	"	陶器	鉢				9.8	ロクロは調 整時に左回 転。	(内)鉄釉 (外)鉄釉・露 胎	赤灰褐色・白色 粒・剝離面は荒 い・円、裂孔が 存在	高台内に墨書が施 される。底部内面 に足付ハマ跡が見 られる。	能茶山	19世紀	

II区(廃棄土坑・包含層) 出土遺物観察表

遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種/ 器形	法 量(cm)				成形技法/ 調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎 土	特 徴	産 地	年 代	備 考
						口径	器高	胴径	底径							
284	92	55	廃棄 土坑	陶器	鉢 片口	21.0					(内外)褐釉	灰～暗灰色・透 明感を持つ・剥 離面はやや荒い・ 円、裂孔が存在 。	口縁下に筒型の注 口部を持つ。			
285	92	55	"	陶器	鉢				5.4	ロクロは成 形時に右回 転、調整時 に左回転。	(内)鉄釉 (外)鉄釉・露 胎	灰色・粒子単位 を保ちガラス化 し、透明感を持 つ・剥離面は荒 い・円、裂孔が 存在	底部は碁笥底を成 す。	能茶山	19世紀	
286	92	55	"	陶器	鉢				9.0	ロクロは成 形時に右回 転、調整時 に左回転。	(内)鉄釉 (外)鉄釉・露 胎	黄灰～暗灰色・ 白色、赤色粒・ 透明感を持つ・ 剥離面は荒い・ 円、裂孔が存在 。	底部内面に足付ハ マ跡が見られる。	能茶山 ?		
287	92	55	"	陶器	鉢				7.2	ロクロは成 形時に右回 転、調整時 に左回転。	(内)鉄釉 (外)鉄釉・露 胎	暗灰～黒灰色・ 白色粒・やや透 明感を持つ・剥 離面は荒い・円、 裂孔が存在	底部内面に足付ハ マ跡が見られる。	能茶山	19世紀	
288	92	55	"	陶器	鍋 行平形? ?	17.4				(外)密に施 された飛鉋	(内)鉄泥 (外)鉄釉・露 胎	赤褐色・剥離面 はやや荒い・円、 裂孔が存在				
289	92	55	"	陶器	鍋 行平形? ?	16.6				(外)体部上 位に飛鉋。	(内)鉄釉(口 縁部は露胎す る。) (外)鉄釉	暗灰色・ガラス 化は良くやや透 明感を持つ・剥 離面はやや荒い・ 円孔が存在	受部に炭化物が付 着する。			
290	92	55	"	陶器	鍋 行平形? ?	16.2				(外)体部上 位に飛鉋・ 削り痕	(内)鉄釉(口 縁部は露胎す る。) (外)鉄釉・露 胎	灰～灰褐色・粒 子のガラス化は 良い・剥離面は 荒い・円孔が存 在				
291	93	55	"	陶器	鍋 行平形? ?	13.2	7.1		6.8	体部中位と 底部で削り。 受け部は撫 で。	(内)刷毛によ り鉄泥を施す。 (外)鉄泥・鉄 釉	黄白～灰褐色・ 剥離面はやや荒 い・円、裂孔が 存在	体部上位に飛鉋を 施す。			
292	93	67	"	磁器 染付	徳利	4.5	21.8		6.8	ロクロは成 形時に右回 転。	(外)草花紋	白色・透明感 を持つ・剥離面 はやや荒い・円 孔が存在・精緻	頸部に比熱部が存 在する。口縁部は 外反する。	肥前系		
293	93	55	"	陶器	徳利 or油壺	3.2				(内)ロクロ 目顯著。ロ クロは成形 時に右回 転?	(内)露胎・鉄 釉 (外)鉄釉	灰色・石英粒、 白色粒子・透明 感を持つ・剥離 面は荒い・円、 裂孔が存在	口縁部は短く外反 する。	能茶山		
294	93	67	"	陶器	徳利	2.8				ロクロの回 転は成形時 右。	(内)鉄釉 (外)灰釉・鉄 釉	赤褐色・剥離面 は荒い・円、裂 孔が少在	口縁は玉縁状を呈 する。灰釉部分に 細かな貫入が見 られる。	能茶山	19世紀	
295	93	55	"	陶器	燗徳 利	4.5 × 2.7				(内)ロクロ 目	(内)鉄釉・緑 釉掛け (外)緑釉	白色・石英粒・ 粒子はガラス化 し、透明感を持 つ・剥離面は荒 い・円孔が存在 。		瀬戸・ 美濃		
296	93	68	"	陶器	徳利	3.1	16.3	10.6	6.3	(内)弱いロ クロ目 (外)ロク ロ目・撫で	(内)褐釉・黒 釉・露胎 (外)黒(錆)釉	暗灰～灰色・粒 子は良くガラス 化し、透明感 を持つ・剥離面 はやや荒い・円、 裂孔が存在	口縁部は玉縁状を 成す。	能茶山	19世紀	
297	93	68	"	陶器	徳利	4.7			10.6	ロクロは成 形時に左回 転、調整時 に右回転。	(外)灰釉 (内)露胎	黄白色・赤色粒・ 剥離面は荒い・ 円孔が存在	細かな貫入が見 られる。	瀬戸・ 美濃	19世紀	寸胴徳利
298	93	68	"	磁器 染付	瓶			8.6		ロクロは成 形時に右回 転。	(外)コバルト による山水紋	白色・透明感 を持つ・剥離面 はやや荒い・円、 裂孔が存在	内面にロクロ目が 顯著			
299	93	55	"	陶器	瓶				9.0	(内)ロクロ 目 (外)ロクロ 目・撫で	(内)露胎 (外)灰釉・露 胎	黄白色・赤色粒・ やや透明感を持 つ・剥離面はや や荒い・円、裂 孔が存在	細かな貫入が見 られる。	尾戸系		
300	93	55	"	磁器 染付	瓶				8.6	(内)ロクロ 目・撫で	(内)露胎	灰白色・透明感 を持つ・剥離面 はやや荒い・円、 裂孔が存在	畳付けの一部に砂 粒が付着する。高 台部は腰輪高台を 成す。	肥前		

Ⅱ 区（廃棄土坑・包含層）出土遺物観察表

遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種/ 器形	法 量(cm)				成形技法/ 調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎 土	特 徴	産 地	年 代	備 考
						口径	器高	胴径	底径							
301	93	55	廃棄 土坑	陶器	徳利			9.0		ロクロは成 形時に右回 転。	(内)灰釉・鉄 釉垂れ・露胎 (外)鉄釉・灰 釉	灰～暗灰色・や や透明感を持つ ・剥離面は荒い・ 円孔が存在	部分的に貫入が見 られる。			248と同一個 体?
302	93	55	"	陶器	徳利				7.4	ロクロは成 形時に右回 転、調整時 に左回転。	(内)鉄釉垂れ・ 露胎 (外)灰釉	暗灰～黄灰色・ やや透明感を持 つ・剥離面はや や荒い・円、裂 孔が存在	底部内面の鉄釉は 鉛釉を成す。			247同一個体?
303	93	55	"	磁器	徳利				5.5	ロクロは成 形時に右回 転。	(内)露胎 (外)透明釉	灰白色・透明感 を持つ・剥離面 はやや荒い・円、 裂孔が存在	畳付けには砂粒が 付着する。内面に ロクロ目が顕著。	肥前		
304	93	55	"	磁器 染付	徳利				8.6	ロクロは成 形時に右回 転。	(内)露胎 (外)山水紋	灰白～白色・透 明感を持つ・剥 離面はやや荒い・ 円、裂孔が存在	畳付けの内面に砂 粒が付着する。	肥前	18世紀 末～ 19世紀?	
305	93	55	"	軟質 陶器	土瓶	9.2		22.3			(内)露胎 (外)透明釉	橙色・石英粒・ 剥離面は荒い・ 円、裂孔が存在	底部外面には煤が 付着する。			
306	93	55	"	陶器	土瓶	8.0		13.2		轆による無 で調整を施 す。	(外)イッチン 掛け	灰～暗灰色・や や透明感を持つ ・剥離面はやや荒 い・円、裂孔が 存在	如意形を呈した把 手取付け部が付く。			
307	93	55	"	軟質 陶器	土瓶	8.5				ロクロは成 形時に右回 転。	(内)露胎 (外)透明釉・ 白土によるイッ チン掛け	橙色・石英粒・ 雲母粒・剥離面 はやや荒い・円 孔が存在	、 細かい貫入が認め られる。			
308	94	55	"	陶器	甕	24.2					(内外)褐釉	灰色・透明感 を持つ・剥離面 は荒い・円、裂 孔が存在	口縁端部は外側へ 肥厚し平らな面を 成す。	尾戸系?		
309	94	55	"	陶器	甕	32.0					(内外)褐釉	白色・ガラス化 は良く・透明感 を持つ・剥離面 は滑らか・円、 裂孔が存在	口縁部は内外に肥 厚する。			307と同一個 体の可能性在 り。白～乳白 色・ガラス化 良好
310	94	55	"	陶器	甕	28.8				(内)ロクロ 目 (外)弱いロ クロ目	(内外)鉄釉	白色・ガラス化 は良好で・透明 感を持つ・剥離 面はやや荒い・ 円、裂孔が存在	口縁部は内外に肥 厚する。			小籠Ⅱ—734 と同じ胎土。
311	94	55	"	陶器	甕	30.6		頸部 径 27.2		(内)ロクロ 目	(内外)鉄釉	灰色・部分的に 透明感を持つ・ 剥離面はやや荒 い・円、裂孔が 存在	体部上位に断面U 字型の沈線2条と 櫛条原体による波 条紋を施す。			
312	94	55	"	陶器	甕	29.2				(内)弱いロ クロ目 (外)無で	(内)刷毛塗り による暗緑釉 (外)褐釉	灰白色・黒色粒、 白色粒・透明感 を持つ・剥離面 は荒い・円、裂 孔が存在	口縁部は内外に肥 厚し平らな面を成 す。			
313	94	68	"	陶器	甕	33.4	33.9	34.0	18.6	(内)カキ目	(内)褐釉 (外)褐釉・黒 釉の流し掛け	暗灰～灰色・粒 子は良くガラス 化し、透明感 を持つ・剥離面 はやや荒い・円、 裂孔が存在	胴部上位に4条及 び3条単位の断面 V字を呈する沈線 帯が存在する。口 縁部は内側に折り 曲げることから肥 厚する。底部内面 に目跡が残る。			
314	95	68	"	陶器	甕	17.0	22.3	18.8	11.4	(内)ロクロ 目 (外)ロクロ 目・削り痕	(内外)褐釉	黄白～灰褐色・ 透明感を持つ・ 剥離面は荒い・ 円、裂孔が存在	底部内面に足付ハ マ跡が存在する。 体部低位に融着物 剥離痕が存在する。 口縁端部は内側に 肥厚し平らな面を 成す。			小籠Ⅱ—734 に形態調整酷 似する。
315	95	68	"	土師器	火消し 壺	14.6	20.0	20.4	14.8	(内)無で・ 指頭圧痕・ 弱い削り痕 (外)無で		黄～橙灰褐色・ 砂粒、石英粒・ 赤色チャート粒 を含む。				
316	95	55	"	土師質	焼炉	23.4				(外)無で (外)鉄釉・ 露胎	(外)赤色顔料 塗布	黄灰～橙灰色・ 石英粒を多く含 む。	口縁部の一部に切 り込み(窓?)が存 在する。口縁部下 に角状の五徳が付 き、円孔が穿たれ る。口縁部に煤が 付着する。			

II区(廃棄土坑・包含層) 出土遺物観察表

遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種／ 器形	法 量(cm)				成形技法／ 調整 内面／外面	釉薬・絵付 内面／外面	胎 土	特 徴	産 地	年 代	備 考
						口径	器高	胴径	底径							
317	95	55	廃棄 土坑	土師質	焜炉	17.2				(内)撫で・ 指頭圧痕 (外)横位の カキ目		黄灰褐色・石英 粒・砂粒・剝離 面は荒い・円、 裂孔が存在	口縁部に煤が付着 する。口縁部内面 に角状の五徳が付 く。			
318	95	55	〃	土師質	焜炉				14.0	(内)ロクロ 目・撫で (外)カキ目・ 撫で		黄灰～黄色・砂 粒、石英粒・剝 離面は荒い・円 孔が存在	外面は炭素吸着に より黒灰色に仕上 げられる。			305の底部の 可能性在り
319	95	55	〃	土師質	七輪				22.2	(内外)撫で		淡橙～淡黄色・ 砂粒、石英粒・ 剝離面は荒い・ 円、裂孔が存在	体部内面に煤が付 着する。外面に赤 色顔料塗布する。			
320	95		〃	土師質	七輪				16.6	(内)ロクロ 目 (外)撫で・ 磨き		淡橙～淡黄色・ 砂粒、石英粒を 含む。	外面に円弧状の圧 痕が見られる。			
321	95		〃	陶器	植木鉢				21.4	(内)撫で (外)削り・ 撫で	(内)露胎 (外)灰釉・露 胎	黄白色・剝離面 は荒い・円、裂 孔が存在	細かな貫入が見ら れる。底部は腰輪 高台を成す。	瀬戸	19世紀	
322	95	68	〃	陶器	火鉢	26.8	13.2		15.0	ロクロは成 形時、調整 時共に右回 転。	(内)鉄釉 (外)(刷毛塗 り)鉄釉・露 胎	黄灰色・やや透 明感を持つ・剝 離面はやや荒い・ 円、裂孔が存在	底部内面に足付ハ マ跡が見られる。 底部接地面は摩滅 する。			
遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種／ 器形	法 量(cm)				重量 (g)	特 徴			産 地	年 代	備 考
323	96	55	廃棄 土坑	瓦	軒平 瓦	瓦当 厚 4.5	紋様 区厚 3.1	頸高 3.1		均整唐草紋・3単位のやや退化した雄芯状紋を中心飾りとする。 斑点を持つ。反転する第1・第2唐草。子葉は持たない。 右周縁に刻印を持つ。						
324	96	55	〃	瓦	軒平 瓦	瓦当 厚 3.5	紋様 区厚 2.4	頸高 2.0		第1唐草及び子葉・胎土は灰白色を呈し、石英粒を含む。						
325	96	55	〃	瓦	軒丸 瓦	瓦当 径 14.2	紋様 径 11.7	内区 径 9.4		連珠三つ巴紋・尾から頭へ右巻き・尾の断面は台形						
326	96	55	〃	砥石	仕上 げ砥	長さ 5.9	幅 2.8	厚さ 0.8	10	使用痕4面・携帯用として使用した可能性在り						泥岩製
327	96	55	〃	砥石	仕上 げ砥	長さ 12.7	幅 4.5	厚さ 1.0	70	使用痕3面						泥岩製
遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	出土 地点	種類	器種／ 器形	法 量(cm)				成形技法／ 調整 内面／外面	胎 土	特 徴	年 代	備 考		
口径	器高	胴径	底径													
328	97	55	包含層	弥生 土器	蓋	13.4	5.4		天井 径 3.8	(内)刷毛目 (外)天井部下に指頭 圧痕・撫で	黄灰～灰色・2mm大 の砂粒、石英粒を含 む。	体部はやや内湾し、口縁部で 外反する。端部は内傾する面 を成す。	弥生 後期末			
329	97	55	〃	弥生 土器	甗				4.6	(内)撫で (外)横位のタタキ後 撫で	橙灰～橙色・石英粒、 赤色チャート粒を含 む。	焼成前に底部に直径7mmの円 孔を穿つ。	弥生 後期末			
330	97	55	〃	土師器	甕	8.6				(外)縦位の荒い刷毛? 後横位の撫で	黄灰褐色・4mm大の 砂粒、石英粒、白色 粒子が見られる。	焼成良好	古代?			
331	97	55	〃	土師器	小皿	7.0	1.3		4.6	ロクロは成形時に右 回転。底部は糸切り による。	橙色・石英粒を含む。					
332	97	55	〃	須恵器	甕	16.1				(内)撫で (外)斜格子のタタキ 目	暗青灰色・砂粒、石 英粒、赤色チャート 粒		10世紀			
333	97	55	〃	土師器	坏	13.4	3.0		7.5	(内)撫で (外)撫で	淡黄白色・石英粒を 含む。	底部に粘土紐痕顕著。器高指 数21.3	10世紀 前半			

第IV章 考 察

1 弥生時代から中世における小籠遺跡の変遷

出原 恵三

(1) はじめに

小籠遺跡は洪積層である長岡台地の西端部に位置し、弥生・古代の遺構は長岡台地がまさに沖積低湿地に潜り込まんとするところに立地している。遺跡に近接している低湿地は、シオクサリという小字名がついており地元の人々の言によれば昭和初期まで潮が来ていたということである。恐らくここから西方一帯にかけては汽水域が広がり、浦戸湾に続いていたことが考えられる。現在の高知市中心部から浦戸湾を挟んで東方の大津付近までを甲藤氏は古浦戸湾^①と呼んでいるが、図示した低地部分がおおよそそれに該当しよう。浦戸湾口と前浜・十市付近を砂堤で遮断された一種の潟湖のような状況を呈していたと思われる。ここでは土佐潟と呼称したい。小籠遺跡は浦戸湾を中心として八手状に展開する土佐潟の最も奥まった地点に位置していることになる。後述するように、この自然地理的環境は小籠遺跡の成立や性格を考える上で重要な要素となる。

小籠遺跡からは、縄文時代以前に遡る遺構遺物は全く確認されていない。最初に遺構が出現するのは弥生時代前期末のことであり、以後断絶を繰り返しながら近世に至

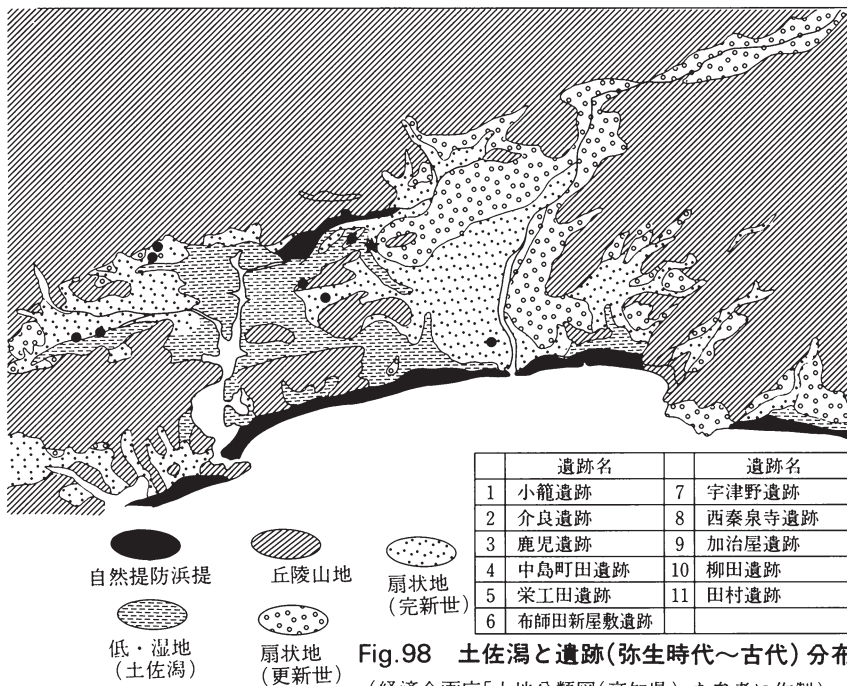


Fig. 98 土佐潟と遺跡(弥生時代～古代) 分布
(経済企画庁「土地分類図(高知県)」を参考に作製)

まで営まれるが、いくつかの大きな画期と小さな画期が認められる。ここでは、前期末から中世までの諸画期に着目して、諸画期の背景や周辺地域との関係なども視野にいて小籠遺跡の変遷について述べ、高知平野の当該期の歴史復元の一助としたい。

(2) 弥生時代前期末

調査 I 区を南北に延びる大溝SD 1 が掘削される。確認延長30m、幅2.4m、深さ1.2mで床面には底浚えの痕跡が明瞭に残っている。出土遺物は少ないが前期末葉に属するもので、小籠遺跡に残された最も古い遺構である。前期の溝は、田村遺跡で環濠やその内部で大小の溝が数例確認されているが、本例のように底浚えの痕跡を留める例は認められない。田村遺跡の諸例は集落内にあることから多量の遺物が出土しているが、本例は遺物がほとんど出土していない。この違いは、田村遺

跡の諸例が環濠を含めて区画的な機能を有し、本例が水田の灌漑・排水用の目的を持って造られことに起因するものと考えられる。今次調査において水田址を検出することはできなかったが、遺跡周辺の微地形は南に向かって緩く傾斜しており、調査区の南部に水田址を比定することは可能である。

これまで長岡台地に弥生時代の遺跡が分布し始めるのは、三畠遺跡の中期末頃からと考えられていたが、今次調査によって前期末葉にまで遡ることが明らかになった。前期末はすでに先学によって指摘がなされているように、弥生文化が定着し創造的展開⁽²⁾を開始する時期として位置付けられている。高知平野においては、田村遺跡に前期初頭の弥生集落が出現⁽³⁾し、前半期に環濠集落を形成するが前半期を通して田村遺跡の内でのみ諸遺構の展開が認められ、周辺部への広がりはいくも見られない。そして前期末葉に至ると俄に活況を呈するようになり、田村遺跡の周辺部はもとより物部川をはじめ中小河川流域にまで集落遺跡の分布が見られるようになる。前期末葉の小籠遺跡を現段階で集落遺跡として位置付けることはできないが、このような一連の動きのなかで出現し営まれた遺跡として捉えることができよう。

(3) 弥生後期～古墳時代初め

① 集落

前期末のSD 1 が埋没した後、中期を通して遺構遺物は全く認められない。再び遺構が現われるのは後期を待たなければならない。後期になるとⅠ・Ⅱ区で集落が展開し、東方のⅣ区で墓地が営まれる。

集落を形成する竪穴住居は22棟が確認されており、この内の18棟が後期終末から古墳時代初めに属するものであり、小籠遺跡の盛況期として位置付けることができる。

出土土器をもとに竪穴住居の変遷について詳しく見ると、まず後期中葉にST 3・11が出現し、後半にST 4・17が、終末期にST 1・2・5～7・9・18・19・21・22が、古墳時代に至ってST 8・12～16・20・23が営まれている。高知平野の土器編年で見ると、後期中葉とした住居出土の土器は後期Ⅱ－1・2期に、後半のそれは後期Ⅲ－2期、終末のそれは後期Ⅲ－3期に該当させることができる。そして古墳時代としたものは古式土師器1・2期に属するものである。後期中葉に成立しはじめて後期終末に飛躍的や発展を遂げ古墳時代初めまで持続するが、それ以降は続かず急速に衰退している。言わば弥生終末に急激に発展し古墳時代初頭を過ぎると廃絶する比較的短命な集落址とすることができる。ただ成立については、後述する墓との関係で後期初頭まで遡ることが考えられる。

高知平野の弥生集落は、前期以来連綿として営み続けられてきた拠点集落である田村遺跡と、断続的に営まれる周辺部の中小集落として把握することができる。田村遺跡は中期末(Ⅳ期)から後期中葉に盛況期を迎えるが、後期後葉になると急速に衰退し古墳時代には続かない。そしてこれと対比的に周辺部においては、後期後葉から終末にかけて新しい集落が次々に出現し、古墳時代初頭まで営まれるのである。本県における弥生前期から古墳時代初めまでの竪穴住居は250棟余り検出されているが、その内の6割が弥生終末から古墳時代初めにかけてのものである。未報告資料を含めるとこの比率はもっと増大するであろう。短期膨張衰退型の集落が如何に多く存在したのか明らかであろう。この種の集落の成立については、これまで後期末に至って突然成立すると考えられ

ていたが、最近では二つのパターンのあることが明らかになってきた。一つは従来からの考え方によるものであるが、それとは別に後期中葉から成立しはじめる集落のあることが明らかになった。小籠遺跡の場合は典型的な後者に属する。後者の類例を求めれば拝原遺跡⁽⁴⁾、深淵遺跡⁽⁵⁾、東崎遺跡⁽⁶⁾、岩村遺跡⁽⁷⁾などを、前者の例としてはひびのき遺跡⁽⁸⁾、ひびのきサウジ遺跡⁽⁹⁾、林田遺跡⁽¹⁰⁾などを比定することができる。両者の違いは、成立期のみならず継続時期や立地にも現われている。すなわち従来考えられていたタイプは、古墳時代初頭（古式土師器1期）で廃絶しているのに対して、後者の場合は継続期間がやや長く古式土師器2期あるいはそれ以降まで認められる。また立地については、後者のすべてが水運に密接な立地を示しているのに対して、前者は水運に対してそれほど密接な立地を示していない。さらに後者は複数地域からの搬入土器を持っている遺跡が多いことも特徴として挙げることができる。言わば後者のタイプは弥生時代の拠点集落が解体した後、小地域をまとめる地域拠点的な集落として位置付けることが可能ではなかろうか。当該期の小籠遺跡は、このような集落の典型的なタイプとして捉えることができる。

② 墓地

小籠遺跡からは、墓地を確認することができた。集落址の東方200mの地点である。数は2基と少ないが周辺部に広がりをもつ墓域として捉えることができる。高知平野における弥生時代の墓は、集落内に営まれる壺棺は多いが、集落に対応して存在する墓域を把握し得たのは今次調査がはじめてのことである。2基の内、1基は土坑墓であり1基は方形周溝墓とすることができる。時期は前者については後期と言う以外に明らかになしえないが、後者については細頸壺から後期初頭、高知平野の編年では後期Ⅰ期に属する。これは集落の成立に先行することになるが、今次集落の調査範囲の外面に先行する竪穴住居が存在することは十分考えられることであり、当集落址に対応する墓域として考えることは許されるであろう。これまで本県における方形周溝墓の確認例は2例のみであり、しかも古墳時代初頭に属するものであった。またその立地も集落内にあるもので墓域を形成するものではなかった。今次調査では、方形周溝墓の成立が弥生後期初頭まで遡りえたこと、それが集落と対応する墓域を形成することが明らかとなった。

③ 小結

小籠遺跡は、田村遺跡の盛行期である後期初頭ないしは中葉に成立し始め、伝統的弥生集落が解体して行く後期終末から古墳時代初頭にかけて盛況を呈した小地域の拠点となった集落であり、これまでの集落研究では明らかに為し得なかったタイプの集落遺跡である。土佐湾に臨んだ水運利便な占地をなし、すでに報告したように吉備・河内・阿波の土器が多く見られるなど、物資の集積地としての機能を果していたことが容易に考えられる。

高知平野における当該期の集落研究は、これまで伝統的な弥生集落と後期終末から古墳時代初頭の集落との間に大きな断絶のあることを明らかにしてきたが、その背景について具体的に言及されることはなかった。高知平野は前期古墳の空白地域であるが⁽¹¹⁾、今後このような視点にたって高知平野の諸遺跡について再点検をし、共同体の再編成について検討を重ね、如何なる構造的特質が横たわっているのか明らかにしていきたい。

（４）古墳時代中期

VII区より少量ながら初期須恵器が出土している。先述のように口縁部の特徴からTK216に比定することができるものである。南四国における初期須恵器は、県西部の祭祀遺跡である具同中山遺跡・古津賀遺跡^{〔12〕}や東部の安芸平野^{〔13〕}からまとまって出土しているが、これまで高知平野からの出土例はほとんど認められなかった。しかしながら今次調査と前後して行われた高知市介良遺跡^{〔14〕}、伊野町神母谷遺跡^{〔15〕}からも確認されるようになり、最近に至って高知平野の初期須恵器の状況が少しずつ明らかになり始めている。現段階での高知平野の初期須恵器は、TK216ないしはON46にその初現をもとめることが可能で、出現期は西部・東部とほぼ同時期とすることができる。県下において当該期の窯は確認されておらず、これらの初期須恵器はすべて搬入品と考えられている。今後、これら三地域の初期須恵器について手法・型態・胎土等の比較検討を行ない、生産地の同定や遺跡の性格などについての研究を進めなければならない。低湿地に臨む水際から初期須恵器が出土した場合は、祭祀遺跡との関連を考えていた^{〔16〕}が、小籠遺跡の場合は他に土師器や祭祀遺物などの共伴遺物が全く認められないことから祭祀遺跡との関連は稀薄としなければならない。したがって先述した弥生終末から古墳時代初めに水運を背景に成立した集落が、空白期間を有しながらも古墳時代中期前半に再び津としての機能を果たしたことを示している。ただし今次調査では、対応する集落関連の遺構は検出し得なかった。

今後この種の遺跡については、祭祀遺跡なのか背後に集落を持つ津であるのか、また両者の性格を有しているものなのか、その位置付けについては共伴遺物などを含めて詳細な検討が必要である。

（５）古墳時代後期

5世紀後半から6世紀前半代には、再び空白期が生ずるが6世紀後半代に至って竪穴住居が1棟（ST10）確認できた。高知平野においては古墳時代初めに盛況した集落が衰退して以後、6世紀後半期を迎えるまで集落関連の遺構は全く未確認である。この空白期を如何に理解するのかということは、前期・中期古墳がほとんど存在しないこととも関連して、今後取り組まなければならない南四国古墳時代史の大きな問題である。6世紀後半代に入ると作り付けのカマドを持った竪穴住居が出現し^{〔17〕}初め、高知平野の各地に小集落が形成されるようになるが、小籠遺跡の住居址もこのような高知平野の一般的な動向の中で捉えることができる。そしてこの時期の集落は、前述した弥生終末から古墳時代初めに出現し盛況を見た集落址と重複して立地している例が多い。やはり水運と密接な関係を有しているのである。当該期は、高知平野周辺の山麓に横穴式石室を持った後期古墳が築き始められる時期であり、南四国の古墳時代社会の画期として位置付けることができる。

（６）古代

古代の遺構は、II区とVI区で検出している。小籠遺跡の周辺で古代の遺跡は未発見であり、今次調査の大きな成果である。II区からは、土坑19基、溝1条、ピット数個が西と東との2群に分かれて検出されており、前回の報告では西群は9世紀前半代に東群は9世紀末から10世紀初頭に属するものとして捉えた。東群の方形土坑（SK130・136）からは、南四国の古代土器編年の基準となる良好な一括資料を得ることができ、共伴した黒色土器を根拠にその時期を9世紀末から10世紀初頭^{〔18〕}に求めたが、その後「もっと遡る資料である」との指摘もあり^{〔19〕}、詳細な時期比定については再

検討を要する。VI区からは倉庫と考えらる総柱の掘立柱建物（SB 1）が1棟検出されている。この建物は先述のように古代に属するものであることは確実であるが、東群、西群の何れの時期に機能したかを決定することはできない。II区で検出した土坑の多くは円形・楕円形・方形プランを有するもので貯蔵穴と考えられるものである。これらの中で東群のSK130・136は、方形プランの一边に削り出しによる階段状遺構を設けたものであり、類似例が土佐国衙^{〔20〕}から多数検出されている。西群の諸土坑には全く見られない特徴であり、西群から東群への貯蔵形態の変化として捉えることができよう。

古代の小籠遺跡は、II区の貯蔵穴群とVI区の倉庫と共に一種の物資集積場としての性格を有していたことが考えられる。これもまた水運を背景としてより合理的な解釈ができる。近年高知平野においては、8世紀から9世紀の古代の物資集積場的な性格を有した遺跡の検出が相次いでおり注目を集めている。十万遺跡^{〔21〕}、曾我遺跡^{〔22〕}、下ノ坪遺跡^{〔23〕}などに好例を求めることができるが、これらの諸遺跡に共通しているのは、すべて河川に接した立地であること、高床倉庫群と官衙的な配置を有する方形掘り方の大型建物を有していることが挙げられる。なかでも物部川左岸にある下ノ坪遺跡は、7間×3間の大型建物をはじめ20棟以上の建物群からなっており、郡衙にも匹敵する規模を容れている。これらの諸遺跡が、物資の搬出入・交通の利便さを最も考慮した占地であることは言うまでもない。さらにこれらの諸遺跡については、文献による記載が全く認められず、郡衙など地方官衙推定地とも異なる地点に立地している。今後どのような位置付けがなされるのか高知平野の古代史を復元する上で重要な問題である。

小籠遺跡の場合は、調査区の制約もあって官衙的な建物の検出には至っていないが、立地、物資集積と言う点では共通した性格を有している。ただ上に挙げた3遺跡がすべて高床の倉庫であるのに対して、半地下式と考えられる貯蔵穴が多くを占めている。また出土遺物で比較した場合かなりの違いが認められる。すなわち下ノ坪遺跡では八稜鏡、帯金具、丸柄などが、十万遺跡からも巡行が、曾我遺跡からは多量の二彩、緑釉が出土しているなど官衙的色彩を帯びたものが認められる。小籠遺跡からはVII区から僅かに緑釉皿が1点出土しているに過ぎない。

小籠遺跡と3遺跡の貯蔵・集積施設の違いは、このような出土遺物にも端的に現われているように、集積地あるいは施設の社会的な位置付け、「ランク付け」の違いを反映しているものとして理解することができよう。言わば3遺跡が上級の施設であるのに対して小籠遺跡の場合は下級の施設として位置付けることができる。律令体制下の津は、当然のことながら重層構造を有していたことが考えられるが、その具体的像を明らかにしたことは、高知平野の古代史の構造的復元を進める上で大きな成果である。

（7）中世

9世紀末あるいは10世紀初に古代の諸遺構が廃絶された後、中世までは再び空白期となる。13世紀になってII区に掘立柱建物2棟（SB 1・2）、溝（SD69）が見られるが、遺物も少なく寒村的な景観を呈するものであり、古代で見られたような津の機能を積極的に果した状況は認められない。恐らく津としての機能は別の地点に移され、中世の小籠遺跡は、水田、畑地となっていたことが考えられる。

(8) まとめ

以上、弥生前期末から中世までの変遷について述べた。冒頭述べたように小籠遺跡は断続的な変遷を辿っており、大きな画期と小さな画期を繰り返している。大きな画期としては弥生時代末から古墳時代初めと古代に見出すことができ、小画期は弥生時代前期、古墳時代中期・後期、中世13世紀ごろである。これらの諸画期の弥生時代後期末以降のものについては、高知平野の古墳時代から中世における諸遺跡の盛衰の波長にほぼ一致するものであり、特異な一時期を形成するような段階は認められない。しかしながら今回の調査を通して興味深かったのは、これら諸画期が弥生時代前期末と中世を除けば土佐湾に臨む津としての機能を果たしたと密接に関係しているということである。むしろ津としての機能が果たした立地であったがゆえに各時代の遺跡の展開が図られたとすべきであろう。今日中世を初め古代交通史の研究が盛んであるが、高知平野の各時代、各遺跡において、このような視点からの再検討を加えることの必要性を感じる。

(註)

- 1) 甲藤次郎『高知県の地質』高知市民図書館 1969年
- 2) 田辺昭三・佐原真「近畿」『日本の考古学』Ⅲ 河出書房新社 1966年
- 3) 出原恵三「初期農耕集落の構造」『考古学研究』第34巻第3号考古学研究会 1987年
- 4) 出原恵三『拝原遺跡』高知県香我美町教育委員会 1993年
- 5) 高橋啓明・出原恵三・吉原達生『深淵遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会 1989年
- 6) 前田光雄・吉原達生「東崎遺跡現地説明会資料」高知県文化財団 1990年
- 7) 出原恵三・武市義浩『岩村遺跡 II』南国市教育委員会 1997年
- 8) 岡本健児・廣田典夫『高知県ひびのき遺跡』土佐山田町教育委員会 1977年
- 9) 高橋啓明『ひびのきサウジ遺跡発掘調査報告書』土佐山田町教育委員会
- 10) 森田尚宏『林田遺跡』土佐山田町教育委員会1985年
- 11) 出原恵三「弥生から古墳へー前期古墳空白地域の動向ー」『考古学研究』第40巻第2号考古学研究会 1993年
- 12) 出原恵三・廣田佳久・松田直則『古津賀遺跡・具同中山遺跡』高知県教育委員会
- 13) 井本葉子「高知県の祭祀遺跡について」『高知の研究1』清文 1983年
- 14) 坂本憲昭・田坂京子「介良遺跡現地説明会資料」高知県埋蔵文化財センター 1996年
- 15) 久家隆芳『伊野町八田・神母谷遺跡発掘調査記者発表・現地説明会資料』高知県埋蔵文化財センター 1996年
- 16) 出原恵三「祭祀発展の諸段階」『考古学研究』第36巻第4号考古学研究会 1990年
- 17) 池澤俊幸「高知平野における古墳時代後期の竪穴住居についてーカマドより見た予察ー」『下ノ坪遺跡 I』高知県野市町教育委員会 1997年
- 18) 出原恵三「小籠遺跡出土の古代土器について」『小籠遺跡 II』高知県埋蔵文化財センター 1996年
- 19) 太宰府市教育委員会中島恒二郎氏の御教示による。
- 20) 廣田佳久『土佐国衙発掘調査報告書第9集』高知県教育委員会 1989年
- 21) 出原恵三・高橋啓明・吉原達生『十万遺跡発掘調査報告書』高知県香我美町教育委員会 1988年
- 22) 高橋啓明・吉原達生『曾我遺跡発掘調査報告書』高知県野市町教育委員会 1989年
- 23) 小松大洋・池澤俊幸・出原恵三『下ノ坪遺跡 I』高知県野市町教育委員会 1997年

2 高知平野の古式土師器Ⅰ・Ⅱ期について

出原 恵三

高知平野における古式土師器の編年的研究は、岡本健児氏が先鞭をつけられてきたが⁽¹⁾、最古段階のひびのきⅢ式⁽²⁾（ここで言うⅠ期）を除くと良好な一括資料に恵まれず、弥生土器編年に比べると遅滞した状況がしばらく続いていた。しかしながら90年代以降、発掘件数の増加と共に十分とは言えないまでも該期の資料が増加しつつある。そのような中で筆者は、高知平野の古式土師器について1990年に4期区分（Ⅰ期～Ⅳ期）の見通しを立て⁽³⁾、ついで1993年に新資料をもとに4期区分の内容の充実を図った⁽⁴⁾。また廣田佳久氏は南四国を対象とした研究成果を提示している⁽⁵⁾。廣田氏の研究も4期区分を採用しており、個々の資料の位置付けについては見解の一致を見ないが、時期区分については現状においては概ね4期区分が妥当であろう。

今次調査において、Ⅱ区の竪穴住居址群から古式土師器Ⅰ・Ⅱ期の良好な資料を得ることができた。ここではこれらの新資料をもとに、これまでの研究の充実を図りたい。特に従来の編年の2段階（Ⅱ期）については、岡本氏の提唱された馬場末式土器を当てていたが、当型式は遺構出土の一括資料ではなく、廣田氏も指摘するように若干の時間幅が存在するものと考えられる。今次調査のⅡ区ST12からは、Ⅱ期に比定すべき良好な一括資料を得ることができた⁽⁶⁾。またその他の竪穴住居址や土坑からもⅠ期に関する良好な資料が数多く出土している。これらの新資料は、従来の編年観を大枠において変更するものではないが、若干の修正や新たな課題を生ずるに至っている。これらの新知見を加味して、改めて高知平野の古式土師器について若干の考察を行なうものである。

（1） 古式土師器Ⅰ期

質・量共に最も充実した資料を有する時期であり、今次調査で検出した竪穴住居址の大半もⅠ期に属するものである。Ⅰ期を構成する器種は、壺・甕・鉢・高杯・支脚・器台・小型3種であるが、今次調査においては、小型三種を除くすべての器種が出土している。高知平野における弥生土器から古式土師器への変化は極めて漸進的な変化を辿っており弥生土器の延長線上に位置つけることができる⁽⁷⁾。弥生時代後期の最終末の後期Ⅲ－3期から古式土師器Ⅰ期への製作手法上の変化としては、丸底・尖底が多くなる点やハケ調整が少なくなることなどをあげることができるが、相対的な変化であり技術上の太きな画期は見出し難い。しかしながら、土器組成の変化と搬入土器の顕在化と言う点において違いを見出すことができる。今次調査で出土した土器群もこの域を大枠において逸脱ではないが、あらたに得られた知見について述べることにする。

先ず、これまでⅠ期の指標の一つとして装飾壺の消失を挙げていたが、今次調査の竪穴住居ST13・14で少数例ながら認められた。このことは前回も触れたように両者の連続性の強さを示しているものと言えよう。次いで今次調査で特徴的であったのは、小型の鉢を挙げることができる。この種の鉢は、弥生後期Ⅲ期以来増加の一途を続け、甕と共に器種組成の8割り近くを占めているが、今回ST13・14などで出土したタイプは、これまで知られていた丸底・小皿状のものとは異なり、平底で器高指数の高い椀状のものが多く、このタイプは前回も指摘したように、古式土師器Ⅱ・Ⅲ期の鉢を指向した新しい要素である。器種組成上の特徴としては、高杯の増加を挙げるこ

とができる。高知平野においては弥生後期Ⅲ期をとうして、高杯は極めて僅少な器種となっており、当遺跡においても後期Ⅲ－Ⅲ期の住居址出土の高杯は平均すると1.8%であったが、古式土師器Ⅰ期の平均は3.0%に増加している。またこの高杯は、杯底部から稜線を有して立ち上がる深い杯部を持つものでこれまでには認められなかった新しいタイプである。西分増井遺跡のST 8からその存在は明らかとなっていたが、今次ST13よりまとまった資料（167～172）を得ることができた。

古式土師器Ⅰ期の特徴の一つに搬入土器を挙げることができることについてはすでに触れたが、今次調査においても数多く出土している。壺・甕・高杯が認められ、甕が最も多い。出土産地と器種について見ると、壺・高杯は東阿波型土器、甕は吉備型甕・庄内甕・東阿波型が見られる。混入や胴部細片も含めれば152点に及び、搬入土器の内訳は東阿波型土器が88点、吉備型甕が47点、庄内式土器が8点、産地不明が9点である⁽⁸⁾。Ⅰ期の住居址からは、例外なく一地域あるは複数地域の土器が出土している。Ⅰ期における搬入品の出土例を周辺地域に求めれば、春野町の西分増井遺跡ST 8⁽³⁾、南国市の岩村遺跡ST 1⁽⁹⁾、同五軒屋敷遺跡ST 2⁽¹⁰⁾、土佐山田町のひびのき遺跡A地区竪穴住居⁽²⁾などを挙げることができる。これらの諸遺跡からの搬入土器の産地も上記の3地域からのものである。器種は甕が多いが、岩村遺跡からは吉備型の鉢が出土している。次に搬入品の時期であるが、東阿波型土器の甕・壺については菅原康夫氏の黒谷川Ⅲ式⁽¹¹⁾に、吉備型甕は高橋護氏のX－e期⁽¹²⁾に平行関係を求めることができるものである。庄内式土器との関係については、八尾市萱振遺跡SE03⁽¹³⁾の一括資料のなかに見出すことができる。すなわち庄内式土器の後半、布留式土器との交替期に該当させることができよう。すでに周知のように、これら三地域の当該型式は、萱振遺跡SE03から在地のいわゆる伝統的Ⅴ様式土器とともに出土していることから、併行関係には確信が持てる。

したがってこのことは、高知平野においては庄内式と布留式の交替期に古式土師器としての成立を認めることができるのであり、庄内式土器の大部分の段階は弥生後期Ⅲ期の中にあると見てよい。

（２）古式土師器Ⅱ期

Ⅱ期は概ね岡本氏の馬場末式土器に該当させることができるが、先述のように一括性に欠けるきらいがある。岡本氏は当該期の指標として叩き手法の衰退を挙げているが、ST12出土の土器こそ最もⅡ期にふさわしい資料とすることができる。前回の報告ではⅠ期の中に含めていたが、ここで改めて古式土師器Ⅱ期として位置付けたい。壺・甕・鉢・高杯から成っているが、高杯には好例を欠いている。搬入土器は見られない。壺はラッパ状に外反する二重口縁を有するもの（112）と口縁直立の二重口縁壺（113）が見られる。前者はⅠ期に搬入土器としてのみ存在していたタイプであり、Ⅱ期に至って在地で作られ始めたことを示している。甕は伝統的な長胴砲弾タイプから球形に変化し、叩き目は残るものの大部分をナデとハケ調整によって消している。胎土も弥生後期Ⅲ期～古式土師器Ⅰ期の赤褐色風のものから暗黄褐色風のものに変化しており、器壁も心持ち薄くなるようである（114～116）。116には内面ヘラ削りが見られる。これまで在地土器においては、内面ヘラ削り手法は例外的な存在であったが、Ⅱ期以降Ⅲ・Ⅳ期をとうしてかなり一般化する。鉢は、伝統的な皿状のもの（123）とⅠ期のST13・14などで顕在化した椀タイプ（188～122）が見られ

るが、後者が多くを占めている。

I期には多くの搬入土器が見られたにも関わらず、在地の土器生産にはほとんど影響を与えることはなかった。II期に至って初めて球形化や内面ヘラ削り、叩き目の消去など技術上の変化が窺える。

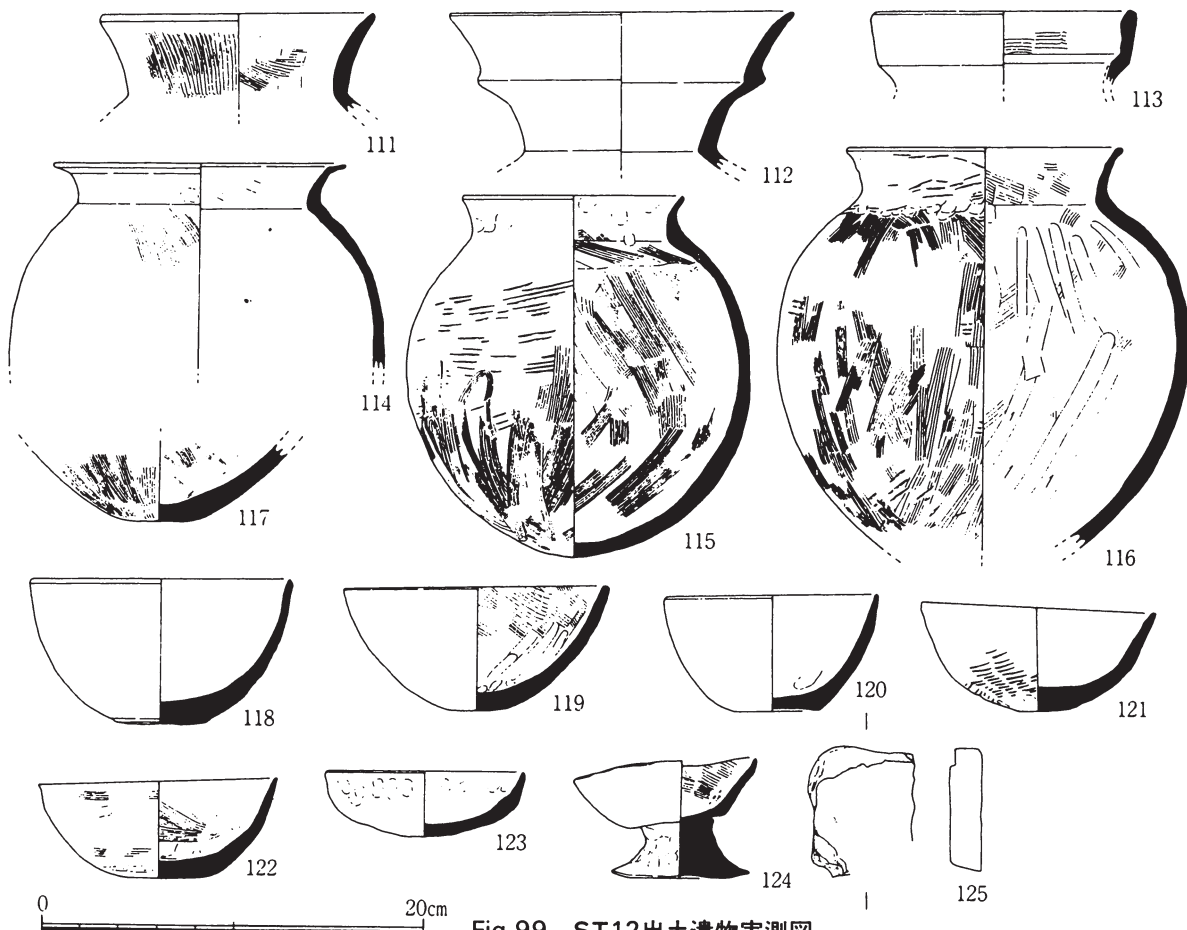


Fig.99 ST12出土遺物実測図
(『小龍遺跡II』1996年Fig.21より転載)

(3) まとめ

前方後円墳出現前夜の中部瀬戸内や徳島平野、河内平野には、弥生土器を払拭した新しい手法による土器群が登場する。吉備型甕、B類土器、東阿波型土器、庄内式土器と呼ばれているものである。これらの土器は強い個性を有しながらも、それぞれの型式に見られる強固な規格性、統一された胎土などに見られるように、各地域で形成された専業集団の手による製品であるという点において歴史的共通性を有している⁽⁷⁾。これらの土器に示された個性は、地域の独自性を表現したものであるが、それを貫く普遍性については、吉備中南部で醸成された祭祀型態をはじめとした強いインパクトのもとに現象したことが考えられる。新たな生産関係の中で生じたこれらの土器は、もう一つの重要な性格が付託されている。それは遠隔地への移動である。この土器の生産と流通における変革の中に、前方後円墳の造営を可能にする構造的基盤の整備を見出すことができる。

すでに触れたように高知平野の古式土師器I期は、搬入品を除くと弥生後期III-3期との間に大

きな違いを見出すことはできない、弥生土器の延長上に位置付けられるものである。これは上述の新しい土器群を誕生させた地域とは異なり、当該期においても弥生時代社会を踏襲した諸関係が継続していたことを意味する。上述の搬入土器に数多く接しながらも、なんら技術革新は生じていない。この現象は、歴史的段階はことなるが、恰も周辺地域の縄紋晩期土器の中に遠賀川式土器が入って行く現象と類似している。このことは、最終末の青銅祭器を多く受入れた地域であり、前期古墳が見られない地域であることと有機的な関連があるものと考えられる⁷⁾。

II期の基準資料としてST12出土の土器を提示したが、II期に至ってはじめて手法・形態ともに弥生時代的なものを払拭し、古式土師器としての様相を整える。布留式土器の比較的古相の段階と併行関係にあると思われるが、今後資料の増加を待って周辺地域との併行関係や高知平野の特徴の抽出に努めなければならない。I期に多かった搬入土器は見られず、以後III・IV期においても同様である。古墳時代創出の激動期が去り、再び地域社会の均衡が保たれ始めたことを意味しているのかも知れない。しかしながらこの時期以降、高知平野においては遺跡数は激減し、弥生時代に見られた盛況は絶えて認めることはできない。

(註)

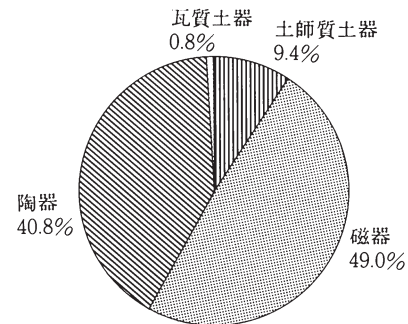
- 1) 岡本健児「四国における叩目のある弥生土器と土師器」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集 下1982年
- 2) 岡本健児・廣田典夫『ひびのき遺跡』高知県土佐山田町教育委員会 1977年
- 3) 出原恵三『西分増井遺跡群発掘調査報告書』高知県春野町教育委員会 1990年
- 4) 出原恵三『拝原遺跡』高知県香我美町教育委員会 1993年
- 5) 廣田佳久「周辺地域における土師器の様相」『研究紀要』第1号 高知県文化財団埋蔵文化財センター 1994年
- 6) 出原恵三・藤方正治・泉 幸代・浜田恵子『小籠遺跡 II』(高知県文化財団埋蔵文化財センター 1996年
- 7) 出原恵三「弥生から古墳へー前期古墳空白地域の動向ー」『考古学研究』第40巻第2号 考古学研究会 1998年
- 8) 泉 幸代「小籠遺跡出土の搬入品について」『小籠遺跡 II』(高知県文化財団埋蔵文化財センター 1996年
- 9) 出原恵三・武市義浩『岩村遺跡群II』高知県南国市教育委員会 1997年
- 10) 角谷和男『五軒屋敷遺跡調査報告書』高知県教育委員会 1984年
- 11) 菅原康夫『黒谷郡頭遺跡 I』徳島県教育委員会 1986年
- 12) 高橋護「弥生時代終末期の土器編年」『岡山県立博物館研究報告』 1988年
- 13) 大阪府教育委員会『萱振遺跡発掘調査概要 1』 1983年

3 小籠遺跡出土の近世陶磁器について

藤方 正治

(1) 概要

1994年度と1995年度に於ける調査で出土した遺物の中で図示可能なものは約850点である。出土土器を構成するものの種類は土師質土器・磁器・陶器・瓦質土器である（グラフ1参照）。ここではこれらの近世陶磁器の中で産地・時期が明らかなものについて大きく3つの時期に分けて考えを進めて行く。これは以下で詳しく述べるが、江戸時代前期に於ける肥前産と瀬戸・美濃産の陶磁器のみが出土する時期、肥前陶磁器と在地尾戸産の陶器が絡む時期、そして在地能茶山産の陶磁器が多量に出土する時期である。概ね1期は大橋編年Ⅰ期からⅢ期に相当する17世紀代、2期は同じくⅣ期に相当する17世紀末から18世紀後半、3期は同じくⅤ期に相当する18世紀末から19世紀代と考えられる。調査時に検出された遺構の廃棄時期は消費地遺跡と言った性格を考えると、生産地遺跡で与えられた製作年代以降時間的にやや新しい時期で捉えるべきと考えられるが、ここでは個々の遺物について生産地又は他の消費地遺跡で明確な生産乃至流通時期が与えられている遺物について述べて行くことにする。また、在地諸窯特に尾戸・能茶山の製品については纏まった出土を見た遺跡は1980年代の田村遺跡に於ける発掘調査以来であり、近世遺物についての詳細な検討はされておらず、今回の調査に於ても出土遺物の中で多くを占める近世後期の遺物について層位的に先後関係を捉えることは出来ていない。（※ 出土遺物の番号は「調査区－遺物番号」で表しており、Ⅰ区とⅡ区の637以降の遺物については前々回、前回の報告書に於ける番号である。）



グラフ1 小籠遺跡出土遺物種別組成

1 期

17世紀初頭は国内最大の窯業生産地である瀬戸・美濃では、大窯製品と本業焼製品が焼成される時期に相当する。肥前で1610年代に国内で初めて磁器焼成に成功するが、1637年の窯場統合事件を契機に有田皿山では本格的な磁器焼成の時代に入る。小籠遺跡出土の近世陶磁器の中で近世前期の遺物は量的に多くはない。瀬戸・美濃産の製品では緑釉の皿(Ⅱ-816)、緑釉掛けの皿(Ⅱ-817)、鉄釉碗(Ⅳ-9)、折縁皿(Ⅳ-11・12・14)が存在している。肥前産のものでは灰釉碗(Ⅱ-668・667)、銅緑釉掛けの灰釉碗(Ⅱ-667)、灰釉火入れ(Ⅱ-665)、溝縁皿(Ⅰ-58・70)(Ⅱ-727)、青磁仏飯碗(Ⅱ-813)、青磁香炉(Ⅱ-260)が出土している。また、中国産の陶磁器としては景德鎮窯の青花皿(Ⅲ-9)、白磁皿(Ⅴ-61)が見られる。

2 期

肥前産陶磁器が全国的に消費地遺跡で認められる時期であり、特徴的な装飾技法や釉薬を持つものが多く見られる。小籠遺跡でも出土遺物の中には当該期の肥前産陶磁器が多く存在している。17世紀後半に開窯した波佐見系の各窯は磁器生産の中心地である有田皿山が高級品を焼成したのに対して、雑器を中心とした安価な製品を国内に供給することで販路を拡げていった。17世紀後半から

18世紀前半に生産されたとされる肥前産京焼風陶器、嬉野内野山窯製の銅緑釉を施した碗や皿、武雄・木原系の白化粧土による刷毛目装飾を施した碗・鉢などが見られる。また、この時期にこれら肥前産の陶磁器と相伴して出土する遺物の中には在地陶器窯である尾戸製品も見受けられる。

肥前産陶磁器では口縁部内面に墨弾き技法を用いた流水紋を施した皿（Ⅲ-114）や見込にコンニャク印判による五弁花を施した染付碗（Ⅱ-54・701）が存在する。外面に網目紋や二重網目紋を施した丸碗（Ⅱ-51・52）は内面に同様の紋様を施さないことから、18世紀でもやや後出するものと考えられる。先述した嬉野内野山窯製の外面灰釉、内面銅緑釉、見込蛇ノ目釉剥ぎを施した皿が存在するが、この中には造りの比較的良好な（Ⅰ-67）（Ⅱ-743）が存在する。また波佐見産くらわんか手の碗（Ⅱ-121・724）や皿（Ⅱ-167・171）があり、器壁は何れもやや厚味を持っている。西有田広瀬向窯産の青磁染付の碗（Ⅱ-44・725）や蓋（Ⅱ-197）も見られる。他に、内面に打ち刷毛目を施した碗（Ⅲ-93）、刷毛目装飾の鉢（Ⅲ-98）、陶胎染付の碗（Ⅲ-122）が見られる。京焼風陶器皿（Ⅳ-4）は内面に楼閣山水紋、高台内に草書体の「清水」銘を持つもので17世紀末のものと考えられるが、在地尾戸製品の可能性も在る。

尾戸又は肥前産と考えられる呉器手の碗は、ここ小籠遺跡に於ても一定量の出土が認められており、灰釉・緑灰釉・灰褐釉を施したものが存在する。瀬戸・美濃の製品はこの時期に灰釉火入れ（Ⅱ-726）、灰釉皿（Ⅱ-175）、摺り絵皿（Ⅱ-138）などが見られるが、この時期の総出土量に対する割合は減少している様に考えられる。

3 期

この時期に該当する製品が小籠遺跡出土遺物の中で大半を占めている。調査Ⅱ区では廃棄的性格を持つ遺構群からの多量の遺物が出土しており、これは瀬戸・美濃に於ける磁器焼成の開始（1800年）や地方陶磁器窯の開窯ラッシュに呼応するような、在地各窯の製品が増加したことによるものと考えられる。器種の殆どは雑器によって占められており、種類としては磁器、陶器、土師質、瓦質のものが存在する。（グラフ2参照）

肥前では広東茶碗は1780年代から1810年代に生産年代を与えられているが、ここでは波佐見産と考えられる（Ⅱ-106・883）などが含まれる。紅皿は肥前産と考えられる外面に放射状紋を持つもの（Ⅱ-671・811・872）（Ⅲ-4・10・11）（Ⅴ-50・64）が存在する。

瀬戸・美濃産陶磁器としては、端反り形の磁器染付碗で木賊紋を持つもの（Ⅱ-839・882）（Ⅱ-27～30）（Ⅲ-27）、隸字体の紋様を持つもの（Ⅱ-759）が存在している。また、陶器染付広東茶碗（Ⅱ-107～109・637・738・788）（Ⅲ-56）や灰釉陶器鉢（Ⅱ-902）、鎧手の碗（Ⅱ-77）（Ⅲ-126）（Ⅴ-15・29）などが見られる。

この他に生産地の明らかなものとして、信楽（Ⅱ-16・22・43）、志戸呂（Ⅱ-133）、備前（Ⅴ-56）、堺（Ⅱ-861・870）などが存在している。

在地の製品と考えられる陶磁器も多く存在している。磁器の中には器種として碗の存在が最も多く、蓋皿、小皿、鉢と供膳形態を取るものが多くを占めている。碗の器形としては主に広東形と端反り形によって占められており、蓋皿に於ては端反り形・丸形のものが見られる。小皿は何れも規格性が強いもので菊皿（Ⅱ-155～158）や輪花形を呈し口唇部に呉須を施したもの（Ⅱ-148・149）

があり、鉢では蛇ノ目凹型高台、口縁部型打ちによる角形のもの（II-225・226など）が多く見られる。陶器の中には鉄釉系の釉薬を施した皿や甕が多く存在する。皿は見込みに蛇ノ目釉剥ぎを施し、ここにアルミナ砂を施したものが多く、口縁部が外反（II-162～165）又は内湾するもの（II-166）である。貯蔵具と考えられる甕は口縁端部の肥厚する形態を持ち、黒釉による流し掛けを施したもの（II-734）が見られる。

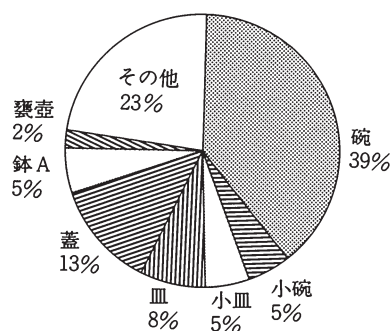
	I 区			II 区			廃棄土坑			III 区			IV 区			V 区		
	1 期	2 期	3 期	1 期	2 期	3 期	1 期	2 期	3 期	1 期	2 期	3 期	1 期	2 期	3 期	1 期	2 期	3 期
瀬戸・美濃	0	0	0	4	1	8	0	0	16	0	1	7	1	0	0	0	0	4
肥前	2	5	0	4	2	16	1	12	12	0	12	3	2	1	0	0	3	4
波佐見	0	1	0	0	2	3	0	2	5	0	0	0	0	0	0	0	1	0
内野山	0	6	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0
広瀬向山	0	0	0	0	0	2	0	0	13	0	0	11	0	0	0	0	0	0
能茶山	0	0	1	0	0	71	0	0	123	0	0	13	0	0	0	0	0	5
尾戸	0	7	0	0	14	15	0	2	2	0	6	6	0	3	0	0	4	0
信楽	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
備前	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
堺	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
志戸呂	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	1	0	0

表1 小籠遺跡出土遺物産地別組成

小籠遺跡出土の遺物を大きく3つの時期に分けて概観したが、およその年代と産地について明らかなものをまとめると表2のようになる。江戸時代前期から中期に掛けての出土量と後期に於ける廃棄の性格の遺構出土遺物との量的な比較は問題にならないが、廃棄土坑に就いて見たとき、時間的に余り幅のない遺物が纏まって出土していることから、一消費地遺跡に於ける器種構成が明確に成るのではないであろうか。また、以下では在地諸窯の製品と全国的に流通する肥前産や瀬戸・美濃産などの製品について幾らか検討を加えたい。

（2）廃棄土坑及び小籠遺跡出土の主な遺物について

先述したように廃棄的性格を持った遺構が調査II区に多く存在し、これらには18世紀後半から19世紀代の陶磁器が存在している。本報告書に掲載した資料もこの範疇に入るものと考えられるが、この中には前回報告済みの出土資料と接合関係にあるものが存在しており、一つの屋敷地内における廃棄の性格が強い。（以下では本報告書掲載資料出土土坑を廃棄土坑と呼ぶ。）



グラフ2 廃棄土坑出土遺物器種別組成

廃棄土坑内出土遺物に於ける主な遺物の占有率はグラフ2の様に成る。この中で量的に纏まって出土しているのは供膳具と考えられる土器群であり、碗・小碗・小皿・皿・蓋皿・鉢A類である。これらは出土遺物全体の約7割を占める。以下では廃棄土坑内出土遺物を中心に小籠遺跡出土の主な遺物について器種ごとに見て行く。

碗

器種別に見た各個体数の内点数の最も多い碗については本文中で分類を試みたが、これは大きく端反り形、丸形、広東形、腰折形、筒形、平形に分けられるものである。この分類による各形態の構成比はグラフ3に示す通りである。

端反り形は口縁部の外反状況により
a-1類とa-2類の二つに細分が可能である。

a-1類に分類される碗はII区SK87
(II-683)・SX9 (II-838) など
と同様な形態を持つ。ここに位置づけ
られた土器群には (II-8・9・11)
などが含まれており、これらは色絵に
よる上絵付を施すなど、近代的な要素
を持っている。本類中で産地が明確な
ものは能茶山産5点、瀬戸・美濃産1
点であり、先のSK87とSX9の2点も
能茶山産である。

a-2類に分類される碗はII区SK93 (II-709)・SX
9 (II-839) と同様な形態を持つ。ここには (II-32・
33・34) や (II-17・19) の様な、コバルトによる染付
や色絵による上絵付を施した土器群が存在しており、量
的にはa-1類に存在する近代的要素を持つ土器群に勝
る。本類中で産地が明確なものは、能茶山産4点、瀬戸
・美濃産5点であり、先のSK93・SX9出土の内後者は
瀬戸・美濃産と考えられる。

b-1類に分類される碗はII区SK94 (II-723)・SX5 (II-833)・SX9 (II-835) など
と同様な所謂腰張りの形態を呈するものである。この形態を持つ煎茶碗は18世紀後半に筒形のもの
と共に出現したとされている。本類中産地の明確なものは能茶山4点、信楽1点、肥前系1点であ
る。先の3点は何れも能茶山産と考えられる。

b-2類に分類される碗はII区SK121 (II-724)・SK124 (II-725)・SD78 (II-823) など
と同様な形態を持つ。本類碗の産地は波佐見・広瀬向窯等の肥前産磁器で18世紀～19世紀初頭に位
置づけられるものが殆どである。僅かに (II-77) のように瀬戸・美濃の製品が存在する。

b-3類に分類される碗はII区SE11 (II-793・796)・SE6 (II-773)・SE5 (II-745) と
同様な形態を持つ。何れも陶器碗であり、尾戸産又は肥前産と考えられる。本土坑出土遺物の中
では肥前産と考えられる陶胎染付2点、尾戸産?2点が存在している。

c類に分類されたものは嘗て高高台碗と称された如く、底部高台形態が認められれば破片のみで
も器形を推し量ることが容易である。II区SK51 (II-637)・SK65 (II-652)・SK71 (II-658)・
SK87 (II-682)・SK137 (II-728)・SE5 (II-738・739・740)・SE11 (II-792)・SX9 (II
-840・841) が同様な形態を持つものである。本土坑からは能茶山産20点、肥前系6点、肥前産1
点、波佐見産1点、瀬戸・美濃産3点が出土している。肥前産磁器に於ける碗の出現時期は、

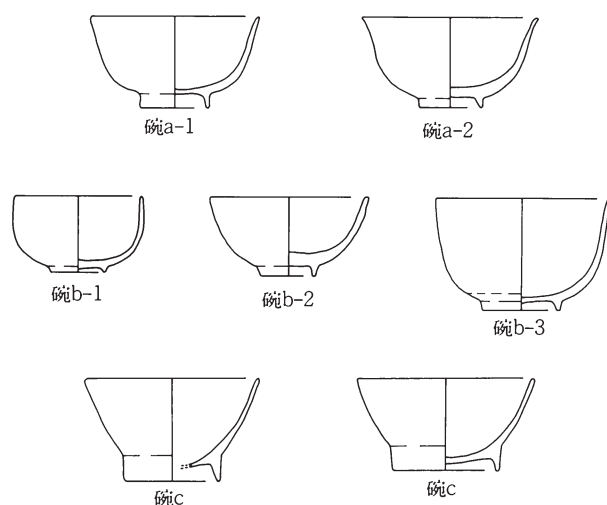
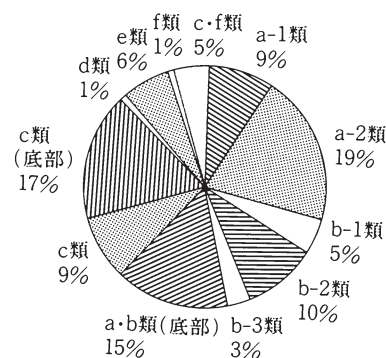


Fig. 100 碗類形態分類図



グラフ3 廃棄土坑出土碗類組成

清朝磁器の影響を受けた広東形が現れ、端反り形が後出するものとされている。丸形に於ける深いタイプは茶器としての要素を色濃く留めており、先の2つのタイプに先行すると考えられる。浅いタイプの丸形碗は主に磁器製品に認められるものであり、器高を減じながら口縁部を拡張することで容量を確保したものであろうか。また、煎茶の風習は18世紀後半から本格的に成ったとされている。

以上の要素を加味すると本土坑出土の碗に於ける時期的な変遷としては、先ずb-3類からb-2類への移行が想定でき、碗c類そして碗b-1類が続くものと考えられる。端反り形における変遷としては、口縁部外反の強いものに色絵による上絵付やコバルトによる染付などの近代的な様相が多く認められるところから、碗a-1類からa-2類へ変化するものではなかろうか。

小皿・皿

小皿と皿については主に口縁部の形態でa. 端反り形、b. 丸形、c. 輪花形、d. 菊皿、e. 折縁形に分類を試みた。

小皿に於ては端反り形態を示すものは17世紀代の緑灰釉を施した皿(II-816)のみである。

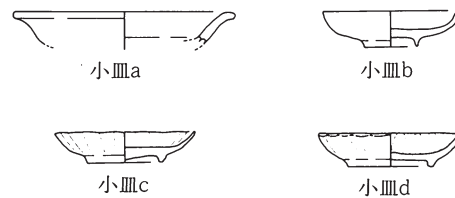


Fig.101 小皿形態分類図

丸形を呈すものは、口径8.8cm~9.8cm、器高2.3cm~2.5cm、底径3.6cm~4.8cmの法量値を示す。見込蛇ノ目釉剥ぎを施し、特徴的な紋様としては二重格子紋と草紋が見られる。産地は能茶山産と考えられ、同様な製品としてはII区SK87(II-673)・SE5(II-741)・SE6(II-763)が見られる。

輪花形を呈するものは口径8.5cm~10.4cm、器高2.0cm~2.5cm、底径4.2cm~6.2cmの法量値を示す。成形は型打ちにより、高台は主に付け高台で成されている。内面の紋様には楼閣山水紋・宝紋・草花紋が存在し、口唇部に呉須を塗布し口銹風に仕上げる。同様な製品はII区SK65(II-649)・SK93(II-702・704)・遺構外(II-895・896・898)、III区SK51(III-61・62)などに見られる。本遺跡出土遺物に於けるこの類の小皿は殆どが能茶山の製品と考えられるが、管見であるが他の遺跡からも同様な製品が多く出土していることから、各生産地で製作された可能性がある。

菊形を呈するものは口径9.3cm~9.8cm、器高2.2cm~2.4cm、底径5.4cm~5.9cmの法量値を示す。同様な形態を持つものはII区SK87(II-672)・遺構外(II-899)が見られる。能茶山製品又は肥前系の製品と考えられるものが殆どである。

折縁形を呈するものには17世紀代の肥前産と考えられる溝縁皿

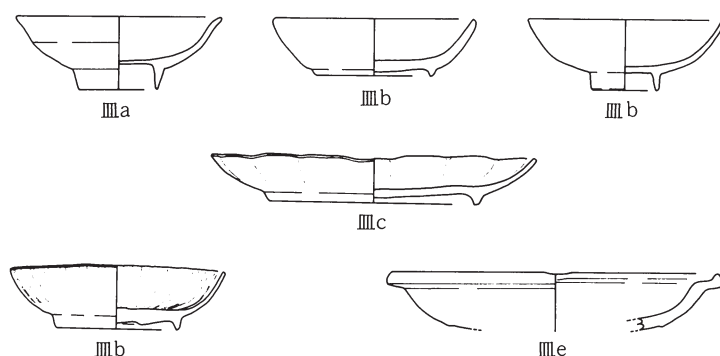


Fig.102 皿形態分類図

(II-727)が存在する。

法量のやや大きい皿類には小皿と同様な形態分類が可能である。

口縁部の形態により、外反する端反り形のものと同様な丸形のものが存在する。この中で陶器には高高台を持ち、内外面に鉄釉、見込みは蛇ノ目釉剥ぎを施し、釉剥ぎ部分にアルミナ砂を塗布した製品が在る。19世紀代に汎日本的に見られる製品であるが、在地能茶山製品にも存在する。この皿には、端反り形のものとしてII区SK93(II-705)・SE6(II-768・769)・SE11(II-789)・遺構外(II-903)があり、丸形のものにはII区SK139(II-733)・遺構外(II-903)がある。この他に丸形を呈するものとして、波佐見産の厚手の製品や形態は異なるがII区SX9(II-847)なども存在する。

菊皿は出土資料は少ないものの口径13.1cm~13.8cm、器高4.2cm、底径7.9cm~8.2cmの法量値を示し、蛇ノ目凹型高台を持ち、口唇部に口銹を施すものがある。出土3例は何れも能茶山産のものである。

蓋皿

所謂蓋物の蓋である。本土坑出土遺物からは26個体が図示可能であり、このうち25個体については本文中での既述の様に口縁部形態により大きくa.外反するもの、b.内湾するものに分類が可能である。

分類のaに属するものはII区遺構外出土の2点(II-892・893)を含めると11個体である。この類の特徴としては口径に対する摘み径割合が0.32~0.45であり、口縁部内面の施紋帯に雷紋・濃みによる帯線・渦紋・墨弾きによる如意頭紋など数種類が見られる。また、摘み内

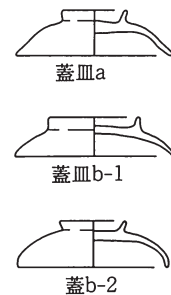


Fig.103 蓋皿形態分類図

に銘が施されている場合が在る。この11例中9例が能茶山産で、2例が瀬戸・美濃産である。

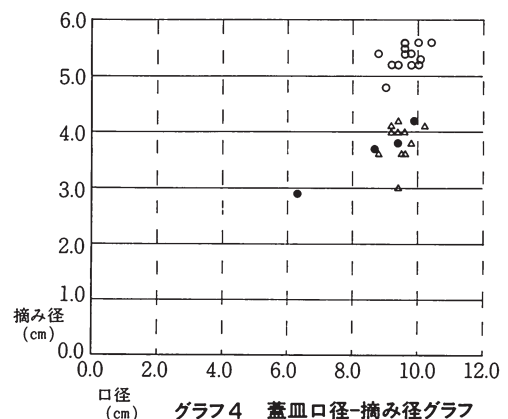
分類のbに属するものは更に細分が可能であり、笠部から口縁端部にかけてやや内湾するものをb-1類、内湾するものb-2類とする。

b-1類にはII区SK65(II-648)・SE5(II-744)・SE6(II-764)・SD62(II-810)・遺構外(II-894)を含めて15個体が存在する。この類の特徴としては口径に対する摘み径の割合が0.52~0.58を示し、a類に較べて摘み径が大きい。口縁部内面の施紋帯には二重圈線が施され、摘み内に施紋を施した広東茶碗の蓋と考えられる

ものが存在する。15例中能茶山産が11例、肥前産2例、肥前系、能茶山?が各々1例である。

b-2類はII区遺構外(II-897)を含めて3例のみである。口径に対する摘み径の割合は0.4~0.43であり、青磁染付を施した広瀬向窯の製品である。

蓋皿は碗とセットを成すと考えられることから、形態的に碗と同様に丸形から端反り形への変化が考えられる。今回の分類では丸形の強いものから弱いもの、そして外反するもの、つまりb-2類→



グラフ4 蓋皿口径-摘み径グラフ

b-1類→a類の移行が想定される。産地ではb-2類では肥前産、b-1類では能茶山産と肥前産、a類では能茶山産と瀬戸・美濃産が見られる。

鉢A

供膳具に於ける鉢（向付を含む）は本廃棄土坑内から17点出土している。小籠遺跡出土遺物全体では25点が存在するが、本文中で行った口縁部形態による分類に従うとa類に属するものが12点（III-87）・（II-651・845・846・890）となる。ロクロ型打ち成形により平面形態八角形を呈するものが8点、丸形を呈するものが2点、口縁部輪花を成すものが

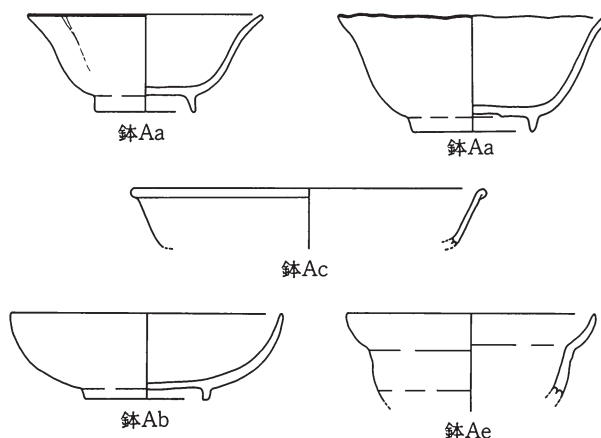


Fig.104 鉢A形態分類図

2点存在する。この輪花を呈する2点は平面形八角形を成すものと丸形を成すものに分けることが出来る。磁器製品18点中に角内「茶」又は「茶山」の銘を持つものが5点存在する。銘及び胎土観察から能茶山乃至は肥前系の製品と考えられ、19世紀代の製品である。b類とした製品には尾戸又は肥前製品の呉器形の碗に見られた胎土や釉発色を持つものであり、やや口径の広い向付か。c類とした1点は、口縁端部で粘土を外側に折り返す玉縁状を呈した、やや器高の低い腰張形の鉢である。e類には（II-237）（III-97・102）が存在する。何れも灰釉であり、口縁部分に鉄釉系の釉薬を施したもので、前者は緑色に発色し、後者は褐色に発色している。尾戸又は肥前製品と考えられる。

段重

廃棄土坑内からは3個体（II-242~244）の出土であり、III区SE4出土の1点（III-90）を含めて小籠遺跡全体からは4点の出土である。



Fig.105 段重形態図

何れも胎土から能茶山産のものと考えられ、外面の紋様としては宝紋を持ち、口径11.6cm~12.2cm、器高4.3cm~5.8の法量値で捉えられるものであり、重箱と考えられる。（II-242）は腰部に袂りを持つもので段重の上位に据えられるものと考えられるが、底部にやや低い高台が付く。これと同一紋様を持つ（II-243）はセット成す下段のものと考えられ、先の高台部分に見られなかった二重圈線が施されている。（II-244）は底部が緩やかに張り出し、高台風のかえりを有する。腰部から口縁部に掛けてやや内傾する特徴を持つ。

蕎麦猪口

本土坑出土遺物とII区SK87（II-679）、SK93（II-706）の中では法量的に二分される。容量のやや大きなものは口径7.2cm~8.0cm、器高5.5cm~5.7cm、底径5.8



Fig.106 蕎麦猪口形態図

cm～6.2cmの法量値を持ち、容量の小さなものは（II-248）のみが存在する。底部形態としては腰輪高台を呈するもの2点（II-246・247）、蛇ノ目凹型高台を呈するもの4点（II-248・249）（II-679・706）である。産地は能茶山産4点、肥前系2点である。

神酒徳利・仏飯碗・仏花器

神酒徳利は底部形態が腰輪高台を呈するもの3点（II-252）（III-35・74）と輪高台を呈するもの1点（II-253）が存在する。何れも肥前産と考えられる。



Fig.107 仏飯碗形態図

仏飯碗は3点の出土であり、やや内傾蛇ノ目高台を持つものが2点（II-254・255）、底部糸切り痕を残すものが1点（II-256）である。産地は前二者が肥前産か肥前系、後者が関西系と考えられる。小籠遺跡全体では他に3点の出土が見られる。明瞭な蛇ノ目高台を持つ青磁の製品1点（II-813）と内側の段部が不明瞭なもの2点（III-89）（V-10）が存在する。

仏花器又は花生として分類したものは2点（II-257・258）である。前者は青磁で肥前産、後者は褐釉を施したものであり関西系である。

香炉・火入れ

本土坑から出土した香炉又は火入れと考えられる製品は、8点である。遺跡全体では更に8点の遺物が存在している。形態的には、碗類に於ける筒形乃至は腰折形を示すもの、円筒形を呈するもの、1点ではあるが体部算盤玉形を示すもの（II-797）が存在する。口縁部形態

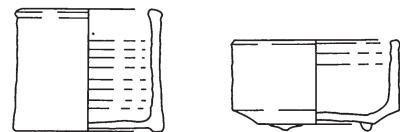


Fig.108 香炉、火入れ形態図

を留めるものについては内面に肥厚するものが多く、口唇部が内傾する面を成すものとやや丸味を持った水平面を成すものが存在する。口唇部に敲打痕を留めるものは2点（II-261・726）であり、円筒形を呈するものも火入れと考えられるが、使用痕が認められない。廃棄土坑出土の8点の内、2点は肥前産の青磁（II-259・260）、2点は肥前産の陶胎染付（II-264・265）、その他、瀬戸・美濃産、能茶山産、信楽産が各1点である。

灯明具

本土坑から出土した灯明具は部位も含めて7点であり、台付灯明皿、受付灯明皿、灯明皿が見られる。これを含めて遺跡全体からは14点の灯明具が存在する。台付灯明皿は7点であり、胎土には灰色系のものと灰白色を呈した関西系のもの、能茶山製品の可能性があるもの2点（II-712・713）が存在する。釉薬では鉄釉系の釉薬を施したものと緑灰釉を施したものの1点（II-268）が存在し、底部に残された回転糸切り痕

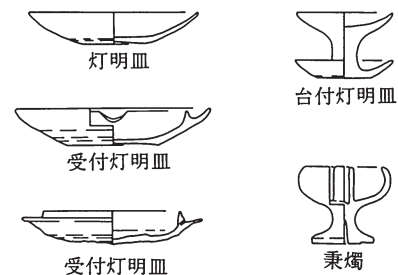


Fig.109 灯明具形態図

からは成形段階のロクロは右回転4例、左回転2例が存在する。受付灯明皿は灰釉を施したもの3点（II-273・806）・（III-63）と鉄錆を施したもの1点（II-676）が存在する。前者3点は何れも受けが口縁端部より低く、開口部分は緩やかに大きく抉り取られている。後者は受け基部に内側から柳葉形に穿孔するタイプである。底部に回転糸切りの痕跡を一部に残し、削り調整を施している。また、体部外面と受けの先端には重ね焼によると考えられる熔着痕と剥落部分が存在している。胎土から見ると前者には関西系の白色を呈したものが1点、信楽産と考えられる胎土を持つものが2点存在する。また後者は胎土が灰色を呈し、黒色斑を持ち、気孔が多く存在していることから、志戸呂産の製品胎土に似る。灯明皿は2点の存在し、灰釉を施したものである。胎土からは関西系のものと信楽産と考えられるものが存在する。灯明具としては他に乗燭が1点存在するが、これはタンコロ型を呈し、底部中央に円孔が穿たれる。胎土では灰色を呈する関西系の胎土が見られる。

鉢

ここで鉢として扱うものは先に取り上げた供膳形態の鉢以外のものを扱う。本廃棄土坑からは13点、小籠遺跡全体からは28点が出土している。部位による出

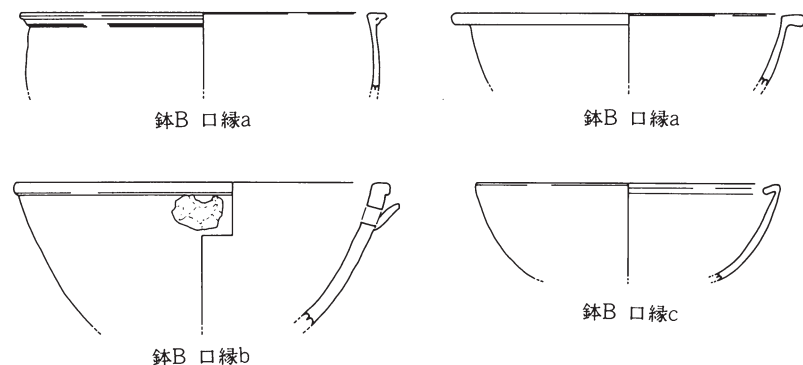


Fig.110 鉢B口縁部形態分類図

土が多いことから、個々の遺物についての形態を明らかにすることは出来なかったが、大きく口縁部と底部について分類を試みたい。まず、口縁部については次の3種類の形態が存在している。

口縁部A類は外面に肥厚又は拡張するタイプである。A-1類は口縁部を外側に向かって折り曲げたもので、口唇部は平らな面を成す（II-691・917・918）。このタイプは端部に至るまで施釉する。A-2類は口縁部が断面三角形を呈して肥厚するものである。口縁端部を外側に折り返し、口唇部分は釉剥ぎを施したもの（II-284・868）が含まれる。また、口縁下に穿孔し筒形の注口部分を貼付した褐釉の片口（II-275）と緑灰釉の片口（II-921）もこの類に属する。A-3類は外傾する無釉の口唇部をもつもので、胎土から尾戸系の製品と考えられる。

口縁部B類は口縁部が玉縁状を呈して肥厚するタイプであり、口唇部釉剥ぎ・刷毛目装飾を特徴とするものである。（III-3）には口唇釉剥ぎ部分に重ね焼によると考えられる熔着痕跡が存在している。この類には2点（III-44）、（II-922）の口縁下に丸形の注口部を持つ片口が存在している。これらは肥前産の可能性があり、18世紀代から幕末のものであろう。

口縁部C類は口縁部が内側に屈曲し、口唇部は内傾するタイプである。釉薬は端部に至るまで施されており、供膳具の可能性はある。

底部は形態として次の5種類が存在する。

底部A類は蛇ノ目高台状の断面逆台形を呈した低い高台を有するものである（II-279・280）（II-719・784）。底部B類は腰輪高台状を呈するものであり、見込部分に目跡が見られることから直線的に立ち上がる口縁部を持つものか。錆釉の見られる3点（II-285・287・717）が存在する。能茶山製品の可能性がある。底部C類は輪高台状の断面逆台形のやや高い高台を有するものである。見込みに目跡を有する3点（II-281・282・283）が存在し、体部は外上方へ大きく広がる。底部D類は断面台形のやや幅のある高台を有するものである。高台内は高台脇に較べて深く削り込まれるものが存在し、内面には白色土による刷毛目が施されている。18世紀代肥前系の製品と考えられる。底部E類はベタ底を呈するもので釉薬は施されていない、1点（V-11）のみが存在し、内面と体部外面には白土による刷毛目が施されている。

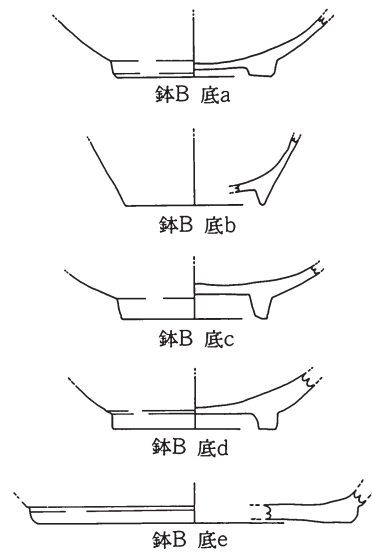


Fig.111 鉢B底部形態分類図

鍋

行平鍋又は鍋と考えられる出土遺物は本廃棄土坑から4点、遺跡全体を含めると口縁部6点、底部が2点が存在する。口縁部破片のものには全て飛鉋が胴部上位に確認できる。多くは鉄泥を塗布した後に飛鉋を施しているが、土鍋と考えられる1点（II-809）は露胎部分に直接飛鉋を施している。何れも受け部が存在し、露胎するものであることから、（II-222～224）の様な飛鉋を施し鐔状の口縁を持った蓋がセットに成ると思われる。注口部分が残存する1点（II-661）は口縁部下に内面より穿孔し筒形の注口部が付くものである。形態的には受け部内側の変換点が湾曲するものが1

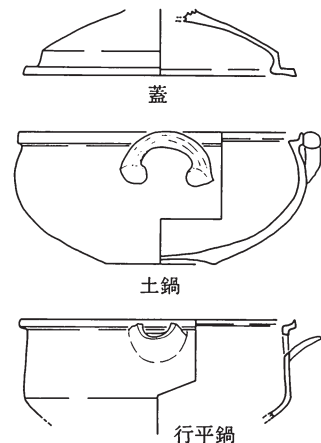


Fig.112 鍋類形態分類図

点（II-291）存在する。法量的にもこの1例がやや小振りであり、黄白色～灰褐色の胎土を有している。これらの製品は19世紀代に各地で生産されたものであり、在地諸窯でも製作されたものと考えられる。

瓶

本土坑で瓶類として取り上げたものの中には徳利・爛徳利・油壺などに分類できるものが存在する。徳利は5例存在し、口縁部端反りの辣蕪形を呈するもの（II-292）、口縁部小玉縁状を呈するもの（II-294）がある。また、瀬戸・美濃産の灰釉徳利（II-297）があり、これには「西」又は「酉」の釘書が胴部中位に施されている。産地では肥前産3点、瀬戸・美濃産1点、能茶山産1

点である。爛徳利は5点存在し、口縁部鳶口形を呈するもの（II-295）が見られ比較的器壁が薄い。産地は関西系の灰白色の胎土を持つもの（II-295）、灰色の胎土を持つもの（II-301・302）、黄白色赤色粒を含む胎土を持つもの（II-299）が存在している。油壺として2点（II-293・296）存在しているが何れも関西系とされる灰色の胎土を持つ。

廃棄土坑以外での瓶類の出土点数は32点である。この中で徳利と考えられるものは16点である。逆蕪形を呈したものの6点、辣蕪形を呈したものの3点が存在しており、磁器胎土を持つ製品が多く、それらは主に肥前産である。爛徳利と考えられるもの5点が存在する。鉄釉又は灰釉を施した関西系の製品が見られ、信楽産の製品も存在する。油壺と考えられるもの2点が存在する。鉄釉系の釉薬を施した製品については徳利の可能性が高いが明確ではない。供伴遺物から時期の明らかなものは19世紀代のものであるが、18世紀以前のものとして2点（I-80）・（II-798）が存在している。容量は完形で出土したものが存在しないことから明確にし得ないが、口頸部と胴体部が法量と紋様により接合する可能性のある2組（II-748）と（II-856）、（II-747）と（II-720）を含めて5点については推定可能である。（II-292）は約850cc（4.7合）、（II-296）は約650cc（3.6合）、（II-297）は約1,930cc（10.7合）、接合する2組の内前者は約1,550cc（8.6合）、後者は約2,030cc（11.3合）である。産地では肥前産22例、関西系9例、能茶山産6例、瀬戸・美濃産2例、尾戸産1例、信楽産1例、備前？1例、肥前系1例が存在する。

土瓶・急須

本廃棄土坑からは土瓶と考えられるものが3点出土しているが、小籠遺跡全体では11点が出土している。器壁が薄く、形態的に小振りのものは急須の可能性も存在するが、これらの底部にも煤の付着が認められることから本報告書では土瓶と急須の区別を明確にし得ない。胴部が楕円形を呈して大きく張り出すもの（II-305）、又は算盤玉形に胴部が突出するもの（II-693・923）が存在するが、これらは法量的にやや大きなものである。口縁部内面に蓋の受け部が存在するもの（II-306・750・905・906）が存在し、これらは口径が9.0cmを割り込むものが多くやや小型のものである。器壁は1点（II-923）を除き概ね薄く仕上げられている。軟質陶器の製品が3点（II-30・305・924）存在し、内1点（II-307）には胎土中に雲母片が多く見られる。陶器製品8点の胎土は様々で関西系とされる灰色系のものが3点、能茶山産と思われる暗灰色と赤褐色を呈するものが2点、尾戸系と考えられるものが1点あり、信楽産と考えられるもの1点（II-905）も存在する。

甕・壺類

甕・壺類に関しては本文中で記載した様に口縁部の形態によりa.口縁部が内外面に大きく肥厚するもの、b.口縁部が内面に肥厚するもの、c.口縁部が外面に肥厚するもの、の大きく分けて3つに分類が可能である。本廃棄土坑出土の個体数は7点で在るが、小籠遺跡全体からは21点の主に貯蔵具と考えられる甕が存在している。これらは先述の分類に従って以下のように分けることが可能である。

a類：口縁部が内外面への肥厚するもの。（この中で内外面に肥厚する割合に差が認められ、a-

0 類：同程度である。a - 1 類：内面側が大きい。a - 2 類：外面側が大きい。）が存在する。

b 類：内面に肥厚するもの。

c 類：外面に肥厚するもの。（この中で、

c - 0 類：端部が面を成すもの。c - 1

類：外反するもの。c - 2 類：玉縁を成すもの。）が存在する。

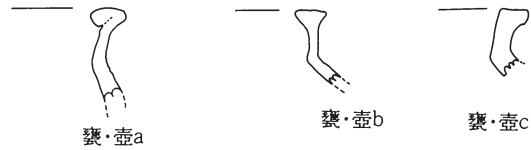


Fig.113 甕・壺口縁部形態分類図

口縁部形態 a - 0 類に該当するものは、成形段階で粘土帯を内側へ折り返すことにより肥厚しており、1 点を除き関西系とされる灰色の胎土を持つことで共通する。同じく関西系の胎土とされる白色系統のものは口縁部形態 a - 1 類に含まれるものが多い。口縁部形態 a - 2 類には口唇部が内傾する面を持つ。1 点が関西系の白色胎土を持つもので、他は肥前系である。口縁部形態 b 類は信楽産と考えられる。口縁部形態の c 類を持つものは関西系の灰色胎土を持つものが殆どで、内 1 点のみ能茶山産と考えられるが、これはやや小型の甕かと思われる。

火消し壺

火消し壺と考えられる製品は廃棄土坑内からは 1 点の出土であり、これを加えて小籠遺跡全体から形態が捉えられるものの出土は 2 点のみである。何れも土師質土器で、(II-867) は口縁部が短く垂直に立ち上がるものであり、(II-315) は口縁部に粘土紐を貼付する事で肥厚し玉縁状に仕上げている。

火器類

廃棄土坑内からは 5 点の焜炉の部位と考えられるものが出土しており、何れも土師質土器である。口縁部の形態を示すものは 2 点 (II-316・317) が存在し、角状の五徳が口縁部乃至は口縁下に貼付される。(II-316) は外面に酸化鉄を塗布し、口縁部を長方形? に切り取った窓部分を持つ。口縁部下位には円孔が見られる。(II-317) は二重構造を有する土風炉と考えられ、外面に横位のカキ目が施される。

小籠遺跡全体からは火器類が 13 点出土している。部位のみの出土であるため器形について明確にすることは難しいが、陶器の火鉢が 2 点、土師質の焜炉が 6 点、風炉が 3 点、瓦質の風炉が 1 点、七輪 1 点が存在する。この内陶器の 2 点は信楽産 (II-931) と関西系 (II-751) のものであり、獅子頭の把手が付く。焜炉としたものは外面に酸化鉄を塗布したものが 3 点見られ、磨き調整を留めるものが存在する。土師質の風炉とした (II-934) は足端部に陽刻が見られ、白色形の胎土と合わせて考えると涼炉の可能性がある。

焙烙

本廃棄土坑内には焙烙鍋として図示できるものは存在しない。小籠遺跡出土遺物の中で焙烙と考えられるものは 7 点である。出土は調査 II 区 4 点、V 区 3 点であり、土師質のものと瓦質のものが

存在する。口縁部の形態から大きく二種類に分けることが可能である。

a：口縁部に屈曲部分を有し、端部に向かって更に広がるもの。



b：口縁部に屈曲部分を有し、端部が立ち上がるもの。これらは更に口縁端部の仕上げ方法により2～3類に細分が可能である。0：端部を丸く仕上げるもの。1：端部が外傾する面を成すもの。2：端部に面取りを施し稜が形成されるもの。

Fig.114 焙烙口縁部形態分類図

土師質のものはb類又はa類でも屈曲の緩やかなものであり、端部を丸味を持って仕上げています。瓦質のものは全てb類に属する。これらの出土地点は共伴する遺物からは全て19世紀代のものと考えられる。

播鉢

小籠遺跡出土遺物の中で播鉢として図示し得たものは17点である。口縁部の形態によりa：口縁部が縁帯を成す、b：口縁部外面に突帯が付く、c：口縁部は肥厚するが明確な縁帯を形成しない、の3種類に分けることが可能であり、縁帯には2条から4条の凹線を施すものが存在する。口縁部内面は0：滑らかな面を成すもの、1：調整により断面蒲鉾型の突帯が形成されるもの、2：段部が形成されるもの、に分けられる。これを分類基準とすると形態的にはa－1類に相当するものが8点、a－2類に相当するものが5点、b－0類・c－2類が各1点である。摺目について見ると1単位が10条以上のものが9点、10条未満のものが8点存在しており、摺目を下から上に施したものが17点の内15点に達する。摺目がやや斜位に施されているものが3点存在するが、どれも1単位10条の摺目を持つものである。胎土に関して見てみると石英粒を含んだ橙色又は赤橙色のものがa類とした13例の中に9例存在し、底部が残存しているものについて焼台の跡は確認できていないが堺系の可能性がある。また、やや硬質に焼き締った2点（II－699）・（III－130）も堺系の可能性を持つ。（V－56）は縁帯の下部と口唇部に剝落部分が存在しており、重ね積みによる熔着痕と考えられ備前産か。c類とした1点（III－129）は灰色の胎土を持つ関西系のものである。時期としては堺系とされるものが口縁部内面に明瞭な突帯を持たず、下方へ推移して段部と成ったものであることから18世紀末から19世紀前半のものと考えられる。

かわらけ

土師質の小皿として図示できたものは小籠遺跡全体で44点である。この内口縁部に煤の付着が認められるもので、灯明皿と考えられるものは8点であった。口径と口縁部の形態によって次のように分類を試みた。口径7.0cmに満たないものについてはA類、この中で口縁部が外側に広がるものをA－1類とし、口縁部が内湾して上方に向かうものをA－2類とする。口径が7.0cm以上のものについてB類、この中で口縁部が外に広がるものをB－1類、口縁部が内湾するものをB－2類とする。A類に属する小皿には口径に対する底径の割合が0.5～0.9である。A－1類に於ける口径に

対する底径の割合は平均値は0.64となる。共伴する遺物から時期的な目安をつけた場合18世紀代に押さえられる遺物が多く存在する。A-2類の口径に対する底径の割合は平均値で0.72となる。共伴する遺物は19世紀代とされるものが多い。この類に含まれる特徴的な遺物としては器壁の薄く、焼成が良好な一群が見られる。B-1類とされるものは口径に対する底径の割合が平均で0.56である。共伴する遺物からは時期的な傾向を押さえることは出来ない。この中には白色系の胎土を持つ見込み陽刻のものが2点存在する。

(3) まとめ

前項で取り上げた廃棄土坑に於ける各器種ごとの組成はグラフ2に見る通りである。特徴的な器種の突出は見られず、供膳具に当たるものが7割を占めることから、一般的な居住者の在り様を示すものと考えられる。土坑出土遺物には二次的な被熱の痕跡は留めないことから、火災による片付けとは考えられない。継続的な廃棄又は移転等に伴う一括廃棄であろうか。出土遺物の生産時期は既に見てきたように18世紀代から19世紀のものである。器種別で最大を占める碗類はグラフ3に見る通り形態的な分類組成では、広東形と端反り形（分類上では碗c類と碗a類）が多くを存在している。このことから、居住者に於ける生活の時間的な主体はこの時期にあると考えられる。肥前では広東茶碗の生産が1780年代～1810年代とされており、廃棄土坑出土遺物中には波佐見製品が1点存在するものの多くは能茶山の製品である。能茶山に於ける陶磁器の焼成が1820年（文政3年）からとされていることから、この廃棄土坑が継続的な廃棄によるとするならば19世紀前半代からの使用が考えられる。これは広東形碗の産地組成の中で能茶山・肥前系製品に継いで多い瀬戸・美濃産の陶器染付3点が19世紀第2四半期の製品であることとも符合する。継続的な廃棄の最終年代又は一括廃棄の時期は、コバルトによる染付や小盃に於ける色絵の上絵付が存在するが、銅板転写や近代の型紙刷りによる製品が見られないことから、19世紀後半か、明治時代初頭を考える。

江戸時代後期の遺物を多く含むこの廃棄土坑では出土遺物の産地組成は表1の様に成る。ここには出土は確認されているが時期的に明確でないものや関西系の様に大きく括られるようなものについては表に記すことを控えた。これらは時期的に明確な供伴遺物から概ね3期とされる18世紀末から19世紀の製品と判断される。出土遺物の中で能茶山の製品が占める割合は50.0%（以下肥前産13.7%、肥前系8.4%、瀬戸・美濃産6.8%、尾戸5.0%など）である。先述の様に碗と蓋皿は概ね広東形・丸形（碗c類・蓋皿b-1類）の後に端反形（碗a類・蓋皿a類）が流通すると考えられる。それらの産地についても肥前産から肥前産と能茶山産、そして瀬戸・美濃産と能茶山産への変化が見られるのではなかろうか。これは、蓋皿b-1類では紋様に規制を持たせたような口縁部内面の二重圈線を施す画一性が認められ、蓋皿a類では多様な施紋を行っていることと強ち無関係ではないように思われる。つまり、能茶山を含む各地方窯は肥前製品等当時流通の中心にあった製品を模倣することで市場に参入したのではないか。また、その後は各地方窯独自の製品を造り出すか、又は次の段階で組成の中で台頭してくる瀬戸・美濃製品（ここでは磁器製品）に追従すると考えられる。

18世紀に全国的に流通した肥前産の陶磁器中でも雑器は一般庶民に購買層を拡げている。小籠遺跡出土遺物における内野山窯や波佐見製品はそれに呼応するものであるだろう。これは生産地と巨大消費地を結ぶといった一元的な流通網ではなく、全国的な枠で捉えられる流通形態が既に完成され

ていたことを示すものであろう。廃棄土坑出土遺物中の供膳具に能茶山の磁器製品が多く含まれているということは、18世紀の末から19世紀に掛けての各地方窯の成立に於てこの一般購買層の欲求が大きいと考えられる。また、流通面での機能の充実は、小籠遺跡出土遺物に於ける瀬戸・美濃製品の増加傾向と近代に於いて各藩の保護を失った地方窯が廃窯となった事実裏付けられるのではないだろうか。

参考文献

- 大橋康二『肥前陶磁』ニュー・サイエンス社 1993年
- 大橋康二『古伊万里の紋様』理工学社 1994年
- 大橋康二「近世における肥前陶磁の流通」『国立歴史民族博物館 研究報告 第46集』 1992年
- 大橋康二「肥前陶磁の流れ」『季刊 考古学 13号 (江戸時代を掘る)』 雄山閣
- 棚木 真「第4節 内藤町遺跡における廃棄の考察」『内藤町遺跡』 新宿区内藤町遺跡調査会 1992年
- 白神典之「第5章 堺播鉢について」『境環濠都市遺跡(SKT79)発掘調査報告』 堺市文化財調査報告書37集 1988年
- 富永健一『近代化の理論』 講談社学術文庫 1996年
- 中野泰裕「江戸時代の瀬戸窯と京焼風陶器」『研究紀要 6』 愛知県陶磁資料館 1987年
- 長佐古真也「近世江戸市場の動向と窯業生産への影響」『東京大学本郷構内の遺跡 法学部4号館・文学部3号館 建設地遺跡』 東京大学遺跡調査室 1990年
- 長佐古真也「受付灯明皿にみる生産と流通 ―受皿の形式分類と量的把握を通して―」『研究紀要 7』 東京都埋蔵文化財センター 1993年
- 西田宏子・大橋康二『別冊太陽 古伊万里』平凡社 1988年
- 服部 郁「近世瀬戸窯における磁器生産の開始と展開」『研究紀要 第2輯』 (財)瀬戸市埋蔵文化財センター 1994年
- 林玲子・大石慎三郎『流通列島の誕生』 講談社現代新書 1995年
- 藤本史子「第3章 伊丹郷町における出土陶磁器の様相」『有岡城跡・伊丹郷町 I』 大手前女子学園有岡城跡調査委員会 1987年
- 榊渕規彰「近世陶磁器考 近世陶磁器研究の現状と今後の方向性」『考古学資料館紀要 第6輯』 國學院大學考古学資料館 1990年
- 丸山和雄『土佐の陶磁』(陶磁選書-2) 雄山閣 1973年
- 『多摩ニュータウン遺跡 昭和60年度 第5分冊』 (財)東京都埋蔵文化財センター 1987年
- 『白鷗遺跡』都立学校遺跡調査会 1990年
- 『京町遺跡 3』 (財)北九州市教育文化財団 1994年
- 『府内三の丸遺跡』 大分県教育委員会 1995年
- 『名古屋城三の丸遺跡(IV)』 (財)愛知県埋蔵文化財センター 1993年
- 『東京大学本郷構内遺跡 理学部7号館地点』 東京大学遺跡調査室 1989年
- 『旧芝離宮庭園』 旧芝離宮庭園調査団 1988年

4 出土古銭について

—中世末から近世を中心に—

泉 幸代

(1) はじめに

県内における出土銭は近年増加しており、去年海底遺跡として新遺跡に追加された土佐清水市の遺跡から多量の古銭が発見されたり、1995～6年発掘したあけぼの道路関連の陣山・陣山北遺跡、山田三ツ又遺跡の他、窪川米奥遺跡などからも出土銭が確認されている。県内の中世における出土銭は壺や甕の中に埋蔵された古銭が多い⁽¹⁾が、中・近世の城跡（岡豊城・芳原城・高知城・姫野々城・中村城・扇城など）からは埋土中や土坑より出土している。この他、報告書の刊行されている田村遺跡群、五藤家屋敷、具同中山遺跡群などでも出土銭は確認されているが、筆者の調べたい土壙からの出土数は少ない（田村遺跡群の一部を除く）。小籠遺跡では1994～5年の発掘調査において多数の古銭が確認され、遺構からの出土枚数も多く、近世古銭の細分類を始めることができた。

(2) 小籠遺跡出土の古銭

本遺跡から出土した古銭は1994年度調査したⅠ区⁽²⁾より11枚、Ⅱ区⁽³⁾より6枚、Ⅲ区より10枚、1995年度調査のⅣ区より3枚、Ⅴ区より3枚の合計33枚である。そのうち、29枚が銅銭（うち1枚は雁首銭）で、残りの4枚は鉄銭である。銅銭は寛永通寶が21枚と多く、宋銭や明銭など渡来銭は1枚ずつであり、付着したままのものや錆がひどくて判定できない銅銭もある。鉄銭も錆がひどいが材質や銭貨の組み合わせから寛永通寶といえる。寛永通寶は江戸時代の代表的な銭貨で寛永3年（1626年）～明治2年（1869年）まで約240年間にわたって各地で鑄造されている。寛永3年に鑄造された古寛永通寶は水戸二水永銭と呼ばれているもので、「永」の字が二水永になっている。これは公鑄銭ではなく広範囲には流通しなかったもので、実質的には寛永13年（1636年）から鑄造の古寛永通寶（以下古寛永という）が高知県での出土銭と考えられる。古寛永鑄造後の1668年には裏面に「文」の文字がある文銭が鑄造され、それ以降鑄造された寛永銭は新寛永通寶（以下新寛永という）と称している。古・新寛永の種類は材質や大きさ、字体の特徴などにより数百種類以上に分類できるようである。寛永通寶の分類としては小籠遺跡Ⅰ⁽⁴⁾とほぼ同様に大きく3期に分けた後、字体の特徴から細分していくこととする⁽⁵⁾。Ⅰ期は古寛永（1636～1659年）で、すべて「寛」の字の12画と13画の頭が接しており、「通」の始字が「コ」状（以下「コ」頭通という）で、「寶」の末字が「ス」状（以下「ス」貝寶という）である。Ⅱ期は文銭（1668～1683年）で、背面上「文」が殆どだが、島屋文銭の中には無背もあるらしい。Ⅲ期は新寛永（1697年以降）で、「マ」頭通と「コ」頭通があり、「寛」の足部分が離れているものと「ハ」貝寶が殆どである。また、無背と背上文字があり、輪に刻印のあるものもⅢ期には見られる⁽⁶⁾。なお、寛永通寶には一文銭（銅銭、鉄銭など）と四文銭（真鍮銭と鉄銭の波銭）があるが、本遺跡の出土銭はすべて一文銭である。

Ⅰ・Ⅱ区については既に報告書が刊行されているので詳細は省き、Ⅲ区以降について述べることにする。しかし、古寛永については細分類をしていなかったもので、付加して訂正する。

① III区（1994年度発掘）

調査区中央部のSK26から9枚、包含層から1枚出土している。SK26からの古銭は9枚付着したまま出土しており、剥がしてみると大きく3枚ずつに分かれ、3枚ずつの銅銭の間に鉄銭3枚がサンドイッチ状に付着していた。鉄銭は錆がひどく、1枚ずつに分けられず字体の判定もできなかったが、銅銭は1枚ずつに剥がすことができ、はっきり寛永通寶と判定できるものが5枚（a・b・c・d・e）、字体の一部や組み合わせから寛永通寶と考えられる銅銭1枚（f）確認できた。付着の順番はa→b→c→鉄銭→d→e→fで、aの裏面とfの表面が9枚付着の両端になっていた。

aはIII期の「コ」頭通・「ハ」貝寶・無背で、字体の特徴から判断すると、「永」の字が横に広い従来1708年（宝永5年）初鑄造とされていた四ツ宝銭⁷⁾である。bは「ス」貝寶・「コ」頭通・無背のI期で、1637年（寛永14年）初鑄造の岡山銭である。cはIII期の「コ」頭通・「ハ」貝寶・無背で、従来1716年頃（享保期）初鑄造の猿江銭（正字）とされてきた古銭である。この隣に鉄銭が付着しており、もう一方の鉄銭の隣（d）はI期で、1656年（明暦2年）初鑄造の駿河沓谷銭である。eはIII期の「ハ」貝寶・無背で、「通」の字体は不明だが、「永」の特徴から四ツ宝銭と考えられる。四ツ宝銭にも幾つか種類があるようで（a）とは少し違うタイプである。dとeの付着は強く密着していたためか剥がすのに時間がかかり、しかも銀色に発色していた。また、fは表面が端にあったため錆化しており判読が難しいが、「寛」と「寶」の一部が見えるので、組み合わせからも寛永通寶の可能性が高い。cとdの間に挟まれていた鉄銭は錆化のため拓影不可で1枚ずつに剥がすこともできなかったが、銭貨の材質と組み合わせから1739年（元文4年）初鑄造の新寛永と考えられる。この土坑からは埋土中より完形の土師質土器小皿や陶磁器碗、瓶、香炉、砥石や硯など多量の遺物が出土している。これら出土遺物の年代も18世紀に該当するものが多く、鉄銭の鑄造と同時期にあたることから18世紀に営まれた土坑と考えられる。

その他III区で出土した古銭は包含層からの寛永通寶1点（g）である。gは錆化が激しく厚さ1.3mmと薄く、脆い。しかし、錆化のため欠損している銭外径が25mm以上と想定でき、拓影ではわかりにくいですが字体は肉眼で判定することができた。「通」の9画めがかなり下がっていることや大きさなどから、III期の「マ」頭通・「ハ」貝寶・無背で、1726年（享保11年）初鑄造の京都七条・不旧手銭と考えられる。

② IV区（1995年度発掘）

調査区の東側は1994年度に発掘したが出土銭はなく、1995年度調査の西側、SK20から3枚付着のまま出土している。3枚共に錆がひどく剥がすことができなかったが、銅銭2枚と鉄銭1枚に見分けることができた。銅銭2枚のうち1枚は字体からIII期の新寛永（初鑄年1697年以降）と想定できるが、もう1枚は3枚付着の真中なので不明である。鉄銭1枚も錆がひどく字体ははっきりしないが新寛永と考えられ、鉄銭には僅かだが木片も付着していた。この土坑は木棺墓であり、出土した古銭は六道銭と呼ばれる副葬品で、瀬戸・美濃系の鉄釉茶碗と共に土壌の北側で出土している。また、SK20は歯も出土しており、鉄銭鑄造後の1739年以降の墓坑といえる。

③ V区（1995年度発掘）

2基の土坑（SK10・13）と包含層より1枚ずつ、計3枚出土している。SK10からは銅製の雁首

銭（近世）が出土している。これは煙管の雁首を潰して平らにすると銭らしくなるので、通用銭にはならないが銭不足のため造られたものと考えられる。SK13から出土した銅銭1枚は直径2.4cmの古銭であるが、鋳がひどく脆いので採拓はできなかったが「寛」と「通」と「寶」の一部が確認できたことにより、寛永通寶と判断した。詳しい字体は判定できないが、文銭鑄造後の新寛永（1697年以降）である。また、包含層から出土した古銭（i）は半分近く欠損しているが、「寛」「通」「寶」の3文字が判読できる新寛永（「マ」頭通・「ハ」貝寶・無背）であり、「通」の字体の特徴からIII区の包含層（g）と同様、京都七条・不旧手銭と考えられる。

なお、VI・VII区では古銭の出土は確認されていない。

（3）悪銭・鏹銭

中世以降、貨幣経済の急速な発展によって銭貨の需要は大幅に拡大したが、その供給は渡来銭に頼っていたため、個々の銭の使用頻度が増し、磨滅や破損が生じた。これらのわれ（破）銭、かけ（欠）銭、ひび（罅）銭、すり（磨）銭、かたなし（無文）銭などが悪銭とされた。また、古銭（皇朝銭及び唐・宋・元銭）及び明銭は『良銭』・『精銭』と呼ばれていたのに対して、その他の銭貨特に私鑄銭は『悪銭』・『鏹銭』と言われ、減価された貨幣であった。これらを嫌い良貨を選ぶ、選り好み（撰銭）を禁止する条令も出された。しかし、慶長から元和期にかけても撰銭は続き、徳川幕府は新規に銅銭（慶長通宝・元和通宝）を鑄造し、通用させたけれども、一般化しなかった。そこで、寛永から寛文期にかけて寛永通寶が発行された。これは善銭としての永楽通宝の系列のものであり、新しい銅銭の大量供給によって、初めて貨幣流通が統一された⁸⁾。

① 鉄銭

元禄13（1700）年頃は金・銀だけでなく銅貨の質まで落とされ、その時造られた寛永通寶は鉛分が多く厚さも薄いので嫌われた。享保（1716年）から元文（1736年）にかけての鑄銭原料銅の不足は特に激しかったようである。そこで、元文4（1739）年には各銭座で初めて鉄銭が鑄造された。しかし、当時は鉄銭とはいわず、銑銭または鍋銭とよばれ、悪銭として嫌われていた⁹⁾。事実、鉄銭が六道銭として埋葬されると鋳がひどく字体は判定できなくなる。小籠遺跡全体の鉄銭出土はIII区の土坑（SK26）からの3枚とIV区の墓坑（SK20）からの1枚で、合計4枚とも字体の確認はできなかった。

② 雁首銭

雁首銭も悪銭の一種で、中世末から江戸時代初期に現れたものであり、初期の煙管雁首を打ち平めて銭貨の代用品にしたものといわれている。キセルの雁首火皿部を潰して平らにしたものだから一般的な流通銭ではないが銭らしく見える古銭なので、銭の穴にさし通し銭が散らばらないようにした縋などに差し、1文銭に混ぜて通用させたい。しかし雁首銭という名は当時の文献資料には使われておらず、古銭家の間に蒐集品として残されているようである¹⁰⁾。

雁首銭は県内の報告書では記載されていないが、筆者の知るところでは田村遺跡群より1点出土している。県外では北九州市の室町遺跡第2地点¹¹⁾、名古屋市の白川公園遺跡¹²⁾、東京都の山上会館・御殿下記念館地点¹³⁾などいくつかの遺跡から報告されている。

(4) 六道銭

① 小籠遺跡出土の六道銭

本遺跡の古銭は土坑からの出土が多く、I・II区の土坑から3基ずつ、III・IV区からは1基ずつ、V区は2基の土坑からの出土である。これらの土坑の多くは墓であることから、出土した遺物は副葬品となり、古銭は六道銭と考えられる。六道銭は中世から近世にかけての墓に多くみられ、仏教の思想に基づいたものと考えられており、葬式における六地藏の信仰と六文銭を死者に持たせることを勧めた人達がいたことなどによる。しかし、六文銭は三途の川の渡し賃であると全国的に説明がなされているのも納得できる事実である⁹⁰。

本遺跡の六道銭はI区の墓坑18基のうち3基より、II区は墓坑9基のうち3基より出土している。III区は12基の墓坑が確認されているが、出土銭のある土坑は墓坑とは確認されていない。IV区の近世墓坑は4基でそのうちの木棺墓1基からの出土である。V区は廃棄土坑2基からの出土であり、VI・VII区では皆無である。小籠遺跡全体では近世墓坑43基のうち7基より六道銭の出土があり、これは墓坑全体の約16%にあたる出土率である。本遺跡での人骨はI区のSK33と34の2基のみしか確認されておらず、歯と木棺と考えられる木片や釘などの出土がI区ではSK17・34、II区はSK65・87・88・93、IV区はSK20のみで、III・V・VI・VII区では確認されていない。このように本遺跡は墓坑の保存状態が悪く、中位より上部は後世の攪乱をかなり受けていると考えられ、副葬品も少ない。六道銭の枚数もI区(SK17-5枚・SK33-2枚・SK34-4枚)、II区(SK58-2枚・SK65-1枚・SK87-2枚)、IV区(SK20-3枚)で、7基の墓坑中1基も6枚セットは確認できなかった。

② 県内の六道銭

県内の刊行された報告書で、六道銭が出土したと考えられる遺跡は田村遺跡群⁹¹以外見つけることができなかった。田村遺跡群では多数の墓坑から、古銭(六道銭という記述はない)が出土している。高知空港拡張のため、面積が広いので調査区毎にまとめてみる。

Loc. 4(中世墓5基中1基より)SK4-渡来銭1枚、Loc. 10(中世の火葬墓1基のみ)SK49-渡来銭3枚、Loc. 12(近世墓16基中3基より)SK35-寛永銭3枚、SK36-寛永銭1枚、SK39-寛永銭6枚付着と歯他、Loc. 13(近世墓6基中3基より)SK26-古寛永1枚、SK27-寛永銭2枚、SK29-寛永銭3枚、Loc. 31・A(近世墓4基中2基より)SK1-寛永銭1枚、SK35-寛永銭、Loc. 31・B(近世木棺墓1基のみ)SK2-古寛永2枚と歯他、Loc. 39・A(近世墓25基中5基より)SK8-寛永銭1枚、SK63-寛永銭1枚と骨他、SK64-寛永銭3枚、SK65-寛永銭5枚、Loc. 39・C(近世墓21基中8基より)SK209-寛永銭1枚と頭蓋骨他、SK210-寛永銭2枚、SK213-寛永銭11枚と人骨他、SK214-寛永銭12枚と人骨他、SK219-寛永銭4枚、SK222-寛永銭5枚、SK223-寛永銭3枚、SK224-寛永銭11枚、Loc. 42(近世墓17基中10基より)SK17-寛永銭1枚、SK20-寛永銭1枚、SK21-寛永銭1枚と人骨他SK22-寛永銭3枚、SK27-寛永銭と人骨他、SK37-寛永銭1枚、SK62-寛永銭2枚、SK65-寛永銭と歯他、SK72-寛永銭、SK73-寛永銭

その他、中・近世墓で出土銭のなかった墓坑は66基である。このように田村遺跡群では多数の中・近世墓が発掘され、墓坑100基のうち出土銭のある土坑は34基にものぼり、枚数も95枚以上(枚

数の記述のない寛永銭は1枚と計算しているため)と考えられる。これは県内における墓坑のある遺跡では最も多い出土量である。

(5) まとめ

六道銭は葬儀の際に死者の頭陀袋(高知県ではサンヤ袋と言っている所が多い)に入れる六文の銭であり、県内各地(室戸岬町三津・本川村寺川・土佐市戸波・中村市敷地・土佐清水市松尾など)では現在も紙製の六文銭をサンヤ袋に入れている。また、土佐市高岡町ではツケ木で銭形の木片6枚を作ったり、馬路村馬路ではかじの木で銭(六文)を作り、皮で縄をない紐にして6枚を通したものをサンヤ袋に入れているようである。門口などに6本のロウソクを立てたり、六道を立てる行為をする所はある所とない所があるが、六道銭の埋葬は高知県全域に定着していたことが伺える。しかし、墓坑からの出土銭が少ないということは後世の攪乱を受けているだけでなく、寛保2(1742)年に出された六道銭の禁止令から木製や紙製に変わってきたり、枚数も少なくなってきたのではないかとすることが次のことから考えられる。葉山村舞の川では3文銭をさんや袋に入れているが、春野町弘岡下では身内の爪をあの世の銭になるといって多くの人に爪を切ってもらい、頭陀袋に入れるようである⁹⁹。

小籠遺跡出土の六道銭は1つの墓坑より1～5枚だが、田村遺跡群では11～12枚と多い墓坑もある。6～12枚出土した墓坑からは人骨や歯が確認され、残存状態は極めてよい。本遺跡では六道銭の完全セット(6枚)は1基もなかったのに対して、田村遺跡群では2基の墓坑から出土している。これは六道銭の禁止令が出る前の墓坑とも考えられるが、歯や人骨などが多数認められたことにも関係があり、本遺跡より保存状態がよいといえる。日本全国でも、六道銭の枚数が6枚から十数枚と多い墓坑は人骨や歯の残存状態がよく、6枚の完全セットが多いようである¹⁰⁰。

墓坑における本遺跡全体での銭貨の組み合わせとしては、渡来銭のみ(古寛永以前17世紀前半)をI類、渡来銭と寛永銭(17世紀後半)をII類、寛永銭のみをIII類、その他の組み合わせをIV類としてみた場合、I・II類は2基、III類は4基、IV類は1基である。III類の組み合わせが多く、小籠遺跡は17～18世紀代の近世墓群であるといえる。田村遺跡群でもI類は2基であるが、III類は30基と圧倒的に多く、新寛永通寶が多いことから17世紀末から18世紀末までの近世墓群を形成しているといえる。

今回(III～V区)の特徴としては、雁首銭と不明以外は寛永通寶のみの出土であったことが挙げられる。古寛永は2枚、文銭はなく、新寛永は12枚(鉄銭4枚を含む)で、無背・「コ」頭通・

「ハ」貝寶が多かったことである。本遺跡全体では渡来銭が2枚(治平元寶・永樂通寶)、古寛永が4枚(沓谷銭I区g・III区d、松本銭II区e、岡山銭III区b)、背文字(文銭のみ)が4枚、新寛永が18枚(鉄銭4枚を含む)、雁首銭が1枚と分類できた。新寛永は京都七条の不旧手銭(I区c、II区c、III区g、V区i)が一番多く、進永・退永・退永小通(II区c)の3種類があり、次に多かった四ツ宝銭や猿江銭(四ツ宝銭の分類に入るという説あり)にも種類分けができるようである。

以上述べてきたように、寛永通寶には金、銀、銅、鉄、真鍮銭などがあり、神棚に奉る宮銭、神銭と言われる寛永銭を型どったものの他、寛永銭そのものに刻印、毛彫、模様、メッキなどさまざまな加工を施したものも見られ、円点や鋳だまり、背面の文字のあるものなど細分すると千種類以上とも言われるくらい多い。これらの分類のポイントの1つとして書風が挙げられる。「寛・寶」

の末字の接し方、「永」の字体、「通」のしんにゅうの書き方の違いを見極める。分類の2つめとしてはノギス計測による直径と内径の差に注目する方法がある。3つめは、贋造銭に注意することである。母銭と通用銭以外の贋造銭は新寛永だけでなく、古寛永にも見られる¹⁶⁾。こうした微妙な書体差、大きさや材質などの特徴を手がかりに分析すると初鑄年代がわかるものもあり、紀年銘資料と同様に相伴遺物の破棄された上限を暦年代で示す資料として重要である。しかし、鑄造地や鑄造年不明の新寛永も多く、四ツ宝銭・猿江銭・不旧手銭などの初鑄年が元禄期になるという説もあり、今後の検討を要する¹⁷⁾。

最近の発掘ではあけぼの道路関連の山田三ツ又遺跡の墓坑1基より5枚の六道銭が出土し、窪川米奥遺跡¹⁸⁾でも試掘だが墓坑5基が確認され、そのうちの2基より出土銭(寛永銭5枚と2枚)が認められている。それらは古寛永3枚、文銭1枚、新寛永2枚、付着のため不明1枚であり、古寛永は本遺跡から出土しなかった鳥越銭(「コ」頭通の部分が潰れて「二」の字に見えるもの)や竹田銭が出土している。県内の六道銭はこのように増加しているが、県外の例に比べるとまだ少ない。

小籠遺跡は雁首銭の記載や寛永銭の細分類など、県内の出土銭の研究にとって礎盤となる貴重な資料を提示することができた。今後の研究に期待したい。

(註)

- 1) 岡本健児「古銭埋蔵地」『高知県の考古学』吉川弘文館 昭和41年
- 2) 出原恵三・泉幸代・藤方正治『小籠遺跡 I』高知県教育委員会 1995年
- 3) 出原恵三・泉幸代・浜田恵子・藤方正治『小籠遺跡 II』高知県教育委員会 1996年
- 4) 泉幸代「小籠遺跡出土の六道銭について」『小籠遺跡 I』高知県教育委員会 1995年
- 5) 古銭の判定は『日本貨幣カタログ1994』日本貨幣商協同組合、「寛永通寶あら? カルト」季刊『方泉處』1993年、日本の貨幣 1988年を参考にさせていただいた。
- 6) 永井久美男『日本出土銭総覧』兵庫県埋蔵銭調査会 1996年
- 7) 四ツ宝銭、猿江銭、不旧手銭の初鑄年代については「再検討を必要とする江戸時代銭貨の研究」『牟邪志』武蔵考古学研究会 1992年で惟村忠志・増尾富房氏が述べているため、再検討の必要がある。
- 8) 作道洋太郎『近世日本貨幣史』弘文堂 昭和33年
- 9) 瀬戸浩平『古銭、その鑑賞と収集』読売新聞社
- 10) 滝沢武雄「雁首銭」『国史大辞典 第3巻』吉川弘文館 1993年
- 11) 前田・木太・岩崎・波多野「室町遺跡第2地点」北九州市教育文化事業団 1995年
- 12) 『中区栄二丁目白川公園所在白川公園遺跡発掘調査概要報告書』名古屋市教育委員会 1986年
- 13) 『山上会館・御殿下記念館地点』「第2分冊御殿下記念館地点の調査」東京大学埋蔵文化財調査室 1990年
- 14) 伊阪康二「六文銭考」『出土銭貨』第4号 出土銭貨研究会 1995年
- 15) 森田尚宏・出原恵三・廣田佳久・松田直則・下村公彦他『田村遺跡群』第6～15分冊 高知県教育委員会 1986年
- 16) 「葬送習俗調査資料集」『死と再生の文化 展示解説資料集』高知県立歴史民族資料集 1995年
- 17) 鈴木公雄「出土六道銭の枚数と墓の保存状態」『考古学の世界』新人物往来社 1989年
- 18) 「寛永通寶あら? カルト」季刊『方泉處』1993年

19) (7) に同じ

20) 藤方正治・山本純代『窪川町米奥試掘調査概要報告書』 財高知県文化財団 埋蔵文化財センター 1997年

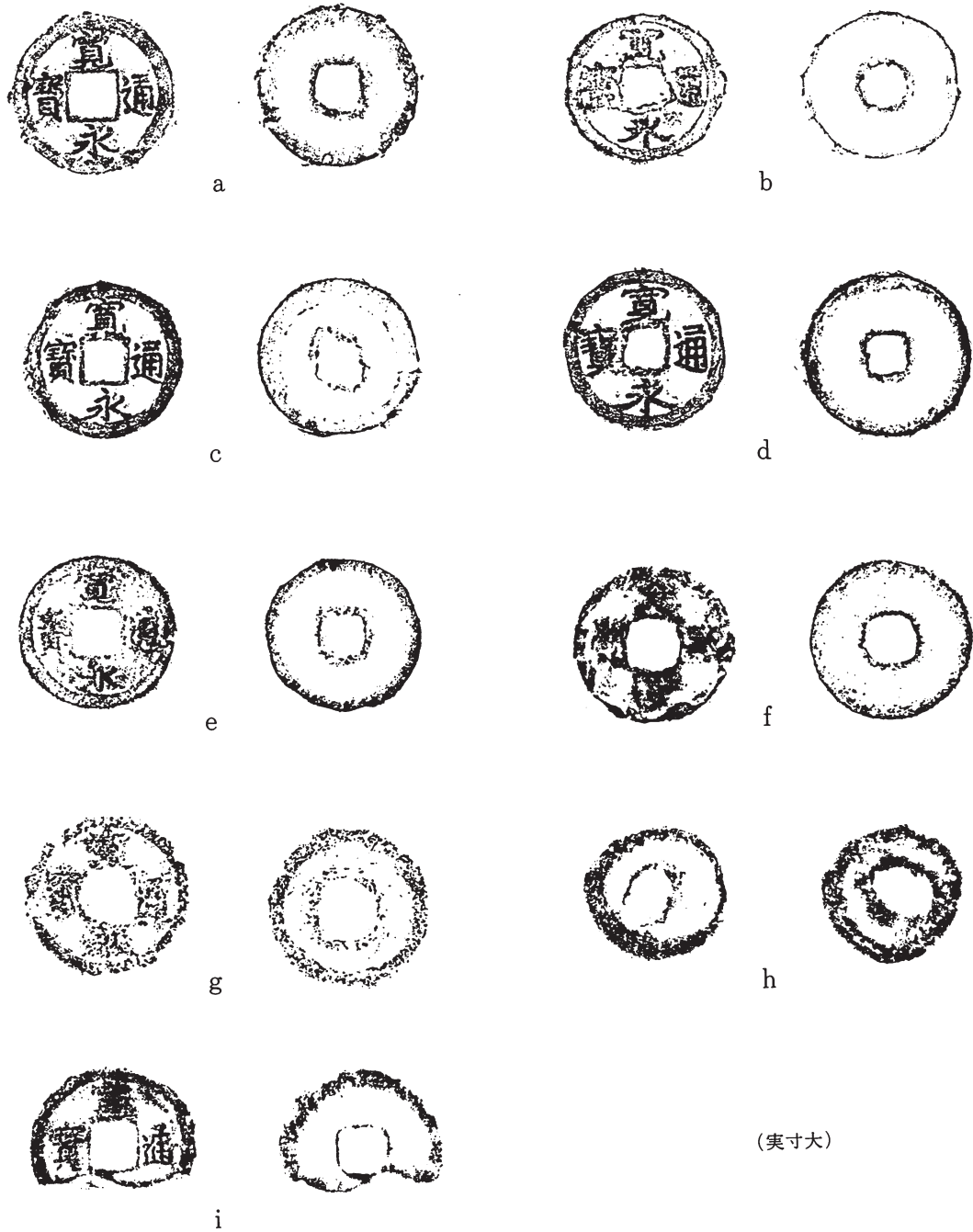


Fig.115 Ⅲ区SK26(a・b・c・d・e・f)、包含層(g)
Ⅴ区SK10(h)、包含層(i)出土の古銭

小籠遺跡Ⅲ～Ⅴ区出土銭計測表

Fig. No.	記号	出土 地点	銭 種	初 鑄 (年)		法 量 (cm)		重量 (g)	特 徴・備 考
				年代	西暦	外径	穿径		
1	a	Ⅲ区 SK26	寛永通寶 (銅銭)	宝永 5	1708	2.21	0.62	2.8	新寛永・四ツ宝銭(広永)。 「コ」頭通・「ハ」貝寶・無背
2	b	〃	〃	寛永14	1637	2.23	0.55	2.9	古寛永・岡山銭。 「コ」頭通・「ス」貝寶・無背
3	c	〃	〃	享保期	1716 前後	2.22	0.54	2.9	新寛永・猿江銭(正字)。 「コ」頭通・「ハ」貝寶・無背。 鉄銭の破片が少し付着。
4	採拓 不能	〃	〃 (鉄銭)	元文 4	1739	測定 不能	測定 不能	3 枚で 3.4	新寛永・鑑銭。 「貝」貝寶で、「コ」頭通・無 背の可能性あり。 鉄銭 3 枚は剥がれず、重量は付 着のまま測定。
5	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
6	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
7	d	〃	〃 (銅銭)	明暦 2	1656	2.42	0.56	3.2	古寛永・沓谷銭。 「コ」頭通・「ス」貝寶・無背
8	e	〃	〃	元文 4	1739	3.3	0.49	3.4	新寛永・輪十後打銭の書風に 近い。「コ」頭通・無背
9	f	〃	〃	元禄10	1697	2.37	0.58	2.6	錆のため、字体がはっきりしない。
10	g	〃 包含層	寛永通寶 (銅銭)	享保11	1726	2.49	0.83	1.2	新寛永・京都七条・不旧手銭(退 永)。「マ」頭通・「ハ」貝寶 ・無背。錆がひどく、厚さ1.3mm と薄く、脆い。
11	採拓 不能	Ⅳ区 SK20	〃	元禄10	1697	2.38	0.54	3 枚で 3.3	錆のため、拓影は不可だが字体 は新寛永
12	〃	〃	〃 (鉄銭)	元文 4	1739	測定 不能	測定 不能		新寛永・鑑銭
13	〃	〃	不明 (銅銭)	不明	不明	〃	〃		錆のため、判読不可
14	h	Ⅴ区 SK10	雁首銭 (銅製)	近世	不明	長2.08 短2.02	長0.89 短0.58	1.7	悪銭
15	採拓 不能	〃 SK13	寛永通寶 (銅銭)	元禄10	1697	2.4	測定 不能	測定 不能	新寛永
16	i	〃 包含層	〃	享保11	1726	2.4	0.38	残存 1.5	新寛永・京都七条・不旧手銭。 「マ」頭通・「ハ」貝寶・無背。 1/3欠損。

5 小籠遺跡、近世村落の景観復原

浜田 恵子

(1) はじめに

平成6年度から7年度にかけて行われた小籠遺跡の調査では、Ⅰ～Ⅴ区より近世の遺構群が検出された。該当区は調査面積14161㎡、全長約470mにわたる膨大な調査区間であり、ほぼ全域において溝・土坑を始めとする近世の遺構群が認められている。

近世において当遺跡は「小籠村」に属している。小籠村の成立過程及び全体像については文献調査の節で詳述する様に、近世、村の境界内にはA集落：村の北側に位置し「大道」（当時の街道）沿いに屋敷地が並ぶ村の中心集落、B集落：村の東端に位置し坂折山の南裾に住居が点在する小集落、が存在したことが明らかとなっている。当調査区はこれら文献上に現れる各集落の外周に位置しており、文献上に記載のない空白域に該当する。調査区全体は南西から北東へ向かい470mにわたって帯状に延びているため、北端のⅤ区がA集落から南方170mの地点に、西端のⅡ区が村の西端部に位置することになる。この様に調査区は村の西端部から北東部へとほぼ村全体を斜めに横切るために、各区ごとの調査結果も又、村におけるそれぞれの位置関係を反映したものとなった。

本節では、各区の調査成果を元に、各々の遺構検出状況・分布状況・性格等を全体の中に位置付けながら、文献上に表れ得なかった近世村落の景観復原を試みる。又、各遺構の出現・廃絶時期を追ひ、近世中期から後期に至るまでの小籠村の景観の変遷を明らかにしようとするものである。

(2) 遺構の時期区分の設定

基本的には出土遺物の製作年代により遺構廃絶年代を推定する方法^(註1)を用いた。しかし、本調査区では遺構出土遺物が非常に少なく、この方法による時期比定が不可能な遺構が多数存在するため、切り合い関係や形態（ハンダ土坑等）、軸方向からも大まかな時代枠を捉えている。この方法により時期比定された各遺構は、遺構の出現・廃絶に大きな変化の見られた17世紀代までをⅠ期、18世紀代をⅡ期、18世紀末から幕末期までをⅢ期として分類した。

なお、弥生終末期から古墳時代・古代・中世に至るまでの遺構を認めるⅡ区とは対照的に、Ⅰ・Ⅲ～Ⅴ区においては、Ⅳ区に弥生後期の遺構が僅かに存在する以外には中世に至るまで遺構が全く認められず、今回検出された17世紀代の遺構が遺構の初現となっている。

(3) 各期の遺構

ここでは以上の時期区分に従い、各期の廃絶遺構分布図を作成した。図では廃絶年代が明らかとなった遺構について色分けを行っているが、この他に軸方向に共通性が見られる遺構群や位置関係から大まかな年代軸が予想されるものも多い。

Ⅰ期の廃絶遺構と景観（17世紀）・・・〔畝状遺構・墓墳・溝・路跡〕（図A参照）

この時期に該当するものはⅤ－南区の畝状遺構とⅣ区の溝、Ⅰ～Ⅳ区の墓墳群の一部等である。

Ⅴ区畝条遺構は下層より17世紀代の輸入白磁皿1点が出土していること、溝・建物を始めとするⅡ期以降の遺構群と軸方向が異なること、Ⅱ期以降の溝によって切られていること等より、Ⅱ期遺構群が出現する以前のものと把握した。埋土は暗褐色粘質土で遺物は殆ど含まず、検出規模幅24～48cm深さ4.5～18cmの多条の溝が約1.5～1.8mの間隔を保ちながら並行して広がっているもので、

畝跡と予想される。これに類似した畝状遺構は他にIV区西部にも認められたが、時期比定に至る遺物が得られず、不明な点が多い。

他に、IV－西区において検出されたSD16（検出規模幅2.2～2.5m深さ30cm）は、肥前産溝縁皿をはじめとする17世紀前半の遺物が出土していること、II期以降の遺構群と異なる軸方向（N－18°－W）を示すこと等から17世紀前半から中葉頃に時期比定される。又、同じくIV－西区からSD16に並行する道跡（検出幅1.6m）が、IV－東区からSD4（検出規模幅1～1.2m深さ15cm）が検出されている。2遺構は共に遺物が得られていないが、SD16と同軸を示しておりほぼ同時期のものと予想される。

一方、IV－東区のSD6は17世紀前半の肥前産溝縁皿と17世紀後半の肥前産白磁小碗が出土しているが、II期以降の溝群とほぼ同軸を示しており、この軸方向をもつ遺構が17世紀後半頃よりすでに一部出現することを示唆している。

墓壇はI区北東部・IV－西区において17世紀代より一部認められ、IV区－西区のSK33から肥前産溝縁皿と古銭（銭種不明）が、SK34より17世紀末の寛永通宝が出土している。

以上のように17世紀代においては、各調査区に畝状遺構を含む耕作域と溝・路跡・墓壇等の遺構が認められるのみである。

II期の廃絶遺構と景観（18世紀）・・・〔掘立柱建物・土坑・墓壇・溝・井戸〕（図B参照）

II期に入ると廃絶遺構数が急激に増え、17世紀後半から18世紀にかけての期間に多くの遺構が構築されたことが推察される。

掘立柱建物跡で時期判定が可能であったものはV－北区のSB1～4である。これらは18世紀前半より遺構廃絶が為され始め後半まで順次立て替えが行われたもので、SB1・2は同時存在した可能性も僅かに含むが、SB2～3には切り合い関係が成立し、立て替えが行われたことを示している。建物は前半期のSB1・2から後半期のSB4・5へと移るに従い柱穴の掘り方が深いものへと変化し、建物の規模も大型化する傾向が見られる。建物跡はこの他III区・IV－東区にも認められるが、いずれも時期判定資料が得られず時期比定や建物の同時性を知ることは不可能であった。しかし、これらの建物は各区毎に一定の軸方向をもち、これに伴って土坑・ピット等の遺構群が建物周辺に出現し各区に遺構の集中域を形成し始める。

この様に、村の中心集落から離れた地点に位置する当調査区間においても、17世紀後半から18世紀以降掘立柱建物を中心とした新たな生活域が形成され始める。しかし、生活域とはいっても街道沿いのA集落とはその経済的性格^(註2)・分布傾向ともに大きく異なり、耕作地の間に掘立柱建物が点在する散村的景観が広がっていたものと思われる。

一方、17世紀よりI・IV区の一部において認められた墓壇は期に入りさらに検出数が増す。最も墓壇が集中して見られたのはI区の北東端であり、他にII区の南東端やIII区の中央にも墓壇群が認められている。形態・古銭の出土等を根拠に墓と確認されたものはI区22基、II区6基、III区4基、IV区4基、検出総数36基を数えるが、この他にも墓に関連すると思われる土坑が多く存在しており、墓壇の全実態数はさらに増えるものと思われる。墓形態では、平面プランが長方形を呈する箱形木棺墓、円形を呈する座棺墓、隅丸方形を呈するものの各者が存在しているが、全て土葬墓で

ある。これら墓壇群の分布傾向を概観すると、最も墓壇の集中するⅠ区においては若干の切り合いをもちながらも調査区北西端から南東へ向かい凡そ列状の秩序立った配列を示している。又これら墓群の分布域は調査区北端にかかっており、Ⅰ区の北方へさらに広がりを見せるものと予想される。又、Ⅰ区のような配列秩序や墓壇の集中性は認められないものの、Ⅱ～Ⅳ区においても僅かなまとまりを形成しながら墓壇群が分布する。これに対し、村の北寄りに位置するⅤ区においては墓壇が1基も認められていない。これらのことから、村の東端～南寄りに位置し街道沿いの中心的居住域から外れた当区間が村の墓域として利用されたものと推察される。墓域の存続期間に関しては、Ⅰ区の墓壇群が出土遺物により17世紀後半から18世紀の間に時期比定されており、遺物の得られていないⅡ・Ⅲ区も形態の類似性からⅠ区とほぼ同時期のものと予想される。この様に17世紀後半（末頃か）から18世紀にかけて一定期間継続して営まれた墓域であったものと捉えられるが、18世紀後半以降の遺物を伴う新たな墓壇の構築は認められていない。当該区間への新たな生活域の出現・拡大に伴い、18世紀後半～末頃には墓域の変更が為されたものと考えられる。

溝の廃絶が認められるのはⅤ－南区のSD 6・Ⅱ区のSD77・78である。この内、下層より18世紀末の遺物が出土したSD 6は下層の還元堆積層や規模より水路として把握できるもので、18世紀段階には当地域に灌漑用水が普及していたことが分かる。なお、18世紀末という時期比定については溝という遺構性格からも遺物のみによる時期比定は困難であり、溝の廃絶時期が19世紀以降に下る可能性を含んでいる。

Ⅲ期の廃絶遺構と景観（18世紀末～幕末）・・・〔掘立柱建物・土坑・溝・井戸〕（図C参照）

Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ区は掘立柱建物をはじめとする遺構群や包含層内に19世紀代の遺物を多く伴い、19世紀まで継続した生活域として捉えられる。このうち、掘立柱建物の時期比定が可能であったⅤ区においては、建物の規模がさらに規模の大きなものへと変化している。

これらⅢ期の建物跡に伴い、やはり多くの遺構が周辺に出現している。中でも18世紀末以降の景観において最も特徴的な遺構は、内面を厚さ3～5cmの黄色粘土で叩き固めた円形のハンダ（繁打）土坑である。これと形態的に類似するハンダを伴わない円形土坑は、Ⅲ期以前から先行して存在したことが切り合い関係や出土遺物より明らかとなっているが、Ⅲ期に入ると円形土坑がさらに貯水性に優れたハンダ土坑へと移行している。このハンダ土坑から肥前系丸形碗・広東形碗や端反形碗・在地の能茶山磁器等18後半～19世紀代の遺物が出土していることや文献上の記載^(註3)から、ここでは遺物の得られなかったものも含め当遺跡におけるハンダ土坑を全てⅢ期のものとして位置付けている。ハンダ土坑の検出数はⅠ区1基、Ⅱ区26基、Ⅲ区16基、Ⅳ区0基、Ⅴ区12基であり、19世紀まで生活域の展開するⅡ・Ⅲ・Ⅴ区に集中して出現する傾向が見られる。又、2基のハンダ土坑がセット関係で並んで検出される例も多く、全検出数55基中32基（16組）である。

ハンダ土坑と共に、井戸も又廃絶数が19世紀以降急増する。検出数はⅡ区11基、Ⅲ区5基、Ⅳ区1基であり、Ⅱ区に集中する傾向が見られる。Ⅱ区は西方近辺に湿地帯が存在し^(註4)遺構検出時には検出面下1.5～2m程掘り下げたところで湧水がっており、このような地質的条件も井戸集中の要因として考えられる。なお、これらの井戸は全て素掘りのものである。

この他この時期新たに出現する遺構として、大型の廃棄土坑が挙げられる。土坑内への小規模な

遺物廃棄は19世紀以前から継続して認められるが、19世紀以降はさらに大量の遺物を伴う大規模土坑が出現する。II区の廃棄土坑は屋敷地割と思われる浅い溝状区画（SD65～67）の北側に並行する溝状土坑であり、検出規模は幅約4m・確認長約18m・深さ1～1.2mを測る。ここからは大量の瓦片と近世陶磁器等の遺物が出土しており、一括廃棄された出土状況を呈している。^(註5)又、同じくII区の中央部においても径約3.3mの不整円形の大規模土坑が検出され、同様の遺物出土状況を呈する。この様に19世紀に入ると、個人の敷地内よりのものとは考え難い多量の遺物廃棄が認められ、複数家屋による廃棄が行われた可能性を含んでいる。

（4）II～III期に共通する遺構（溝状遺構の位置付け）

最後に、II～III期を通して存在したと考えられる溝遺構について触れておく。

近世溝の検出総数（畝状遺構は除く）47条の内、南北軸のものは34条東西軸のもの13条である。これらの溝遺構は検出規模が幅88～250cm深さ30～70cmの規模が大きいもの（IV区SD16・V区SD6）と、幅20～80cm深さ5～20cmの規模の小さいものに大別される。堆積状況では小規模溝は粘質土単純一層のものが殆どである。又、大規模溝ではSD6が下層に灰色還元層が認められた他は特に水路としての活動を示唆するものは認められなかった。この様に検出された溝は規模・堆積状況よりその用途を推測することは困難であり、各溝の性格については不明な点が多い。しかし位置関係からみて、多くは耕作に関連する小規模な引水溝や地境、屋敷地の地境等の性格を持つものと予想される。

ただ、これらの溝を現在の地割^(註6)に照合させると、多くの溝遺構が現在の地割・水路に対して1m程のずれをもちながらも位置・方向共にほぼ一致する。この内水路と一致するものはIII区-SD5・6、IV区-SD1・14、V区-SD6、地割に一致するものはI区-SD16・17・21・28、II区-SD55・56・61～68・72・74・76～78、III区-SD1、V区-SD1～5である。この一致数を各調査区間で対比すると、I・II・V区の検出溝の全てが現代地割に一致し、IV区は2条の水路以外は全て一致しない。またIII区では水路が2条、地割が1条一致する他は全て一致しない。このような各区分毎の相違は、I～III・V区では19世紀代の遺物が多く出土し19世紀まで生活域として活動した区間であったこと、一方IV区は遺物の多くは18世紀代までに留まりハンダ土坑も1基も出現していないこと等から18世紀代を中心とする生活域と考えられること、等とも関連する。現地割に一致する溝は多くが端反形碗や在地産の能茶山磁器（1820年以降）など19世紀代の遺物を含んでおり、以上のことから、19世紀以降まで存続した溝が現代の地割・水路に継続したものと考えられる。

溝の軸方向は、I区でN-19～20°-E・N-13～19°-E・N-68～72°-W、III区でN-24°-E・N-60°-W、IV区でN-24～26°-E、V区でN-34～35°-E・N-56～62°-Wを示しており、南北溝は北に移る程軸が東へずれる傾向が見られる。この軸方向は、掘立柱建物をはじめとするII期以降の多くの遺構にも共通して認められ、溝を軸とした秩序的な遺構分布を示している。この様に小籠遺跡においては、古代の条理制地割^(註7)に規定された香長平野上の他地域とは対照的に、水路を基本とした独自の軸をもつ村落景観が形成されている。

（５）景観変遷に見られる画期

以上、近世中期から後期にかけての小籠遺跡の遺構分布と遺構出現・廃絶状況を概観してきた。その結果、村落景観の大きな変換点はⅠ期とⅡ期の間（17世紀後葉）、Ⅱ期とⅢ期の間（19世紀初頭）に認められた。

Ⅰ期からⅡ期への景観変貌の背景として、寛永年間の土佐藩奉行職野中兼山による用水路造営事業が挙げられる。この大規模な土木工事は物部川の水を山田堰によって堰き止め兩岸に設けた数条の水路によって分水するものであり、山田堰の着工寛永16年（1639）完成寛文4年（1664）、西岸の長岡台地に関しては、中井川の完成寛永16年、続く上井川完成正保2年（1645）、舟入川完成万治1年（1658）とされている。このうち、中井川は香美郡楠目村井ノ口より導水し西に暖流して長岡郡西野地村を経た後舟入川に合流しており、その間数条の網目に分派し香美郡90町歩余、長岡郡344町歩余を灌漑している^(註8)。以後、長岡地区では中井川よりの引水が行われ、それに応じて引水・排水を目的とした大小の規模をもつ溝が台地上に縦横に配置されることとなる。この17世紀中葉に行われた用水路造営事業は、中世まで灌漑不可能とされ採草地・林地としての利用にとどまっていた長岡台地上の広大な地域を人工水路によって灌漑するというものであり、台地のもつ地理的制約を工学的な対応により克服するものであった。『土佐州郡志』^(註9)には、小籠村の東に隣接する西野地村に関する記載に「寛永中引物部川、漑此犁而成田畝、然後成此村。」とあり、寛永年間中（1624～1643）の物部川引水により長岡台地上の灌漑が進められ、その結果18世紀初頭頃までには新田開発村が新たに成立していることが窺われる。

一方、長岡台地の先端部に位置する小籠村周辺は古くより耕作地化が進められた地域であり、18世紀以降の新田の開発率は低かったことが文献上にも記されているが、当調査区においてもこの時期を境に明らかな土地利用の変化が現れる。すでに見てきたように、Ⅱ区を除いてⅠ・Ⅲ～Ⅳ区は古代から中世に至るまで生活の痕跡が全く認められない遺構分布上の空白域であり、16世紀末に至っても該当期の関連遺構は出現していない。又、17世紀に入っても、僅かな耕作跡・路跡・溝等が認められるのみであり、おそらく、街道を中心として栄えた近世小籠村集落の外周から村の外れに位置する耕作地あるいは未耕作地に相当していたものとみられる。しかし、17世紀後半～18世紀初頭の間には、それまで建物・土坑等生活に関連する遺構が全く認められなかったこの区間においても堀立柱建物を中心とする多くの遺構群が出現し、新たな生活域が展開し始めている。この遺構の急増と生活域の拡大は小籠遺跡のこれまでの歴史的経過の中でも最も大きく急激な変化といえ、17世紀後半から18世紀初頭を画期として、以後150年にわたる近世後期の村落景観が決定付けられる。

これに対し、19世紀よりの変化はハンダ土坑・井戸の急激な増加に見られるような遺構の質的变化といえる。貯水性に優れたハンダ技術の出現・井戸掘削技術の向上等の技術的革新が近世村落にまで急速に普及した結果、村落景観の変化をもたらしたものである。又、合わせて18世紀から引き続き遺構数の増加もみられている。

以上の様に、小籠遺跡における村落景観は、17世紀代の用水建設に代表される工学的な施設面での革新とそれに伴う生活域の拡大、19世紀以降の様々な技術革新によってもたらされた遺構の質的变化等を経て形成されてきたものといえる。近世後期までに形成された小籠村村落景観は現代にお

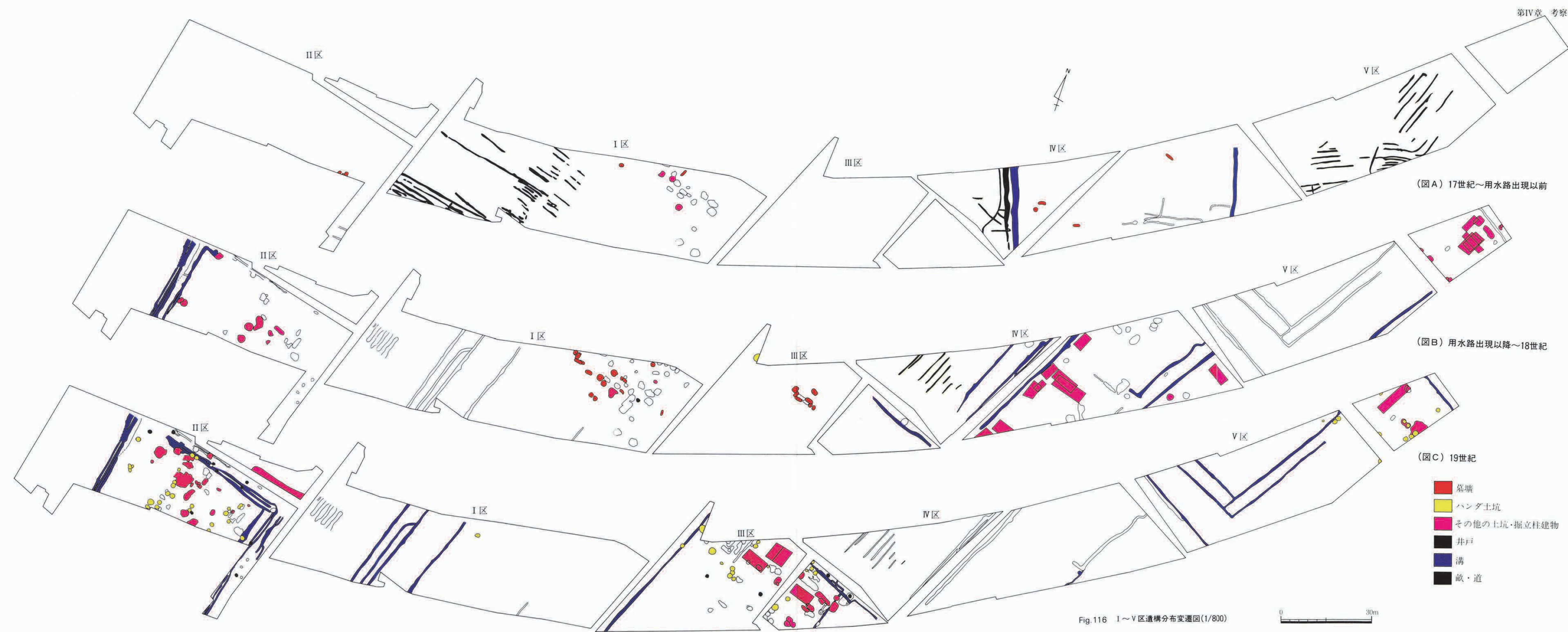


Fig.116 I～V区遺構分布変遷図(1/800)

0 30m

いても地割・用水路の位置と軸方向・道路の方向等に当時の名残を留めており、この近世後期に形成された地割が現在に至るまで引き継がれている。

(註)

- 1) ハンダ技術の起源を1899年とする『皆山集』の記載に対して、実際の遺物出土状況ではハンダ土坑より18世紀後半の遺物のみが出土する例が数例あった。中でも肥前産磁器や煙管等の搬入品遺物に生産地側の年代より廃棄実年代が遅れる傾向が多く見られる。このため今回出土遺物によってなされた推定年代は、生産地側の年代からの遅れ(半世紀以内とする)も見込み幅をもたせたものにしたい。
- 2) A集落に近接するV区では土坑からの瓦の集中廃棄が確認され、近辺に瓦葺建物が存在したことを示唆している。このことから、「大道」周辺には瓦葺建物に代表される比較的豊かな屋敷群が存在したものと考えられ、掘立柱建物に象徴される今次検出した生活域とは、経済的性格からも大きな違いが認められる。
- 3) ハンダ技術の起源に関して、『皆山集』に「はんだ井戸輪その外はんだの諸器寛政十一年己未江州より来りて揉貫井戸師より浦戸町角屋六平に傳法して作り始め今に至る」とある。
- 4) 行藤「文献調査からみた小籠遺跡—小籠村村落景観の復原」の図1・小籠地区周辺小字図によると、小字「シヲクサリ」の地点が該当する。
- 5) 藤方「小籠遺跡出土の近世陶磁器について」
- 6) 『南国市住宅地図1996年版』ゼンリン社編を参考とした。
- 7) 香長平野においては東へ約11°のずれを見せる古代条理が地割り・路等に現在まで多く存続している。
- 8) 『皆山集』・『高知県史要』による。地名は近世地名を用いている。
- 9) 『土佐州郡志・長岡郡巻ノ十四』。『土佐州郡志』は宝永4年から享保7年の間(1707~1722)に編纂されたものと推定されている。

参考文献

- 出原恵三「近世墓について」『小籠遺跡Ⅰ』高知県埋蔵文化財センター1995年
- 長佐古真也「農村—多摩ニュータウン遺跡—江戸近郊の村落」『季刊考古学53号』雄山閣出版1995年
- 松崎憲三「景観の民俗学—山麓村落の景観」『国立歴史民俗博物館研究報告第4集』国立歴史民俗博物館1984年
- 金田章裕『微地形と中世村落』吉川弘文館1993年
- 矢野城楼「近世の山田堰」『山田堰 物部川水利史』山田堰記録保存調査委員会1984年
- 横川末吉『野中兼山』吉川弘文館1962年
- 平尾道雄『長岡村史』長岡村史編纂委員会1955年
- 『南国市史』南国市教育委員会1982年
- 『南国の歴史』南国市教育委員会1989年

（２）中世の小籠村

中世の小籠村は江村郷に属す。江村郷は東隣の廿枝郷とともに長宗我部氏の本拠地となった地である。ここでは「地検帳」を用い、中世の小籠村について述べておきたい。

小籠村に属する小字として現在でも確認できるのは、「ハマタ」、「トライ」、「アライ」、「ウマツカ」である。その他には「小籠土ゐヤシキ」、「小籠北」などをみとめることができる^(註6)。この地には長宗我部氏の重臣吉田次郎左衛門と江村千松の本知、広井三郎右衛門や長宗我部氏の客人蜷川道標他の給地などが存在する。「小籠土ゐヤシキ」では「小籠土居」・永正寺^(註7)を含め28ヶ所の屋敷地を認めることができる。これに「小籠北」の6ヶ所と「掃部兵衛ヤシキ」の2ヶ所の屋敷地を加えると、小籠村には計36ヶ所の屋敷地が存在していたことがわかる。一方、近世に入り小籠村に吸収される「下崎村」についても見ておきたい。現在に対応する小字として「クニトウ」、「シラクサリ」、「下沢」がある。下崎村においては吉田・江村氏に加え、重臣久武内蔵助などの本知、広井三郎右衛門・蜷川道標他の給地、下崎寺領などがみえる。下崎村においては下崎寺を中心にして12ヶ所の屋敷地を確認することができる。これらの地域には中間・定尺といった武家奉公人や番匠・土器屋といった職人の給地も存在しており、領主の本拠地たるにふさわしい体制を整えた地域であったことがわかる。

「小籠土ゐヤシキ」を中心とした居住地は近世・近代を通じて小籠村の居住地の中心をなす。

（３）近世の小籠村

(1)小籠村村の景観

まずは図2をご覧ください。本図は『岡豊村史』に「藩政時代の小籠村」とある絵図である^(註8)。成立年代・作者いずれも不明であり、原本を確認しえなかったことから現段階ではその史料価値を高く置くことはできない。しかし、近世の小籠村を復原するにあたって数多くの手がかりを与えてくれる。まずは本図の検証から始めよう。まず方位であるが、本図中「大道」が北、「舟入川」が南となる。「大道」は現在の県道249号線で、藩政時代には城下から安芸へとぬける主要街道であった。「大道」沿いには布師田村石渕からの一里塚が存在した。「舟入川」は藩政初期、野中兼山によって万治3年（1660）に竣工された水路である。その名称・図中絵からも推察されるように、舟運にも利用される川であった。図中「熊野権現」は現在の熊野神社、「勢至観音」は下崎神社である^(註9)。また「千手観音」は現在熊野神社の北に存在する祠が相当すると思われるが、「馬塚」は現存していない。しかし昭和34年段階では「千手観音」の場所には2つの祠堂がありその各々に「千手観音」と「馬頭観音」が安置され、「馬塚」には小さな森が存在していたことが知られている^(註10)。次に水路の関係をおってみよう。図中「月ノ木中井松本ヨリ落合舟入川ニ入ル」とある水路は現在の横堀川である。「熊野権現」の東脇（「天神井」）、西脇を流れる水路の名称は不明であるが、現在もその流れを追うことができる。「吉田ヨリ出ル江川」とあるのは途中より現小籠川となる水路である。この水路には舟着場が存在し（現小字浜田）、明治の終わり頃まで貨客の輸送に利用されていたという^(註11)。藩政期にも同様、水運に利用されていた可能性がある。小籠村の人家は、千手観音北の「大道」沿い、熊野権現の北・南、「馬塚」の南東

方向、坂折山の南裾に見つけることができる。この内「大道」沿い、坂折山南裾は一定の集落を形成していたようである。

以上検証してきたように、近世小籠村の景観の多くを現在でも復原することができる。近世小籠村は北には主要街道が通り、南には舟入川が流れ、およびそれにつながる水路が巡る、という水陸の交通の便に恵まれた村であったことがわかる。

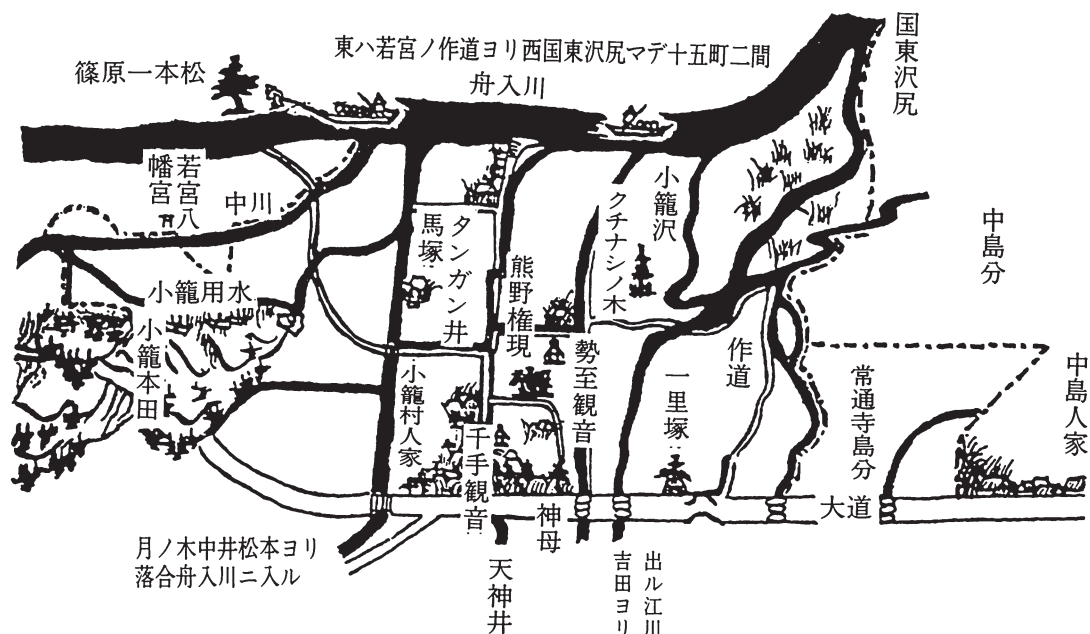


Fig.118 藩政時代の小籠村絵図(『岡豊村史』より転載)

(2)小籠村の実態

ここでは文献史料を用いて検討する。小籠村の相対的な位置を抑えるために旧岡豊村中^(註12)での比較をしながらすすめてゆきたい。なお藩政時代この地域の中心は隣村中島村である。同村は主要街道の分岐点に位置し、元禄9年(1696)までは送番所(藩公用役人などの荷物・書状の送達にあたる機関)が存在し、藩内でも準拠点的な村であった。また舟入川を挟んで南東方向には在郷町後面が存在する、という環境に小籠村は存在していた。

長宗我部氏の治世が終わり山内氏による藩政が始まる。諸政策の転換の中で新たに近世の村切が行なわれることとなる。小籠村においても中世の下崎村を合併し近世村としての小籠村が誕生することとなる(成立時期は不詳)。藩政初期の小籠村の様子を伝える史料は少ないが、中期になると若干の史料が存在する。これらのうち村の実態と諸役負担について述べたい。藩政中期の村の実態を伝えるものに「御国七郡鄉村牒」(表1)がある。この数値を旧岡豊村中で比較してみると、地石は中島村に次いで2位、戸数は6位、人口は7位、馬数4位となる。一戸あたりの数値を割り出すと、地石は8.4石(5位)、馬数0.52頭(2位)となる。2軒に1頭という高い馬の所有率と、それに比しての牛数0という数値は特色のひとつとしてあげることができよう。

次に諸役の負担についてである。租税の負担はいうまでもないが、その他にもいくつかの夫役負担が課せられていた。例えば、元禄9年8月の「出米割」高記録^(註13)によると長岡郡内の村々は石渕送番所に係わる夫役を課せられていたことがわかる。各村「地壺石ニ付壺升三合宛出米」が課せられ、小籠村においては地石510石2斗5升7合に対応して、太米6石6斗3升2合の負担となっている。また、普請の関連では「正徳二年辰六月去卯冬下知潮留堤御普請所ニ而割付日用望日用御手人召仕御算用目録扣」^(註14)によると、幡多郡以外の6郡に計約26万人役が課せられ、その内小籠村は隣村吉田村とあわせて「千百九十九人一分」の役を負っていることがわかる。

表1 寛保3年(1743)「御国七郡郷村牒」

	地石	戸数	人口	男	女	馬	牛	獵銃	船	網	塩浜
小籠村	521,790	62	234	122	112	32	0	0	0	0	0

「原本は戦災で焼失。『土佐史談』(83号)「土佐藩郷村調査書」より。」

次に本田地石・人口・職業から、近世の小籠村を復原してみたい。

①本田地石

土佐藩においては藩政全期を通じて広く「地石制」が使用される。「地石」とは「田・畠・屋敷と云う地目、上・中・下と云う位付等を見無視し、単に土地面積の表示を以てする高」^(註15)である。また「本田」というのは基本的に「地検帳」掲載の田・畠・屋敷である。一方「新田」とは検地以降および藩政期に入ってから開発された土地のことである。表2からわかるように本田は寛永19年から天保5年までの192年間に約25石の増加が認められる。既述の通り「本田」とは既に開発された土地をさすため、この増加は村域の拡大もしくは本田開添（藩政期にはいつから開発された土地が本田並に扱われること）によるものかと思われる。一方、新田においてはD以外に資料がないため、その推移を知ることができないが、本田高が521石7斗9升あるのにたいし、新田高は4石9升3合で比率はわずか0.78%にしかすぎない。これは極めて低い数値で、旧岡豊村中（平均11%）では最低の数値である。現南国市域の他村の平均は22%であるため、この低い数値は特筆される事項であろう。この時点で既に、寛永16年(1639)の山田堰着工、万治元年(1658)中井の完成、万治3年の舟入川の完成から約40年を経ているが、近世中期までの段階では小籠村において新田開発が盛んに行なわれたとはいえない。これらの水路完成に伴い藩内有数の新田村として成立した隣村西野地村と比べると、その性格の違いは大きいといえよう。また郷士の領知についてであるが、元禄期(D)、文化年間^(註16)のいずれの史料においても小籠村内に領知を持つ郷士は存在しない。文化年間の史料では多島・高島・坂本の3名の郷士の名前を確認することができるが、彼らのいずれもが小籠村外に領知を所有する郷士であった。以上の点から推察するに、小籠村においては中世の段階でほぼ開発が完了し、近世では本田を中心にした安定的な村落経営が行なわれていたものと思われる。

表 2 小籠村本田地石変遷表

	年 代	石 数
A	寛永19年(1642)	505石 9 斗 3 升
B	寛文 7 年(1667)	505石 9 斗 3 升
C	元禄 9 年(1696)	510石 2 斗 5 升 7 合
D	元禄11年(1698)頃	521石 7 斗 9 升
E	寛保 3 年(1743)	521石 7 斗 9 升
F	天保 5 年(1834)	531石 2 斗 9 升

A：『南路志 閩国之部』。長岡郡は寛永19年改。
 B：「土佐国七郡郷村石附」（『南路志翼 七』高知県史誌編輯係編）
 C：「出米割」（『岡豊村史』406頁）
 D：『長岡郡本田新田地払帳』谷家文書・甲藤勇氏所蔵。ロバーツ・ルーク氏によると（『土佐史談』181号）、本史料は元禄11年—12年間の状況を示すものであるという。
 E：前出「御国七郡郷村牒」
 F：『天保郷村帳』内閣文庫所蔵

②戸数・人口

藩政時代の小籠村の人口を知ることができるのは管見の限り前出寛保3年「御国七郡郷村牒」のみである。現在その調査細目を知ることができないが、この「人口」とは親族をさし（下人などを含まない）、子供の人数をも含めた人口であろうと推察される^(註17)。1戸平均3.77人という数値は旧岡豊村中（平均4.34人）では低い方に含まれる。小籠村の人口の推移をみると、表からわかるように、寛保3年～明治5年の129年間に19戸、132人の増加をみている。寛保3年段階では6位であった戸数も明治5年段階では4位に上昇しており、近世から近代にかけて人口は確実な増加を示す。藩政中期から近代初年にかけての小籠村は家数約70戸、人口約300人、1戸約4.3人で営まれる村落であったことがわかる。

表 3 小籠村の戸数・人口表

	年代	戸数	人口	人口／戸数
G	元禄末年 (1700頃)	40余	／	／
E	寛保 3 年 (1743)	62	234	3.77
H	明治 5 年 (1872)	81 (世帯数:89)	366	4.52 (1世帯:4.11)

G：前出『土佐州郡志』。「戸凡四十余」とあるように概数であるため、ここでは参考程度に挙げるにとどめる。
 H：『岡豊村史』481頁

③職業

明治5年の史料（表4—註18）から藩政末期の小籠村の職業分類を推測してみたい。村内では農業・雑業・士族が圧倒的に多い。旧岡豊村内での比較においては鍛冶職の多さ（1位）、士族の多さ（2位）が目立つ。一方で総世帯数に占める農業世帯の割合は58%（9位）と低い。調査細目をみると、日雇・大工・樽屋・糶販売・宿屋・従者・木履仕成・葺職・瓦焼・木挽・米穀・医者・無職・筆学はなしとなっているが、『長岡郡職人根拠』^(註19)によると、大工の項に「小籠・八幡・常通寺嶋・吉田村」一括で17名の名前がみえ、木挽の項に「小籠村 作次」の名前を確認することができ、大工・木挽職は存在した可能性もある。近世末期小籠村の職業数は6～7種ということになろう。

表4 明治5年職業別世帯数

	農 業	雑 業	紺 屋	商品販売	鍛 冶	士 族	総世帯数
小 籠 村	52	10	2	2	4	18	89
旧岡豊村合計	508	51	9	13	11	115	765

(4) 発掘調査区と明治期地図簿との比較

前節までに近世小籠村全体の村落景観の復原を試みたが、次に地区を限定し発掘調査が行われた区域の復原を試みたい。発掘調査からは主に18世紀初頭から19世紀中頃の遺物・遺構が出土・検出されたが、この時期の調査区域を知る手がかりを得ることができなかったため、少し時期が下るが『明治廿二年 訂正地図簿』（註20—以下地図簿と略称）を用い、調査区域との比較を試みたい。

I区…北東部に近世墓を含む土坑の集中区域があるが、地図簿では無記名の土地（空き地力）となっている。地図簿では小字越戸～山際にかけて墓地を確認することができる。現地踏査の結果、18世紀初頭以降の記年墓石を確認することができた。発掘調査からえられた墓の廃絶時期が18世紀前半であることと重ね合わせるとこの時期に墓地の移転が行われた可能性がある。また寺についてであるが、近世の文献史料からは小籠村内に寺の存在を確認することはできない。『南路志』（巻又十三夏）によると同村の熊野権現・千手観音のいずれもが隣村「常通寺嶋村西之寺」支配となっていることから、小籠村の主な宗旨寺は西之寺であった可能性がある^(註21)。

II区…中央～東部にかけてハンダ土坑・近世墓等の検出区域となっている。この溝で囲まれた区域は地図簿での無記名地の区画に相当すると思われる。一部田も存在する。

III区…北・東部は土坑・掘立柱建物などの検出区域となっているが、地図簿では田。

IV区（西区）…中央部には溝および畝状遺構、北部には土坑・溝が検出されているが、地図簿では無記名地。

(東区)…西側水路沿いは主に掘立柱建物が、その他の区域には土坑・溝が検出されているが、地図簿では無記名地。

V区…南部では溝および畝状遺構が検出されているが、地図簿では田。

北部には4棟の掘立柱建物が検出されているが、地図簿では田。

VI区・VII区については近世の遺構がないため省略する。

以上明治22年の地図簿を用い調査結果との比較を行なった。発掘調査該当区のほとんどが無記名地もしくは田となっている。約50～200年前との比較であるため時期差が大きい、近世後期から明治にかけて調査区の景観が大きく変化したことは確実に指摘できよう。

(5) まとめ

以上文献史料を中心に中世から近代に至るまでの小籠村について考察を加えてきた。絵図の項で見たように大きな視点では近世の村落景観を現在においても容易に復原することができた。しかし、ある一定の地域に限定するとその景観は大きく変化していることが発掘調査の結果と明治の地図簿との比較において明らかになった。

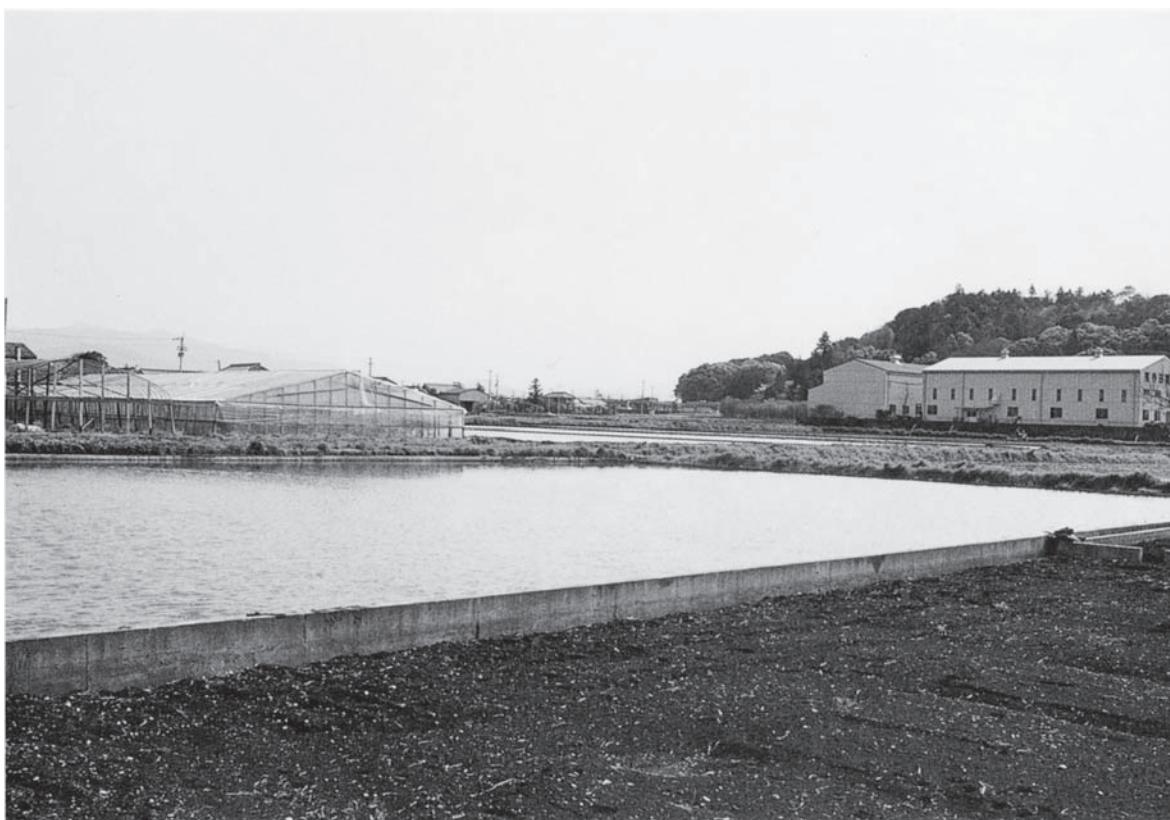
藩政中期から幕末にかけての小籠村の概要をみると、主要街道と舟入川が存在する交通の便に恵まれた土地に位置し、中世に開発された本田を基盤に安定した村落経営をみせ、村北の街道沿いの集落を中心に、家数約70戸、人口約300人、一戸平均4.3人で営まれる村落であった。近世小籠村は凡そ平均的な村落であったといえよう。

(註)

- 1) 南国市教育委員会 昭和57年。発掘調査は小字南野・馬都賀・土居にかけて行なわれた。
- 2) 『長宗我部地検帳 長岡郡 下』高知県立図書館 昭和34年。一部は原本にて確認。
- 3) 土佐史談会復刻本(昭和58年)には、編者は緒方宗哲、成立年代は宝永4年(1707)～享保7年(1722)、採録資料は元禄末年のものであろう、との解題がある。
- 4) 『南路志続篇草稿 十二』高知県史誌編輯係編 明治12年
- 5) 岡豊村史編纂委員会 昭和34年 452頁
- 6) 「小籠土りヤシキ」は現小字「土居」・「西土居」に相当する。これに「熊野丸」の一部が加わる可能性がある。「小籠北」については不明である。
- 7) 『皆山集』巻五八に「一、常通寺嶋支配小籠村永正寺ヤシキ寺中千手観音右長宗我部之時代永正寺在之其寺中ニ安置候由云傳尤永正寺ハ吉田次郎左衛門先祖開祖之由元親之時代吉田氏和食村之城番と成引越候節右寺も同断之由傳依之右寺跡ニ堂斗ハ有之」とある。文中「千手観音」とあるのは後出絵図中「千手観音」に相当しよう。
- 8) 444頁。『岡豊村史 写真集(下)』(岡豊村史編纂委員会 昭和34年)にはほぼ同図案・異筆致の「藩政時代の小籠村絵図面の写」が掲載されている。これは筆致からみて原本ではないが、記述は掲載絵図よりも若干細かい、より原本に近い可能性もある。
- 9) 『南路志』(巻又十三夏 長岡郡)に「下崎寺跡 勢至観音 下崎寺本尊(下略)」とある。位置関係からみても現下崎神社とみて間違いない。

- 10) 前出『岡豊村史 写真集（下）』に写真が掲載されている。
- 11) 前出『岡豊村史』538頁
- 12) 明治22年の岡豊村発足当時は11ヶ村で構成されていた（『岡豊村史』452頁）が、寛保3年段階（史料E）では13ヶ村よりなる。
- 13) 『岡豊村史』405頁
- 14) 『皆山集』巻四六
- 15) 秋澤繁「土佐藩初期の水田生産（一）」『海南史学』8号
- 16) 平尾道雄「郷土名籍録」『土佐藩郷土記録』昭和39年
- 17) 鈴木ゆり子「百姓の家と家族」『日本通史 近世2』他。藩政末期の史料ではあるが、安政4年（1857）の「御改正風土取縮指出牒」（安芸市民図書館蔵）によると、安芸郡川北村の家数は437軒、子供（14歳以下）を含めた総人口は2,124人となり、一軒あたりの人数は4.86人となる。
- 18) 『岡豊村史』485頁より抄出。
- 19) 高知県立図書館蔵。年不詳なれども藩政末～明治初期に成立カ。
- 20) 南国市役所税務課蔵
- 21) 『南路志』（巻八十九）によると西之寺は五台山竹林寺の末寺である。ちなみに同寺は明治4年に廃寺となっている（『岡豊村史』400頁）。

写真図版



III・IV区調査前全景（西南から）

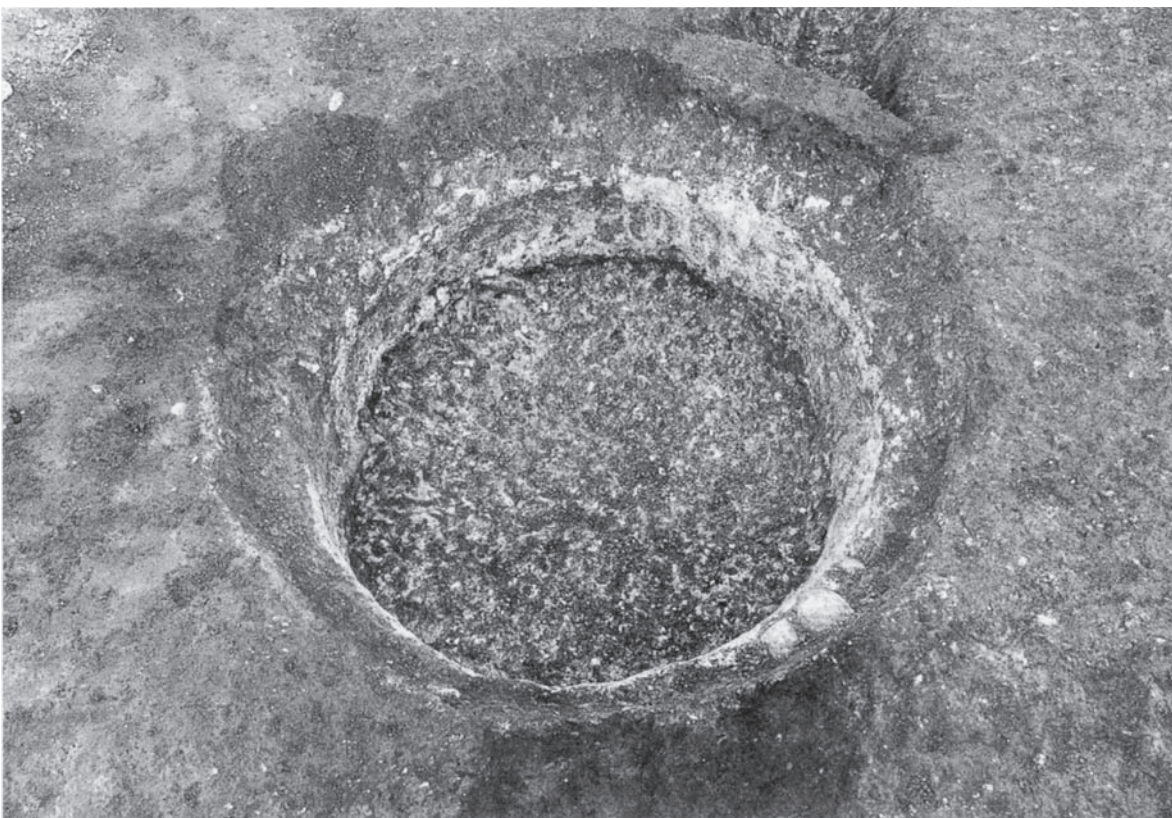


III区・完掘状況全景（北東から）

PL.2



Ⅲ区 SK 1 半截状況



同上 完掘状況



Ⅲ区 SK 2 完掘状況

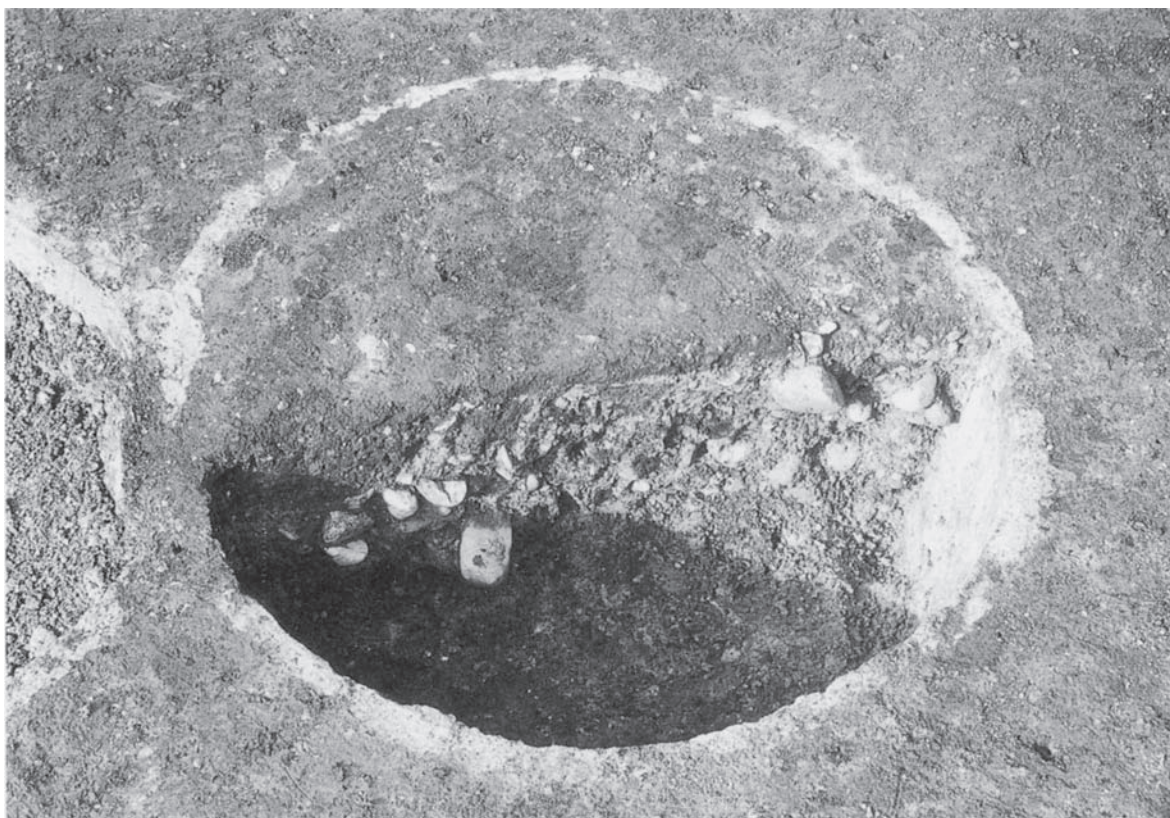


同 SK 3 完掘状況

P L.4



Ⅲ区 SK 4 完掘状況



同 SK 6 半截状況



Ⅲ区 SK 6～9 検出状況

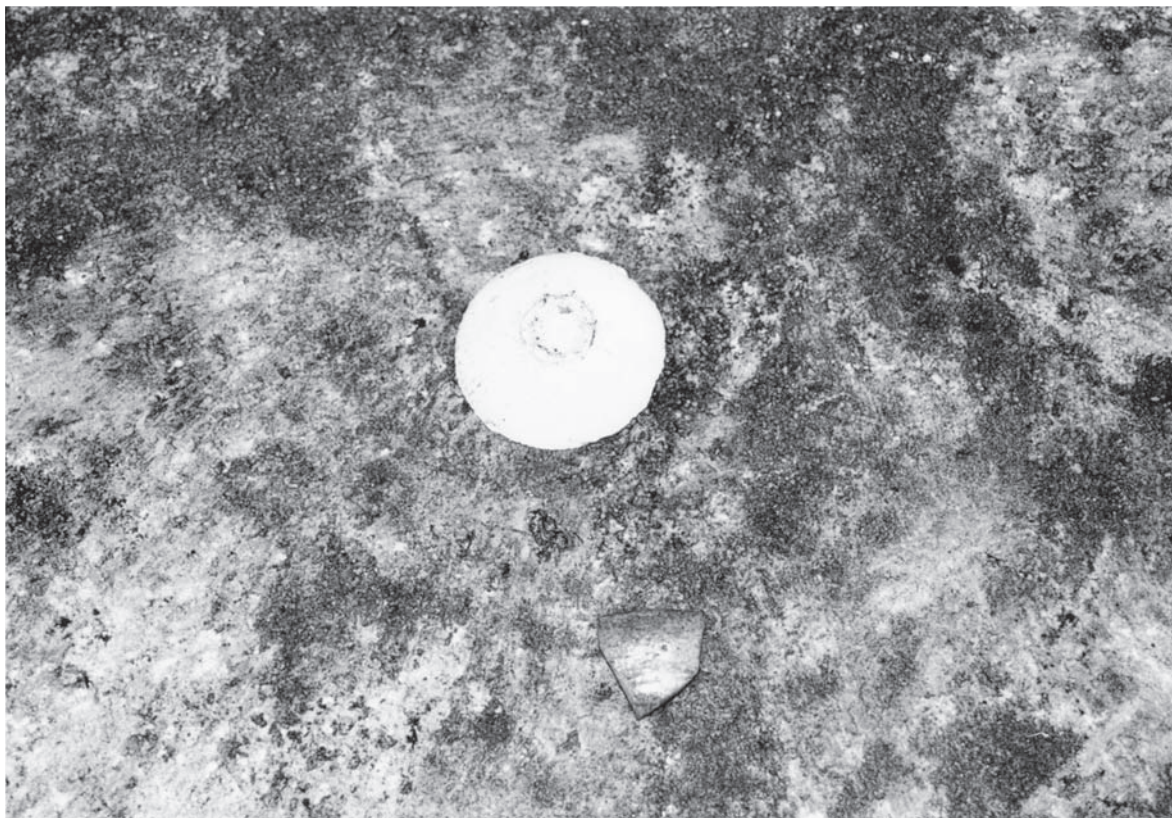


同上 完掘状況

P L.6



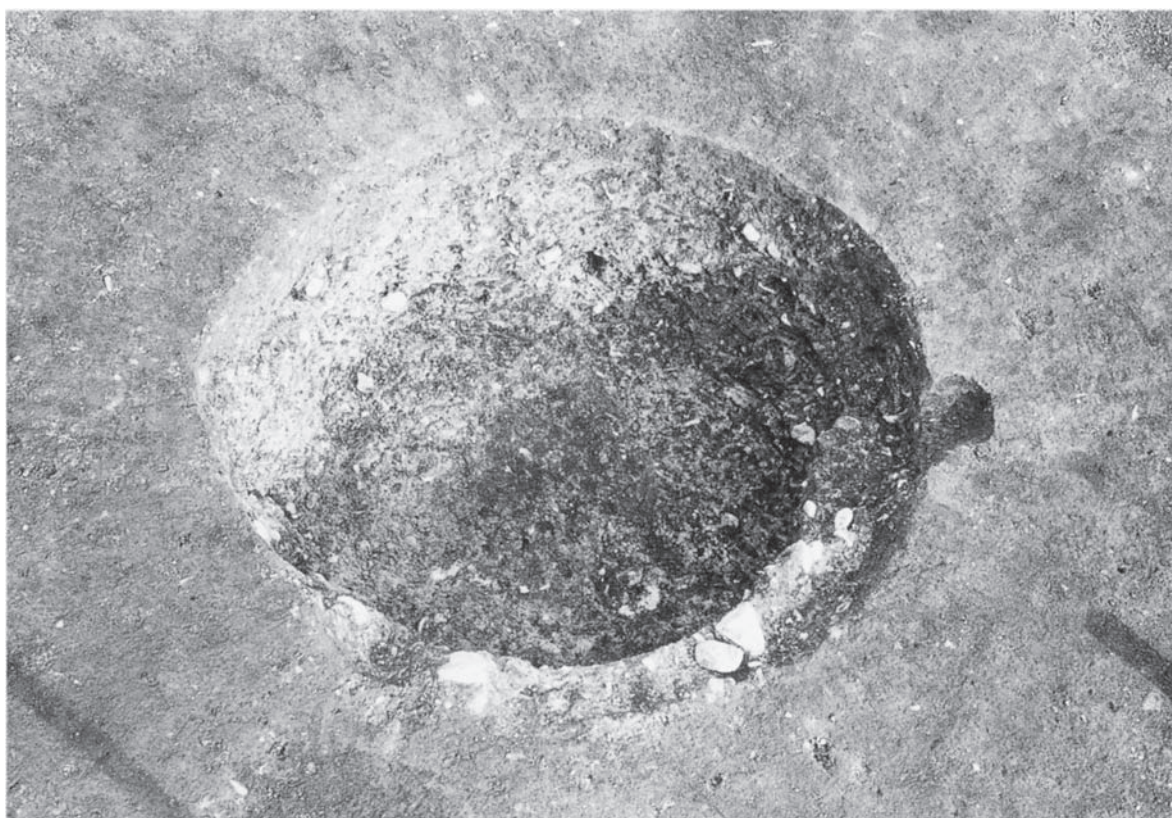
Ⅲ区 SK 8 半截状況



同上 床面遺物出土状況



Ⅲ区 SK 9 礫出土状況

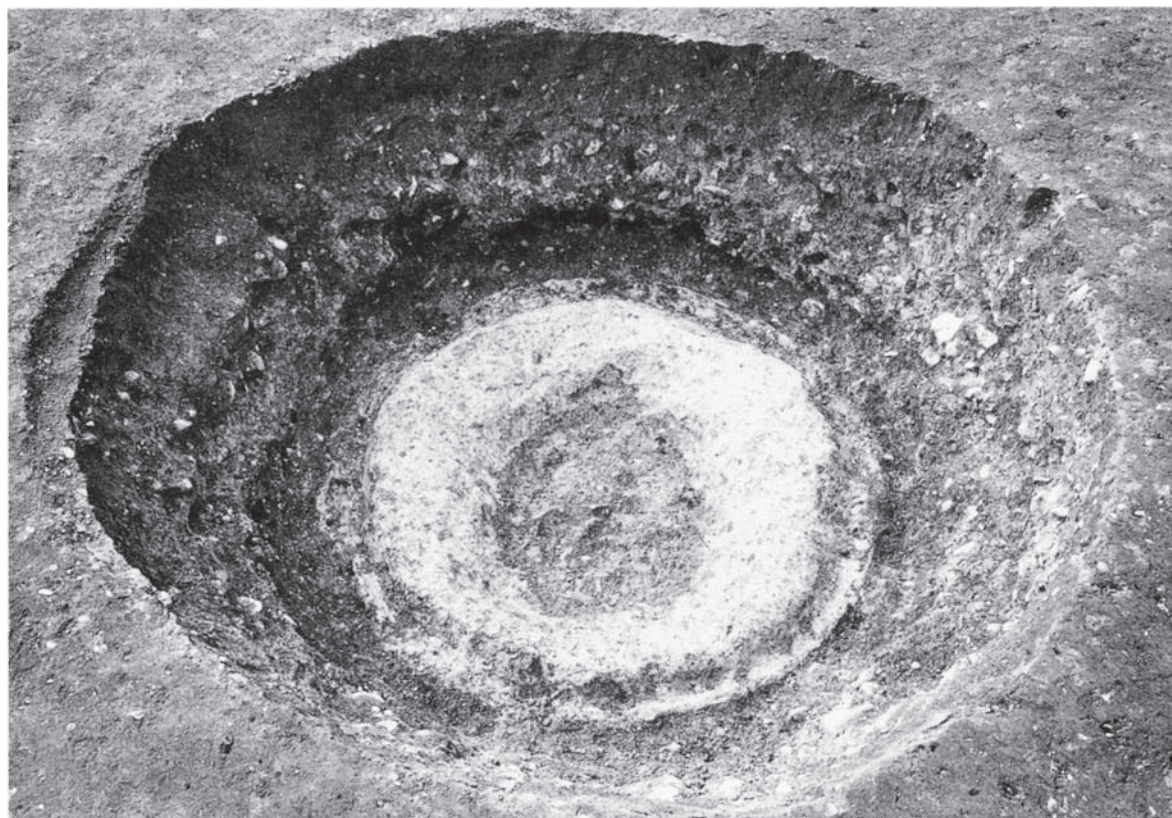


同 SK10完掘状況

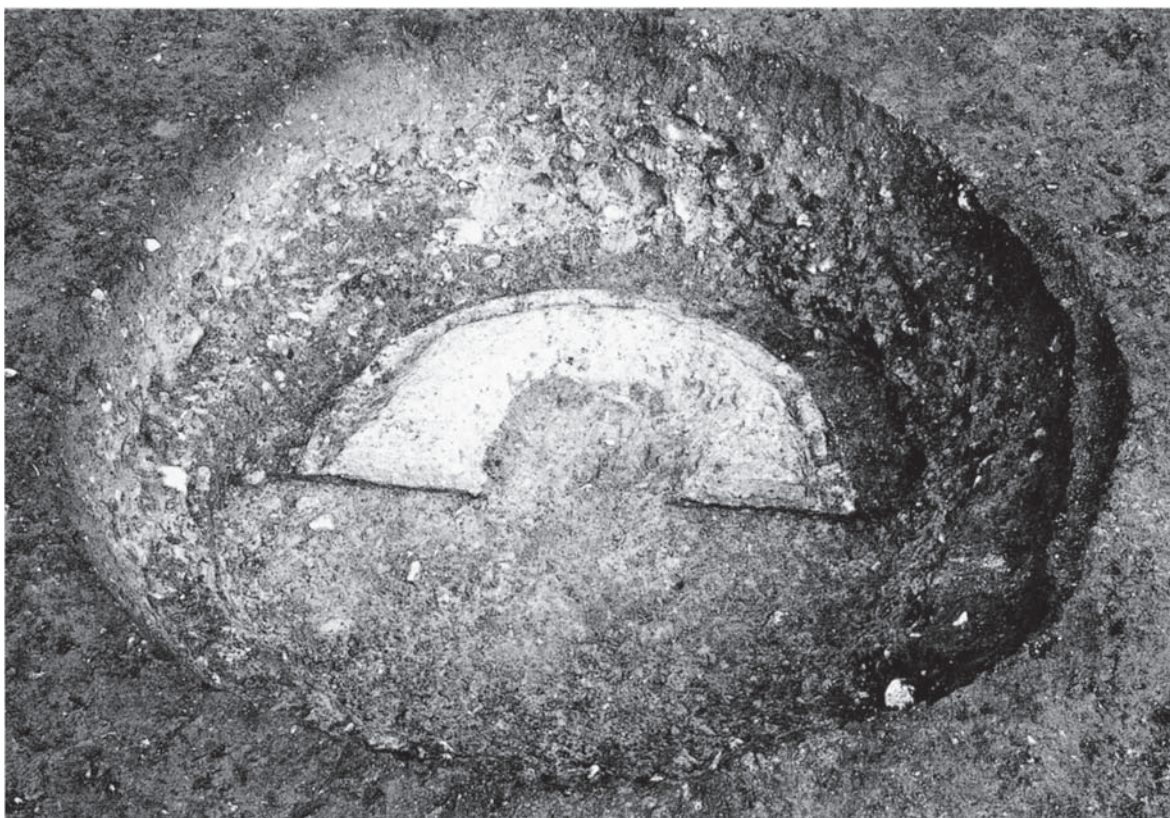
P L.8



Ⅲ区 S K12



同 S K13完掘状況



Ⅲ区 SK13ハング半截状況



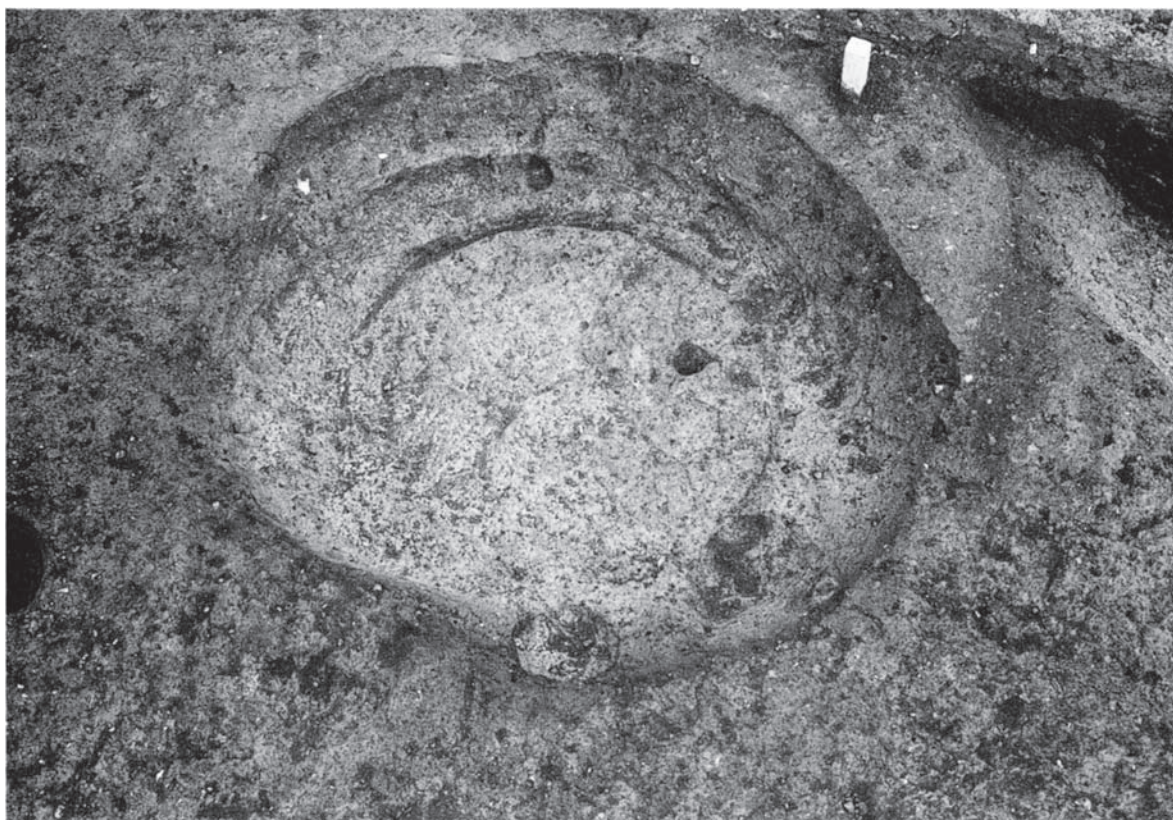
同 SK14半截状況



Ⅲ区 SK14、15完掘状況



同 SK26古銭出土状況



Ⅲ区 S K31完掘状況

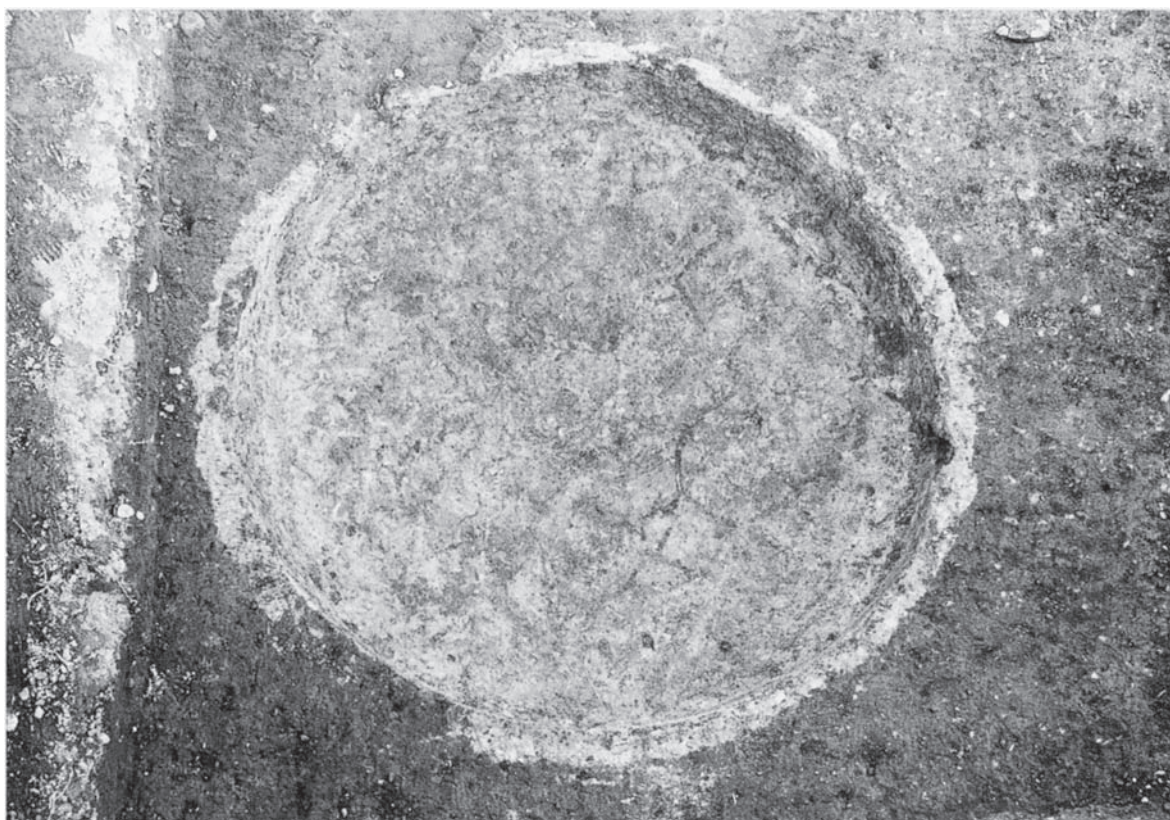


同 S K32セクション

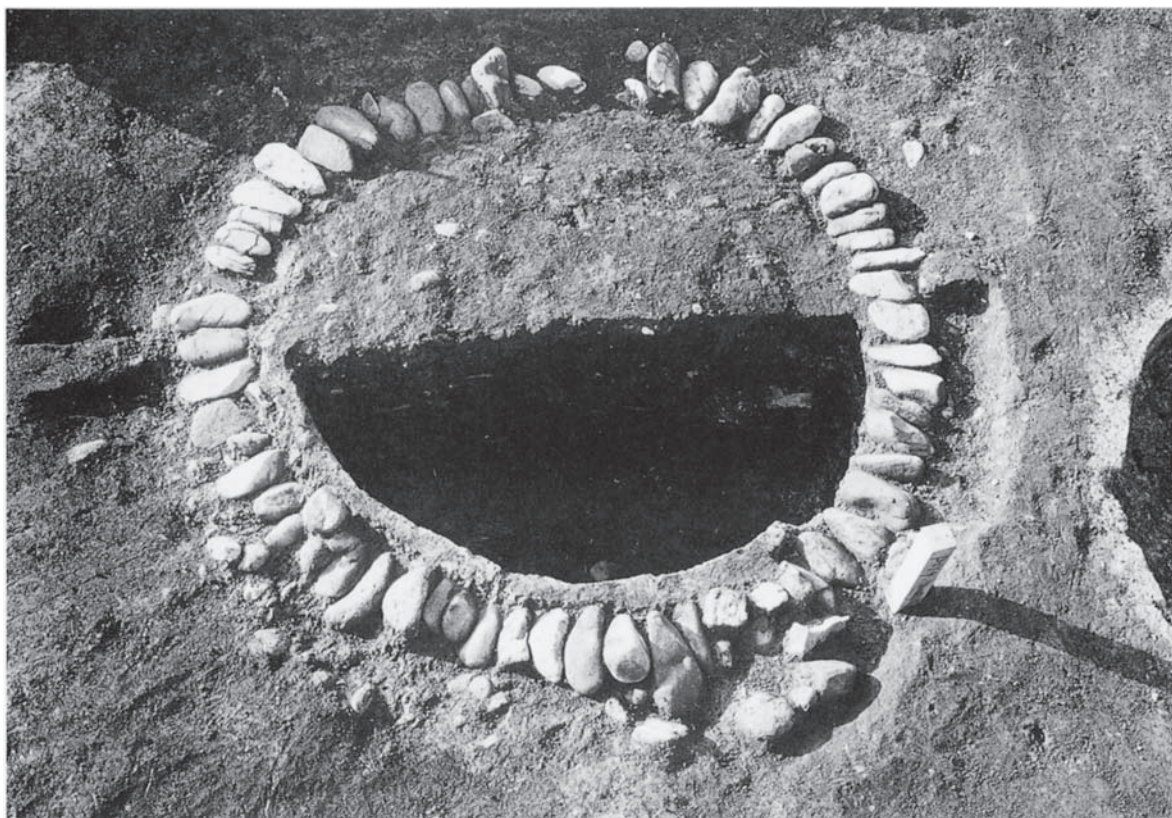
PL.12



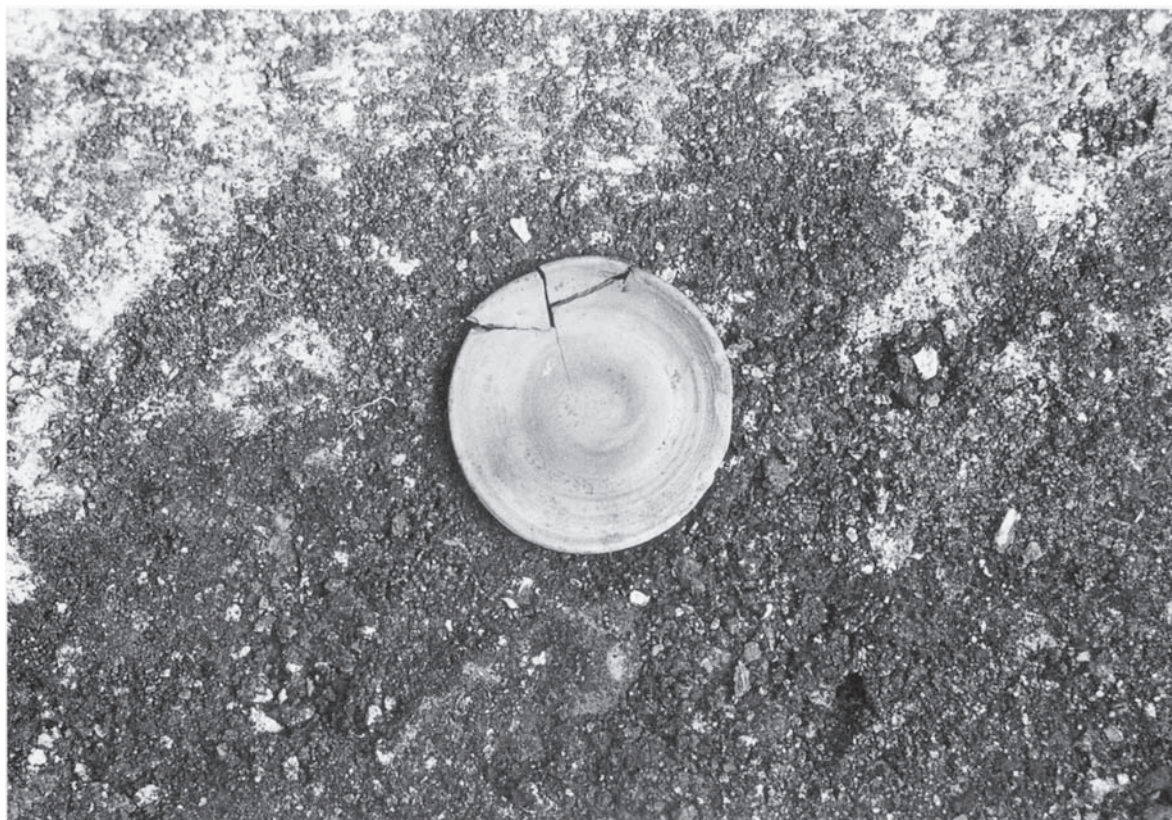
Ⅲ区 SK33半截状况



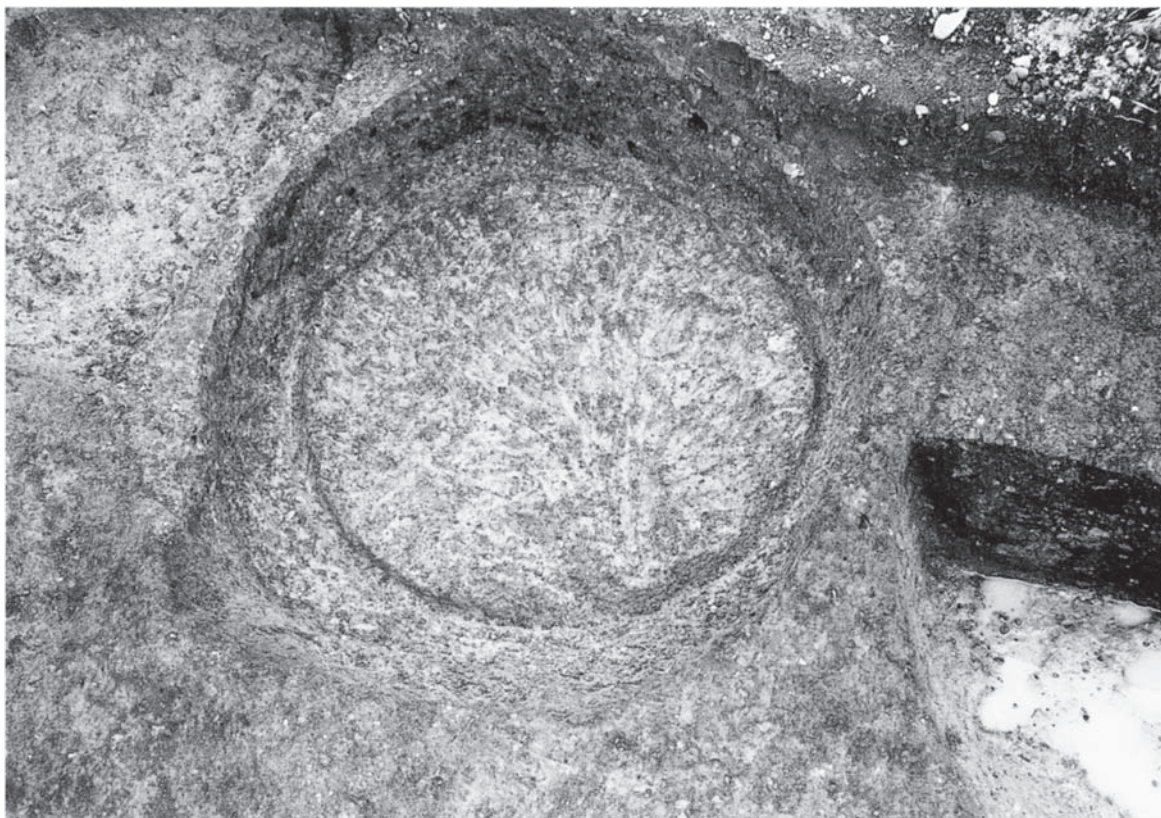
同上 完掘状况



Ⅲ区 S K37半截狀況



同上 床面遺物出土狀況



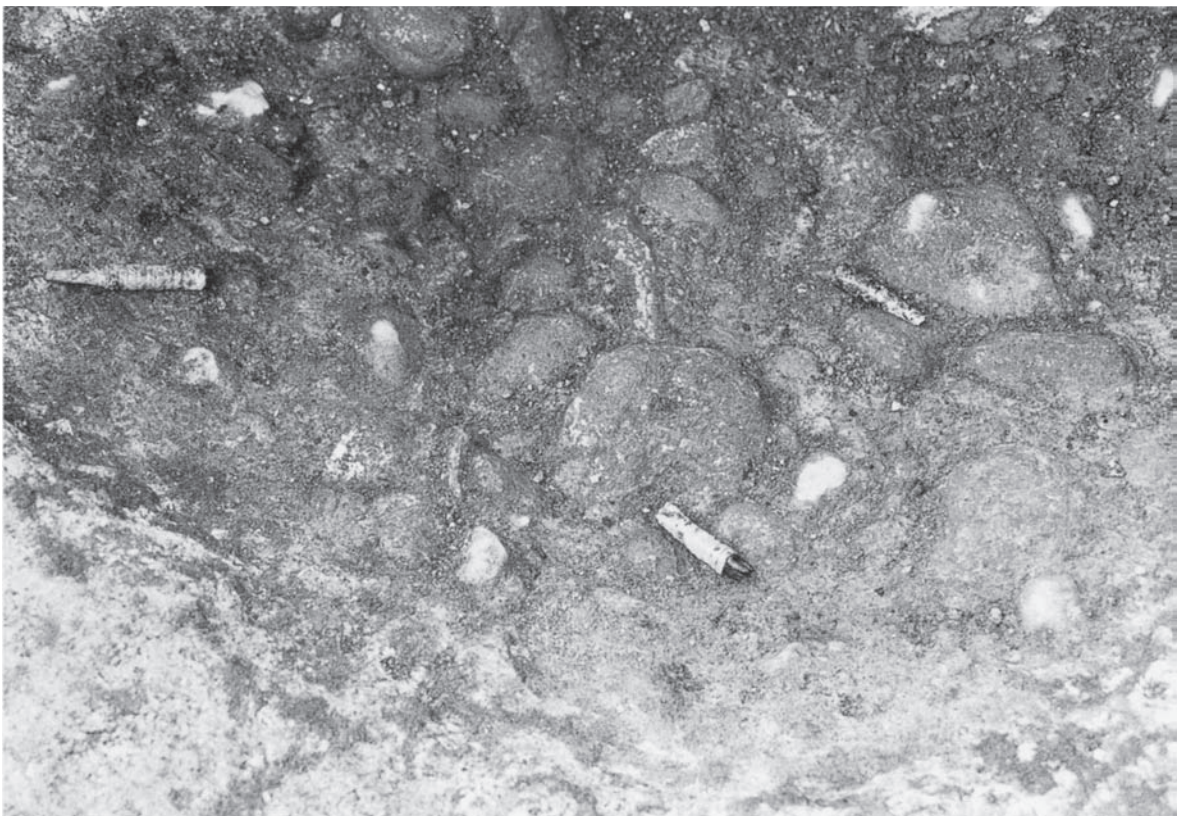
Ⅲ区 S K41完掘状況



同 S K44完掘状況

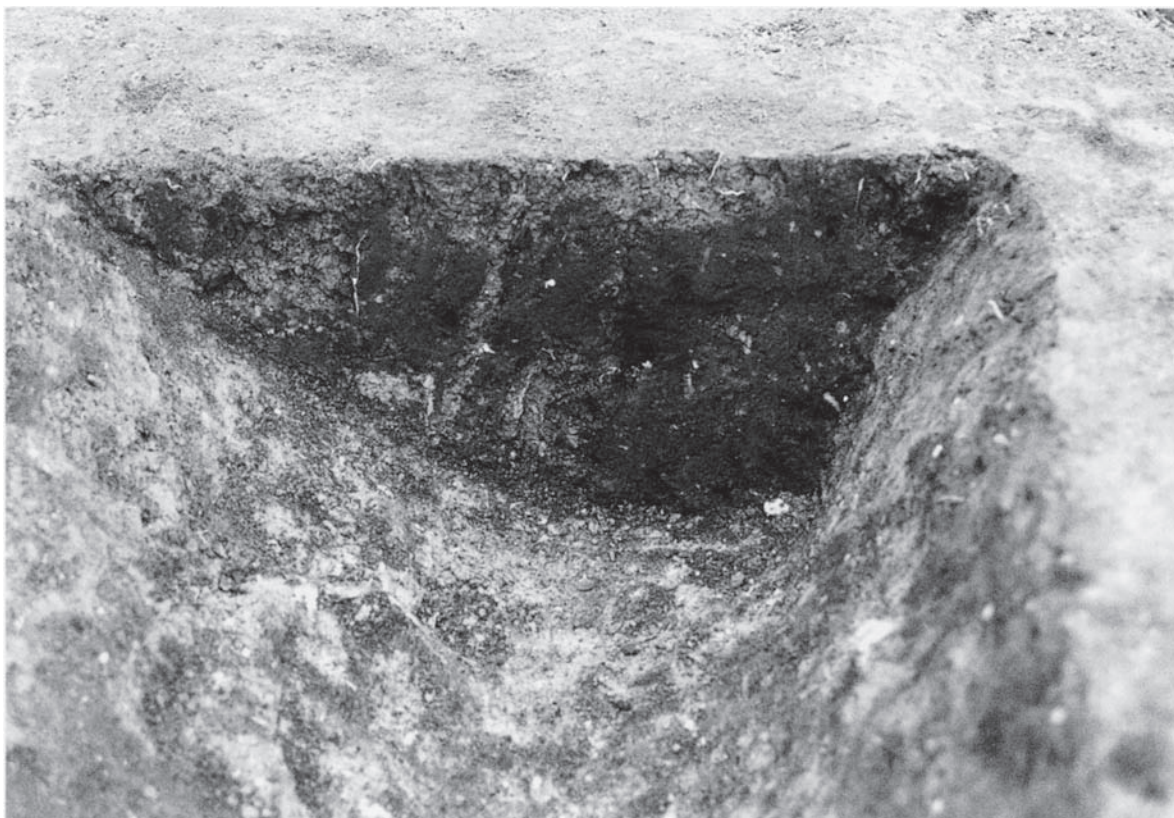


Ⅲ区 S K36半截状況

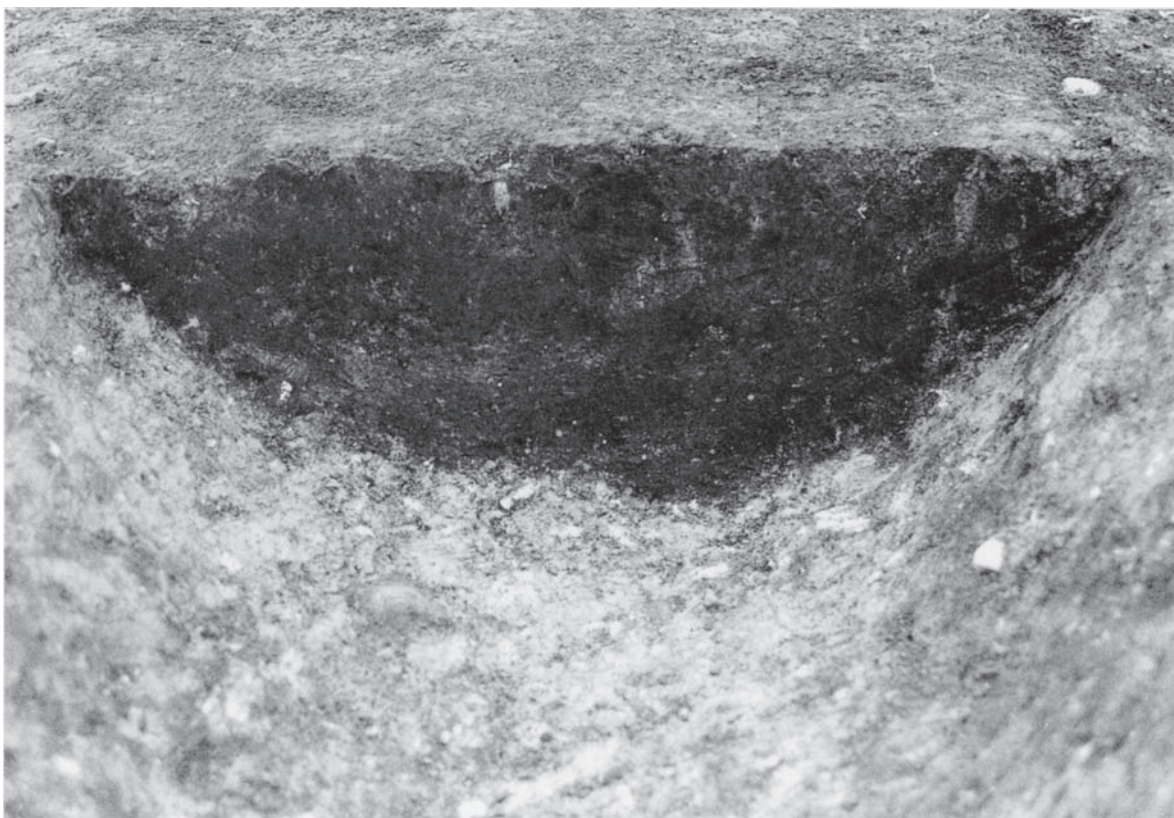


同上 床面遺物出土状況

PL.16



Ⅲ区 SD 1 セクション



同上



Ⅲ区 SD 5 セクション



同上 硯出土状況



III区 S K51遺物出土状況



同上



Ⅲ区 S K51遺物出土状況



同上



IV・V区調査前全景（南から）



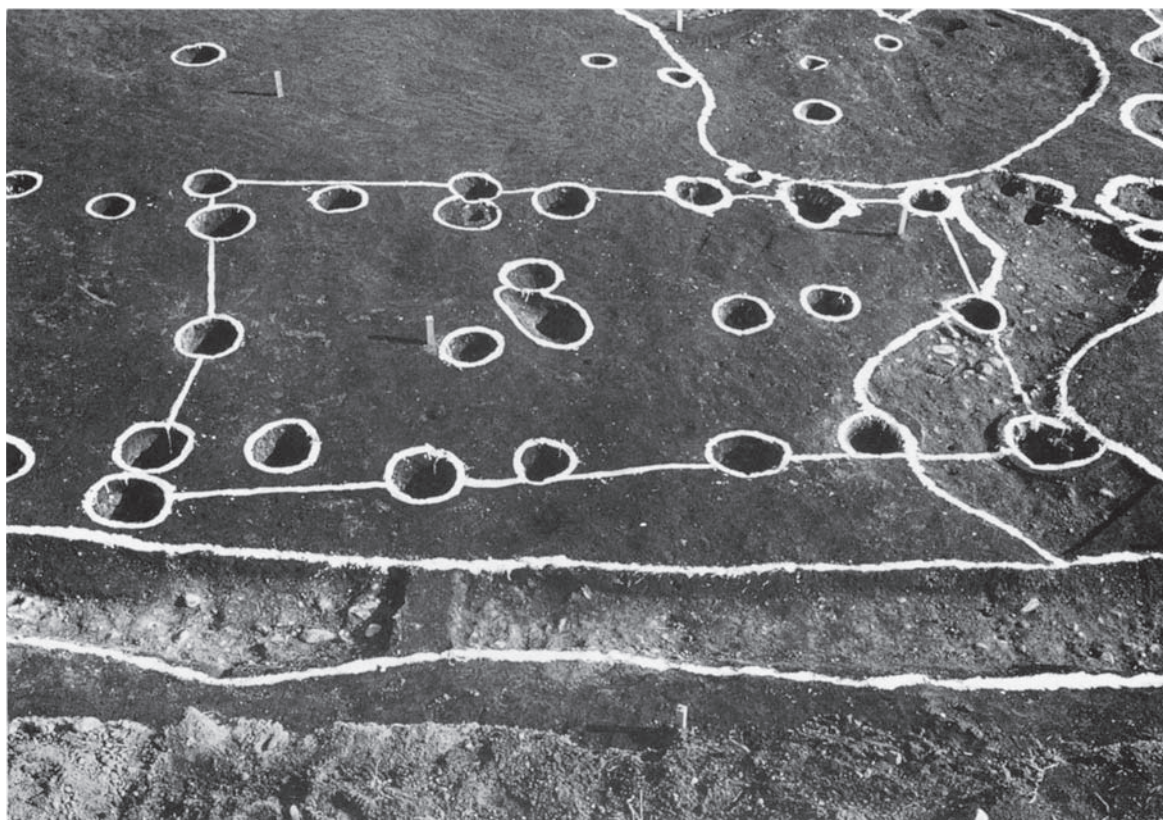
IV区東半分完掘状況（南から）



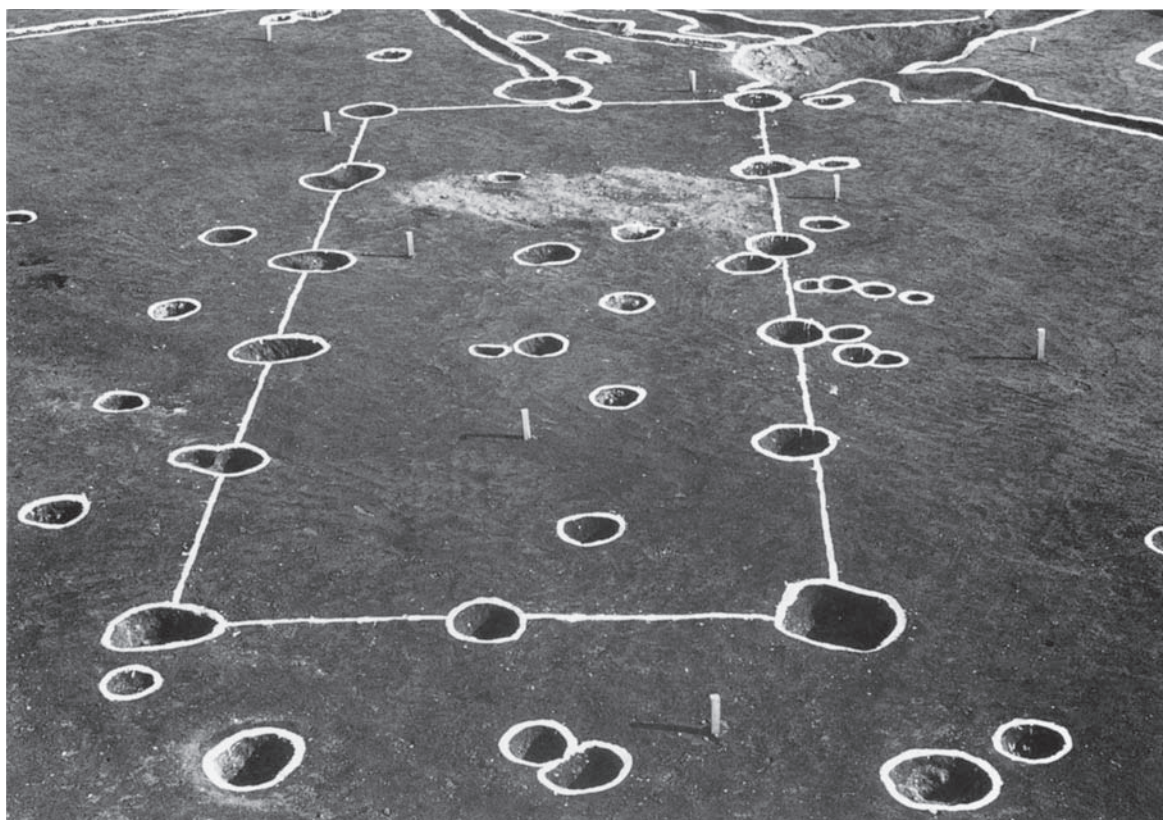
IV区西半分完掘状況（南から）



同 北壁セクション



IV区 SB 3 完掘状況



同 SB 7 完掘状況



Ⅳ区 SX1



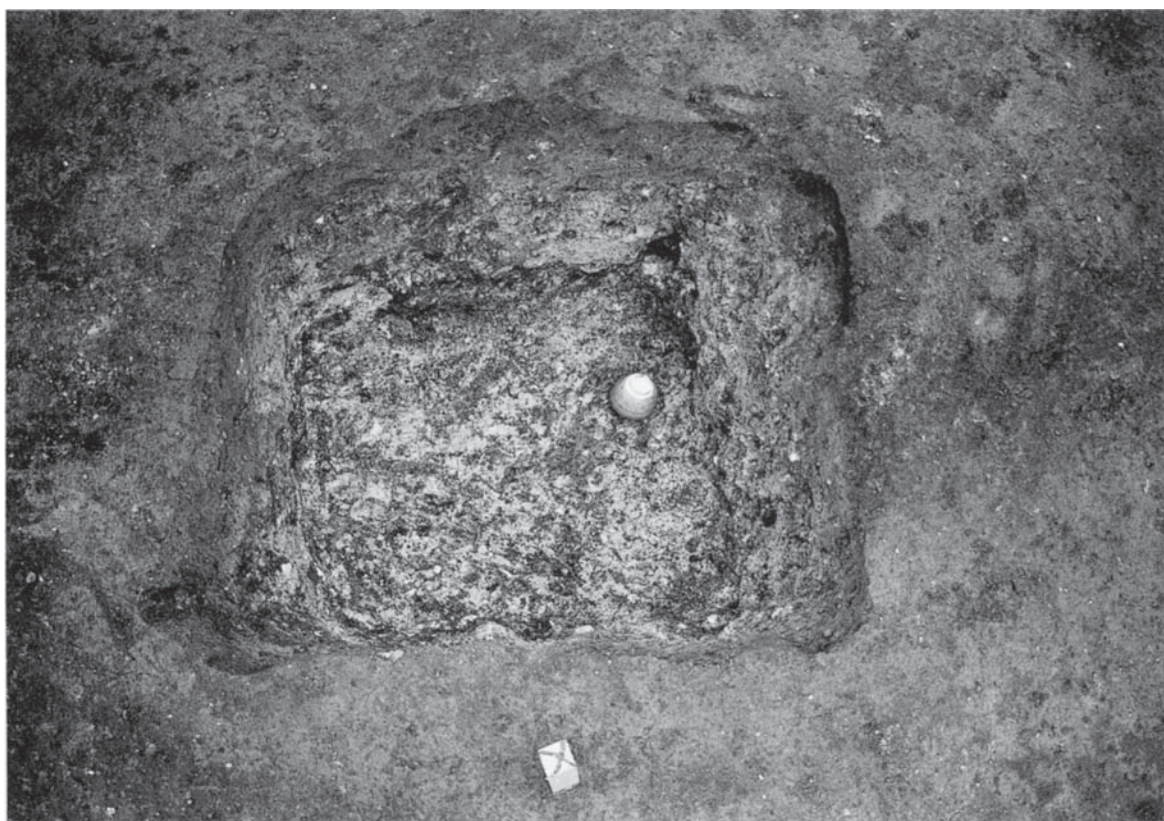
同 床面遺物出土状況



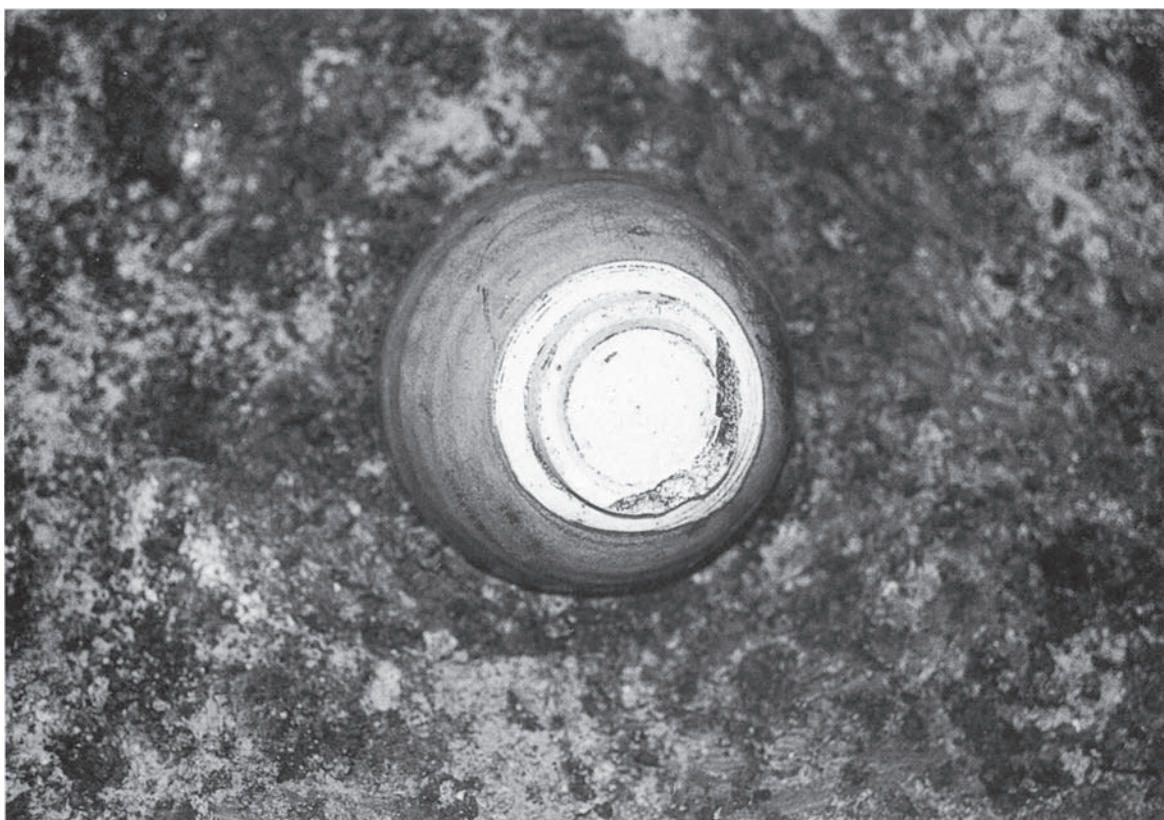
IV区 SK18遺物出土状況



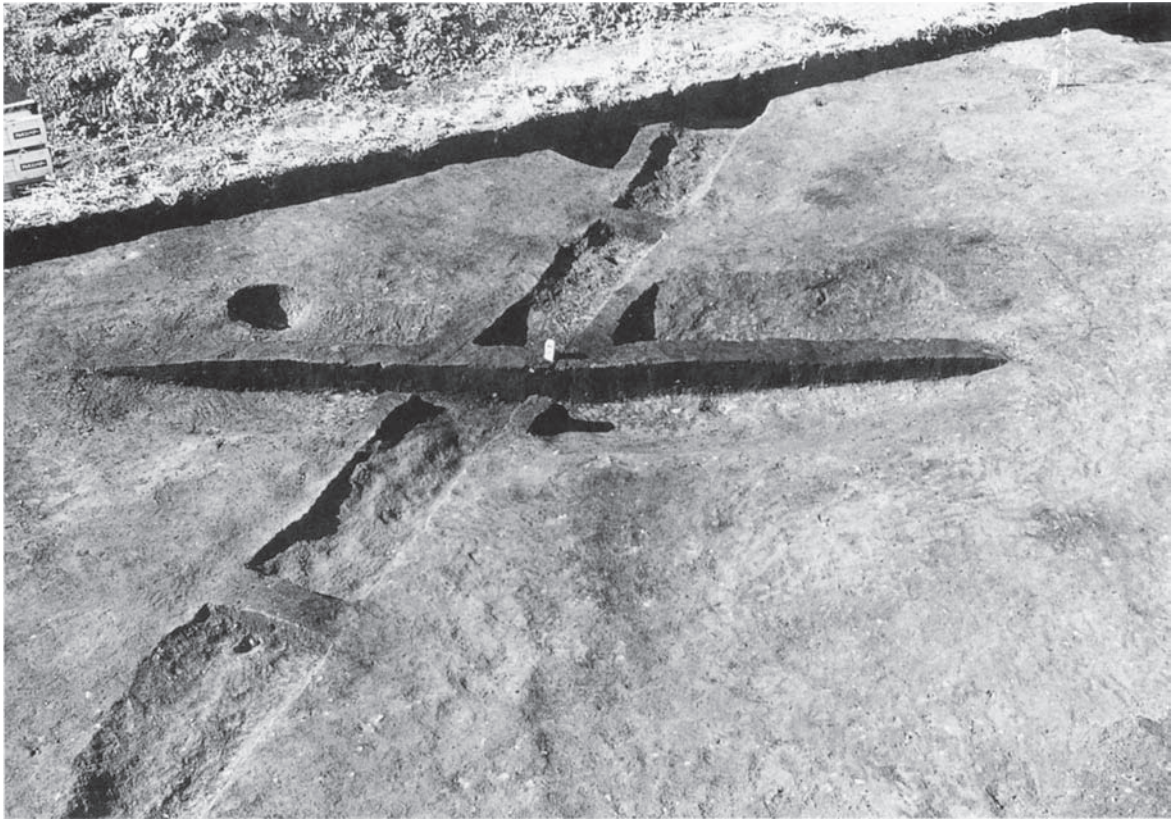
同上



IV区 S K20遺物出土状況



同上 遺物出土状況



IV区 SK19、SD15



同 SK23 (北から)



IV区 SD 5 セクション



同 SD 6 セクション



V区 東壁セクション



同 東壁及びSD 5セクション



V区 SK1 セクション



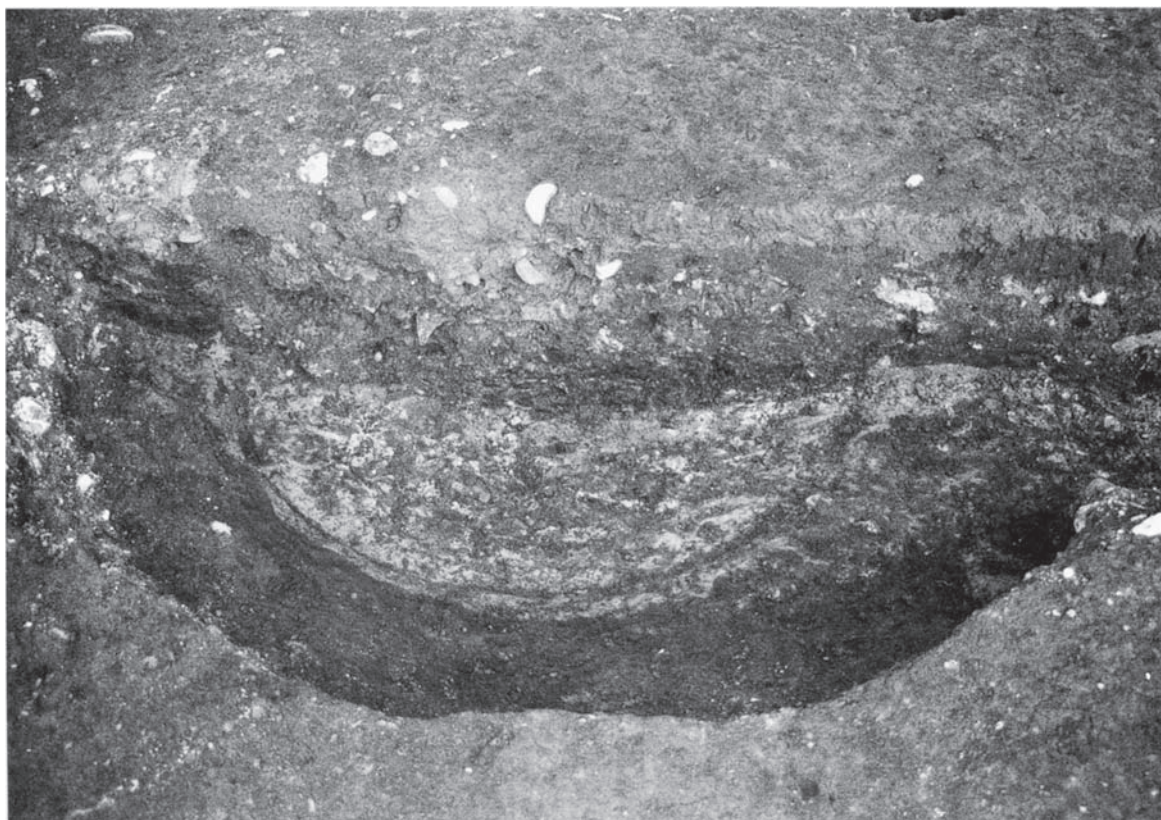
同 SK3 集石出土状況



V区 SK 7 遺物出土状況



同上



V区 SK 9 半截狀況



同 SK 12完掘狀況



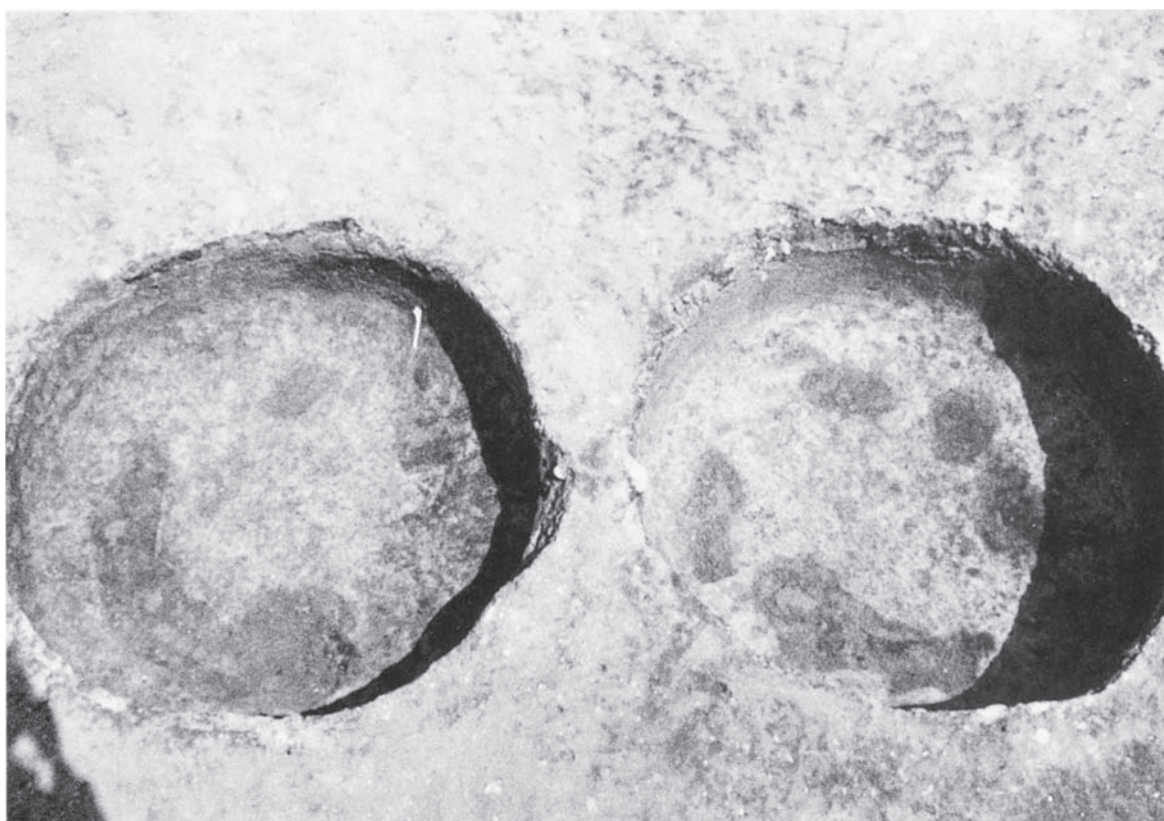
V区 SK17完掘状況



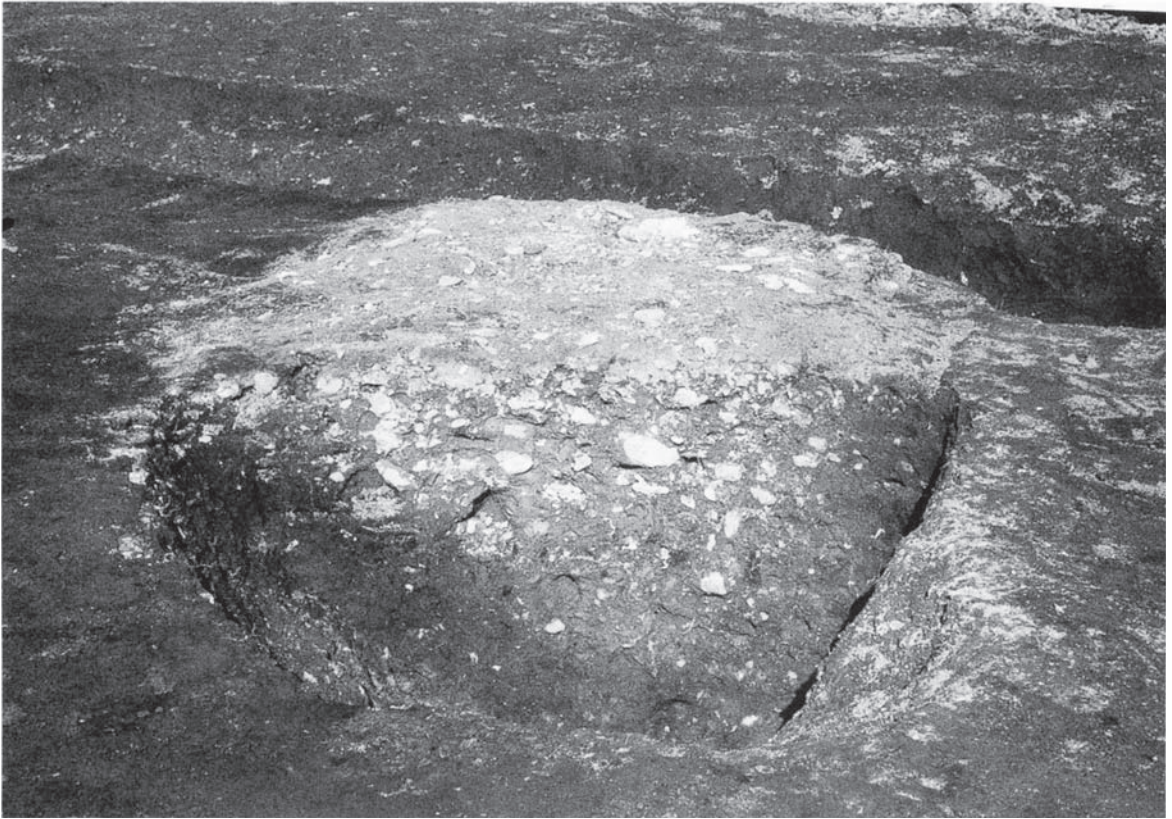
同上 SK25半截状況



V区 SK26半截状況



同上 SK25 (左) ・26 (右) 完掘状況



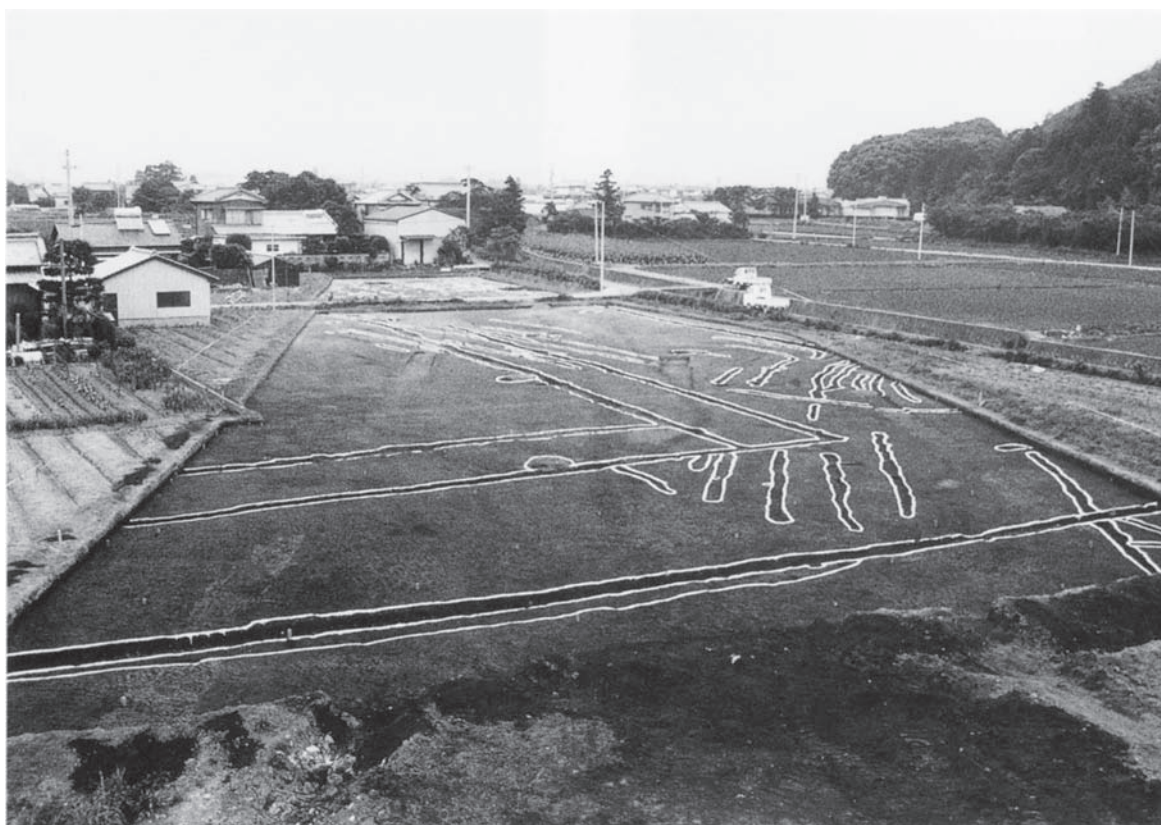
V区 SX 5 半截状況



同 畝状遺構D11セクション



V－北区完掘状況全景（北から）



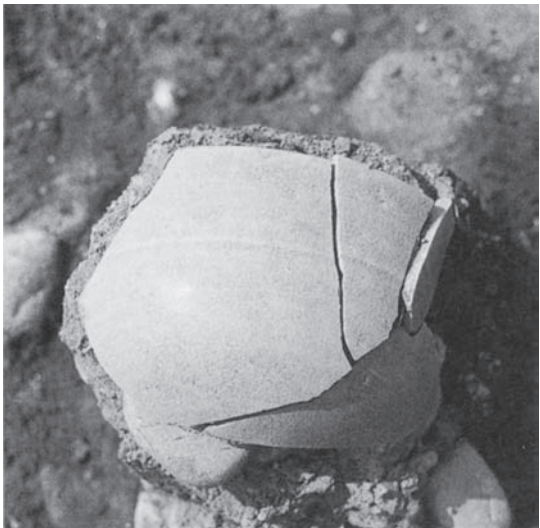
V－南区完掘状況全景（南から）



V区 SB4-P3遺物(2)出土状況



同 SB5-P11半截状況



同 SK2遺物(8)出土状況



同左



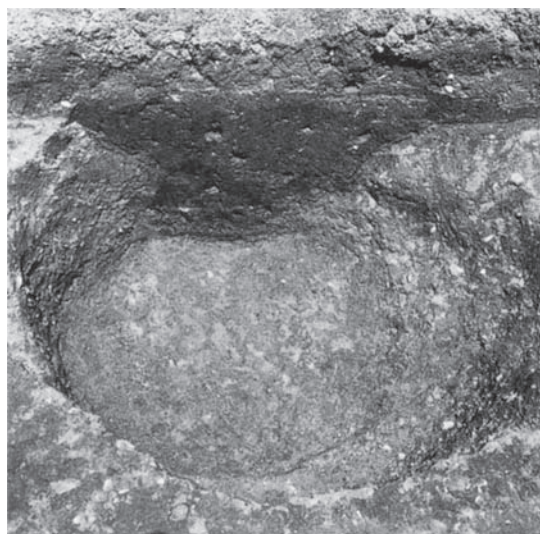
同上



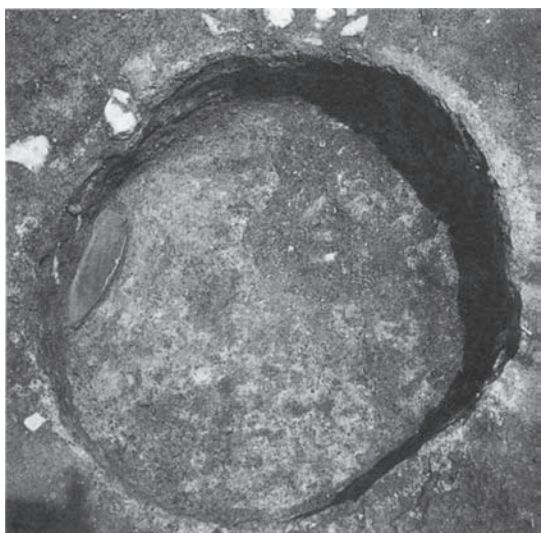
同 SK4完掘状況



V区 SK 4 検出状況



同 SK13完掘状況



同 SK24完掘状況



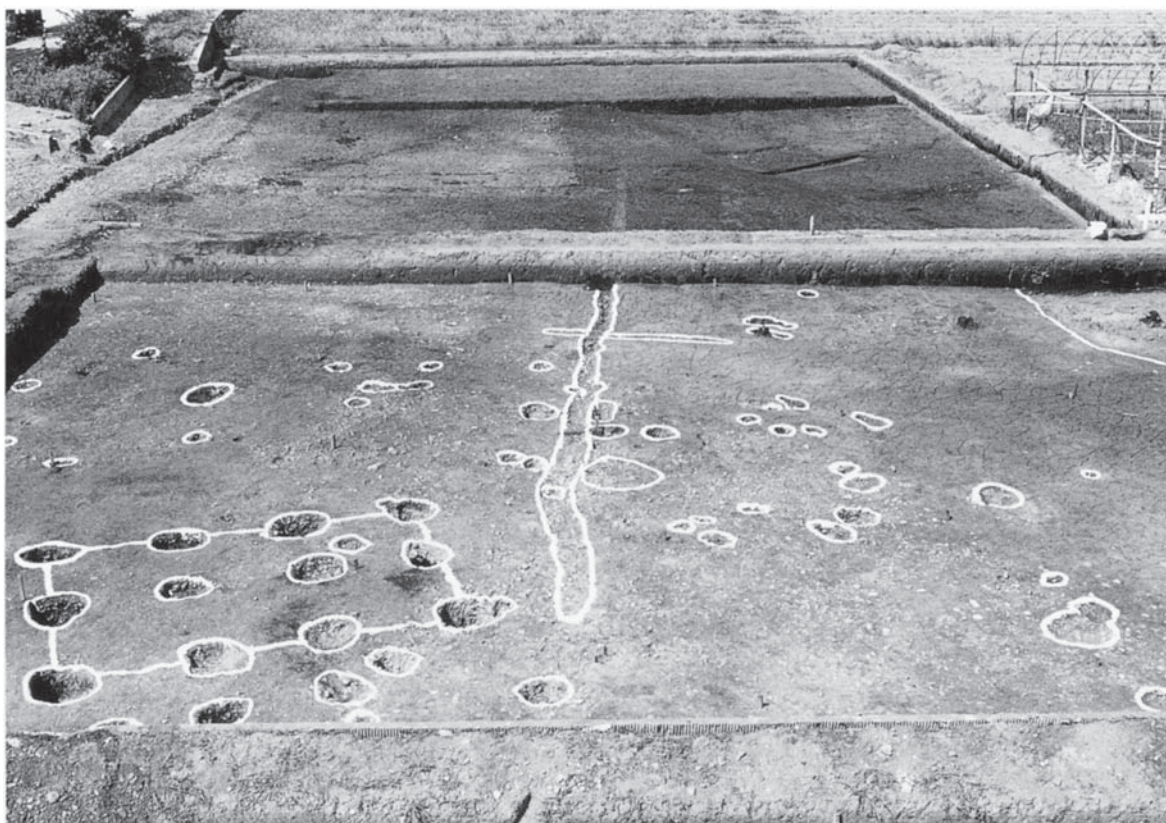
同 SD 6 セクション



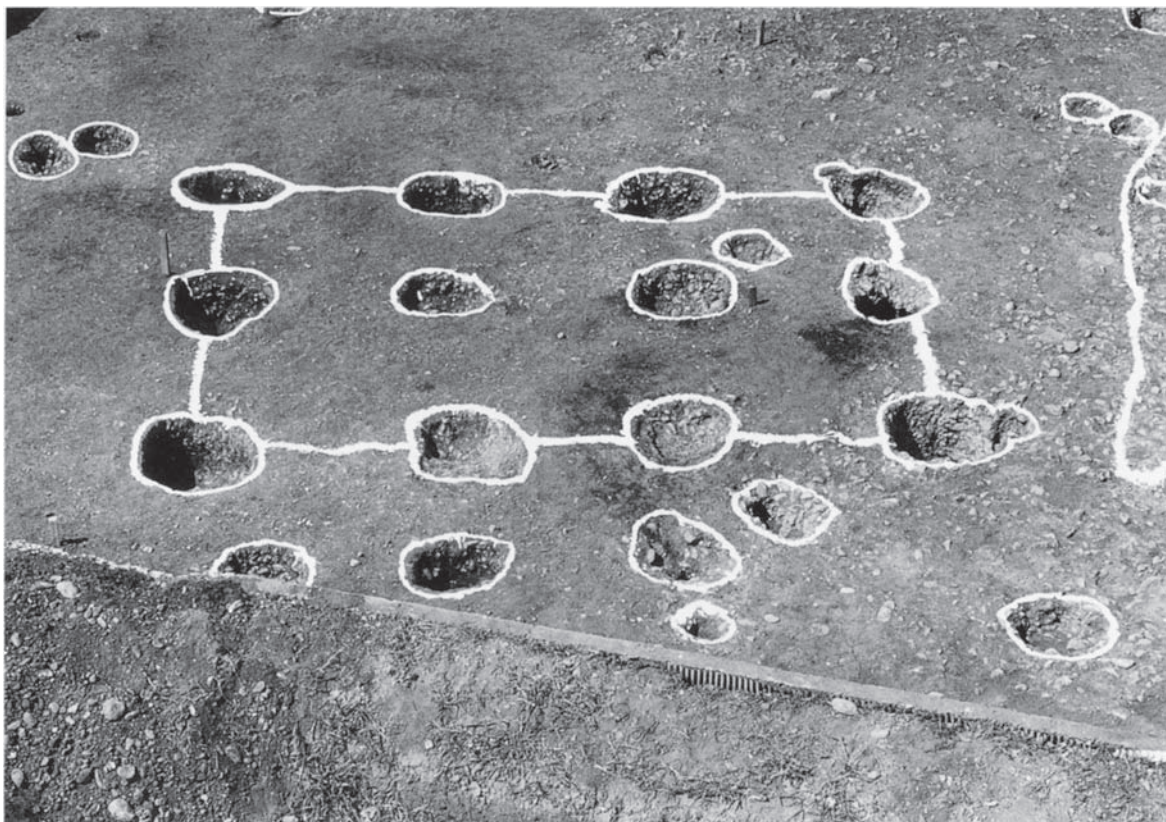
同 畝状遺構遺物 (63) 出土状況



同 SX 1 遺物 (54) 出土状況



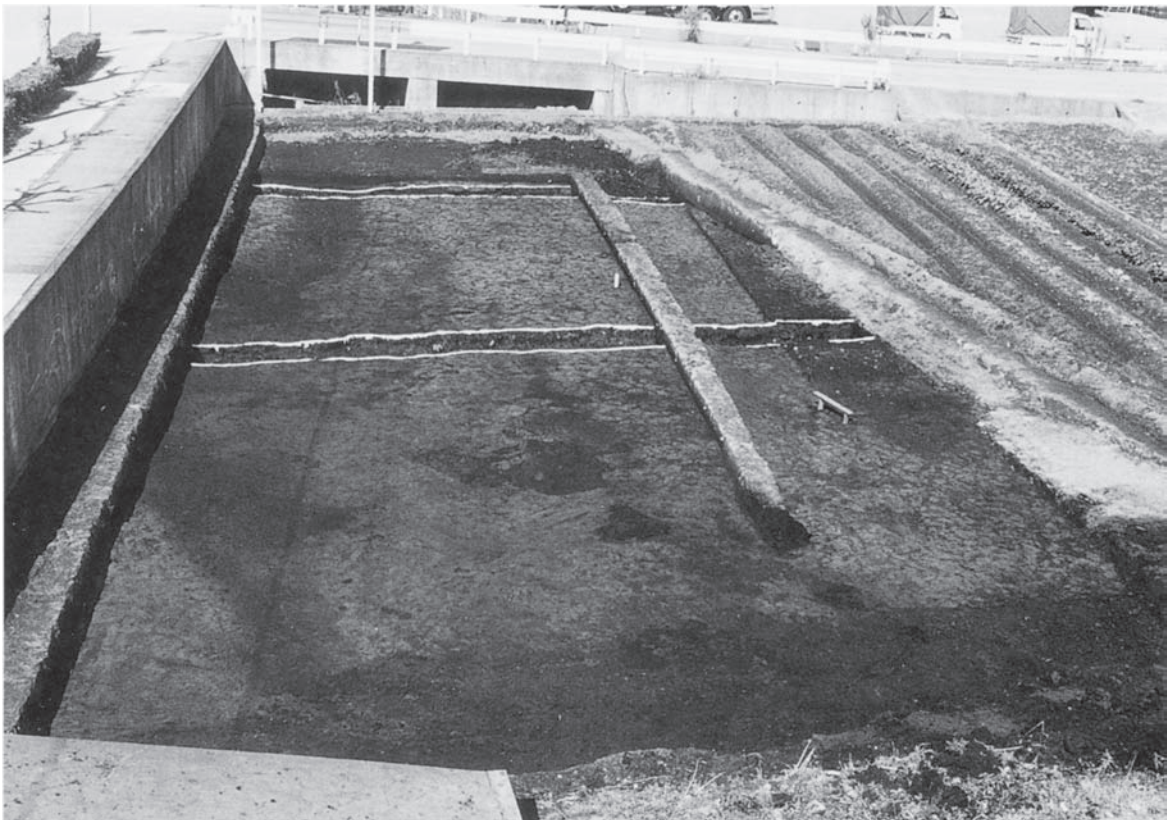
Ⅵ区 完掘状況全景（東から）



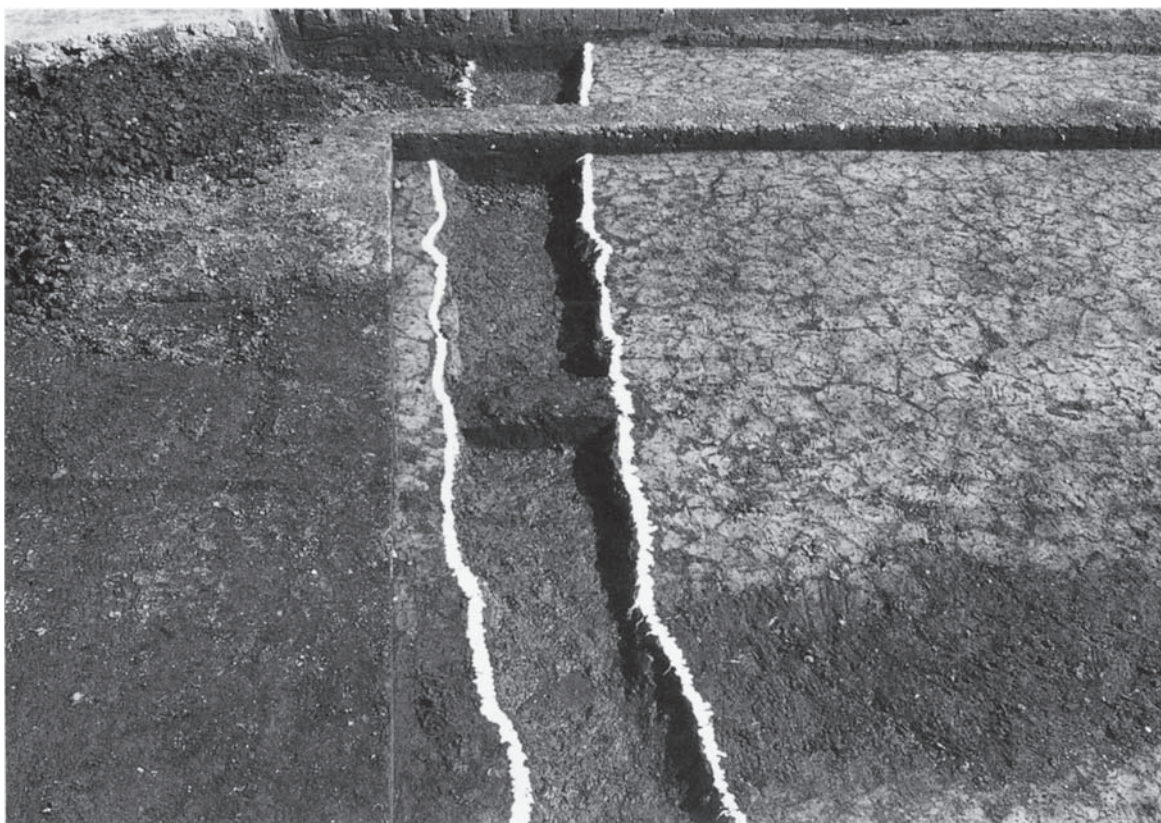
同 S B 1 完掘状況



Ⅵ区 西半分完掘状況全景（東南から）



Ⅶ区 西半分完掘状況全景（東から）



VII区 S D 1 完掘状況



同 S D 2 完掘状況



VII区 SD 1 セクション



同 SD 2 セクション



II区（廃棄土坑）出土遺物 その1（外面）



同上（内面）



II区（廃棄土坑）出土遺物 その2（外面）



同上（内面）



II区（廃棄土坑）出土遺物 その3（外面）



同上（内面）



II区（廃棄土坑）出土遺物 その4（外面）



同上（内面）



II区（廃棄土坑）出土遺物 その5（外面）



同上（内面）



II区（廃棄土坑）出土遺物 その6（外面）



同上（内面）



II区（廃棄土坑）出土遺物 その7（外面）



同上（内面）



II区（廃棄土坑）出土遺物 その8（外面）



同上（内面）



II区（廃棄土坑）出土遺物 その9（外面）



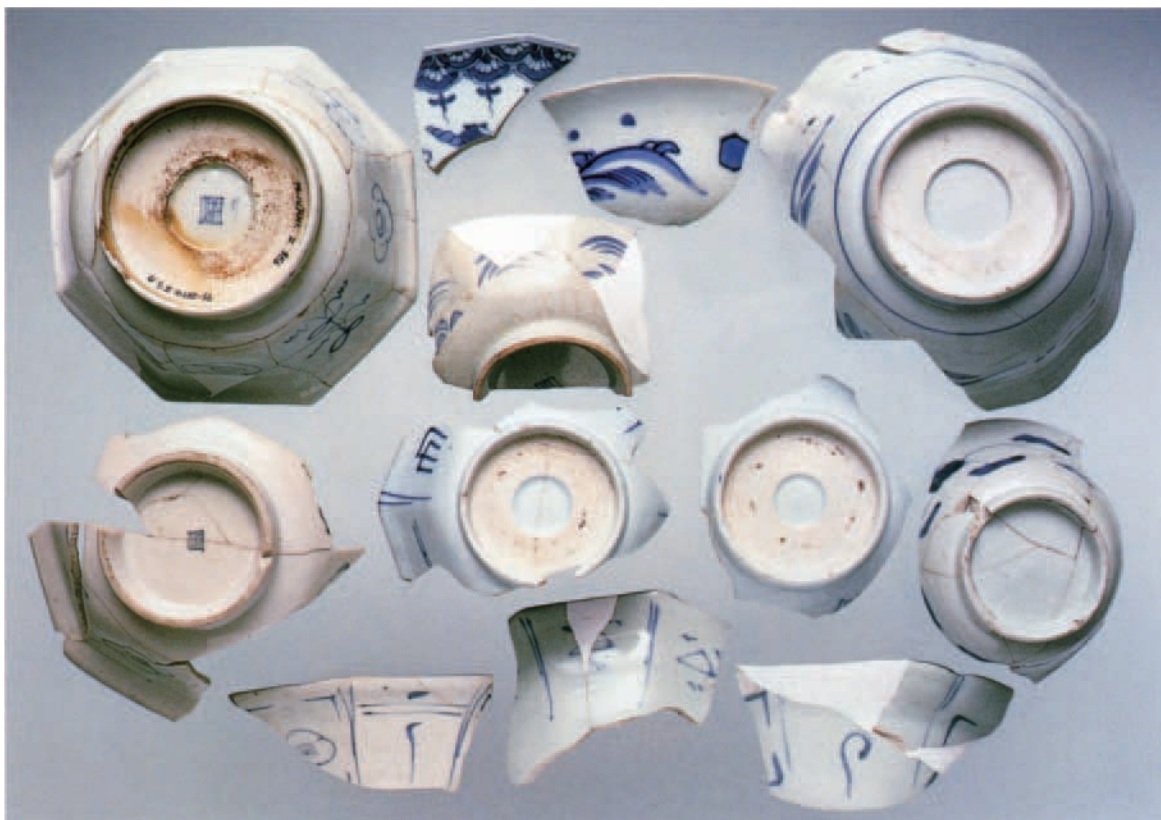
同上（内面）



II区（廃棄土坑）出土遺物 その10（外面）



同上（内面）



II区（廃棄土坑）出土遺物 その11（外面）



同（内面）



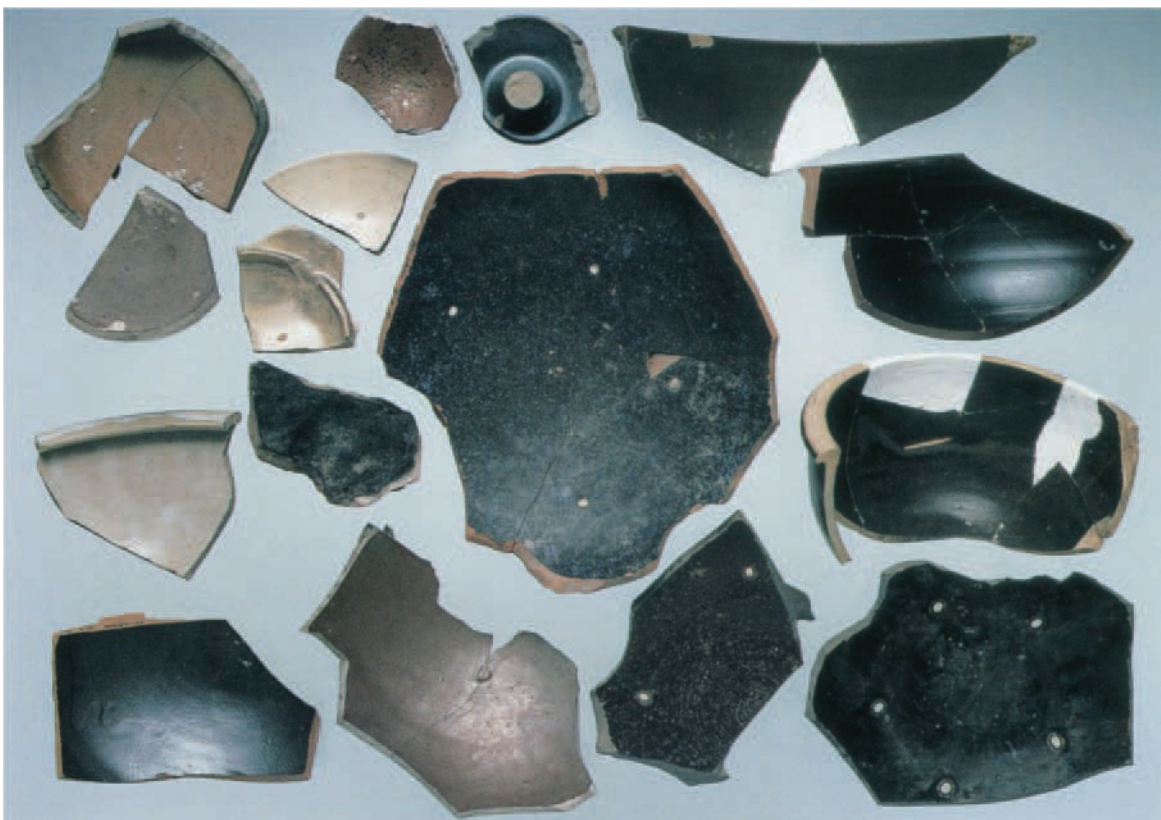
II区（廃棄土坑）出土遺物 その12（外面）



同上（内面）



II区（廃棄土坑）出土遺物 その13（外面）



同上（内面）



II区（廃棄土坑）出土遺物 その14



II区（廃棄土坑及び包含層）出土遺物



III区 出土遺物 その1 (外面)



同上 (内面)



Ⅲ区 出土遺物 その2 (外面)



同上 (内面)



Ⅲ区 出土遺物 その3 (外面)



同上 (内面)



III区 出土遺物 その4 (外面)



同上 (内面)

P L,60



Ⅲ区 出土遺物（硯）



同上（砥石）



IV区 出土遺物 (外面)



同上 (内面)



V区 出土遺物 その1 (外面)



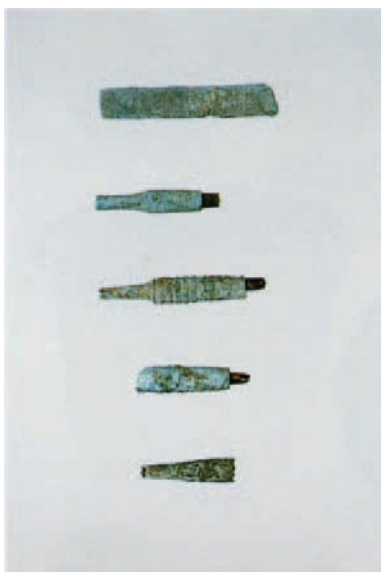
同上 (内面)



V区 出土遺物 その2 (外面)



同上 (内面)



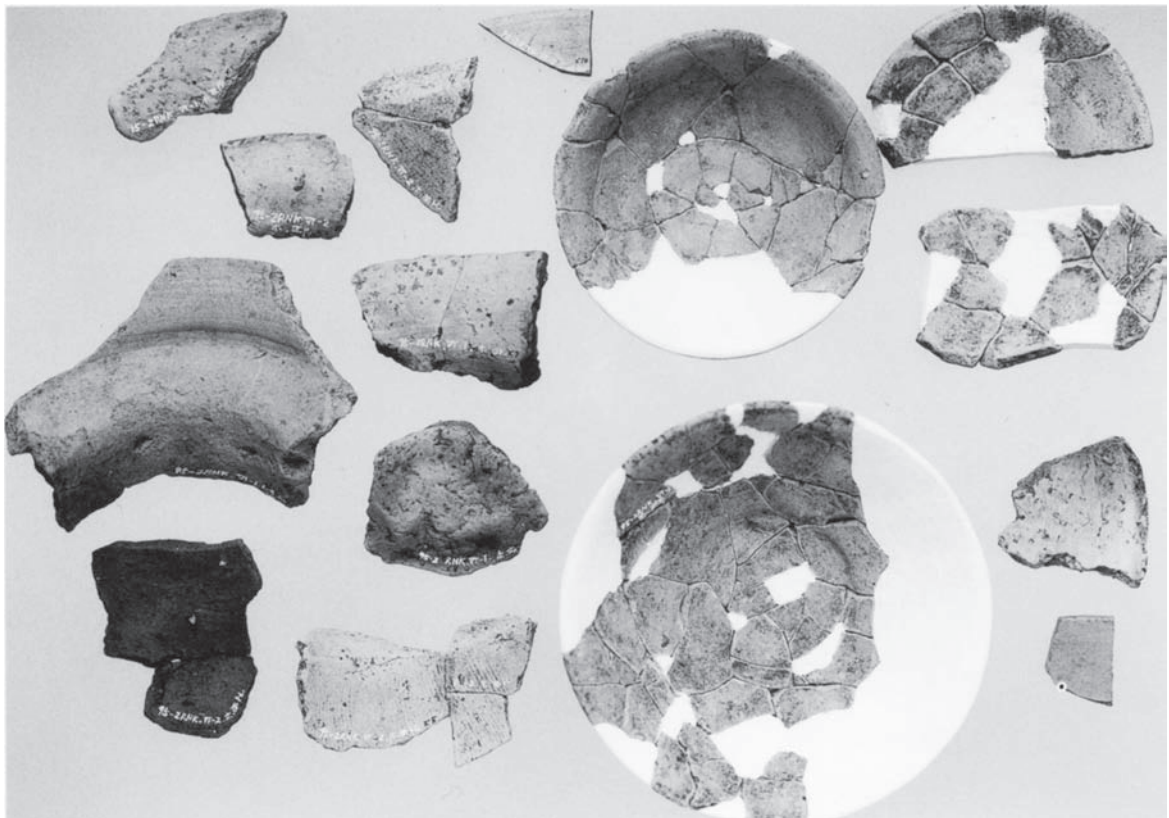
Ⅲ区 出土遺物（金属製品）



V区 出土遺物（金属製品・石製品）



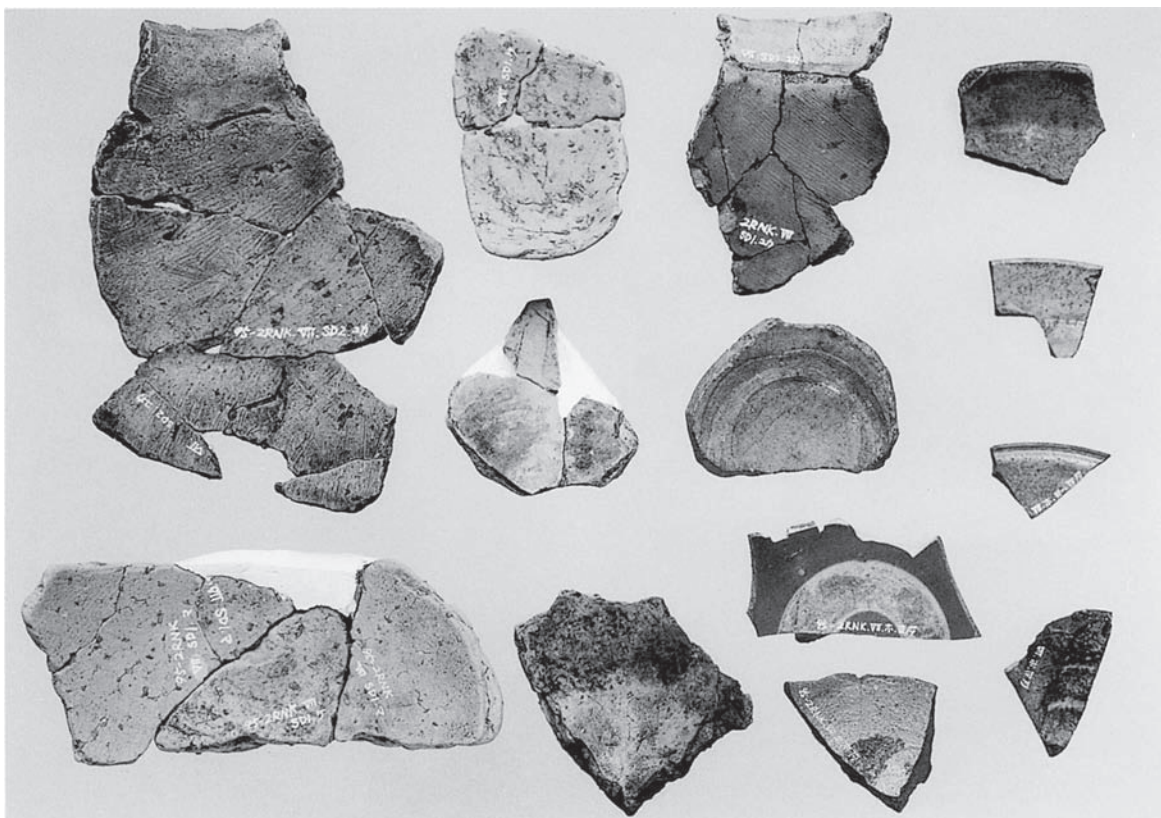
Ⅵ区 出土遺物（外面）



同上（内面）



VII区 出土遺物 (外面)



同上 (内面)



II-257



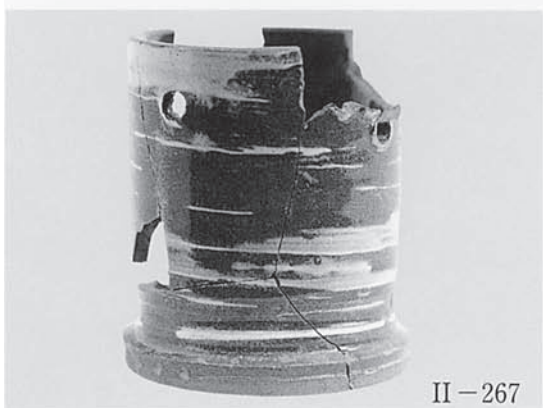
II-258



II-261



II-263



II-267



II-268

II-270

II-269



II-292



II-294

II区（廃棄土坑）出土遺物



II-296



II-297



II-298



II-313



II-314



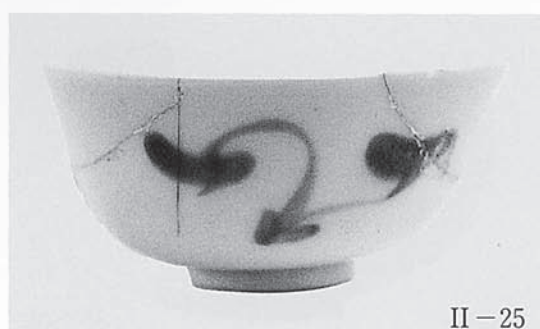
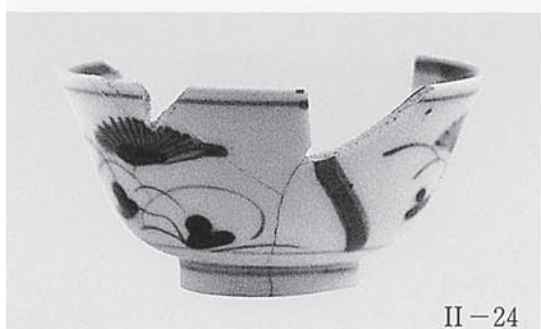
II-315



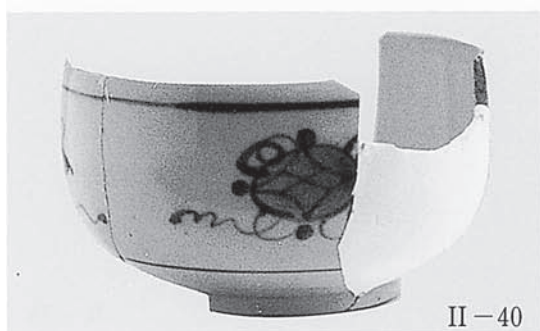
II-322



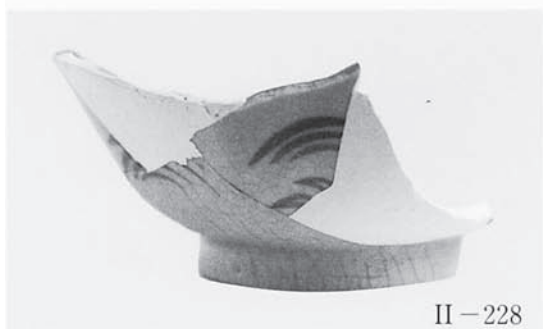
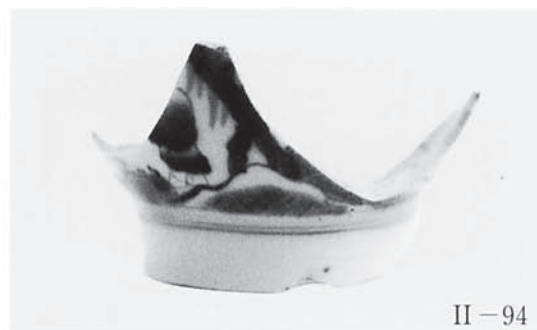
IV-3



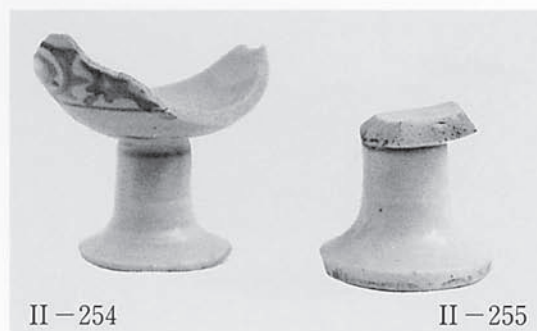
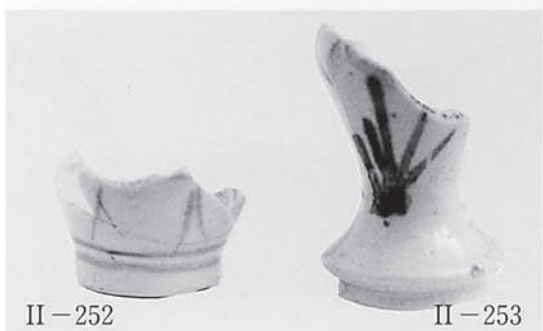
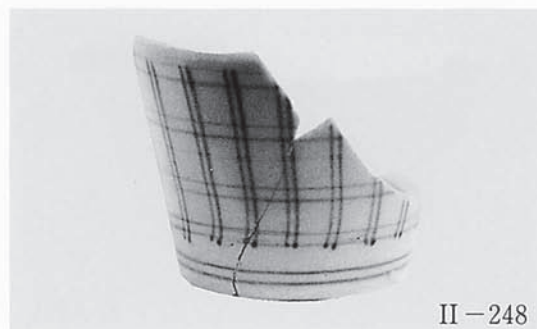
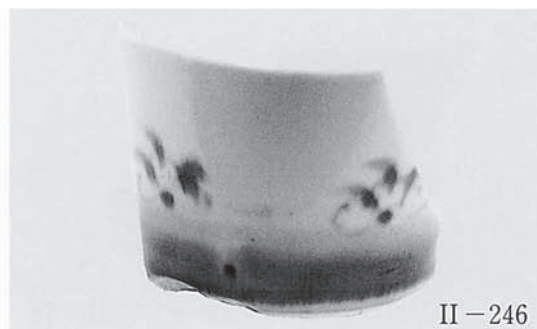
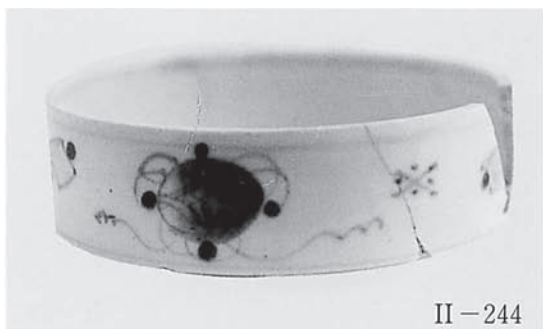
II区（廃棄土坑）出土遺物



II区（廃棄土坑）出土遺物



II区（廃棄土坑）出土遺物



II区（廃棄土坑）・III区出土遺物



III-57



III-59



III-60



IV-8



V-18



V-10



VII-3



VI-3

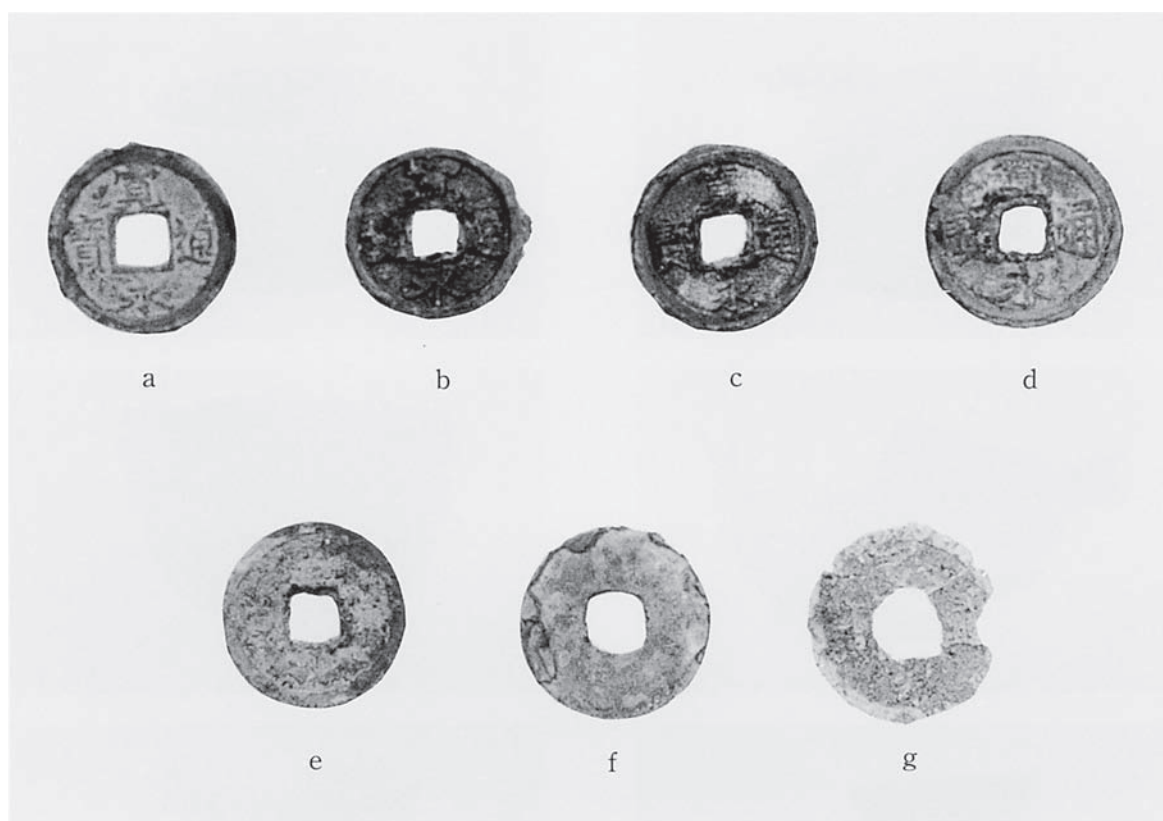


VII-1

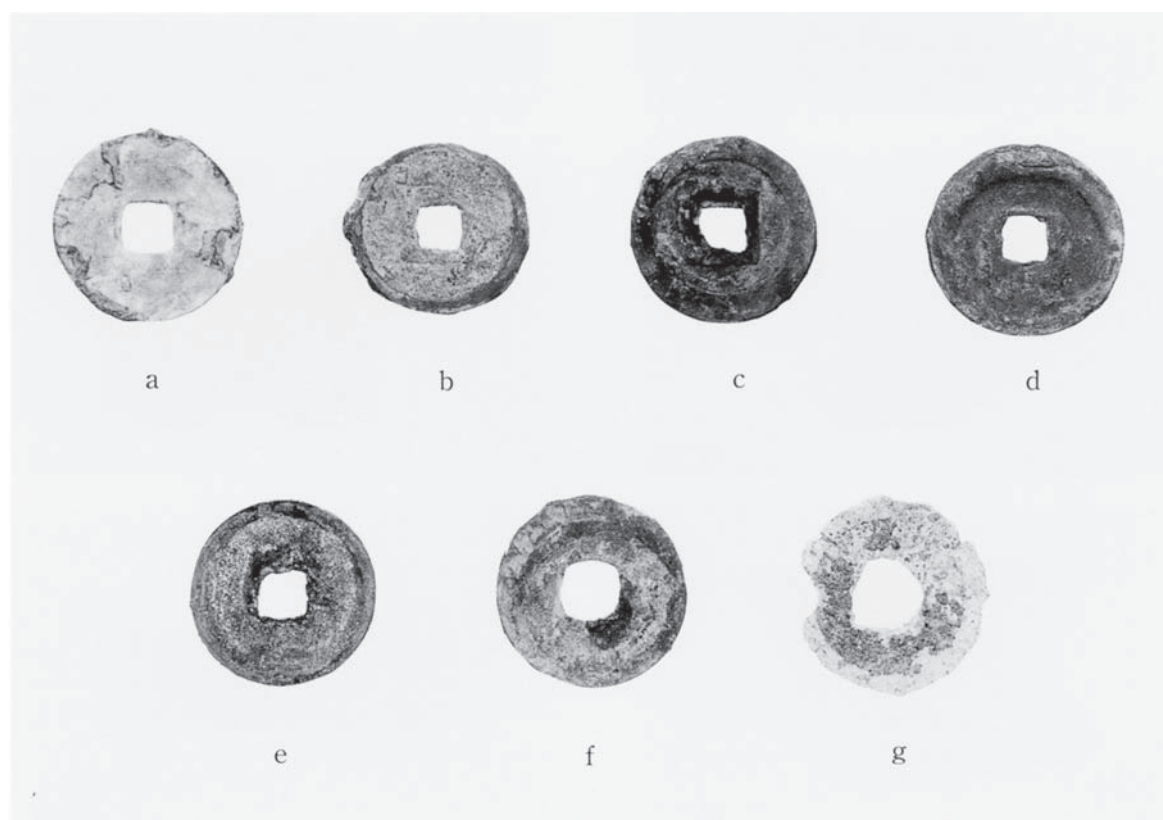


VI-9

III～VII区 出土遺物



Ⅲ区 S K26 (a～f)・包含層出土の古銭(表面)



同上(裏面)

報告書抄録

ふ り が な	こごめいせき さん							
書 名	小 籠 遺 跡 III							
副 書 名	あけぼの道路建設工事に伴う発掘調査報告書							
巻 次	3							
シ リ ー ズ 名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シ リ ー ズ 番 号	第29集							
編 著 者 名	出原恵三・泉 幸代・浜田恵子・藤方正治・行藤たけし							
編 集 機 関	財高知県文化財団 埋蔵文化センター							
所 在 地	〒783 高知県南国市篠原南泉1437-1 TEL. 0888-64-0671							
発 行 年 月 日	西暦 1997年 9月30日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	統計	調査期間	調査面積 m²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こごめいせき 小籠遺跡	〒783 こうちけんなんこくし 高知県南国市 おこうちよう こごめ 岡豊町 小籠	39204	40171	33° 34 40	133° 37 50	平成 6 年 7 月27日 } 3 月31日 平成 7 年 4 月11日 } 10月31日	(Ⅲ～Ⅶ区) 8,801	あけぼの道 路建設工事 に伴う
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
小籠遺跡	集落跡	弥生 古代 近世	溝 土杭 土墳墓 掘立柱建物		弥生土器 土師器 須恵器 瓦器 貿易陶磁器 近世陶磁器		弥生後期の墓 近世集落跡	

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第29集

小 籠 遺 跡 Ⅲ

(あけぼの道路建設工事に伴う発掘調査報告書)

1997年 9 月

編集 財高知県文化財団 埋蔵文化財センター

発行 高知県南国市篠原南泉1437- 1

Tel. 0888- 64- 0671

印刷 川北印刷株式会社